# 御大典記念

セルヴァンテス

テーホキ・ンド

島村抱月

岸上伸啓

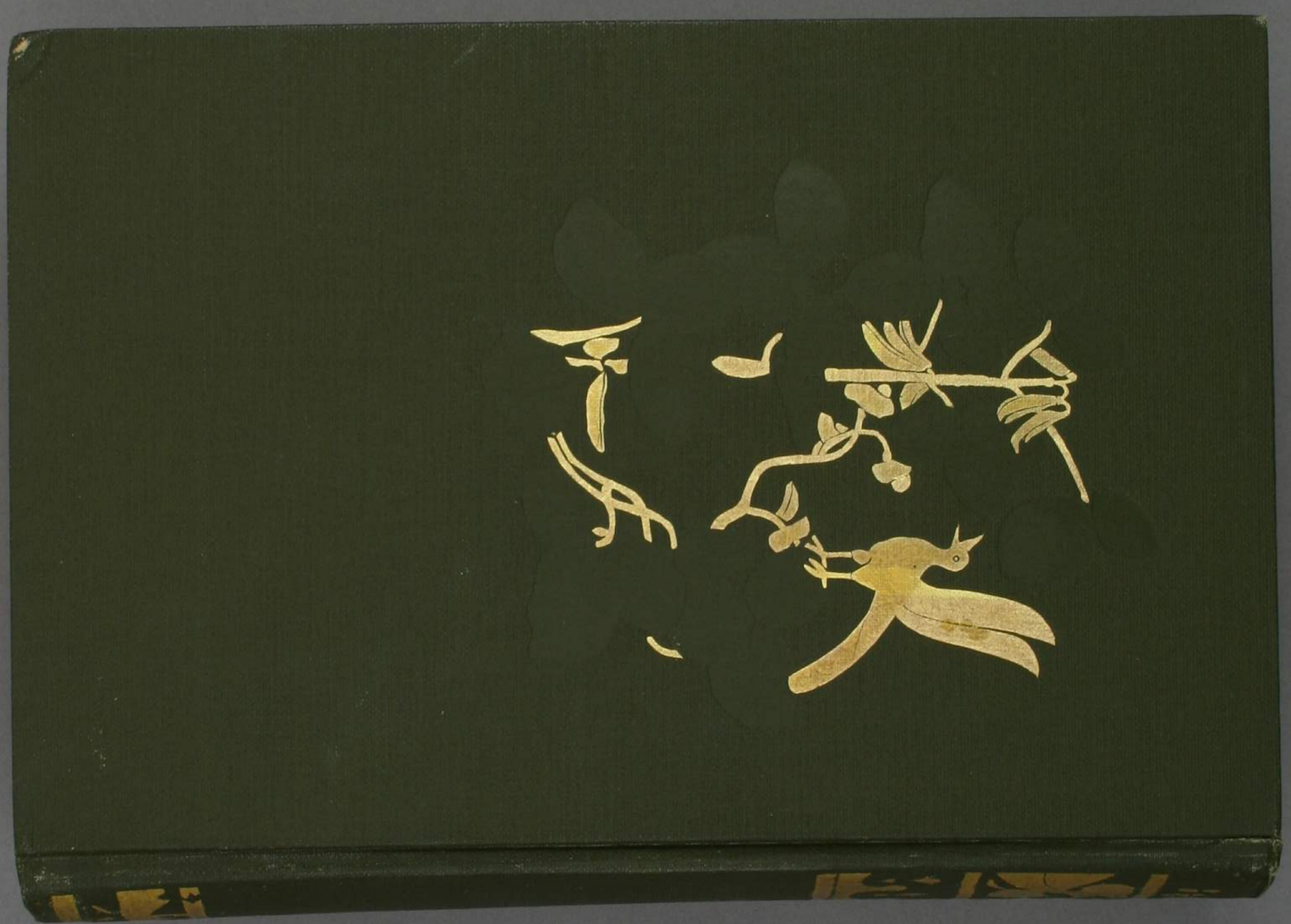
共譯

下

植竹書院出版

# ドン・キホーテ

下



ドン・キホーテ 下

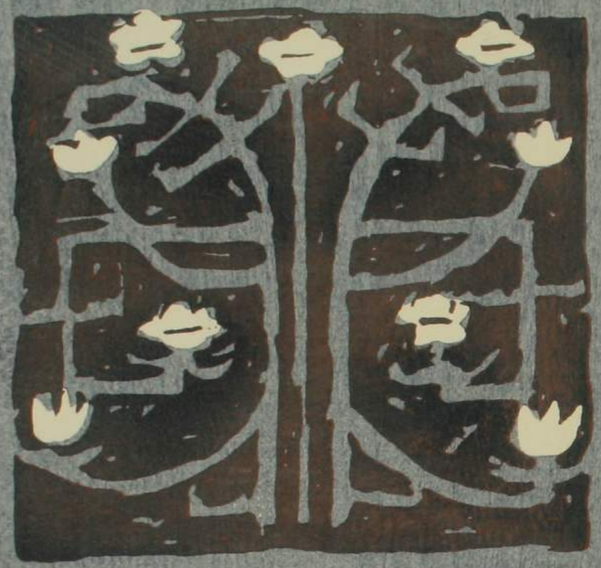
# EL INGENIOSO HIDALGO DON QVIXOTE DE LA MANCHA,

*Compuesto por Miguel de Ceruantes Saauedra.*

DIRIGIDO AL DVQVE DE BEIAR, Marques de Gibraleon, Conde de Benalcaçar, y Bañares, Vizconde de la Puebla de Alcozer, Señor de las villas de Capilla, Curiel, y Burguillos

Año, 1605.

CON PRIVILEGIO.
*EN MADRID* Por Iuan de la Cuesta.



セルヴァンテス

# ドン・キホーテ

島村抱月

片上伸

共譯

下

# 第二編目次


第一章　牧師補と理髪師とがドン・キホーテと會見して彼の宿痾を談ずること……五——二五

第二章　はサンチョー・パンザがドン・キホーテの姪や家婢と爲したる注目すべき激論、並にその他のをかしきことどもを傳へる……二六——三五

第三章　ドン・キホーテとサンチョー・パンザと得業士サムソン・カラスコーとの間に交されたる可笑しき會話のこと……三六——五〇

第四章　にはサンチョー・パンザが得業士サムソン・カラスコーの疑ひや問ひに對して滿足な返答を與へる。附たり、知るにも語るにも足る其他の事ども……五一——六〇

第五章　サンチョー・パンザとその女房テレサ・パンザとの間に交されたる抜目なきをかしき會話、並に正しく記錄するに足る其他の事ども……六一——七三

第六章　ドン・キホーテとその姪及び家婢との間に起りし事ども。これ此の物語中に於ける最も重要な章の一つである……七四―八三

第七章　ドン・キホーテとその從士サンチョー・パンザとの間に起りし事ども、及び甚だ著しきその他の出來事……八四―九七

第八章　にはドン・キホーテがその婦人ドゥルシネア・デル・トボソに逢ひに行く途すがら、彼の身にふりかゝつた事を記す……九八―一一一

第九章　にはその中で見られる事が述べてある……一一二―一一九

第十章　にはサンチョーが巧みな工夫によつてドゥルシネア姫に魔術をかけること、及びその他眞實にして、しかもをかしき出來事が述べてある……一二〇―一三六

第十一章　勇敢なるドン・キホーテが「死に神の會議」の馬車か荷馬車かを相手にしての異樣なる冒險……一三七―一四八

第十二章　勇敢なるドン・キホーテの身にふりかゝりし大膽なる鏡の騎士との冒險……一四九―一六一





第十三章　には二從士の間に交されたる嶄新且つ穩和なる對話とともに森の騎士の冒險が續く……一六二―一七三

第十四章　には森の騎士の冒險が續く……一七四―一九四

第十五章　には鏡の騎士とその從士との誰れであつたかを物語る……一九五―一九九

第十六章　ドン・キホーテとラ・マンチャの思慮ある一紳士とにふりかゝりし事ども……二〇〇―二一七

第十七章　にはドン・キホーテの比類なき勇氣の到達したる、若くは到達し得たる最高絶頂を示し、併せて目出度く成就せる獅子の冒險を示す……二一八―二三七

第十八章　綠の上着の騎士の城もしくは家に於てドン・キホーテに降りかゝつた事ども、並びに其他の並外れた事ども……二三八―二五五

第十九章　には戀せる羊飼ひの冒險、並に其他の眞にをかしき出來事を傳へる……二五六―二六八

第二十章　には金滿家カマチョーの結婚式の話、並びに貧乏人バシリオ

の事件が述べてある……二六九―二八三

第二十一章　カマチョーの結婚式の續き、並に其他面白き出來事ども……二八四―二九六

第二十二章　にはラ・マンチヤの中心にあるモンテシノスの洞穴の大冒險が記されある。勇敢なるドン・キホーテはこの大冒險に目出度き結末をつけたのである……二九七―三一一

第二十三章　天下無雙のドン・キホーテがモンテシノスの深き洞穴に於て實驗したりといふ不思議のことども。その餘りに廣大にして有り得べからざるところから此の冒險には信を置き難しと思はれるに至つてゐる……三一二―三三一

第二十四章　には些細ながらも而もこの偉大なる物語を正當に理解するに必要な無數の瑣事が記されてある……三三二―三四三

第二十五章　には驢馬の鳴聲の冒險、傀儡師のをかしき冒險、並びに占ひ猿の記憶すべき占ひが記載されてある……三四四―三六〇

第二十六章　には傀儡師のをかしき冒險の續き、並に眞に結構なるいろいろの事ども……三六一―三七六

第二十七章　にはペドロー親方とその猿の素性が明されてある。並にドン・キホーテの好み通りにも豫期通りにも終らなかつた驢馬の鳴聲の冒險に於て彼の受けた災難のこと……三七七―三八八

第二十八章　注意して讀めば、讀む人はその意を解するであらうと、ベネンゼリの言ひし事ども……三八九―三九八

第二十九章　魔の小舟の冒險に就て……三九九―四〇九

第三十章　美しき女狩人を相手にドン・キホーテの冒險……四一〇―四一九

第三十一章　は數多の大事件に就て……四二〇―四三六

第三十二章　ドン・キホーテが彼の非難者に與へし答辯、並にその他嚴肅にして滑稽なる出來事ども……四三七―四六二

第三十三章　公爵夫人とその侍女等がサンチョー・パンザと爲したる眞に閱讀注目に價するおもしろき問答のこと……四六三―四七六

第三十四章　は比類なきドゥルシネア・デル・トボソを魔術より解くべき方

法を知るに至りし次第を述べる。これ本書中の最も珍しき冒険の一つである……四七七—四八九

第三十五章 にはドゥルシネアの魔術解除に關してドン・キホーテに與へられし訓戒、並びにその他の不思議な出來事が續く……四九〇—五〇三

第三十六章 には惱める侍女別名トリファルデイ伯爵夫人の不思議な思ひも寄らぬ冒險、並びにサンチョー・バンザが女房テレサ・バンザに送れる手紙が傳へられてある……五〇四—五一四

第三十七章 には惱める侍女の著名なる冒險がつゞく……五一五—五一九

第三十八章 には惱める侍女の不運の物語が傳へられる……五二〇—五三一

第三十九章 にはトリファルデイの驚くべき且つ記憶すべき物語が續く……五三二—五三七

第四十章 この冒險とこの記憶すべき物語に關係しまた附屬する事柄に就て……五三八—五四九

第四十一章 クラヴィレニョーの到着及び長く續いた此冒險の終末……五五〇—五七〇

第四十二章 サンチョーが島の總督として赴任する前にドン・キホーテが彼に與へた訓戒、並びに他の熟考せられたる事どもに就いて……五七一—五八一

第四十三章 ドン・キホーテがサンチョー・バンザが總督府に案內された次第、又城中に於て

第四十四章 サンチョー・バンザに與へた訓戒の第二部……五八二—五九四

第四十五章 ドン・キホーテが遭難せし不思議なる冒險に就いて……五九五—六一六

第四十六章 偉大なるサンチョー・バンザが島を領せしこと及び彼が政治を始めしことゞも……六一七—六三〇

第四十七章 戀せるアルティシドラの戀の求めの間にドン・キホーテが出あひし恐ろしき鐘の音と恐ろしき猫のこと……六三一—六四〇

第四十八章 にはサンチョー・バンザが如何に政治を處したかに就いての物語が續けられてある……六四一—六五七

第四十九章 ドン・キホーテと公爵夫人の侍女ドーニヤ・ロドリグェズに起つた事に就て、並びに記錄と永久の記憶に價するその他の出來事ども……六五八—六七三

サンチョー・バンザが自分の巡視中に起つた事について……六七四—六九六

第五十章　には侍女を打ちドン・キホーテを抓つた魔法使ひと刑の執行者とは何人なりしかを述べ、並にサンチョー・パンザの妻テレサ・パンザに手紙を持つて行つた小姓の身にふりかゝつた事が記されてある……六九七―七一五

第五十一章　サンチョーの政治の進歩に就いて、その他其やうな面白き事柄に就て……七一六―七三二

第五十二章　には第二の苦しみ悩める侍女、又の名ドーニヤ・ロドリグェズと呼ばるゝ者の冒険が記されてある……七三三―七四六

第五十三章　サンチョー・パンザの政府の紛々擾々たる結末と終局に就い……七四七―七五七

第五十四章　ては此物語に關係ある事柄を取扱つてゐるので、他の物語に關係あることを取扱つては居らぬ……七五八―七七三

第五十五章　道中サンチョーの身の上にふりかゝつた事、並びに見過ごすことの出來ぬ他の事どもに就いて……七七四―七八七

第五十六章　侍女ドーニヤ・ロドリグェズの娘を保護する爲にラ・マンチャ





のドン・キホーテと從僕トシロスとの間に起つた大袈裟な類なき戰ひに就いて……七八八―七九六

第五十七章　はドン・キホーテが公爵に暇乞ひの次第、並びに公爵夫人の侍女の一人なる頓才ある厚かましいアルティシドラとの間に起りしことを取扱ふ……七九七―八〇六

第五十八章　は冒險が互に息つく暇もない程に數多くドン・キホーテの上に群り起りし次第を語る……八〇七―八二七

第五十九章　にはドン・キホーテにふりかゝつた一つの冒險とも見做すべき不思議な事が傳へてある……八二八―八四三

第六十章　ドン・キホーテがバルセロナへ向つて行く道で起つた事ども……八四四―八六七

第六十一章　ドン・キホーテがバルセロナへ入つた際に起つたこと、並びにその他作り出したと言ふよりも寧ろ眞實味を帶びた事ども……八六八―八七二

第六十二章　は魔術をかけられた首の冒險、並びに頻々たる事柄ながら話さずには置けない事どもを傳へる……八七三―八九五

第六十三章　軍艦見物の際サンチョー・パンザにふりかゝつた災難、並びにモリスコ美人の不思議な冒険について……八九六―九一二

第六十四章　ドン・キホーテの身の上に未曾有の不幸をふりかゝらしめた冒険のこと……九一三―九二〇

第六十五章　銀月の騎士の誰であるかゞ解る。なほまたドン・グレゴリオの解放、其の他の事柄が記されてある……九二一―九三〇

第六十六章　これを閲讀する人は見、これの朗讀を聞く人は聞くべき事柄を傳へる……九三一―九四〇

第六十七章　ドン・キホーテが羊飼ひとなつて彼が約束した年の過ぎ去る間野原で暮さうといふ決心の事。その他眞に愉快にして幸福な事ども……九四一―九四九

第六十八章　ドン・キホーテにふりかゝつた剛毛のある冒険……九五〇―九五九

第六十九章　この偉大なる物語の全過程中に於てドン・キホーテにふりかゝつた最も不思議な最も非凡な冒険……九六〇―九七〇





第七十章　は第六十九章につゞき、而して此の物語を明瞭に了解する上に缺くべからざる事件を取り扱ふ……九七一―九八四

第七十一章　歸村の途すがらドン・キホーテと家來サンチョー・パンザとの間に起りし事ども……九八五―九九五

第七十二章　ドン・キホーテとサンチョー・パンザとが故郷の村へ到着する途すがらの事ども……九九六―一〇〇五

第七十三章　ドン・キホーテが故郷の村へ入込む際に出逢ふた凶兆のこと、その他この偉大なる物語に潤飾光彩を添へる出來事ども……一〇〇六―一〇一五

第七十四章　ドン・キホーテの發病、彼の遺言製作及び彼の病歿のこと〻も……一〇一六―一〇二九


《第二編目次完》

# 序

謹んで白す、身分ある（或は恐らく平民の）讀者よ、君はさぞかしこの序文の中で、あの「第二のドン・キホーテ」――卽ちトルデシラスで孕まれタッラゴナで生れたと傳へ聞くあのドン・キホーテ（ドン・キホーテの續篇が一六一四年の秋出版された、それはトルデシラスのアロンソ・フェルナンデス・デ・アヹラネダ某と記されてあつた、そしてタッラゴナや許可を受けた書肆から出版された）の作者に對する返報や叱責や罵詈を見出さるものと切に待つて居られましたらう！さうとすれば、實は、私はその御滿足を君に與へようとはして居りません。何故といふに、凌辱は最も謙遜な胸にも憤りを起こさしむるとは言へ、私の胸に就いてはその規則も例外を認めねばなりませんからです。君は私にあの著者を馬鹿よ阿呆よ慮外者よと呼ばせたいと思はれるであらうが、しかし私はそんなつもりは有ちません。彼の過ちをして彼の懲めたらしめよ、彼のパンを彼に喰はしめよ、とたゞそれだけで十分です。たゞ私に容赦出來がたいのは、私を老耄だとか片手無しだとかと責めてゐることです。恰かも私の身の上に過ぎ行く時をば、私がせき止める力でも有つてゐるものゝやうに、また私の片手を失うたことが、古今に例なくまた將來とても有りさうにない最も莊嚴な場合に起つたのでなくて、まるで居酒屋でゞも起つたことのやうに！私の傷痕は見る人の眼には何の美しさも有つてゐないにせ

よ、少くとも何處で之を受けたかを知つて居る人たちの眼から見れば、貴いものです。一體軍人は逃げて生き延びるよりも、戰場に屍を曝す方が非常な光榮です。そしてこの感じは私には大變強いのです。そこで今もし私の爲めに不可能のことを行うてやると申し出されるとしても、私はその大激戰に參加しなかつたことにして立處にこの傷痕を拭ひ取られるよりも、寧ろそれに參加したことにしてその分け前を受けたがよいと思ふほどです。軍人がその顏や胸に見せてゐる傷痕は、眞に賞揚に價する名譽と大志との空へ他の人々を導く星でございます。それにまた注意すべきことは、人は白髮で物を書くのでなく、年と共に進歩する分別心で書くのです。而してまた私の捨て置き兼ねるのは、あの作者が私を嫉み深いと稱して、恰も私が無學でゞもあるかのやうに、嫉みの何たるかを私に說き敎へて居ることです。眞實のところ、二種類ある嫉みのうちで、私の知つてゐるのは神聖な高貴な氣高いものたゞ一つです。それは全くのことですが、もしさうとすれば、私は苟も僧官を、殊にそれのみか宗敎局の執事の地位を占めてゐる人を、攻擊するやうな者ではありません。而してもしあの作者が、果たしてそう見える通りその僧官の爲めにあのやうに辯じてゐるものとすれば、彼は全く誤解して居ります。何故といふに私はその人[ロペ・デ・ベガのこと、この人は一次の作者と當時にこの人のことを書いたところからこの問題が起つたのである]の天才を崇敬し、その人の作品やその銳意不斷の努力を歎賞して居るからでございます。しかし兎に角、私はこの著者なる紳士が私のいろ〳〵の小說を評して、龜鑑的といふよりも寧ろ諷刺的であるが、しかし善いものであると言つて居るのに對しては、感謝して居ります。蓋しあの小說の中に、少しでもその兩方のものが含まれてゐなかつたら、善からう筈はないのですから。

讀者は恐らく私かにかう仰有りはせんかと氣遣ひます——苦みを受けて居る人にはその上の苦みを蒙らせてはならぬとか、またあの作者は自ら堂々と靑天白日の下に敢て名乘り出ず、宛ら學問上の權威に對して罪惡でも犯したかのやうにその名前を隱しその鄕國を僞つてゐるところから見れば、その受けて居る苦みは疑ひなく甚大なものであらうとか、さういふ感じから、貴君は餘りに謙遜な出方を取り、そして餘りに控へ目な繩張りの內に引込んでゐると。もしや君が偶然にもその作者に行き過はれるやうなことがありましたら、私からとして、かう傳へて下さい。つまり私は侵害されたとは思つてゐない。何故なれば、私は惡魔の誘惑の如何なるものであるか、またその最大誘惑の一つは人の頭の中へ「自分は金と共に名譽を得、名譽と共に金を得るやうな本を書くことが出來る」といふ考を打ち込むことである、といふことをよく承知して居ります。これを證據立てる爲めに何うか君は君の快活な晴やかな口調で次の物語をその人に語つて下さい。

セヸールに一人の狂人がゐた。その男は未だ曾て世の狂人が一人として懐いたことのないやうな滑稽極まる狂想妄念を懐いた。それはかうであつた、彼は一方の端の鋭く尖つた蘆の管を拵へた。そして街路で〳〵も何で〳〵も犬を見付けさへすれば捕へて、その後足の一本を片手でシッカリ抑へ、片手でもう一本の後足を上に揚げて、そしてその管をそこへうんと突き込んでそれを吹き、そして手毬のやうにその犬の腹を膨らませた。それから、その膨らんでゐる犬の下腹を平手で二つ三つ敲きながら見物人どもへ（いつも澤山の見物人が居つた）、『さて貴方がた、犬を膨らませるのはたやすい業と思ひなさるか？』と言うてから、犬を手放すのであつた——さて貴方がた、本を書くのは、たやすい業とお思ひなされますか？

親愛なる讀者よ、もし上の物語が彼に向かぬならば、これもやはり狂人と犬との物語ですが、次の話をして戴きたい。

コルドーヴにいま一人の狂人がゐた。その男のやり方は、餘り輕くない大理石の薄板か石切かを頭の上にのせて歩きながら、ウッカリしてゐる犬に出逢ふと、ぴったりその側まで近寄つてから、その重いものを犬の腦天へ眞ッ直に落すのであつた。それに依つて犬は怒つて吠え喚めきながら二三町が間も一散に走り拔けるのであつた。しかし或る日のこと、彼がその重荷を投げ掛けた犬



のうちに、ひどくその主人に可愛がられてゐる帽子屋の犬がゐた。石切れが頭にドンと落ちると、その犬はその打撃のためにきやん〳〵と聲をあげた。とその主人はこれを見て怒り出し、物指をお取りざまその狂人に飛びかゝつて、彼の身體には一本も滿足な骨を遺さなかつた。そして一つ毆つては『こん畜生、この盜人奴！うちのラーチャー（鼻の鋭く利く小形の獵犬）をば！この獸奴、うちの犬はラーチャーぢやと分らんのか？』と言つた。そしてその『ラーチャー』といふ言葉を繰り返しては打ち繰り返しては打ちして、とう〳〵その狂人をぐた〳〵にしてしまつた。狂人は心にしみてこの訓戒を受けた。そして姿を隱した。それから一月以上の間は、一度も人中へその姿を現はさなかつた。しかしその後また例の太い杖を持ち、以前のよりも重い石切れを頭に上せて出て來た。彼は犬の居るところへ行き合せると、敢てその石切れを投げ付けることはせずに、つく〳〵とその犬を檢べて『これはラーチャーぢや、用心々々』と言つた。つまり彼に行き逢ふ犬は、番犬でも獵犬でも殘らずラーチャーであると、彼は言つたのである。そして決して彼は石切れを投げ付けなかつた。これは恐らくこの作者にとつても同じでありませう。つまり彼は二度と自分の才智の重荷を本の中に投げ付けることはようしますまい。本は、惡ければ石切れよりも硬いものですからな。尙また、彼がその本によつて私から利益を剝ぎとらうとしたその脊かしは、私

寸毫も意に介せぬところであると、これも話して下さい。つまり私はあの名高い『ペレンデンガ』の一節を借りて『エインティクソート市（ゼビリアの市政を司どる警局者の称）閣下萬歳、キリストわれ等と共にあれ』とその作者に答へませう。偉大なるコンデ・デ・レモス閣下（當時ネープルスの太守にてセンヂテスの保護者）萬歳、閣下のキリスト信徒的慈善心と、世に知られたる慈悲心は、私の暗い運命にふりかゝる一切の打撃から私を扶けてくれました。またトレードの大僧正ドン・ベルナルドー・デ・サンドワル・イ・ロージャス猊下の至上なる御仁慈の萬歳を祈ります、たとひ私を非難する爲めに、世の印刷機はその不足を告げ、或ひはミンゴ・レヴルゴーの韻文（古い物語詩）の中の文字の數ほどその書物が印刷されようとも構ひません。この二卿には私が別に諂諛追從を以て請願致したわけでなく、たゞその御好意から進んで私に親切を盡し且つ保護を與へて下されたのでございます。これにより、私は世の常の道を經て幸運のもたらす最高の地位に立身したよりも、一層幸福に一層富裕であると自ら思ひます。貧者は名節を保つこともあるが、しかし不徳の者はさうでありません。貧は貴とい人品を曇らしはしませうが、しかし全く隠すことは出來ません。美徳はたとひ赤貧の隙間や缺裂を通してゞも、自ら特有の光輝を濺ぎますから、高き貴き人々の眼に止まつて、遂にその保護を得るのでございます。讀者はもはやこの上あの作者に言ふ必要はありません。また私ももうこれ以上貴君に申しますまい、た



だ一言殘つて居ることは、卽ち今貴君に捧げるこの『ドン・キホーテ』の第二編は、あの第一編と同じ職工と同じ材料とで作られたものであつて、この書の中で私はドン・キホーテの續きを示し、遂に死なせて葬つて居ります、それですから何人にもせよ彼の不利になるやうな證跡は最早一切持ち出すことは出來ないといふことです。それはつまり既に作り出されてゐるだけで十分であるからです。而してまた多少名を得た人が、ドン・キホーテの抜け目のない狂想を洩らさず書き綴つてゐて、而もそれ以上に出ないとすれば、もはやそれで十分です。如何に善いものでも、過ぎればその値打を下げるからです。私は讀者に言ふのを忘れるところでしたが、私の今方に書き終へんとしてゐる『ペルシレス』並びに『ガラテア』の第二篇は、近いうちにお目にかけませう。

工夫に富める紳士

ラ・マンチャのドン・キホーテ

# 第二篇

# 第一章　牧師補と理髪師とがドン・キホーテと會見して彼の宿痾を談ずること

シード・ハーメット・ベネンゼリは、この物語の第二卷卽ちドン・キホーテの第三次の出遊に關し記して曰く、牧師補と理髪師とは過ぎしことゞもを呼び覺まさせ若くばその記憶を蘇らせはせぬかと恐れたので、一月近くドン・キホーテに逢はずに暮した。しかし彼等は缺かすことなくその姪や家婢を訪ねては、よく氣をつけて主人を遇らうやうに注意し、旨い食物を與へ、殊に彼の一切の不幸は明かにその心臟や腦から出てゐるから、その滋養になるやうなものを與へるやうに言ひ附けた。姪や家婢は、さう致して居りますが、主人も折々はもはや正氣に歸つたやうな徴候を見せて來るやうに思はれますから、尚精一杯氣を附けて精を出してさう致す積りです、と答へた。これは牧師補と理髪師に大滿足を與へた。といふのは、この偉大にして精確なる物語の第一卷の最終の章に述べられてあつた通りに、魔術をかけて牛車に乘せて伴れ歸ることにしたのは、

適宜の方法であつたと思つたからであつた。そこで二人は一度ドン。キホーテを訪問して、その容體のよくなつた具合を見やうと決心した。尤も二人は彼がいくらかでもよくなるとは殆ど思つてゐなかつた。それ故彼等はまだなま〳〵しい彼の傷口を再び發くやうなことをしないやうに、力めて武者修業に關係した事柄には觸れまいと相談を決めた。

遂に二人はドン。キホーテを訪ねた。彼は綠色の粗い毛布の胴衣を着て、赤いトレドー帽を被り、寢床の上に坐つてゐた。そして非常に萎びて乾からびてゐて、宛ら木乃伊にでもなつたやうに見えた。二人は極めて丁寧に迎へられた。彼等が御容體はと訊ねると、ドン。キホーテは非常に素直に且つ慇懃な言葉で自分の容體の事や何かを話した。會話がだん〳〵と進む中に、いつしか所謂經世の術とか政治組織とかを論じ出した。そして三人とも各〻現代のライカルガス（スパルタの立法者）や出來立てのソロン（アテンスの立法者）のやうな一個の新しい立法家となつて、或ひはこの弊害を正し或ひはかの弊害を難じ、或ひはこの習慣を革新し或ひはかの習慣を廢止した。さうして國家を全然造り變へてしまつた。それは丁度國家を鎔爐の中に投げ込んで、そして投げ込まない前とは全く異なつた物にして取り出したかと思はれる程であつた。彼等の口に上つてゐたこれ等の問題に就て、ドン。キホーテは非常な正氣を以て話した。そこで二人の試驗者等は、彼が全く快癒して十分の正氣に返つてゐ

ることを十分に確信したのである。

姪も家婢もそこにゐてこの會話を聞いて、自分等の主人がかくも明かな心を有つてゐるのを見たので、神樣に對する心の感謝を十分に言ひ現はす言葉さへ見出し得なかつた。しかしながら牧師補は、騎士道のことに觸れることは避けるといふその最初の計畫を變へて、ドン・キホーテの快癒を根底から試めしてその快癒が本ものであるかないかを檢べようと心を決めた。そこでそれからそれへと話題を變へて、遂に彼は首府から受け取つた樣々の消息に話し及んだ。そしてその中でも特に、トルコ人が大艦隊を率ゐて來襲しようとしてゐることや、その目的は何であるか、またこの大暴風が何時破裂するか誰れも知らぬといふことや、凡てのキリスト教國はこれを氣遣つて殆んど毎年々々軍備を整へてゐるし、わが國王陛下は既にネープルスやシシリーやマルタ島などの海岸警備の用意をしてゐられるといふことなどは、確實であると牧師補は言つた。

これに對してドン・キホーテは答へた、『國王陛下が、敵を不意に乘ぜしめんやうに前以て領土の安全に備へてござるところは智謀に長けた武士のやうなされ方ぢや。ぢやがもし拙者のお勸めをお取り上げ下さるなら、疑ひもなく陛下が唯今のところお考へ付きもないやうな策略をば採りなさるやうに、拙者はお勸めしませうわい。』

これを聞くや否や牧師補は我れと我が心に言つた、『まア可哀さうなドン・キホーテよ。お前さんは神樣へお縋り申さねば駄目ですよ。お前さんは狂氣の絶頂から深い愚妄のどん底へ眞逆樣に墜ち込みよるやうぢや。』

しかし牧師補と同じ嫌疑を抱いた理髪師は、ドン・キホーテに向つて、陛下が採用なさらねばならぬと貴方の仰有るその策略とは何んな御意見ですか、多分その意見も人民がよく主君へ捧げる色々樣々な僭越な上奏の帳簿の中へ加へられるやうなものであるかも知れんから、と言つた。

『床屋の親方、私のは僭越でないどころか適切なものでせうよ。』とドン・キホーテは言つた。『私アさういふつもりぢやないですがな。しかし陛下へ奉るお上奏は殘らず、いや、大方は出來ぬ相談か、途方もないことか、それとも、陛下や國家に害になつたりするものぢやとは今までの先例で分つとりますからの。』と理髪師は言つた。

『ぢやが私のは出來ぬ相談でもなけりや途方もない事でもない。』とドン・キホーテは答へた。『あらゆる計畫者の心に浮ぶ一番道理に適うた、一番間に合ふ、一番迅速なものですよ。』

『ドン・キホーテさん、貴方は長う引つ張つてなか〳〵それを仰有りませんな。』と牧師補は言つた。



『私はそれを今此處で申し度うありませんわい。』とドン・キホーテは言つた、『さうすりや、明日の朝はそれを元老の諸公の耳に達して、私の骨折のお禮も褒美も外の奴が持つて行きませうからの。』

『私の方ぢや誓言、』と理髪師は言つた、『貴方樣の仰有ることは王樣にも飛車樣にも王も飛車も城方樣は同價値の駒子である下界の人間には誰にも言ひはしませんぞや――この誓言は牧師の物語歌から敎はりましたが、その牧師は前曲の中で、自分が百枚の金貨と足の疾い騾馬を盜まれた盜人のことを王樣へ申し上げますのぢや。』

『私はそんな作り話にや通じて居りません。』とドン・キホーテは言つた、『しかしその誓言は立派と思ひますわい。床屋さんの正直ちうことは私も知つて居りますからの。』

『萬一さうでなくても、』と牧師補は言つた、『このことでは啞者のやうに默つて居るやうに、萬一違うたら何んな苦行でも仰有るとほりにさせますと、私はこの人の爲めに保證して請け合ひませう。』

『牧師さん、それで貴方の保證は誰れがしますかの?』とドン・キホーテは言つた。

『私の職務がします、』と牧師補は答へた、『私の職務は秘密を守ることですからな。』

これを聞いてドン・キホーテは言つた、『憚りながら、國王陛下には公けの告布を出されて、スペイン國中に散らばつてをるすべての武者修業者たちを一定の日に首府へ御召集さへなされればよいのぢや。さうすればたとへ集る者は五六人よりなくとも、その中にはたツた一人で優にトルコの全軍を打ち滅ぼす者がありませうわい。まア氣を附けて私の言ふことを聞きなさるがよい。どうぢや、二百萬の軍兵がまるで唯一つの咽笛を有つとるか、或は砂糖菓子で出來て居るかのやうに、唯一騎の武者修業者に依つて鏖殺しにされるのは別に新しいことでもありますまいがの？いや、數多の物語はかういふ驚くべきことで一杯ぢやないですかい？せめてなア（他人の爲めにこの忌はしい時代にあつて）もしあの名高いベリアニスが今生きて居つたら、それとも、ゴールのアマディスのあの大勢の子どもの一人でも生きて居つたら！もしあいふ人々の一人でも今日生き殘つてゐてトルコ人とぢき〳〵に出會うたら、きつとトルコ人に隙は見せまいものをなア。しかし神樣は御自分の民を思はれて、誰れか一人は備へて下さらうわい。その人は往日の武者修業者のやうには勇猛でないにせよ、せめてその精神に於ては彼等に劣るまいぞ。しかしまア神樣が拙者の心を知つてござるから拙者はもう何も言ひますまい。』



この時姪は叫び出した、『まア！叔父さんが武者修業をお止めになる氣なら、私や死んでもよい！』これに對してドン・キホーテは答へた、『私は武者修業者として死ぬるのぢや。あのトルコ人どもいつ何時でも、またいかな大軍でゞも攻め來らば來れ。私は重ねて言ふが、私の心は神こそ知り給ふぢや。』しかし此處で理髮師は言つた、『貴方、セヰールで起つた短かい物語をお話ししても宜しうござりませうかな。それは今の場合に丁度はまりますから、私はそれを話したうてなりませんがな。』ドン・キホーテはそれを許した。そして一同は耳を傾けた、そこで理髮師はかう始めた……

セヰールの癲癇病院に、氣が違つたものとして親類の人々から入れられた一人の男が居りました。その人はオスーナ大學の宗規法律科の卒業生でござりました。しかし大抵の人の言ふところぢや、たとへその人がサラマンカ大學の出身であつたとて、やッぱり同樣に氣違ひになつたらうといふことです。この卒業生は何年の間か監禁されてゐた揚句、もう自分は全快して十分の正氣に返つたものと考へました。さう思うたので大僧正へ手紙を出して、自分をこのみじめな有樣から救うて下さいと、熱心に、また頗る正しい言葉で歎願しました。その理由としては、神樣のお慈悲により一度失うて居りました正氣も恢復しましたけれども、親戚の者等が私の財產を収らう

ために、私をこちらへ閉ぢ籠めて置きます。そして正氣であるに拘らず私を死ぬる日まで氣ちがひにして置くでせうと。大僧正は道理のある上手に書かれた重ね〳〵の手紙に心を動かされまして、自分の部下の敎誨師の一人を遣つて、その學士の言ふのが本當であるかないかをその瘋癲病院の院長に訪ねさせ、そしてその氣違ひの本人とも會見させて、もしそれが正氣に返つて居るやうなら病院から連れ出して自由にしてやるやうにと命じました。その敎誨師は命令によつて行きました。すると院長は、その男はまだ氣が狂うてをる。そして時にはなか〳〵悧巧な人間のやうに口を利くが、おしまひにはやつぱり痴けごとを言ひ出すから、初め正氣の時言うた賢いことをも差し引きすれば、その容も性質も丁度になる。それは試しに話して見れば容易く分りませう、と確かに言ひました。敎誨師は實地に試して見ようと決心して、その狂人に面會して、一時間かもつとも話して見ました。するとその間中は調子外れのことや不條理なことは一言も言はずに、それどころか、非常に筋の立つた口の利き方をしましたので、敎誨師はどうしてもこりや正氣の人ぢやと信ぜにやならんやうになりました。殊にその狂人はかう申しました、こゝの院長は私が時々正氣に返るだけでまだ氣が狂うて居るとさへ通知してやれば、私の親戚どもから賄賂が貰へるものですから、私のことを惡いと言ふのです。それに此の不幸に於ける私の一番の敵は夥多しい



財産です。それを物にしようとて私の仇敵どもは、私を獸の胸から人間の胸へ取り返して下さつた神樣のお慈悲を侮り疑ひをかけて居るのですよ、と。ふム一にに言へば、その狂人は院長に猜疑を懸け、親戚の者等を慾ばりの人情なしと言ひ、そして自分は道理に適うてをるといふやうな風に言うたので、敎誨師も、これを自分と一緒に連れ出して行つて大僧正に逢はせ、そして大僧正ぢき〳〵にこの事件を審かせうと決心しました。この考へで、その立派な敎誨師は此の學士がそこへ入る時着て來た着物を返して下さいと、院長に賴みました。院長は、この學士の今尙氣が狂つてゐることは疑ふすべもないのですから、貴方のなさることによく氣を付けて下さいと、またもや敎誨師に申しました。しかし院長のいろ〳〵の注意も誡めも、敎誨師にはその狂人を連れ出すといふ考へを止めさせる力はありませんでした。院長も大僧正の命令と見てそれに從ひました。そしてその學士に本人の服を着せました。その服は新しい上等物でござりました。正氣物らしい裝になつて、狂人らしい樣子を脫ぎ棄てゝしまふと、その學士は、何うかお情けに私の氣違ひ仲間のところへ暇乞ひに行かして下さいと敎誨師に賴みました。敎誨師はそれを許し、そして自分はこの病院に居る狂人を見たいから一緒に行かうと申しました。そして二階へ上つて行きましたが、そこに居合せた四五人の人々もついて行きました。そしてとある檻に近づくと、丁度その時

は森閑として靜まつて居つたが、其處には烈しい狂人が入れてあつたので、學士はその狂人にかう話しかけました、「おい、大將、私に何か言ひ付けたいことはないか？私ア何も自分の手柄でもやないが、限りない神樣の御慈悲御恩澤で正氣に返して下さつたので、これから家へ歸つて行くところぢやからなう。私はもう全快して正氣に返つたのぢや。神樣のお力では出來んことはないからな。神樣は私を元のまゝの身體に本服させて下さつたやうに、もうお前さんがお賴りすりや、やツぱり本服させて下さるから、よく神樣に絶つて十分望みを有つことぢやな。何かうまい物でもお前さんに送つて上げるやうに心掛けようわい。確かにそれが食へると思うてゐなさい。私等のこんな狂氣は皆胃の腑を空にして頭に風を一杯入れて居るところから來るといふことを、私は實地にこゝを通つて來たので、よく心得て居るから、お前さんにもそれを知らせたいのぢや。しッかり元氣を出しなさい、元氣を！不幸に逢うて氣落ちをすると健康が駄目になつて生命が危いからの。」その烈しい狂人の向ふ側の檻の中に居た別の狂人が、この學士の言葉を殘らず聽いて居りましたのぢや。そしてその狂人は眞裸で臥てゐた古莚から起き上つて、大聲で、全快して正氣に返つて此處を出ると言うて居るのは誰れぢやと訊ねました。そこで學士は答へました、「おいく、行かうとしとるのは私ぢやよ。私はもう早や此處に居る用はないからな。こりや全く非常な神樣のお惠みだから、私は限りなくお禮を申し上げるのぢや。」

「おい學士さん、言ふことに氣を付けなされ。惡魔に瞞かされなさんなよ。まアじッとして此處にゐなされよ。さうすりやお前さんはまた歸つて來る手數が省けるからな。」とその狂人は答へました。



「私は自分の全快したのが分つてをるし、また二度と驛宿廻りをせずともよいことが分つてをるのぢや。（驛宿とは牧會の監視で、故罪を悔ん改め「新鮮の日日」を方々の教會を巡禮すること）

「お前さんが癒つたと！」とその狂人は言ひました、「よし、見て居らう。左樣なら御機嫌よう。ちやがな、私は自分がこの世で御威光の名代に立つてをるあのジュピターさまにかけて誓ふがの、今日この病院からお前を放免して、まるで正氣にでもなつたやうにお前を待遇ふのは、これセヰールの犯す罪であつて、この罪だけでも私は未來永劫忘れられん程の刑罰をこのセヰールの町の上に降してやらねばならぬわい、アーメン。汝哀れなる小さき學士よ、その力のわれにあるのを汝は知らんのか。今も言ふ通りわれは雷神ジュピターなれば、わが手には物凄き稻妻あり。それを以てこの世界を脅かして荒廢の巷と化す力もあれば、その例も屢あるのぢや。しかしわれは唯一つだけの手段に依つてこの忌なる町を懲らしめようわい。それはこの神託の申し渡されたそ

の日その時から數へて三年の間、この町に、いや、この州この地方の何れの地にも雨を降らさぬことぢや。汝が放免されたとは、汝が全快したとは汝、が正氣に返つたとは！　そして私は氣違ひで、亂心して、囚はれてをるとは！　私が自ら首を縊らうと思はぬうちは雨を降らすなどは思ひも寄らぬぞよ。」

居合せた人たちはこの狂人の言葉や威嚇に耳を傾けて居りましたのぢや。するとその學士は敎誨師の方へ向き直つて、その手を摑んでかう言ひました、「貴方樣、何も心配なさるな。この狂人の言うたことには少しも重きを置かいでもよろしいのです。もしこいつがジュピターで雨を降らせぬなら、私はネプテューンぢやから、海の父海の神ぢやから、私の好きなほど、また入り用なだけ雨を降らせますからな。」

院長もその他の見物人も噴き出しました皆が笑うたので敎誨師も何やら恥しう思ひました。そしてかう答へました、「ネプテューンさん、それはさうでせうけれども、このジュピターさんを焦らすにも當りますまい。まア貴方の居られるところに留まつてお出でなさい。また何時か、もつと都合のよい暇の時に、私たちは貴方をお迎ひに參りませう。」そこで人々は學士の着物を脫がせました。學士は元のところへそのまゝ置かれました。そしてこれがこの話のおしまひでございます。



すわい。』

『床屋の親方、それが話さずには居られんほどこの場合に誂へ向きの話しですかい？』とドン・キホーテは言つた、『髮床の親方、髮床の親方！　篩を通して見ることの出來ぬ者は餘程の盲目ぢやらう。お前さんは一體、才智と才智と、勇氣と勇氣と、美しさと美しさと、生れと生れとを較べるといふことは、いつでも嫌やなおもしろうないものぢやと知らんのかい？　床屋の親方、私は海の神のネプテューンでもなけりや、また悧巧な人間でもないから、誰れにも悧巧な人間と思はれうともしませんのぢや。私の唯一の努めは、たゞ、世間の過ちを啓いて、あの武者修業の道の榮えてゐた頃の幸福な時勢を今一度この世に蘇へらせることにありますのぢや。ぢやが今の不德な時代は、あの大勢の武者修業者たちが、國家の守備も處女の保護も孤兒窮民の助けも高ぶる者の懲しめも謙遜者の褒賞もその双肩に擔うた頃に、その時代が受けたやうな祝福は、とても受くるに當らぬのぢや。今の世の騎士等にとつては、その大方が、緞子や錦襴や上等の織物を身に纏うて、歩くにつれてサラ〳〵と音をさせてをる。そりや決してあの人等の鎖子鎧の音ぢやない。今日の騎士は一人として、風雨の吹きさらす青天井の野原に、頭から爪先まで十分に具足を着けて眠るやうなことはない。また一人として、昔武者修業者たちがしてゐたやうに、鎧から足を抜

かずに槍に凭れて、所謂微睡を取る者はない。また今日は一人として、森を出て山々を通り越え、それから荒涼たる淋しい海の——大抵暴れ狂うてをる海の——岸邊を踏んで、その波打ち際に乘り捨てられた檣もなければ帆も檣柱も一切の船具もない小舟を見付けると、大勇猛心を振り起してそれに飛び乘り、今天上高くはね上げられたかと思ふと忽ち地の底まで投げ込まれるといふ風に、荒々しく大海の巨濤に身を委せる。そして防ぎ難い疾風に逆らうて、思ひがけなくも、自分が船出した場所からは三千リーグ以上も離れたところに着いてゐる。そしてその遠い見知らぬ土地に跳び降りて、名を羊皮紙の上でなく、銅に鐫り付けるに足るやうな大冒險をやる、といふやうな者はないのぢや。しかし今は、懶惰が努力に打ち勝ち無精が精勵に、不德が美德に、横柄が勇氣に、理窟が武の實力に打ち勝つてゐる。さういふよいものはたゞ黄金の時代や武者修業の時代にのみ榮えたものぢや。どうです。あの名高いゴールのアマディスよりも德が高くて勇敢な者は誰か？　イギリスのバルメリンに優る知識の人は誰か？　ティランテ・エル・ブランコよりも上品でしとやかな人は誰か？　ギリシャのリシュアルテよりも慇懃な人は誰か？　ドン・ベリアニスよりも餘計に斬つたり斬られたりした人は誰か？　ゴールのペリオンよりも勇猛な人は誰か？　ヒルカニアのフェリクスマルテよりも躊躇なく危險にぶッ付かつた人は誰か？　エスプランディアンよりも誠實なのは誰か？　スレースのドン・シロンジリオより憑悍なのは誰か？　ロダモンテより勇壯なのは誰か？　ソブリノー王より賢い者は誰か？　レイナルドスより敢爲な者は誰か？　ローランドに優る無敵の者は誰か？　そしてまたルッジエロよりも勇ましくて慇懃な者は誰か？　テュルピンの「宇宙論」に據ればこの人から今日のフェララの公爵たちは出て居るのぢや。牧師さん、この殘らずの騎士たちと、それからまだ私が名をあげればあげられる澤山の騎士たちが、騎士道の光であり榮えである武者修業者でありましたのぢや。これが、或ひはかういふ人々が、私の計畫を行はせたいと思ふ人々で、そしてさうなれば國王陛下は御用にも事缺かれず、莫大の費用も助かり、トルコ人等は散々の目に會はされませうわい。そこで私は、例の敎誨師が私を伴れて行かんから、このまゝ家に居りませう。そして床屋さんが言うた通り若しジュピターが雨を降らせなんだら、拙者が此處に居りますから、拙者の思ふ時に雨を降らしませう。私がかう言ふのはこの金盥の親方に、お前さんの言ふことは分つて居ると知らせたいからぢや。』



『全くドン・キホーテさん、』と理髮師は言つた、『私アさういふつもりぢやなかつたのですよ。いや全くで、私ア惡氣で言うたんぢやござりませんから、御立腹なさるには當りません。』

『私が立腹して善いか悪いかは、私自身が一番良い裁判官ぢや。』とドン・キホーテは答へた。

そこで牧師補は言つた、『私は今まで殆んど一口も申しませなんだがな。今ドン・キホーテ様の仰有つたことから、良心を痛め苦しめるやうな疑ひが起つて來ましたので、それを晴らすことが出來れば嬉しいと思ひますのぢや。』

『牧師さんならもつと大事なことにでも御遠慮は御無用ぢや、』とドン・キホーテは答へた、『そこでどうぞ御自分の疑ひをお打ち明け下さい。人は本心に疑惑を有てば氣持のようないものですからの。』

『それでは御免を蒙つて申しますが、』と牧師補は言つた、『その疑惑と言ひますのは、私はどうしてもドン・キホーテ様、その、貴方の仰有るあの大勢の武者修業者たちが、肉や血を有つた眞實本當の人間として何時かこの世に生きて居つたとは、とても信ずることが出來ませんのぢや。それどころか、あれは皆作り話や寓話や嘘僞りや、また眠りから覺めた人か、或ひはまだ半分眠つて居る人の話した夢物語ぢやないかと思ひますよ。』

『それも、また間違ひですよ。』とドン・キホーテは答へた、『この世にあゝいふ騎士があつたと信ぜぬ人は、隨分大勢その間違ひに陷つて居りますわい。私が種々樣々の人々に種々樣々の折にふ



れて、この殆んど天下擧つての誤謬を眞理の光に照らして見せうと試みたことは度々ぢや。これを眞理の肩の上に支へても、或る時は私の目的は失敗に終り、また時には成功しました。その眞理の明瞭なことは、私が眼のあたりあのゴールのアマディスを目擊したと言うてもよい位ですよ。あの人は背が高くて、顏色が白くて、黑くはあるが綺麗な鬚髯があつて、柔和と嚴格との間を行く顏つきで、言葉少なく、怒るに遲く、怒りを取り去るに早い人でありました。アマディスの人相をかう述べ立てたやうに、私は世にある物語の中に出るすべての武者修業者を描き述べることも出來ると思ひます。何故といふに、あの人々の物語に描かれてある通りぢやと思はれるところから、またあの人等が立てた手柄や示した氣性から、健全なる哲學の助けによつて、その容貌や顏色や姿は推量が出來ますからの。』

『ドン・キホーテ樣、あの巨人のモルガンテの大きさは、貴方樣のお考へぢや、どの位ござりましたらうぞ?』と理髮師は訊ねた。

『巨人に關しては、』とドン・キホーテは言つた、『世に實在したかせぬかといふことさへ說がまちまちですよ。ぢやが一點一劃も道理から誤つてをらぬ聖書には、巨人があつたと書いてある。それはあの七キュビット半(一キュビットは約一尺六寸)の高さといふ巨大なペリシテ人ゴリアテ(サムエル前書十七章に出る、しかし聖書にはその身長六キュビット半とある)の物語

が出て居りますからの。それからまた、シ、リー島で發見された脛の骨や腕の骨は非常に大きくて、その太さから推して見れば、その持ち主は明らかに巨人で、しかも大きな塔位の高さの者であつたらうといふ。こりや幾何學が疑ひないことゝして證明して居りますわい。しかしそれはさうぢやが、モルガンテの大きさに就いては確かのことは言へません。尤もあれは非常に背高であつた筈はないと思ひますがの。私がこんな說を取るやうになつたわけは、あれの事蹟を精細に書いてある物語の中に、しば〳〵屋根の下で眠つたとありますからぢや。あれの身を容れる家があつたとすれば、その大きさは格別方外のものでなかつたことは明かですからの。』

『なる程。』と牧師補は言つた。そしてそんな痴けごとを聞くのが面白さに、彼はモンタルバンのレイナルドスや、ドン。ローランドや、「フランスの十二貴族」のその餘の人々の體格に就いて彼の意見を訊ねた。さういふ人々は武者修業者であつたからである。

『レイナルドスの方は、』とドン。キホーテは答へた、『顏が廣くて、色が赤うて、惡戲好きらしい稍眼玉の飛び出した、極めてせつかちな怒り易い眼をして居つて、盜人ややくざもの仲間に入つた人ぢやと言うて憚りませんな。ローランド、卽ちロトランドー、卽ちオルランドー（物語の本によつて、この人をいろ〳〵に呼んでをるので）の方は、中背で、肩が張つて、少し曲り脚で、淺黑い顏色で、赤髯で、身體は毛深く、きつい顏付きをして、言葉少なく、しかも丁寧な行儀のよい人ぢやつたといふのが私の考へで、またさう思うて居りますのぢや。』

『もしローランドが、果して貴方樣の仰有るよりも好い男振りでなかつたとしますと、』と牧師補は言つた、『あの美しいアンゼリカ姬があの人を拒んで、あのやつと髯の生えかゝつた若いムーア人の陽氣や派手や優しさに見代へて身を任せ、ざら〳〵したローランドよりもあの優しい柔らかなメドローに戀するやうな氣になつたのには、何の不思議もありませんな。』

『牧師さん、』とドン。キホーテは答へた、『あのアンゼリカはな、脣輕で稍淫らなぐら〳〵した女でありましたのぢや。それであの婦人は、美貌でも名高くなつたが、またその浮氣でも世を騷がせましたのぢや。あの婦人は智勇を兼ねた勇士を何百人となく情なく斥けて、あの名譽も財產も判だけであつた、あののツペりした靑二才の小姓を取り容れましたのぢや。あの婦人の美しさを歌うた大詩人、名高いアリオストーは、あの婦人が卑しむべき密通をした（そりやなる程あまり褒めたことでもなかつたので）その後の事蹟を歌ふ氣になれなんだので、この君がカセイ（支那の王笏受けし次第は、

われよりも健筆の詩人いつか歌はん……

といふところで、あの婦人を打棄やつてをりますよ。そしてこりや申すまでもなく一種の預言でありました。詩人は一名ヴテス卽ち卜ひ者と呼ばれて居りますからの。それが眞實であることは明白になつて居りますのぢや。といふのは、その後或る名高いアンダルシアの詩人（バラホーデ・ソトーのこと）があの婦人の涙を嘆じて歌うたし、またもう一人カスティリア人で名高い稀代の詩人（ロペ・ゼガのこと）があの婦人の美しさを歌ひましたからの。』

こゝで理髪師が言うた、『どうでせうな。ドン・キホーテ樣、そのアンゼリカ姫を讃めたゝへた人たちの中で、その婦人に就いて諷刺を書いた詩人は一人もござりませなんだかな？』

『もしサクリバンテかローランドが詩人であつたら、この女に叱罵を加へたらうと思はれますわい。といふのは、小說中のものであらうとなからうと、その婦人たちに、つまり心の君と擇んでをる婦人たちに情れなくされたり斥けられたりした詩人としては、諷刺や誹謗で復讐するのは、こりや自然のことぢやから——この復讐はたしかに溫厚な人には似つかはしうないが。しかし今までのところでは、この世界をひツくり返したアンゼリカ姫の名譽を損なふやうな詩は、一つも聞いたことがありませんわい。』



『奇體ですな、』と牧師補は言つた。しかし丁度この途端に、先程この話しの場から引つ込んだ家婢と姪とが中庭で大聲を出して叫んで居るのが聞えた。その聲を聞きつけて彼等は皆驅け出した。

## 第二章　はサンチョー・パンザがドン・キホーテの姪や家婢と爲したる注目すべき激論、並にその他のをかしきことどもを傳へる。

この物語は記して曰く、ドン・キホーテと牧師補と理髪師が聞いた叫び聲は、姪や家婢がサンチョーに呶鳴り立てゝゐるところから來たのであつた。サンチョーは二人の女たちが入つてはならんと止めるのを、無理に押し入つてドン・キホーテに逢はうとするので、女たちはかう叫んでゐたのであつた、『このごろつき野郎、この家に何の用があるんぢや？　さつさとお前の家へ歸るがよい。家の旦那樣を誑らかして、おびき出して、方々ほつき廻らせたのはお前ぢやよ。誰も他の人ぢやないよ。』

これに對してサンチョーは答へた、『このくそ婆アめ！　お前の家の旦那ぢやないよ、私こそ誑らかされて、おびき出されて、方々ほつき廻らされたのぢや！　あの人が私を世界ぢう引きずり廻したんぢや。お前等アとんだ間違うたことを言ふ。あの人が私を瞞して家からおびき出したのぢや。島を一つ呉れるちう約束でよ、私ア今だにそれを當にしとるのぢや。』



『ほんとに憎らしいサンチョーだこと、その忌々しい島がお前を締め殺せばよい。』と姪は言つた、『島といふのは何かえ？　そりや何か食はれる物かえ？　お前さんは食ひしん坊の大喰ひぢやから。』

『食はれる物ぢやないよ、』とサンチョーは答へた、『さうぢやないが、支配したり治めたりする物で、そして四つの市よりも、四つの裁判官の役目よりもえゝもんぢや。』

『どつちにせよ、』と家婢は言つた、『お前は厄病神で惡だくみの袋ぢやから、內へ入つてはならんぞよ。まア お前の家でも治めて、苗床でも耕ちなさい。そしてさういふ島ぢやの山ぢやの當にするのア止めなされ。』

牧師補と理髪師とは非常に面白がつてこの三人の言葉を聽いた。しかしドン・キホーテは、サンチョーが無暗に饒舌散らして害になる痴言のありつたけを喋け出して、そして甚だ自分の信用にも關するやうなことにまで觸れはせぬかと思つて不安になつて、サンチョーを呼び止め、二人の女たちにも舌を抑へさして、サンチョーを家へ入らせた。サンチョーは入つた。牧師補と理髪師はドン・キホーテに別れを告げた。二人はドン・キホーテがその狂想に夢中になり、不幸な騎士道

の痴けごとに浸り込んでゐるのを見て、その快癒に就いては絶望した。そして牧師補は理髪師に言つた、『なア お前さん、私等が思ひも掛けん時に、あの大将はまた飛び出して行きますぜ。』

『私もきつとさうあらうと思ひますな、』と理髪師は答へた、『ぢやが私はあの騎士さんの狂氣よりもあの家來の馬鹿なのに驚きますな。あれはもうあの島のことをすつかり信じ込んでをるから、たとへどんなに手を代へてそれを悟らせようとしても、金輪際それは頭から除れはせんと思ひますよ。』

『可哀さうな人たちぢや、』と牧師補は言つた、『まア〳〵あの騎士と家來との痴けごとの結果がどうなるか見て居りませうわい。二人とも同じ型へ入れられた人のやうぢやな。それに主人の狂氣もあの家來の馬鹿正直が倶なはねば、三文の値打ちもありますまい。』

『全くその通り、』と理髪師は言つた、『まア今頃はあの二人は何を話してをるか、そいつが知りたくて堪りませんよ。』

『大丈夫ですよ、』と牧師補は言つた、『屹度あの姪御か家婢かゞ追ツ付け私等に話して聞かしませう。あの女たちはその話を聞き洩らすやうな人ぢやないからな。』

折柄ドン。キホーテはサンチョーと一緒に自分の居間に閉ぢ籠つた。そして二人きりになると、

サンチョーに言つた、『サンチョーよ、お前は私が自分の家の中に留つて居らなんだことを知りながら、私がお前をお前の家から連れ出したと言ふのは、またさう思うてをるとは、返すがへすも殘念に思ふぞよ。私等は共に出で立ち、共に道を歩き、共に方々をさすらうたのぢや。私等は吉凶とも共に受けたのぢや。もしお前が一度毛布上げにされたと言ふなら、私は百度も打ちのめされたのぢや。そこだけが描者がお前よりも都合のよかつたところぢや。』

『そりやもう當り前でござりますよ。』とサンチョーは答へた、『災難は一體家來よりや武者修業に餘計に附くもんぢやと貴方さまは言はしやりましたものな。』

『サンチョー、お前は間違うて居る、』とドン・キホーテは言つた、『quando caput dolet, 云々といふ格言に依ればな。』

『私ア自分の國語より外ア分りませんわい、』とサンチョーは言つた。

『それはかういふことぢや、』とドン・キホーテは言つた、『卽ち頭が痛めば身體中が痛むと言ふのぢや。それで私はお前の主君であり主人であるから、私はお前の頭ぢや。お前は私の家來ぢやから私の一部分ぢや。それ故今もこの後も私の身に起る災難はお前にも痛みを與へ、またお前の身に起る災難は私に痛みを與へるであらうぞよ。』

『そりやその筈でござります、』とサンチョーは言つた、『けれど手足に當る私が毛布上げされて居つた時に、私の頭は壁の外に居つて、私が宙を飛んでをるのを眺めながら何の痛さも感じませんだわい。もし手足が何うしても頭の痛さを感じにやならん筈でござりましよ。』

『サンチョーよ、』とドン・キホーテは言つた、『一體お前の今の言葉は、お前が毛布上げにされてをつた時に、私が感じなんだといふことを言ふつもりかい？　もしさうなら、お前はそんなことを言うたり考へたりしてはならんのぢや。私はあの時お前が身體に受けたよりもひどい痛みを心で受けたのぢやからの。しかしこの事は十分に熟考して落着させる折もあらうから、今のところは預かりにして置かうわい。さてサンチョーよ。この村の人たちは私のことを何と言ひよるかいの？　下々の者等は私を何う思うてをるぞ？　士族たちは何うぢや？　華族たちは何うぢや？　私の勇氣や、私の手柄や、私の禮儀に就いては何う言つて居るぞ？　今は忘られてをる騎士道を世に蘇へらせ再興しようと私が骨折つてをる此の仕事を、人は何う思うてをるぞ？　つまりなサンチョー、この事に就いてお前の耳に入つただけのことを聞かせて貰ひたいのぢや。そしてお前は善いことも附け足さず惡いことも省かずに私へ話さねばならん。おべッかに附け足したり、御



追從に減したりせずに、ありのまゝにそのまゝの形に眞を主君に申し上げるのは忠臣の務めぢやからの。またサンチョーよ、これもお前に敎へて置かう、卽ちもし追從の面を被ぬ赤裸々の眞理が主君の耳に入るやうになつたら、時勢は變つて、前の時代は今に比べて鐵時代と見られ、今の時代は黃金時代と尊ばれやうぞ。この言葉に從うてサンチョーよ、はッきりと正直に、私が前に訊ねたことに就いて知つて居る本當のところを私に話すがよい。』

『旦那樣、お安いことでござります。』とサンチョーは答へた、『たゞし貴方樣、私ア貴方の仰有る通り、私の耳に入つたまゝ何も作り飾らずに申し上げますから、私の言ふことに怒つてはいけませんぞい。』

『私は些とも怒るまいぞよ、』とドン・キホーテは答へた、『サンチョー、お前は心置きなくあけすけ話してよいぞよ。』

『へい、それぢや、』と彼は答へた、『先づ第一に、貴方樣へ申し上げにやならんのは、下々の者等は貴方樣を途方もない大氣違、私をそれに劣らぬ阿呆ぢやと思うて居りますわい。旦那衆は、あの人は士族の身分で我慢して居らずに、「ドン」を附けたり、また三本の葡萄の臺木と二エーカーの土地を有つとるばかりで、襤褸を身に着けて居るくせに一足跳びで自分勝手に騎士になつた、

と申して居りますわい。華族仲間ちやら、たゞの士族の分際で、取り分け自分で自分の靴を磨いたり黒の靴下を綠の絹で繕うたりせにやならんやうな身分の低い士族の分際で、吾々と對抗せうとは以ての外ぢや、と申して居りますぞいの。』

『そりや拙者には當らぬことぢや、』とドン・キホーテは言つた、『拙者は何時でも立派な着物を着て居つて繼ぎなどは決して當てゝをらん。襤褸をこそは着てをるかも知れん。しかしそれは年數の經つたせいぢやなうて、鎧で着破つたり引き裂いたりするからぢや。』

『貴方樣の御勇氣や、禮儀にお厚いことや、お手柄やお仕事についちやいろ〳〵の噂がござりますわい。「氣違ひぢやが面白い」といふ者もあれば、「勇ましいが不仕合せぢや」といふ者もあるし、また「丁寧ぢやがおせッかいぢや」といふ者もござります。それからいろ〳〵さま〴〵ほぜくり廻して、貴方樣にも私にも滿足な骨は一本も遺しちや居りません。』

『サンチョーよ、』とドン。キホーテは言つた、『美德が最高に達して居る時は常に迫害を蒙るといふことを思ふがよいぞよ。惡意に依つて誣ひられずに暮した名高い人はほんの僅か、いや一人も無いのぢや。あの智勇絕倫、勇壯無比の大將帥ジュリアス・シーザーは、野心深いとか、或ひは特にその着物が清らかでないとか、身持が汚れて居るとか言うて責められたのぢや。またその功績



によつて大帝の名を獲たアレキサンダーのことをも、少し飮んだくれであつたと人は言ふのぢや。あの澤山の働きをしたハーキュリーズのことも、淫亂で放逸であつたと言はれてをるのぢや。ゴールのアマディスの兄弟のドン・ガラオルのことも、餘り喧嘩好きであつたとか、又そのアマディスも涙鈍かつたとか蔭口をきかれてをるのぢや。あゝ、サンチョーよ、そこぢや、善い人々に對してこんな中傷の言葉があるからには、拙者のも打棄つて置いてもよいのぢや。たかゞ今お前の言うた位のことならの。』

『さア〳〵、そこがそこでござりますわい！』とサンチョーは答へた。

『ぢや、もツと有るといふのか？』とドン・キホーテは訊ねた。

『まだ尻尾が皮剝かずに殘つて居りますよ』とサンチョーは言つた、『今までのところはまだお菓子や甘パンでござりますのぢや。けれどもし貴方樣が、御自分に言はれてござる惡口を殘らず知りたいと思はツしやるなら、私アそれを一粒も落さずに皆貴方に申し上げることの出來る人を、今の今伴れて來ませうわい。昨夜バーソロミュウ。カラスコーの息子が歸つて來ましてな。あの人アこれまでサラマンカで勉強しとりましたが、得業士になつて歸つて來ましたのぢや。そして私が挨拶に行きましたら、あの人がな、もう世間ではな、貴方樣のことが「工夫に富める紳士ラ・マ

ンチャのドン・キホーテ」ちう表題で、書物になつとると、さう申しましたわい。そしてその書物の中にや、私もサンチョー・パンザちう本名で載つとるし、またドゥルシネア・デル・トボソ姫も、それから私等がたつた二人きりの時にあつたいろ〳〵のことまで載つて居りますさうぢや。それで私アそれを書いた作者が、どうしてあゝいふことを知つたろかと魂消てしまひましたわい。』

『サンチョーよ、』とドン・キホーテは言つた、『私等の物語の作者は、そりや確かに或る賢人の魔術使ひに相違ないのぢや。何故といふに、あゝいふ人には、その人が書かうと思ふことは何事でも隠されるものでないからの。』

『えゝ！』とサンチョーは言つた、『賢人で魔術使ひぢやと！　へえ！　それでもあの得業士のサムソン・カラスコー（それが私の話しとる人の名前でござりますが）あの人は、その物語の作者はシード・ハーメット・ペレンゼナと申しましたぞい。』

『そりやムーア人風の名前ぢや、』とドン・キホーテは言つた。

『さうかも知れません、』とサンチョーは答へた、『ムーア人は大抵茄子が大好きぢやと聞いとりますからの。』

『お前は「シード」といふ苗字を取り違へてをるに相違ない――それはアラビア語で「主君」といふ



意味ぢやよ――サンチョー、』とドン・キホーテは言つた。

『成る程さうかも知れません、』とサンチョーは答へた、『ぢやが若し貴方様がその得業士を伴れて來て欲しいと思はツしやるなら、私ア瞬きする暇につれて來ませうぞよ。』

『さうして呉れゝば非常に嬉しいぞよ、』とドン・キホーテは言つた。『今お前の言うたことで私は驚いてしまうたからの。そこで私はその書物のことを殘らず聞かぬうちは腹が空いても一口も食ふまいぞ。』

『それぢや迎へに行つて來ます、』とサンチョーは言つた。そして主人を殘して彼は得業士を捜しに行つたが、間もなく其の人を伴れて歸つて來たので、三人殘らず一緒になつて、頗るをかしい對話を始めた。

## 第三章　ドン・キホーテとサンチョー・パンザと得業士サムソン・カラスコーとの間に交されたる可笑き會話のこと。

ドン・キホーテはサンチョーの言つた書物の中に自分が何う書かれてゐるかを知らせてくれる筈の得業士カラスコーを待ちながら、深くも思ひに耽つてゐた。しかし彼はどう考へてもそんな物語が世に出てゐるとは信じ兼ねた。といふのは自分の殺した敵の血汐が未だ自分の劍の刃の上に乾いてゐないのに、はや既に人々は自分の偉大なる事蹟を印刷することに取りかゝつてゐると言ふ次第を話さうとするからであつた。それに拘らず彼は、自分の敵か味方かの賢人が、多分魔術の助けによつてそれ等の事蹟を印刷に附したかも知れないと思ひ付いた。もし味方ならばそれ等の事蹟を、今まで武者修業者に依つて成し遂げられた最も名高いものにもまして誇大し稱揚する爲めであらうし、またもし敵ならば、それ等を記録に殘されてある卑しい從士の最も下劣な事蹟よりも低く見さげ貶す爲めであらうと思つた。尤も彼は、我れと我が身に言つた如く、未だ曾



て從士等の事蹟は記錄されたことがないとは思つてゐた。しかしもしそんな物語が世に出てゐるのが事實であるとすれば、それは武者修業者の物語である以上、必ずや壯大にして崇高、堂々として雄大、しかも眞實であるに相違ない、とかう思うて彼は幾らか自ら慰めた。尤もその「シード」といふ稱號によつて判斷すればその作者はムーア人なので、そしてまたムーア人は悉く詐欺者で喧嘩者で策士であるから、彼等からは何の眞實も待ち望まれないと思ふと、不愉快になつた。彼は自分の婦人ドゥルシネア・デル・ドボソの貞操に瑕をつけ信用を損ねるやうに、多少不行儀に自分の戀の一件を書かれては居らぬかと心配になつた。彼は自ら常にその婦人に對して守つてゐる忠誠と尊敬とを世に公けにして貰つて、女王たち皇后たち及びあらゆる種類の處女たちを排斥し、かくして自分の自然の衝動の烈しさを壓へたいと思つた。かういふ風ないろ〳〵の冥想に耽つて我を忘れてゐると、サンチョーとカラスコーとがやつて來た。ドン・キホーテは彼を鄭重に迎へた。

その得業士は。サムソン（第記聖書に出る巨大漢）といふ名前であつたけれども。その體格はあまり大きくなく、たゞなか〳〵の大剽輕者であつた。彼は蒼白い顏色をしてゐたが、非常に鋭い頓智の人で、年頃は二十四歳位、圓顏、平たい鼻、大きな口など、凡て惡戲好きでおどけや冗談の好きな特徴を備

へてゐた。そして彼はドン・キホーテを見るや否や、その見本を示して、ドン・キホーテの前に跪づきつゝ、かう言つた、『ラ・マンチャのドン・キホーテ様、何卒閣下のお手を接吻させて下さいまし。私はまだ僧職の最下級の四級しか有つて居りませんが、私の着てをりますこの聖ペテロの制服にかけて申しますが、貴方様こそは古往今來全世界に最も有名な武者修業者のうちの御一人でござります。どうぞ、貴方様の大功蹟の物語を書きましたあのシード・ハーメット・ベネンゼリの上に祝福を下されますやうに。またそれをアラビア語からカスティルの通俗語に飜譯して普く一般の人々の娯みに供するの勞を取りましたあの鑑賞家の上に二重の祝福を下されますやうに！』

ドン・キホーテは彼を立ち上らせた。そして言つた、『それでは、私の物語が出來るといふのは本當ですな、またそれを書いたのはムーア人で賢人ぢやといふことも？』

『そりや本當でござりますとも、貴方様、』とサムソンは言つた、『それは今日でも、その物語の本は一萬二千冊から上印刷されてあると信じます。まア訊ねて御覽なさい、ポルテュガルでもバルセロナでもヴレンシア（以上二つはスペインの大都）でも印刷されて居りますし、それのみかアントワープ（ベルジャムの港）でも印刷されたといふ消息がござりました、それにまた凡そ國としてまた國語として、その本を飜譯せぬ



のは一つもないと私は信じます。』

そこでドン・キホーテは言つた、『德の高い秀れた人に取つて最上の喜びを與へる筈の一つは、その存命のうちに自分のことを印刷にし活字に組んで、その美名を人口に膾炙させることでせう。美名をと私が言ふのは、もしやそれがあべこべのものであつたら、それこそ死ぬるよりも辛いことですからの。』

『美名高名を傳へるとなりますと、貴方様は殘らずの武者修業者たちの榮譽を壟斷なさるわけになります、』と得業士は言つた、『ムーア人はムーアの言葉で、またキリスト敎徒は自分の言葉で、貴方の俠勇や、危險に當つて行かれる大勇や、艱難に際しての剛毅、負傷にも不幸にも屈せぬ堅忍、また貴方とドーニヤ・ドゥルシネア・デル・トボソ姫との淸淨な戀の純潔さ變りなさなどを、吾々の前に現はさうと心がけて居りますからな。』

こゝでサンチョーが口を出した、『私ア今までのドゥルシネアのお姫様をドーニヤと呼ぶのは聞いたことがない。たゞドゥルシネア・デル・トボソ姫ちうだけぢや。その物語はもうこゝで間違うてをるわい。』

『そりや何も大した瑾ぢやない、』とカラスコーは答へた。

『全くさうぢや、』とドン・キホーテは言つた、『ぢやがの、得業士さん、その物語の中で重な拙者の事蹟といふは何んなことでありませうな？』

『その點では好き好きで說が違ひます。』と得業士は言つた、『或る人は貴方がブリアリウス百手五十両を有する巨人どもや巨人どもとお考へになつたあの風車の冒險に限ると言ひますし、他の者はあの布晒し車の冒險ぢやと言ひます。片方では、後になつて二つの羊の群の形を取つた二軍勢の場面ぢやと言ひ張るし。また片方では、セゴヴィアに葬りに行く途中のあの死骸の場面ぢやと言ひ張ります。更に又他の者は、あの船懲役人開放が最上ぢやと言ふし。また更に別の者は、あのベネディクトの巨人どもとの一件や、あの勇ましいビスケイ人との擊ち合ひに及ぶものはないと申します。』

此處でサンチョーが言つた、『もし、得業士さん。あのおとなしいロシナンテがとんだ御馳走を欲しがつた時に、ヤングー人等とぶつかつたあの騷ぎのことア載つてをりますかい？』

『賢人は何一つインキ壺の中に殘して置きはしませんよ、』とサムソンは答へた、『あの人は一切殘らず記して居る、あのえらいサンチョーが毛布の中で舞うた蜻蛉踊に至るまでも。』

『私ア毛布の中で踊つたんぢやない、』とサンチョーは答へた、『空中で、而も嫌なほど舞うたのぢや、』



『思ふに、榮枯盛衰のない人間の歷史は世の中にありますまい。』とドン・キホーテは言つた。『しかし騎士道に關したものは他のよりも尙更さうです。騎士道に關したものは、都合のよい冒險ばかりで作り上げることは出來ぬからです。』

『しかしながら、』と得業士は答へた、『この物語を讀んだ人のうちには、ドン・キホーテ樣が方々の合戰で受けられたあの數限りない棒毆りの中から、作者が幾つかを省いて置いたら實によかつたらうと言ふ人がございますよ。』

『そこが物語の本當なところぢや、』とサンチョーは言つた。

『しかし、そんなことは默過してもよかつたわけぢや、』とドン・キホーテは口を入れた、『全體、さういふ事柄は、もしその物語の主人公を輕蔑させるやうな傾きのあるものなら、物語の本筋を變へたり動かしたりせんやうな事件なら記す必要はないのぢや。エニアスもヴージルが描いて居る通りに實際は全くあんなに信心ではなかつたし、またユリッセスもホーマーが述べてをる通りにあんなに賢かつたわけでもない。』

『そりやさうです、』とサムソンは言つた、『しかし詩人として書くのは又別で、歷史家として書くのは又更に別です。詩人はありのまゝでなく、かうあるべきぢやといふ風に書いても歌つてもよ

いでせう。けれど歴史家は、かうあるべきであつたといふのではなく、その事實を少しも附け足さず減らしもせずに、ありのまゝに記錄せにやなりません。』

『それぢやア、』とサンチョーは言つた、『もうそのムーア人の旦那が本當のことを書いてござるなら、旦那樣が棒殴りに逢ふ中にや屹度私のも書いてありませうな。旦那樣の肩ぶしを叩く時にや私の身體中にも同じことをせずにや置きませんなんだからの。けれど旦那樣の言はツしやる通り、頭の痛さは手足も分けにやならんのぢやから、私ア何もそれを不思議と思う筋はありませんがの。』

『サンチョー、お前は猾い犬ぢや、』とドン・キホーテは言つた。『まゝまツたくお前は。覺えてをらんでえゝことを覺えて居る。』

『あいつ等に殴られたことを忘れようとしたとて、この瘡痕がさうはさせませんのぢや。まだま だ私の肋骨に生々殘つてをりますからの。』とサンチョーは言つた。

『默れ、サンチョー、』とドン・キホーテは言つた、『この得業士さんの邪魔をするな。私はこの方に私のことを書いてあるその物語の先きを殘らず話して頂くのぢや。』

『それから私のことも、』とサンチョーは言つた、『私もやツぱりその中の主な珍物の一人ぢやちう



話でござりますからの。』

『サンチョーさんよ、珍物ぢやない、人物ですよ、』とサムソンは言つた。

『何ぢや！　また言葉尻を取るかい！』とサンチョーは言つた、『そんな風にして居つたら、一生かゝつてもおしまひにやなりますまいよ。』

『サンチョーさん、』と得業士は答へた、『もしお前さんが、その物語中の第二番目の人物でなかつたら、私は首でも上げますよ。そして、この全篇中で一番賢い人の言葉よりもお前さんのが却つて面白いといふ人さへ世間にはありますのぢや。尤もまだお前さんが、ドン・キホーテ樣から貰ふ筈のその島を治めることが出來ると信じなさるのは、お前さんもあんまり自惚過ぎると言ふ者もあるにやありますがな。』

『まだ〳〵壁の上に日が當つて居るわいまだその日が過ぎ去つてゐないといふこと、望みありとの意』とドン・キホーテは言つた、『もうちツとサンチョーが年を取つて、年と共に世間を知つて來れば、今よりももつと〳〵良い適宜な總督になる資格が出來ますわい。』

『やれ〳〵、旦那樣、』とサンチョーは言つた、『私がこの年をして治められんちう島なら、メシュウセラー舊約聖書にあるエノクの子、九百六十九歳まで生きたりと傳へらるの年になつても私にや治められやしますまい。困つたことは、その島

がどこか私の知らん遠方にぢつとして居るこッで、私にそれを治める頭がないといふこッちやござりませんわい。』

『サンチョーよ、それは神様へお任せせい、』とドン・キホーテは言つた、『さうすれば都合ようなつて、大方お前の考へてをるよりもようならう。一枚の木の葉も神様の御意によらねば揺かぬのぢや。』

『そりや全くですな。』とサムソンは言つた、『もし神様の御意さへあれば、一つの島はおろか百千の島でもサンチョーさんの治める島はありませう。』

『私アこの邊の總督たちを見ましたがな、』とサンチョーは言つた、『私の靴の底にも比べられやしませんぞい。それでもやッぱり「閣下」と呼ばれて銀の皿で食事をしますよ。』

『あんなのは島の總督ぢやない、』とサムソンは言つた、『もッとやり易い他の役所ですよ。島を司る者になると、せめて文法書位は知つて居らにやなりませんな。』

『私ア分銅の使ひかたは十分うまく出來ますがの、』とサンチョーは言つた、『ぢやが書ちうものア何のことやら分りませんので、すきも好みもしませんわい。ぢやが島を治めることは神様のお手に預けて、何でも私に一番似合うた御奉公をさせて頂くやうに御願ひ申して置いて、さてサムソ



ン・カラスコーの得業士様へ申し上げますがの、その物語の作者が私には何の咎も被せんやうな風に書いとるちうことア滅法私は嬉しうござりますよ。ほんとに、もしやその人が私のやうなこんな生え抜きのキリスト信者に似合はしうないやうなことでも書いとッたら、讐の耳へでも入りましたらうの。』

『それこそ奇蹟ぢや。』とサムソンは言つた。

『奇蹟でも奇蹟ぢやなうても、』とサンチョーは言つた、『誰れでもよう考へて人のことを言うたり書いたりするもんぢや。頭に浮び次第片ッ端から出鱈目に書いてはならんもんぢや。』

『その物語に見られる一つの缺點は、作者が「無分別の好奇心」といふ小説を挿入してをることですよ。それもその小説が悪いとか拙いとかいふわけではないが、たゞ場所はづれで、ドン・キホーテ樣御自身の物語には何の關係もないのですからな。』と得業士は言つた。

『そりやきッと奴さんが、きやべつと笊を一しよにしたんぢやな。』とサンチョーは言つた。

『フム、それぢや、』とドン・キホーテは言つた、『私の物語の作者は賢人ぢやなうて、たゞ一個の無學なお饒舌家ぢやな。そして丁度あのウベダの繪書きのオルバネヤがいつもやつてをッたやうに、何うにでも成り放題になれと行き當りばッたりにその物語を書いたのぢやな。あのオルバネ

ヤは何か繪を書いてをる時、何をお書きになつてゐますかと、人に訊ねられると、「何なり出來る物」を書いてゐると答へたのぢや。時にはそんな風にして雄鷄を描いても、それが餘りに似て居らぬので、已むを得ず、その繪の傍らに「これは雄鷄なり」とゴシック文字で書いたのぢや。私の物語もその類で、分るやうにするには註釋が要るのであらう。』

『その心配はありませんよ、』とサムソンは答へた、『その中には頸を傾けるやうなところは一つもない位平明ですからな。兒ども等はその本の頁をめくり、若者はそれを讀み、大人はそれを理解し、老人はそれを褒めます。一と口に言へば、その物語は非常に引ッ張り凧にせられて讀まれます。そしてあらゆる種類の人々に暗記されてをります。それで痩せた駄馬さへ見ればすぐ樣、「あそこにロシナンテが行く」と、言ふ位です。そしてその物語を一番熱心に讀んで居るのは小姓たちです、といふのは、「ドン・キホーテ」の置いてない王侯の控へ間は一つもないからです。一人がそれを下に置くと、他の一人が取り上げます。それをひッたくる者もあれば、せがむ者もある。つまりその物語は愉快なことこの上なく、しかも少しの害もない古今未曾有の面白いものです。と言ふのは、全篇に亙つて淫らな言葉の影も留めず、天主敎に外れた思想は少しもないからです。』



『それと違うた風に書いたら、』とドン・キホーテは言つた、『眞實でなく虛妄を書くことでせう。そして虛妄を用ゐる歷史家は、贋金造りと同じやうに火刑にすべきものぢや。ぢやが、私に就いては書くべきことが澤山あるのに、何を苦しんでその作者が樣々の小說やそぐはぬ物語を挿入したか、それが分りませんわい。疑ひもなくあの「蓼でも枯草でも云々」（この詩の全體は、蓼でも枯草でも滿腹には充されるといふ諺に據つたに違ひないが。たゞ私の思ひ、私の歎息、私の涙、私の氣高い志、私の企て、それ等を記したばかりでも、あのエル・トスタドー（ア那つの僧正アロンゾー・ヂ・ガルガノのことこの人は家族食料を運び去いた）の作つた殘らずの書物ぐらゐの、いやそれよりも厚い大冊を作り上げたらうにな。いや全く、得業士さん、詰るところは、歷史物語やその他の書物を書くには秀でた判斷と熟した智慮が入り用ですな。をかしみを現はしたり、上品な戲れの調子で書いたりするのは大天才の天賦ぢや。喜劇中の一番悧巧な奴は阿呆ですよ、人に馬鹿ぢやと思はせるやうにする者は、阿呆であらう筈がないからの。歷史は眞實であるべき筈ぢやで、ある意味では神聖なものですよ。眞理といふことから言へば、眞理の在る所に神が在るのぢや。ぢやがそれに拘らず、まるで油煎餠かなんぞのやうに樣々の書物を書いては世間へ振り撒く者が居りますわい。』

『何一つ善いところのない程惡い本といふものはありませんよ。』と得業士は言つた。

『そりや言ふまでもありませんが。』とドン・キホーテは言つた、『しかし、書き物で相當の評判を博した人々が、その書き物を印刷すると、全く評判を失うたり、さうでなうても多少評判に傷をつけることはようある話ぢや。』

『その理由はかうです。』とサムソンは言つた、『つまり印刷された作はゆる〳〵人に見られるから、その缺點も容易に見つかります。しかしその作を精しく穿鑿されゝばされるほど、その作者の名譽はいよ〳〵高くなります。天才を以て名高い人々や、大詩人や、著名な歴史家は、いつも、いや大抵は、自分では何も拵へたことはなくて他人の書き物の批評に特別の興味や喜びを感ずる人々から褒まれるのです。』

『そりや何も不思議なことではないですよ。』とドン・キホーテは言つた、『自分で說敎壇に立つことは不得手でも、說敎する人の瑕や言ひ過ごしを見つけるに優れた牧師が隨分ありますからの。』

『全くさうですな、ドン・キホーテ樣、』とカラスコーは言つた、『しかしそんな咎め立てする人たちはもツと寬大にも少し大目に見て、自分等が苦情をいふその作の、いはゞ明赫々たる太陽の上の黑點に、あまり注意を拂はんやうにすればよいと思ひますな。「えらいホーマーが時に居睡りをした」ところで、いかに長い間目を覺ましてゐて、力の限り蔭を少くし自分の作に光を濺いだかといふことを、思ひやらねばなりませんよ。そしてあの人たちが缺點として擧げるものが、時としてはそれを有つてゐる顏の美貌を上げるための黑子であるといふこともありさうですよ。そこで書物を出版する人は大した危險に身を曝すわけですな。何故と申しますと、何が出來ない相談ぢやと言うても、殘らずの讀者を滿足させ喜ばすやうな書物を書くことが一番ですからな。』



『私のことを傳へた物は餘り人を喜ばせなんだに違ひない。』とドン・キホーテは言つた。

『何うしてそれどころですか、』と得業士は言つた、『Philotimum infinitus est numerus（愚者の數は限りなしの意）で、あの物語を面白がつて居る人は無數ですよ。しかし或る人は、サンチョーのダップルを盜んだ泥棒の名を擧げるのを忘れる程に、作者の物覺えの惡いのを責めました。その名前はあそこのところには書いてありません、たゞ書いてある事からサンショーが盜まれたんぢやなと推量されるだけです。そして少し先きへ進むと、サンチョーがその同じ驢馬に乘つて現はれますが、その驢馬の見つかツたことは書いてありません。それにまたサンチョーがモレナ連山であの旅鞄の中から見出した百クラウンの金貨は何う仕末したのか、作者に二度とそれに說き及ばぬので、それを書くのを忘れたのぢやと言ふ人もあります。また多くの人々はサンチョーがその金を何う仕末したか、何に費つたのかを知りたがつて居ります。つまりそれはこの作中の大事な手拔りの

一つですからな。』

『サムソンの旦那、私ア今はそれを詳しう話したり申し開きしたりする氣になれませんわい、』とサンチョーは言つた。『私アもう胃嚢が縒れさうぢやで、早う歸つて好きなお菜で飯を食うて、そいつを癒やさずば餓鬼になりますわい。家にや飯の用意が出來て、嬶は私を待つとりますのぢや。飯が濟んだら歸つて參ります。そして貴方にも世間の衆へも、あの百クラウンを費うたことや驢馬を盜られたことや、その他何でもお好みのお訊ねに返答しませうわい。』そしてその上は一と言も言はずに、またその答へをも待たずに家へ行つてしまつた。

ドン・キホーテは得業士に、ゆつくりして有り合せの物で飯を食つて下さいと勸めた。得業士はその勸めを容れて遣つた。平生の御馳走の上に二羽の若い鳩が附け加へられた。食事中は騎士道のことを話した。カラスコーはこゝの主人の氣に入つた。御馳走がすんで、彼等は晝寢をした。サンチョーが歸つて來た。そして先きの會話が再び始まつた。



## 第四章　ではサンチョー・パンザが得業士サムソン。カラスコーの疑ひや問ひに對して滿足な返答を與へる。附たり、知るにも語るにも足るその他の事ども。

サンチョーはドン・キホーテの家に戻つて來た。そして先程の話の題目に立ち歸つて、かう言つた、『サムソンさんは、私の驢馬が誰れに何うして何時盜まれたのか、それを知りたいて言はツしやれたから、御返答しますがの、私等があの不仕合せな船懲役人の冒險やセゴビア行きの死骸の冒險の後で、「救濟組合」の手を逃げてモレナの山中へ入りこんだ丁度その夜のことですよ、旦那樣も私も藪の中に身を隱して、其處で旦那樣は槍に凭れ私はダップルの上に坐つてをつたが、先きの喧嘩で打ちのめされて草臥れてしまうたので、丁度四枚の鳥の羽の寢床の上にでも臥てをるやうに、ぐつすり寢込んでしまひましたのぢや。そして取り分け私は徐りぐつすり寢込んどつたもんで、何人ぢやらうと、そツとやつて來て私を四本の丸太で支棒をして置くことでも出來まし

たのぢや。全く私が坐つてをつた荷鞍の四角に、その誰かゞ四本の丸太を入れて、私をそのまゝ乘せて置いて、私の氣づかんやうに私の股の下からダップルを連れて行つてしまひましたのぢや。』

『そりや造作もないことぢや、』とドン・キホーテは言つた、『また別に新しいことでもない。それと丁度同じことがアルブラッカの城攻めの時サクリパンテの身に起つたわい。あの時はブルネローといふ名代の盜賊がそれと同じ工夫で、あの人の股の下からその乘馬を盜んだのぢや。』

『夜が明けて、』とサンチョーは續けた、『私が身體を伸ばすと、その途端に丸太が崩れて、私アえらい勢ひで地べたへ落ちました。そして驢馬はと搜しましたが、見えませなんだ。眼には涙がこみ上げて來て、えらい泣き聲を揚げましたぞ。もし私等の物語の作者がその歎きを書き入れてをらんなら、そりやはや大事なことを脫かしたものぢや。何日經つたかようは覺えませんが、四五日後にミコミコナ姫樣と御一緒に旅をしてゐりますと、自分の驢馬が見つかりましたよ。その上にジプシーの裝して乘つて居る奴が、旦那樣と私に鎖を釋いて貰うたあの大泥棒の大惡黨のジネス・デ・パサモンテでござりましたのぢや。』

『間違ひのあるのは其處ぢやない、』とサムソンは答へた、『それは、その驢馬がまだ出て來んうちに、サンチョーがそれに乘つて居るやうに作者の書いてゐるところですよ。』

『それは何と言うてえゝか私も分りませんわい、』とサンチョーは言つた、『その作者が間違うたのか、さうでなけりや大方活版屋の大抜かりどもぢやろ。』

『きつとさうぢや、』とサムソンは言つた、『しかし例の百クラウンの金はどうなりましたかな?』

『ありや消えてしまひました、』とサンチョーは言つた、『あれで私の物や嬶の物や兒どもの物を買ひましたのぢや。あれがあつたればこそ私の嬶は、私が大道や脇道をほつつき廻つて私の旦那のドン・キホーテ樣に御奉公したのをあれほどに我慢しましたのぢや。もし私がこれほど長い間かゝつて鐚錢一文も持たず驢馬も伴れずに歸つて來ようもんなら、それこそえらい眼に逢ひましたらうわい。そこで誰れでも私のことをもつと訊きたけりや聞くがよい。王樣へぢき〳〵にでも卽座に返答しませうぞい。私がその金を取つたか取らんか、またそれを使うたか使はんかは、他人の知つたこつちやない。もし私があの旅の間にぶん殴られたのを錢で拂うて貰ふとしたら、一打ち二錢づゝにしか積らんとしても、まだ後百クラウン貰うたところが、その打たれた數の半分にも當らんぢやろ。めい〳〵よう胸に手を當てゝ考へて、白を黑にしたり黑を白にしたりせんがよい。人間は皆神樣に造られた通りぢや。へん、それより惡いことが多いんぢや。』

『私はその物語の作者によう話して、もし版を改めるやうであつたら、今サンチョーさんの言うたことを忘れんやうにと言ふやうに心がけませう。さうすれば今のよりかずつと立派になりますからな。』とカラスコーは言つた。

『その物語の中には他に修正すべきところはありませんかの？　得業士さん。』とドン・キホーテは訊ねた。

『勿論御座います。しかし今申した事ほど重要なものはありませんよ。』と彼は答へた。

『作者はその續篇を出すとでも言うて居りますかの？』とドン・キホーテは言つた。

『出すと言うて居ります、』とサムソンは答へた、『しかし作者はその材料を見つけ出して居りません。またそれが誰れの手にあるかも知つて居りません。それで續篇が出るか出んかは分りません。さういふわけで、何にでも續篇の良かつた例はないと言ふ人もあるし、またドン・キホーテのことはあれだけ書けてをればもう澤山ぢやと言ふ人もあるし、もうその續篇は出まいと思はれて居ります。尤も陰氣でなく寧ろ快活な人たちはかう言うてをります「もツとキホーテのやうな人間を書くがよい。ドン・キホーテに戰をさせ、サンチョーに喋舌らせるがよい。その後は野となれ山となれ、私等はそれだけで澤山ぢや」と。』



『そして作者は何うする積りですな？』

『何ですか？』とサムソンは答へた、『そりやもう、その材料を一生懸命骨折つて捜してをりますから、見付かり次第活版にしませうよ。作者はそれで名譽を得るといふよりか、儲けが上るといふ方で乘り氣になつて居るのです。』

それを聞いてサンチョーが口をきいた、『作者は錢や利得を當てにしとりますかの？　さうですかい？　それで旨く出來たら不思議な話しぢや、まるで復活祭の前の晩の仕立屋のやうに、たゞ急げ〳〵でしようからの。急いでした仕事にや、決して本當に立派な出來はござりませんわい。そのムーア人の先生にせよ誰れにせよ、自分のすることにより氣を附けるがえゝ。さうすりや私も私の旦那樣もいろ〳〵の冒險や出來事を拵へて、たつた一冊の續篇だけぢやない百冊でも續きを拵らへられるやうに、漆喰泥を手取り早く作者に呉れてやりますわい。作者の先生は屹度私等がこゝで藁の中にぐツすり眠つて居ると思うて居りませう。けれど私等に蹄鐵を穿めようとて足を上げて見るがよい、どの足が跛になつてをるか直ぐ分るわい。こんなこと申しますのはな、私の旦那樣さへ私の勸めをきいてござつたら、もう疾つくに旅へ出て、今頃は立派な武者修業の習はしにならうて、亂暴狼藉を戒め不義を正してをるぢやらうと思ひますからの。』

サンチョーがかう言ひ終るか終らぬ時に、ロシナンテの嘶きが彼等の耳に入つた。ドン・キホーテはその嘶きを吉兆と思つた。そこで彼はこれから三四日のうちに今一度出かけようと決心した。この心組を得業士に打ち明けて、その遠征を何の方面で始むべきかに就いてその忠告を求めた。すると得業士は、自分の考へではアラゴン（スペインの東北の一地方）王國へ行つてサラゴッサの市に行くがよいと思ふ、其處では聖ジョーヂの祭日に嚴かな馬上試合が催されるから、それに出ればアラゴン中殘らずの騎士たちに打ち勝つといふ名譽を得られようし、それはやがて世界中の騎士に打ち勝つことであらうと答へた。得業士はドン・キホーテの非常に凜々しい勇壯な決心を推賞した。しかし大いにこの上とも用心して危險に當るやうに警告した。何故なれば彼の生命は彼一人に屬すべきものではなく、不幸に陷つて彼の保護援助を求めてゐる凡ての人々に屬してゐるからであつた。

此處でサンチョーは言つた、『それ、そこぢや、私が嫌ひなのはそこぢや、サムソンの旦那樣。私の旦那樣は、丁度食ひしん坊の餓鬼大將が半ダースの甜瓜にかぶりつくやうに、百人からの鎧武者にでも喰つてかゝられますのぢや。とんだことぢや！　得業士の旦那！　攻めるに時あり、退くに時ありで、始終「進め、進め」ぢやありませんわい！　それに私アこんなことも聞いて居ります（そしてこりや私の覺え違ひでなけりや旦那樣から聞いたやうに思ひますがの）つまり勇



氣ちうものア卑怯と亂暴の兩端の眞中にあるといひますのぢや。それが本當なら、私ア旦那樣がそれ相應の理由もないに退いたり、勝ち目のないのに攻めかゝつたりなさるのは嫌ひですわい。ぢやが何よりも先づ私が旦那樣へ申し上げて置きたいのは、もし私を伴れて行かしやるとすりや、戰は殘らず旦那樣がなされて、私にや只旦那樣の身の廻りの御世話をする外一切何も言ひ付けなさらんちう約定をして置いて頂きたいものぢや。それさへ出來れば私ア今が今でも跳んで行つてお供しますわい。けれどたとへ手斧や頭巾の田舍の土百姓相手にせよ、私に刀を拔かさうと思ふのは大間違ひぢや。サムソンの旦那、私ア戰する人間にやなりませんわい。唯な、今まで武者修業樣へ御奉公した家來のうちで一番善え一番忠義な家來になりましよ。そしてもし私の旦那のドン・キホーテ樣が私のさう〳〵の忠義な御奉公のことを思うて、こゝらで幾らも行き當ると言はつしやる島の一つでも下さるやうなら、私ア大したお恵ちやと思うてお受け致しましよ。もしそれを下さらんなら、私も他人並に生れて來ましたのぢや。人は神樣より外にや誰れも賴つて暮しちやいけませんわい。それぱかりぢやない。パンの味はいつも同じことぢやらうし、總督になつたよりか、そんな役目に就かん方が却つて味が佳えかも知れません。そんな役目には惡魔の奴が係蹄を仕掛けて置いて、私の足場を滑らせてぶつ倒して奥齒を叩き折らせるやうなことがないとも

限りませんわい？　私やサンチョーで生れたからサンチョーで死ぬるつもりぢや。ぢやがそれでも、もし運好く、大した骨折りもなく大した危いこともなうて、島か何かさういふ見事な引出物がござりましたら、私はそれをお斷りするやうな阿呆ぢやござりません。「お前に若い牝牛を呉れるといふなら面勒を持つて走つて行け」と諺にもありますからの、また「運が向いて來たら取り入れろ」ともありますからの。』

『サンチョーさん、』とカラスコーは言つた、『お前さんは大學の先生のやうなことを言ひますな。ぢやがやつぱり神樣やドン・キホーテ樣へお頼りしなさい。ドン・キホーテ樣は、一つの島とは言はず、大國でも下さらうからな。』

『多からうが少からうが詰りは同じことぢや、』とサンチョーは答へた、『尤もな、カラスコーの旦那、私アこれだけア言ひますぞい、私の旦那はたとへ私にお國を下されても、それを穴の明いた袋へ投げ込まつしやるやうなことになりませんとさ。私ア自分の脈を取つて見ましたがの、國を支配したり島を治めるだけにや十分達者ぢやと分りましたよ。私ア前にもその事は旦那へ話したことがござりますよ。』

『サンチョーさん、用心しなされ、』とサムソンは言つた、『立身出世は行儀を變へる。大方お前さ



んも總督になつてしまうたら、お前を生んだお袋を忘れるぢやらう。』

『溝で生れた人間にやさうかも知れませんがの、』とサンチョーは言つた、『私のやうに、心からのキリスト信者の脂肪を四五寸も魂の上に有つとる人間は違ひますよ。それどころかまア私の氣性を見て下され、誰れにでも恩を忘れさうでござりますかい？』

『言ふ通りでありたいものぢや、』とドン・キホーテは言つた、『總督になつたら分るであらう。私にアもうさうなつたやうな氣がするわい。』

それからドン・キホーテは得業士に向つて、もし貴方が詩人ならどうか私に詩を作つて下さい、と頼んだ。それは彼がドゥルシネア・デル・トボソ姫に告げんとしてゐる別辭を傳へるの詩で、そして彼女の名前の文字を各行の初めに置いて、その詩句が揃へば各行の頭字を一緒に合せてドゥルシネア・デル・トボソ(Dulcinea del Toboso)と讀まれるやうにするものであつた。得業士は、自分は所謂三人半しか居ないスペインの名高い詩人のうちには屬しないけれども、お求めの詩は必ず作りませうと答へた。尤もその名前を組み立てゝゐる文字が十七文字あるので、この仕事はなか〳〵困難だとは思つた。そこで、もし各節四行から成つた俗謠を四つ作れば尚一字餘るし、また所謂デシマ（本來は十行一節の詩體）とかいふ五節で成り立つたものを作れば三字だけ不足

するのであつた。それに拘らず彼は「ドゥルシネア・デル・トボソ」の名前が四節の中に入るやうにする爲めに、出來るだけ工夫して一文字落すことにしようと思つた。

『そりや何とかうまくやつて頂かねばならん、』とドン・キホーテは言つた、『名前がはつきり明白に出て居らんと。どんな婦人でも自分の爲めに作られた詩ぢやと信じませんからの。』

この事はさう極りがついた。そして出發はこれから三日のうちにすることになつた。ドン・キホーテはこの事を秘密にして呉れるやうに、殊にあの牧師補やニコラスの親方や、また自分の姪や家婢には、自分の賞讃すべき勇壯な志の實行を碍げられることのない爲めに、秘密にしてくれと得業士に頼んだ。カラスコーは悉く約束した。そして善きにつけ悪しきにつけ折ある毎に便りをして呉れるやうにとドン・キホーテに頼んで、やがて別れを告げた。かうして銘々別れを告げ合つた。そしてサンチョーはこの遠征に必要な準備をする爲めに出て行つた。



## 第五章　サンチョー・パンザとその女房テレサ・パンザとの間に交されたる抜け目なきをかしき會話、並びに正しく記錄するに足るその他の事ども

この物語の飜譯者は此の第五章を書くに及んでかう言つてゐる、この章は信憑し難いものと思ふ、何となればこゝでサンチョーはその貧しい頭から出さうにも思はれないやうな風に口を利いてゐるし、また彼に思ひ付けさうもないと思はれる程に悧巧なことを言つてゐるからである、と。しかし飜譯者は自分のせねばならぬこの仕事を果たしたいと思うところから、この章を飜譯せずに打棄ることも不本意であつた。そこでかう續けてゐる。

サンチョーは非常に喜び勇んで家へ戻つて來た。そこで女房はその嬉しさうな顔を一二町も手前から見て取つて、次のやうに訊ねた位であつた、『サンチョーさん、お前さんはそんなに喜んでござるが、一體何か手に入つたのかえ？』

これに對してサンチョーは答へた、『女房や、もし神樣の御意で、私がこんなに人目に見えるほどに喜ばされなんだら、ほんとに嬉しからうがの。』

『あれまア お前さんの言ふ事ア分らんよ、』と女房は言つた、『もし神樣の御心で、こんなに喜ばされずに居られたら嬉しからうと言はツしやるのは何のことですぞい。私のやうな阿呆には、嬉しいことのないのを嬉しがるとはわけが分りませんよ。』

『テレサや、よく聞け、』とサンチョーは答へた、『私が喜んでをるわけはの、私の旦那のドン・キホーテ樣にまた御奉公をせうと心を決めたからぢや。あの方は三度目の廻國修業にお出掛けなさるお積りぢやでの。それでまた私も御一緒にお供するんぢや。それにやどうもそれを斷るわけにも行かんし、それにまた此間私等が使うてしまうたやうな百クラウンをまた見付けるかも知れんと思へば、心も浮き立つやうな希望があるからの。尤もお前や兒どもを殘して行くのは私も悲しいわい。もし神樣が私を彼方此方にほツつき歩かせずに家へ置いて、靴を濡らさせずにその日〳〵の食ひ物を下さるなら——そりや神樣がさうしてやらうと思ひさへなされば造作もなう出來ることツちやで——その方が手堅い長持ちのする幸ひぢやといふのは分つてをるわい。何故と言うて今の私の嬉しさには、お前に別れるちう悲しさが混つてをるからの。そこでさ、もし神樣の御意で、



こんな嬉しさを見せて貰はなんだら、嬉しからうと言うたのは尤もであらうがの。』

『ほんとにまア、サンチョーさん、』とテレサは言つた、『お前さんは武者修業の仲間へ入つてからといふものは、誰にも分らんやうに廻りくどい言ひ方をしなさるの。』

『神樣が分つて下さればそれで澤山ぢやよ、お前、』とサンチョーは答へた、『神樣は何事も分つて下さるからの。それで宜いわい、ぢやがなお前、これから三日の間はダップルによう氣を附けて、そして戰さに間に合ふやうに世話するのを忘れんようにな。あれの飼糧を倍にするんぢや。そして荷鞍やその他の馬具に氣を附けといて呉れよ。私等の行くのは婚禮ぢやないからの。國々を廻つていろ〳〵の大男や龍や怪物と取るか與るかの勝負をして、シッ〳〵ウー〳〵モー〳〵ウォー〳〵といふ聲を聞きに行くんぢやからの。けれどもしヤングワ人や魔術使ひのムーア人にさへ出會さなんだら、そんなものア皆な拉芬香の都の花のやうなものよ。』

『お前さん、』とテレサは言つた、『わたしや武者修業のお家來衆は唯ちや飯を食はんちうことを好う知つてをりますぞよ。それぢやからお前さんが災難に逢ふ度に早う救うて下さるやうにいつも神樣へお祈りして居りますぞえ。』

『のうお前、』とサンチョーは言つた、『もし遠からんうちに、島の總督になる當がなかつたら、私

アその場でくたばつて往生しようわい。』

『途方もないことを、お前さん、』とテレサは言つた、『さういふ時にや、牝鶏は舌の病があつても生かしたがよいのぢやよ。生きてゐなされ。そして總督のお役は皆惡魔にやるがよい。お前さんはそんな役を持たずにお袋の腹から出て來て、今までそんな役を持たずに暮らして來なさつたのぢや。そして壽命が盡きたらお前さんはそれはそんなものは持たずに墓の中へ行くなり、伴れ込まれるなりするのぢやよ。世の中にや總督のお役を持たずに生きて居る人がどの位あることやら、それでもやつぱり生きても行けるし、人間の仲間にも數へられて居るわいな。世界一の藥味は空腹ぢや。貧乏人はいつもそれを缺かさんから、いつもおいしう喰べますぞい。けれどな、サンチョーさん、もしや運よう何處かの總督樣になるやうなことになつたら、私や兒どもを忘れんやうにしておくれよ。あのサンチコーはもう滿十五になるから、もう伯父さんの方丈さんがあれを坊さんに仕立てなさる積りなら、もう學校へ上げた方がよいちうことも覺えて居つて下され。また娘のマリ。サンチヤもお嫁入りさせてやりさへすりや、氣を揉んで死ぬ氣づかひはないちうこともよう考へて見て下され。何うもあの娘は、丁度お前さんが總督を欲しがつてござるやうに精一杯亭主を欲しがつて居りやせんかと思はれる節々がありますからの。どうせ、娘といふ者は大事に藏うて置くよりも嫁入つて苦勞する方がよいのぢやでな。』



『まて〳〵、』とサンチョーは答へた、『女房よ、もし神樣が私を何處かの總督にして下さつたら、マリ。サンチヤには「貴女樣」と言はにや近寄れんやうな身分の高い連れ合ひを持たせてやる考へぢやわい。』

『いや〳〵、サンチョーさん、』とテレサは答へた、『あの娘は身分相應な人へ片付けなされ、それが一番大丈夫ぢや。もしお前さんがあの娘の木底の靴を踵の高い靴に代へさせたり、あれの鼠色のフラネルの蹴出しを襞骨入りの袴や絹の長上着に代へさせたり、平の「マリカ」や「お前」から「ドーニヤ、某」や「貴女樣」に代へさせたりしなさつたら、娘はどぎまぎ戸惑ひして、行き着く先きで何千度も大味噌を附けて、自分の粗末な手織り着の生地を曝らすぢやらうに。』

『ちよツ、阿呆ぢやな、』とサンチョーは言つた、『たつた二年か三年稽古すりやえゝのぢや。さうすりや禮儀も作法も手袋のやうに造作なしにあの娘にはまらうわい、またさうでなうても、それが何ぢや？　あの娘を「貴女樣」と立てりや、何うならうと構うたことかい。』

『サンチョーさん、お前さんは自分の身分を守んなされよ、』とテレサは答へた、『立身せうとなさらんがよいぞえ。そして「お前の近所の息子の鼻を拭いてやつてお前の家へ伴れ込め」ちう諺

をよう心に留めなされよ。ほんとにあのマリアをえらい伯爵様か立派な紳士様かへ嫁がせたら、そりやお見事なこッてござりませうな……その人は機嫌の悪い時には、彼女を土百姓育ちじや土ほじりの娘ぢや絲紡ぎの阿魔ぢやと呶鳴つて叱りませうからの。わたしやなお前さん、ほんとに今が今までそんな事の爲めに娘を育てちや居りませなんだぞい。サンチョーさん、お前さんは家へ錢を持つて來なされ。そしてあの娘を片付けることア私に任せて置きなされ。あの私等の知つて居る、ジュアン・トチョーの息子のロペ・トチョーといふ巖丈なしつかりした若い者が居りませうがの。あの人は娘にや滿更らでもなさゝうに見えますぞえ。あれとなら、身分も私等と似たり寄つたりぢやし、えゝ緣組みぢや。さうすりや何時も私等はあの娘に眼を掛けてやれるし、また親々も兒ども等も孫どもゝ婿たちも皆一軒の家內になつて、皆々無事で目出度く暮らせますわいな。それぢやから、向ふでもあの娘を何うしてよいか、またあの娘の方でも何うしてよいか分らんやうな、そんな御殿ぢやの立派な宮樣ぢやのへ嫁かせることア止めになされ。』

『何ぢやな、この痴け奴、バラバの女房奴（バラバはその妻の勸めで紳前に叛旗を企て、而して夫婦とも紳閣で死んだ）』とサンチョーは言つた、『お前は何のわけもないのに、私が娘を「閣下」と尊ばれるやうな孫の出來る人へ嫁らうとするのを邪魔せうとするが、そりや何ういふ考へぢやな？　おいこれ、テレサ、私アいつも年取つた人たちが「福



の來た時にそれを取ることを知らん者はたとへそれに劍突喰はされてもぶつ〳〵言ふがものはない」ちうのを聞いてをるわい。そして今ちやうどその福が私の家の戶口を敲いてをるで、それを閉め出しちやならんのぢや。まア私等の方へ吹いて來るこの順風に帆を上げることぢやよ。』（本書の飜譯者がこの一章を信憑し難いものと思ふと言ふのは、蓋しこのやうな話しぶりや、またこれ以下にサンチョーが言ふことゝものの爲めである。）『こら獸奴、』とサンチョーは續けた、『この泥から足を拔いて、どこぞ儲けの多い總督の役にありついて、そしてマリ・サンチャを私の好きな者へ片付けてやるのが、私の爲めに結構なことぢやといふことが、お前にや分らんかの？　さうなつたらお前まで「ドーニャ・テレサ・バンザ」と呼ばれて、敎會に行けばその町中の生れながらのお姬樣たちは皆そち除けにして、立派な毛氈や座蒲團や掛け毛氈の中へ坐られうわい。いや〳〵、お前はそのまゝ掛け布の縮のやうに大きうも小さうもならんでそのまゝで居るがえゝ——もうこれきりこの話はお止めぢや。サンチカは伯爵夫人になるのぢやから。お前が何と言はうとも。』

『お前さん、お前さんの話は皆確かですかえ？』とテレサは答へた、『まア、それでもやツぱりわたしや、この伯爵夫人の身分は娘の破滅にやならんかと心配しますぞい。お前さんは好きなやう

に彼女を公爵夫人になり女王樣になりさッしやるがよい。けれど私の心にもなけりや承知もせんことぢやとちやんと言うて置きますぞえ。お前さん、私アいつも身分相應の者が好きですよ。自分に何の筋もないのに勿體ぶるやうな人は見るに見兼ねるぞえ。私ア洗禮の時、ドンやドーニヤなどいふ附けたりも下げ札も總もつかぬ、見易い手輕るなテレサちう名を貰ひました。私の親父さんの名はカスカジョーぢやつたが、お前さんの女房になつたので、私やテレサ・バンザと呼ばれて居りますのぢや、尤も本式にいふとテレサ・カスカジーと呼ばれる筈なんぢやけれど。けれど「掟の好く方へ王樣が行かるれ」(この諺も迦に。)そこで私は名前の頭へ「ドン」を喰付けて自分で持ち運びも出來んほど重うするやうなことはせずに、たゞこの名前で滿足しとりますのぢや。それにまた伯爵樣や總督樣の奥樣がたのやうな裝をして人にかれこれ言はれたうもない。世間の人は早速あれあの自墮落女の振りやうを見い！　彼女はたつた昨日までは何時も亞麻を紡んで居つたのぢや。そして聖餐に行く時アいつも外套の代りに下袴の裾を頭から懸けて居つたのぢや。それが今日は、私等が彼女を知つてでも居らんやうに、禁止めや飾りのついた骨入りの長上着を着て歩いてをるわい！」と言はうからの。もし神樣が私に七つなり五つなり何ぼでも持つて居るだけの五體の官能を狂はせずに置いて下さるなら、私アそんな羽目に落ちたうないわいの。お前さん、お



前さんは何處へでも行つて總督樣なり島のお長なりになつて、好きな通りに威張らッしやるがよい。誓言私も私の娘もこの村からは一足も動きはしませんぞえ。評判のよい女の人は片足折つて家内へ留るもんぢや。そしてせッせと何か働くことは操がたい處女のお祭日ぢや。お前さんはドン・キホーテ樣に從いて方々廻らッしやるがよい。そして私等は廻りの惡いなりに打棄つて置かッしやれ。神樣はそれ相應に私等に償ひをして下さるのぢや。ほんとにあの人へ誰れが「ドン」をくツ付けたか知らん。あんなものはあの人の親父さんも祖父さんもねッから有つちや居られなんだがのう。』

『お前は何かの惡魔につかれて居るのぢやわい！』とサンチョーは言つた、『この女め、何うかしとるぢやな。まアそれからそれへと頭も尻尾もないことをいろ〳〵と繋ぎ合せたもんぢや！　一體全體カスカジョーぢやの、諺ぢやの、氣取つて見せるのと、そんなことが私の言ふことゝ何の關りがあるのぢや？　おいこら、阿呆のとんま奴（手前は私の言ふことも分らず、折角の福を取り逃がしやがるで、さう呼んでもえゝわい）、もし私があの娘に、丁度あのドーニヤ・ウラカ皇女（フエルディナンド一世の庶女であつたが父の遺言狀に漏れてあるのを知り、身を引に隱して父の名譽を相はうと申した）さんがせうとなさつた通りに、塔から身を投げろとか世間をほッつき廻れとか言うたのなら、お前が私の考へを聽かんちう道理もあらうわい。ち

やがもし今の今、瞬き一つせんうちに、あの娘の背中へ「ドン」や「貴女様」を喰付けて、あの娘を切株の中から引き上げて、高座の上の天蓋の下や、あのモロッコのアルモンハード（これは一種の座蒲団であつたがサンチョーはこれを誤つて家柄の名と思つた）の殘らずの族どもが持つてをつたより澤山の天鵞絨の座蒲團の置いてある臥椅子の上へ置いてやるとなつたら、何でお前は私の言ふことを聽いて言ふなりにならんのぢや？』

『お前さん、何故ぢやか分るかいな？』とテレサは答へた、『それは「身をかくす者は身を現はす」ちう諺があるからぢやよ。貧乏人には人はちよツと眼をやるだけぢやが、金持にはよう眼を据るますわい。そしてもしその金持ちの人が昔貧乏であつたなら、それこそ蔭口利きの悪口やむだ口や恨みごとが初まるのぢや。そして道ばたにやそんな連中が蜜蜂のやうにうよ〳〵と群りますぞよ。』

『おいこら、テレサ、』とサンチョーは言つた、『私が今お前に言うて聞かせることをよう聽け。大方お前が臍の緒切つてから聞いたことないことぢやろ。私も自分の考へを言ふんぢやないわい。今言はうとしてをるのはな、この前の四旬祭の時この村で說敎なされた說敎師の先生のお考へぢやよ。そりやな、私に思ひ違ひさへなければ、現在私等の眼の前に見えるものは皆過ぎ去つたものよりも更に善く更に強く私等の記憶に止まつて動かぬのぢや。』（今サンチョーの言ふこん



な言葉も、やはりサンチョーの能力以上のものであるので、この飜譯者が本章を以て信憑し難いものと見做す一つの理由である。）『そこからしてかういふことになるんぢや、』とサンチョーは續けた、『私等は立派な裝をして上等の着物や大勢の供廻りで飾り立てゝをる人を見ると、何うしてもかうしてもその人を尊敬せにやならんやうな氣になるんぢや。尤もそれと同時に私等はその人がもとは貧窮な身ぢやつたと思ひ出すかも知れん。けれどそれはたとへ貧乏であつたにもせよ生れが賤しかつたにもせよ、今は過ぎた昔のことぢや、もうはや殘つちや居らんのぢや。たゞ殘つて居るものは、私等が眼の前に見るものだけぢや。そしてもし運好くも元の卑しい身分から（あの坊さんは丁度かういふ言葉を使ひなさつたわい、）現在の出世の頂上まで立身したこの人が、身のたしなみも良く物腰みもせず誰にでも丁寧でまた昔からの家柄の人たちと競り合はうともせんならばぢやな、テレサよ安心するがえゝ、さうなればこの人の昔は何うぢやつたと思ひ付く者もあるまいし、また福運に廻り合せなんだ嫉み深い人間の外は、誰も彼もその人を尊敬するわい。』

『お前さん、お前さんの言はツしやることア分らんがの。』とテレサは答へた、『お前さんの好きになされ。もう私ア頭が痛うなつたから、そんなやゝこしいお談義は止めてお呉れよ。そしてもし言ふ通りにせうと變心しなさつたのなら――』

『おいこら、變心なさつたちやない、決心しなさッたら、と言ふのぢや、』とサンチョーは言つた。

『私と口いさかひは始めなさんなよ、お前さん、』とテレサは言つた、『私ア惡氣で言ひはしません ぞい、間違うた言葉を咎め立てしなさんな。それでもしお前さんは是非總督の役になるちう氣な ら、あの倅のサンチョーも一緒に伴れて行て、今から總督の役を勤める稽古をさせて下され。子 は親の商賣を習うて受け繼がにやならんでの。』

『私が總督の役を手に入れたら直き郵便で倅に來いというて來るわい。そしてお前にや錢を送つ てやらう。錢にや不足はないからの。總督たちになると錢が手元に無い時でも貸して呉れる人に も決して事は缺かんからな。お前は倅の地金を隱して、それらしう見えるやうな裝をさせてくれ よ。』とサンチョーは言つた。

『お前さんが錢さへ送りや、私アお前さんの氣に入るやうに倅を仕立てますぞい。』とテレサは言 つた。

『それぢや、私等は娘を伯爵の奥樣にすることに折り合うたのぢやな。』とサンチョーは言つた。

『娘を伯爵樣の奥樣にする日は、私にはあれの葬らひ日と同じことぢや。けれど重ねて言ふがお 前さんの好きなやうにしなされ、わたし等女は亭主に從はにやならん重荷を負うて生れたものぢ

や、たとへ亭主が犬であらうと。』かう言つて彼女は、既にそのサンチカが死んで葬られてしまつたかのやうに、大真面目に泣き出した。

サンチョーは、その娘は必ず伯爵夫人にせねばならぬのだが、出來るだけ長く延ばすことにしようと言つて、女房を慰めた。こゝで彼等の會話は終つた。そしてサンチョーはドン・キホーテに逢つて出發の準備をしようとて戻つて行つた。

## 第六章　ドン・キホーテとその姪及び家婢との間に起りし事ども。これこの物語中に於ける最も重要な章の一つである。

サンチョー・パンザとその女房テレサ・カスカジョーが以上のやうな見當違ひの會話をやつて居る間に、ドン・キホーテの姪と家婢とも懶けては居なかつた。彼女等はその叔父であり主人である人が自分等を三度出し抜いて又もや、女たちに取つては不仕合せな武者修業の途に上らうとしてゐることを、いろ〳〵の兆候から嗅ぎ出してゐたのである。彼女等は出來るだけのあらゆる手段を盡して、そんな不仕合せな目論見を棄てさせやうと努めた。しかしそれは凡て無人境中の說敎であり冷へた鐵を鎚つことであつた。それに拘らずいろ〳〵と說いた中に、家婢は彼にかう言つた、『ほんとに旦那樣、もし貴方樣がいまだにじツとお家に落ち着いてござらずに、浮ばぬ亡靈のやうに山々谷々をうろつき廻つて、世間でいふ冒險を、けれど私に言はせれば不仕合せを見付けに行くのを思ひ切りなさんやうなら、何うかしてお助け下さいませと、大きな聲で神樣や王樣へ



歎願致しますぞいの。』

これに對してドン・キホーテは答へた、『家婢や、お前の憩へに對して神樣が何ういふ答へを下さるか、また王樣が何ういふ答へを下さるか、私は知らん。たゞ私の知つてをるのは、もし私が王樣であつたら、日々に言上して來る數限りない馬鹿な歎願には答へをすまいといふことぢや。何故といふに、王樣たちの忍ばれる數多い面倒の中で一番のものは、殘らずのことに耳を貸して殘らずのことに答へるやうに强られることぢや。それ故私は私の事件のやうなもので王樣を煩はすのはお氣の毒でならんわい。』

そこで家婢は言つた、『旦那樣、何うでござりましよ、國王樣のお宮には騎士はおるでにならんのでしよか？』

『そりや居るよ、』とドン・キホーテは答へた、『而かも澤山居るわい。王侯の威嚴を飾り、また更に大なる國王の尊嚴を高からしめるには、騎士を置くのが當り前ぢや。』

『それでは貴方樣も、一足も動かずにお宮の中の王樣やお大名樣へ御奉公なさる、さういふ方の仲間にお成りなさるわけには行きませんか？』と彼女は言つた。

『お前、よう考へるがよい、』とドン・キホーテは言つた。『殘らずの騎士が宮人には成れんし、殘

らずの宮人たちが武者修業者にもなれん、またさうするにも及ばんのぢや。世には様々の種類がなうてはならぬ。そして私等は皆騎士ではあるが、銘々皆大いに違うて居る。宮人たちは、その部屋をも出ず宮廷の閾をも越るずに地圖を眺めて世界を徘徊するのぢやから、それには一文の費へもかゝらず、また暑さや寒さや飢えや渇きを忍ぶこともないのぢや。しかし私等本當の武者修業者たちは、晝も夜も徒歩や馬上で、日や寒さや風や不測の天候に曝らされて、自分のこの足で洽く世界の廣さを計るのぢや。また私等はたゞ繪にある敵ではなく、その眞實本物の姿に出遇ふのぢや。そしてどんな危險に際しても、いかなる場合に臨んでも、一騎打ちの兒どもらしい様々の規定や掟には些とも構はず敵にぶツつかるのぢや。敵手が短かい槍なり劍なりを持つて居らうと居るまいと、またその身の廻りに寶物なり何かの秘密な計略を着けて居らうと居るまいと、また日光が等分に割り當てられて居らうと居るまいと、尋常の試合を始めるに當つては、雙方とも眼に日光を受ける不利益に陷らぬやうに位置を決める故に言ふ その他一人と一人との本式の仕合に守られる様々の細かい點がどうあらうともお構ひなしぢや。こんなことに就いてはお前たちは何も知るまいが私は知つてをる。その外お前等に聞かせたいのは、本當の武者修業者はたとへ十人の巨人に出逢うて、しかもそいつ等の頭が雲に達するばかりか雲を突き破り、銘々高い二つの塔を脚にして、その腕は大船の帆柱の如く、その眼は巨大な水車に似て、しかも



硝子の熔爐よりもぎら〳〵と光つて居らうとも、決して元氣を落してはならんといふことぢや。それどころか、泰然自若として勢ひ猛くそやつ等に攻めかゝりぶツ付かつて、出來るなら片ツ端から打ち負かし殺さねばならぬのぢや。たとへそやつ等は、あの金剛石よりも堅いといふ或る魚の甲羅を鎧に纏ひ、劍の代りにはダマスコの鋼鐵作の鋭い刃物か、それともまた、私が一度ならず見たことのあるやうにやはり鋼鐵の五寸釘を一面に打ち込んだ棍棒を振つて來ようともぢや。家婢よ、私は騎士のうちにも彼と此との間には大差のあることをお前に知らさうとてかう言ふのぢや。そこでもしこの後の方のものを、いや本當に言へば第一等の武者修業者を一段まさると思はぬ君主がなかつたら至極よからう。何故といふに、私等がそんな武者修業者の物語の中で讀む通り、その人等のうちには、たゞ一國のみか數多の國々を救うた者が居るからのう。』

ここで姪は叫んだ、『まア、叔父さん。貴方の仰有る武者修業のことは皆作りごとの物語ですよ、あんな物語は、もしまだ燃やしてないのなら、どれもこれも懺悔衣（宗教裁判にて悔改の者を着せてやるとか、風儀を亂す忌はしい者ぢやと知れるやうな記號をつけてやつてもよいのですよ。』

『これ〳〵ッ、』とドン・キホーテは言つた、『お前がもし私の骨肉の姉妹の娘といふ近しい姪でなかつたら、今言うたその不敵の言葉に對して、私は全世界に響き渡るやうな懲罰を加へてやるの

ちやぞ。これ！　せい〳〵一ダースの絲卷の取り扱ひ方も知らんやうなま若いお轉婆娘が、おこがましくも舌を操つて武者修業者の物語を彼是言ふことが出來るかい？　もしこんなことをあのアマディス殿が聞かれたら何と言はれうぞ？　しかしあの人は、あの時代で一番謙讓な心を有つた慇懃な騎士で、その上處女の非常な保護者であつたから、きつとお前を赦されたらう。ぢやが、もしやお前の言葉を聞いたらお前をそのまゝに差し措かなんだやうな騎士は幾人も居る。騎士は殘らず慇懃で丁寧ではないからの。中には性質の惡い惡黨も居るのぢや。また自ら紳士と名乘るものが、どの點から見てもさうとは必ずしも言へぬのぢや。或るものは純金、あるものは贋金で、總じて紳士のやうには見えるが、しかし殘らずが眞僞を分つ試金石に堪へ得るものではない。身分卑しい人で無理にも紳士として通らうと死物狂ひになつてをる者もあれば、また身分の高い紳士で、身分の卑しい者と見られたうてならぬらしく思はれるやうな人もある。前の者は野心や美德で身を立て、後の者は勇氣の缺乏や不德から身を貶すのぢや。そこでこの二種類の紳士を見分けるには、經驗や判別力が入り用ぢや、その通り名目は似寄つて居るが行ひは違ふのぢや。』

『ほんとにまア！』と姪は言つた、『叔父さん、貴方は――まさかの時には說敎壇にも上れるし路傍の說敎も出來なさるほどに、そんなにう物を知つて居られますのに――、それでもやツぱり



そんな大きな妄想や見えすいた妄念に耽つて、そのお年でありながら元氣者のつもりで、御病氣でありながら強いつもりで、御自分は年で曲つて居られながら曲つたものを直さうとしたり、取り分け御自分が騎士でもないのに騎士ぢやと思うたりなさるのは、何うしたことでせう。それも生れが紳士なら兎も角、貧乏人ではとてもそんなものにはなれぬのに。』

『姪よ、お前の言ふことにも大層尤もなところがある、』とドン・キホーテは答へた、『その血統のことに就いてはお前を吃驚させるやうなことを私は知つて居るが、しかし人の物と神の物をごツちやにする恐れがあるから、差し控へて置く。さて、お前たち、（私の言ふことをよう聞くがよい）、凡そ世間の血統は四種類に分けられるのぢや。それはかうぢや、卑しい源からだん〳〵と繁り廣がつて、遂に無上の高位に達したもの。高い源から出てその地位を保ち、今尙その元の高位を動かさずに保つてをるもの。やツぱり高位の出でありながら、だん〳〵とその源の大きさを縮め減らして、丁度ピラミッドの尖端のやうに、遂に無うなつてしまふもの、その尖端はその土臺や礎に比べれば無いも同然ぢや。その次ぎには――そして.これが一番數の多いものぢやが――その源も名高うなく、その中途も顯はれず、そしてつまり並の平民の血統のやうに、名もなく終るといふものぢや。この第一のもの卽ち卑しい源から起つて高位に昇り、今尙それを保つて居る

ものは、あのオットマン家が一つの實例を示してをる。この一家は低い卑しい羊飼ひをその先祖として、遂に今日私等が見るやうな高位に達したのぢや。第二種の血統卽ち高位から始まつて今尙それを進めもせずに保つて居るもの、實例としては、數多の王侯たちがある。その人々は位を承け繼いでその承け繼いだものに減らしも加へもせず自分の領分内で無事平穩にその位を保つてをるのぢや。大に始まつて小に終つたものには幾千の實例がある。エヂプトのフハラオ家やトレミー家、ローマのシーザー家、その他無數の王侯君主、メディア人、アッシリア人、ペルシア人、ギリシア人及び野蠻人等の全群(こんな言葉を當てゝよければ)があるのぢや。こんな血統や王位は一點となつて無に歸し、その後裔もその先祖と同樣亡びて居る。今日それ等の子孫の者を見付けることは出來まい。またとへそれを見付け出したところで、低い卑しい身分で居らうわい。平民の血統に就いては私は何の言ふことがない。たゞ、彼等は單に人間の頭數を殖やすだけの足しになつて、それ以上少しも名譽名聲を揚げるやうなえらいところはないと言ふに過ぎぬ。私が今言うたことからして、お前たち愚か者はの、かう推量するがよい、血統の混雜して居ることは大變なものぢやといふこと、自分の美德か財產か恩惠を施すかによつて偉い優れた者ぢやと世に示す者だけが、本當にさう見えるのぢやと。私が今美德や財產や慈悲のことを言ふのは、不德な



偉人は惡德の大標本になるし、また慈悲のない金滿家はほんの吝な乞食に過ぎんからぢや。一體金持ちが幸福なわけは、唯金を有つて居るからではない、却つてそれを使ふからぢや。それも自分の氣儘に使ふのでなく、それを良く使ふ途を知つてのことぢや。そこで貧しい紳士は自ら紳士ぢやといふことを示す途がない。それはたゞ、高慢でなく傲岸でなく氣むづかしくなく、德厚く愛嬌よく、上品で丁寧で行儀よく親切で、殊に第一に慈悲ぶかいといふことによつて示すばかりぢや、快く貧乏人に鐚錢二文を施せば、その人は鐘を鳴して施しを撒き散らす人に劣らず慈悲深い者ぢや。そこで今私が擧げた美德をその人が備へてゐると誰れでも、感づく人なら、たとへその人をよく知らん人でも、生れの良いお方ぢやと見損じることはない。もしそれがさうでなかつたら不思議ぢや。讃辭は常に美德の應報ぢや。有德の人々は決して賞讃を受けぬことはない。お前たち、世には二つの途がある。人々はそれに依つて富や名譽に達することが出來る。その一つは文の途、その二つは武の途ぢや。私は身體の作りからして文よりも武の方ぢや。そして武を好むところから判斷すると、マーズ星の下で生れたのぢや。それ故私はどツちかといへば、その武の途を行かねばならぬことになつてをるのぢや。そこで私は全世界に逆うてもこの途を進まねばならんのぢや。お前たちが如何にかき口說けばとて、天が欲し運命が命じ道理が求め、しかも何よ

り拙者自身の好みの向ふことを止めさせうとしても無駄なことぢや。拙者は武者修業者に附き物の苦勞は限りないものぢやと承知して居るが、それと共にまた、これに依つて得られる無限の祝福も知つてをる。拙者は美德の徑の非常に狹いことも惡德の路の廣く廣やかなことも承知してをる。拙者は二つの路の果てや目ざすところの異なつてをるのも承知してをる。廣く容易い惡德の路は死に終り、狹い困難な美德の路は生命に終るのぢや。しかもそれは果敢ない生命でなく、盡きぬ生命ぢや。拙者は、あのカスティルの大詩人の歌うた通り——

かゝる險しき徑を辿りてこそ
麓にためらひし八々の達せざる
不死の高嶺には登るべけれ

と承知してをるのぢや。』

『あれまア！』と姪は叫んだ、『旦那樣は詩人でもおありなさるよ！　あの方は何でも知つてござるし、何でもお出來なさるよ。ほんとに叔父さんは、もし左官屋さんになられたら、籠のやうに樂々と家でもお拵へなさるよ。』

『その通りぢや、姪よ、』とドン・キホーテは答へた、『もしこんな騎士道の思ひにあらゆる心力を



注ぎこまなんだら、私の出來ぬものは何一つなかつたらうぞ。どんな玩具でも私の手で出來んのはなかつたらうし、取り分け籠や爪楊枝などはの。』

丁度この時表戶を敲く音が聞えて來た。何方ですかと訊ねると、私でござりますとサンチョー・パンザが答へた。家婢はそれと知るや否や、彼を見まいとて走り去つて身を隱した。それほど彼を忌はしがつてゐた。姪は彼を內へ入れた。すると主人のドン・キホーテは兩手を開いて彼を迎へに出た。そして二人はドン・キホーテの居間へ閉ぢ籠つて、其處で彼等は前のに劣らぬ會話をしたのである。

## 第七章　ドン・キホーテとその從士との間に起りしことども、及び甚だ著しきその他の出來事。

家嬶はサンチョーパンザがその主人と二人きりで部屋に閉ぢ籠るのを見るや否や、彼等が何をしようとして居るかをそれと推量した。そしてこの相談の果ては三度目の廻國を企てることに決まるであらうと思つたので、彼女は外套を取つて、非常に心配し氣を落してサムソン・カラスコー得業士を捜しに走り出た。それはこの人はなか〳〵辯の利く人で、また主人の新しい友達であるから、この人ならば主人を說き付けてそんな氣違ひじみた考へを止めさせることが出來るであらうと思つたからであつた。行つて見ると、彼は自分の家の內庭を散步してゐた。その姿を見るや否や、家嬶は汗を流し〳〵慌てふためいて、その足下へ平伏した。

カラスコーは彼女が非常に氣を落として狼狽してゐるのを見て言つた、『何うしました、お上さん？　何事が起つたのです？　まるで正氣がないやうですよ。』



『何でもございません、サムソン樣、』と家嬶は言つた、『たゞ私の旦那樣が跳び出しなさるのです。きつと跳び出しなさるのです。』

『何の邊へ跳び出して居りますぞ、お上さん？　旦那さんの身體の何處かゞ破裂でもしたのですか？』とサムソンは訊ねた。

『いえ、いつもの狂氣の戶口へ飛び出さうとしてござるのですよ、』と彼女は答へた、『もし、得業士樣、旦那樣はまた跳び出して（これで三度目になりませう）、御自分で運ちやと言うてござるものを世界中あさつて歩きなされますのぢや。何故そんな名前をあんなものに付けなさるか私には分りませんがの。初めての時は身體ぢう殴られて驢馬の背中に横づけに乘せられてお歸りなされ、二番目の時は牛車の上の檻に閉め込まれてお歸りなされました。それを自分では魔術にかけられてをるものと思ひこんで居られましたよ。そしてお可哀さうに、生みのお袋でも見分けがつかんやうな樣子になつてござりましたよ。そりや痩せて、黃色になつて、眼は骨の奥へ落ちこんで、それぢやから、ほんの些つとでも太らせて上げるには六百から上の卵が要りましたぞい。そりや神樣も世間の人も知つてござるし、まあたうちの牝鷄どもゝ私に嘘はつかせません。』

『それは私もさうあらうと思ひます、』と得業士は答へた、『まア お宅の牝鷄どもはあゝ性質が良く

て太つてお負けに育ちが良いから、たとへその爲めに身が破裂したところで、白を黒とは言ひませんな。まア兎に角、お上さん、それだけですかな。ドン・キホーテさんが跳び出されさうぢやと氣遣はれることだけで、他にや何にもありませんかな？』

『え、他には、貴方樣。』と彼女は言つた。

『そんなら心配なさるな、』と得業士は答へた、『安心して家へ歸つて、何か私の朝飯に暖いものを拵へて置いて戴きたい。そして歸る途すがら、もしお前さんが知つてゐなさるなら、サンタ・アポロニアのお禱りを唱へよと仰有りますかい？　もし私の旦那樣が齒痛を患うてござるならあのお祈りで宜しうござりませうけれど、旦那樣の患うてござるのはお頭でござりますぞい。』（サンタアポロニアある時聖母に齒痛を治しかばこの齒痛を起らざらしめたまふとの傳說がある）

『お上さん、私アちやんと承知してさう言ひますのぢや。まア私と議論はせずにお出でなさい。御存じの通り私はサラマンカ大學の得業生で、これ以上得業生になりやうはありませんからの。』とカラスコーは答へた。そこで家婢は歸つて行つた。得業士は直ぐさま牧師補に逢ひに行つた。そして彼と打ち合せるところがあつた。それは適當の場合に語られるであらう。



一方にはドン・キホーテとサンチョーとが一室に閉ぢ籠つて議論をしてゐた。それはこの物語が非常に精細綿密に記してゐるところである。サンチョーは主人に言つた、『旦那樣、私ア貴方樣のお好きなところへ何處へでもお供が出來ますやうに嬶を焚きつけて參りましたぞい。』

『說きつけて、と言ふものぢや。サンチョー。焚きつけてぢやないわい。』とドン・キホーテは言つた。

『私の言ふことが分りさへしたら、私の言葉を直さんやうにして下されと、私の覺えて居るだけでも、もう一度か二度貴方樣へお願ひしましたぞ。そしてもし分らん時にや「サンチョーよ」とでも「惡魔」とでも「お前の言ふことは分らん」とでも言うて下されと申しましたぞ。それでも私の言うことがはツきりせんなら、その時にや私の言葉を直してもようござります。私アほんとに行し易いのぢやから――』

『サンチョー、お前の言ふことは分らんぞよ、』とすぐ樣ドン・キホーテは言つた、『その「私はほんとに行し易い」といふのは何の事やら分らんがの。』

『「ほんとに行し易い」とは、私がこの通りこんなぢやといふことでござりますわい。』とサンチョーは答へた。

『ます〳〵分らんぞ。』とドン・キホーテは言つた。

『へえ、これでもお分りなされんなら、私ア何う言うてよいか分りませんわい。私アもう知りません、困つたこッちや。』とサンチョーは言つた。

『あハー、やッと分つた。』とドン・キホーテは言つた、『お前はほんとに御し易く扱ひ易くすなほなので、私がお前に言ふことは聽き、私が敎へることには從ふといふ積りぢやな。』

『きつとまア、』とサンチョーは言つた、『貴方樣は初めから私の言ふことが分つて居つて、私の心を知つてござるくせに、私がまだ〳〵二三十も間違ひを言ふのを聞かうとて私を困らせなさつたのぢやな。』

『さうかも知れんの、』ドン・キホーテは答へた、『ぢやが本筋へ歸つて、一體テレサは何と言うたのぢや?』

『テレサの申しますにや、』とサンチョーは答へた、『私が貴方樣としッかり約定を結ぶがよい、そして「書付にものを言はせて髭はじッとさせとけ言い甲斐あれば言葉はいらぬ」、一結ぶ者は口いさかひをせん」し、また「二つ口約束するよりか一つ手に入れる方がまし」ぢやと言ひますわい。女子の助言といふものは大したもんぢやございませんが、それを用ひん男は阿呆ぢやと思ひますわい。』



『私もさう思ふわい、』とドン・キホーテは言つた、『先きを續けい、サンチョーよ、話を進めい。今日はお前は眞珠の言葉を吐く〳〵のウ。』

『實はかうでござります、』とサンチョーは續けた、『私よりも貴方樣がよう知つてござる通り、私等は殘らず死なにやならん者でござります。今日あつて明日なき身で、母羊が屠殺者の所へ行けば小羊もまた直ぐでござります。そこで何人でもこの世では神樣が下さるより餘計の壽命は望まれません。死神は聾でござりますから、これが私等の壽命の戸を敲きに來たら、もうそれこそ百年目でござります。祈つても力づくでも王笏でも僧正樣の冠でも、それを去なせることは出來ません。そりや世間でいつも話しにする通りで、またお說敎壇から毎日々々說敎なさる通りでござりますわい。』

『そりや誠にその通りぢや、』とドン・キホーテは言つた、『お前は何處へ潛付けようとして居るのか私には解せんわい。』

『私が潛つけようとしとりますところはの、』とサンチョーは言つた、『貴方樣が幾らなり定りの給金を私へ決めて下さるやうにといふことでござりますよ。私が貴方樣へ御奉公してをります間月々に、そしてそれは貴方樣の田地の中から拂うて下さるやうに願ひたいので。私ア遲れて來たり、

來やうが惡かつたり、とう〳〵まるで來なんだりするやうな御褒美を當にする氣はござりませんからの。何卒神樣、何分よろしく御願ひ申します。つまり私ア多かれ少かれ幾ら給金が貰へるか知りたいので、牝鷄は一つの卵でも暖めるし、塵も積れば山となる、それぢやから少しでも手に入る間は何も滅りはしませんからの。ほんとに貴方樣が御約束の島を（私アそれを本當とも思うとらにや當にもしとりませんが）下さるやうなことにでもなつたら、私アあんまり御恩を忘れたり慾ばつたりは致しません。その島の上り高を見積つて、私の給金の高を上げて差し引いて頂くことは結構でござりますわい。』

『のう、サンチョーよ、』とドン・キホーテは答へた、『時によつては「上り高」といふのは「高を上げる」と同じことになるかも知れんの。』

『ほんとに、』とサンチョーは言つた、『私ア高を上げてと言はずに「上り高から」と申し上げにやならなんだのぢや。けれどそりや構ふこたアござりませんわい、旦那樣に分つたのぢやから。』

『そりやもう分り過ぎる位分つて、お前の心のどん底まで見抜いたぞよ、』とドン・キホーテは言つた、『そしてお前がその數限りない諺の征矢を放つてをるその的まで知り抜いたのぢや。これ、サンチョー、もし私が今まで讀んだ武者修業の物語の中に、その從士等が月給なり年俸なりを取つて居つたと、ちよツと仄めかすだけでも書き記してあつたなら、私は喜んで卽座にお前の給金を決めてやりたいのぢや。しかし私はそれ等の物語を殘らず、いやその大部分を讀んだけれども、一人の武者修者も自分の從士に一定の給金を定めたといふことを讀んだ覺えがないわい。たゞ私に分つてをるのは、從士等は褒賞によつて、たち設けて居らいでも、その主人に幸運が向いてさへ來れば、褒美として島とかそれに掛け合ふ物とか、少くも何かの稱號や權力を與へられたものぢや。サンチョーよ、もしお前がかやうな望みやその他の好餌によつて、いま一度私に奉公してくれるなら結構ぢや。しかし武者修業道の昔からの習慣を私が亂したり破つたりするものと推量するのは、そりや全く途方もないことぢや。そこで、のうサンチョー、お前の家へ歸つて私の考へを女房のテレサへ話すんぢや。そしてもしあの女もお前も褒美で奉公したいのなら、bene quidem ぢや。もしさうでないのなら、私等はもとの友達にならう。鳩小舍に餌があれば、そこに鳩が居るのぢやからの。またお前は「惡い持ち物よりも善い望みの方がよい」し「惡い褒美よりも善い難澁がまし」と心に留めて居るがよい。サンチョーよ、私はお前に劣らぬ位諺の雨を降らすことが出來ると知らせたいので、かういふのぢや。兎に角私の言ひたいことはかうぢや、もしお前が褒美で私に奉公し私と同じ幸運を追ひ

たいと思はんのなら、おさらば御機嫌ようちや。私はもツと柔順で我慢づよくて、お前のやうに鈍くてお喋舌でない家來を幾らでも見付けようからの。』

サンチョーは主人の決心の堅いしツかりした言葉を聞くと、彼の一天は俄にかき曇つて心の翼は萎れた。彼は何んなことがあらうとも、自分の主人は自分を伴れずには行かぬであらうと確信してゐたからであつた。そして彼が默りこんで鬱いでじツと立つてゐると、そこへサムソン・カラスコーがこゝの姪や家婢と共に入つて來た。この女たちはサムソンが何んな辯舌を以て主人の武者修業に行く考へを飜へさせるか、それを聞きたくて堪らなかつたのである。この大剽輕者のサムソン・カラスコーは進み寄つて、この前にしたやうに主人を抱擁して、そして大きな聲で言つた、

『あゝ武者修業者の花よ！　あゝ輝き渡る武運の光よ！　あゝスペイン國の名譽よ鏡よ！　何うぞ全智全能の神はその無限の力を以て、貴方樣の三度目の御出遊を妨げ邪魔しようとする人々を、自らの計略の迷路から出られぬやうに成し給ふやうに。またその人等がこの上も無く願うてをることを成就させ給はぬやうに。』そして今度は家婢の方へ向いて言つた、『お前さん、もうそのサンタ・アポロニアの祈りを唱へるのは止めなさつても宜しい。ドン・キホーテ殿がその新たな高き目論見を實行なさるといふことは、日月星辰の堅い御決心と見えますからな。そしてこの騎士に、



その強い武力や勇氣の美德を曲げて抑へて居てはいけませんと說き且つ勸めなんだら、私は自分の本心に重い苛責を受けることになりませう。何故といふに、この方が怠つてゐなされば、その爲めに不義を直し孤兒を保護し處女を尊敬し寡婦を助け人妻を扶助するなど、その他武者修業の道に當然附屬し隷屬してをる特有の諸事をこの世界から詐取して居られることになりますからな。そこで、さア、美しい勇ましいわが主君ドン・キホーテ樣、どうぞ貴方樣には明日と仰有らず今日唯今御發足なされるが宜しいと存じます。もしや貴方樣の御本意を實行なさるに何なり不足のものがござりましたら、私は卽座に自分の身でなり財布でなりと御入用のものは用立てませう、そしてもしや御家來として貴方樣に御仕へ申すやうな御用命でもござりますれば、私は勿怪の仕合せと有難くお受け致しませう。』

これを聞いてドン・キホーテはサンチョーに向き直りながら言つた、『サンチョーよ、從士はあり餘るほどにあつて、私の爲めにはちやんと豫備があると、私がお前に言はなんだことかい？　今從士にならうと言はツしやる人を見い。これこそ名高いサムソン・カラスコー得業士その人ぢや。これかのサラマンカ大學校庭の永への歡喜悅樂にして、體は健全に、智慮は深く、寒さにも暑さにも饑ゑにも渴きにも忍耐強く、武者修業者の從士となるには何不足なく一切の資格を備へ

た仁ぢや！　ぢやがこればつかりは神かけて相成らん。私は自分の好みを滿たさうとて、この文學の柱、學術の器を搖り動かし碎いて、この麗しく自由なる藝術の亭々たる月桂樹を切り倒してはならんのぢや。どうぞこの今の世のサムソン樣はその生れた土地に止まられて、その鄕土の譽れとなり、且つはまた年老いた御兩親の白髮の譽れともなられるがよい。拙者はサンチョーが供をしてくれぬとあれば、どんな從士でも手當り次第ので間に合ひますからの。』

『お伴して上げますぞい、』とサンチョーは深く感動し眼に涙を浮べて言つた。『私の旦那樣、』と彼はつゞけた、『あの「パンを喰うてしまへば仲間は散る」といふことア私には言うて貰ひますまいぜ。それにな、私ア恩知らずの先祖から出てはをりませんぞ。私の先祖のパンザはどんなんぢやか、世間の人は殘らず、取り分け私の村の人たちは知つて居りますわい。その上また旦那樣の御親切なお言葉や行ひから、貴方樣のお情ぶかいことアちやんと覺えて承知して居りますわい。そして私が少々給金ぎめのことを申しましたのはな、ありや唯嬶を喜ばせうばつかりでござりました。あいつは何か人にせがみ立てると、大槌で桶に箍を打ちこむよりも立派に自分の思ふ壺へぶち込みますのぢや。けれどやつぱり男は男、女は女ぢや。私ア何處へ行つても男一疋に違ひはないから、家でもやつぱり男でしよ、それを間違ひと思ふなら思はして置け。そこでもう何もする



にや及びません、たゞ貴方が御遺言書も追加も揉み消せんやうに書いて置けばよいのぢや、そこで早速出かけましよ。さうすりや、貴方樣を三度目の廻國に出るやうに勸めずに居られんと言はつしやるこのサムソン樣の御心も安まりませうわい。そこで旦那樣、私はまた貴方樣のところへ歸りまして、昔から今まで武者修業樣へ御奉公した殘らずの家來衆のうちで一番といはれる位忠義に律義にお勤め致しますぞよ。』

得業士はサンチョーの言葉使や話し風を聞いて驚きに充された。蓋し彼はこの主人の物語の第一卷を既に讀んでゐたとは言ふものゝ、その中に描き出されてあるほどに、それ程サンチョーが滑稽であるとは夢にも思はなかつたからである。しかし今サンチョーが、「取り消すべからざる遺言書及びその追加」と言ふ代りに「揉み消してならぬ」遺言書やその追加と言ふのを聞くに至つて、その本で讀んだことを殘らず信じた。そしてこの主從のやうなこんな氣違ひは古今に絕してゐると思つた。遂にドン・キホーテとサンチョーとは相擁して仲直りをした。そして今や彼等の神託となつた大先生カラスコーの忠告や保證によつて、それから三日目に出發することに決定した。その時までには旅行に必要なものは凡て用意が出來ようし、またドン・キホーテが是非手に入れなければならぬとした包み兜も手に入る

であらうからであつた。サムソンはその兜の方を引き受けた。それは彼の友達に兜を有つてゐる者があつて、よもや拒みはすまいと思つたからであつた。尤もその兜は澤出しの鋼鐵のやうに光つて綺麗ではなくて、寧ろ錆や黴で煤色を呈してゐた。

家婢と姪と二人してこの得業士の上に注いだ呪ひは數限りもなかつた。女たちは自ら髪を引き捲り顔を引ツ抓いて、ひと頃流行した傭ひ泣き女の格好で、自分等の叔父たり主人たる人の出發に對して、宛ら葬式でゝもあるかのやうに泣き聲をあげた。ドン・キホーテを今一度跳び出させるやうに說き付けたサムソンの考へは、この物語が後になつて述べるところと關係がある。それは殘らず、サムソンがこの問題に就いて前以て打ち合せをした牧師補や理髪師の勸めに基いてゐたのである。やがて遂にその三日の間に、ドン・キホーテとサンチョーとは、必要と思はれるものを準備した。そしてサンチョーはその女房を、ドン・キホーテはその姪や家婢やを、銘々なだめすかして、日の暮れ方に何人にも見られずにトボソへ向つて出發した。たゞ得業士だけは彼等を村から一里ばかり見送つて行つた方がよいと思つてついて行つた。ドン・キホーテはその順良なロシナンテに、サンチョーはその驢染のダップルに打ち乘つた。そしてサンチョーの鞍嚢には樣々の食糧品が充たされ、その財布には急場の用意にとてドン・キホーテから渡された金があつた。サムソ



ンはドン・キホーテを抱擁して、善いにつけ悪いにつけ音づれをして呉れるやうにと賴んだ。それはつまり、友情の掟に從つてその喜びは共に喜びその悲みは共に悲みたいからであつた。ドン・キホーテはさうしようと彼に約束した。そこでサムソンは村へ歸つた。そして他の二人はエル・トボソの大都會へと途を取つた。

## 第八章

にはドン・キホーテがその婦人ドゥルシネア・デル・トボソに逢ひに行く途すがら、彼の身にふりかゝつた事を記す。

『全能の神こそ有り難けれ！』とハメット・ベネンゼリはこの八章の初めに於いて言つてゐる。『神こそ有り難けれ！』と三度彼は繰り返してゐる。そして彼は言ふ、自分がこんな感謝の言葉を發するのは今やドン・キホーテとサンチョーとを美事に出遊せしめるに至り、且つこの面白き物語の讀者等はドン・キホーテとその從士との功名手柄やをかしみが今や方に來るものと待つて居ることを考へるからであると。そして彼はまた讀者を促して、この工夫に富める紳士の以前の功名話は忘れて、將來のものに眼をつけるやうにと言つてゐる。先きのものはモンティエルの野原で起つたが、今度のは今方にトボソへの途上で起らうとしてゐる。作者がやがて見せてくれるといふものゝことを思へば、この要求も蓋し過大ではない。而して彼はかう說きすゝめてゐる——

ドン・キホーテとサンチョーとが二人きりになり、サムソンが別れて行つてしまふや否や、ロシ



ナンテは嘶き出しダップルは溜息をし出した。これは騎士にも從士にも甚だ仕合せよき吉兆瑞祥として受け取られた。尤もその眞相を打ち明けると、ダップルの溜息や鳴き聲は痩馬の嘶きよりも高かつたのである。これによつてサンチョーは、自分の幸運が主人のを凌駕し乘り越すものと思つた。それは恐らくサンチョーが心得てゐたらしい公平な占星術によつたものであつた。尤もこの物語はそれに就いて何も語つてゐない。たゞ言へるだけのことを言へば、彼は躓いたり倒れたりしたときに、出て來なかつたらよかつたにと言つたといふ話である。といふのは、躓いたり倒れたりしたのでは、たゞ靴を破つたり肋骨を挫いたりするだけであるからである。そして彼は馬鹿ではあつたが、それを見逃がすほどではなかつた。

ドン・キホーテは言つた、『おい、サンチョーや、私等がかうして行くうちに日は暮れて行くし、眞暗にならんうちに、日のあるうちにはとてもトボソへは着けまいな。一體私はあそこへ行かぬうちはどんな冒險にもかゝり合ふまいと心を決めてをるのぢや。あそこであの無比なるドゥルシネアから寬大な許可や祝福を得るであらう。その許可を得たら何んな危險な冒險でも片付て芽出度い結末へ持つて行くことゝ、當てにもして居るし確かでもあるのぢや。武者修業はこの世の中で、その婦人に庇はれて居ると思ふ位勇氣を益すことはないからの。』

『さうでござりましよな。』とサンチョーは答へた、『けれど貴方樣があの人と話したり逢ふたりなさるのはむづかしかろと思ひますわい。とにかく何處で貴方樣があの人から祝福をお受けなさることが出來ますか、むづかしかろと思ひますのぢや。尤もそれにや、あすこの中庭の塀越しにあの人が祝福を投げてくれでもすればよござりますがな。この前私が貴方樣のモレナ山でなされた痴けごとや氣違ひごとを書いた御手紙を持つてあの人のところへ行きました時にも、私はその中庭であの人を見かけましたがな。』

『お前はそれを庭の塀ぢやと思うたのか？　サンチョー。』とドン・キホーテは言つた、『お前は、あの讃めても讃めても讃め盡きぬしとやかさ美しさを、何處で何のところで見たのぢや？　それはさぞかし立派な奥ゆかしい宮殿の、渡殿か、廻廊か、柱廊かであつたらうの。』

『そりや大方そんなもの殘らずでござりましたろな。』とサンチョーは答へた、『けれど、私の覺え違ひでなけりや、塀のやうに見えましたわい。』

『兎にも角にも、あそこへ行かう、サンチョー。』とドン・キホーテは言つた、『あの婦人を見る分にや、塀越しであらうと、戸の隙間からであらうと、庭の格子越しであらうと同じことぢやからの。私の眼にうつるあの婦人の照り輝く光は、私の智慮を明らかにし私の勇



氣を勵まして、私を智に於いても勇に於いても天下絶倫としてくれるからぢや。』

『はてナ、打ち明けて申し上げますとな、旦那樣、』とサンチョーは言つた、『私があのドゥルシニア・デル・トボソ姫のお日樣を拜みました時はな、些とも光をあたへたり投げたりするほどにや光つては居りませなんだよ。そりやきツと、こなひだもお話し致しましたやうに、あのお姫樣が麥を篩うてござつたので、それで立ち卷いてゐたひどい埃が雲のやうにあの方のお顏をかげらせてをりましたんぢやな。』

『何ちや！　サンチョー、』とドン・キホーテは言つた、『お前は今だに頑張つてあのドゥルシネア姫が麥を篩うて居られたのぢやと、言うたり考へたり思ひ込んだり言ひ張つたりするのか？　そんな端たない仕事は身分の高い方々のお仕事とは雲泥の相違があるし、またあらねばならんのぢや。身分の高い方々は、遙か隔つて見てもその御身分の分るやうな、もツと違つた御職務御事業をなさるやうに出來て居られるし、また取つて置きにしてあるのぢや。あゝサンチョー、お前はわが國の詩人が、水晶宮の中で四人の女神たちの仕事をしてゐなさるところを描いて居る詩の文句を忘れたのぢやな。その女神たちは懷しいテーガス河から上つて綠の草原に坐つて、そして錦の布を縫ひ取りされるのぢや。その錦の布が、金や絹や眞珠などで如何に精巧に織つてあるかは、

あの天才詩人が精しく述べてをるわい。そこでかういふ風なものが、お前のお目にかゝつた折にドゥルシネア姫のなされてござつたお仕事であつた筈ぢや。しかし拙者のものと言へば何事をも惡くせうとする惡い魔術使ひの憎しみが、凡て拙者に喜びを與へる物を變化させて、あられもない形にしてしまふのぢや。そこで今印刷されて居ると噂に聞く拙者の事蹟を書いた物語の中にも、ひよいとするとその作者が拙者に敵對する賢人である爲めに、一つの眞理に百千の嘘を混ぜ實錄物語の本筋には何の關係もない樣々の事柄を面白半分に書き並べなどして、白を黑と言ひくるめてをるであらうと、それが心配ぢや。あゝ嫉妬、これは數限りない惡の根元ぢや、また美德を蝕む蟲ぢや！　サンチョーよ、凡ての惡德は何か快樂を伴ふものぢや。しかし嫉妬ばかりは腹立ちと苦々しさと忿怒の外には何も伴はぬわい。』

『私もさう思ひます。』とサンチョーは答へた、『あのサムソン・カラスコー先生が見たと言はツしやつたその私等のことを書いてある譚が物語かの中にや、諺にある通り、私の名譽を埃の中に引きずつて、町をあツちこツち引きずり廻しちやをらんぢやろかと思ひますがの。それでも、眞實誓言、私ア何の魔術使ひの惡口も言うたことはなし、また嫉まれるほど金持ちでもござりませんがな。實は全く、私は少々猾うて、少し惡人くさいところがござりますがな。けれど私の何時



も飾氣のない生地のまゝの馬鹿正直ちう大外套で、殘らずそれを包んでをりますわい。たとへ私にや他に何の取り柄もなうても、何時でも神樣やローマ、カトリック敎會の信仰個條は確かに心から信じて居るし、實際ユダヤ人を一生の仇敵にしてをりますで、それだけでも作者たちは私を可哀さうぢやと思うて書き物の中で善う書いてくれてよささうなものぢや。けれど好きなやうに書くがよい。私ア裸で生れたから、裸かにされても損得なしぢや。そればツかりぢやない、私ア本に書かれて人の手から手へ世界中渡り歩いても、些とも構やせん。好きなやうに私のことを言ふがよい。』

『サンチョーよ、それで思ひ出したが、』とドン・キホーテは答へた、『今の時代に名高い或る詩人にこんなことがあつたのぢや、その人が宮中の婦人たち殘らずに惡口の諷刺文を書いたのぢや。ところがそのうちに一人、宮中の女官であるかないか曖昧なのがあつたので、その人は入れずにまた名前もあげずに置いたのぢや。その婦人は女官等の名簿の中に自分が入つて居らぬのを見て、その詩人に懇へて私を仲間の人たちの中に入れなさらなんだのは、何か私に落度でもござりましたかと訊ねたのぢや。そして必ず私の諷刺文も書いてその增補の部に入れて下さい、さうして下さらんなら覺えてゐなされと言うたのぢや。と、その詩人はその賴まれた通りにして、その婦人

のよい評判を少しも殘さず貶したのぢや。するとその婦人は、不評判ながらもとにかく評判を得て滿足したといふことぢや。これと同じやうな羊飼ひの話がある。その羊飼ひは世界の七不思議の一つと評判されて居つたあの名高いディアナの殿堂に放火をした。そしてこれを燃やしてしまうたが、その唯一の目的は、自分の名を未來永劫に殘す爲めであつた。尤もその男の大それた目的が達せられぬやうにと言ふので、その男の名を呼ぶことも、また口や筆でその名前をあげることも嚴禁されたが、しかしやつぱりその男の名前がエロストラッスであつたといふことは、世間に知れて來たのぢや。またこれと同じやうな話がチャールス五世大帝とローマの紳士との上にも起つた。皇帝はあの名高いロトンドーの殿堂（パンテオンのこと）を見たがつて居られたのぢや。その殿堂は昔は「八百萬の神々の宮」と呼ばれて居つた。しかし近頃はもつと良い名前がついて「八百萬の聖者の宮」と呼ばれて居るのぢや。これはローマに殘つてをる異端の建物の中では一番良いもので、その創設者の偉業と壯大との名譽をば、最もよく保存してをるものぢや。その形は蜜柑半藏形で、非常に宏壯で、光線の具合もよい。尤も光線の入れるのはその天井にあるたつた一つの窓、いや寧ろ圓天窓だけぢやがの。そしてその皇帝がこの建物を檢査せられたのもこの天窓からであつたのぢや。一人のローマの紳士が皇帝のお側に立つて、その巧な構造やその大結構や驚く



べき建築の巧妙さなどを說明申し上げた。そして天窓の側を離れてから紳士は皇帝にかう申し上げた、「陛下、私は百千度も、陛下を私の腕にお抱へ申してあそこの天窓から飛び墜ちて、名を千載の後までも殘さうかといふ氣が起りましてございました」と。すると皇帝はかうお答へになつた、「そんな惡い考へを實行せぬのは有り難いぞよ。これからはもう二度とお前の忠義心を試すやうな機會を與へまいぞよ。それ故以後は、朕に物を言ふことも近づくことも差し止めるぞ。』と。そして皇帝はその紳士に澤山な下され物を賜はつて、そのお言葉通りに行はれたのぢや。

『サンチョーよ、この意味はつまり、名譽を得たいといふ望みがなか〳〵力強い誘因になるといふことぢや。お前は一體、あのホラテッスが甲冑を身に纏うたまゝ橋の上からタイバー河のどん底へ落ち込んだわけを知つて居るか？　ムーテッスは何でその手や腕を燒いたのぢや？　あのクルテッスが已むに已まれずローマの眞中に口を開いてゐる渦卷き返る深淵へ飛びこんだのは何の爲めぢや？　ジュリアス・シーザーが豫言されてゐた種々樣々の凶兆を押し切つてルビコン河を渡つたのは何の爲めぢや？　それからもつと近代の實例をあげると、あの慇懃なコルテスの命令の下に勇敢なスペインの人々が新世界でその船に穴を明けて上陸して歸路を斷ち切つたのは何の爲めぢや？　こんな色々樣々の大功名は、昔も今もこの後とても、すべて死なねばならぬ人間が、

その譽ある手柄によつて受くるに足る不死の褒賞と分け前を手に入れようとする功名の働きぢや。尤も吾々天主教の信徒にして武者修業たる者は、現在の束の間の人生で得られる空しい名譽よりも、天の靈界で永久無限につゞく來世の榮光を求めてをるのぢや。この世の名譽は如何に永く續けばとて、いづれはこの世と共に終らねばならぬから、自然定まつた終りを有つて居る。そこでぢや、のうサンチョー。私等は何をしても、私等の奉じて居るキリスト教の定めて居るその繩張を飛び越えてはならんのぢや。私等は巨人の高慢を屠らねばならんのぢや。心の寬さ氣高さで妬みを屠り、泰然自若たる態度によつて忿怒を屠り、食を減じ眠を減じて飽食惰眠を屠り、銘々が心の君と奉つてをる婦人たちに貞節を立て、以て邪淫放逸を屠り、吾々がキリスト信者なる外に名高い騎士となる機會を求めて洽ねく世界を經巡つて身の懶惰を屠らねばならんのぢや。サンチョーよ、かやうなものこそ私等が美名と、もに來る賞讃の絶頂に達する途なのぢや。』

『貴方樣の仰有りましただけのことは、私もよう合點が行きましたぞい。』とサンチョーは言つた、『けれども一つ私に分らんことがござりまする。それを解き放して下さつたら嬉しうござりまする。そりや丁度今私の心に浮んで來ましたのぢや。』

『解いて吳れといふのぢやな、サンチョー、』とドン・キホーテは言つた、『まア〳〵言うて見い。



私に及ぶだけは答へるぞよ。』

『旦那樣、何うでござりましよ、』とサンチョーは言葉を進めた、『その七月（ジュリオ）（七月もジュリアス（シーザー）もスペイン語では共にジュリオである。）の八月（アウガスト）アウガスタスと八月（アウガスト）との思ひ違ひであるぢやのそれからもう死んで居ると仰有りましたあんな向ふ見ずのお侍衆は——一體何處に居りますかの？』

『異敎徒どもは言ふまでもなく地獄に居る。キリスト敎徒たちは、それがもし善良なキリスト敎徒であつたら淨罪界か天國かに居るのぢやの。』とドン・キホーテは答へた。

『なるほどな、』とサンチョーは言つた、『けれど私が唯今お聞きしたうござりますのはな——そんなえらい殿樣がたの死骸の埋まつてをる墓所の前にや、銀のランプが燈つて、そのお堂の壁にや撞木杖や經屍布や髮の毛や蠟の脚や眼などが飾つてござりますかい？』

これに對してドン・キホーテは答へた、『異敎徒どもの墓はおほかた莊大な殿堂ぢや。ジュリアス・シーザーの骨は非常に大きな石の方尖塔の頂上に納めてある。それは今ローマで聖ペテロ寺院の針と呼ばれてをるわい。ハドリアン皇帝の墓は可なり廣い村ほどもあるお城を使うたのぢや。それは「モレス・アドリアニ」と呼ばれて今はローマの聖アンゼロのお城ぢや。アルテミシア女皇

はその良人マウソルスを世界の七不思議の一つに数へられた墓場に葬つた。しかしこれ等の墓場も、またその他澤山ある異教徒の墓も、纏屍布とか何とか、つまりそこに葬られてをるのは聖者ぢやといふ徴になるやうな捧げ物は、何も飾つてないのぢや。』

『そこでござりますぞい、私がお訊ねせうと思うて居るのは、』とサンチョーは言つた。『さうすると旦那樣、死んだ人を生き返らすのと巨人を殺すのとでは、どちらが偉い仕事でござりますかの？』

『その返答はやすいことぢや。』とドン・キホーテは答へた、『そりや死人を生き返らせる方が偉い仕事ぢや。』

『そうれ、見なされ。』とサンチョーは言つた、『そんならこの世の中に昔から殘らずの異教の皇帝樣や武者修業さんが殘して行きなさつたり、またこれから殘して行かつしやる物よりか、死人を生き返らせたり盲目を見えるやうにしたり跛を癒したり病人を快うしたり、またその墓所の前にお燈明をともさせたり、その御堂の中へ澤山信心な人を坐らせてお骨を拜ませたりするやうな人たちの名譽の方がこの世でもあの世でも結構でござりませうがの？』

『私もさう思ふ。』とドン・キホーテは言つた。



『それぢや、その名譽とか御恩澤とか特權とか何とかかんとか言ふものア、聖徒樣たちの死骸やお骨の物でござりましよがの。』とサンチョーは言つた、『あの方等は、聖母敎會の認可や許しを受けて、ランプや蠟燭や纏屍布や撞木杖や繪像や蠟作りの眼や脚などを掛けてござつて、それで信心を進め御自分のキリスト信心の評判を高めなさる。王樣等は聖徒樣の死骸やお骨を肩に乘せて運びなさるのぢや。そしてそのお骨の切ツ端に接吻して、そのお骨で御自分の禮拜堂や好きな祭壇を美しうしたり飾つたりなされますのぢや。』

『サンチョー、お前は樣々のことを並べるが、一體何を言ふつもりなのぢや？』とドン・キホーテは訊ねた。

『私の申しますのは、』とサンチョーは言つた、『聖徒樣になる方に取りかゝらうと言ふのですよ。さうすりや私等の欲しがつて居る立派な名譽がもつと手早に手に入りましよ。旦那樣も御承知ぢやが、昨日か一昨日も、（つひこなひだの事で、さう申しても宜しうござりましよ）、けちな托鉢坊さんが二人、神樣のお惠みで聖徒の仲間へ入れられましたからの。そして今ぢや、あの坊さん等が腰に卷いて身體を苦しめたちう鐵の鎖に、接吻したり觸つたりするのが、この上もない緣起ぢやと思はれとりますわい。そしてその鎖はな、畏くも國王樣のお倉に納めてあるあのローランド

の劍よりも餘計に崇められてをるちう話でござりますわい。そこで旦那樣、勇ましい武者修業よりか、どんなつまらん級の低い處でもえゝから托鉢坊主になつた方がましでござりますぞい。神樣相手に二三十も鞭打ちの苦業をすりや、たとひ相手が巨人か怪物か龍であつても、それを二三千も槍突きにするより御利益が餘計でござりますわい。』

『そりや悉く尤もぢや。』とドン・キホーテは答へた、『しかし私等は殘らず托鉢僧になるわけには行かん。また神樣がその民を天へお招きなさる道は幾つもある。騎士道も一派の宗教で、これにも榮光の聖徒となつた騎士があるのぢや。』

『へい、しかし天國にや武者修業さんよりも托鉢坊主さんの方が餘計居ると聞きましたぞい。』とサンチョーは言つた。

『それはつまり宗務に從うて居る者の方が騎士よりも數が多いからぢや。』とドン・キホーテは言つた。

『お修業さんも澤山居られますぞい。』とサンチョーは言つた。

『澤山居る。しかし騎士の名に恥ぢぬものは少いのぢや。』とドン・キホーテは答へた。

こんなことを樣々問ひつ答へつして、二人はその夜もその翌日をも過ごした。何も記すに足るやうなことは起らなかつたので、それにはドン・キホーテも少からず氣を落とした。しかし遂にその翌日の夜明け方に、彼等はエル・トボソの大都を見認めた。それを見るとドン・キホーテの元氣は振ひ立ち、サンチョーはしよげた。彼はドゥルシネアの家を知らなかつたし、また主人と同じく、生れてから一度も彼女を見たことがなかつたからであつた。そこで、一人は彼の女に逢ひたさに、一人は彼の女に逢うたことがない爲めに、雙方孰れも不安であつた。そしてサンチョーは、もし主人が自分をエル・トボソへ使ひにやることになつたら何うしようかと途方に暮れて居つた。



遂にドン・キホーテは暮れ方にこの市へ入ることに決めた。そこで二人はその時刻が來るまでエル・トボソ近くの櫸の森の中で待つた。そしてその時刻が來ると、直ちに彼等は市へ乘りこんだ。此處では、立派に事が起つたと言へるほどの事が、彼等に起つたのである。

## 第九章　には其の中で見られる事が述べてある。

ドン・キホーテとサンチョーとが森を離れてエル・トボソへ入り込んだのは――かれこれ――眞夜中頃であつた。市は深き沈默の裡にあつた。蓋し凡ての住民は眠りこんで、諺にある通りうんと仰向きに身を伸ばしてゐたのである。夜はほの暗かつた。尤もサンチョーはそれが眞の闇であつたら、と喜んだであらう。それは自分の大失錯の口實をその暗さに嫁せられるからであつた。そこら中には何一つ聞えるものもなく、唯犬の吠え立てる聲のみがドン・キホーテの耳を聾しサンチョーの心を惱ましめた。その合間々々に驢馬が鳴き、豚が唸り、猫がニヤア～～と鳴いた。そしてそれらのもの、立てるいろ～～の音はひつそりした夜のことで一層高いやうに思はれた。この戀する騎士はさういふ物音を凡て凶兆と思つたのである。けれども彼はサンチョーに言つた。『これサンチョーよ、バルシネアの館へ案内して呉れい。あの人はまだお目覺めであるかも知れぬ。』



『やれまア！何處のお館へ御案内するのでござりますかい？』とサンチョーは言つた、『私があのお姫樣にお目にかゝりました時には、ほんの小さなお部屋へ退かれて大家の婦人がたや姫君たちがいつもなさるやうに、侍女等を相手に鬱を散じて居られたのに違ひない。』とドン・キホーテは言つた。『旦那樣、』とサンチョーは言つた、『もし貴方樣が私の言ふことを聞かずにドゥルシネア姫樣のお家がお館ぢやと言はしやるなら、何うでござりましよ、今頃御門が開いてをりませうかい　また御門を奥へ聞えるまで叩いて開けて貰うてもえゝもんでござりませうかい！家中の人達を殘らず迷惑させ騒がせませうに。全體貴方樣は、浮れ男になつて白首の家へでも行きよる御つもりでござりますかい、それなら、たとへどんなに遲うてもいつ何時でも行つて戸を叩いて入れますがの。』

『何は兎もあれ先づそのお館を確かに突き止めようわい、』とドン・キホーテは答へた『その上で、サンチョーよ、私が一番よい方法をお前に言ひ聞かせるぞよ。ぢやがあれ見い、サンチョーよ。私の見損ひでさへなけりや、あれ、あそこに見えるあのぬッとした黒い物こそ、ドゥルシネアのお館に違ひなからうぞ。』

『それぢやア、貴方樣が案內して下されませ、』とサンチョーは言つた、『大方さうかも知れません。尤も私はあの黑い物をこの眼で見てこの手で觸つて見ても、それをさうぢやとでも信じますわい。』

ドン・キホーテは先頭に立つた。そして二百步ばかり進むと、その黑い影を映してゐた物に行き當つた。するとそれは大きな塔であつた。それでその建物も館ではなくてこの市の中央會堂だと分つた。そこで彼は言つた、『サンチョー、こりや敎會堂ぢやよ。』

『私もさう思ひます。』とサンチョーは言つた、『何うか神樣私等を自分の墓場へ行き當てんやうにして下さりませ。夜中の今時分墓地をうろつきまわるやうなことになるのは、あんまり吉兆でもござりませんわい。前から貴方樣へ申し上げなんだことでござりますかい、私の勘違ひでさへなけりやあのお姫樣の家は袋小路にござりましよと言うて。』

『この馬鹿な奴がツ!』とドン・キホーテは言つた、『何處へ行けばとて、お城や王宮が袋小路に建つてをるといふ話があるものか?』

『旦那樣、處かはれば品變るでござりますぞい。』とサンチョーは言つた。『おほ方このエル・トボソではお館や大きな建物を小路に建てるのでござりましよ。そこでどうぞ旦那樣、お願ひでござりますからこゝらの街路か小路を搜させて下さりませ。そしたら大方何處かの隅ツこでそのお館に行き當りましよ——ほんとに、私等にこんな騷ぎをさせやがつたその家の奴め犬に喰はれて居ればえゝ!』



『わが姬君のものに就いては丁寧にものを言へ、サンチョー。』とドン・キホーテは言つた、『お祭り日は靜かにするんぢや。釣瓶の後から繩を投げるな。』

『默つて居りますよ……。』とサンチョーは言つた、『けれど、私アあのお姬樣の家をたつた一遍きり見んのに何時までも覺えて居つて、それも眞夜中に見付けろて貴方樣が仰有るもんで、どうして我慢が出來ますぞい。貴方樣は何千度もその家を見てござる筈ぢやのに、それでも見付けられんのに。』

『サンチョー、貴樣はいよ〳〵人に癇癪を起させるんぢやな。』とドン・キホーテは言つた、『こら外道よ、私は生れてから一度もあの類ないドゥルシネアを見たこともなければ、あの人の館の閾をまたげたこともないが、たゞあの人の美しうて愼み深いといふ噂や大評判によつて思ひ寄せとるだけぢやと、幾千度も話したぢやないか?』

『さう仰有るなら申し上げますがな、』とサンチョーは言つた、『貴方樣が御覽にならなんだのな

ら私なやてやつぱり同じことでござりますよ。』

『そんな筈はない。』とドン・キホーテは言つた、『何故といふて、兎に角お前は私の手紙を持つて行つて歸つた折に、あの人が麥を篩うてござつたと言うたぢやないか。』

『旦那樣、あの事は言うて下さるなよ、』とサンチョーは言つた、『打ち明けて申しますとな、私があの方に御目にかゝりましたのも、貴方樣へお屆けしたあの御返辭も、やツぱり噂からでござりましたのぢや。何故と申して、空が打たれるものぢやなし、ドゥルシネアのお姫樣が何方やら分りませんものな』

『サンチョー、サンチョー、』とドン・キホーテは言つた、『冗談を言ふ折もあるが、冗談ぬきの折もあるぞ。もし私があの懐しい婦人を見もせねば口も利いたことがないと言うたところで、お前があの婦人を見もせねば物を言うたこともないと言うたところで、お前よう知つて居る通り、全くさうではないのぢやからの。』

二人がかういふ話しをして居る折柄誰れか二頭の騾馬を伴れて彼等の立つてゐる場所へ近づいて來るのが見とめられた。そして地べたを引きずツて來る犂の音からして、それは夜明け前に起きて仕事に行く百姓であると察せられた。果たしてそれはその通りであつた。その男は——



ロンセスヴレスの追ひ擊で
からい目を見たフランス兵よ……

といふ俗謠を歌ひながらやつて來た。

これを聞いてドン・キホーテは言つた、『おや〳〵、サンチョーよ、今夜はたしかに何か善いことが私等に來るぞよ！あの百姓の歌うてをる歌がお前に聞こえるかい？』

『聞こえます。』とサンチョーは言つた、『けれどあのロンセスヴレスの追ひ擊は私等の今の仕事に何の因緣がありますかい？今あの男が「カライノスの歌」を歌ひよツたところでみな同じことでござりますわい。どツちにせよ私等にや吉い事も凶い事もござりませんわい。』

折柄その百姓は側に來た。そこでドン・キホーテは訊ねた、『いやお早う一寸尋ねますがの、何處ぞこゝらにあの類ないドゥルシネア・デル・トボソ姬のお館はないか、御存じかい？』

『旦那樣、』とその若者は答へた、『私ア旅の者で、たツたこの二三日前からその町へ來て、或る大百姓さんの畑で働いて居りますがなござりますよ。その家の向へにこの町の牧師さんと坊守さんが住んでござりますよ。その人等ならこのエル・トボソの戸籍簿を有つてござるで、何方のお方でも、貴方樣のお訊ねなさるそのお姬樣のことを知つてござりませうぞい。尤も私の知つて居るだけぢやア

この町にやお姫さんは一人も住んちやござりませんがな。身分の高い人で、自分のお家ぢや銘々お姫樣で通つてござるやうな御婦人方は澤山居られますぞい。』

『成る程、それでは私の搜してをるその婦人もそんな仲間の一人であらうよ、のう。』とドン・キホーテは言つた。

『さうかも知れません、』と若者は答へた、『さてもう夜が明けますで、これでお暇致します。』そしてその上の問ひを待たないでその騾馬に鞭を當てた。

サンチョーは、主人が悄氣て稍不滿足らしいのを見て言つた、『旦那樣、もう間もなう夜が明けませう。そして晝間になつてからかうして町中に居つちやア都合が惡うござりましよ。それより か町を離れて、旦那樣は近くの林の中へ隱れてござつた方がようござりましよ。そして私が晝間こゝへ戻つて來て、この町中隅の隅まで殘らず搜して、あのお姫樣のお家かお城かお館かを見付けませうわい。それでも見付からにや是非もござりません。けれど見付かつたらすぐ樣お姫樣へ言葉をかけまして、貴方樣があの方の御評判にも御名譽にも傷をつけずに御逢ひなさる工夫の打ち合せをしたいちうて、何處で何うしてゝ、待つてござるといふことを申し上げませうわい。』

『サンチョーよ、』とドン・キホーテは言つた、『お前は僅かの言葉のうちに百千の文句を含めて言うたぞよ。私はお前のその勸めに對して禮を言ふぞよ。そして喜んでそれに從ふぞよ。さア、これ、どこか私の隱れ場を搜しに行かうよ。それからお前の言ふ通りお前はこの町へ戻つて來て、あの婦人を搜して逢うて話すのぢやな。あの婦人は愼み深く禮儀に厚いから、拙者は奇蹟よりも不思議なお慈を受けることを待つて居るわい。』



サンチョーは主人を町から伴れ出さうとてやきもきしてゐた。それは自分がドゥルシネアからとしてモレナ連山に居つた主人のところへ持つて行つた返辭の嘘であることを見破られる恐れがあつたからである。そこで彼は出發を急き立てゝ直ぐ樣出發した。町外れ二哩のところに林か茂みのやうなところがあつたので、ドン・キホーテはそこへ身を落ち着けた。その間にサンチョーはドゥルシネアに逢はうとて町へ返つた。この使節中に彼にふりかゝつた事どもは新たなる注意と新しき一章とを要求するのである。

## 第十章　にはサンチョーが巧みな工夫によつてドゥルシネア姫に魔術をかけること、及びその他眞實にしてしかもおかしき出來事が述べてある。

その物語は傳へて曰く、ドン・キホーテはエル・トボソに近い林か樒の木立か森かへ身を隱すや否やサンチョーに命じて、お前は市へ立ち返れ、そして拙者の名代としてあの婦人に先づ物を申し上げ、貴女樣に身心を獻げ居りますこと、及びその騎士にお逢ひ下さつて、その騎士に祝福を與へて下さいますまいか、さうすればそれによつてその騎士はあらゆる戰ひにも困難な冒險にても目出度い結末を告げる望みを懷くことが出來ますからとお願ひをせぬうちは、再び私の目通りは叶はぬと言つた。サンチョーはお差圖の通りにその事を片付けまして、この前のやうな良い御返辭を持つて參りませうと、引き受けた。

『行つて來いよ、のう、』とドン・キホーテは言つた、『そしてお前は今捜しに行く美しいお日樣の光を身に浴びても、眩をせんやうにせい。お前はこの世のありとあらゆる從士よりも果報者ぢや！　よう氣を付けてあのお方が何ういふ風にお前を迎へられるかを覺えから脫かすまいぞよ。お前が拙者からの言傳を傳へる時、あのお方の顏色が變るかどうか。拙者の名前を聞いてあのお方がどぎまぎして慌なさるかどうか、お前が行つた時偶々あのお方がその身分相當な壯麗な大廣間に座を占められてをられるとすれば、その褥の上にぢッと身を落ち着けてをられるかどうか。そしてもしあのお方が立つてをられるとすれば、始終片方の足に力を入れて身體の釣合を取つて居られるかどうか、またお前に與へられる返辭を二度も三度も繰り返しなさるかどうか。にこやかなお顏からきついお顏に、或はむつつりしたお顏から優しいお顏に變られるかどうか。またその髮は亂れても居らずとも手をあげて撫でつけなさるかどうか。つまり、のう、あの婦人の身振り動作を殘らず見て取るのぢや。そしてそれをお前が有りのまゝに拙者へ知らすれば、それによつて拙者はわが思ひに對してあのお方が心の奧に祕めてござることを推測するのぢや。のう、サンチョー。もしお前がまだ知らぬなら敎へてやるが戀をする人たちに取つては、その外に現はす身振り動作こそ、その心の奧底に祕められてをるものゝ消息を傳へる忠實な使者ぢやからの。さア行つて呉れい。どうかお前が拙者よりも仕合せのお蔭を蒙るやうに、そしてこの物淋しい所で拙者が心配しながら待つてをるよりも、目出度い成行にして呉れるやうに。』



『それぢや行つてすぐ歸つて參ります。』とサンチョーは言つた、『旦那樣、どうぞ貴方のその小さな胸を晴らして下さりませ。今のところでは、貴方の御心は棒の實より太うはないやうに見

えますぞい。強い心は悪運を砕くと言ふちやアござりませんかい。また鹽漬豚のない所にや懸釘はないとも言ひますわい。それから、思ひも寄らん所から、鬼が跳び出すとも申しますわい。私がこんな事を言ひますのはな、たとへ昨夜はあのお姫樣のお館もお城も見付かりませなんだとて、今は日の明りがござりますから、まるで思ひ掛んところで見付からうと思ひますのぢや。そして一旦見付かりさへすりや、お姫樣の操り方ア私へお任せなさりませ。』

『全くその通りぢや、サンチョー』とドン・キホーテは言つた。『何事にぶッ突かつても、お前は何時も諺を上手に綴り合はせるの。どうか神樣が拙者の今懸念してをることに幸運を與へて下さるやうに。』

そこでサンチョーはダップルの向きを變へ鞭をあてた。ドン・キホーテは乘馬のまゝ鐙に脚を休ませ槍の端に身を凭たせつゝ何となく悲しい惱ましい不安に充たされて、後に殘つた。が彼はこのまゝに棄てゝ置いて我々はサンチョーについて行きませう。彼は後に殘つた主人に劣らぬ心配氣苦勞を懷いて出發した。そこで、その木立ちを出でしまふや否や振り返つて見てドン・キホーテの姿の見えなくなつたのを確かめて驢馬から降りた。そしてとある樹の根に腰打ちかけて我れと我が身に話しかけた。『はてさてサンチョーさん。貴方さまは全體何處へ行かうとしてござる



のか知りたいものぢや。貴方は失うた驢馬でも見付けに行きなさるのかい？いやゝ〳〵何うして。それぢや何を見付けに行きなさるのぢやい？私ア お姫樣を見付に行きよりさうすわい、たゞそれだけぢや。そしてそのお姫樣を見つけりや美しいお日樣も天國も一緒に見附かるのぢや。そしてサンチョーさん、貴方はそれを何處で見付かると思ひなさるかい？何處で？はてそりや、エル・トボソの大きな市でぢや。成る程、そして誰に頼まれて捜しに行きなさるのかい？あの名高いラ・マンチャのドン・キホーテ樣といふお侍さまに頼まれてぢや。そのお方は不義を正し渇いた者には食ひ物を與へ餓えた者には飲み物を下さるお方ぢやそりやなか〳〵結構ぢや。しかし貴方はそのお姫樣の家を知つてござるかい、サンチョーさん？私の旦那はな、そりや王樣の御殿か大きなお城かぢやろと言はツしやるのぢや。そして貴方は何かの折にそのお姫樣を見たことがありますかい？私も私の旦那もつひぞ見たことがござらん。してまたお前さんは、もしやこのエル・トボソの人等が自分等の町のお姫樣を弄つたり御婦人がたを困らしにかゝらうといふ氣でお前さんがこゝへ來たのぢやと感づいて、やつて來てお前さんの肋骨を搗きたくツて一本も滿足な骨を殘さんやうにしてもそりや、尤も千萬なことぢやと思ひますかい？なる程、そりや若しや私が人の命令を受けてをるちうことや、また「なアお前さんはお使者ぢやから、お前には咎はない、」ちう

ことを町の人等が知らんなら、それも尤も千萬な話でござりましよがの。サンチョーよ、そんなこと頼みにするなよ、マンチャの人等ア正直だけに短氣ぢや。そして無遠慮をしたら誰でも用捨はせんわい。それこそもしや町の人等がお前を嗅ぎつけようものなら、えらい目に會はされようぞ。きツとぢや。こら、やい、行つてしまへ！雷が落ちるなら落ちろ。ぢやが何で私は他人の爲めに三つ足の猫を捜しに行かにやならんのぢや？それどころぢやない、ドゥルシネアを捜すのは、ラベナでマリカを捜したり、サラマンカで何某の學士さんを捜すやうなもんぢやな。惡魔奴ツ。こんな仕事に私を釣りこんだのは惡魔でなうて誰であらう！』

サンチョーが我れと我が身に言つた獨語はこんなものであつた。そして彼の達し得た最後の結論はまたもや自分に向うてかう言ふことであつた、『まア〳〵、人間は皆否でも應でも生命が果てれば死ぬるといふ甎を通らにやならんが、死ぬることを除けりや何にでも助かり途はあるもんぢや。この私の旦那が縛つて置かにやならんやうな氣違ひぢやといふことはいろ〳〵さま〴〵の證據でちやんと分ツとる。そこへかけちや私もやツぱり旦那にや引けを取らんわい。何故といふて、もしやあの「お前の有つとる仲間はどんなのか言うて見い、さうすりやお前がどんな人間か私が當てゝやる」ぢやがの「生みの親よりや養ひ親」といふ諺に少しでも眞があるならそんな



ら旦那にお供して御奉公しとる私ア旦那よりも餘程の阿呆ぢや。さてそこで、旦那樣はあの通りの氣違ひぢや、とすると、それも、これまで度々あつた通り、粉ひき車を巨人ぢやと言うたり、坊さんの騾馬を一つ瘤の駱駝ぢやと言うたり、羊の群を敵の軍勢ぢやと言うたり、その他そんなやうな調子で、大抵物を取り違へて、白を黒と思ひ、黒を白と思ふやうな氣違ひぢやとすると、こらで行き當り次第の田舍娘をドゥルシネアのお姫樣ぢやと思ひ込ませることはさほどむづかしいこツちやあるまひ。そして若し旦那樣がそれを本當にせなんだら、私がそれを本當ぢやと誓言する。もし旦那樣がそれを本當ぢやないと誓言なさりや、私も重ねて本當ぢやと誓言する。それでもまだ旦那樣が言ひ張るなら、私もその上言ひ張る。そしてどんな事があつても、私の鐵環をいつも旦那樣の懸釘の上へ置くのぢや。さういふ風に私が頑張れば大方二度と再びこんな使ひに私をやんなさらんやうにならうわい。さもなけりや大方旦那樣は私の思ふ壺にはまつて、御自分に怨みを持つてをると言はツしやるあの魔術使ひの一人が、御自分に災難をふりかけやうとてそのお姫樣の姿を變へたんぢやとお思ひなさらうわい。』

かう考へるとサンチョーは、もはや事が落着したも同樣だと思つて氣が安まつた。そしてそこに夕方まで留まつた。それはエル・トボソまで往復の時間が充分に經つたとドン・キホーテに思は

せる爲めであつた。そしてサンチョーに取つては事が非常に都合よくなつて行つた。それに彼が丁度ダップルに乘らうと立ち上つた時、エル・トボソの方から彼の立つてる方へとやつて來る三人の百姓娘を見付けたからである。娘等は三頭の仔馬か牝馬かに乘つてゐた——蓋し作者がこの點を明かにしてゐないのである。尤もそれは田舍娘等の普通の乘り物である牝驢馬であつたらしい。しかしそれは大して重要なことでもないから、止まつて確める心要はない。

要するにサンチョーは、その娘等を見るや否や全速力で主人の居るところへ歸つて行つた。すると主人は吐息をつきつゝしきりに切なる嘆きの思ひを洩らしてゐた。彼はサンチョーを見て叫んだ、『おゝ、サンチョーよ、首尾は何うぢや？私は今日といふ日を白い石で記念せねばならんのか、それとも黒い石でか？』

『旦那樣、それよりや大學校の先生の椅子の名簿學位を受くるのやうに光明丹で記しをつけなされたがえゝでござりませうぞい。誰れにでも一目ではッきり分りますやうに』とサンチョーは答へた。

『それでは吉報を持つて來たな。』とドン・キホーテは言つた。

『えゝともえゝとも、』とサンチョーは答へた、『旦那樣はたゞもうロシナンテを走らせて廣ッ原へ乘り出してドゥルシネア・デル・トボソのお姫樣をお迎へなさればよいのでござりますわい。あのお方は他に侍女を二人伴れて貴方樣に逢ひにござるところでござります。』



『これ〳〵！おいサンチョーよ、お前は何を言うて居るのぢや？』とドン・キホーテは叫んだ、『よう氣を付けて、私を瞞したり嘘の喜びで私の眞實の悲しみを晴らさうとしたりするではないぞ。』

『貴方樣を瞞しして何になりませうよかい？』とサンチョーは答へた、『これに私の申すのが本當か本當でないか直きに知れますに。さァ旦那樣お急ぎなされ。さうすればあのお姫樣が——ほんとに似合はしう着飾つてござるのが見られますわい。あのお方も侍女たちも悉く金ぴかに光つて、眞球の總や金剛石や紅玉石をつけて、十筋から上の緣のついた金襴の着物並の金襴の着物は只一筋の緣がある。を着てな。髮は肩の上に垂れかゝつて、丁度風にゆらいで居る日の光のやうにちら〳〵して、その上あの人等は今まで見たこともないやうな立派な三疋の斑の中の子馬に乘つて來られます。』

『間の子馬のことぢやろ、サンチョーよ』とドン・キホーテは言つた。

『中の子でも間子でも大した違ひはござりませんがの、』とサーチョーは言つた、『まア何に乘つてござらうが構ひません。もう其處へござつた。そりやもうこの上ない立派な御婦人がたで、中にもドゥルシネアの御姫樣は、見ても眼がぐらつきますわい。』

『さのサンチョーよ、行かう。』とドン・キホーテは言つた、『してこの思ひ設けぬ吉い知らせの

褒美としては拙者が今度出逢ふ眞ッ先きの冒險で手に入れる最上の分取物をお前に遣はすぞよ、いや、もしそれで滿足が出來ぬなら、お前も承知の通り私等が村の村有地で今年仔を生む筈になつてをる、あの拙者の三疋の牝馬の仔をお前にやらうわい。』

『私アその仔馬を頂きませう、』とサンチョーは言つた、『今度の眞ッ初めの冒險で取れる分捕物はえゝ物やら何うやら全く當にやなりませんからの。』

やがて森を脫け出ると、彼等は直ぐ近くに例の三人の田舍娘を見たのである。ドン・キホーテはエル・トボソへの道路をずッと見渡した。けれどこの三人の田舍娘の外には何人も見當らなかつたので、彼は全く途方に暮れた。そしてサンチョーに向ひお前があの人等と別れたのは市を出てからであつたかと訊ねた。

『何うして市を出てからでございましよう?』とサンチョーは答へた、『貴方樣の眼は頭の後方についてをりますかい?それ此處に、眞ッ晝間の天道樣のやうに光りながらござるお方々がさうぢやとは見えませんかい?』

『私には何も見えんよ、サンチョー』とドン・キホーテは言つた、『たゞ見えるのは牡驢馬に乘つた三人の田舍娘だけぢや。』

『やれ〳〵、神様、悪魔の手から助けて下さりませ！』とサンチョーは答へた、『貴方様はこの雪のやうに眞ッ白な三疋の間の子馬を——そりや何と言うてもえゝが——それを牝驢馬ぢやと思ひなさるのかい！へえ！そんな事があつたら、私の髯でも拔いて見せる！』

『はゝア、これサンチョーよ』とドン・キホーテは言つた、『それが牝驢馬——つまり驢馬の牝——ぢやといふことは拙者がドン・キホーテであり、お前がサンチョー・パンザであると言ふ位に明白なことぢやぞ。兎も角私にはさう見えるわい。』

『しッ、旦那様。』とサンチョーは言つた、『そんなことを言はッしやらずに、眼をあげて御覽なされ。もう此處へ來られた貴方様の思うてござるお姫様へ、よう御挨拶をなされませ。』とさう言ひながらサンチョーはその三人の田舍娘を迎へようとて乘り出した。そしてダップルから降りて三人の田舍娘の牝驢馬の一疋の面勒を取つて引き止めつゝ、地べたに兩膝をついて言つた、『お容貌よしの女王様、お姫様、侯爵夫人様、どうぞ威張つてござるおえらい貴女様方は、哀れぢやとも可哀さうぢやとも思うて貴女様へ首ッたけのこのお侍樣へ情をかけて下されませ。この方は畏れ多い貴女樣の御眼通りへ出なされたもんぢやで全く口も硬ばるやら身體も痺れるやらで、石地藏になつてしまうてこゝに立つてござりますわい。私はその家來のサンチョー・パンザと申しま

す。そしてこのお侍はラ・マンチャのドン・キホーテまたの名は「憂ひ顔の騎士」といふ天竺浪人でござります。』

もうこの時はドン・キホーテもサンチョーの側に跪づいてゐた。そして、顔から飛び出しさうな眼をして不思議さうな眼つきで、サンチョーが姫君よ女王樣よと呼んでゐる婦人をじッと見据えてゐた。しかしたゞ一個の田舍娘に過ぎず、しかも甚だ容貌の良くない娘——平べッたい顔でひしやげ鼻であつたので——とより見られなかつたので、彼はどぎまぎして面喰つてしまつた。そして唇を開くことも得しなかつた。田舍娘等もやはり、この二人の男がそんな異樣な裝をして跪づいて自分等の仲間の行手を遮るのを見て、吃驚してしまつた。しかし引き止められてゐた娘は沈默を破つて腹立しげにつけ〳〵と言つた、『いやらしい人たちぢやな。退きなされ。私等ア急いどるのぢやから通しなされ。』

これに對してサンチョーは答へた、『あれ、エル・トボソ切つてのお姫樣、畏れ多い貴女樣の御前にかう膝をついて居りますこの武者修業の柱なりつッぱり棒を御覽じても貴女樣のお廣い胸は柔ぎませんかいの？』

これを聞いていま一人の娘が叫んだ、『へえ！まア！お志痛み入つたこッてござりますよ！ま



ア何うぢや、このけちな旦那たちは田舍娘をからかふといふ氣ぢやよ。私等の方でもそれ位からかふことが出來んかと思うて。貴方等勝手の道へ行きなされ。私等も自分の行く方へ行きますから。それが貴方等の爲めでござんすよ。』

ドン・キホーテはこれを聞いて言つた、『立て〳〵、サンチョー。今だに拙者を惱まして飽き足れりとせぬ惡運は、拙者がこの肉體の中に運び居る憐れな魂に通ふ慰めの道を殘らず握り塞いで居ると分つたぞよ。してまた貴女樣、あゝ世にまたとなき圓滿美妙の君よ、人間の形に宿れる無上の御優しさ、貴女樣をあがめ奉ることの惱める胸に取つて唯一無二の慰めの君よ、唯今は、この身を迫害して居ります意地の惡い魔術使ひが拙者の兩眼を曇らせ白內障にしてしまうて居りますので、この眼には、たゞこの眼だけには、貴女樣の類ひなき御美しさを取り消し、お姿さへもみじめな田舍娘のやうに變へて居りますなれど、また貴女樣のお眼に厭らしく見せう爲めに拙者の姿も何かの怪物の姿に變へ居らんとも限りませぬが、何卒お厭ひなさらずに優しく心を込めてよう拙者をば御覽下されませ。拙者がかうして貴女樣のその變り果てた御容貌にも跪づいて居りますこの謙遜とに免じられて。』

『やれまア！こりや魂消た！』とその娘は叫んだ、『お前さんの口說ごとはよう聞いたよ！道を開

けて通しておくんなさいさうしたら御禮を申しますよ。』

サンチョーは體を退けて娘を通らせた。彼はうまくこの場の面倒を切り抜けたので大喜びであつた。ドゥルシネアの代りを務めたその田舍娘は身が自由になるや否や、その手にしてゐた杖の端についた杙で自分の間子馬をつッ突きながら野原を一散に駈け出した。ところがその驢馬はその杙の痛みを平生より一層強く感じたので、非常に跳ね出した。そこでドゥルシネアを地べたへ擲り出した。これを見てドン・キホーテは彼女を起さうとて走つて行つた。その腹帶や荷鞍も驢馬の腹のところへずれ落ちてゐたので、サンチョーもそれを直さうとて走つた。荷鞍が直されたのでドン・キホーテは自分の思ひの婦人を抱き上げて、その獸の上へ乘せようとした。けれどもその姫君は彼に面倒をかけることなく、地べたから起き上ると少し後戻りして、勢づけの駈け足をして驢馬の臀に兩手を衝き、鷹よりも輕やかに鞍の上へ身を下した。そして男のやうに眞直に坐つた。これを見てサンチョーは言つた、『やれ〳〵！まアこのお姫樣ア長尾の鷹よりも身輕いわい。これなら一番悧巧なコルドーワ人にもメキシコ人にも乘り方が敎へられうぞい。あの人ア一と跳びで立派に鞍の上へ乘らッしやれた。そして拍車もなしにあの間子馬を斑馬のやうに走らせなさるわい。また侍女たちも後へは引かん。皆風のやうに飛ぶからの。』それは本當であつた。



ドゥルシネアが乘つたと見るや否や、二人の娘等はその後から追つかけて、後をも見返らず半リーグ以上も走りつゞけたのであつた。

ドン・キホーテは彼等を見送つてゐた。そしてもはや見えなくなつてから、サンチョーに向つて言つた、『はてさて何うぢやサンチョー？　拙者が如何に魔術使ひに憎まれてをるかゞ分つたらう！そして拙者に對するあいつ等の惡意怨恨が何處までゞあるかを見い。あいつ等は拙者があの婦人をその本來の形で見て感ずる筈の喜びまで拙者から剝ぎ取らうとして居るのぢや。實に拙者は不運の見本として、また逆運の征矢が眞ッ向狙ふ目標として生れて來たのぢや。またサンチョーよ、よう見るがよい。この裏切り者等は拙者のドゥルシネアの姿を變へるだけでは滿足せずに、而もあの田舍娘のやうな卑しい見苦しい形に變へ居つたわい。それにまたあの婦人から、あんな身分高い婦人がたの特有な持前をも、卽ち何時も香や花の間に居られるところから來る佳い薫をも奪ひ取つたのぢや、そのわけはサンチョーよ斯うなのぢや、拙者がドゥルシネアをあの間子馬（であつたとお前は言ふからの、尤も拙者には牝驢馬と見えたがの）、あれに乘せようと近寄ると、あの人は生の大蒜の息を拙者に吹きかけたので、拙者は頭がぐらついて胸がむか〳〵するわい。』

これを聞いてサンチョーは叫んだ、『あゝ何ちうやくざ者ぢや！あさましい怨がましい魔法使ひどもぢや！ほんとにお前等を殘らず、串ぬき鰌のやうに鰓のところで突き刺してやりたいもんぢや！お前等はうんと知つてをッて、うんと様々のことが出來て、それでまだそれより上のことをする。こら惡黨ども、お前等はあのお姫様の眞珠の眼を櫛の瘤子に變へあの純金の髪の毛を赤牡牛の尻尾の剛毛に變へ、そしてつまりあのお方の美しい容貌を殘らず汚い物に變へてしまうたので、もう十分な筈ぢやから、その匂ひだけにはちや〳〵を入れずに置かにやならん筈ぢやないか。匂ひさへ變へなんだら、あの醜い殻の下に隠れてをる本性が些とでも分つたらうにな。尤も本當のことを言へば、私ア些ともあの人の醜いところは見えんで、たゞもう美しいばッかりぢやつた。それもあの右の唇の上に口髭のやうな黒子があつたんで、この上ない美貌を引き立てゝ居つたわい。お負けにその黒子にや金絲のやうな五六寸も延びた赤毛が七八本生へて居つたでの。』

『顔の黒子と身體の黒子とが釣り合ふものぢやといふところを見ると、ドゥルシネアは屹度その顔の黒子のある側の股の眞中に、やはりそれに似寄つた黒子をも一つ持つて居る筈ぢや。ぢやがお前が今言うたやうな長さの毛なら黒子の毛としちやアなか〳〵長いもんぢやな。』とドン・キホーテは言つた。



『へい、たしかにその毛は、はッきりそこに生へとりましたよ。』とサンチョーは答へた。

『フム、さうぢやらう。』とドン・キホーテは答へた、『自然は何一つとして完全無缺でないものをドゥルシネアには授けなんだからの。そこでもしお前の言うたやうな黒子を百有つてをつたとしてもあの婦人に在つてはそれが黒子でなうて却つて月やかゞやく星となるであらうぞよ。しかも何うぢや、サンチョー。お前が着けて居る時に、拙者に荷鞍のやうに見えたのは、ありや平鞍であつたかそれとも婦人鞍であつたかの？』

『ありや何方でもござりませんだ。』とサンチョーは答へた、『ありやジネタ鞍（前輪と鞍尻が高くて猿の尻かいものの）で、その臺座の廣さは半ケ國でも隠せさうな立派なものでござりましたよ。』

『それが少しも拙者に見えなんだとは！サンチョーよ』とドン・キホーテは言つた、『も一度拙者は繰り返すが、いや千度でも繰り返して言はうが、拙者こそ人間中の一番の不仕合せ者ぢやの。』

惡黨のサンチョーはかくまで見事に瞞された主人の人の善い言葉を聞いて、笑ひを隠すには大骨折であつた。二人の間にはこの上尚もいろ〳〵の話があつてから、遂に各〻獣に乘つてサラゴッサへの路を辿つた。彼等はその名高い市に毎年行はれる大仕掛けな祭禮の間に合ふやうにそこへ到達したいと思つてゐたのであつた。しかしそこへ着く前に、非常に澤山の非常に重大なそ

して非常に不思議な事件が彼等の上に起つて來た。それは以下に見られる通り、記すにも讀むにも足るほどのものである。

## 第十一章　勇敢なるドン・キホーテが「死に神の會議」の馬車か荷馬車かを相手にしての異樣なる冒險のこと。



ドン・キホーテは非常に悄氣てその旅をつゞけた。心の中には自分の愛人ドゥルシネアを卑しい田舍娘の形に變へた魔術使ひ等の殘忍な惡戲を繰り返して考へつゝも、しかも彼女を元の形に回復する何等の手段も思ひつかれなかつた。そしてこの物思ひに餘りに耽つてゐたので、思はず知らずロシナンテの手綱を緩めてゐた。ロシナンテはこの自由の許されたのを見て、一歩毎に立ち止つては、そこらの野原に繁つてゐる新しい草を喰うた。

サンチョーは彼をその幻想から呼び戻した。『旦那樣。』と彼は言つた、『鬱ぎ性といふものは、畜生にはなうて人間にあるものぢやと言ひますがの、人間が餘りそれに耽けると畜生になつてしまひますぞよ。旦那樣、しッかりなされ。もとの貴方樣におなんなされ。ロシナンテの手綱を引き締めなされ。氣を晴らして心を引き立てゝ本當に武者修業らしう勇ましい元氣をお見せなされ。

こりやまア何うなされたのぢや？何ちう弱いことぢや？私等は郷國に居りますかい、フランスに居りますかい？惡魔奴は世界中殘らずのドゥルシネア樣を掻つ浚うて行つてしまへ、たつた一人の武者修業樣の安否はな、世界の殘らずの魔術よりも姿を變へることよりも大事ぢやからの。』

『默れ、サンチョー、』とドン・キホーテは弱いかすかな聲で言つた、『默れと言ふに。あの魔術にかけられた婦人に對して不敬な言葉を吐くではないぞ。あの婦人の不幸災難の咎は皆拙者にあるのぢやからの。あのお方の難儀は拙者に對するあの惡人の憎みから來たことぢや。』

『私もさう思ひますよ。』とサンチョーは答へた、『あの御婦人を前に見たことのある人が今見たらきつと胸が二つに裂けませうわい。』

『お前がさういふのも尤もぢや、サンチョー。』とドン・キホーテは答へた、『お前はあの婦人の完全無缺の美しさを見たからの。いくら魔術の力でも、お前からあの婦人の面影を消し去つたり、あの愛らしさを隱したりすることまでは出來まいからの。たゞ私にだけ、私の眼にだけあの魔術の怨靈の力は差し向けられてをるのぢや。ぢやが一つ思ひついたことがあるわい。そりや外でもない、お前があの婦人の美しさを拙者に傳へ損じたことぢや。たしかお前はあの婦人の眼が眞珠であつたと言うたやうぢやな。しかし眞珠のやうな眼は寧ろ鯖の眼で美人の眼ではないのぢや。



そして拙者の確かに承知して居るところでは、ドゥルシネアの眼は大きうて柔しうて、虹の眉毛に圍まれ居る綠の碧玉石である筈ぢや。そんな眞珠の玉はあの婦人の眼から取り去つて、その齒に移しかへい。疑ひもなく、サンチョーよ、お前はそれとこれとを、眼と齒とを取り違へたに違ひない。』

『ほんとにさうらしい。』とサンチョーは言つた、『あの方の醜い爲めに貴方樣がまご〳〵なさつたやうに、あの方の美しい爲めに私もまごつきましたからの。ぢやがそんな事は皆神樣へお委せしましよ。神樣だけは、何一つ惡い横着なごまかしの混つて居らんものゝないこの涙の谷で、この邪惡な世の中で、ふつて湧くことをちやんと見通してござりますからの。それは貴方樣が巨人なり他のお侍なりを降參させて、そして其奴に美しいドゥルシネア姫の御前へ行つて來いとお言ひ付けなさる時にや、全體何うすればよいのかと思ひましてな。その可哀さうな巨人や負かされた哀れなお侍は、一體何處へ行きやア お姫樣が見付かりませうの？ おほ方其奴等は阿呆のやうな格好でエル・トボソ中をうろつき廻つてドゥルシネア姫樣を搜すことぢやろと思ひますわい。そして其奴等は街路の眞中でお姫樣に行き逢うても其奴等が私の親父を見知らんやうにお姫樣とは見分けがつきえすま

いよ。』

『サンチョーよ、』とドン・キホーテは答へた、『多分その魔術は、打ち負けて遣はされる巨人や騎士どもから、ドゥルシネアを見分ける力を剝ぎ奪るまでには行くまいぞよ。まア あの婦人を見分けるか見分けぬかは、今度拙者が降參させる眞先の一人か二人をあの婦人のところへ遣つて、その點で何ういふことになるか戻つて委細を話せと命じて、ひとつ試驗をして見よう。』

『いや、なる程、貴方樣のそのお考へは立派なもんでござりますぞ。』とサンチョーは言つた、『その算段でやりや、私等の知りたいと思うとることは分りましよ。そしてもし貴方樣からばツかり御婦人が隱されてござるとなると、お不仕合せはあのお方よりも貴方樣の方が餘計でござりますの。けれどドゥルシネア姫樣が健在で仕合せでござりさへすりや、私等の方ぢやア一生懸命骨を折つて、精一杯辛抱して樣々の冒險を搜して、時の成り行きに任せて置かにやなりませんわい。こんな苦しみやこれより大きな苦しみにも、時が一番えゝお醫者さまでござりますからの。』

ドン・キホーテはまさにサンチョーに返事をしようとしてゐたが、丁度その道を通つて來た一臺の馬車の爲めにそれを邪魔された。その馬車には想像も及ばぬ程のいろ〳〵さま〴〵の奇妙な姿をした人間が一杯乘つてゐた。その驟馬を馭して馭者の役を勤めてゐるのは物凄い惡魔であつた。馬車には幌も蓋簀の屋根もないので、靑天井であつた。ドン・キホーテの眼に第一に映つたのは、人間の顏をしてゐる「死に神」の姿であつた。その次には彩色した大きな翼をもつた天使であつた。その片側には、全く黃金と見える冠を頭に戴いた皇帝が居つた。「死に神」の足許にギリシヤ神話に出づ愛の神で普通目隱をして弓矢を持つてゐる ユピッドが目隱しはせずに唯弓と箙と矢を持つてゐた。それにまた全身物の具に身を堅め、たゞ兜も鉢金も被らずに、樣々の色をした鳥の羽で飾つた帽子を被つた騎士もゐた。その他種々雜多な身裝や容貌の人間が一緒に居つた。不意にかういふものに出會したので、ドン・キホーテも多少ぎよつとするし、サンチョーも心から恐くなつてしまつた。しかし次の瞬間にはドン・キホーテはこれこそ新しい危險な冒險が現はれて來たのだと信じて寧ろ喜んだ。そこでこんな感じを以て、また如何なる危險にも周章ずに面接する元氣を以て、彼はその馬車の前面に二王立ちに突つ立つた。そして威猛高に大聲で叫んだ、『馬方か、馭者か、惡魔か、また何者であらうとも、その方の身の素性と行きどころと、その荷場車で運んでをる者等は何者であるか卽座に申せ。その馬車は並の馬車よりもケイロン(三途の川の渡し守)の小舟に似てをるぞ。』

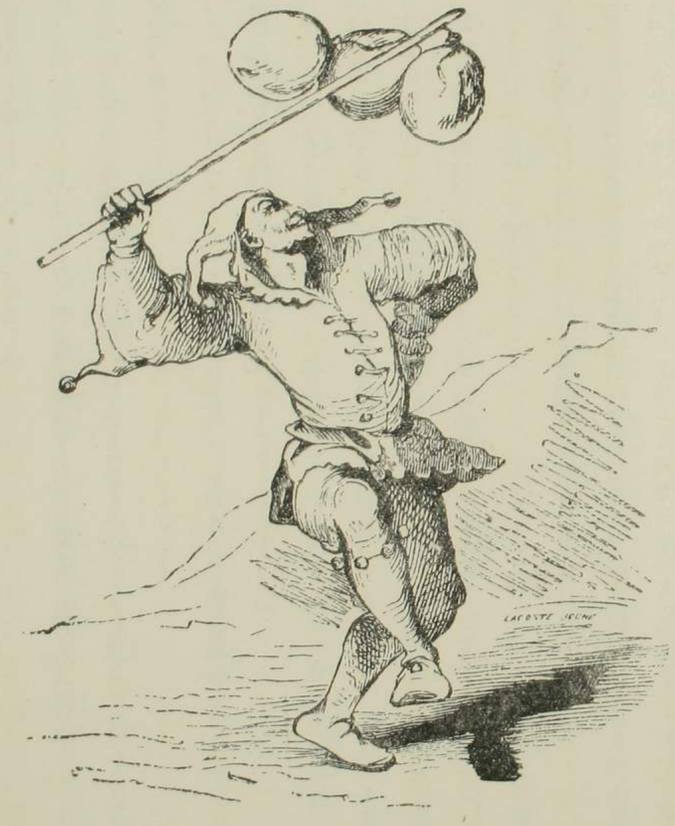
これを聞いてその惡魔は馬車を止めつゝ、靜かに答へた、『旦那樣、私等はアングロー・エル・マロー(十六世紀末に盛名ありしトレードの舞臺監督兼作者)一座の役者でござりますの。私等は今朝その小山の向うの村で謝肉祭の八日祭に「死

に神」の會議といふ芝居を打ちましたが、今夕はまた此處から見えるあの村でこの狂言をやることになつて居ります。あそこまでは餘り近いものですから衣裳を脫いだりまた着たりする面倒を省かうとて、舞臺のまゝの裝で行くところでございます。そこに居るその若者は「死に神」の役を勤めます。その隣りのは天使。あの婦人は舞臺監督の妻君で女王樣の役。この男は武士。その男は皇帝。そして私は惡魔の役を相勤めまする。また私はこの狂言の重な役を致しますので、私がこの一座の頭でございますからな。もしもつと私等のことに就てお聞きなされたいことがございますなら、私へお訊ね下さい。私は極めて正確にお答へしませう。私は惡魔でございますからな。何でも知らぬものはございませんからな。』

『武者修業の誓ひにかけて申すが、』とドン・キホーテは答へた、『拙者は初めてこの馬車を認めた時は何か大冒險が現はれたと思うたのぢや。しかし全く諸々の幻惑を避けようとすれば人は眼に見えるものを手に觸れて見ねばなりませんわい。いやこれは皆さん、失禮しました。まア折角お祭を勤めなさい。そしてな、もし何か拙者でお役に立つやうなことでもあつたら、さう言つて下されば拙者は心から喜んで致しませう。拙者はな兒どもの頃から芝居が好きで、若い頃なぞは役者の眞似が大好きでしたからの。』



彼等が斯う話してゐる間に、澤山の鈴の附いてゐる茶番役者の衣裝を着て、片端に膨れた牛の脬を三つ附けた杖を携へてゐる仲間の一人が運命の意に依つて二人の側へやつて來た。この茶番役者はドン・キホーテに近寄りつゝ、その杖を振つて脬で地面をばた〳〵敲き付け鈴をちやらちやら鳴らしながら跳ね廻つた。この厄介な化け物は非常にロシナンテを吃驚させた。そこで如何にドン・キホーテが抑へようと骨折つてもその甲斐なく、馬は逸りに逸つて、あんな骨組の身體にとても豫想もされなかつた程の早さで野原を走り出した。主人が投げ出されたと氣付いてサンチョーはダップルから飛び降り、大急ぎで主人を助けに走つて行つた。しかし彼が着いた時は、既に主人は地べたの上にあつた。そしてその側には、同じく主人と共に打ッ倒れたロシナンテが居つた。ロシナンテの元氣と活動とのとゞの詰りはいつもかうである。しかしサンチョーがドン・キホーテを助けに行かうとてダップルを離れるや否や、かの脬を持つて踊つてゐた惡魔はダップルの上に跳び乘つた。そしてその脬で驢馬を打つて、その痛さの爲めよりも騷がしい鈴の音でびッくりさせて、自分等が祭禮をする爲めに行きつゝあつた村の方へと野原を一散に走らせた。サンチョーはダップルの疾走と主人の落馬とを目擊した。そしてこの二つの重大事の中の孰れに先づ馳せ參ずべきかを知らなかつた。しかし遂に、良き家來たり良き僕たるに似合はしく、



その主人に對する愛をして、その驢馬に對する愛着に勝たしめた。尤も彼はその髏髄の杖が振り上げられてダップルの臀の方に打ちおろされるのを見る度に、死ぬ程の痛みと恐れとを感じたのではあるが。彼はその驢馬の尻尾の端を打たれるよりも、寧ろ自分の眼の玉を打たれたいと思つたのである。こんなにして困つて當惑して、彼はドン・キホーテが己れの好みよりも遙かに氣の毒な有様でへたばつてゐるところへやつて來た。そして主人をロシナンテに助け乘せてから、彼に向つて言つた、『旦那様、あの惡魔奴は私のダップルを乘り逃げしましたぞい。』

『どの惡魔ぢや』とドン・キホーテは訊ねた。

『あの小便嚢を持つて居つた奴でございます。』とサンチョーは言つた。

『ぢやァ拙者が取り返してやる。』とドン・キホーテは言つた『たとひ地獄の一番深い暗い窖に閉ぢ籠めて居らうとも。つゞけサンチョー、あの馬車はのろ〳〵行き居るから、あの騾馬を取つてダップルを失うた償ひにせうぞよ。』

『旦那様、その御手數には及びません。』とサンチョーは言つた『氣を落ち付けて下されよ。ほら、あの惡魔奴がダップルを打捨つたんで、彼奴は元のところへ歸つて來よりますわい。』それはその通りになつた。ドン・キホーテとロシナンテとの眞似をして、かの惡魔もダップルから落ちたの

で、徒歩で向ふの村へ走つて行つた。そしてダップルは自分の持ち主の方へ歸つて來た。

『それにしても、』とドン・キホーテは言つた、『馬車に乘つて居る者等を懲してあの惡魔の無禮を償はせるがよからうわい。たとへそれが皇帝陛下御自身であるにせよ。』

『旦那樣、そんなこと考へて下さりますな。』とサンチョーは答へた、『私の諫めを取り上げなされて役者と掛かり合ひはなさるなよ。あれ等は最負のある人間でござりますからの。いつぞや二人人殺しをして上げられました役者が、無罪で出て來たのを私ア自分で知つて居りますわい。なア旦那樣、あいつ等は人をおもしろがらせる陽氣な人間でござりますから、誰れでも最負にして庇ひまするのぢや。そして力を添へていろ〳〵骨を折つてやります。取り分け王樣御抱への特許を有つて居る役者は着物から樣子から殿樣のやうにしとりますぞい。』

『いや〳〵、それでも、』とドン・キホーテは言つた、『役者の惡魔に威張らせちやならん。たとへ全人類が最負にせうとも。』

さう言ひながら彼はその馬車の方へ進んだ。それはもう村のすぐ近くへ行つてゐた。彼は進みつゝ叫び出した、『待て！止まれ！陽氣な道化仲間！武者修業者の從士に駿馬として仕へ居る驢馬や獸の扱ひ方を手前どもに敎へてやらう。』

ドン・キホーテの叫ひ聲が非常に大きかつたので、馬車の上の者等はそれを聞き分けることが出來た。そしてその言葉によつてその心を推察して、「死に神」は卽座に馬車から跳び下りた。皇帝や惡魔の馭者や天使もその後から下りた。女王もキユーピッドも後に殘りはしなかつた。そして皆々手に〳〵石塊を持つてずらりと並んで、その石塊の矢玉でドン・キホーテを迎へようと身構へた。彼等がかゝる勇ましい陣立をして、今にも凄じい石の矢玉を放たうと腕を振り上げてゐるのを見ると、ドン・キホーテはロシナンテを引き止めた。そして何うしたら自分に害を受けることも最も少くして敵を攻撃することが出來るかと考へ始めた。彼が止つた時、サンチョーは追ひ付いた。そして主人が、この秩序整然たる軍勢を攻撃する氣で居るのを見ると、彼に向つて言つた、

『こんな喧嘩をなさるちうは氣違ひの骨頂でござりますぞい。旦那樣、よう考へて見なされ。川の豆小石のが澤山あつた日にや、眞鍮の釣鐘の下にでも隱れにや防ぐ鎧はござりませんわい。お負けにたつた一人で、「死に神」まで入つてをる軍勢に攻めかゝるのは、勇氣ぢやない、輕はづみといふものぢや。それに向ふにや皇帝樣が御自分で善い天使や惡い天使を味方にして戰うてござるのぢやもの。かう言うても靜かになさらんなら、あの人等は王樣や殿さまや皇帝樣のやうに見えるけれど、あの中にや一人も武者修業は居りませんのぢやと分つたら止めなさるぢやろ』。



『なる程お前は圖星を指したぞ、サンチョー。』とドン・キホーテは言つた、『さう言はるれば私も一旦固めた決心を飜へしてもよい、また飜へさねばならんのぢや、これまで幾度もお前に話した通り、正當な騎士の位を有たん者に對しては、拙者はこの劍を拔くことをも出來ず、また拔いてもならんのぢや。サンチョーよ。こりやお前の役ぢや。もしお前のダップルに加へられた辱めの仇を取らうと思へば取るがよい。私はこゝから掛け聲をかけたり益になる助言をしたりして、お前に力を貸さうわい。』

『旦那樣、誰へも敵討ちすることアござりませんよ、』とサンチョーは答へた、『惡に仕返しをするといふは善いキリスト信者のすべき事ぢやござりませんからの。それにまた私の驢馬には、苦情は私の心に任させることに致しませう。かうするのが天命のつゞく限り無事平穩に暮す道でござりますわい。』

『フム、』とドン・キホーテは言つた、『善良なるサンチョーよ、分別あるサンチョーよ、キリスト信者のサンチョーよ、正直なサンチョーよ、お前の決心がさうならば、この怪物どもはこのまゝに捨て置いて、もツと良いもつと價値のある冒險を捜すことにしよう。見受けるところ此の地方でなら驚くべき冒險を夥多しく見付けることが出來ぬ筈はないと思ふからの。』

彼は卽座に馬首を轉じた。サンチョはダップルを取りに走つた。「死に神」も逃た全軍勢も自分の馬車へ戻つて旅を續けた。かうして物凄き「死に神」の馬車の冒險は芽出度く終つた。これサンチョーが主人にすゝめた分別ある諫めのお蔭であつた。主人はその翌日、一人の戀せる騎士を相手に、此の日に劣らぬすばらしい興味ある新冒險を試みたのである。



## 第十二章　勇敢なるドン・キホーテの冒險。

「死に神」と行き逢うたその日の夜を、ドン・キホーテと彼の從士とは高い蔭深い木立の下で過ごした。そしてドン・キホーテはサンチョーの勸めにより、ダップルの運んでゐる食ひ物の中から少しばかり食つた。その夕飯の間に、サンチョーは主人にかう言つた、『旦那樣、もしやあの三疋の牝馬の子の代りに、冒險で手に入り次第眞つ先きの捕物を御褒美に望みでもして居つたら、何と私は馬鹿に見えましたろ。やつぱり〳〵、「飛んでゐる兀鷹よりや手の中の雀がましでござりますわい。』

『さうは言ふものゝ、サンチョー、』とドン・キホーテは答へた、『もし拙者の思うた通りに、お前があいつ等をば拙者に攻めさしたら、何う少う積つてもあの皇帝の黃金の冠とキューピッドの染めた翼は分捕品としてお前の手に落ちたらう。拙者は必ずあれを强奪してお前の手に渡したらうか

らの。』

『あんな役者の皇帝の笏や冠はな、純金ぢやつた例がござりません。ありやほんの眞鍮箔か錫でござりますよ。』とサンチョーは言つた。

『それはさうぢや。』とドン・キホーテは言つた、『何故といふに、芝居の道具は芝居と同樣に、たゞの捧へごとや眞似ごとでなうて本當のものであつては宜しくないからぢや。この芝居に對してはのサンチョー、——隨つてまたその芝居を演出する人々に對しても——お前は好意を有つて居つて欲しいのぢや。それ等は皆、人生の移り行く姿を生き〳〵と見せてくれる鏡をばその一歩一歩に私等の前に供へるもので、大いに國家に有用な道具ぢや。また芝居や役者よりも忠實に、私等のありのまゝの相や本然の相をば私等の目に示してくれる似寄りの物は何もないのぢや。これ、お前は王や皇帝や法王や騎士や姫君や、その他さま〴〵の人物の出て來る芝居を見たことがないか？惡黨を演る者もあれば、ごろつきを演るものもある。これは商人、あれは武士、一人は頓才の鋭い阿呆役になり、また一人は馬鹿な戀人になる。が芝居が終つて、銘々着てゐた着物を脫いでしまふと、殘らずの役者が同等の人間になるのぢや。』

『へい、私もそれなら見たことがござります。』とサンチョーは言つた。



『さうか、そんなら、』とドン・キホーテは言つた、『狂言でも人間の世界にも同じことが起るのぢや。人間の世界では皇帝の役を演る人もあれば法王の役を演る人もある。つまり芝居に仕組まれる限りの樣々な役を演るのぢや。しかしそれが終れば、卽ち壽命が果つれば、死は銘々を區別してをる衣裳をば殘らず剝ぎ取つてしまふのぢや。そこで墓場は中では皆平等ぢや。』

『いかにも上手な比べやうぢや！』とサンチョーは言つた、『尤もさほど新しいことはござりません。ま一つ將棋の遊びの例へと一緒に、その話は私ア何度も何度も聞きましたからの。將棋の方でも、勝負がつくまでは何の棋子も銘々それ〴〵の役目を持つてをりますぞい。けれど勝負がすむと皆混ぜこぜにごちや〳〵と振られて袋の中へしまひこまれる。丁度墓場で壽命が果てるのとよう似とりますわい。』

『お前は毎日だん〳〵鈍さが取れて、賢うなつて行くのウ、サンチョー。』とドン・キホーテは言つた。

『へえ、』とサンチョーは言つた。『そりや屹度貴方樣の賢いのが私へうつッたでござりますよ。痩せて枯れた土地でさへも、肥料をやつて鋤きなさるとよい收穫のあるやうになりますわい。かう申しますのはな、私のこの乾枯びた頓智の痩せた地面へ落ちて肥料になつたのが貴方樣のお談

話で、そして私が貴方樣へ御奉公してお供をして暇つぶしをしたのが鋤きを入れたことになりましたのちや。この加勢があれば、必ず豐かな實を結んで、貴方樣が私の乾からびた頭の中へ拵へなさつた良いお躾の畝から滑りも轉げもしますまいよ。』

ドン・キホーテはサンチョーの氣取つた言ひ廻し方を笑つた。しかし彼が自分の改善進歩に就いて言つたことは本當だと認めた。それは時々彼を驚かすやうな口の利き方をするやうになつたからであつた。尤もサンチョーは練りに練つた丁寧な上品な言葉で言はうとすると、何時も、いや大抵は、その愚直の絶頂から無智のどん底へ眞ッ逆樣に墮ちるのであつた。そして彼が最も勝れて修養や記憶力を示したのは、當の話題に關係があらうがあるまいが、やたらに諺を引きずりこむところにあつた。これはこれまでにも既に見られたらうし、またこの物語の進み行くにつれて見とめられるであらう。

彼等はこんな會話のうちにその夜の大部分を過ごした。しかしサンチョーは自分の眼の帳を下したく思つた。これは彼が、いつも眠りたい時に用ゐる言葉であつた。そこで彼はダップルの馬具を釋いて、たらふく草の喰へるやうに自由にしてやつた。しかしロシナンテの鞍は下してやらなかつた。といふのは、その主人の嚴命として、自分等の出遊中は、いや、屋根の下に眠らな

い間は、ロシナンテの馬具を脫がしてはならないからであつた。蓋し武者修業者等に依つて制定され遵奉された古來の習慣として、面勒だけを外して鞍の前輪に懸けて置くことはあつたが、しかしその鞍を馬から外すことは決してなかつたのである！サンチョーはその掟に從つた、そしてダップルにしてやつたやうにロシナンテも放し飼ひにした。このダップルとロシナンテとの間には、子々孫々に語り傳へられる比べるものない深い友情があつた。それでこの信憑すべき物語の著者はその爲めに特別な數章を捧げたが、それはかくも勇ましい物語にあるべき禮儀、禮節を守る爲めにこの中へは挿入しなかつた。しかし時として著者は自分のこの決心を忘れて、これ等の獸が一緒に居る時は、いかにも熱心に互に掻き合ふことや、また彼等が疲れたり滿足したりすると、ロシナンテが自分の頸をダップルの頸の上に投げかけて、向ふ側へ一ヤード以上もだらりと伸ばして、そしてこの一對はじッと考へ込んだやうに地面を見詰めながら三日の間でも、或ひは少くとも二人きりで打棄られて居る間、乃至腹が減つて何うしても食ひ物を見付けに行かねばならぬやうになるまでは、そのまゝの姿勢で立つてをるといふことなどを述べてゐる。傳ふるところに豫れば著者は彼等の友情をニスス（ポリンプ悲劇の題目となれるアガメンノンの子であるトロア人で後イタリーに行きユーリヤルスとなり親交す。その友情はヴージルに依つて歌はる）とユーリヤルスのそれに、またピラーデスとオレステス（ポリンプ悲劇の題目となれるアガメンノンの子である）とのそれに準へて記してゐるとのことである。若しさうとすれ

ばこの二疋の柔順しい獣の間に堅實な友情があつたに違ひないことは、全人類が嘆美して認める
であらうし、また友情を保つことの薄い人々を愧しめよう。こゝからしてこんな諺が出來た、

誠の友の友はなし
蔦はやがて槍となる。

また他のある人は歌つた——

友だちの仲は床虱云々（友だちの仲も眼の依怙贔屓にも用心必要なりとの意）

さて作者がこれ等の獣の友情を人間のそれと比べたとて、少しでも彼が脇道へ外れたとは思は
ぬやうに願ひたい、何故と言ふに人間は獣から數多の教訓を受け、數多の重要なことを學んだか
らである。その實例を擧げれば、鶴鳥からは灌腸劑を、犬からは吐劑や感恩の情を、鶴からは油
斷せぬ事を、蟻からは先見を、象からは謙讓を、馬からは忠義を、それ〴〵學んだのである。

サンチョーは栓の樹の根元にとう〳〵眠りこんだ。その間にドン・キホーテは頑丈な槲の樹の
根で坐睡んだ。しかしほんの少時過ぎると自分の背後に物音が聞えたのでびッくりしながら起き
上つて、耳を欹てつゝその物音の來た方を見やつた。そして馬に乘つた二人の人を見とめた。そ
の一人は鞍から飛び降りて、いま一人に言つた、『さア降りて馬の面勒を外しなさい。見たところ此



處には馬の草が澤山あるやうぢや。それに戀に惱む私の心には何よりの森とした寂しさぢや。』

かう言つてその男は地べたへ臥そべつた。そしてその身體を投げ下す途端に、その着てゐた鎧
ががちや〳〵と鳴つた。これによつてドン・キホーテは、これは必ず武者修業者に違ひないと認
めた。そこで、まだ眠つてゐたサンチョーのところへ行つて。その腕を摑んで搖り起した。そし
て少からぬ骨折で辛とサンチョーの眼を覺まさした。そして低い聲で言つた、『これサンチョー、
冒險が一つやつて來たぞよ。』

『良い冒險であつて欲しいな。』とサンチョーは言つた、『そして旦那樣、その冒險樣ア何處に居
られますぞい？』

『何處に、サンチョー。』とドン・キホーテは答へた、『眼を向けて見い。さうすりやそこに武者修業
者が一人臥そべつて居るのが見えようが、どうもさう除り嬉しさうには見えぬわい。といふのは
な、その馬から跳び降りて地べたへ身體を投げるところなぞはどうも氣落した樣子に見えたわい。
そして臥しなに鎧ががちや〳〵と鳴つたのでの。』

『へえ、』とサンチョーは言つた、『それで貴方樣にや何うしてそれが冒險ぢやと思はれますか
い？』

『拙者は別にこれがもう出來上つた冒險ぢやといふ積りぢやないのぢや。』とドン・キホーテは答へた、『しかしこれが冒險の序幕ぢやといふのぢや。冒險といふものはかういふ風に、始まるものぢやからの。しかし待てよ、琵琶か六絃琴かの調子を合せて居るやうぢや。それにあれが唾を吐いたり咳拂ひをしたりしてをる樣子から察すると、何か歌はうとして居るに違ひないぞよ。』

『ほんとに、仰有る通りでござりますな。』とサンチョーは言つた全くこりや戀ひ焦れてをるお侍ぢやな。』

『戀をしてをらん騎士は一人もないわい。』とドン・キホーテは言つた、『ぢやがじツと聞かう、もし歌べば、その絲口からあれの心の絲卷はたぐり出されうからの。卽ち心滿ち溢るれば語るぢやからの。』

サンチョーは主人に答へようとしてゐた。しかしさほど惡くもないが良くもないその森の騎士の聲によつて遮られた。そして二人が氣を付けて。それを聞いてゐるとかう歌つた——

ソンネット

あはれわが君、君がこゝろを打ちあけて、
履むべき掟を吾に示せ。



わが心は御心のまに〳〵、
わが足は君が掟を迷ひ出でじ。
苦しみの聲默させん爲めわれに死ねとや？
さらば今のわが身を冷たき死骸と思へ。
わが悲しみを語る手段を變へよとや？
さらばわが戀こそを語らん。
柔かき蜜蠟と堅き金剛石、
端と端との一つになれるぞわが心。
されどなほ戀の掟にはおとなしく
わが胸は堅きも柔かきも君に獻ぐ。
君が刻み鏤りつくものは皆、
とこしへに消ゆることなくその上に殘らん。

『あゝ！』とさも最も奥深い心の奥底から引き出したやうに言つて、その森の騎士はその歌を歌ひ終つた。そしてやがて陰氣な痛ましい聲で叫んだ、『あゝ、この世で一番美しいそして一番情な

い婦人よ！この上もなく穏かなカシルデア・デ・ワンダリアよ、おん身に身心を献げて居るこの騎士を、果しなくさまよひ回らせて、荒々しい骨の折れる労役のうちに空しく朽ち果てさせようと本當に思うてござるのか？私はナヴレの殘らずの騎士にも殘らずのレオンの騎士にも殘らずのタルテシアの騎士にもそして最後に殘らずのラ・マンチャの騎士にもおん身を全世界第一の美人と認めさせたのぢや。それでもう十分ではないか？』

これを聞いてドン・キホーテは言つた、『さうではないぞ。拙者はラ・マンチャの騎士であるがまだ左樣なことを認めたことがない。また拙者の婦人ドゥルシネアの美しさを打ち消すやうな左樣なことを拙者が認めるわけにも行かず、またさうしよう筈もない。サンチョーよ、お前もこの騎士が譫言を言うて居るのは分らうの。ぢやがまアぢッと聞いて居らう。大方この人はもッと自分のことを話しさうぢや。』

『さうでござりましよ。』とサンチョーは答へた、『この人は一月でも愚痴をこぼし通しさうな樣子に見えますわい。』

しかしさうはならなかつた。その「森の騎士」は自分の近くに人聲を聞いたので、その歎きを續けようとはせずに、立ち上がつて明瞭な慇懃な調子で呼びかけた。『そこに居られるのは何方です



か？何ういふ方ですか？貴方は仕合せなお方ですか、それとも不仕合せなお方ですか？』

『不仕合せ者の方ぢや。』とドン・キホーテは答へた。

『それではこゝへお出で下され。』と森の騎士は言つた。『そして貴方の近づかれる私は、悲痛と歎きの塊ぢやと御承知置き下されい。』

ドン・キホーテはかやうにやさしく丁寧に返事を受けたのでその騎士のところへ行つた。サンチョーもさうした。

悲しめる騎士はドン・キホーテの手を取つて言つた、『さアこゝへお坐り下さい、騎士殿、とお呼びしますのは、武者修業の自然の褥で且つその持前の休み場所でござりまする夜と寂寞との伴なふこの場所にお居でなさるからには、それが卽ち貴方の騎士であられるといふ、また武者修業の道を奉ずる方であられるといふ十分な證據でござりますからな。』これに對してドン・キホーテは答へた、『仰有る通り拙者は騎士で、その道を奉ずる者でござります。さまざまの悲しみ不幸災難は拙者の心に宿りましたが、それでも尙他人の不幸に對して感ずる同情の念は心から取り去られませなんだ。唯今貴方の歌はれたものによつて、拙者は貴方のお不仕合せは戀から、卽ち先程の歎きの中で呼ばれましたあの美しい情ない人に對する貴方の戀から湧き出て居ると推察致しまし

た。』

この間彼等は固い地面の上に平和に睦じく身を寄せて坐つてゐた。いかにも、夜が明けるや否や互に頭を割り合はうとして居るなどゝは見えなかつたのである。

『騎士殿、貴方様も戀をして居られるのではございませんか？』と森の騎士はドン・キホーテに訊ねた。

『不幸にして拙者も。』とドン・キホーテは答へた、『尤も豊かな愛情から起つて來る災難は、不幸とよりも寧ろ恩寵と思ふべきではありますがな。』

『いかにも、』と森の騎士は答へた、『もし邪慳の爲めに私等の思慮と分別がでんぐり返されさへしませんなら。と申すのは、その邪慳が過ぎると丁度復讐のやうに見えますでな。』

『拙者はまだわが婦人に邪慳にせられたことはありませぬ。』とドン・キホーテは言つた。

『ほんとにさうでござりますぞい。』と直ぐ側に立つてゐたサンチョーは言つた、『私の方のお姫様はな、そりや小羊のやうにおとなしうて、バタ巻よりも軟かうござりますからの。』

『左様です。』とドン・キホーテは言つた。



『私は今日まで主人が話してゐる時に差し出口を利くやうな從士を見たことがございませんよ』と森の騎士は言つた、『少くとも、そこに居ります私の從士は、あれの親父ほどに大きうございますが、私の話してをる時に唇を開けた例は一度もござりませんわい。』

『全く私ア口をきゝましたぞい。』とサンチョーは言つた、『また私にや口がきけますわい、どんな人の前でも、またたとへ――いやなに――そんな事を言ふといよ〳〵惡うなるばかりぢや。』

森の從士はサンチョーの手を取つて言つた、『さア私等ア私等で家來らしう思ふ存分話せるとこ ろへ行きましよ。そして旦那さんがたには銘々の戀物語を負けず劣らず話させましよわい。屹度話し切らんうちに夜が明けましよわい。』

『そりや結構ぢや、』とサンチョーは言つた、『そして、私が一番よう喋舌る家來の中に入るかどうかゝお前さんに分るやうに、私が何ういふ人間ぢうことをお前さんに話して聞かせましよ。』

かうして二人の從士は片隅へ退いた。そしてこの二人の間に交換された會話は、その主人等の間に交換されたのが眞面目であつたと同じ位に滑稽なものであつた。

## 第十三章　には、二従士の間に交された智慮ある斬新且つ穏和なる對話とともに、森の騎士の冒險が續く。

その騎士等と従士等とは二組に分れた。一つの組は身の上話をするし、他の組は戀物語をした。しかしこの物語は先づ第一に家來どもの會話を記し、その次に主人等のを記す。卽ちかうである。森の従士は主人等から少し離れるとサンチョーに言つた、『お前さん、私等のやうに武者修業の家來になつて送つて行く暮しはつらいもんぢやの。眞實、私等は顏に汗を出して飯を食ふんぢや。こりや神樣が私等の大本の先祖へおかけなさつた呪ひの一つぢや。』

『また私等は自分の身體を凍らせて飯を食ふと言うてもよからう。』とサンチョーは言つた、『何故と言うて、可哀さうな武者修業の家來よりも餘計に暑さ寒さに逢ふ者がありましよかい？　まアそりやさうでも、食ふ物がありさへすりやほど惡うもあるまいが。パンがあれば悲しみも輕いと言ひますからの。ぢやが時によると私等は一日でも二日でも、たゝ吹いて來る風の御馳走だけ



で、斷食を破らずに行くことがあるわい。』

『そんな事も御褒美の望みがあれば耐へ忍べんこともあるまい。』と森の従士は言つた、『自分の御奉公してをる武者修業さんが無暗に不仕合せでさへなけりや、少しするうちにや、その家來はせめて何處かの島か立派な國を見ごとに治めいといふ御褒美を貰ひますからの。』

『私はな、』とサンチョーは言つた、『もう疾うに何處かの島の總督で滿足しますと私の旦那樣へ申すのぢや。旦那樣はな、ほんとに氣高い物吝みせん方ぢやで、もう何度も〳〵私に約束されましたよ。』

『私はな、私の御奉公の褒美には役僧の役で滿足するのぢや。そして旦那もそれを受け合うて下されたのぢや。』と森の従士は言つた。

『お前さんの旦那樣は屹度敎會筋のお侍ぢやな。』とサンチョーは言つた、『それで御自分の御家來にはそんなやうな御褒美を下さることが出來るのぢや。けれど私の旦那はほんの平人ぢや。尤もある賢こい、けれど私の考へぢや工夫の上手な仁がな、旦那樣を說きつけて大僧正樣になるやうにしなされと勸めましたわい。ぢやが旦那は皇帝より他の者にやならうと思うてござらんのぢや。けれど私は自分が敎會の役人になる柄ぢやないと思ふので、もしや旦那樣が敎會へ入らうと

いふ氣を起しはしなさらんかと、その間といふものはびく〳〵して居りましたぞい。打ち明けて言ふとな、私アかう人間に見えるが、敎會へ行きや獸も同然ですからの。』

『はてな、さうするとお前さんは思ひ違ひをして居るわい。』と森の從士は言つた、『その島の總督の職はどれもこれも面白うは行きませんのぢや。島によつて、治めにくかつたり、貧乏であつたり、不景氣であつたりして、一口に言ふと、一番上等の撰り拔きの島でも心配や氣苦勞を山のやうに持つて來るので、その島に當つた不仕合せな人がそれを背負はにやならんのぢや。そこでこんな厄介な御奉公を始めた私等にや、自分の家へ歸つてもツと自分に面白い仕事——たとへば狩ぢやの漁ぢやのをした方がよツぽどましぢやろと思ひますわい。まア何處の從士でも自分の村で氣晴らしをする爲めに乘馬の一疋や獵犬の二疋や釣竿の一本位持たんほど貧乏な者ア居りませんからの。』

『私アそんな物は何も欲うはない。』とサンチョーは言つた、『實は私ア乘馬がないのぢや。ぢやが私の旦那の馬の二倍も値打のある驢馬を一疋持つとります。もし私が、たとへ大麥四ブッシェル（一ブッシェルは二斗餘）をおまけに貰うても、その驢馬を他の物と換へでもせうものなら、今度の復活祭は緣起の惡い復活祭になるがよい、お前さんは私が除りダップルを——私の驢馬の毛色が斑ぢやからな



——あれを大事がるで笑ひなさるぢやろ。また獵犬の方は、私ア要りませんよ。私の村にや有り餘るほどあるでな、お負けに狩は他人の費用でする方が一段面白いものぢやからの。』

『お家來さん、』と森の從士は言つた、『本當に全く、私アもうこんな武者修業たちの醉拂ひの世迷ひごとにや緣を切つて、村へ歸つて兒ども等を育てようと腹を決めて決心しましたぞい、私ア三つの東洋の眞珠のやうな三人の兒どもを有ツとりますでの。』

『私にや二人ありますよ。』とサンチョーは言つた、『そりや法王樣の御前へ出しても恥しうないが、取り分け一人の娘は、憚り樣ですが、伯爵樣の奥樣として育てゝ居りますわい。尤もあれのお袋は不承知ですがの。』

『そして伯爵の奥樣として育てられてござる御婦人はお幾つですかい？』と森の騎士は訊ねた。

『十五か、それより二つ多いか少いかですがの。』とサンチョーは答へた、『けれどもう槍のやうに背が高うて、四月の朝のやうにみづ〳〵しうて、荷揚人足のやうに力がありますわい。』

『そんな取り柄がありや、伯爵の奥樣どころか綠の森の女神にでもなれますわい。』と森の從士は言つた、『この內所の子のばいためッ！　こいつえらい糞力を有ち居るな！』

これに對してサンチョーは幾らか澁い顏をして答へた、『彼女はばいたちござらんぞ。また彼女

のお袋もさうぢやなかつた。憚りながら私の眼の黒いうちは、二人ともそんなものにやさせんのぢや。もツと丁寧に口を利きなされ。禮儀の固りと言うてよい武者修業の中で育つた者としちやア、お前さんの言葉はえらい不似合ひのやうぢや。』

『いや、お家來衆、お前さんは御世辭が一向分らんの。』と森の從士は答へた、『はてさて！　あの馬乘りが廣場で牡牛を見ごとに槍で突く時とか、誰れか〻大した見事なことをする時にや、「ヤー、内所子の野郎ッ！　何てうまくやることぞ！」とよう言ふが、言ひ方こそ惡口のやうに見えても、それが實はえらい讃め言葉ぢやとお前さんは知りなさらんのか。お前さんも、こんな御世辭を兩親に受けさせる泣のことが出來んやうな息子や娘は、己れのぢやないと言はツしやるがよい。』

『私アそんな奴を我が子とア言ひません。』とサンチョーは答へた、『さういふ風な同じ理屈でなら、私でも私の兒どもでも女房でも、殘らず世にも珍らしいばいたぢやと言うてもえゝのぢや。私のうちの皆の者のすることや言ふことは、皆いの一番にこの讃め言葉に當るやうなものでございますからの。あゝも一度女房や兒どもに逢へますやうに何うぞ神樣がこの恐ろしい罪から私を救うて下さるやうに、も一度言ひ直して見るなら、この危い武者修業の家來といふ商賣から私を救ひ出して下さるやうに。この商賣に引掛つたのはこれで二度目で、それも先にモレナの山中で



見付けた百デュカット入りの財布に誘き出されてぢや。惡魔奴は始終ドウブルーン（昔十六國の價ある古の金貨）の一杯入つた袋をこゝでもそこでも何處でも私の眼の前にちら〳〵させやがるので、私ア何時もその袋に手を掛けて懷ろに入れて家へ持つて歸つて、金貸しをして利子を取つて王樣のやうに暮してをるやうな氣がしますわい。これを考へとるうちは、私の旦那といふ薄馬鹿さんと一緒に辛抱する難儀も皆輕うなるのぢや。私の旦那は、私アよう知とるが、お侍といふよりか氣違ひぢや。』

『なる程慾張りは袋を裂くといふのはこゝぢやな。』と森の從士は言つた、『ぢやがお前さんがその氣違ひのことを言ふなら、世の中に私の旦那樣より上の氣違ひはありませんぞよ。旦那は世間で言ふ「他人事のおせツかひが驢馬を殺す」といふ人間の内に入りますからの。別のお侍の正氣を取り返してやらうとて自分が正氣を失うて、そして捜し出した揚句にや、私の知つて居るところぢや、自分がひどい目に逢はされるやうなものを捜しに行きなさるのぢやからの。』

『そして、あの旦那も戀をしてござるかの？』とサンチョーは訊ねた。

『そうぢや、』と森の從士は言つた、『カシルデア・デ・ヴンダリアと言うてな、それは全世界に又とないやうな生のまゝな、それでよう燒けたお姫樣ぢや。けれどそれだけで引ツかゝつてござるのぢやない。もツと大事な目論見が腹の中でぐつ〳〵鳴つて居るからぢや。それは今にやがて分り

ますわい。』

『凸凹のないやうな平な途はないものぢや。』とサンチョーは言つた、『他の家では豆を煮るが、私の家にや鍋に一杯もある（自分に自分の分以上に不仕合を得たといふ意）。氣違ひは正氣のある者より餘計にお弟子や居候が出來ますわい。けれども、心配も仲間があれば氣が安まるちう諺が些とでも眞なら、お前さんもやツぱり私のやうに氣違ひの旦那に奉公してござるのぢやから、私アそれで氣が安まりますかい。』

『私の旦那は氣違ひぢやが勇ましい。』と森の從士は答へた、『そして氣違ひよりも勇ましいよりも何よりも惡戯好きぢや。』

『私の旦那はさうぢやない。』とサンチーョは言つた、『あの人には少しも惡戯好きのところはないのぢや。それどころか水注子の心、愚直一點張りの意を有つてござる。あの人は誰にも害をする考へはなうて、誰に向いても親切なばかりぢや。また心に何の惡意も有つてござらん。兒どもでもあの人を、晝の日中を夜ぢやと思はせることが出來るぢやろ。その人の善いところから、私アげたことを無暗にやらせる氣にはなれんのぢや。』

『それでもな、お前さん。』と森の從士は言つた、『もし盲人が盲人の手引きをしたら、二人とも溝へ落ち込むかも知れんわい。靜かな退軍の合圖をして面々の村へ歸る方が私等には上分別ぢや。冒險を捜す人は、何時も良いのを見付けるわけには行かんからの。』

サンチョーは仕切りなしに唾を吐いてゐた。そしてその唾液は稍粘つて乾涸びてゐるやうに見えた。これを見て取つて同情心の厚い森の從士は言つた、『私等があんまり話したので舌が上顎へ粘り着いて來たやうぢやな。けれど私は一寸結構な口しめしを鞍の前輪に吊して居りますわい。』そして立つて行つたが間もなく大きい葡萄酒の德利と半ヤードもの長さのバスティー（肉製の饗宴とを持つて來た。それは決して誇張ではない。何故なれば、非常に大きな熟兎で拵へたもので、サンチョーはそれを取り上げて見て仔山羊どころか親山羊で拵へたものだと思つた位であつた。そしてサンチョーはこれを眺めながら言つた、『まア お前さんは、これを持ち歩いてゐなさるかい？』

『はて、お前さんは何を考へてゐなさるのぢや？』と相手は言つた、『私をけちな家來と思つてゐなさるかい？　私の馬の鞦のところにや、將軍樣が御出陣の時に持つて行きなさるのより上等な兵糧入が載せてあるのぢや。』

サンチョーは強ひられるまでもなく食つた。そして眞暗の中で、繫索の結び目のやうに次から次へと頬張つて嚥み込んだ。そして言つた、『お前さんは本當に賴み甲斐のある御家來ぢや。富裕

な立派な本式の御家來ぢや。そりやこの御馳走で分りますわい。こんな物は、魔術で此處へ持つて來られたのでないまでも、兎に角さうらしう見えますわい。不仕合せな乞食見たやうな私のやうぢやないわい。私の鞍嚢の中にはな、それで以て巨人の頭でも打ち割れる程に堅い乾酪の一と碎片と、それにお伴をしていなご豆が少々、それに棒の實と胡桃が少々、たつたそれだけでござります。これも旦那樣が嚴しいからぢや。武者修業は乾た果物と野原の草だけで生命を繋いで行かにやならんちう旦那樣の考へや規則のお蔭ぢや。』

『お前さん、ほんとはの、』と森の從士は言つた、『薊とか山梨とか木の根草の根などは私の口にや合はんのぢや。私等の旦那樣たちは、騎士道の考へや掟によつて銘々の好きなやうにして、決められた物を食べなさるがよいのぢや。私ア旦那方が何と言はツしやらうと、自分の食物人とこの德利を鞍の前輪に吊して居りますよ。そしてこの德利は本當に私に取つちやア守本尊でな、可愛うて、私ア仕切りなしに何遍も〳〵此奴を接吻して抱いてやツとりますのぢや。』とさう言ひながらその德利をサンチョーの手に渡した。サンチョーはそれを高く揚げて自分の口へ押し當てゝ、十五分間も空の星を睨んでゐた。そしてたらなく飲んでしまふと、自分の頭を片方へかしげて、深い溜息を一つ吐いて叫んだ、『あゝ、內所子の野郎、こりや何ちうお慈ぢや！』



このサンチョーの叫びを聞いて森の從士は言つた、『それ〳〵、お前さんもこの酒を讃めるに內所子と言ひなさるぢやないか。』

『へえ、』とサンチョーは言つた、『そりやそうぢや。しかし讃める心からぢやと分つてをれば、內所子と言うても無禮にやなりませんわい。それはさうとお前さん、こりやほんとに、シューダッド・リアル（ラ・マンチヤ州の首府で、葡萄酒の名産地）酒でござりますかの？』

『おゝ、珍らしい舌利ぞや！』と森の從士は言つた、『全くこりや餘所のぢやない、おまけにまう何年か經つて居りますわい。』

『その方は私に任せなされ。』とサンチョーは言つた、『大丈夫、私アどうにか出所を當てますわい。御家來さん、お前さんが酒の香さへ嗅がせりや、私アその酒の出所から種類から風味から性から、また味の變ることから、その他酒のことなら何でもちやんと當てゝ見せますがの。一體私がひとりでにかうして酒の味を利き分けるのをお前さんは何う思ふかい？　けれどそりや何も不思議なことアないのぢや。私の親類に、親父がたに、この上なしの舌利が二人居りますのぢや。この人等アもう長いことラ・マンチャに知れ渡つてをりますがの。その人等のやつたことをその證據に今話しましよ。この二人は或る時同じ樽の葡萄酒の味檢をやらされましたのぢや。そしてその酒の

出來具合や性質や、良し悪しを訊かれましたのぢや。一人の方はそれを舌の尖端で味を見たが、も一人の方は鼻先まで持つて行ただけぢやつた。そして初めの男は、この酒にや鐵の香がすると言ひ、二番目の男は、いや柔皮の香が強いと言うた。するとその持主は、樽は綺麗で葡萄酒の外にや何にも混ぜて居らんから、鐵や柔皮の香のする筈がないと言ふた。それでも、この二人の舌利どもは、自分等の言うたことを頑張つたのぢや。さて時が經つて、葡萄酒は賣つてしまうて、樽を掃除しに行くと、その中に革紐のついた小さい鍵が入つて居つたのぢや。それ、かういふ血統から出た者ぢやから、こんな事に嘴を出すのは尤もでしよがの。』

『それぢやから、言ふのぢや、』と森の従士は言つた、『もう私等は冒險を捜しに行くのは止めにせう、そして手元にパンがあるのぢやから菓子は捜しに行かんで、銘々の秣槽へ歸らうとさ。神樣の御意ならどうせさうなるのぢやから。』

『私の旦那がサラゴッサへ着きなさるまでは、私ア御奉公を續けましよ。その時が來たらお互ひに分りましよ。』とサンチョーは言つた。

つまり、この二人の従士は非常に話し且つ飲んでゐたので、遂に眠さの爲めにその舌は動かぬやうになりその渴きは緩められた、蓋しその渴きを全く消すことは出來ない事であつた。そこで



此の一組は、今や殆んど空になつた德利にかぢり付き、半ば嚙み碎かれた肉片を口にしたまゝ眠りこんだ。そこで吾々は差し當り、この二人をこのまゝにして置いて、さて森の騎士と憂ひ顏の騎士との間に起つたことを述べることにしよう。

## 第十四章　には森の騎士の冒險が續く。

ドン・キホーテと森の騎士との間にはいろ〳〵のことがあつたが、その中でこの物語の傳へるところに據ると、森の騎士はドン・キホーテに向つてかう言つた、『騎士殿、手短に申しますと、私は前世の因緣で、いやもつと適切に申せば自分の好みで、世にも類なきカシルデア・デ・ヴンダリアに戀するやうになりました。あの婦人を世に類ないと申すわけは、その身體の恰好といひ、その身分の高いこと容貌の美いこと、何の點に於いても類がないからです。さても今申すこのカシルデアは、私の恥しからぬ思ひや、やさしい望みに對する報いとして、丁度あの繼母がハアキュリーズ〔ギリシア神話中の勇士、繼母ユーリーズの爲めに十二の冒險を命ぜらる〕にしたやうに、一つ冒險をして終へると、この次ぎの冒險をし遂げれば貴方の望みを叶へて上げますと約束して、いろ〳〵さま〴〵の冒險をやらせましたのぢや。しかし私の骨折は次から次へと增して行つて、算へ切れん程で、私のこの操正しい願の成就する發端になるべき最後の冒險はいつのことゝも分りません。或る時は、あの婦人はあの名高いセヴィール



の女巨人と戰を挑みに行けと私に命じました。それはラ・ジラルダといふ名前で、宛ら眞鍮で、も出來て居るやうに巖丈で強いのです。そして一つの場所から決して動きはしませんが、寸時も休まずに千變萬化する女〔この女巨人はセヴィールの大寺の塔の風見として使用されてゐる大きな塔の頂上に據えてある風見のことである〕です。私は行つて、見て、征服しました。そしてその女巨人をじッと止まらせて、そのまゝに立たせました。一週間以上も北風ばかり吹いたものですからな。また或る時は、あのグィサンドーの牡牛の古い石を持ち揚げよと命ぜられました。これは騎士よりも却つて荷揚人足に言ひ付けるにふさはしい仕事です。また或る時は、あの類ひなき恐ろしい危險——あのカブラの洞窟〔ゴルドーヴの南にある太古の洞穴の體〕へ跳び込んで、その物悚い穴の中に隱されてをる一切の物の詳しい樣子を見て來いと命じました。私はジラルダの動くのも止めましたし、グィサンドーの牡牛も持ち揚げました。またその洞窟の中へ跳び込んでその深淵の秘密を明かにもしましたのぢや。しかも私の望みはいよ〳〵消えて徵かになり、あの婦人の無情と命令はますく〳〵强く激しくなつて來ますのぢや。要するに、その最近の命令は、このスペインの國々を隈なく遍歷して、あらゆる武者修業者等に、今日生きて居る凡ての婦人の中での一番の美人はあの婦人であり、また全世界で一番勇敢であり一番深く戀をして居る騎士はこの私であるといふことを、强ひて認めさせよと言ふのです。この命令に從つて、私は既にスペイン國も大方巡り盡して、私

に敵對した騎士も幾人か打ち懲らしさしました。しかし私の一番身の誇りとも名譽ともしてをるのは、あの名高いラ・マンチャのドン・キホーテといふ騎士と一騎打ちして打ち負かし、あの人のドゥルシネアよりも私のカシルデアの方が美しいと白狀させてやつたことですよ。私はこの勝利一つに依つて全世界の騎士を殘らず征服したものと思ひますのぢや。何故といふに、今お話し申すそのドン・キホーテは、殘らずの騎士に勝つたからです。しかも私は彼に勝つたのぢやから、彼の榮譽や名聲や面目は、すでに移つて私の身に移されたのぢや。

負けし者の武名高きにつれて
勝ちし者の冠はいよゝ光り輝く。

ぢやからな。かういふ譯で、そのドン・キホーテのものになりましたのぢや。』

この森の騎士の話を聞いてドン・キホーテは吃驚した。そして、お前は嘘を吐いて居ると千度も言はうとして、その「嘘」が既に彼の舌の尖に出て來て居た。しかし相手が自分の口からその嘘を白狀せずに居られぬやうにしてやらうと思つて、一生懸命我慢して居た。そこで彼は物靜かに言つた、『騎士殿、貴方がスペイン中の、いや、世界中の大方の騎士を打ち負かしたと仰有ることに就



いては、拙者は何も申しません。しかしラ・マンチのドン・キホーテを打ち負かしたといふことは、何うも變ぢやと思ひますわい。そりや大方あの騎士に似た別の人でありましたらう。尤もあの人に似た者も餘り居りませんがな。』

『なに！　負かさなんだと？』と森の騎士は言つた、『私等を蔽ふ天に誓つて申すが、私は確かにドン・キホーテと闘うて、彼に打ち勝つて。彼を降服させたのぢや。人相を言へば、ひよろ長い身體で、痩ぎすの顏立で、手足は痩せて長く、髮は半白で、鼻はやゝ曲つた鉤鼻、そして黒い大きな口髭が垂れ下つて居る人ぢや。あの人は「憂ひ顏の騎士」といふ名乘をあげて戰をする。そしてサンチョー・パンザといふ水呑百姓を從士にしてをる。それにまたロシナンテといふ名馬に打ち乘つて、これを巧みに御して居る。また最後に、その思ふ婦人としては、元アルドンザ・ロレンゾーと言うてゐた、ドゥルシネア・デル・トボソといふ婦人を有つて居る。これは丁度私が自分の婦人をば、その本名のカシルダとその出生地のアンダルシアから、カシルデア・デ・ヴンダリアと呼ぶのと同じわけです。こんな樣々の證據を出しても、尙私の言ふことを眞實と認めなさらぬとあれば、こゝに私の劍がある、疑ひの權化にでも、これは信じさせずには措きませぬぞ。』

『騎士殿、まアお鎭まりなさい。』とドン・キホーテは言つた、『そして拙者が申さうとしてをるこ

とに耳をお貸し下さい。貴方の話されるそのドン・キホーテは、拙者の無二の親友ぢやといふことを御承知願ひたい。それはもうこの拙者の身も同様に思ふ位に親しいのぢや。そして今貴方が精細明瞭に示されたところから見ると、貴方が征服なされたその者こそ、何うしてもドン・キホーテに違ひないとしか思はれませんわい。然るに一方では、それが同一人であり得よう筈がないといふことも、この眼で見この手で觸つて分りますぢや。尤もかういふことがあれば別ですがの、即ちあの人は魔術使ひの敵を澤山に有つてをる。その中でも一人は取り分け何時もあの人を迫害して居りますのぢや。それでその者が事によるとあの人の姿になつて、わざと打ち負けて、あの人が騎士として絶倫の武功を立て、洽く天下に鳴り響かしたその大名をば、潰して了はうとしたかも知れませんわい。またこれを確かめるために是非お話せねばならんことはな、まだ十時間と經たぬ前に、今言うたその魔術使ひの敵どもは、あの美しいドゥルシネア・デル・トボソの身も姿も見苦しい卑しい田舍娘に變へてしまうたのぢや。そこでそれと同じやうに魔術使ひどもは屹度ドン・キホーテを變へたに違ひがありませんわい。もしかう申しても尙拙者の言葉を眞と信じて下さるに足らんとあれば、此處に本人のドン・キホーテが居る。拙者は武力によつてそれを主張しますぞよ。徒歩でなりと、馬上でなりと、また何なりと御好みによつて立ち合ひませう。』



とさう言ひつゝドン・キホーテは突ッ立つて、その佩劍に手をかけながら、森の騎士が今にも手向うて來るかと待ち構へた。森の騎士も同じやうに物靜かな聲で答へた、『善い勘定方は質草を苦にしませぬ。ドン・キホーテ殿、形を變へてゐなさつた時一度打ち勝つた覺えのある者は、貴方が本當の形で居られても降參させる立派な目算が有りますわい。しかし物盜や喧嘩好きのやうにこの暗がりで眞劍仕合をすることは、騎士に不似合のことですから、我々の働きを日輪の照覽あるやうに、何うか夜明まで待つて戴きたい。そしてこの戰ひの條件は、負けた者が勝つた者の申し出に從つて、その命ぜらるゝ事を悉く履行するといふことに致しませう。但しその命令は騎士たる者に似つかはしいものと致して置きませう。』

『拙者とてもその條件誓約には大滿足ぢや。』とドン・キホーテは答へた。さう言ひつゝ、二人は銘々の家來の臥てゐるところへ行つた。すると家來等は鼾をかきながら、彼等が眠りこけた時と同じ樣子でゐたのである。彼等は家來どもを起した。そして夜の引き明けには二人で烈しい血腥い一騎打ちをする筈であるから、乘馬の用意をせよと命じた。この知らせを聞いてサンチョーは吃驚仰天して、自分の主人に事なかれかしと身を顫はしてゐた。それは彼が、森の從士から主人のしたといふ大手柄を聞かされてゐたからである。しかし二人の家來どもは一言も言はずに銘々

その馬を捜しに行つた。もうこの時は、その三疋の馬と一疋の驢馬とは互に嗅ぎ合つて、一緒になつてゐたのであつた。

その途中で森の従士はサンチョーに言つた、『お前さんに話しで置くがの、アンダルシアの戦人間にやかういふ風があるのぢや、どんな喧嘩にても介添人になれば、その味方の者が殴り合ひをしとる間腕を組んでぢッと見物して居つちやアならんちうこつちや。それでの、私等の旦那がたが戦してござる間は、私等もやッぱり戦してめちや〳〵になるまで殴り合ひをせにやならんわけですぞ。』

『御家來衆、そんな風は、お前さんの言ふやうなさういふ喧嘩好きや戦人間の仲間ぢや結構かも知れんがの、』とサンチョーは答へた、『武者修業の家來の仲間にや全く結構でないこッちや。とにかく、私の旦那樣からはそんな風のあることは聞いたこともない。旦那は武者修業の掟を殘らず室で覺えてござるがの。けれど假しんば、家來はその主人の戦うて居る間戦はにやならんといふ明らかな掟が本當にあるとしてもぢや、私はそれに從はうとは思ひません。それよりか、私のやうな氣の穩かな家來に割り當られる罰金なら拂ひましよ。それなら蟾二ポンドより徐計なことは大丈夫あるまいから、いつそそれを拂うた方がえゝ。何故というて、私がはや頭を叩き割られたものとすると、その頭を癒すに使ふ繃帶よりかもその蟾の方が安あがりぢやからの。も一つ私が戦にかゝり合はれんわけは、私にや刀がござりませんからの。私ア生れてからそんな物ぶら提げたことアないのぢや。』

『それにや良い埋め合せがある。』と森の従士は言つた、『私がこゝに同じ太さの麻袋を二つ持つて居るから、その一つをお前さんに上げて、もう一つを私が取らう。そしてこの同じ袋で叩き合ひをしよう。』

『そんなやり方なら、喜んでやりましよ。』とサンチョーは言つた、『そんな戦なら、お互に傷を受けんで身體から埃を叩き出してくれまましよからの。』

『それぢやすまん。』と相手は言つた、『何故と言うて、風に吹きさらはれんやうにこの袋へ綺麗な滑つこい小石を五つ六つ入れにやならんのぢや。皆同じ重さの小石をな。かういふ風にしてやると、お互ひに傷一つ受けずに、揉み合ふことが出來るのじや。』

『やれまア！』とサンチョーは言つた、『この人は、私等の頭を叩き割つたり骨を粉々にしたりせんやうに、何ちう柔な貂の皮やほぐし綿の詰め物をその袋へ入れうとしとることぢや！　けれど私や、たとへその中へ眞綿が詰めてあつても、お前さん、決してお前さんと打ち合ひはせんのぢ

や。私等の旦那樣がたはそれが目當てぢやから、戰をさせるがえゝ、けれど私等は酒でも飮んで暮したいのぢや。何故と言うて、私等がじたばた騷ぎ立てゝまだ時も來ねば熟れてぽとりと落ちもせんうちに生命を斷たいでも、時が經てばちやんと氣つけて私等を極樂へやつて下さるからの。』

『それでも、たとへほんの半時だけでも、私等は戰はにやならんのぢや。』と森の從士は言つた。

『いゝや、何うして〳〵。』とサンチョーは言つた。『私ア一緒に飮んだり喰うたりした人と、ほんの些とぢやらうと、喧嘩をするやうなそんな禮儀知らずの恩知らずになるやうな者ではござりませんわい。お負けに、怒る事もなけりや癇癪の種もなく、平氣な面をして殿り合ひおツ初めるやうな奴がござりますかい？』

『そこの埋め合せは皆私がつける。』と森の從士は言つた、『そりやかうするのぢや、立合を初める前に、私がお前さんのところへそうッと慇懃に近づいて、そして三つ四つ拳固をお見舞ひするのぢや。それでお前さんを私の足許へのめらせる。するとお前さんの癇癪玉がいくら躁鼠よりより眠り込んで居つても醒めるぢやらう。』

『その手で來るなら、』とサンチョーが言つた、『私にもそれに微塵も引けを取らん裏の手があるわい。私は棒切を取つて、お前さんがまだ私の癇癪玉を醒ますほど近寄らんうちにどやし付けてしまふ。さうすりやお前さんの癇癪玉アもうぐツすり眠らされて、あの世へでも行かにやとても醒めはすまいぞよ。あの世では、私ア誰にでも頗べた殿らせるやうな人間ぢやないといふことが分つてをりますからの。まア手前の矢は手前で探すがよい——尤も銘々の癇癪玉を眠らせて置く方が大丈夫なやり方ぢやが。何故と言うて、他人の心を知る人間はなし、また羊の毛を取りに來て自分の毛を剪まれて歸る者もありましよからの。溫順しいと神樣のお惠みが下り、喧嘩すると呪ひが來るのぢや。狩り立てられた猫が追ひ詰められると獅子になるなら、私ア人間ぢやから何になるか分りやしません。それで御家來衆、今から先のことをよう言うて置きますがの、私等の喧嘩から怪我災難が起つたら、そりや殘らずお前さんのせいになりますぞよ。』



『よいとも、』と森の從士は言つた、『今に夜が明けると、何もかも納まりがつくわい。』

やがて、晴れやかな翼のあらゆる種類の小鳥は木々の間に囀り初めた。小鳥等はその樂しさうなさま〴〵の鳴音を以て、今や滴る眞珠をその頭髮から搖り落しつゝ東の門に欄に麗はしい顏容を現はし初めた新鮮な朝を歡び迎へて挨拶するかのやうに見えた。この朝の快き水氣を浴びて草木もまた眞珠のやうな飛沫を雨ふらし灑ぐやうに見えた。柳の樹は甘い甘露を滴らし、泉は笑ひ、小川はさゞめき、森は喜び、そして草原はその榮えをつくして裝ひつゝ朝を迎へた。しか

し、日の光が物をはつきり見分けさすやうになるや否や、先づ第一にサンチョー。パンザの眼に映つて來た物は森の從士の鼻であつた。その鼻は殆んど彼の全身を影らすほどに大きなものであつた。實際記錄に據ると、それは驚くばかりの大きさで、その中頃で鉤形をなし、一面に疣で蔽はれ、そして茄子のやうな桑の實色を呈してゐた。それは口の下に四五寸も垂れてゐた。その大きさ、その色、その一面の疣、及びその曲り樣、これ等は彼の顏を非常に物凄くした。それでサンチョーは彼を一目見るや否や、痙攣の時の兒どものやうに手も足もわな〳〵と顫ひ出した。そこで彼はこの怪物と戰をするやうなことにならぬうちに、自ら二百の棒擊ちを受けようと心に誓つた。ドン・キホーテも自分の相手をよく見た。すると彼は既に兜を被つて瞼甲を下してゐたので、その顏は見られなかつた。しかしながら、どツしりした體格の男ではあるが背はあまり高くないと見て取つた。彼はその鎧の上に、上等の錦とも見える陣羽折か袈裟のやうなものを引ッかけてゐた。その上には一面に小さい月のやうにきら〳〵光る鏡をちりばめてあつたので、彼は非常に華美な目ざましい樣子に見えた。その兜の頂には綠や黃や白などの鳥の羽が澤山ひら〳〵と動いてゐた。そして、とある立木に立てかけてあつた彼の槍は非常に長くて太く、その鋼鐵の穗先は六寸餘りもあつた。

ドン・キホーテは一々見て取つて、一々心に止めた。そして自分が覩て取つたところによつて、この騎士は必ず大力の人であると判斷した。しかしそれに拘らず、サンチョー・パンザのやうに怖氣は出さなかつた。それどころか、從容自若として彼はその鏡の騎士に言つた、『騎士殿、もし貴方が戰ふことに夢中になつて、禮儀を棄てゝござらぬなら、その禮儀にかけてお願ひ申すのぢや。何うかその臉甲を少しお上げ下さい。そのかひ〳〵しいお仕度と御容貌とが釣り合うて居るかどうか拜見したいものですから。』

『騎士殿、この試合で貴方が勝たれても負けられても、ゆる〳〵私を御覽になる暇は十分でござりませう。』と鏡の騎士は答へた、『また唯今貴方の御求めに從はぬとしてもそれは別に仔細はございません。たゞ貴方も既に御承知の通り、私が固く主張して居りまることを是が非でも貴方に認めさせないうちに、臉甲をあげたりしてぐず〳〵暇を潰すのは、あの美しいカシルデア・デ・ヴンダリアに對して重大な罪を犯すことゝ思ひますからぢや。』

『それでは、馬に乘る間に、せめてこの拙者が貴方の負かしたと言はるゝドン・キホーテであるかないか、それだけは言うて下され。』とドン・キホーテは言つた。

『それにはかうお答へしませう。』と鏡の騎士は言つた、『貴方は、私が征服したあの騎士と全く那

『それは分つてをりますわい。』と鏡の騎士は答へた。

丁度この時例の従士の並外れの鼻がドン・キホーテの眼に入つた。それを見て彼はサンチョーに劣らず驚いた。彼はこの従士を一種特別な怪物とも、或る新しい種族の人間とも、或ひはさうたこの世のものならぬ人間とも思つた程であつた。サンチョーは主人が馬を駈け出す爲めに後方へ退くのを見て、この鼻の太い男と二人きり取り殘されることを好まなかつた。それはその鼻で自分の鼻の上を一と煽り喰はされたら、この戰は萬事休して、自分はその打撃の爲めか怖さの爲めに、地べたへ平伏らされてしまふであらうと恐れたからである。そこで彼はロシナンテの鐙革に縋りついて主人と一緒に走つた。そしてもはや主人が馬を廻す時分と見たので、かう言つた、『旦那樣、何うぞお願ひでござりますから、貴方樣が引きかへして戰をなさらんうちに、私をこの栓の樹の上へ登らせて下さりませ。そこからの方が地べたからよりも貴方樣とあのお侍とのお勇ましい戰をば、氣持よう具合よう見物が出來ましよからの。』

『サンチョー、お前はまるで高棱敷へでも登つて、危なげなしに鬪牛でも見る氣で居るやうぢやの。』とドン・キホーテは言つた。

『實を申せばな、』とサンチョーは言つた、『あの家來の化物のやうな鼻が恐うてたまりませんのぢ



と卵の似て居るやうに似てござる。しかし仰有る通り貴方が魔術使ひどもに責められてござるからには、私もあの人物が貴方であつたかなかつたかは、斷言はようしませんわい。』

『それで見ても、貴方が欺されてござることは明白ぢや。』とドン・キホーテは言つた、『しかしその迷ひを悉く釋いて上げませうで、さア銘々馬に乘りませう。そして若し神と拙者の婦人とこの腕が拙者に味方さへしてくれゝば、貴方がその瞼甲を上げなさるだけの暇もかけずに、お顏を拜見しませうわい。そして拙者は貴方が取り違へてござるその負かされたドン・キホーテぢやないといふことが、御分りになりましよわい。』

こゝでその對話を切り上げて、二人は馬に乘つた。そしてドン・キホーテは、相手に擊つてかゝるに都合よい間隔を取る爲めにロシナンテをぐるりと回らせた。鏡の騎士も同じやうにした。しかしドン・キホーテはまだ二十歩と進まぬうちに、相手の呼びかける聲を聞いた。それで何方も半引き返して來ると、鏡の騎士は彼に言つた、『騎士殿、この仕合の約束をよう覺えてござるやうに。即ち先き程申した通り、負けた者は勝つた者の申し出通りになるといふことを。』

『もうそれは承知して居りますわい。』とドン・キホーテは言つた、『但しその負けた者に命じ且つ負擔させることは、騎士道の範圍を超えてはなりませぬぞ。』

や。それでとてもあれの側にや居られませんのぢや。』

『なる程、あれはこの私も、もし武者修業者でなかつたらやツぱり怖がりさうな物ぢや。そんなら、さア、お前の好きなところへ登らしてやらう。』とドン・キホーテは言つた。

ドン・キホーテはサンチョーがその栓の樹に登つてしまふのを待つてゐた。その間に鏡の騎士は自ら必要と思つた〳〵けの間隔を取つて、そしてドン・キホーテもやはり同樣のことをしたものと推測して、自分等を差圖する喇叭の響をも何の合圖をも待つことなく馬を廻らした。この馬といふのがロシナンテより元氣でもなければ格好良くもなかつた。そしてその絶頂の速力で、それは緩い跑足であつたが、森の騎士は相手に擊ちかゝらうと進んで來た。しかしその相手が丁度サンチョーを樹の上へ登らせてゐるのを見て、手綱を引きしぼつて、半分ばかりのところで立ち止まつた。その爲めその馬は非常に有りがたく思つた。それはもうこれ以上走る力がなかつたからである。ドン・キホーテは敵が自分の方へ飛ぶが如くに押し寄せて來てゐるものと思ひ込んで、猛烈にロシナンテの痩せた痩腹へ拍車を當て、彼を疾走せしめた。その早さを敍してこの物語は、ロシナンテが疾走らしい疾走をしたのは唯この時だけであつたと言つてゐる。蓋しこれまでのは凡て、彼に於てはた〳〵の跑足に過ぎなかつたのである。さてこの無比の勢ひを以て彼は森の騎士がじつと突立つてゐるところへ殺到した。森の騎士は自分の馬が進行中にふと立ち止つたきりその場所から微塵も動かないので、拍車のボタン（古の拍車にはその代が設り深く入ちないやうボタンがはめてあつた）のところまでも突つ込んで動かさうとあせつてゐたのである。この仕合せの好危機に際して、ドン・キホーテは相手に殺到した。敵はその馬に煩はされ、またその槍が邪魔になつて、それを扱ふことも出來ねば構へる暇さへもなかつたのである。しかしドン・キホーテはそんな故障には少しの注意も拂はなかつた。そして自分の身は無事安全に寸毫の危險も無く、勢ひ烈しく鏡の騎士へ打つ突かつてこれを突き落した。そこで相手はわれにもあらずその馬の背中からドウとばかり轉げ落ち、全く息が絶えたかのやうに、手も足も動かずにそのまゝ平伏つてしまつた。サンチョーは敵が落馬するのを見るや否や栓の樹から滑り降りて、大急ぎで主人の居るところへ走つて來た。主人はロシナンテから降りて行つて、鏡の騎士の側に立つた。そして息が切れて居るか何うか、もしや息があつたら風を入れてやらうとさう思つて、彼の兜を脫がして見ると——こはそも如何に、その何人であつたかを聞いて誰か驚歎、驚愕、戰慄を禁じ得よう？　この物語はいふ、彼の目に映つたものは、これぞ得業士サムソン・カラスコーその人の、眞の面貌、眞の風丰、眞の人相、眞の姿、眞の形相であつたのである！　これを見るや否やドン・キホーテは大聲で呼び立てた、『これサンチョー、早う來い。

そしてこの不思議なものを見い。これ早う。そして魔術の力が何を仕出かすか、妖婆や魔術使が何を仕出かすかを知るがよい。』

サンチョーは近寄つた。そして得業士カラスコーの顔を見るや、何遍となく十字を切つて、それよりも餘計に神の御名を呼んだ。この間中その平匍つてゐる騎士は息のある様子も見えなかつた。そこでサンチョーはドン・キホーテに言つた、『旦那様、とにかく貴方様はその刀を抜いて、このサムソン・カラスコー先生のやうに見える、此奴の口の中へ突つ込んでやつたがえゝと私ア思ひますわい。さうしなさつたら、大方貴方様は、魔術使ひの敵を一人殺したことになりましよ。』

『その勘めも尤もぢや、敵が少なければ少ない程よいからのう。』とドン・キホーテは言つた。そしてサンチョーのその勘めを實行しようと、剣を抜いてゐると、折柄森の從士が走つて來た。彼はもう、あんなに物凄く見えた鼻は附けてゐなかつた。そして大聲で叫んだ、『ドン・キホーテの旦那様、する事に氣をつけて下さい。貴方の足許にござるのは、そりや貴方様のお友達のサムソン・カラスコー樣でござりますぞ。そして私ア其の家來でござります。』

『はて、あの鼻は？』とサンチョーは、彼が先程のやうに物凄い顔をしてゐないのを見て言つた。それに對して彼は『これはこの衣嚢の中にありますわい。』と答へた。そしてその右のポケットに



手を突つ込んで、厚紙に假漆を塗つて拵へた既に述べたやうな格好の作り鼻を引き出した。そこでサンチョーは尚もつく〳〵と彼を見詰めつゝ叫んだ、『やれまア、有り難い！　お前さんは私の知つとるおしやべり屋のトム・セシアルぢやないかい？』

『さうさ、ほんとに私ぢやよ！』と今は鼻なしの從士が答へた、『私はトム・セシアルぢやよ、おしやべりのサンチョー・パンザさん。そしてな、私がどんな喃しや手管にのせられて此處へ伴れて來られたか、今ぢきに話しましよ。けれどまア差當りお前さんの旦那樣へようお願ひしますで、その足許にござる「鏡の騎士」さんに手を觸れたり、虐めたり、傷つけたり、殺したりしては下さるなよ。何故というて、言ふまでもない、これこそ輕はづみで無分別なサムソン・カラスコー先生ちう私等の同村の仁でござりますからの。』

丁度この時、鏡の騎士は吾れに返つた。ドン・キホーテはそれを見て、その顏の上に劍の切先を突きつけながら、彼に言つた、『騎士よ、もしお手前が御自分のカシルデア・デ・ヴンダリアの美しさよりも拙者の類なきドゥルシネア・デル・トボソの方が優ると白狀せぬとあらば、お手前の生命はそれ加へてかう誓はにやならぬ、卽ちエル・トボソの市へ行つて、拙者の名代としてあの姫君に伺候して、姫君の御意

のまゝにお手前の身を任せるのぢや。その上でもしお手前へ自由を下さるなら、やはり同じ樣に歸つて來て（拙者の赫々たる偉蹟の足跡をずッと辿つてさへ來れば拙者の居所は自然分らうから の）拙者を搜し出して、そのお手前と姫君との間に起つた事どもを拙者へ物語るのぢや――これ等の條件は、立ち合の前に拙者等が定めた通り、武者修業の道の正當な範圍を超えてはをらぬのぢや。』

『白狀しまする、』と負けた騎士は言つた、『あのドゥルシネア・デル・トボソ姫の汚れたぼろ〳〵の靴は綺麗ではあるが、もぢや〳〵して居るカシルデアの髭より優つてをりますよ。そしてまた必ずあの姫君の御前に伺候して立ち返り貴方樣の御前へ出まして、逐一洩らさず御命令のことどもを御返事致します。』

『それにまた、』とドン・キホーテは附け加へた、『お手前が負かしたと言はれる騎士はラ・マンチャのドン・キホーテではありもせなんだし、またさうあらう筈ない、たゞ彼に似寄つた別人ぢやつたといふことも白狀し且つ信じねばなりませんぞ。卽ち丁度拙者が今、お手前は得業士サムソン・カラスコのやうに見えるけれども實はさうでなく、たゞ彼によう似た別人であつて、お手前をかやうに彼の姿で拙者の前に現はしたのは、拙者の仇敵の仕業であつて、これまさしく拙者の怒りの烈しさを抑へ和らがせて以て、拙者の勝利の榮譽を控へ目にさせやう爲めの計略ぢやと、ちやんと自ら認め信じてをるのと同じやうにぢや。』



『貴方樣が信じられ、思はれ、考へられる通りに、私は何ごとも左樣に認め、思ひ、且つ考へまする。』と跛になつた騎士は答へた、『どうぞ、私を立たせて下さいませ。落ちしなにうんと打ちましたので、全く、立たれるか何うか知りませんが。』

彼の從士トム・セシアルに手傳はせてドン・キホーテは彼を助け起した。サンチョーはこのトムから絶えて眼を離さなかつた。そしてこの男に問ひかけた事や、それに對する答へは、彼が自分で云ふ通り眞實正銘のトム・セシアルであるといふ明白な證據となつた。しかしながら、魔術使ひ等がこの鏡の騎士の顏を得業士サムソン・カラスコーの顏に變へてしまつたのだとドン・キホーテの言つたことは、サンチョーの心に深く銘じてゐたので、彼は自分の眼で見るものを何うしても本當と信ずることが出來なかつた。要するに、この主人も家來も共にその謬想を懷いたまゝで居つたのである。そして鏡の騎士とその從士とは悄氣きつてはう〳〵の體でドン・キホーテやサンチョーと別れた。それは手近かの村へ行つて彼の肋骨に膏藥を塗つたり繃帶をしたりしよう爲めであつた。ドン・キホーテとサンチョーとはサラゴッサへの旅をつゞけた。この物語はこゝで此の二人を

打ちやつて置く。それは鏡の騎士とその長い鼻の從士との素性を語らんが爲めである。



## 第十五章　には鏡の騎士とその從士との誰れであつたかを物語り知らしめる。

ドン・キホーテは、如何ばかり勇敢な騎士であらうと思つてゐた、その鏡の騎士に打ち勝つたので、最高絶頂に滿足し意氣揚々として有頂天になつて出發した。そして彼の騎士としての誓約を信ずるところから、ドゥルシネア姫に今も尙魔術が續いてかゝつてゐるかどうか、その返事を必ず聞くことゝ豫期してゐた。この負かされた騎士が、騎士たることを廢めぬ限りは、必ず歸つて來て自分とドゥルシネア姫との間に起つた事を逐一具申せねばならぬ筈であつた。しかしドン・キホーテの心と、鏡の騎士の心とは全く違つてゐた。丁度この時の鏡の騎士の心には、既に述べた通り、身體に塗る膏藥の手に入る村へ行きたいといふことより外には何物もなかつたからである。さて、この物語は更に傳へて言ふ、初めサムソン・カラスコーがドン・キホーテに對して、その一時中止してゐた武者修業を再び始めるように勸めたのは、前以てかの牧師補や理髮師と密議を凝らした結果、ドン・キホーテをしてその不仕合せな冒險のことに心を惱まさず

に平和に穩かに自分の家に落ち付いて居らさう爲めに採り用ひた手段であつたのである。この相談に當つては、滿場一致で、またカラスコーの特別な提議で、次のやうなことが決議された。ドン・キホーテを家へ抑へて置くことはとても不可能と見えるから出かけさせること、而してサムソンも同じく武者修業者に扮して出かけその機會を得るのは別に困難ではあるまいからドン・キホーテに試合ひを挑み、そして彼を負かすのは雜作もなからうから負かしてしまふこと、そして前以て、負けた方は勝つた方の心のまゝに何事も從ふといふ約束をして置くこと、そしてドン・キホーテが負かされた曉には、その故郷の家へ歸つて二年の間若くは再び此方から沙汰するまで自宅を離れてはならぬと、得業士の騎士が彼に命ずること、さうすると、ドン・キホーテは騎士道の掟に抵觸したり背いたりするよりは、寧ろ躊躇なく凡て是等の條件に從ふのは明白である、さうして閉居して居る間には、恐らく自分の馬鹿な企てを忘れるか、或は彼の狂氣を癒やす直接の療法を見出す折があるかも知れない、といふやうなことであつた。カラスコーがその仕事を引き受けた。そしてサンチョー・パンザの知人であるお喋べりのトム・セシアルといふ猿智惠の男が自分の方からその從士にならうと志願した。カラスコーは前に述べたやうに武裝した。そしてトム・セシアルは、彼等に出逢うた折そのお喋舌によつて覩破られぬやうに、自分の持ち前の鼻



の上に前に述べたやうな作り鼻を附けたのである。かやうにして彼等はドン・キホーテの取つた同じ道を追うた。そしてあの「死に神」の馬車の冒險に居合せるに殆んど間に合ふ位に追ひ付いてゐたのである。そして例の森の中でとう〳〵出くはした。そこでは賢明な讀者が既に讀まれたやうなことが起つた。そして若しドン・キホーテが並外れた妄想からこの得業士が本當の得業士でないといふやうな確信を持たなかつたならば、この得業士の先生は、美しい鳥が居ると思つて搜しに來ながらその巢さへも遂に見出さずに、永久に學士號を得られないやうな羽目に成つたのであつたらう。

トム・セシアルは、自分等が頗る不成功で、その遠征の結果が如何にも慘めになつたのを見て得業士に言つた、『いや全く、サムソン、カラスコー樣、私等は分相應の目に遇ひましたわい。目論見を立てゝ仕事を始めるは造作もないことですがの、しかし良い實入りを取るのは大抵むづかしうござりますからの。ドン・キホーテは氣違ひで私等は正氣ぢや。そしてあの人は無事で達者で笑うて行でしまうて、貴方さんは痛い氣の毒な目に遇うてあとへ殘りなされた！さてかうなると已むに已まれず氣違ひになつた者と、自分の好きでなつた者と、どッちが餘計に氣違ひぢやか知りたいもんでござりますの。』

これに對してサムソンは答へた、『その二種類の氣違ひの相違はかうぢや、已むに已まれずになつた方は何時までも氣違ひで居るが、故意となつた者は何時でも好きな時に止めることが出來るのぢや。』

『それぢやァ、』とトム・セシアルは言つた、『私ァ自分から志願して貴方の御家來になりましたから、その自分の好きでなつた氣違ひでござりますの。そんなら私はもう氣違ひを止めて家へ歸りましよ。』

『そりやお前さんの勝手ぢや。』とサムソンは答へた、『しかし私としては、あのドン・キホーテに一本喰はせんうちに家へ歸るなどゝは以ての外ぢや。そしてかうなりやもうあの氣違ひを癒したいといふ心からあの人を捜すんでない、唯腹癒せがしたいばツかりでぢや。何故というて、この肋骨のひどく痛んで居る私が、それ以上に慈善ぶかい考へなどを持てるものかい。』

かう話しながら二人は途を辿つて遂にとある所へ着いた。そこには運好くも骨繼ぎが居つた。その治療を受けて不仕合せなサムソンは全快した。トム・セシアルは彼を殘して家へ歸つた。そこでサムソンは復讐の方法をとやかく考へつゝ、後に留まつた。そこでこの物語は、目下のところドン・キホーテと共に樂しむことを省くまい爲めに、やがて時が來れば再びサムソンの方へは立ち戻ることにしよう。

## 第十六章　ドン・キホーテとラ・マンチャの思慮ある一紳士とにふりかゝりし事ども。

ドン・キホーテは最近の勝利によつて、我れこそ天下當代の最も勇壯な武者修業者ぞと思ひつつ、既に述べたやうに意氣天を衝き得々として大滿足を感じつゝその旅を續けた。今日以後自分の身にふりかゝる一切の冒險は、既に成し遂げられ目出たき結末に達したものとさへ彼は思つた。彼は魔術や魔術使ひなどを輕んじた。最早や彼は自分の武者修業中に蒙つた數限りない棒打ちも自分の齒を半ば打ち挫いた小石の一齊射撃も、船懲役人等の不埒も、またヤングワ人等の横着や彼等が自分に蒙らせた棍棒の雨も考へなかつた。要するに、この上は自分の思ひの婦人ドゥルシネア・デル・トボソの魔術を釋いてやる手段、形式、方法さへ見つかれば、往昔の最も仕合せよかりし武者修業者の實際に到達した——また到達することの出來た最高の幸運をも羨まぬであらうと、彼は心に思うたのである。



彼が全く〳〵こんな空想に耽つて道を進んでゐると、サンチョーは彼にかう言つた、『旦那樣、今だにあのお喋舌のトム・セシアルの、あの化物のやうな巨大い鼻が私の眼の前にちらつくのは不思議ぢやござりませんかい？』

『それぢやサンチョーよ、』とドン・キホーテは言つた、『お前はあの鏡の騎士が得業士のカラスコーで、あの從士がお前の知つてをるお喋舌のトム・セシアルぢやとでも思うてをるのか？』

『そりや何と言うてえゝか分りませんがの、』とサンチョーは答へた、『しかし私はな、あの男は私の家のことや女房兒どものことでトム・セシアルより外にや誰れも知らんやうないろ〳〵の證據をあげたと思ひますわい。それにあの鼻を外した時のあの顏は本物のトム・セシアルの顏でござりましたよ。そりや私が同じ村でしかも私の家のすぐ隣りで何百遍も見た通りでまたその聲が丁度そツくりでござりましたよ。』

『これ〳〵、物の道理を考へるがよいぞよ、サンチョー、』とドン・キホーテは言つた、『一體あの得業士のサムソン・カラスコーが私と鬪はう爲めに武器物の具を身につけた武者修業者になると は、どういふ考へ方をすれば想像がつくのぢや？拙者があの人の敵になるやうなことをした例しがあるか？拙者に恨みを含むやうな機會を與へたことがあるか？拙者があの人の競爭者でゝもあ

ることか、またあの人が武道に從うて居るといふのか？それなら拙者が武に依つて得た名聲をあの人が羨むこともあらうがの。』

『けれど旦那樣、』とサンチョーは答へた、『まアあのお侍は誰れぢやつたにせよ、カラスコー先生にあれ程似て居りましたがな。それから家來はお喋舌のトム・セシアルにあれ程似てをりましたがな。こりや何うしたわけでござりましよう？そしてあれがもしや貴方樣の仰有る通り魔術ぢやとしたら、あの二人より外にや似せる者がござりませなんだらかの？』

『それは皆、拙者を惱ましをる意地の惡い魔術使ひ等の計略ぢや、陰謀ぢや。』とドン・キホーテは言つた、『その魔術使ひどもはあの戰で拙者が勝つのを先見して、その負けた騎士には拙者の友達である得業士の容貌を現はせるやうに仕組んで置いたのぢや。それは拙者があの人への友情から、拙者の劍の切先と腕の力とを中途で止め、拙者の心の正當な怒りを和がせて拙者の命を取らうと狙うたあの騎士の命をば詐欺瞞着で助からせようためぢや。その證據には、サンチョーお前も嘘僞りの言へぬ實驗で疾うに知つてをる通り、魔術使ひどもに取つては人の容貌を取りかへて美しいのを醜くし醜いのを美しうするのは造作もないこツちや。といふのは、まだ二日も經たんことぢやが、お前はその眼であの類ないドゥルシネアの完全無缺な美しさ氣高さを見たのに拙者



が見ると、もう下品な百姓女子の忌はしい賤しい姿に變つて、眼は白內障で口は惡臭かつたのぢや。そこでこの剛腹な魔術使ひがよくもそんな意地惡い變へ方をするからには、拙者の手の中から勝利の榮譽を取り去らう爲めにあれ等をサムソン・カラスコーやお喋舌のトムに變へたとして不思議はないわ。それはさうとして、しかし、兎に角拙者は氣が安まるぞよ。彼の姿はどうであつたにせよ拙者はつまり敵に勝つたのぢやからの。』

『そのほんとの事ア神樣が知つてござります。』とサンチョーは言つた。彼は自分でしたことなので、そのドゥルシネアの變貌は自分のたくらみ瞞着だと承知してゐたから、この主人の幻想には不滿足であつた。しかし自分の細工がばれるやうな事をうつかり言ひはせぬかと恐れたので、それに答へることは好まなかつた。

彼等がかうして話しこんでゐると、彼等の後から同じ道を辿つて來た一人の男に追ひ付かれた。それは白地に紅褐色の斑の入つた美しい牝馬に乘り、鶯色の天鵞絨の緣のついた立派な綠色の布のガバン（旅行用又は狩獵用の寬やかな外套）を着て、そしてやはり鶯色の天鵞絨のモンテラ（ビロードの帽子）を被つてゐた。その牝馬の馬具は廣くて鐙が短く乘り心地のよいものであつた。そして綠と桑の實色とが配合されてあつた。その紳士は綠色と金色の廣い飾帶からムーア人風の偃月刀を提げてゐた。鐙は鍍金では

なく、綠色に塗られたものであつた。そして非常にきら〳〵と磨かれてあつたので、衣裳の他の部分とよく釣り合うて、純金製の物よりも却つて立派に見えた。

この旅人は彼等に追ひ付くと、丁寧に挨拶をして、馬の足を緩めずに拍車を當て、行き過ぎようとした。しかしドン・キホーテは彼に呼びかけた、『華美やかな紳士よ、もし貴方も拙者どもと同じ方角へお出でになるので、さしてお急ぎの御用もないなら、御同道を願はるれば結構ですがの。』

『實は、』とその牝馬の上の人は答へた、『私の牝馬が御一緒になるとそのお馬の氣が荒うなりはせぬかと氣遣ひさへせねば、かう取り急いで貴方を追ひ越すのでござりませなんだがな。』

これに答へてサンチョーは言つた、『旦那樣、貴方樣の牝馬にや些とも御迷惑はかけますまいぞよ。私等の馬は世にも珍らしい身持ちのえゝ雌のえゝ馬でござりますからの。この馬はそんな場合に出逢うても何の粗相もしたことがござりませんの。たゞ一度間違ひがござりましたが、その時ア私の旦那樣と私とが七倍もの返報を受けましたわい。も一度申しますがな、もしおよろしかつたら、お止まりなされてもよござりましよ。その牝馬を二つの皿の間で出されても、私等の馬は欲しがりやしませんからの。』



旅人は手綱を控へた。そしてドン・キホーテの裝や姿を見て吃驚した。彼は兜なしに馬に乘つて居て、その兜はサンチョーが丁度旅鞄のやうにダップルの荷鞍の前に載せてゐたのである。この綠衣の人がまじ〳〵とドン・キホーテを見守つたと言ふなら、それよりも更にまじ〳〵とドン・キホーテはその綠衣の人を見守つたのである。そして綠衣の人は聰明な人として彼の眼に映つた。その人は、見たところ五十歳位で、ほんの少しばかり白髪があつて、驚のやうな顏付きで、重々しからず輕やかならぬ表情をしてゐた。そして彼の衣裳身のまはりのものは身分の良い人であることを示してゐた。さて綠衣の人がラ・マンチャのドン・キホーテに就て考へたことは、自分はこんな種類のこんな恰好の人はまだ見たことがないといふのであつた。彼はドン・キホーテの髮の長さや脊の高さやその貌の痩て蒼ざめてゐることや、その鎧やその威儀を繕うた物々しい態度やこゝらの地方では最早長年の間見られなかつた姿や樣子を見て驚いたのである。

ドン・キホーテは自分がその旅人から注意深く見られて居ることを極めて明かに知り、また相手の驚きの中にその好奇心を看て取つた。そこで、根が丁寧で常に人を喜ばせたい性質なので相手に何も訊ねられないうちに、こちらから先を越して言つた、『御覽の通り拙者の樣子はこんなに異樣で並外れですから貴方が不思議に思はれるのも御尤も千萬です。しかし私は人々の申す通り冒

険を捜して廻る所謂武者修業者の一人ですと、この通り申し上げたら、その御不審も消えませう。拙者は家を捨てました。土地も抵當に入れました。様々の快樂も止めました。そして身を運命の手に委ねてその導くまゝに任せたのです。拙者の心願は、今は死んでをる武者修業の道に再び生命を吹き込むことです。そして、これまで暫らくの間といふものは、こゝに蹲きかしこに倒れ、或る時は眞逆様にどん底に落ちこみ、また或る時は再び身を浮かべて、拙者の目論見の大部分を成就しましたのぢや。それは卽ち寡婦を扶け、處女を護り、人妻や孤兒や卑しい者などに援助を與へるといふ武者修業者の本來自然の義務なのです。されば、拙者の勇敢なキリスト教徒らしい數々の功績によつて、拙者は既にこの地上の殆んどあらゆる、或は、その大部分の國々で拙者の事蹟を刷物にせられるまでになりましたのぢや。拙者の傳記の三萬部は既に印刷されて居り、またもし思ひ掛けないことに妨げられぬ限りは、後三千萬部は丁度印刷の眞最中でござります。手短な言葉に、いや一と言に縮めて申すと、拙者こそはあのラ・マンチャのドン・キホーテ、又の名は憂ひ顔の騎士であると左樣御承知下されたい。一體自らを推賞するは自ら卑しくする所以であるが、しかし時によつては、卽ち拙者の爲めにその役を勤める者が手近に居らぬ時には、自分の名を自分で名乘らねばなりませんからの。そこで貴方、貴方が拙者の何者たるかを知られまた拙



者の從ふ職分を知られたからには、この馬も、この槍も、この楯も、この從士も、またこれ等の武器の一切も、また拙者の蒼白い顔色も、またこの痩せこけた拙者の姿ももはや貴方を驚かしはしますまいがの。』

かう言つて、ドン・キホーテは口を噤んだ。綠衣の人は暫く默つてゐた。それに依つても彼が返事に困つたことは明かである。しかしながら、長い間を置いてから、彼はドン・キホーテに言つた、『騎士殿、私の驚きの中に好奇心のあることを、見て取られたのは當りました。しかし貴方を見て感ずる私の驚きを取り去つて下さることは出來ませなんだ。貴方は自分の何者であるかを知ればその疑ひは消え失せる筈ぢやと仰有りましたが、さうは參りませなんだのです。それどころか、それをよく承知した今では、先よりも却つて益々驚き惑うてしまひましたのぢや。はてまア！今の時節に、この世に武者修業者が在るとか、或は實錄武勇傳が出版されるとか言ふことが在り得ることでござりますかい？今の時節にこの世の中に寡婦を助け、處女を保護し、人妻を守り、孤兒を救ふやうな人が居らうとは思はれません。また貴方をこの眼で見ませなんだなら、そんなことがあると信ずることも出來ますまい。まア有り難いこッちや！印刷されたと仰有るその貴方の氣高い本ものゝ武勇傳のお蔭によつて、あの數限りない武者修業の作り物語が殘らず忘却

れは貴族で、生れた村へ何卒無事に今日の晝食までに行きたいと思うて居るのです。私は相當以上の資産もあつて、名前はトン・ディーゴ・デ・ミランダと申します。私は家内や兒どもや友達と一緒に暮して居ります。私の仕事は獵に釣でござりますが、それでも手慣れた一羽の鳩と向ふ意氣の強い一二疋の白貂より外には鷹も獵犬も飼うては居りません。本も七十冊やそこらは有つて居りますが、自分の國の言葉のもあれば、ラテン語のもあり、歴史もあれば宗教物もあります。騎士道の本はまだ私の家の閾を跨いだことはありません。私は信仰の書物よりも俗の書物を餘計に繙く方です。但し、正直な娯樂の書物で、その文體に妙味があり、その中に現はれてをる工夫に引き付けるやうな面白味のあるものに限ります。尤もスペインにはそんな書物はなか〳〵少いですよ。時によると友人や近所の人等と一緒に食事をするし、また度々その人等を招きます。私の饗應は小ざッぱりとして量には制限なしに十分にします。私はいらぬお喋舌を好きません、また私の前ではいらぬ事も喋舌せもしません。私は他人の身の上を覗き込みもせねば、人が何をして居らうが横目を使ひもしません。私は毎日供養の聖樂を聞きます。貧乏な人たちには持ち物を分けてやります、がその善行を目立たぬやうにします。それはどんな用心深い人の心をもいつの間にか乘り取る敵の、あの僞善や虚榮を私の心に入らせまい爲めでござります。私は自分の知



の中へ逐ひ込まれませうからの。あんな物語はこの世界に一杯になつて居つて、その爲めに道德を害なひ善良な歴史に傷をつけ信用を失はせて居りますわい。』

『その點では言ふべき事が澤山ありますす、』とドン・キホーテは言つた、『卽ちあゝいふ武者修業者の物語が拵へ物であるかないかに就いてゞすな。』

『はてまア あんな物語が作り話であるといふことを疑ふ人がござりますかい?』と綠衣の人は言つた。

『拙者はそれを疑ひますのぢや。』とドン・キホーテは言つた、『しかし今のところはまア構はずに置きなさい。もしそれをお話しする間御同道が出來るなら、拙者は必ず貴方に證明致しませう。卽ちあんな物語が本當でないといふのを確かな事のやうに見て居る時流の俗見に從うて行かれるのは間違ひであるといふことを。』

ドン・キホーテのこの最後の言葉から、その旅人は、彼を狂人ではないかと疑ひ始めた。そしてこれからの話によつてそれを確めやうと待つてゐた。しかしドン・キホーテは既に自分の職分や身分の話をしたのであるから、まだ新しい話題に移らぬうちに、相手の身の上をも打ち明けて呉れるやうにと賴んだ。これに對して綠りのガバンを着た人は答へた、『憂ひ顏の騎士殿、私は生

人で仲違ひをしてゐる人たちの間に入つて仲直りをさせることに骨を折ります。私は聖母へ一身を獻げた僕です。そして私はわれ等の主なる神の限りなきお慈悲にいつも頼んでをる者でございます。』

サンチョーは、この紳士の身の上話や仕事の話にこの上もなく熱心に耳傾けた。そしてその生涯をいかにも善良な神聖なものであると思ひ、またそんな生涯を送つた人は必ず奇蹟を行ふ筈だと思つて、ダップルから跳んで降りて、慌しく走り寄つてその右の鐙を捉へ、有り難い心になつて涙を流さんばかりに幾度も〳〵もその足を接吻した。

これを見て紳士は彼に訊ねた、『お前さんや、何をなさるのぢやな？この接吻は何の爲めぢや？』

『どうぞ接吻させて下さいませ、』とサンチョーは言つた、『貴方樣のやうに馬に乘つてござる聖者樣は生れてから初めて拜むのでござりますわい。』

『私は聖者樣ぢやないよ、』と紳士は答へた、『えらい罪人ぢや。しかしお前さんこそ聖者樣ぢや。その正直一途なところで分る通りお前さんは屹度善い仁に違ひないからの。』

サンチョーは自分の荷鞍に歸つて乘つた。これには彼の主人の深い憂ひ顏も是非なく笑つた、そして更にドン・ティゴーを驚かしたのである。やがてドン。キホーテはその紳士に向つて、お子供衆は何人お持ちですかと訊ねた。そして、神に就いて眞の知識を有たなかつた往昔の哲學者等が人間最高の幸福は自然の天稟や幸運の賜物や、澤山の友人を持ち澤山の良い子を持つにありとしたといふことを言つた。



『ドン・キホーテ殿、』と紳士は答へた、『私は一人の息子を持つて居りますが、それが居りませんだら大方今よりも却つて仕合せかと思ひます。と申して何もその子が惡い爲めではありません。たゞ私の望む程に良うないからですよ。息子は十八歳になります。もう六年の間サラマンカでラテン語やギリシャ語を研究して居りますが、さて外の學問の研究に變らせようとしますとな、もう彼は全く詩の學問に（もしこれが學問と言へますなら）夢中になつてしまうて、私が彼に研究させようと望んでをります法律にも、また凡ての學問の女王と申すべき神學にも、とても心を向けさせることが出來んやうになつて居りますのぢや。私はどうぞして彼に一家の譽になつて貰ひたうござりますのぢや。この御代に生れて來た仕合せに、國王樣がたは有德な値打のある學問に對しては潤澤な御褒美を下さりますからの。德を缺いた學問は掃溜の中の眞珠でござりますわい。倅は朝から晩まで、やれホーマーはイリアッドの何處そこの一行を精確に言ひ現はしてゐるとか居らぬとか、やれマーシアルはどれそれの警句の中では不謹愼であるとかないとか、やれ

ヴージルのこれ〳〵の詩の文句はかうもあゝも解釋されるなどと、そんな事を決めるのに一日潰して居りますわい。つまり倅の話は殘らず今申した詩人たちやまたホーレースやペルシウスやジユヱナルやティブルス（以上ギリシヤ又はローマの古典詩人、又は文人）などの詩のことでござります。我が國の言葉で書いた近代の物は倅は一向重んじて居りません。しかしスペインの詩に冷淡な樣子はして居りませんもの、丁度唯今はサラマンカから送つて來ました四行詩にそれは何か詩の試合（公衆の中にて詩を誦し、一定の判者これを判じ褒貶する風はこの頃も併行はれたの爲めに送つて來たんぢやないかと思ひますがな、それに一心になつて註解を附けてゐますわい。』

これに對して、ドン・キホーテは答へて言つた、『貴方、小供といふ者は親の臟腑の一部ですよ。それぢやから良うても、惡うても吾々は自分に命を與へる魂を愛するやうに、小供を愛せにやなりませんのぢや。小供等も幼少の折から德の高い嫁のよい立派なキリスト敎徒の品性を備へた者に育てあげ、成人の曉にはその年老いた兩親の杖柱ともなり、子々孫々〳〵の譽ともなるやうに導くのは兩親の務めです、またどれそれの學問を勉強せよと强ひるのは賢こいやり方とは思へません。尤もそれを篤と說き諭すのは別に害がありますまいがの。また唯、糊口の爲めに學問をする必要がなく、仕合せと、糊口の料を供へて呉れる兩親を有つた運の好い學生ならば、何の學問でもよいからその身に一番好きぢと思はれるやうな學問を擇ばせた方がよいと拙者は考へます



わい。そして詩學は有用といふよりも寧ろ樂しみの爲めのものではあるが、それの持ち主に不名譽を齎すやうなものではありません。詩歌は、拙者の考へでは、この上もなく美しい屠弱い若い處女のやうなものぢや。それを身仕度させ裝はせ飾り立てるのは、その他の幾人かの處女の、即ちその餘の學問の勤めぢや。詩といふ處女はその餘の殘らずの者の助けをからねばならず、また殘らずの處女等は彼の女から光りを導かねばならぬ。しかしこの處女はこき使はれたり、街路を引きずり廻されたり、市場の隅や宮殿の押入れに棄て置かれたりすることは辛抱が出來まい。詩は、丁度練金術の作り出す黃金のやうなもので、上手の人に作らるれば値ぶみも出來ぬほどに貴い純金となりますのぢや。本當の詩を所持する人は、これを心の中に藏うて置いて決して卑猥な諷刺や魂のない短詩などにして洩れ出させはしませんわい。詩の處女は決して賣り物にしてはなりません。尤も壯烈な詩とか感動を興へる悲劇とか元氣な巧妙な喜劇などなら別ですがの。この處女はその隱されてある實を見分けたり眼利きしたりすることの出來ぬやうな道化者や無智な下等の人間に觸らせてはなりません。拙者が今下等の人間と言うたのは唯平民とか下層の人々のことを指したと思はれてはなりませんぞ。王侯にもせよ貴族にせよ無學な人は下等の人間の中に入れてもよいし、また入れるのが當然ですからの。さて今まで拙者が申した數々の條件に從うて

詩を愛撫し研鑽する人は名を揚げて、洽く全世界の文明國にその名を讃へられませう。尙先程仰有つたやうに、貴方樣の息子さんがスペインの詩を大して重んじて居られんといふことに就いては、拙者にはどうも息子さんがその點で少々間違うてござるやうに思はれますわい。その譯はな、あの大詩人のホーマーはギリシア人であつたからラテン語では書かなんだし、またヴージルはラテン人であつたからギリシア語では書かなんだのぢや。手短に言へば、往昔の詩人たちは皆銘々その母親の乳と共に口にした國語で書きました。そして決して他國語を求めて、その高遠な思想を現はさうとはしませなんだ。さういふ譯ぢやからこの習はしは正に何れの國にも適用さるべきものぢや。ゼルマンの詩人がその自國の言葉で書いたとてその値打ちを下げるものではない。またカスティル人でもビスケー人ぢやとても、その銘々の國語で書いて値打の下るものではないのぢや。しかし御令息は思ふにスペインの詩に對してゞはなく、外國語の知識もなければ、また自分等の心に湧いて來る自然の靈感に光彩を附し生命と活氣を與へる學術の知識もない、ほんのスペイン語の平仄いぢりどもに對して、快からず思うてござるのであらう。しかしその點でもやツぱり令息は間違うて居られる。そのわけは、本來から申せば詩人は生れる者ぢや。つまり天成の詩人はその母胎から詩人として出て來るのぢや。そしてその天稟の性向に從うて行けば別に研究



とか技巧とかの助けを借らずとも、あの Est Deus in nobis 云々（われ汝等の中に神あらばその個個にそゝと言うた人の言葉は如何にも眞ぢやと思はせるやうな詩を作り出しますのぢや。それにまた生れながらの詩人であつて技巧の助けを借るに至れば、いよ〳〵すぐれた詩人になつて、唯技巧の知識にのみ賴つて詩人にならうとする者を遙かに凌駕します。これ卽ち技巧は自然を凌駕せず、唯自然を完全の域に達せしめるのみですからの。そこでかうして、自然は技巧と、技巧は自然と結び付いて一個の完全な詩人を產み出すのぢや。拙者のこの議論を結ぶに當つて、今一言申しますが、御令息は如何にも非常に勉強好きの方らしいし、また語學といふあらゆる學問の第一階段を既に見事に昇られたからには、その星の導くまゝに任されたが宜しかろと思ひます。令息はそれ等のもの、助けにより、また御自分の精勵によつて雅文學の絶頂に達せられるでござりませう。それは獨立の紳士には非常に似つかはしいことであり、また丁度僧正における僧冠のやうに、博學の辯護士における長上着のやうに、その文學は御令息の飾りとなり譽となり名聲となりませう。もし令息が他人の名譽に關して諷刺の詩を書かれたら、叱責を加へてそれを引き破りなされ。しかしもしホーレース流に、またあの人のやうに上品に、一般の不德を責める議論を書かれたら褒めてお上げなされ、嫉妬を責める物を書き、その詩の中で嫉妬深い者やその他の不德を嚴しく咎めるのは

個人を特に掲げ示さぬ限り、詩人たるもの、正當の業ですからの。しかし世には、人の惡口を言ひたい爲めにポンタスの岸邊（黒海の西海岸、ローマのアウガステス大帝の不興を蒙り帝時の大詩人オヴイド此處に流刑に處せらる）へ追放されるやうな危險を冒す詩人もありますわい。詩人はその品性が無垢であれば、その詩も亦無垢でありませう。筆は心の舌ぢや。そこで心に産み出される思想が、そのまゝ筆に書き下される物となる。そこで王侯が賢こい德の高い考へ深い題目に就いて書かれたこの素晴らしい詩技を御覽になれば、その詩人を賞揚し尊敬せられて、雷電も尚且つ打たざる樹（月桂樹）の葉の冠を被せて下さるのぢや。それは丁度、そのやうな冠で飾られ崇められた額を持つて居る人々は、何人も打つてかゝつてならぬと布令るやうなものぢや。』

ドン・キホーテのこの議論を聞いて、綠りのガバンを着た紳士は非常に驚嘆して、先きに彼を狂人だと思つた自分の考へを棄てかけたのであつた。しかしサンチョーは、この話は自分の趣味には餘り合はなかつたので、その話の中頃から外して直近くに丁度牝羊の乳を搾つてゐる羊飼ひ等のところへ少し許り乳を貰ひに行つた。丁度この紳士が、ドン・キホーテの健全な分別や理解力を非常に喜んで再び會話を初めようとした途端に、ドン・キホーテは顏を上げて自分の行く手の方を見ると、王室の旗で蔽はれた一臺の馬車が同じ道を此方へやつて來るのを認めた。そこで



彼は、これこそ必ず何かの新しい冒險に違ひないと信じたので、大聲をあげてサンチョーに、その兜を持つて來いと命じた、サンチョーは自分の呼ばれたのを聞いて、羊飼ひ等に別れ、烈しくダップルに鞭を當てゝ主人のところへやつて來た。この主人にはこゝで一つの恐ろしい命がけの冒險が降りかゝつたのである。

## 第十七章　にはドン・キホーテの比類なき勇氣の到達したる、もしくは到達し得たる最高絶頂を示し、並せて目出たく成就せる獅子の冒險を示す。

この偉大なる物語の作者は、本章に記されたことを述べるに當り、寧ろこれを沈默の裡に葬り去りたかつたと言つて居る。蓋し本章に於いてドン・キホーテの狂氣は想像され能ふ限りの最高絶頂に到達し、更にその最高絶頂の彼方數百間に達して居るので、讀者に信じられぬであらうと氣遣つた爲めである。しかし結局、以上の如き懸念や心配を抱きながらも尙、作者はこの物語に附け加へるところなく、また微塵も眞理を棄て去ることなく、己れに對して持ち出されるかも知れぬ荒唐無稽の非難を全然無視してこれを記した。而して作者は正しかつたのである。何故といふに、眞理はか弱くこそなれ壞けはせず、また常に水の上の油の如く、荒唐無稽の上に浮び出るからである。かくの如くして作者はこの物語を進めて言ふ、ドン・キホーテが兜を持つて來いと



サンチョーに呼びかけた時、サンチョーは丁度羊飼ひ等が賣つてくれることになつた幾らかの凝乳を買ひ取つて居るところであつた。そこへ主人が大急ぎで呼んだので彼はうろたへて、その凝乳を何うしてよいか、また何に入れて運んでよいか分らなかつた。そこで彼は既にその代金を拂つてしまつたのでそれを失うまいとて、ふと主人の兜の中に入れたが一番よいと考へ附いた。そしてこの妙案を實行して、主人は何の用事で自分を呼んでをるのかと、その方へ急いだ。彼が近づくと、主人は大聲で言つた、『おい〳〵、その兜を呉れい。あれ、あすこからやつて來るのは確かに、武具の用意をして置かずばならん冒險に違ひないのぢや。』これを聞いて綠衣の人は四方八方を見廻した。しかし彼の眼に見えるものは、二つ三つ小旗を立てゝこちらの方へと近づいて來る一臺の馬車より外にはなかつた。それはどうしても國王陛下の寶物を運んで行く馬車に違ひないと思はれた。そこで紳士はさうドン・キホーテに言つた。しかしドン・キホーテは自分にふりかかつて來る程のものは殘らず冒險冒險又冒險であると、常に思ひ込み信じ切つてゐるので、彼の言ふ事は何うしても信じなかつた。そこで彼は紳士に答へた、『用意を整へた者は既にその戰を半ば戰うたも同然ぢや。拙者が用意をしたとて何も失ふところはござらん。拙者は今までの經驗に依つて、目に見える敵見えぬ敵の有ることを承知して居るのぢや。またそれ等の敵は何時何處

で、また何の刹那に如何なる形で拙者を襲撃するとも計られぬのぢや。』そしてサンチョーに向つて兜を呼んだ。サンチョーは兜の中から凝乳を取り出す暇がなかつたので、そのまゝで差し出さねばならなかつた。ドン・キホーテは兜を取つて、その中に何があるか氣もつかずに、大急ぎで頭の上へ被せた。しかしその凝乳が壓し着けられ締め付けられるに從つて、乳汁は彼の顔にも鬚髯にも一面にだら〳〵と流れ出した。これを見て彼は非常に吃驚してサンチョーに向つて喚き立てた、『サンチョーよ、これは何ぢや？拙者の頭が軟かになりよるやうぢや。でなければ腦味噌が溶けるようぢや。でなければ頭から足まで汗だらけになるやうぢや！たとへ汗を流しをらうと、こりや決して怖さの爲めぢやないぞよ。今方に拙者の身に降りかゝらうとしてをる冒險が恐ろしいものぢやとは疑ひもなく信じて居るぞよ。持ち合せて居るなら何か身體を拭く物を呉れい。この大汗では眼も開けられんわい。』

サンチョーは默つて彼に布を渡した。そして同時に主人が事の眞相を看破らなんだことを神に謝した。やがてドン・キホーテは顔を拭いてから、自分の頭に冷や〳〵觸るものは何であらうかと、兜を脫いで見た。するとその中に白い軟かい物があるので、それを鼻に持つて行つた。そしてその香を嗅ぐや否や喚き出した、『やい〳〵やい！貴樣はこの中に凝乳を入れ居つたな！謀反人め、このづう〳〵しい無作法ものめ！』



これに對してサンチョーは非常に落ち着いて、素知らぬ顏して答へた、『もし凝乳なら私に下さりませよ、旦那樣、私が喰ひますわい。けれどそりや惡魔に喰はせなされ。吃度あいつ奴がそこへ入れたに違ひござりませんからの。私が貴方樣の御兜を汚すやうな大それたことをする！いや貴方は立派にその科人を御推量なされましたぞ！　旦那樣、誓言、神樣が下さるお光にかけて、私もやッぱり貴方樣の御家來で手足のやうに働くので吃度この身につけまとふ魔術使ひが居ると見えますわい。そしてそいつ等が吃度その汚い物を兜の中へ入れて置いて貴方樣の拵忍袋を破らして何時もの通り私の肋骨を貴方樣に打たさうとたくらんだに違ひござりません。やれ〳〵まア今度はあいつ等も當て外れぢや。旦那樣の立派な眼でぢやんと見て下されば私が凝乳も乳も、その他そんなものは一切手に入れなんだぢうことは大丈夫分りますからの。そして、もし私がそんなものを手に入れたのなら、兜の中へは入れずにこの胃袋の中へ入れる筈でござりますからの。』

『さうかも知れんの。』とドン・キホーテは言つた。紳士は驚いて一部始終を見守つてゐたが、殊にいよ〳〵驚いたのは、ドン・キホーテがその頭や顏や鬚や兜を綺麗に拭いてしまうてから、そ

の兜を頭に被り、鎧にしかと身を据ゑ直して、剣の鯉口を緩め、槍を引ッ摑みつゝ、『さッ何者なりとやつと來い。さア來い！たとへサタンが自分で來ようとも眼に物見せてくれようぞ！』と叫び出した時であつた。

もうこの時は、例の旗を立たた荷馬車は間近に來てゐた。それには騾馬に乘つた厩者とその荷馬車の前に腰かけてゐた一人の男の外には誰も附き添うてゐなかつた。ドン・キホーテはその行く手に立ち塞がつて言つた、『こら〳〵、お前等は何處へ行くのぢや？これは何の荷馬車ぢや？その中には何を積んでをるのぢや？その旗は何ぢや？』

これに對して馭者は答へた、『この荷馬車は私のでござります。この檻の中には一對の獅子が入つてをりますが、オランの知事樣から國王陛下へ御獻上物として、御殿へ運んで行く途中でござります。そしてその旗は、畏れ多くも王樣のお旗で、こゝに在るのは王樣の御品ぢやといふ標に立てゝをりますのぢや。』

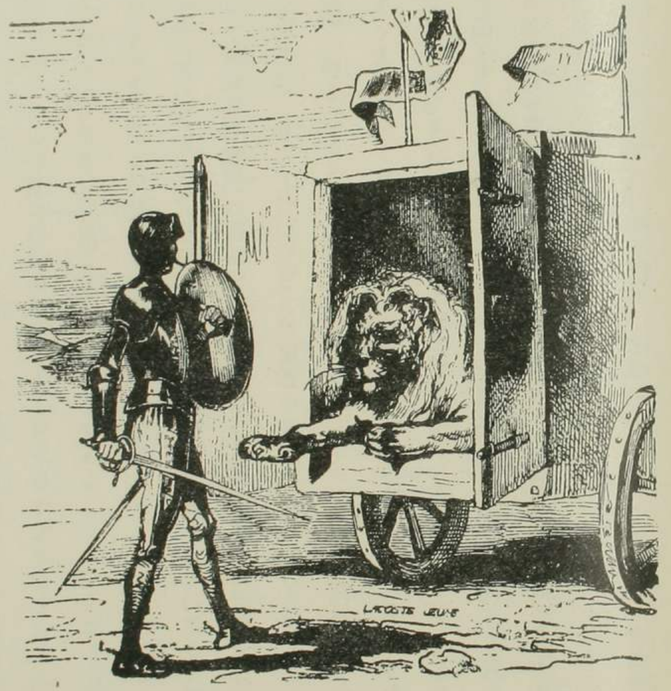
『して、その獅子は大きいのか？』とドン・キホーテは訊ねた。

『大層大きうござります、』とその荷馬車の戶口に坐つてゐた男が答へた、『これまでアフリカからスペインへ渡つたもの、中では一番大うござりまするわい。私ア獅子飼ひでござりまして、これまで澤山の獅子を伴れて來ましたが、これ位のは一度もござりませなんだよ。これは牡と牝でござります。前の檻のが牡で、後のが牝です。そして二疋とも今朝からまだ何も食うてゐませんからもう飢じがつて居りますよ。それで食ひ物の手に入る村まで早う行かにやなりませんので、どうぞ途をあけておくんなさいませ。』

これを聞いて、ドン・キホーテは輕く微笑して叫んだ、『獅子めをば拙者に！拙者に獅子めを、しかもこんな場合に！フム、よし！こんな物をこゝへ送つた人々には、この拙者が獅子に怖ぢる人間であるかないかを見せて進ぜるわい。これお前さん、降りた〳〵。そしてお前さんは番人ぢやから、この檻の戶を開けて、その獸どもを拙者の方へけしかけるんぢや。さうすれば拙者はこんな獸を拙者に差し向けて來た魔術使ひどもの裏を書いて、この野原の眞中でラ・マンチャのドン・キホーテの手並を見せてやらうわい。』

これを聞いて例の紳士は獨語した、『それ、それ。この偉いお侍樣はとう〳〵本音を出しよつたわい。あの凝乳が、屹度この人の頭の骨を軟げて腦味噌を頭へ上げたに違ひない。』

丁度この刹那、サンチョーがその人の側へ來て言つた、『旦那樣、どうぞお情に何とかして私の旦那のドン・キホーテ樣がこの獅子と喧嘩をおッ始めなさらんやうにして下されよ。もしさうで





もなつたら、こゝに居る私等は殘らず切れ〴〵に引き裂かれませうからの。』

『それでは、お前さんの御主人は、こんな猛獸と戰さを始めなさるかも知れんと、お前さんまでが心配する程氣が狂うてござるのかい？』と紳士は訊ねた。

『氣が狂うてぢやござりません、たゞ向ふ見ずでござりますわい。』とサンチョーは言つた。

『私がそれは止めませうわい。』と紳士は言つた。そして今しもその檻を開けよと獅子飼ひに強請してゐるドン・キホーテのところへ行つて、紳士は言つた、『お侍樣、一體武者修業者といふ者は、目出たい結末がつくといふ望みのある冒險には兎も角ぢやが、まるでその望みのないやうなものには手を付ける筈のものぢやありません。暴虎馮河の勇は、勇氣といふよりも却つて狂氣の沙汰でござりますからの。それに、この獅子どもは貴方に手向ひしても來ねば、そんなこと夢にも思うては居りません。これは國王陛下への獻上物として行く途中なんですから、それを止めたり旅を遲らせたりするのは不都合でござりませう。』

『いや貴方、』とドン・キホーテは答へた、『貴方はまアこゝを退いて、貴方の人馴れた鳩鴿や向ふ意氣の強い白貂などの心配をなさるがよい。そして他人にはめい〳〵の仕事をやらせなさるがよい。これは拙者の仕事ぢや、拙者はこの獅子どもが拙者に向つて來たか來んかをちやんと知つてを

りますわい。』そして獅子飼ひに向き直つて奴鳴つた、『さア こら〳〵、今の今卽座に檻を開けんなら、この槍で貴樣をこの馬車へ突き刺してやるぞよ。』

馭者は、この甲冑を着た化物の決心を見て取つて、彼に言つた、『どうぞ旦那樣、お情でござりますで、この獅子を出さん前に、どうか、この驟馬どもの頸軛を外して危うないところへ私と一緒に逃がしておくんなさいませ。もしや獅子どもがこいつ等を殺してしまうたら、私ア一生の身の破滅でござりますわい。私の身代はこの驟馬とこの馬車だけでござりますからの。』

『あゝ疑ひ深い男よ、』とドン・キホーテは答へた、『下りて頸軛を外すがよい。そんなことが無駄骨折りであるのは直に分らうわい。そんな面倒をせにやよかつたといふことがな。』

馭者は降りて大急ぎで驟馬の頸軛を釋いた。そして獅子飼ひは出る丈けの聲を出して叫んだ、『さア皆さんよう聞いて下さい。私は心ならずも無理やりに強ひられてこの檻を開けて獅子どもを出しますのぢや。そこでこの獸から起る一切の怪我過ちも、また私の給金も罰金も、この旦那樣が引き受けなさるんぢやと、前以て申して置きますぞよ。そこにござる旦那樣、貴方も檻を開けんうちに避けてござれよ。私だけには害をせんことは分つとりますからの。』

その紳士は、そんな馬鹿げたことを始めるのは神を試みることであるから、いま一度ドン・キ

ホーテを諫めて、こんな氣違ひじみたことを止めさせようと骨折つた。それに對してドン・キホーテは自分のしようとしてゐることは自分が十分承知の上だと答へた。紳士はそれに答へて、貴方が妄想にかゝつてゐなさることは私には分つて居りますから、よう考へ直して下さいと言つた。ドン・キホーテはそれに答へた——

『なる程、貴方はもしこの悲劇と、貴方は思ふてござるやうぢやが、これを見たうないと思はツしやるなら、その班の牝馬に拍車を當てゝ、間違ひのないところへ行きなさるがよい。』

これを聞いてサンチョーは眼に涙を浮べながら、これに比べてはあの風車の冒險も、あの物凄い晒し車の冒險もまた實際、ドン・キホーテが今までの生涯の中に掛り合うた殘らずの喧嘩爭ひも、ほんの菓子やうまいパンのやうなものに過ぎないのであるから、こんな冒險は止めるやうにと頼んだ。そして彼は言つた、『旦那樣、御覽なされ。今度のにや魔術もなければ、そんな物は何もござりませんわい。あの檻の柱の合間隙間から本當の獅子の前足が見えとりますからの。あんな巨大い足を持つとるところから見ると、この獅子はきつと山よりも大きいに違ひござりませんわい。』

『とかく氣怖すれば、世界の半分よりも大きう見えようわい。』とドン・キホーテは言つた。『サ



ンチョーよ。退け、構うてくれるな。またもし拙者が此處で死んでも、お前と拙者のあの古い約束は覺えて居らうの。お前はドゥルシネアを訪ねるのぢやもう何も言はぬぞ。』これ等の言葉に加へて、尚彼の氣違じみた目論見を止めようとする一切の望みを斷ち切るやうな言葉を言つた。綠衣の人は無理にもその企てを止めてやりたかつた。しかし彼は武力にかけてはドン・キホーテの敵でないと覺つたので、こんな狂人に毆られでもしては損だと思つた。彼は今や何の點から見てもドン・キホーテを狂人と思つたのである。ドン・キホーテは獅子飼ひに向つて、その命令を新たにしその威嚇を繰り返しつゝ、例の紳士にはその牝馬を、サンチョーにはそのダップルを、また馭者にはその騾馬どもを急がせて、そして獅子が飛出さぬうちに出來るだけこの馬車から遠ざかるやうに努めよと命じた。サンチョーは主人の死を思うて泣いてゐた。今度といふ今度は主人はその獅子の爪に懸るものと確かに信じたからであつた。そして彼は自分の運命を呪ひ、且つ自分が今度主人に二度目の奉公をしようと思ひついたその時を、不仕合せな時と呼んだ。しかし如何に涙を流し歎けばとて、例の馬車と自分との間に十分の間隔を作る爲めに、ダップルを鞭打つことは忘れなかつた。獅子飼ひは最早避難者等が可なり遠方まで逃げのびたのを見て、宛らまだ一度もドン・キホーテに哀願し警告せなんだかの如く、更に哀願し警告を與へた。しかしドン・キ

ーテは、そんな言葉は確かに聞きはするが、この上如何に哀願すればとて警告を加へればとて何の甲斐もないことであるから、そんな無駄骨を折らずに急いで命令の通りにせよと言つた。

獅子飼が第一の檻を開かうとてぐずぐずしてゐる間に、ドン・キホーテは馬上でよりも徒歩で戰つた方がよくはないかと、兎やかう思ひ煩うてゐた。が遂に、獅子を見てロシナンテが物怖するかも知れぬと氣遣ふところから、徒歩で戰ふことに決心した。そこで馬から跳び降り槍を投げ棄てゝ、片腕に楯を引き寄せ、劍を抜きながら、驚くべき沈毅と決死の勇を以てしづ〳〵と進み寄つた。そして專念先づ神に祈願を籠め、その次ぎに愛人ドゥルシネアに身の保護を祈つてその馬車の前面に突ッ立つた。

茲に注意すべきことは、この信憑すべき物語の作者が、この條まで來ると急かに咏歎を發してゐるとである。『嗚呼、勇壯なるドン・キホーテよ、頌揚しても餘りある勇烈のドン・キホーテよ、この世にありとある勇士の以てその姿を映すに足る鏡よ！嘗てわがスペイン國の騎士道の榮光榮譽と歌はれたドン・マニュエル・デ・レオンの第二世にして、その再來よ！この物恐ろしい事蹟を余は如何なる言葉で記さうか。これを後世に信ぜしめるには如何なる言葉に據るべきであらうか。たとへ如何に誇張に誇張を重ねた如何なる頌讃の辭も爾に對しては不當ではあるまい！徒歩で、



たゞ一人、臆せず勇を揮うて、たゞ一口の劍を――しかもそれはペリルローの銘刀（當時有名なる鍛冶の銘）を有つたへのよい打ち物でもないのを持つて、その楯といへばきら〳〵と磨かれた鋼鐵製のものでもなくかくして爾はアフリカの大森林で育つた最も猛烈な二頭の獅子を叱咤し待ち構へて突ッ立つたのである！爾の勳業をして爾の讃辭たらしめよ、嗚呼勇敢なるマンチャ人よ！余は遂にその勳業を賞揚する言葉を知らないので唯このまゝにして置かう。』

こゝで作者の歎聲は終りを告げてゐる。而して彼は進んでその物語の絲を取り上げてかう述べてゐる、例の獅子飼ひは、ドン・キホーテが固く言ひ張つて動かし難いのを見、また到底その壯獅子を出さなければこの憚悍剛毅なる騎士の怒りを招くことは避け難いものと見て取つたので、第一の檻の戸を撥ね明けた。それには、先に述べた通り、非常に大きな物凄い恐ろしい貌附をした牡獅子が容れてあつたが、今や姿を現はして來た。その獅子は先づ第一に、自分の臥てゐた檻の中でぐるりと身體を廻した。そしてその鉤爪を突き出してうんと全身を伸ばした。その次には口を開けて非常に悠々と欠びをした。それから尺にも餘る舌をぺろりと出して、眼から埃を祓めて顏を洗つた。これがすむと檻の外へ顏を突き出して、赤熱した石炭のやうな眼で四方八方を見廻した。その光景、その風丰は、剛勇の權化にも尙恐怖を懷かしめるやうに見えた。ドン・キ

ホーテは、これが檻から飛び出して來て搭闘を始めたら、その時こそずたゞ〳〵に斬り裂いてやらうと待ち焦れながら、たゞ毅然として獅子を見守つたばかりであつた。

比類なき彼の狂氣はそこまでも進んだのだ。しかしながら、倨傲といふよりも慇懃なこの氣高い牡獅子は、馬鹿らしい空威張りを氣に懸けることもなく前述の如くあたりを見廻してしまふとぐるりと身體を轉じてドン・キホーテの方へ臀を向けて、非常に冷靜に且つ沈着に再び檻の中に臥そべつた。これを見てドン・キホーテは、獅子飼ひに棒で獅子をつゝいて怒らして外へ出すやうに命じた。

『そりや御免を蒙ります。』と獅子飼ひは言つた、『もし私がこれを怒らせたら、眞先に引き裂かれる者ア私でござりますからの。お侍樣、もうこれだけで滿足しておくんなさい。もうこれだけで御勇氣にかけちや文句はござりませんから、重ねて運試めしをするやうなことはお止しなされ。獅子は戸を開け放されてをりますから、飛び出さうと飛び出すまいと勝手でござります。けれど今まで飛び出さんのを見ると、今日はもう出たうないのでしよ。貴方樣の御勇氣の大したものといふことはもう十分顯はれましたわい。どんなに勇ましい戰士でも、敵に戰を挑みかけて戰場で待ち受けてをるより上の事はするものぢやないと、私ア思ひますわい。そしてもし相手が出て來なんだら、その恥は相手の方にあつて、勝利の冠は待ち受けてをる者が持つて行きますのぢや。』



『そりや全くぢや。』とドン・キホーテは言つた、『ではお前さん、その戸を閉めなさい。そしてのお前さんに出來る最もよい形式で、お前さんが今見た通りのことを拙者の爲めに證明して貰ひたいのぢや。卽ち、お前さんがこの獅子の爲めに戸を開けてやつたこと、拙者がその獅子を待ち受けたこと、獅子が出て來なんだこと、尙も拙者はその出て來るのを待つたこと、それでも尙獅子は出て來ずに再び臥そべつてしまうたこと、さういやふうなことを。拙者はこれ以上のことをする必要がない。魔術使ひ等は去り居れ。神は何卒正義と眞理と眞の騎士道とを扶け給へ！今言ふやうにその戸を閉めなさい。拙者は逃げて行つた避難者どもへ合圖をして、呼び返してお前さんの口からこの大功名を聞かせて貰うてやらうよ。』

獅子飼ひはそれに從つた。ドン・キホーテは、先程凝乳の洪水の後で顏を拭いた布を槍の先へ結ひ付けて、他の人々を呼び返した。彼等は一步毎に後をふり返りつゝ、凡て一團となつて例の紳士が殿部をして、尙も逃げ續けてゐたのであつた。しかしサンチョーは、ふとその白い布の合圖を見て叫んだ、『こりやきつと私の旦那樣があの獅子に勝ちなさつたに違ひない。あんなに私等を

呼んでござるからの。』

彼等は殘らず足を止めた。そしてドン・キホーテが合圖で以て彼等の恐怖を或る程度まで振り捨てさせようとしてゐるのを認めたので、そろ〳〵と引き返して來たが、遂に自分等を呼び戻してゐるドン・キホーテの聲がはッきり聞えるところまで近づいた。遂に彼等は馬車の側へ歸つた。彼等が着いたのでドン・キホーテは駄者に言つた、『これお前さんは、も一度その騾馬に馬具をつけて旅をつゞけなさい。そしてサンチョーよお前はその駄者と獅子飼ひとに金貨を二つやるがよい。それは拙者の爲めにこの人たちの旅を遲らせた償ひぢや。』

『與りますとも與りますとも、』とサンチョーは言つた、『しかし獅子は何うなりましたかい？死んどりますか生きとりますか？』

茲に於て獅子飼ひは、その力と能力の及ぶ限りドン・キホーテの勇氣を賞揚しつゝ、細大洩らさず順序を追うてその仔細を物語つて言つた、このお侍を一目見ると獅子は縮み上がてしまつて、何時まで檻の戸を開けて置いても出て來なかつた。そこでこのお侍はその獅子を怒らせて是が非でも出させよと言はれたが、それは神樣を試みることであるからと言ひ立てたので、お侍樣も非常に心ならず殘念に思はれたが詮方なく戸を閉めるのを許されたと。



『サンチョー、お前はそれを何と思ふぞ？』とドン・キホーテは言つた、『眞の勇氣に打ち勝つ魔術があらうか？魔術使ひ等は拙者からよしや好運を奪ふことは出來ても、剛毅や勇氣を奪ふことは出來ぬのぢや。』

サンチョーは金を與へた。駄者は騾馬に頸靽を附けた。獅子飼ひは自分の惠まれた賜物のお禮にドン・キホーテの手を接吻した。そして宮中で國王樣にお目に掛かり次第この勇ましい功名話を必ず直き〳〵にお耳に達しますと約束した。

『その時もし陛下が、その功名の立て主はとお訊ねにでもなつたらの、』とドン・キホーテは言つた、『それは「獅子の騎士」でござりますとお答へしなさい。拙者はこれまで持つて居つた「憂ひ顏の騎士」といふ名前を、今日以後は今言うた名前に取り代へ附け替へあらためる積りぢやからの。またかうすれば拙者は武者修業どもの昔ながらの習はしを履むことになるのぢや。武者修業者どもは銘々の氣の向いた時、或ひは自分の志しに適ふと思ふた時に、その名前を更めたものぢや。』

荷馬車はその道を進んだ。ドン・キホーテとサンチョーと綠のガバンを着た人もまた彼等の道を進んだ。ドン・ディエゴー・デ・ミランダはこの間中一と言も口をきかなかつた。それはドン・キ

ホーテのあらゆる行爲や言葉を觀取し聽取すことに忙殺されてゐたからである。そしてドン・キホーテに對する彼の意見は、これは狂うた頭腦の人で而も理性の瀬戸際に立つてゐる狂人であるといふのであつた。ドン・キホーテの前篇はまだ彼の手に達してゐなかつた。彼がもしもそれを讀んでゐたら、彼がドン・キホーテの言行に接して感じた驚きは消えたであらう。蓋し若しさうであつたら、彼の狂氣の性質をよく了解してゐたであらうから。しかし彼はそれに就いて何の知るところもなかつたので、或る刹那には彼を正氣の人と思ひ、次の刹那には狂人と思つた。何故なれば、彼の言ふことは條理正しく上品で纏まつてゐたが、そのすることは不條理で向ふ見ずで馬鹿げてゐたからである。そこで彼は獨り言を言つた、『何が氣違ひと言うても、凝乳の一杯入つてをる兜を着て、そして魔術使ひが自分の頭の骨を溶かしよると思ひこむ程の氣違ひがあらうかい。また獅子の牙や爪と戰ひを挑むやうな向う見ずな馬鹿げたことがあらうかい？』

ドン・キホーテはこの紳士の考へ込んで獨り言を言つてるのを呼び覺まして言つた、『ドン・デエゴ・デ・ミランダ殿、屹度貴方は拙者を馬鹿で狂人ちやと思うてござりませうな。またさう思はれたとて別に不思議はありませんわい、拙者の行爲は正しくそれを證明して居りますからの。ぢやがそれでも、拙者は貴方が思はれる程の馬鹿でも氣違ひでもないといふことを見て頂きたい



です。或る勇敢な騎士は廣場の眞中で、その主君の面前で、槍を揮つて猛烈な牡牛を見事に突き刺すのを得意にします。また或る騎士はおもしろい武術試合を見物に來て居る婦人等の前でぴかぴかする鎧を着飾つて試合場の中を步き廻るのを得意にします。そしてそんな騎士等は皆、戰の調練やその眞似事で銘々の主君の廷臣たちを欺待したり娛ませたりまた、こんなことが言へるなら敬意を表したりするのを得意にして居りますのぢや。しかしかやうな一切のものにも優つて得意なのは、廻國の騎士が、危險な冒險を搜し廻つて、赫々たる不朽の名譽を得たいばかりに、あらゆろ冒險に目出たい上首尾の結末をつけようと一心になつて、沙漠や人里離れたところや四辻や森林や山間を遍歷する時ですよ。拙者の思ふところでは、宮廷の騎士が市の娘御とふざけて居るよりも、武者修業が物淋しい荒野で寡婦を助ける方が餘程ましぢや。凡ての騎士は銘々その特別の役目を持つてをります。宮廷の騎士には宮女がたに身を獻げさせるがよい。その制服によつて主君の宮廷に光彩を添へさせるがよい。その贅を盡した食卓で貧乏な紳士を饗應させるがよい。馬上試合や戰の調練を指し圖させて、氣高い應揚な莊麗な、取り分け善良なキリスト敎徒たることを示すがよい。さうすればその身に特に割り當てられた義務を果たすことになりませう。しかし武者修業には世界の隅々まで踏み破らせ、この上もなく入り組んだ迷宮の中までも踏み込

ませるがよい一歩毎に不可能のことを試みさせるがよい。荒涼たる草原で燃ゆる眞夏の日光を浴びさせ、身を切るやうな冬の嵐や霜空に曝らさせるがよい。獅子にも臆せず、怪物にも恐れず、龍にも戰かせぬがよい。何故といふに、かやうな物を捜し求めて攻撃して、あらゆる物を征服するのは、これ實に武者修業者の主要なる務めであるからぢや。そこで、この武者修業者の一員たる運命を受けた拙者は、拙者の本分の範圍に屬すると思はれる一切の物事を避けることは出來ません。さればこそ、拙者はたとへ無謀極まることは知りながらも、身に負はされた義務によつて今も今とてあの獅子を攻撃しましたのぢや。拙者は勇氣の何物であるかは承知してをる。勇氣とは卽ち二つの誤つた極端、卑怯と憚悍との間に位する美德ぢや。しかし、卑怯の端に達するまで沈む者よりも、無謀の端に昇るまで勇敢な者の方が却つて禍は少いのぢや。蓋し吝嗇の人よりも放蕩者の方が物惜しみをせぬやうになり易いと同じく、卑怯者が眞の勇者となるよりも亂暴者が本當の勇氣を現はす方が容易なわけぢや。そこで、ドン・ディエゴー殿、冒險を企てるは、一枚の骨牌で餘り少く負けた方が宜しいのです。何故といふに、「某の騎士は卑怯で臆病ぢや」と言はれるより『某の騎士は亂暴で勇敢ぢや』と言はれる方が聞えがよいですからの。』



『まことにドン・キホーテ樣、』とドン・ディエゴーは言つた、『貴方の言はれたことも爲されたことも殘らず道理の結晶石で試めされて正しいと分りました。また、もしや武者修業の掟や法律が失なるやうなことがありましても、全く貴方のお胸こそその本來の貯へ所、祕藏の倉でござりますわい。しかし、もう大分遲くなりましたから急いで私の村へ參りませう。貴方樣は私の宅で先程のお疲れをお息めなされ、先程のお働きでお身體はとにかくお氣をお使ひなされましたからな。そして氣を使ふと梢もすると身體まで疲れるものでござりますからの。』

『そのお誘ひは誠に有り難く忝けなうお受けいたします。ドン・ディエゴー殿。』とドン・キホーテは答へた。そして今までよりも足並を早めて進んだので、午後二時頃に村に着いてドン・ディエゴー卽ち、ドン・キホーテの言ひ方に從へば綠の上着の騎士の家へと到着した。

## 第十八章

綠の上着の騎士の城もしくは家に於てドン・キホーテに降りかゝつた事ども、並びにその他の並外れた事ども。

ドン・キホーテは、ドン・ディエゴー・デ・ミランダの家の百姓家風に建てられてゐるのを見た。その表戸の上には粗削りの石に紋章を彫つてあつた。中庭には物置き部屋があり、入り口の下の土間には酒甕が澤山にずらりと並んでゐた。これはエル・トボソから來たものであつたので、ドンキホーテの心には、かの魔術にかけられて變貌してしまつたドゥルシネアのことを想ひ起さしめた。そこで彼は溜息を吐いて自分が何を言うて居るかも、又誰が聞いて居るかも考へずに、呼ばはつた——

『あゝ汝、いとしき寶よ、今は悲しみの種ー
嘗て天意の厚かりし日は如何にいとしく樂しかりしぞ。
あゝ、このトボソの甕よ、お前は拙者の心に、つらひ歎きの種であるいとしい人のことを思ひ



起させるわい！』

彼を迎へようとて母親と共に出て來たドン・ディエゴーの息子の學生詩人は、この嘆聲を洩れ聞いた。そして息子も母親もドン・キホーテの並外れた姿を見て吃驚した。しかし彼はロシナンテから降りて非常に慇懃に歩みを進め、主婦の手を接吻しようとて許しを求めた。その間にドン・ディエゴーは言つた、『こゝにござるのは智勇共に並びない武者修業者で、ラ・マンチャのドン・キホーテ樣ぢや。いつもの通り親切にお歎待をしておくれよ。』

その婦人の名はドーニャ・クリスティナと言つたが、彼女はあらゆる好意と慇懃を盡してドン・キホーテを迎へた。また彼も撰りに撰つた上品な言葉で以て彼女に敬意を表した。殆んど同じ程の恭しい挨拶が、彼と學生との間にも交された。學生はドン・キホーテの言葉に耳を借してゐる間に聰明な明晰な頭を持つた人だと思つた。

こゝで作者は、このドン・ディエゴーの邸に屬する一切の物を細かに記して、富裕な豪農の家の内容を殘らず描き出してゐる。しかしこの物語の飜譯者はそんな物やその他それに類する細かしい事は默過する方がよいと思つた。何故なれば、それ等はくだ〳〵しい枝話よりも寧ろ眞實を主眼とする本書の主要な目的と調和しないからである。

彼等はドン・キホーテを一室へ案内した。サンチョーは彼の鎧を脫がせてやつた。すると彼は、すつかり鎧の錆に汚れた、フルーン風の寬いズボンと羚羊革の胴衣だけになつた。彼の襟は、糊も飾紐も附いてない、學者風の折れたのであつた。彼のバスキン（半長靴の一種）は水牛色で、短靴はぴかぴかしてゐた。彼は立派な劍を、害公魚革の肩帶から吊るしてゐた。傳ふるところに據れば、彼は多年腎臟病を患つたので、この肩帶を用ゐたのである。（顏を洗すに肩帶の方便なる故、痩氣の長めしこれを用ひたりとの意）そこで彼はそれ等の物の上に、立派な鼠色の布の長上着を引ッかけた。しかし何より先に、彼はバケツ五六杯の水で（但しこのバケツの數には多少議論があるが）その頭や顏を洗つた。がそれでも尙水は乳色になつた。これ卽ちサンチョーの食ひしん坊と不仕合せな凝乳の仕入れとが彼を眞白にしたお蔭であつた。

かく裝つて、輕やかな元氣のよい洒落た樣子でドン・キホーテは別室へと通つた。其處には、子息の學生が食卓の出來るまで、彼をもてなさうと待つてゐた。蓋しこんなに名高い客人が見えたので、ドーニヤ・クリスティナは、自分の家へ見える客人に對してはそれ相當の歡待の法も承知してをればそれだけの用意もあるといふことを見せたがつてゐたのである。

ドン・キホーテが鎧を脫いでゐた間に、ドン・ロレンゾー（但しこれはドン・ディエゴーの子息の名前である）は折を見て父親に訊ねた、『お父さん、貴方が伴れてお出でになつたあの客人は一體と



んな方ですか？その名前といひ、その樣子といひ、また貴方が先ッき武者修業者と仰有つたことといひ、お母さんも私も全く面喰うて居るのですよ。』

『さア、何と言うてよいか私にも分らん、』とドン・ディエゴーは答へた、『まア私の精一杯のところを言へばかうぢや、あの人は、この世に又とない狂人の仕草をする人ぢやが、その言ふところを聞くとな、その仕草を殘らず消してしまうほどの賢い言を言ふのぢや、まア お前が直接にあの人と話をしてあの人の智慧を測るがよい。お前は拔け目のない人ぢやから、あの人が悧巧か馬鹿か、十分正しい判斷を附けて見るがよい。尤も、本當を言へばな、私はどうもあの人は正氣とよりも狂氣ぢやと思うがの。』

茲に於いてドン・ロレンゾーは、先に述べた如く、ドン・キホーテを歡待に行つた。そして二人の間に交された會話の進むうちに、ドン・キホーテはドン・ロレンゾーに言つた、『貴方のお父さんのドン・ディエゴー・デ・ミラン殿はな、貴方が世にも珍らしい才能と鋭敏な頭腦を有つてござるとお話になりましたよ。そして殊に貴方がえらい詩人ぢやといふことをな。』

『詩人、ではあるかも知れません。』とドン・ロレゾーは答へた、『しかし、決して、大詩人ぢやございませんよ。尤も幾らか詩をひねくッたり立派な詩を讀んだりするのはしますけれど、私の父

が言ひますやうに「大」といふ肩書を許される程の者ではございません。』

『その御謙遜は奥ゆかしう存じますわい。』とドン・キホーテは言つた、『まア詩人といへば、我れこそ世界一の詩人ぢやと己惚れた考へを持たぬ者はありませんからの。』

『例外のない規則はございませんよ、』とドン・ロレンゾーは言つた、『世には詩人であつても、自分が詩人であると考へんやうな人もありませう。』

『そりやなか〳〵少くない』とドン・キホーテは言つた。『それはさうと、唯今貴方のお手の許にはどんな詩を持つて居られますぞ？又貴方が萬事を措いて一念を凝らしてござるとお父さんから聞きましたが、それはどんな詩ですかい？もし註解詩でありましたら、拙者も多少註解詩を辨へてをりますで、何ならそれを聞かして頂きたうござりまするが。若しやそれは詩競技に出される物なら二等賞を手に入れるやうに工夫をなされ。一等賞は何時も依估最負や身分で取られますが、二等賞は本當の値打で取られますからの。そこでかういふ風に判斷すると三等賞が二等で、一等はつまり三等になる。これと同じやり方で大學の學士號も授けられます。しかし、それでもやつぱり、一等賞は非常な名譽です。』

『そこまでは、貴方を狂人とは取られません。しかしもッと話して見ませう。』とドン・ロレンゾ



ーは心の中で言つた。そこで彼はドン・キホーテに言つた、『貴方樣は學校へお出でになりましたやうですが、どんな學問を研究なさいましたか？』

『武者修業の學問です、』とドン・キホーテは言つた、『この學問も詩の學問と同じですよ。いや、或ひは指一本か二本だけ上手でせう。』

『さういふ學問は私は存じませんよ、』とドン・ロレンゾーは言つた、『只今までつひぞ聞いたこともありません。』

『それも一つの學問です。』とドン・キホーテは言つた、『しかもその中には世にある一切の、いや大部分の學問を含んで居ります。何故といふに、この武者修業に從ふ者は第一に法學者でなければなりません。そして銘々の人に銘々の物銘々の分を分け與へるやうに、法律上の箇別法や衡平法を辨へて居らにやなりません。第二には神學者として、何時でも自分に訊ねられた時には、その奉ずるキリスト教の信仰を明瞭にはツきりと條理を立てゝ答へるだけの力がなけりやなりません。第三には、醫者として、それも取り分け本草家として、荒涼たる荒れ野原の中でゝも傷を癒やす種となる藥草を見分けるやうにせねばなりません。何故といふに、武者修業は行く先きざきで治療をして呉れる人を求めてはなりませんからの。その次には、天文學者として、星辰の運行

により今は夜の何時であるか又自分の居る所は何國のどの方面であるかを知らねばなりません。その次には、數學を知らねばならぬ。到る處でその必要な場合が起りますからの。武者修業が基本的の神學的の一切の美德を身に備へて居らねばならぬことは勿論として、小さい細かいことを言へば、武者修業者なる者は、あの物語にあるやうな、魚のニコラスとかニコラオとか（十五世紀末の有名な詩歌家）のやうに上手に泳ぎが出來ねばなりません。また馬に蹄鐵をはめることも、鞍や面勒を修繕することも知らねばならん。更に重大な事に立ち戻つて言へば、武者修者は神と己れの婦人とに忠誠を盡して、思想を清淨にし、言葉を麗はしくし、骨を惜まず、事を行ふに勇壯に、苦痛には忍耐強く、窮乏せる者には同情厚く、尚最後に、たとへ一身を賭しても眞理の擁護者として働かねばならぬのぢや。かやうな大小樣々の資格を備へてこそ本當の武者修業者は出來上りますのぢや。そこで、ドン・ロレンゾーさん、武者修業を學び奉ずる騎士の習はねばならぬものが、賤しむべき學問であるかないか、又學校で敎へられる最高の學問と比べ物になるかならぬか、それを判斷して御覽なされ。』

『もしさうでございますなら、確かにこの學問は他の何の學問よりも優れて居りますな。』とドン・ロレンゾーは答へた。



『何、もしさうでなければとは？』とドン・キホーテは言つた。

『私の申す意味はかうです、』とドン・ロレンゾーは言つた、『つまり、昔にせよ今にせよ、武者修業者といふものが、而もそんな美德を備へたものが居るか居らぬかゝ疑はしいと申すのです。』

『これまで幾度も言うたことをも一度申しますがの、』とドン・キホーテは答へた、『世の中の大抵の人はこの世には武者修業者といふものが居らなんだと思うて居る。そこで、若し神樣が何かの奇蹟で武者修業者の存在したといふ眞理を人々に親しく感じさせて下さらぬ以上は、（これまで度々拙者が經驗した通り）人間が如何に骨折ればとて效ないことぢやと拙者は思うて居りますわい、そこで大多數の者と同じ謬りに陷つてござる貴方に、只今その妄を釋いて差し上げることはしますまい。たゞ拙者は、貴方をその謬りから救ひ出して下さるやうに、この武者修業者は昔いかに有益な必要なものであつたかといふことを貴方に分らせ下さるやうに神に祈らうと思ひますのぢや、あゝしかし現今は人々の罪の爲めに懶惰と無精と貪慾と贅澤とが時めいて居るわい。』

此處に至つてドン・ロレンゾーは獨り言ちた、『このお客さんはとう〳〵徵候を現はしたわい。しかし、それにしても立派な氣違ひぢやな。それを見て取らなんだとすれば、私もよほどの阿呆

ぢやつたわい。』

此處で食事に呼ばれたので、彼等はこの對話を止めた。ドン・ディエゴーは、あのお客人の賢さは何うぢや分つたかと息子に訊ねた。これに對して彼は答へた、『どんなお醫者でもまたどんな賢い書家でも、あの人の氣違ひじみた亂筆を判じ讀める者はありますまいよ。あの人は一面に條文の入つた合間々々に正氣のある氣違ひです。』

彼等は食卓についた。そして食事は、ドン・ディエゴーが何時も自分の客人に出すと途中で話した通り、清楚して澤山で且つ旨いものであつた。しかしドン・キホーテを最も喜ばせたものはこの家中が驚くべき程寂としてゐたことであつた。それは宛らカルスージアの僧院のやうであつた。

卓布が片付けられて、食後の感謝が唱へられ、そして皆々手を洗つた時、ドン・キホーテはドン・ロレンゾーに向つて、例の詩競技に出す詩を讀んで聞かせよと執念くせがんだ。これに對して彼は答へた、『自分の詩を讀んで聞かせよと賴まれる時には斷つて、賴まれもせん時にはやたらに吐き出すやうな、さういふ詩人の眞似をせぬやうに誦んで見せよう。けれどその註解詩はただほんの練習のために作つたものですから、別に賞を望んでは居りませんのです。』



『拙者の聰明な友人でな、』とドン・キホーテは言つた、『註解詩を作つて無駄骨になることは決してないと言ふ男がありますよ。そしてその人が理由として擧げるところは、つまり註解はとても本文には及ばぬし、また註解は屢〻、いや大抵はその本文の言はうとしてをる意味や目的から外れてしまふ。それにまた、註解の規則が餘り嚴格で、疑問も、また「我は言ひき」も、また「我は言ふ」も許しませんし、それにまた、動詞を名詞に變へることも、文句の結構を變へることも許しません。まだその上に貴方が百も御承知の通り、註解詩の書き手を縛る規則や制限が澤山ありますからの。』

『全くその通りです、ドン・キホーテ樣。』とドン・ロレンゾーは言つた、『實は、私は貴方の揚げ足を取らうと思ひましたが、貴方が私の指から鰻のやうにお滑りになるので、それは出來かねましたよ。』

『そりや何のことですかい、また「滑る」とはどういふ意味ですかの?』とドン・キホーテは言つた。

『また何時かそれは申し上げませう。』とドン・ロレンゾーは言つた、『只今はその註解詩と、その本文とを讀みますから、聞いて下さいそれはかうです——

昔を今になすよしあらば、
我が願ひはそれにて足れり。
あるはまた、今ある時を
來らむ時になすよしあらば！

註解詩

「運命の君」はむかしわれに
惠あつくやさしくぞありし。
さはれ萬物は變る。彼女も心を變へて
與へしものを奪ひ去りぬ。
あゝ運命よ汝に求めて久しいかな。
かの賜物を再びわれに返せかし、
神かけて、われの願ひは外になし、
昔を今になすよしあらば。



わが得んと求むるものは、
勝利や榮譽や榮達に非ず、
たゞ失うて久しき幸福のみ、
その想ひ出こそ苦しけれ、
過ぎ去りし恩寵のひとしづくは
心を焼く焔を消しとむべきに、
その一と滴とくゝ送れかし
さらば我が願ひは足らん。

あゝ、われは叶はぬことを願ふか！
過ぎ行く時を永遠に繋ぎ止め
過ぎにし時を呼び戻さんは
地上の力のおよばぬ業。
時の足は軍船の如し、
長へに過きし時を今ある時に

繰り返せとは仇なる願ひ。

希望と恐怖の間に惑ひさまようは
生に非ずして死なり。
まことや爭ひをとゞめ、死して、
傷みを脫れんとするこそよけれ。
それに如くものなからんも、されど尙
われはその思ひ投げ棄て、
戀々と現在に取りすがり
またも來べき時をぞ恐るゝ、』

ドン・ロレンゾーがその註解詩を誦し終るやドン・キホーテは突つ立ち上つて、彼の右の手を摑みながら、大聲で絶叫するやうに叫んだ、『やれ〳〵、御立派な若いお方よ。貴方こそ世界第一の詩人ぢや月桂樹の冠を受けるに足るお方ぢや。それも——あのもう天國に行つて居る何とかといふ詩人の言うたやうに——サイプラスやガエタのではなく、今もし盛つて居るとすればアゼン



スのアカデミイや、また今盛つてをるパリやボロンニヤやサラマンカ（パリその他はの大學の所在地）の月桂冠ぢや。もしや貴方から一等賞を奪ふ審判者どもが居りでもしたら——どうぞフィーバス（日神）は日の矢を以て彼等を射貫いて下さるやうに、ミューズ（詩神）は決して彼等の家の閾を越えぬやうに。さァどうぞ、お差し支へなければ、も一つ長韵律の誌を讀んで聞かせて下されい。拙者は貴方の珍らしい天才を十分に味ひたいと思ひますからの。』

ドン・ロレンゾーはドン・キホーテを狂人とは思つてゐたものゝ、彼にかう賞讃されて喜んだか否かはいふ必要があるまい。あゝ阿諛の力よ汝の如何に遠大なる！汝の面白き管轄區域の如何に廣大なる！ドン・ロレンゾーはあり〳〵とそれを示した。卽ちドン・キホーテの所望懇願を容れて、ピラムスとティスベ（バビロンで隣り合つた家に住んだ若き男女、兩親の意を通ず、後機會を得て相逢うたが、その時は男は既に自殺してゐた女もその後を追うた）の傳說乃至物語に關する次の短詩（ソンネット）を誦したのである。

ソンネット

「美はしの處女彼の女は今隔ての壁をぞ穿つ。
若きピラムスに胸を穿たれて橫はりつゝ。
キューピッドはサイプラスの島より翼を攫げ

さま〴〵の不思議を見んと飛び來れり、その壁の隙間
そこには沈默ぞものを言ふなる。
かゝる狹き瀨戸越す聲はなけれど
戀の力は一切の叶はぬことを冒して進み、
戀はあらゆる妨げに道を見出だす。
思ひつめし處女のもどかしさに堪へずして、
步調もしどろに、運命の行き着く先は
戀人の腕ならぬ死のふところ。

さてもこの二人の戀人は、一口の劍、
一基の墓。一場の昔語りに、身亡び埋れて
再び生命に返りぬ、實に奇しき物語。
『これは有り難い、』とドン・キホーテはドン・ロレンゾーの短詩を聞き終へると言つた、『大勢熱情詩人のある中に、たつた一人完全無缺な詩人を見出したとは。今の詩の御伎倆はまさしくそれを證明して居りますわい。』



四日の間ドン・キホーテは、ドン・ディエゴーの家でこの上もなく手厚い歡待を受けた。そこで彼はドン・ディエゴーに向つて言ふには、こちらで色々と親切に感激におもてなしを受けたことは誠に有り難くお禮を申す。しかし武者修業者の身としてかう長い間べん〴〵と贅澤三昧に耽つて居るのは不似合なことであるから、拙者は一刻も早く樣々の冒險を搜しに行つて自ら負擔する本分を盡したい。聞くところによれば、この近在には澤山冒險があるといふことであるから、拙者の本來の目的地たるサラゴッサの武術試合のその日まで、その冒險に從事したいと思ふ。そしてその冒險の第一着にはモンテシノスの洞窟に入りこむ積りであるがこの洞窟については樣々不思議な事がこの國內到る處に語り傳へられて居る。また、それと同時に拙者はあの俗にルイデラの湖と呼ばれてをる七つの湖の源の本當の水源をも踏査探險するつもりであると。

ドン・ディエゴーとその子息とは、彼の奇特な決心を賞揚した。そして何なりと御用に立つものがあればこの上もない喜びであるから、御入用の物があつたら私どもの家の物を持つて行つて下さいと言つた。ドン・キホーテの立派な人品に對して、また彼の賞揚すべき職分に對して、實に彼等はさう言はざるを得なかつたのであつた。

出發の日は遂に來た。ドン・キホーテはその日を歡び迎へ、サンチョー・パンザはこれを悲し

み歎いた。サンチョーはドン・ディエゴーの家で十分に賄はれるので非常に満足してゐたのであつた。そこで彼は森や荒野の飢餓と貯への乏しい鞍嚢のまづい食事とに歸ることを拒んだのである。さうではあつたがしかし彼はその鞍嚢の中に最も必要と思はれるものを詰めこんだ。別れ際にドン・キホーテはドン・ロレンゾーに言つた、『もう既に申したか何うか覺えませんがな、しかし既に一度申したとしても今一度申しませう。それは、もし貴方が疲れや骨折を少くして名譽の殿堂の最高絶頂へ昇らうとお望みなさるなら、可なり窮屈な詩の路を乘てゝ更に窮屈な武者修業者の路に着かれるに越したことはありませんのぢや。この路は窮屈とは言ひぢよう、瞬く間に帝王になれる程廣々としたものです。』

この言葉でドン・キホーテはその狂氣の證據を作り上げてしまつた。が更に進んでから附け加へた、『實は、このドン・ロレンゾーさんを御一緒にお伴れ申して行つて、謙遜る者は助け置き高ぶる者は脚下に踏みつけるといふ、拙者の奉ずる職務の主な美德をお敎へ申したいのは山々でございますが、しかしまだ御若年といひ、また立派な仕事も有つてござることですから、さうも出來ますまい。で、拙者は殘念ながら唯ひと言深く貴方の心に滲み込む言葉を遺し置くだけに致します。貴方は、もし御自分の考へでなく他人の考へに從うて行かれたら詩人として名を擧げられ



ませう。』と申すわけは。一體父親や母親といふものは自分の兒ども等を拙いものと思ふことがありません。そしてこんな迷信は、頭腦から生れた兒どもの場合には殊更強いものですからの。』

正氣かと思へば直ぐ狂氣になるドン・キホーテの異樣な混ぜこぜの言ひ草や彼が根強く執念く山野を跋渉してその不仕合せな冒險を捜し廻るのを終生の願望目的としてゐることなどに、父も子も共に今更驚いたのである。さて更に鄭重な辭儀や挨拶が交された。そしてやがて、この城の奥方に優しい言葉をかけられつゝ、ドン・キホーテはロシナンテに、サンチョーはダップルに、おの〳〵打ち乘つて出發したのである。

## 第十九章　には戀せる羊飼ひの冒險、並びにその他の眞にをかしき出來事を傳へる。

ドン・キホーテはドン・ディエゴーの村を去つてまださほど行かぬうちに、二人の僧侶か學生らしい人とそれから二人の百姓とに道伴になつた。彼等は四人とも驢馬に乘つてゐた。その中の一人の學生は手鞄のやうな格好に綠色の合羽布で包んだ物を携へたが、それにはシャツが一枚と筋のついてゐる長靴下が二足入つてゐるやうであつた。いま一人の學生は新しいボタン着きの試合刀を一對携へてゐるだけであつた。百姓等は、何處かの賑かな町へ買ひ出しに行つて今自分等の村へ歸るところを見えて樣々の品物を携へてゐた。そして、學生等も百姓等もドン・キホーテを初めて見る人が誰れでも感ずるやうな驚きに打たれた。そして、並の人とまるで變つてゐるこの人は一體何者であらうかと、非常にそれを知りたがつてゐた。ドン・キホーテは彼等に挨拶をして、その行く先を訊ねると、丁度自分の行く方と同じ道であつたので、一緒に參りませうと言つた。そして彼等の若い驢馬の歩みは彼の馬のよりも早いので、少し足を緩めて呉れるやうに賴んだ。やがてドン・キホーテは彼等を滿足さす爲めに、自分の名前や從事してゐる職務、卽ち世界到る處冒險を搜して行く武者修業者であるといふことを手短に物語つた。また、自分の本名はラ・マンテヤのドン・キホーテ、名乘りとしては「獅子の騎士」と呼ばれてゐることも話して聞かせた。



百姓等に對しては、これは凡て不可解な無意味なことであつたが、學生等にはさうでなかつた。學生等は直ぐ樣ドン・キホーテの頭に龜裂の入つて居ることを感づいたのである。しかしそれに拘らず、彼等は感心し尊敬して彼を見た。そしてその中の一人は彼に言つた、『武者修業者さん、一體廻國冒險をなさる方はこれと定めた道をお取りになりませんが、もしや貴方もさうですなら、私たちと御一緒にお出でなさい。さうすれば實に善美を盡した結婚式が御覽になれますよ。こんな式は今日までこのラ・マンチヤ中には、いや、この數十里四方の間には、一度も擧げられた例がないのです。』

ドン・キホーテは、さういふ風に言ふからにはこれは定めしどこかの王侯の結婚式であらうと訊ねた。『どうしまして、』とその學生は言つた、『それは或る百姓と百姓の娘との結婚式です。男の

方はこの國切つての富豪で、女の方は古今に例のない絶世の美人です。その式は花嫁の村續きの草原で擧げられますので、それこそ稀代な並外れた見ものでせう。花婿が金滿家のカマチョーと呼ばれて居るのに對して、花嫁は殊更に美人のクキテリアといはれてをります。花嫁は十八歳、花婿は二十二歳で、二人は立派に釣り合うて居ります。最も、世界中の系圖をまる暗記して居るやうな物知りどもは、美人のクキテリアの家柄をカマチョーのより良いと言ひませうが、しかし今日では、財産でどれ程の大瑕瑾でも繕はれる世の中ですから、そんな事を氣に懸ける者はありません。兎に角カマチョーは物客みをせんで、その草原の上に高く一面に小枝で蔽ひを拵へて、如何に太陽が骨折つてもその地面を蔽うてゐる草には日足が達かぬやうにするといふ趣向もあの人が立てたのです。それにまた踊り子の用意もして居ります。それも唯劍舞ばかりでなく鈴踊りもやるのです。自分の村に鐘鈴を見事に鳴らす者が居りますからな。靴踊りの踊り子となると數限りなく雇うてありますので、私は何も申しません。しかし今申したことや、その他省いて申さなんだ樣々のことは何でもないのです。それに比べたら、屹度あの死に物狂ひのバシリオがその式場で演る藝當が、この式を記憶すべき結婚式とする一番目覺ましい物であらうと思ひます。このバシリオといふのは、クキテリアと同村の若者でその隣りに住んで居りました。そんな事情に付け込んで、戀の神樣は、もう長い間世に忘れられて居つた、あのピラムスとティスベの戀を復活させたのです。卽ちバシリオは子供の時分からクキテリアを愛するし、また女の方でもその情愛に感じていろ〳〵心ありげな優しい態度を見せたのです。そこで、このバシリオとクキテリアといふ二人の子供の戀は村人の噂や興味の種となりました。二人が成長しますと、クキテリアの父親は、今までのやうにバシリオを自分の家へ自由に出入させまいと決心しました。そして絶え間のない疑ひや氣懸りを殘らず取り除かうとて自分の娘の爲めに金滿家のカマチョーを連合と決めたのです。天與の賜物ほどに澤山の財産を持たぬバシリオには娘を嫁りたくなかつたからですな。まア本當のことを包まずに申しますとな、私たちの知つたうちではバシリオ位身體の敏捷な男はありませんよ。そりや、棒投げの名人で、第一流の角力取りで、球戲の名人ですよ。鹿のやうに走るし、山羊よりも上手に跳ぶし、まるで魔術のやうに九本柱を片ッ端から打ち倒すし、雲雀のやうに歌ふし、ものを言はせるやうに六絃琴を彈くし、それにまた、取り分け劍術にかけては上乘の名手ですからな。』



これを聞いてドン・キホーテは言つた、『唯それだけの長所でゞも、その若者は單に美人のクキテリアばかりかギネヴィア女王とでも結婚する資格がありますわい、もし今日あのギネヴィア女王

が生きてさへござれば、ランスロット初め皆がそれを邪魔せうとしたところで。』

『それを私の女房に言うて見なされ、』と、今まで黙つて聞いてゐたサンチョーは言つた、『私の女房はな、「どの牝羊もその似寄りのものへ」といふ諺を楯にとつて誰れにでも釣り合うた者と連れ添ふことしきや聴きますまいよ。私に言はせりや、その立派なバシリオさんを（私ア もうこの人が好きになりかけましたでな）、この人をそのクヰテリアさんに添はせたいもんぢやがな。互ひに惚れ合うとる者を添はせまいと邪魔する人たちにや——こりやあべこべの心を言ふのぢやが——どうか結構な仕合せが來ますように。』

『もし互に惚れ合うた者は殘らず結婚させるとなると、兩親たちが自分の子を適當な時に適當な人と結婚させるといふ選擇權を剝ぎ取ることにならうぞよ。』とドン・キホーテは言つた。『またもし娘どもに好き勝手に良人を選ばせようものなら、自分の家の下男を選ぶ娘もあらうし、また通りすがりに意氣で勇ましいと思ふと、たとへ飮んだくれの喧嘩好きの男でも選ぶ娘が出て來るであらう。惚れたり好いたりすると、一生の方針を選擇する上に最も必要な判斷の眼を容易に昏されるものぢやからの。婚姻の選擇は頗る過ちに陷り易いもので、善い選擇をするには非常な用心と特別な神のお惠みが入り用なのぢや。長い旅する者は、それが賢こい人であつたら、一緒に



行くに賴み甲斐のある氣持ちのよい伴侶をば、出發する前に搜すものぢや。さうして見ればこの生涯の旅路をつゞけて死といふ最後の泊り場まで行かねばならぬ者が、取り分けその伴侶は良人と妻との間柄の樣に、寢床の中でも食卓でもその外何處でゞも一緒に居らねばならんとなると、何うして今言うたやうな良い選擇をせずに置けようぞ？ 人の妻たるものは一度手に入れてからはそれを返したり、物々交換をしたり取り換へたりされる商品ではないのぢや。これは生命の續く間續く離しがたいものなのぢや。これは、一旦頸を入れたらゴルデヤスの結び目（ギリシアの神話にあり、解くべからざる結び目の意）となる輪索ぢやから、死の大鎌が斷ち切りさへせねば、之をほどくことは出來んのぢや。拙者はこれに就てまだ澤山言ふこともあるが、もしやこの學士さんがバシリオの話をもつとなさるならば、それが聞きたいからもうこれで止めよう』。これに對して、その學生か得業士か、或ひはドン・キホーテの呼んだ通り學士かも知れぬこの人は答へた、『もうその上申すこともありませんが、たゞバシリオはその美しいクヰテリアが金滿家のカマチョーと結婚するといふことを聞くや否や、もう莞爾ともせず、筋の立つた言葉はひと言も言はんやうになりました。そして何時も快々と鬱ぎこんで、明かに正氣を失うた者のやうに獨り言を言うて歩きます。殆ど食ひもせず眠りもしません。また食ふとしても果物だけで、眠るやうなことがあつても猛獸のやうに野原の堅い地べた

に眠るだけです。空をじつと睨んで居る時もあれば、着物を着た石像のやうに着物を風に煽られながら、ぽかんとして地面を見詰めてをる時もあります。手短かに申せば、明かにあの男は煩悶から心を裂碎かれてしまうたのです。それでもし明日になつてクヰテリアが結婚を肯がへば、それこそバシリオに取つては死刑の宣告ちやと、彼を知つて居る私たちは信じて居ります。』

『神様は何とかよい具合にして下さるぢやろ、』とサンチョーは言つた、『傷を下さる神様は、膏藥も下さるからの。どんな事になるか誰にも分りやせん。今日から明日までにやまだ大分時もあります。そこで、いつ何時その家にどんなことが起るかも知れません。私ア雨が降ツとりながら日が照ツとるのを見たことがござります。なか〳〵達者で寢床へ入つて、翌朝になるとびくともせん人も澤山ありますわい。廻る運勢の車を釘附けにしてやつたと自慢の出來る者がありましよか？とても〳〵、それに女の「ハイ」と「イエ」との間にや私ア針の先でもよう突きこみませんわい。針の先ほどの隙間もござりませんからの。もしそのクヰテリアさんがバシリオさんに心から底から惚れてござると仰有るなら、私はバシリオさんへ禍の神を差し向けましよ。惚れて見る眼にや、銅も金に、貧乏も金持に、爛れ眼も眞珠に見えると言ひますからの。』

『こら〳〵サンチョー。お前は何を喋舌つて居るのぢや？』とドン・キホーテは言つた、『お前が



そんなに格言や諺を一緒につなぎ出すと、ユダ（キリストを賣りし弟子）の外にや誰れにも解らんわい。仕やうのない奴めが。おいこら、釘ぢやとか車ぢやとか何ぢやとかと、何をお前は知つてをるのぢや？』

『へえ、私の言ふことが分らにや諺言ぢやと思はッしやるのも不思議はござりません。』とサンチョーは答へた、『けれど構ひません。私ア自分で分つとります。今言うたことア餘り馬鹿げたことぢやないと知つとりますわい。旦那樣、貴方樣は何時も私の言ふことや私のすること、いふと、何でもこなし付けてばッかりぢや。』

『こなし付けるのぢやない、けなしつけるのぢや、』とドン・キホーテは言つた、『いつめ、正直な言葉をごまかし居る！』

『旦那樣、私のあら捜しはしなさるな、』とサンチョーは答へた、『私ア御殿で育つたのでもなければ、りやサラマンカの大學校で仕附けられても居りませんからの、物を言ふ時に一文字やそこら足すか減らすかそんなことの分らんこたア百も御承知でござりましよ。失禮ながらサヤゴー（スペインの古市ザモラとポルトガル國境との間にある地方の名）人にトレドー人のやうに話せと強ひるのは褒めたこツちやござりませんからの。トレドー人でも上品な言葉となると上手に話せん人もござりましよわい。』

『そりや、さうですよ。』と學士は言つた、『トレドーの革鞣所や大市場で育つた人たちは、殆ど終

日あの本山の廻廊を歩いて居る人たちのやうに話すことは出來ません。が、それでもやはりトレドー人ですよ。生粋な精確な上品な明快な言葉は、たとへマジャラホンダ（首府マドリッドから數里の一村）生れの人であらうとも、上流の家に生れて辨別力のある人ならばよく使ひます。この辨別力のある者と申すわけは、上流に生れてもこれを缺いた人が澤山あるからです。この辨別力は、それに實地練習さへ伴なへば、上品な言葉の文典を會得しますからな、私は憚りながらこれでもサラマンカで寺院法を研究して居りましたから、どちらかと言へば明確な平易な聞き取り易い言葉で自分の思ふ所を言ひ現はせると、まア自惚れて居るのです。』

『もし君が、その舌の巧妙さよりも、そこに持つて居る試合刀の巧さを餘計に自慢せなんだら、その學位の一番になつたらうよ。しかし今では尻尾ぢやが。』といま一人の學生が言つた。

『おい〳〵、コルチュエロー得業士、』と學士は答へた、『もし君が、劍道を無用なものぢやと思うて居るのなら、そりや實にこの上もない謬想ぢや。』

『そりや僕だけの考へぢやない。確固たる眞理ぢや、』とコルチュエローは答へた、『で、もし君がそれを實驗に照して證明して貰ひたいとあれば、君がそこに劍を二口持つてをるから、丁度よい幸ひぢや。僕は巖丈な手頸と、屈強な腕を有つて居る。しかもそれを繋ぐに小さくない勇氣を



有つて居るから、それに依つて僕の間違うて居らぬことを思ひ知らしてやらう。さア馬から降りて、君の劍法の身構へや環攻法や稜攻法や、拳法などのおさらへをし給へ。僕が屹度粗末な生劍法でこの眞ッ晝間に君に星樣を見せてやるから。生の劍法にかけては、憚りながら吾輩に背を向けさせることの出來る者は、神樣より外にや、まだこの世に一人も生れてをらんのぢや。また吾輩の手で負かされん奴は一人もないのぢや。』

『君が背を向けるか向けんかは、吾輩の知つたこッちやない。』と劍法の先生は答へた、『尤も、君が初めて足を立てるその場所に君の墓穴が出來さうぢやがな。劍法を見下げ居る君は、その場で踏んぞッて往生するだらうと言ふのぢやよ。』

『論より證據ぢや、』とコルチュエローは答へた。そして敏速に驅馬から跳び降りて、學士が驅馬に載せてゐた劍のうちの一本を手荒く抜き放つた。

これを見てドン・キホーテは言つた、『さういふ風にやるものではない。拙者がこの試合の指導者になつて、この何時もやかましい問題の審判をして差し上げよう。』そしてロシナンテから降りて槍をおつ取り、道の眞中に突ッ立ち上つた。丁度この時學士は身振りも足取りも見ごとに落ち着いてカルチュエローは世に言ふ通り、眼から火花を散らしつゝ、カルチュエローの方へ進んだ。

彼に攻めかゝつた。も一つの組の二人の百姓は驢馬から降りずにこの命賭けの悲劇の見物人になつた。コルチュエローの打ち出した打撃、突込み、拜み打ち、返し打ち、双手撃ちは數限りもなく、雨霰よりも繁かつた。彼は怒れる獅子の如く撃つてかゝつた。しかし彼は學士の剣のボタンでしたゝか口邊を打たれたので、その猛烈な攻撃の眞最中に喰ひ止められた。そしてそのボタンを宛ら聖器でゞもあるかのやうに接吻した。尤も聖者のやうに信心深くて接吻したわけでもなく、接吻すべき義理もなかつたのであるが。その結果はかうであつた、學士はコルチュエローの着てゐた短い袈裟のボタンを數へながら續け打ちした。そしてその裾を烏賊の尻尾のやうにずた〳〵に裂き、帽子を二度も叩き落し、もう全くへと〳〵にしてしまつた。コルチュエローはむしやくしやと氣を焦らし怒りに任せて、非常な力で自分の剣の欄のところを持つて抛り出した。そこに居合せた百姓の一人は代書をする男であつたが、その男がその剣を拾ひに行つた。そして後になつて一つの誓書を拵へて記すには、コルチュエローは殆んど二リーグの四分の三ほど剣を投げたのであると。この證書は卽ち、技倆は力に打ち勝つといふことを確固不拔のものとして示し確かめる役に立つであらう。また實際役に立つたのである。

コルチュエローはぐつたり疲れて土下座した。そこでサンチョーは彼に近よつて言つた、『ほんとにまア得業士さん。もし私の言ふことを聞き入れなさるなら、またと再び決して誰れとでも試合をせうとは言ひ出しなさるなよ。たゞ、貴方は年が若うて力があるから、角力や棒投げをしなされ。けれどわれから劍術使ひと名乘つて居る人たちはな、劍の切先を針の目にさへ貫すことが出來ると言ひますからの。』



『私は自分の誤つて居つたことを十分悟りました。』とコルチュエローは言つた、『そして今まで知らずに居つた眞理を實驗によつて證明されました。』そして立ち上りながら、學士と抱擁した。そして二人はこれまでに優る親友となつた。劍を拾ひに行つた代書人が歸つて來るまでには長い時間がかゝるであらうと思つたので、彼等はその男を待ち合せずに出發することに決めた。それは彼等一同がそこの人であつたクキテリアの村へ、間にあふやうに着きたいからであつた。

その殘りの旅の途すがら、學士はいろ〳〵力強い議論や數學や數理上の證明を示して劍術の優れてゐることを彼等に述べ立てた。そこで皆々この劍術の價値を深く信じた。カルチュエローもその偏見を棄てた。

もう薄暗くなつた。しかし彼等がその村へ着く前に、その前面に當つて、宛ら煌々たる無數の星に滿ちた大空のやうな村のあかりを認めた。彼等はまたいろ〳〵樣々混り合うた樂の音を聞い

た。それは笛や太鼓や十三絃器や篳篥や小鼓や手鼓の響きであつた。ずつと近づくにつれて、彼等は村の入口に建てられた青葉の圓屋根の樹々には灯が一面に點されて居るのを見とめた。折から微風は靜かご楢の葉さへ搖り動かせぬほどであつたので、それ等の灯は風に動かされてはゐなかつた。結婚式の生命たる音樂隊は幾組にも別れてこの樂しい場所をあちらこちらと練り歩きながら踊るもあれば歌ふもあり、また上に擧げたやうな樣々の樂器を鳴らしてゐるのもあつた。つよりこの草原一面には愉快と陽氣とが踊り廻り跳ね廻つてゐるやうに見えた。また數人の人々は忙しく座席を建てゝゐた。それは明日、金滿家カマチョーの結婚式とバシリオの葬式の爲めに設けられたこの場所で演ぜられる筈の狂言や踊を見る人の便利を計る爲めであつた。ドン・キホーテは、得業士や百姓たちに是非にと勸められたけれども、どうしても村の中へ入らなかつた。彼はたとへ金色の天井の下であらうとも村には眠らずに、野原や森に眠るのが武者修業者の習はしであるといふ理由によつて、彼の考へでは十分申譯が立つと思つたのである。そこで彼は少し本道から脇へ入つたが、サンチョーは頗る氣に喰はなかつた。それはかのドン・ディエゴーの城か家かで立派な室に寢起きしたことを思ひ出したからであつた。



## 第二十章　には金滿家カマチョーの結婚式の話、並びに貧乏人バシリオの事件が述べてある。

美しい曉の女神がその黃金の髮に宿れる流るゝ眞珠をば、赫耀たる日の男神の熱き光りの熱をもて乾かせるか乾かせぬうちに、ドン・キホーテは手足の埃を打ち拂ひつゝ跳び起きた。そして從士サンチョーを呼んだ。が、彼がまだ鼾をかいてゐるのを見て、呼び起こさぬうちにかう言ひかけた、『お前はこの地上の凡ての住民に優つて仕合せな者ぢや。他人を羨みもせず羨まれるともなく、穩かな心で眠つて居る。魔術使ひ等に責められもせず魔術におどかされるともない。眠れ、眠れ、と私は百度も繰り返して言はう。お前は思ふ人の爲に嫉妬の思ひを懷いて、果しなく眠らぬ夜な夜なを送るといふこともなければ、自分の負うてをる負債を何うして拂はうかといふ心配もなく、またお前は、自分や自分の貧しい小家族の爲めに明日の食物を見つけようと騷ぎ出すこともないのぢや。お前の心を煩はす絕頂は自分の驢馬の飼料を用意してやる位のことなので、野

心もお前の休を妨げず、また俗世の虚榮心もお前を掻き亂さぬのぢや。これと言ふのも、お前はその身をこの私の双肩に任せてをるからぢや。これは自然や習慣が凡そ主人たる者に負はせた責任義務ぢや。家來は眠つてをる。が主人は臥ながらも、如何にしてこの家來を扶養しようか、昇進させようか、報賞をやらうかと考へて目を覺まして居るわい。大空が眞鍮色に變つて地面に必要な濕りが來ぬのを見て苦みを感ずるのは家來ではなうて主人ぢや。主人は凶年や饑饉に際しても、豐年滿作の時に奉公してゐた家來を扶養せねばならぬのぢや。』

サンチョーは眠つてゐたので、これに對して何の答へもしなかつた。またもしドン・キホーテが槍の柄で叩き起さなんだなら、さう直ぐとは眼を覺まさなかつたであらう。遂に彼は眠さうに不承々々に眼をさました。そして四邊をきよろ〳〵見廻しつゝ言つた、『おや、どうやらあの圓屋根の方から湯氣や匂ひが來るやうぢやな。こりや燈心草や太刀麝香草の匂ひよりも大層油揚げ肉の匂ひの方が勝つとるわい。こんな匂ひで始まる婚禮のことなら、御馳走は澤山食ひたい放題あるに決まつとる。』

『え、加減にせい、食ひしん坊め。』とドン・キホーテは言つた、『さア、行つて、その花嫁御を見よう。それにまた氣落ちしてをるバシリオの仕草も見よう。』



『バシリオにや好きなことさせるがえゝですよ。貧乏でゐてクキテリアと夫婦にならうちうんぢやもの。』とサンチョーは答へた、『立派な女房は持ちたし、錢は一文もなし、それがあの男の望みでござりますかい？旦那樣、全く私の考へぢやな、貧乏な男は自分の手に入る者で滿足して海の底の御馳走は捜しに行かんが宜しうございますぞい。きつとカマチョーはバシリオを錢の中へ埋めてしまひませう。もしそんなら、いやそれに違ひはござりませんが、クキテリアは何といふ馬鹿でござりましよ、そのカマチョーがこれまでも吳れたらうしこれからも吳れるに決つとる立派な着物や寶石を突き返して、バシリオの棒投げや劍の舞を取らうといふのは。見事に棒を投げたとて手綺麗に刀を使うたとて居酒屋の酒一杯にもあり付けやしませんぞい。才や藝は錢に變らんものぢやから、あの伯爵ディルロス（シアーレマン時代の長詩の主人公）に持たせるがえゝ。けれどそんな才能が現金のある人に授かるといふなら、私もそれに似合ふやうな身になつて見たいものぢや。立派な土臺の上にや立派な建物が建てられますぞい。そして、この世の中で一番えゝ土臺なり骨組みなりは錢でござりますわい。』

『サンチョーよ、頼むから、そんな無駄口は止めて吳れい、』とドン・キホーテは言つた、『全くお前が話し出す度に構はず續けさせうものなら、お前は飯を食ふ間も眠る暇もあるまい。お前は時

間を殘らずお喋舌りに費してしまはうからの。』

『貴方樣がものをよう覺えてさへござるなら、』とサンチョーは答へた、『今度私等が家を出かける前にした約束の箇條を覺えてござりましよ。そのうちの一條は、私の近所の人卽ち貴方樣の御威光に拘はることでさへなきや、何でも私の好きなだけ喋舌つてえゝちうことでござりましたよ。また今までのところぢや、その箇條を破つちや居らんと思ひますがの。』

『そんな箇條は覺えがない。』とドン・キホーテは言つた、『又もしさうであつたにせよ、舌を抑へて歩いて貰ひたいもんぢや。あれ、昨夜私等が聞いた樣々の樂器はもうはやこゝらの谷々に鳴り響き始めたからの。そして屹度あの結婚式は、午後の暑さにならんうちに、朝涼の間に擧げられるのであらう。』

サンチョーは主人の命に從つた。そしてロシナンテには鞍を置きダップルには荷鞍を置いて、おの〳〵打ち乘り、ゆつくりした步調でその圓屋根の中へ入つた。先づ第一にサンチョーの眼に映つた物は、全一本の楡の樹に串貫になつてゐる全まゝの牡牛であつた。そしてそれを炙つてある火には薪が可なりの大きさの堆積と積んであつた。その焰の周圍には、普通の鍋の並の形に拵へてはあつたが、六個の煮肉鍋が並んでゐた。つまりそれはその一個の中にも一軒の屠牛場のあ

りだけの肉を容れ切るほどの、六個の半切り酒甕（この邊で使う酒甕の大きいのはこれであつたのである。それ等の鍋は全まゝの羊を呑み込んでも宛ら鳩を呑んだ位の樣子しか見せずにその內側へ隱してしまつた。この鍋に入れる爲めに皮を剝いた兎や毛を拔つた小鳥などが數限りなく樹の枝に懸けてあつた。いろ〳〵の野禽野獸は無數に小枝に吊して風に冷してあつた。一甕六瓦二斗五升入りの、しかも後で分つた通り、強い葡萄酒を充たした酒甕は六十個以上あるとサンチョーは勘定した。それにまた、打穀臺の上に見られる穀物の堆積のやうな、眞白い麵麭の山が幾つもあつた。開け放しの煉瓦の建物にも雜然した乾酪の塲もあつた。そして紺屋の甕よりも大きい油の充ちた二つの大釜は油揚げ煎餅を拵へる爲めに使はれてあつた。その煎餅が揚がると、大きい火斗で掬ひあげてその直ぐ傍に立つてゐる蜂蜜の容つたいま一つの大釜へ擲り込むのであつた。五十人以上もの料理人や料理女等は、殘らず小ざっぱりして敏捷で陽氣であつた。例の牡牛の大きな下腹の中には小さい柔かい豚の乳飲み仔を一ダース縫ひ込んであつたが、それが柔か味や風味を添へてゐた。樣々の異なつた藥味は斤でなく噸で量つて持つて來てあるやうに見えた。そして皆ずらりと大箱に打ち明けてあつた。要するにこの結婚式の爲めに成された一切の準備は田舍風ではあつたが、しかし一軍隊を養ふにも足る程潤澤であつた。

サンチョーは殘らずを見、殘らずを眺め渡した。そして殘らずの物が彼の心を捉へた。先づ第一に彼の心を捕へた物は例の大鍋であつた。その中からいゝ加減の片手桶で一杯掬ひ取つてよかつたら彼は如何に喜んだであらう。その次には例の酒嚢が彼の愛着を繋ぎ留めた。そして最後には例の揚げ鍋（もしこんな堂々たる大釜が揚げ鍋と呼ばれるなら）、それからの上り物に氣をとられた。そして最早や自ら制し兼ね堪え兼ねて、彼は忙しい料理人の一人に近寄つた。そして丁寧に、しかし儀じさうに、その鍋の中へ麺麭のかけらを浸けさせて下さいと頼んだ。それに對してその料理人は答へた、『お前さん、今日は金滿家のカムチョーさんのお蔭でな、空腹に威張らせるやうな日でないのぢやよ。降りて來て、こゝから杓子を捜して牝雞を一羽でも二羽でも幾羽でも欲しいだけ掬ひなさるがえゝ。』

『杓子は一つも見付かりませんがの。』とサンチョーは言つた。

『一寸待ちなされ、まア呆れたよ！』とその料理人は言つた、『お前さんはほんとに面倒な差かみ屋ぢやの！』さう言ひながら一つのバケツを取つて、それを半切り甕の中へ投げ込んで、牝雞を三羽と倉鵝を二羽掬ひ上げた。そしてサンチョーに言つた、『さア〳〵、こゝへ入つて來た物でも食うて先づ當座の腹をこしらへて、晝頃時まで待ちなされい。』



『私アそれを容れる物がござりません。』とサンチョーは言つた。

『それぢやこの入れ物ごと取んなさい、』と料理人は言つた、『カマチョーさんの身代と目出たさが何もかも賄ひますからの。』

サンチョーがこんな目に逢つてゐる間に、ドン・キホーテは圓屋根の一方の端の入口から十二人許りの百姓が入つて來るのを見守つてゐた。彼等は凡て祝祭日の一張羅を着て、十二頭の美しい牝馬に乘つてゐた。その牝馬には何れも麗しい立派な廣々した鞍を置き、その飾り附けには澤山の鈴がついてゐた。彼等は隊伍を正して整列して、やがて『カマチョー、クキテリア萬歳！男は金持ち、女は美人、しかも天下に並びない美人！』と歡呼絶叫しつゝ、この草原を一度ならず幾度か駈け廻つた。

これを聞いて、ドン・キホーテは獨り言を言つた、『はゝア、この人等はきつとまだ一度もわがドゥルシネア・デル・トボソを見たことがないと見える。もし見て居つたらこのクキテリアを褒めるにしても今少し遠慮するであらうからな。』

やがて間もなく、圓屋根の彼方此方から、いろ〳〵樣々の舞踊隊が幾つも入りこんで來た。その中の一隊は、勇ましい元氣な風采をした二十四人許りの若者で成り立つた劍舞隊で、彼等は

眞ッ白な綺麗なシャツを着て、様々な色に染め分けた立派な絹の縁の附いたハンケチを持つてゐた牝馬に乘つた連中の一人は、この劍舞隊を指揮してゐる活潑な若者に向つて、怪我人が出來たか否かを訊ねた。『お蔭樣で、これまでのところはまだ怪我人は出來ません。』とその男は言つた、『殘らず無事で達者ちや。』そして直ぐ樣彼はその仲間の者と共に入り組んだ所作を演じ初めた。それは非常に變化に富み非常に巧妙であつたので、この種の踊りを見慣れたドン・キホーテも、こんな上手なのは今迄見たことがないと思つた。彼はまた、若い美しい娘どもから成り立つてゐるもう一つの隊の來るのを見て感心してしまつた。その隊の者は皆十四歲以上十八歲以下の處女と見えた。そして殘らず綠の布を身に纏ひ、その半分は髮を組み半分は垂れ髮にしてゐたが何れも日の光と色を競ふほどの黃金色であつた。そしてその髮の上には、山梔や薔薇や莵や忍冬などの葉冠を戴いてゐた。彼の女等の先頭には品のよいお爺さんとお婆さんとがついてゐた。しかしその年の割りには案外に敏捷で快活であつた。この隊にはザモラの風笛の調べが調子を取つて娘たちは顏面も眼附きもしとやかに足も輕く實に世界最上の踊り子と見えた。

それに續いては「語り踊り」と呼ばれる一種の巧妙な踊りがやつて來た。それは二列八人の女神で組織されてあつて、一列はインテレスト(神)がおの〳〵導いてゐた。そして前者は翼や矢や籠や弓などを携へ、後者は黃金や樣々の色した絹の綺羅びやかな着物を着てゐた。キューピッドに從うた方の女神等は何れも白紙に麗々と銘々の名前を大文字で書いてその背に附けてゐた。第一の者の名前は「詩」第二のは「才氣」第三のは「門地」そして第四のは「勇氣」であつた。インテレストに從つた水女神等も同樣に目標をつけてゐた。第一の者の徽章は「大樣」第二のは「慈悲」第三のは「寶」そして第四のは「平和な所有」であつた。この踊の隊の眞先きは木造の城を四人の野蠻人が引ッ張つて來た。彼等は綠色に染められた常春藤と麻とを着けてゐたが、それはサンチョーをぎよつとさせた程眞に迫つてゐた。その城の正面にもまたその他の三面にも、「用心の城」と記した額面が揭げてあつた。上手な鼓方や笛吹きが四人ついてゐた。そして舞踊が始まると、キューピッドは二舞ひ舞うてから眼をあげて、その城の小櫓の間に立つてゐる一人の處女に向つて弓を引きながらかう言ひかけた——



われは全能の神わが權力は
地にも海にも限りなし。
諸々の天はわれを主と拜み、
いな、奈落の底もわれを認む。

われには恐れなく、羈なし、
何事もわが思ふまゝに。
命ずるも縛るも釋くも禁ずるも
わが力の及ばぬものはなし。

この一節を歌ひ終へてから、城の天邊へ矢を一筋射かけて元の席に歸つた。次にインテレストが進み出て、またもや二舞ひ舞うて、鼓方が打ち止めるや否や言つた——

されどわれは戀よりも強し、
假令戀はわれを導くとも
日の下にわが血統より高きはなく
また古きはあらず。
われを正しく用ふることを知る人乏しく、
われ無しに身を處す人は尚乏し。
「富」なるわれは、とこしへに
處女よ、君が心のまゝならん。



インテレストが退いて、「詩」が進み出た。彼女は先きの者等のやうに二舞ひ舞うてから、城の處女を見据ゑつゝ言つた——

美はしの君よ、愛らしの「詩」は
かず〳〵のとりとめもなき思ひもて
わが魂を詩となして
おん足下へ獻げまつる。
もしわがまごゝろを拒み給はずば
羨みの眼もて見守らるゝ君が榮へを
詩の翼に打ち乘せて雲の上まで昇らせん。

「詩」は退いた、そしてインテレストの側から「大樣」が進み出た。そして形のやうに舞うてから言つた——

賢こき人は思ふやう、——
吝まぬと吝むとの兩端を
避けて施しするときは

そこに大様の徳ありと。

さはれ、わが美はしの處女子よ
君を飾るに浪費の罪を犯すとも
全くわが身の恥ならじ
戀故と分疏も立つなれば。

かういふ風にその兩隊の役者等は進み出ては退いた。そして代る〳〵舞をまひ、或る者は上品に或る者は道化て詩を吟誦した。しかしドン・キホーテの記憶は（それは極めて卓越したものであつたけれども）たゞもう上述の詩だけでぼうつとなつてしまつた。その殘りの詩はすべて、上品な思ふまゝの戯れで、纏まつたかと思へば再び壞れて、ごちや〳〵になつてしまつた。そして戀の神はその城の正面を過ぎる度にその頂邊へ矢を射掛け、そしてインテレストは何時も金箔を塗つた小さな珠をその城へ打ち當てゝ碎いた。稍暫らくの間舞ひをつゞけると、やがて、インテレストは大きな駁色猫の皮で拵へたもので、一杯金が入つてゐるやうに見えた。そしてこの財布を城に投げ付けた。するとその打撃の勢ひで、城の圍ひ板は割れて轉げ落ち、後には例の處女が庇ふ物もなく姿を現はした。インテレストとその部下の役者た

ちは進んで行つて太い金の鎖を彼女の頸に投げかけて、彼女を生捕りにして伴れて行く樣に見えた。これを見て、戀の神とその隊の者等は、彼女を釋き放さうとするやうな所作をした。これ等の所作は凡て小皷入りで正式の踊の形で演ぜられた。例の野蠻人等が仲裁して、そして城の園ひ板は非常に巧妙に元の通り嵌めつけられた。そして處女は再びその中に身を隠した。これともにその舞踊は見物人の大喝采の裡に大團圓を告げた。

ドン・キホーテはその女神の一人に、この踊りを拵へて組み立てた人は誰かと訊ねた。するとその女神は、これを作つたのは、この村の或る神學生で、こんなものを工夫することの上手な人であると答へた。

『ちや屹度その得士業か神學生かは、バシリオよりかカマチョーと大の親友であらう。また晩の勤行よりも諷刺に得意の人であらう。この踊には、バシリオの才藝やカマチョーの富などがなか〳〵手綺麗に取り入れてありますわい。』とドン・キホーテは言つた。

これを殘らず聽いてゐたサンチョー、バンザは叫び出した、『王は私の牡雞ぢや。（闘鶏で勝つた方を王といふ）私はカマチョーにつきますぞよ。』

『サンチョーよ、お前の土百姓根性は見えすいてをるぞ、』とドン・ホーテは言つた、『お前は「勝

つた人萬歳」と叫ぶ手合ひちや。』

『私アどんな手合ひの人間か知りませう。』とサンチョーは答へた、『けれどな、私があのカマチョーの鍋から掬うて來たやうなあんな上等の食物ア、とてもバシリオの鍋からは手に入れられんのはよう分つて居りますぞい。』そして彼は蒼鵝や鷄の充ちたバケツをドン・キホーテに見せてそのうちの一羽を摑み取つて嬉しさうにむしや〳〵と喰ひながら言つた、『バシリオの藝はペケちや！「お前は有つとる程えらい、またお前はえらい程有つとる。」それから私の祖母が何時も言ひよッたのは「世の中にや、有つ家と、有たん家の二軒しかない。」ちうこッちや。そして祖母は有つ家につきましたわい。ドン・キホーテ樣、今日が日でも人が早う感じるのは「知つとる」のよりも「有つとる」方の脈でござりましよ。荷鞍を載せた馬よりか金で蔽うた驢馬の方が立派に見えますぞい。そこでも一度申しますが、私は鍋の中から蒼鵝や雞や野兎や南京兎をうんとこさ掬はせて呉れるカマチョーさんへ附きますのぢや。バシリオの鍋からは何か手になり足になり入るものがあるにしたところで、ほんの洗滌水ぐらゐなもんでござりましよ。』

『もうそれで喋舌は濟んだのか？』とドン・キホーテは言つた。

『えゝもう濟みましたとも、』とサンチョーは答へた。『貴方樣がそれを癪に障つてござるやうぢやからの。けれど、もしその爲めでなかつたら、そりや三日の仕事にや十分なりましたよ。』

『ほんとうにサンチョーよ、私は息の切れんうちにお前が啞になるのを見たいものぢや。』とドン・キホーテは言つた。

『段々するうちにや、』とサンチョーは言つた、『貴方樣が往生なさらんうちに私ア土塊でも嚙ることになりましよわい。さうでもなッたら、おほかた私アこの世の終りまでは、いや、せめてお審きの日までは一言も言はんやうな啞になりましよわい。』



『あゝサンチョーよ、たとへさうなッたにせよ、』とドン・キホーテは言つた、『お前がこれまでに喋舌つたことや、今喋舌つてをることや、またこれから死ぬまで喋舌ることを默らせることはとても出來まいぞよ。それにまた、お前より私が早う死ぬといふことは、これ自然の理ぢや。そこでとても私はお前の啞になるのを見る望みはない。たとへお前が飮んだり食うたりしてをる間でも。私には精々これだけの事しか言へんのぢや。』

『ほんとにな、旦那樣、』とサンチョーは答へた、『正體のない者は、死神のことですよ、こいつは當てにやなりませんぞい。この死神は、親羊も仔羊も一時に食うてしまふし、また村の牧師さんの教にあつた通り、王樣の高い塔も貧乏人の低い小屋と同じ足で踏み付けますわい。死神の婆

さんは御馳走好きぢやなうて、大喰ひぢやから何でも厭がりません。何でも彼でも掻き込めば何にでも手を付けます。そこで、この婆さんの嚢にはどんな人でも、何歳の人でも、どんな身分の人でも一杯に詰めますのぢや。死神は午時を眠つて過ごすやうな苅り入れ手ぢやござりません。いつ何時でも、また青い草でも、枯れ草でも切り倒して苅り入れます。この婆さんは噛みもせずに眼の前にある物を殘らず急嚥にして鵜呑みします。死神は餓鬼病ちやから何うしても滿腹しませんのぢや。また下腹はないくせに脹滿を患うとると見えて、丁度人間が冷たい土瓶の水でも飲みたがるやうに、生き物の生命を飲みたがりますのぢや。』

こゝでドン・キホーテは言つた、『もう言ふな、それから先きへ進めうとして、躓かんがよいぞよ。お前がそのぞんざいな言葉で死に就いて逃べたことは、實際立派な說敎師の言ひさうなことぢやわい。ほんとうにサンチョーよ。もしお前のその天稟の才氣に加へて、それに匹敵するほどの思慮があつたら、お前は說敎師になつて、廻國して立派な說敎ができるがの。』

『暮しの良い人は良い說敎をしますわい、』とサンチョーは言つた。『私アそれより上の神學は知りません。』

『またお前にや要りもせんのぢ。』とドン・キホーテは言つた。『しかし私は、一體お前がどうして



そんなであるか皆目見當が附かんのぢや。神を畏るゝは智慧の初めなりといふのに、神樣よりも蜥蜴の方を畏れるお前が、そんなに知つてをるといふのは。』

『旦那樣、貴方樣の騎士道を判じなさるがえゝ。』とサンチョーは答へた、『他人の恐がることや膽の太いのを彼是と判じなさるにや及びませんよ。私アやッぱり人並に神樣を畏れますからの。けれど先づこの御馳走だけは私に片づけさせて下さりませ。その他の事ア、皆あの世で勘定を拂はせられるやくざなお喋舌りだけのこッちやから。』と、さう言ひつゝ、サンチョーは心から旨さうに例のバケツへ新な攻撃を開始した。それはドン・キホーテの食慾をそゝつたので、もし次に語られねばならぬことが邪魔をせなんだならば、疑ひなく彼もサンチョーの應援をしたであつたらう。

## 第二十一章　カマチョーの結婚式の續き、並びにその他面白き出來事ども。

ドン・キホーテとサンチョーとは、前章に記したやうな議論をしてゐると、聲高い喚き聲や非常なざわめきが聞こえた。この騷ぎ聲は、かの牝馬に乘つた連中が花嫁花婿を迎へようとて全速力で駈け行きながら叫び立てたのであつた。花嫁花婿は樣々の樂器やあらゆる種類の裝飾に取り圍まれ、牧師や雙方の親戚やまたこの近鄕の名ある人々たちに附き添はれてゐたのである。

サンチョーはその花嫁を見るとかう叫び出した、『やれまア、花嫁さんは田舍娘のやうではなうて、御殿のお姫樣のやうに着飾つてござるわい。おやッ、かう見たところぢや、あの着てござる裲襠は立派な珊瑚珠ぢやな。それからあの白い布の飾り付けは――やれ〳〵、まア繻子の布ぢやないかい！　あの手はどうぢや――黒玉の指環がはまッとる！　あれが金の指環でなかつたら、それも純金で、一粒が人間の顏の眼の玉一つにかけ合ふといふ、凝乳のやうに眞白な眞珠の玉を幾つも飾り附けた物でなかつたら、私ア首で



も賭けるわい。このお女郎さんは何ちう綺麗な髮を有つてやがることぢや！　もしこれが假髮でなかつたら、これ程長うてこれ程澤のある髮は膪の緒切つて見たことがないわい。あのしツかりした擧動の――あの姿の立派なことは！　これこそ房々と實をつけた波斯亞の樹が步むやうぢやと言ひたいわい？　あの髮や頸ッ玉から垂した飾り物ア、丁度波斯亞の實のやうぢやからの。ほんとに、この人ア利かん氣の娘ぢやよ。それこそフランダースの岸（此の岸邊には魯西亞などが澤山居たので物騷なところと思はれてゐた）でも一人で通れよう。』

ドン・キホーテはサンチョーの百姓らしい讃辭を聞いて笑つた。そして、自分の婦人ドゥルシネア・デル・トボソを措いては、こんなに美しい婦人を見たことがないと思つた。美人クヰテリアは幾らか蒼ざめて見えた。それは疑ひもなく、いつも花嫁等が翌朝の結婚式の爲めの身仕度でその前夜を眠らずに過ごすからであつた。花嫁花婿は、この草原の一端に花毛氈や靑葉で飾り立てて建てられてある舞臺の方へと進んだ。彼等は其處で誓約をして、そして其處から踊りや狂言を見る筈になつてゐたのである。しかし丁度彼等がその場所に到着した刹那、その背後から大聲が聞こえて、かう叫んだ、『おい、ちよッと待てッ。お前等は無分別ぢや、輕卒ぢや！』この聲に依つて、誰れも彼も背後を向くと、その聲の主は焰のやうな眞紅の布補で飾られた寬やかな黒い上

着のやうな物を着た若者であつた。その男は（人々が直ぐ様見て取つた通り）陰氣なサイプレスの葉冠を被つて、手には長い杖を持つてゐた。近づいて來ると、これこそあの快活なバシリオたと誰れにも分つた。そして誰れも彼も、彼がどんな事を言ひ出すか、またこんな場合にこの男が現はれたからには何か飛んだ災難が起りはせぬかと、氣遣ひながら待ち構へた。遂に彼は疲れ果てゝ息を切らしてやつて來た。そして花嫁花婿の前に棒立ちに突ッ立つて、その端に鋼鐵の杖のある杖を地面へ突き立てた。そして蒼ざめた顏をしながらその眼をクキテリアの上に据ゑて、嗄がれた慄へ聲でかう言つた、『情ないクキテリアよ、お前は、私が生きて居る間は決して夫を持てる義理のものぢやないと、私等の守る敎會の掟にかけてよう知つて居る筈ぢや。また、そのうちには私の働きで家の身代も立ち直らうし、お前の身の立つだけの事は間違ひなしにしてやらうと、私が思ひ込んでをることも知らんではあるまい。それに、お前は私の眞實こめた心は何とも思はずに振り捨てゝ、私に任すべきものを他の人へ任せようとする。その人こそ財産のお蔭でたゞの幸福ばかりか幸福の絶頂へ昇るのぢや。かうなればもうその幸福を全うさせる爲めに（その人にやそんな資格はないと思ふが、しかし神樣がお授けなさるから）私はこの我れと我が手で、その邪魔になるものを取り除けて、お前等二人の間から私といふものを無いものにしようわい。金



滿家のカマチョーさん御機嫌よう！この情ないクキテリアと百年も仕合せに暮しなさい！そしてこの貧乏人のバシリオを死なせて下さい。このバシリオは貧乏のお蔭で幸福の翼をへし折られて墓場へ遣られますわい！』さう言つて、バシリオは、先きに地面へ突き立てた杖を摑んで引くとその下の半分だけそのまゝに殘つて、上半部は可なり長い細身の劍を蔽うてゐた鞘であることが分つた。そして地面に立つてゐる方がその欄とでもいふのであらう。その上に、彼は手早く、冷然と落ち着き澄して身を投げ掛けた。あれッと言ふ間もなく鮮血淋漓たる切先は――その劍の半分は、彼の脊中に現はれた。この不仕合せな男は血汐を浴びて地上に倒れ、自分自身の及物に依つて刺し通されたのである。

彼の友人等は、彼の不幸不運を見て悲み胸に充ち、彼を助けようとて直ちに走り寄つた。ドン・キホーテもロシナンテから降りて、急いで彼を支へた。そして自分の兩腕に彼を抱き上げて見ると、まだ息は切れてゐなかつた。人々はその及物を抜き取らうとした。しかし傍に立つてゐた牧師は、それを引き抜けば同時に息が切れるであらうから、彼に臨終の懺悔をさせぬうちは抜いてならぬと拒んだ。しかし、バシリオは少し正氣に返つて、さも苦しげに弱々しい聲で言つた、『むごいクキテリア、この最後の今はの際に、私の妻ぢやとその手を與へてくれたら、私もせめてこ

の無分別を赦して貰へる望みがあらう。私はかういふ無分別によつて嬉しやお前のものになるのぢやから。』

これを聞いて牧師は、お前は肉體のことに執着するよりも靈魂の冥福を考へたがよい。そして自分の罪障やこの無分別な決心に對して熱心に神樣のお赦しを願うたがよいと言つた。これに對してバシリオは自分は先づ第一にクキテリアが自分と結婚の承諾を與へぬならば臨終の懺悔はせぬ覺悟である、この幸福に依つてこそ心も落ち着けば懺悔をする勇氣も出るからと答へた。

ドン・キホーテは、この手負ひの願ひを聞いて聲高く叫んで言ふに、バシリオの願ひは正しい尤もなことである。それにまた手易く承諾してよい賴みである。またカマチョーに取つても、このクキテリアをその兩親の手からちぎり〳〵に貰ふのも、このえらいバシリオの未亡人として貰ふのも名譽に變りはない。』こゝでたゞ「諾」と言ひさへすればよいのぢや。その言葉をいうたからとて何の面倒も起つて來ぬ。バシリオの婚禮の新床は墓ぢやからの。』と言つた。

カマチョーはじツとこれを聽いてゐたが、ひとへに當惑して何と答へてよいかを知らなかつた。しかしバシリオの友人等は頻りに迫つて賴んだ。彼等はバシリオを絶望の裡にこの世を去らせ、その魂を無限の暗に迷はせない爲めに、クキテリアの手を彼に與へることを許して呉れるやう



にと、カマチョーに賴んだ。それに動かされて、否、それに是非なくされて、彼は、もしクキテリアさへそれを承諾するならば自分に取つては唯一瞬時の間自分の心願成就を遲延させるに過ぎないから、不服はないと言はねばならなくなつた。その友人等は殘らずクキテリアを包圍して、新禱をする者もあれば、泣くも者もあり、言葉を盡して搔き口說く者もあると云ふ風で、哀れなバシリオに手を與へて呉れよと彼女にせがんだ。しかし彼女は大理石よりも堅く石像よりも頑として、一語を發することも出來ねば、また發したくもないやうに見えた。そしてもし牧師が、バシリオの魂はもう去らうとしてゐるので、寸時も猶豫する場合でないから、何れとも早く心を決せよと彼女に命じなかつたならば、彼女は何の答もしなかつたであらう。

茲に於て美しいクキテリアは、痛恨、悲歎、悔悟の樣を面に現はして、一言も言はずにバシリオの横たはつてゐる場所へ進み寄つた。バシリオは既に眼の色が變つて、吐く息も苦しげに、齒の間でクキテリアの名を呟きつゝキリスト敎徒のやうでなく異敎徒のやうに懺悔もせずに今にもこの世を去らうとしてゐると見えた。クキテリアは彼に近寄つて跪づきつゝ、ものは言はずに手眞似で彼の手を求めた。バシリオは眼を見開いて、じつと彼女を見守りつゝ言つた、『あゝクキテリア、お前は今になつてから、何故さう優しうなつたのぢや？今のその優しさは私の止めを刺す短

刀の役をするであらう。もう私には、私の妻になると言うてお前が嬉しがらせて呉れても、それを受ける力もなければ私の眼上に恐ろしい死の蔭をずん〳〵被せて來るこの苦みを抑へる力もない。あゝ、私の運命の星よ、お前に頼みたいことはな、お前が今私と手を握り合ふのは、義理一遍からでなけりや今更私を瞞す爲めでもない、本心に疚しいところなく私をお前の正當な良人として受けるといふ誓言の印にして貰ひたいといふこぢや。こんな大事の際に私を弄んだり、お前に眞實をつくして居つた者を馬鹿にしたりするといふは、あるまじい事ぢやからの。』

かう言つてゐる間にも彼は非常に弱つて見えた。それは見て居る人々に、氣が遠くなる度にも う息を引き取るのかと思はせた程であつた。クヰテリアは、つゝましやかに恥しげに、その右の手にバシリオの手を取りながら言つた、『私の本心を杜げる力は一つもありません。それですから私は心の底から貴方の正妻として、この手を差し出します。もし貴方が、貴方のこの早まつた仕打ちの爲めに降りかゝつた災難に心を亂されず動かされずに、貴方の本心からこの手を私に下さるなら喜んで頂きます。』

『おゝ、私は心を亂さず騒がさずにこの手を上げるのぢや。神樣から戴いたまゝの曇りない分別の心でな。さア、かうして私はお前の良人になつたのぢや。』とバシリオは言つた。



『そして私も貴方の妻になりましたぞ。』とクヰテリアは言つた、『たとへ、貴方が永い年月生きて居られうと、また直ぐ墓場へ伴れて行かれうと。』

こゝでサンチョーは言つた、『これ程怪我をしとる者にしちや、この若い衆はなか〳〵よう喋舌るわい。もうそんないちやつき話は切り上げて、魂のことを考へさせたらえゝに。どうも私の考へちや、この人は口の中よりか舌の先きの方に餘計魂を持ツとるやうぢや。』

かうしてバシリオとクヰテリアとが手を握り合つてゐると、牧師は深く感動して眼に涙を浮べてこの二人の上に祝禱を宣べ、この新婚の男の靈を安らかに上天せしめたまふやうにと神に祈つた。この新婚の男は、その祝禱を受けるや否や素早く跳び起きて、自分の身體に插さつてゐた例の刃物を如何にもづう〳〵しく引き抜いた。見物の人々は殘らず呆氣に取られた。そして考への足らぬ正直な人々は『奇蹟！奇蹟！』と叫び出した。しかしバシリオは『いや、奇蹟ぢやない、奇蹟ぢやない。ほんの手品ぢや、手品ぢや。』と答へた。呆氣に取られて驚いた牧師は、慌しくその兩手でバシリオの傷口を檢べた。するとその刃の突き貫いたのは、彼の肉でも肋骨でもなく、血の入つた空の鐵管であることが分つた。その鐵管を彼は巧みにそこへ取り付けて、その血汐は後で確められた通り、凝結せぬやうにちやんと用意してあつたのである。要するに牧師もカマ

チョーもまたそこに列席してゐた。大部の人等も、瞞され馬鹿にされたことを知つたのである。花嫁はこの瞞着を見ても別に不快な色を表はさなかつた。それどころか詐欺でなされた結婚は效力がないと人々の言ふのを聞いて、彼女は改めてその誓ひをすると云つた。これに依つて人々は。この事はこの二人の相談打ち合せの上でたくまれたものであると判斷した。そこでカマチョーやその介添人等は非常に口惜しがつて、途に暴力に訴へて仕返しをすることになつた。そして大勢の者が劍を抜いてバシリオに詰め寄せた。するとそれを防ぐ爲めに、こちらの側でも敵に劣らぬ數多の白刃が忽ち鞘を離れた。ドン・キホーテは馬に跨り槍を提げ、しかと楯で身を庇うて先頭に立つたので、これには敵も殘らず道を開いた。こんなことには何の興味も樂みも有たぬサンチョーは先に旨い物を掬ひ取つた例の酒甕のところへ退いた。此處こそは聖地として敬意を表せられる場所であらうと思つたからであつた。『控へなされ方々、控へなされ！』とドン・キホーテは大聲で怒鳴つた、『吾々はたとへ戀の爲めに侮辱を受けるともそれに復讐する權利はないのぢや。戀と戰とは同じ物ぢやと思ふがよい。戰の場合に敵を負かす爲めに權謀術數を用ひるは、許すべき有りがちのことぢや。それと同じく戀の爭ひ競り合ひにも手管や手練を使うてその願望を成就させるはその手管が戀の相手の不名譽不評判にならぬ限りは是認すべきことぢや。神の正しい



惠深いお差圖によつて、クキテリアはバシリオのもの、バシリオはクキテリアのものぢや。カマチョーは金持ちぢやから、何時でも、何處でゞも、自分の好き勝手に快樂を購ふことが出來る。然るにバシリオはたゞ此の牝羊を有つてをるばかりぢや。そこで何人であらうとも、如何に權力があらうとも、この婦人をこの男から取り去つてはならぬ。この二人は神これを合せ給うたれば、人これを離すことは出來ぬ。もしさうしようとする者は、先づこの槍の穗先を通らねばならんぬぞよ。』さう云ひながら、彼はその槍をりう〳〵と見事に打ち揮つたので、彼を知らなかつた人々は皆縮み上つてしまつた。

クキテリアの拒絶はカマチョーの胸に深く〳〵撤したので、卽座にその心から彼女のことを消してしまつた。そこで、賢こくて親切な性質を備へた牧師の勸告はカマチョーに對して功を奏した。この勸告によつて彼も彼の味方の者等も納得し心を靜めた、その證據には、彼等はバシリオの狡猾さよりも寧ろクキテリアの浮薄を痛罵しつゝ、おの〳〵劍を鞘に收めたのであつた。カマチョーはかう思ひめぐらした、もしクキテリアが處女の時からバシリオをこれ程愛してゐたとするなら、人妻になつてからもやはり彼を愛したであらう、さすればこの女を授かるよりも奪ひ取られた方が却つて有り難いわけであると。

それ故カマチョーもその附き人等も氣を取り直して穩かになつたので、バシリオ側の人々も鎭まつた。そして金滿家カマチョーはこの詭計に對して遺恨を懷かず、またこのことを心にかけぬといふことを表はす爲めに、自分が實際結婚をしたかのやうに祝宴を續けたいと思つた。しかしバシリオは、その花嫁も、またその附き人等もこの祝宴にはかゝり合ひたくなかつたので、一同バシリオの村へと引きあげた。蓋し貧乏人でも自ら德を備へた聰明な人物であれば、自分に附き自分を尊敬し扶助する仲間を持つことは、恰かも金持が諛ふ者どもや踊り子の仲間を有つのと同じである。バシリオの連中は、ドン・キ ホーテを立派な人勇ましい人と見て一緒に伴れて行つた。サンチョーは氣持を惡くした。それはその夜の夜中まで引き續いたカマチョーの善美を盡した饗應祝宴に侍べることを妨げられたからである。かうして引つ張つて行かれながら、彼は快々として、バシリオ組と一緒に行く主人に從うた。そして例の「エヂプトの肉鍋」は後に遺した。尤も彼の心の中にはその肉鍋を携へてゐた。そして今や方に盡きんとしてゐるかのバケツの中に携へてゐる御馳走は、心から消え去りつゝある花やかな潤澤な饗應の幻影を彼の眼の前に築き上げたのである。そこで空腹でこそはなけれ悄氣てがツかりして、ダップルから降りずにロシナンテの足跡に從いて行つたのである。



## 第二十二章

にはラ・マンチャの中心に在るモンテシノスの洞穴の大冒險が記されてある。勇敢なるドン・キ ホーテはこの大冒險に目出度き結末をつけたのである。

この新婚の夫婦は、ドン・キ ホーテが身を提げて自分等の側に立つて加勢をして呉れたのを有り難く思ふところから、心を盡して彼を歡待した。そして彼等はドン・キ ホーテの智と勇とを並せて賞揚し、武勇に於てはシードに辯舌に於てはシセローに比べたのである。サンチョーどのも三日の間この夫婦の賄で御馳走になつた。彼等は、例の僞りの手傷はこの美しいクヰテリアとの爲めだと夫婦の口から聞かされた。尤もバシリオは、初め自分の考へを數人の親友に打ち明けて置いて、適宜の時に自分のその目的を果す手助けをして貰ひ、その瞞着を必ず成功させるやうにしたのであると打ちあけた。

『徳義ある結末を目ざしてすることは喃着ではありません、またさう言ふことも出來ません。』とドン・キホーテは言つた。そして彼は戀人同志の結婚は最も結構な結果であると斷言した。しかしながら戀の最大の敵は飢えや不斷の窮乏であることを彼等に注意した。蓋し、戀は全く陽氣で悦樂で、幸福である。戀人がその戀の目的を手に入れた場合は特にさうである。而して貧乏や窮乏は、以上のものゝ公然の敵であると、かう彼が言つたのは、パシリオをしてその熟達せる樣々の藝能を行ふことを止めさせよう爲めであつた。つまり、それ等れ藝ごとでは名前は揚がつても金にはならぬから、それは止して、手堅い働きで所得を增すがよい。これならば賢くて忍耐強い人は決してやり損ひはない。譽あつて貧しい人は(もし貧乏人で名譽のある人になるとすれば)美しい妻を有てば、寶玉を有つたことになる。そしてもし、その妻を奪らるれば同時にその名譽も奪られて殺される。美しい女で、操が正しくて貧しい夫を持つてをれば、それは勝利の月桂冠、榮譽の冠を戴かせられる價値がある。美しいものは、唯それだけで觀る者すべての心を引き付ける。颯爽たる鷲も雲上高く高翔する猛鳥も、心を引きつける餌でゝもあるかのやうに、その上に降りて來る。しかし若し美しいものに貧困赤貧が伴ふ段になると、爲も鳥もその他の猛禽もそれに寄りたかつて來る。そこで、こんな樣々の攻撃に頑として對抗する婦人こそ、その夫の冠



と呼ばれる價値がある。』あゝ、聰明なバミリオさん、』とドン・キホーテは附け加へた、『誰であつたか、或る賢人の『全世界には一人より善き女はなし』といふ考へを、よう心に留めてござれ。そしてその敎への意味は、誰でも自分の女房こそ所謂その唯一人の善き女ぢやと思ひ且つ信ぜねばならん、さういふ風にすれば幸福に暮して行けるといふのですよ。拙者自身は妻を迎へて居りません。えた、今迄のところでは、そんな考へを起したことがありません。それに拘らず、滿足して結婚するやうな女房を搜したいから、その方法を敎へて下されと言へば誰にでも遠慮なく敎へてやりさうすわい。そんな人に何時も拙者が勸める第一ヶ條は、金持よりも評判のよい女を搜しなされといふのです。良い婦人も唯良いといふばかりで好い評判を得るものではない、そりやういふ性質を人に見られるやうにするからのことぢや。またおほッぴらに檢束がなくて自墮落なのは、內々で墮落して居るよりも餘計に婦人の名譽を傷けますわい。もし貴方が善良な婦人をお宅へ引き取りなさるなら、その良質を維持して行くのも、またいよ〳〵それを麽いて行くのもたやすい業です。しかしもし惡い女を引き入れなさつたら、それを撓め直すのはむづかしい業ぢやと分りませう。一つの極端からもう一つの極端へ移すのは容易のことではないのですからの。拙者はそれを出來んものとは言はん、が困難なことぢやと思ひますわい。』

これをじッと聴いてゐたサンチョーは獨り言を言つた、『私の旦那樣ア、いつも私が重味や中身のあることを言ひさへすりや、お前は說敎壇を手に持つて方々廻つて歩いたら立派な說敎が出來ようと言はッしやるがな。けれど私に言はせりや、旦那もあんなに樣々の格言を繋ぎ合せて人に敎へ出しなさる時にや、說敎壇を手に持つどころか一つ一つの指に二つづゝの說敎壇でも持つて行けさうぢや。そして方々の市場へ行きなさッたら、さぞ御滿足ぢやらわい。何も彼も知つてござる貴方樣が武者修業にならッしやれたのは、何ちう業ぢや！私ア今までずッと、旦那の知つてござるのは武者修業のことだけぢやと腹の中で思うて居つたがな。けれど旦那樣が指を附けてござらん物ア一つもないわい。』

サンチョーは稍聲高くこれを呟いた。そこで主人はこれを洩れ聞いて訊ねた、『サンチョー、何をぶつ〳〵言うてをるのぢや？』

『何にも言うてもをらにや、呟いても居りませんわい、』とサンチョーは言つた、『たゞ獨り言を言ひよりましたよ、貴方樣が今先き仰有つたことを私が女房を持たん前に聞いとりやよかつたと。さうしたら今頃は私や「自由な身の牡牛は身體をよう舐める」と言ひよりましよう。』

『それぢや、サンチョーお前のテレサはそんなに悪いのかゝ？』とドン・キホーテは言つた。



『餘り惡うもござりませんが。』とサンチョーは答へた。『けれど餘り善うもござりませんが。まづ私の望み通りにや善うござりませんわい。』

『自分の女房を惡く言ふのは良くないこッちや。』とドン・キホーテは言つた、『兎に角、彼女はお前の兒どもの母親ぢやからの。』

『私等ア五分々々ですよ、』とサンチョーは答へた、『彼女も氣の向き次第に、取り分けやきもち燒く時にや、いつでも私のことを惡う言ひますからの。そしてその時にや、惡魔でも彼女にや手が附けられませんからの。』

兎に角、彼等はこの新婚の夫婦から待遇の許に三日間滯在した。彼等は王樣のやうにこの夫婦から待遇せられ款待せられた。ドン・キホーテは、モンテシノスの洞穴へ行く道案內者を搜して貰ひたいと、例の劍術の學士に賴んだ。それは自らその洞穴に入り込んで、この國中に洽く語り傳へられてをる數々の不思議な物語が本當であるかないかを、自分自身の眼で見よう爲めであつた。學士は、私の從兄弟に案內させませうと言つた。それは名高い學者で、また騎士道の書物も大分耽讀した男であるから、大喜びでその洞穴の入口へも案內するであらうし、またこのラ・マンチャのみならずスペイン全國へさへ知れ渡つてゐるルイデラの湖水もお目にかけるでありませうと、學士

は附け加へた。そして、その男は印刷して王侯に獻ぜられる程の立派な書物でも書ける著者であるから、屹度お話相手になりませうと受け合つた。遂にその従弟兄は孕み驢馬に打ち乘つて到着した。その驢馬に雜色の絨氈か嚢布かで包んだ荷鞍をつけてゐた。サンチョーはロシナンテに鞍を置き、ダップルに荷鞍をつけ、鞍嚢に食糧を詰めた。その従弟兄の鞍嚢も同樣に詰められた。そこで彼等は神の保護を祈り人々に別れを告げて、その名高いモンテシノスの洞穴への道を取つて出發した。

途すがらドン・キホーテは、この従兄弟に向つて、その本職や事業や研究はどんな種類のまたどんな性質のものであるかを訊ねた。これに對して彼は、その本職は人文學者であること、そしてその事業及び研究は國民の爲めに大なる效用があると共に同樣に興味を以て迎へられるやうな書物を刊行することであると答へた。その著書の一つに「服制考」と言うて、その中には七百三種の制服をあげてその色合から銘から紋形まで記述した。これを參にすれば宮廷の紳士等は、祭日や宴會の服裝には自分の好きなものが選み取られる。さうすれば、こんな物を人に尋ねに行くこともいらねば、また自分の望みや好みに丁度はまるやうな服裝を案出しようとて世間で言ふやうに頭を惱ますことも入らぬのである。『それは、』と彼は言つた、『私は、嫉妬深い人にも、落膽した



人にも、忘られた人にも、遠ざけられた人にも、間違ひなく適合する服裝を備へさせますからな。私はもう一冊書物を書きました。それは「變身一名スペインのオヰッド」（オヰッドはローマの詩人で）と表題を附けようと思ひます。これは珍らしい天下一品の獨創です。私はオヰッドの道化た文體を眞似ましてな、この書の中に「セヰールのジラルダ」とか「マグダレーナの天使」とかの正體を示し、またコルドヴにあるエシングェラの下水のこと、グヰサンドーの牡牛のこと、モレナ山脈のこと、マドリッドにあるレガニトスとラヴピェスの泉のこと、さてはピオジョーの泉や、カニヨー・ドラードの泉、ブリオラの泉（これ等は皆マドリッドの郊外に在つたもの）などを落さずに書いて居ります。しかもこれを讀めば一どきに娯樂も興味も敎訓も得られるやうに、その隱喩や比喩や變遷なども殘らず記しました。もう一つ私の書いてをる本は「ポリドレ・ヴージルの補遺」と申します。これは物の發明を取り扱うたもので、それこそ非常な學識と穿鑿とを要した著述です。それはあのポリドレ（ポリドレ・ヴージルはイタリー十六世紀の人、歷史家として知らるる）が逃べ落した重要な事物を丁寧に證明して解說したのですからな。ポリドレは、世界で一番初めに風を引いた人のことも、一番初めにフランス熱病で涎を垂らし出した人のことも落してをります。しかし私はそれを精確に記述して、その典據として二十五人以上の著述家を引照して居りますから、私がどれ程骨を折つたか又これがどれ程全世界の役に立つかは御分りになりませう。

この従弟兄の言葉を非常に謹聴してゐたサンチョーは彼に言つた、『先生様――どうぞその書物が版木になりますやうに――なア貴方様、（貴方は何でも知つてござるから素より知つてござりませうが）この世で一番先に頭を掻いた人ア誰れでござりましよかい？私の考へぢや、私等の大先祖のアダムに違ひないと思ひますがの。』

『それに違ひない、』と従弟兄は答へた、『何故といふに、疑ひもなくアダムは頭や髪の毛を有つて居つたからの。そこでこの世の最初の人ぢやから、時には頭を掻きもしたらうよ。』

『私もさう考へますわい、』とサンチョーは言つた、『けれども一つ教へて下され、この世で初めて轉げ落ちた人ア誰でござりましよ？』

『なる程な、お前さん』と従弟兄は答へた、『私はどうもそれを研究せずに今卽座に確とした事は言ひ兼ねますわい。私が本の在るところへ歸つてよう檢べた上で、この次ぎ逢うた時に御返事しませう。またと逢はんこともなからうから。』

『まア～、貴方様、』とサンチョーは言つた、『そんな御心配は御無用でござりますわい。ほんの今ふいとそんな事を思ひついたのでござりますからの、なア貴方様この世で初めて轉げ落ちたのは、天から突き落されて抛り出されたルシファー魔王に決つて居りますわい。彼奴は底のない

奈落へ轉げ落ちて行きましたからの。』

『成る程なア。』と従弟兄は言つた。するとドン・キホーテは言つた、『サンチョーよその問ひも答へもお前自身のぢやない。屹度誰れかに聞いたのぢや。』

『旦那様、默つてお出でなされ、』とサンチョーは言つた、『誓言、もし私が問答をし出したら、今から明日の朝までは續きますぞい。まさか！馬鹿げたことを訊ねたりでたらめを返事したりするのに、他人の智慧を借りに行くにも及びませんわい。』

『サンチョーよ、お前は自分で知つてをる以上のことを言うたのぢや。』とドン・キホーテは言つた、『世の中にはの、分つてしまうて證明の出來た後になつて見れば、それを會得しても覺えて居つても一文の値打ちも無いやうな物ごとを、骨身碎いて研究したり證明したりする人が居るのぢや。』

こんな樣々なおもしろい話のうちにその日も暮れた。そこでその夜はとある小村に一泊した。そこからモンテシノスの洞穴までは二リーグよりなかつた。そこで従兄弟は改めてドン・キホーテに向ひ、もし何うしても洞穴へ入るお積りなら、索で身體を縛つて底へ吊り下げて貰はねばならんから、その索を用意して行く必要があると言つた。ドン・キホーテはたとへその洞穴が奈落

の底まで達して居らうとも、そのどん詰りの處まで見極める積りだと答へた。そこで彼等は繩を百尋ばかり買つた。そしてその翌日の午後二時に、彼等は洞穴へ到着した。洞穴の口は廣く開いてゐたが、しかし刺のある灌木や野無花果や木苺や荊棘などが莽々と茂り合つてその入り口をすつかり蔽ひ鎖してゐたのである。

洞穴の見える所まで來たので、從兄弟とサンチョーとドン・キホーテとは乘り物から降りた。そして前の二人はドン・キホーテを例の繩でしッかりと結へた。そして彼を卷いたり綁つたりしながらサンチョーは言つた。『旦那樣、これから成さることをよう考へて下されよ。生き埋めになつたり井戸に浸けて冷やす德利のやうにぶら〳〵吊り下がるやうなことア思ひ止つて下されよ。ムーア人の窖牢よりもひどいに決つてをるこの洞穴を探險するやうなことア、貴方樣のなさる仕事ぢやござりませんわい。』

『默つて早う結ひ附けい、』とドン・キホーテは言つた、『なア、サンチョーよ、こんな冒險こそ私の爲めに取つて置いてあつたのぢや』。そこで道案內の從兄弟は言つた、『ドン・キホーテさん、どうかお願ひですから、この洞穴の中にある物は殘らず目を百にもして詳しう見て調べて來て下さい。大方私の「變身」の中に記入するやうな物がありませうからな。』



『太皷は十分見事に打つすべを知つとる手に在るのぢや、』とサンチョー・パンザは言つた。

サンチョーがこんな事を言つて、結へてしまふと(それはドン・キホーテの鎧の上からでなく唯胴着の上から結へた)ドン・キホーテは言つた、『小さい鈴を用意して來て私の身體に縛り付けて置くやうにせなんだのは手拔りであつた。鈴の音がすれば、私が降つて行きよることも生きて居ることも分るであらうからの。しかし今はもうそんなことを言ふ場合でないから、神の御手に身を任せて行かうわい。』そして直ぐ樣彼は跪ついて低い聲で神に祈りを捧げつゝ、どう見ても危險極まる未曾有のこの冒險にあはれお助けを下し置かれて首尾よく成功なさしめ給へと神に願ひ、さて聲高く叫んだ、『おゝわが働きと動作の主なる、美名赫々たる 比類なきドゥルシネア・デル・トボソよ。君が幸運なるこの戀人の祈願懇願がお耳に達しますならば、どうぞ君が無比の美しさにかけて願ひますからお耳を暫しお貸し下されい。その祈願とは別のことでもござりません。唯拙者が、唯今必要に迫つてをります君の御恩寵御保護をばお拒み下さらぬやうにと申すのでござります。今や拙者は、君の御恩寵を蒙つて居る間は如何なることも試みて成就せぬことはないといふことを洽く天下に知らせたいばッかりに、かうしてこの拙者の眼前に在る深淵に身を踊らして眞逆樣に跳び込まうとしてをりますのぢや。』かう言つて彼は洞穴に近寄つた。が、押し分け掻き分

けて辿つて行かねば、到底その穴に下りもされず入れもせぬことを見て取つた。そこで彼は佩劍の鞘を拂つて洞穴の入口の邊の荊蕀を切り開き薙ぎ初めた。すると、この物音に驚いて、鳥や赤嘴烏の大群が夥多しく群をなしてばたん〳〵と飛び立つたので、その勢ひにドン・キ ホーテは叩き倒されてしまつた。そこでもし彼が天主教のキリスト信者であつたやうに前兆を信ずる者であつたなら、それを凶兆と取つてこんな場所へ降りて行くことは中止したであつたらう。しかしながら、彼は起き上つた。そして最早や烏も、また先き程烏と共に飛び立つた蝙蝠のやうな夜烏も出て來なかつたので、從兄弟とサンチョーとは繩を繰り出して、この物凄い洞穴のどん底へと身體を吊り下げた。ドン・キホーテがこの洞穴へ下りる際に、サンチョーは百千度もその上に十字を切つて、祝福を祈り求めつゝ言つた、『あゝ武者修業の花、武者修業の粹よ、どうぞ神樣も、ペンヤデ・フランシア樣も、ガエタの三位一體樣も、貴方をお導き下さりませ。あゝ天下の向ふ見ず、鐵の腸、眞鍮の腕、貴方はそこへ行きなさるかい。も一度、どうぞ神樣が貴方を守つて、無事息災に怪我もなう、貴方の探りに行きなさるその眞暗がりからこの日の光の當る世界へ歸つて來られますやうに。』そして從兄弟も殆んどそれと同じ祈禱と祈願を捧げたのである。

ドン・キホーテは、繩をもツと延ばせもツと延ばせと呼び續けた。そこで彼等はその呼び聲を聞



く度に少しづゝ繩を繰り出した。が、宛らパイプの中からでも來るやうにその洞穴の中から出て來た呼び聲は、その繩を殆んど百尋も繰り出したかと思ふ頃、ハタと歌んだ。彼等はもはや繰り出す繩が無くなつたので、ドン・キホーテを再び引き上げようかと思つた。しかし、半時間ばかりは待つてゐた。それからやがて、繩を手繰り込むと何の重みも感ぜずにするゝ〳〵と上つて來たので、ドン・キホーテは下に落ちたのではないかと思はれた。それに違ひないと思ひ込んで、サンチョーは烈しく泣き出した。そしてその實否を質さう爲めに大急ぎで繩を手繰り上げた。しかし彼等が八十尋餘り手繰り込んだかと思ふ頃、重みが感じられたので、彼等は非常に喜んだ。そして十尋以上のところに來ると、はツきりとドン・キホーテを見た。そこでサンチョーは彼に呼びかけて言つた。『旦那樣、お歸んなされ。私等はな、すんでのこと貴方樣がこの底へ腰を落ちつけて家でも持たうとしてござるかと思ひよりましたぞい。』しかしドン・キホーテは一言も答へなかつた。そして全く引き上げて見ると、彼は熟睡せる者の如く兩眼を閉ぢて居るのであつた。

彼等はドン・キホーテを地面へ臥かして、繩を釋いた。けれども尙彼は眼を覺まさなかつた。然し左右に轉がして、搖ぶツたり引きずり廻したりしたので、暫くすると正氣づいた。そして恰も深い眠りから覺めたかのやうに、背伸びをして、あたりを見廻しながら彼は言つた、『何のこツ

ちや、お前さんたち。折角私が、これまで世の人が見て樂んだこともない、それこそ美妙法悦の境地を逍遙して居つたのに、お前さん等は其處から引き上げてしまうたのぢや。今は早やこの世の快樂は殘らず影のやうに夢のやうに過ぎ去り、野の花のやうに萎んでしまうたわい。あゝ不仕合せなモンテシノスよ！あゝ、重傷を負うたドゥランダルテよ！あゝ不幸なベレルマよ！あゝ涙もろいグァディアナよ！それにまた汝の美しい眼から流れ出た涙をその波に漂はせるルイデラの不運な娘等よ！』

從兄弟とサンチョー・パンザとは深い注意を以てドン・キホーテの言葉を聽いた。彼は無限の苦痛を以てその腹のどん底から絞り出すかのやうに、是等の言葉を吐いたのである。二人の者は、事の仔細を說き明して、尙この下の地獄で見たことを詳しく話すやうにドン・キホーテに賴んだ。

『それを地獄といふのかゝ・とドン・キホーテは言つた、『そんな名前をつけるものではない。今に直ぐ分らうが、決してさういふ名前に當るところではないからの。』

そして彼は非常に空腹であるから、何か食ふ物を與れいと賴んだ。彼等は、從兄弟の嚢布を草の上に擴げて、鞍嚢の中の糧食を所望に應じて取り出した。三人は親密に睦じくそこに坐つて、中食と夕食とを一時に食つた。そしてその嚢布が片づけられると、ラ・マンチャのドン・キホーテ



は言つた、『さてお前さんたち、二人とも座を立たずに、拙者の話を聞きなされい。』

## 第二十三章

天下無雙のドン・キホーテがモンテシノスの深き洞穴に於て實見したりといふ不思議のことども。その餘りに廣大にして有り得べからざるところからこの冒險には信を置き難しと思はれるに至つてゐる。

それは午後の四時頃で、太陽は雲に隱れ、光は弱り光線は和らげられてあつたので、ドン・キホーテは、熱さにも眩しさにも妨げられることなくして、モンテシノスの洞穴で見て來たことを、その有名なる二人の聞き手に物語ることが出來たのである。そして彼は次のやうに始めた——

『この窖の中を十二尋か十四尋ぐらゐ下ると、左に一つの凹みとも空地ともいふべき所がある。それは大形の二輪馬車が騾馬をつけて入れる程に廣い。何處かの隙間から罅裂から薄明りがさしてをるので其處と地の表面とは聯絡がついてゐる。拙者はあの繩に吊り下げられて、何處へ行きよるのやら不確でもあり、譯も分らず乍らに眞ッ暗がりをだん〳〵降りて行く中に、もう身體も疲



れて厭になつて來た時分に、ふと拙者の眼に止つたのが、今のその凹みなり空地ぢや。そこで拙者は暫く其處へ入つて休息しようと心を決めた。拙者は大聲を出して、あの繩をこッちから延ばせと言ふまでは送るなと言うたが、それはお前さんたちにや聞えませなんだらう。そこで拙者は送つて來る繩をたぐり集めてぐる〳〵蜷局巻きにして、その上に腰をおろして、もう自分の身を上から持つてゐてくれる者がないから、何うして下へ降つたものかと兎や角思ひ回らして居つたのぢや。さてかうやつて深く考へ込んで當惑して居ると、突然、また何の理由もないのに、ぐッすり眠り込んでしまうたのぢや。そして何うしたのか拙者には分らんが、全く思ひも設けず眼を覺まして見ると、拙者は美しい水々しい晴々した草原の眞中に坐つて居る、しかも自然が力をこめて作り出し、えた最も敏活な人間の想像力が產み出し得たこの上ない草原ぢや。拙者は眼を開けて擦つた。するともう自分は眠つては居らずに全く覺めて居ると分つた。それでも尙私は、一體こゝに居る自分は本當の自分であらうか、空な虛妄の幻ではなからうかと、それを確かめる爲めに頭や胸を撫でゝ見た。しかし肌觸りも、感じも、私の胸に通ふ分別心も、すべてが、あの時あそこに居つた私も、今こゝにかうして居る私も同じ者ぢやと、思はせたのぢや。やがてするうちに、拙者の眼には莊大な王宮がお城かゝ映つて來た。その壁は明らかに透き通る水晶で作つ

てあるらしかつた。そしてその壁にひろ〳〵と開いて居る戸口から、神々しい一人の老人が出て來て私の方へ近寄つて來るのを見たのぢや。その老人は、据で地べたを拂ふやうに長い桑の實色の絹セルの上着を着て居つた。肩から胸へかけては學者風の綠り繻子の袷巻をかけ、頭には黒のミラン帽を戴き、その雪のやうに白い髯は帶の下まで垂れて居つた。この老人は武器は一つも持つて居らなんだ。たゞ、可なり太い棒の珠の十目には、中ぐらゐの駝鳥の卵ほどの珠が嵌めてあつた。その人の樣子や、姿や、威嚴や、堂々たる人品は、唯不思議さにその場へ私を釘附けにしてしまうた。老人は私に近寄つて、先づ第一に拙者をしッかと抱いて、さてかう言うた、「あゝ、勇敢なる騎士、ラ・マンチャのドン・キホーテよ。この寂しいところに魔術にかけられをる私等はもう長い間お前に逢ひたいと待ち望んでをつたぞよ。今お前が入つて來た、俗にモンテシノスの洞穴と呼ぶこの深い穴の中に鎖ぢこめられ隱されて居るものを、お前に依つて世界に知らせたい爲めぢや。これこそお前の不撓不屈の精神と驚くべき勇氣とのみが企て得る手柄ぢや。さア、名高い騎士よ、私と一緒に來なさるがよい。さうすれば、この水晶城の中に隱されてある樣々の不思議を見せて上げよう。私はこの城の城主で不斷の番人ぢや。私こそモンテシノスその人で、そこからこの洞穴の名は附いたのぢや。」



その老人が我れこそモンテシノスぢやと言うたので、卽座に私はかう訊ねた——貴方は小さい短刀で親友ドゥランダルテの胸の中から心臟を刳り取つて、その人が今はの際に貴方へ賴んだ通り、その戀人ベレルマ姬へ持つてお出でになつたと、上の世界で言うて居る話は眞實のことですかと。彼は答へて、語り傳へて居ることは殘らず眞實ぢやが、たゞその短刀だけが間違うて居る。といふのは、あれは短刀ではなく、また「小さい」といふものでもなく、突錐よりも鋭い磨ぎすました短劍であつたのぢや、と言うやうな。』

『その短劍は屹度あのセヴィルのラモン・デ・ホセスの作りでござりましたろな。』とサンチョーは言つた。

『私は知らん、』とドン・キホーテは言つた、『しかし、あの短劍鍛冶の作りであつた筈はない。何故といふに、あのラモン・デ・ホセスは、つひ此の間の人なんぢやが、此の不幸の生じたロンセスヴルレスの事件はもう遠い昔のことぢやからの。しかし、そんなことは別に大したとぢやない。またこの物語の眞實と內容とに對しては、何の影響も與へねば變更もさせぬことぢや。』

『そりや全くです、』と從兄弟は言つた、『で、ドン・キホーテさん、話を續けて下さい。私はもうこの上ない興味を以て拜聽して居りますからな。』

『拙者もそれに劣らぬ心持で話しますわい、』とドン・キホーテは言つた、『さてそこで、先きへ進みまして――その神々しいモンテシノスは、その水晶宮へ拙者を案内しました。そこの、下の方の一室に入ると、異様に冷たくて、殘らず雪花石膏作りで、そこには丹精をこめて刻んだ大理石の墓石が一基ありました。その上を見ると、ながく〳〵と身を伸ばした一人の騎士が居る。これは、普通の墓石の上で見られるやうな、眞鍮製でも、大理石製でも、碧玉製でもなうて、眞實の肉や骨を備へたものであつた。その右の手は（それは多少毛ぶかく筋ばつて居るやうに見えたので、この手の持ち主はさぞ大力であらうと思はれたがな）、心臟の側に横に置いて居つた。しかし拙者が一と言も訊ねんうちに、拙者が驚いてこの墓石を見守つてゐるのに氣のついたモンテシノスは、自分の方から私にかう言うた、『これは私の親友ドゥランダルテぢや。當時の眞心ある戀人たちや、勇敢な騎士たちの花ぢや、鑑ぢや。この人も私やそのほかの多くの人々と同樣に、あの惡魔の子であつたと謂ふフランスの魔術使ひメルランの爲めに、此處に魔術で閉ぢこめられて居るのぢや。しかし私の考へでは、あのメルランは惡魔の子であつたのでなうて、たゞ諺にある通り、惡魔よりも餘計に物を知つて居つたゞけなのぢや。何うして何で私等を魔術にかけたかは誰にも分らぬ。然し、時が來れば分らう、そしてその時も早遠くはあるまいと私は思ふ。たゞ私の

不思議でならんのはこれぢや、ドゥランダルテが私の手で生命を果たしたことも、その死んだ後でこの私の手で彼の心臓を摑み出したことも明々白々の事實として私が知つて居るといふとぢや。生物學者の説によれば、太い心臓を有つた人は小さい心臓を有つた人よりも大膽ぢやといふからには、ドゥランダルテの心臓は二ポンド以上の目方があつたに違ひない、それがきうとすると、またこの騎士が本當に死んだものとすると、今も尚宛ら生きてゞも居るやうに時々呻いたり吐息をしたりするのは何うしたわけであらう？これが不思議ぢや。」

『その老人がさう言うて居る折柄、その哀れなドゥランダルテは大聲でかう叫んだ——

あゝ、懐かしやモンテシノスよ！
わが靈形骸を離れんとして
われ死の床に横たはりし時
汝に求めしわが最後の願ひは
汝の短劍か短刀にて
わが胸より心臓を切り取り
ベレルマに持ち行けかしと、

これぞわが最後の願ひなりし。

これを聞いて、その神々しいモンテシノスは、この不幸な騎士の前に跪づいて、眼には涙を浮べて呼ばゝつた、「あゝ私の愛する従兄弟よ、ドゥランダルテどのよ、お前の乞ひに任せてあの悲しい日にお前を亡き者にしてから、もうはや久しい時が經つたのう。私は出來るだけ、お前の臟腑の中を掻き廻した爲めその微塵も殘らぬやうに心臟を刳り取つたのぢや。私はあの時お前の臟腑の中を掻き廻した爲めに血にまみれて居つたこの兩手を洗ひ清めるだけの涙を流して、先づ第一にお前の亡骸を大地の胸へ葬つて、それからレースのあるハンカチでその心臟を拭いて、そしてそれを携へてフランス路へと出かけたのぢや。それにまた懷しい従兄弟よ、ロンセスヴルレスを立つて第一の村里に出ると直ぐ、その心臟によい匂ひをさせて置かうと少しばかり鹽をふりかけた。それは生ではなうとも、せめて鹽漬にしてゞもベレルマ姫の前へ持つて行かうと思うてぢや。けれどこのベレルマ姫も、お前や私やお前の従士グヮディアナや侍女頭のルイデラやその七人の娘や二人の姪や、その他お前の大勢の友だちや知り人など、一緒に、あの魔術使ひのメルランの爲めに長い年月此の所に魔術で囚へられて居るのぢや。そしてはや五百年以上も經つたが、誰も死んだ者もない。ルイデラとその娘たちと姪とだけはその姿が見えぬ。それは、あの女どもが傍りに涙を流したので、さすがのメルランもこれを哀れと思うたと見え、あの女どもの數だけの湖に變えたのぢや、その湖は今日も尚この浮き世で、ラ・マンチャ州で、ルイデラの湖と呼ばれて居る。この七人の娘等はスペインの王様（スペイン王國内の諸所にの意）に屬いて居る。お前の姪たちに、その二人の姪等は「聖ヨハネ黨」と呼ばれる頗る高級の騎士たちグヮディアナも、やはりお前の運命を歎いた爲めに、その名前の河に變へられた。しかしこのグヮディアナが水面に出て來て、別の空の太陽を見た時に、お前と別れると氣がついて非常に悲み歎いた揚句、地の底へ潜り込んでしまつた。しかし、その自然の流れに從はぬわけには行かんので、時々表面に現はれて太陽や世界にその顏を見せるのぢや。上に述べた湖どもはこのグヮディアナへ水を送る。こんな水や、また他から來る水やで、彼は非常に大きうなつて、ポルテュガルへ堂々と注ぎ込むのぢや。しかし、それでもやはりこの河は、何處へ行つても物憂い悲しげな樣子をして、うまい上等の魚を育てるといふ誇りもなく、粗末なまづい物ばかりを出して居る。それはあの金色のテーガス河とは非常な相違ぢや。あゝ、従兄弟よ、今お前に話すことは、これまでも幾度となく話したことぢや。しかしお前が何とも返事をせんのを見ると、お前はこれを信ぜぬのか、それとも私の言葉が聞えぬのであらう。それを思ふと私は人知れぬ悲しみを覺えるわい。私は今お前に聞かせる新しい消息がある。

これはお前の惱みを輕める役には立たぬまでも、兎にかくそれを增させはすまい。これ、こゝに（眼を開けなさい、さうすれば見える）、あの賢人メルランが非常な事蹟を殘すと豫言した偉丈夫が來てござるのぢや、卽ちあのラ。マンチャのドン。キホーテのことぢや、この人こそ、長い間忘れられて居つた武者修業の道を今の世に、しかも昔のに一段優れた目的で、復活させた人ぢや。この人の仲裁や助力に依つて私等は魔術を釋かれるのぢや。大功は大人物の爲めに取つて置かれてあるからの。」

『もしさうでなかつたら、」と、哀れなドゥランダルテは低い弱い聲で言つた、「もしそれが出來なんだら、その時は、おゝ從兄弟よ（仕方がない、骨牌を切れカルタで妙けた人かカルタの切り手に言ふ諺）と言はう。」そして臥返りを一つ打つて、もはや一語も出さず元の沈默に復つたのぢや。

『やがてするうちに、非常な叫び聲や泣き聲が、深い溜息や痛ましいすゝり泣きとともに聞えて來た。私はあたりを見廻した。すると、殘らず喪服を着て、その頭にはトルコ風の頭巾を戴いた美しい處女等の行列が二筋向ふの部屋を通つて行くのが、そこの水晶の壁を透かして見えたのぢや。その行列の殿部をして、後から一人の身分の高い婦人が來た　それは、その婦人の威嚴からして如何にもさうらしく見えたのぢや。この婦人もやツぱり黑衣を纏うて、地面を擦る程に長い廣い眞白な面紗を懸けて居つた。その人の頭巾は、他の人の一番大きい頭巾の二倍はあつた。その眉は逼り、その鼻は寧ろ低く、その口は大きかつたが眞赤な唇をしてをつた。そして時々ちら〳〵と透いて見えたその齒は、皮を剝いた扁桃のやうに白くはあつたが、疎らで据りが惡かつた。その婦人は手に立派な布を持つてゐたが、私の見分けたところでは、その布の中には非常にから〳〵に乾からびた心臟の木乃伊が入つて居つたやうぢや。モンテシノスが拙者に物語つたところに依ると、その行列を作つて居つた人々はドゥランダルテとベレルマの臣下の者どもで、この人たちもその主人や女主人とともに魔術でそこに囚はれて居つたのぢや。またその一番後から心臟の入つた布を携へて行くのがベレルマ姬であつたのぢや。この婦人は一週の中の四日はその侍女どもと一緒にドゥランダルテの死骸や慘ましい心臟を悼む歌を歌ひながら、寧ろ泣きながら行列をして行つた。そして、あの婦人が幾らか醜く見えたのは、いや、評判程に美しう見えなんだとすれば、それはつまり魔術にかゝつて數多の眠れぬ夜や物憂い日を送つたからで、それはその眼の周りの大きな暗い輪や、その病身らしい顏色で分つたのぢや。モンテシノスはこれに就いてかう言うた、「この婦人の靑ざめて居るのも、その眼の周りに輪のあるのも、これは婦人に一般な囘りの病から出たものではない。この婦人はもう幾月も幾年も前からそんな病氣に罹つたこ

とはない、その眞因は、つまり始終あのドゥランダルテの心臟を手に持つて居るので、またそれに依つて自分の亡き戀人の悲しい運命を思ひ出すので、自然自分の心臟にも痛みが感ぜられるからちや。もしこの事がなかつたら、この界隈にも全世界にも名高いドゥルシネア・デル・トボソ姫も、その美しさ優しき花やかさにかけては、とてもこの婦人には及びも付くまいぞよ、」と。

『これを聞いて拙者は言うた、「お止めなさいッ！ドン・モンテシノス殿、分を越えぬ程に話されるが宜しい。御承知の通り總じて比べごとは厭はしいものぢや。また別々の二人を比べるは要のないことぢや。比類なきドゥルシネア・デル・トボソは、あの通りであり、またあの通りであつた。それで澤山ぢや。」之に對してモンテシノスは答へた、「ドン・キホーテ殿、御免なされ。私が惡かつた。又ドゥルシネア姫はベレルマ姫に及びも付かぬと言うたのは思慮のない言ひ方であつた。どうして氣がつかなんだか、お前さんはあの姫の騎士ぢやからあの姫を天自身以外の何者と比べても、さうさせぬうちに必ず私にこの舌を嚙ませるのぢやと、ちやんと承知してをればよかつたに。」この偉丈夫モンテシノスの私に對するこの申し譯を聞くと、私の心も、自分の嬉人をベレルマと比べられるのを聞いて起した激動を鎭めたわい。』



『それにしても、』とサンチョーは言つた、『貴方樣がその親爺に飛びかゝつて、そいつの骨を殘らず蹴り折つてそいつの髯を一本も殘らんやうに引き拔りなされなんだのが、不思議でござりますわい。』

『いや〳〵、のう、サンチョーと』ドン・キホーテは言つた、『そんなことをしては善うなかつたらうぞ、私等は年を取つた人には、たとへ騎士でない者にでも敬意を拂はねばならぬからの。しかもそれが騎士であつて、魔術にかゝつてをる人であれば尙の事ぢや。しかし私とその老人との間に交されたその他の樣々の問答では、私は一歩もひけは取らなんだと思ふわい。』

こゝで從兄弟は言つた、「ドン・キホーテさん、何うして貴方は、あの下に降りて居られたあんな短い時間に、それほど澤山の物を見たり話したりなさることが出來たのですか、私には分り兼ねますよ。」

『私はどの位下へ降りて居つたかの？』とドン・キホーテは訊ねた。

『一時間ちよつと過ぎでござります。』とサンチョーは答へた。

『そんな筈はない、』とドン・キホーテは答へた、『何故といふに私があそこに居る間に、日が暮れて夜が明けたのぢや。そしてまた夜になり晝になること丁度三度であつたからの。そこで私の勘

定では、この眼界を離れた遠い處に私は三日居つたのぢや。』

『旦那樣の方が本當に違ひない、』とサンチョーは答へた、『旦那樣の御身には何も彼も魔術で起るから、私等に一時間と見えるのが、向ふぢや大方三日三夜と思はれるのぢやろ。』

『さうぢや。』とドン・キホーテは言つた。

『そして貴方は、あそこでその間に何かお食べになりましたか？』と從兄弟は訊ねた。

『一片の肉にも觸りません、』とドン・キホーテは答へた、『また飢じいとも感ぜねば、そんなことは思ひもしません。』

『そして、その魔術にかけられた人たちは食べましたか？』と從兄弟は言つた。

『あの人たちも食べません、』とドン・キホーテは言つたまた、『彼等は大小便もしません。尤もその爪や髯や髪は延びるものと思はれてをりますがの。』

『そして魔術のかゝつた人等ア眠りますかい、旦那樣？』とサンチョーは訊ねた。

『どうして〳〵、』とドン・キホーテは答へた、『少くとも私があの人等と一緒に居つた三日の間は一人として眼を閉ぢた者はなかつた。私とてもさうぢや。』

『あの「お前の夾はる友を告げよ、さらばお前の何者たるかを言はん」ちう諺は丁度こゝに嵌



まりますの。』とサンチョーは言つた、『貴方樣のお友達は何時も斷食して寢ずの番をしてござる魔術にかゝつた人たちぢや。そんなら、貴方樣があの人等と一緒にござる間食ひも眠りもなさらんとて何の不思議がござりましよ？けれどもな、旦那樣よ、御免を蒙りましてかう申しませうかい、もし唯今貴方樣のお話しなされたことを私が毛ほどでも信じたら、どうぞ神樣よ——いや惡魔樣よと言ふところぢやつた——私を伴れ往つてしまひなされと。』

『なんぢやと！』と從兄弟は言つた、『それでは、ドン・キホーテ樣は嘘を吐いてをられたのか？でも、もしさうする積りであつたにせよ、あれほど澤山の嘘を考へ出したり繋ぎ合せたりする暇はなかつた筈ぢや。』

『私ア旦那樣が嘘を吐きなさるとは思ひませんぞい。』とサンチョーは言つた。

『そんなら何と思ふのぢや？』とドン・キホーテは訊ねた。

『そのメルランか、それとも貴方樣が洞穴の中で逢うて話をしたと仰有るその大勢の人に魔術をかけた魔術使ひどもかゝ、今私等にお話しなされて、まだ〳〵これからも話さうとしてござる殘らずの讒語を貴方樣の額か胸かへ詰めこんだものと私は思ひますわい。』

『サンチョーよ、それはいかにもありさうなことぢや、』とドン・キホーテは答へた、『しかし實は

さうでない。私が今話したことは、殘らず私がこの眼で見この手で觸つたものなのぢや。ぢやがこれから私が話すものをお前は何う思ふかの、卽ちあのモンテシノスは數多の不可思議なことを私に示したが（それに就いては、此處で殘らず話すのは場所が悪いから、私等の道中で暇の折にまた適宜な所に物語るとしようがの）、その中で、三人の田舍娘があそこの美しい草原の上を山羊のやうに跳ね廻つて行くのを見せた。私はその三人を見るや否や、その一人は類ひないドゥルシネア・デル・トボソで、他の二人の田舍娘は、やはりドゥルシネアと一緒に居つた娘どもで、あのトボソから來る道で私等が話しかけた人たちぢやと分つたわい。私はモンテシノスに向うてこの女どもを知つて居るかと訊ねたが、知らんと言うた。しかしほんの二三日前からこの草原へ姿を現はすやうになつたから、屹度或る身分ある婦人で魔術をかけられた者に違ひないと言うた。しかし私はこれを見ても更に驚かなんだ。他にもいろんな不思議な形に魔術で變へられた昔や今の婦人たちが大勢居つたからの。そしてその中には、ギネヴィーア女王やその侍女のクィンタニョーナ、これはあのランスロットがブリテンから來た時葡萄酒を注いでやつた婦人ぢやが、そんな人たちも見えるとモンテシノスは言うたぞよ。』

主人がかう言ふのを聞くとサンチョー・パンザはまさに正氣を失ひさうになつた、卽ち笑ひ死にしさうになつた。といふのは、彼こそ自らドゥルシネアに魔術をかけてその證據を殘らず作り出した本人なので、その僞りの魔術に就いては事の眞相を知悉してゐたからである。そこで遂に彼はもう疑ふ術もなく、自分の主人は正氣を失うて氣違ひになつてゐるものと判斷した。そこで彼は言うた、『あゝ私の旦那樣、貴方樣があの下界へ降りて行きなされたのは、ほんとに厄時で、緣起の悪い折で、悲しい日でござりましたよ、貴方をこんな風にして返したあのモンテシノスさんに逢はツしやれた時刻こそ災難でござりましたの。貴方樣はこの上の世界にござつた時は、神樣から授かつたまゝの確かりした正氣を有つてござつて、行き着く先きで格言を言うたり異見をしたりなさつて、思ひも付かんやうな譫言ばつかり言うてござる今の貴方樣とは違うて居りましたぞい。』



『サンチョーよ、私はお前が分つて居るから、お前の言葉は別に氣には止めやせんぞよ。』とドン・キホーテは言つた。

『私もまた貴方樣のお言葉は氣に止めませんわい。』とサンチョーは言つた、『今言うたことや、またもし御自分の言葉をお直しなさらんなら、これからも言はうと思うとることで、たとへ私を打つたり殺したりなされても、の！けれど旦那樣、貴方樣とまだ仲が悪うならん間に、全體あれ

がお姫様ぢやといふことが何うしてまた何で分りましたか、それを話して下されよ。そして貴方様があのお姫様に物を仰有つたのなら、何と仰有つて、また何といふ御返事でござりましたかい？』

『それはの、お前がこの方ぢやと指して教へて呉れた時に、あの人が着て居られたのと同じの上着を着てござつたので分つたのぢや。』とドン・キホーテは言つた、『私は話しかけたがあの人は一と言も答へなんだ。それどころか私に背中を向けて逃げ出した。その足の早さと言うたら、弩の箭でも追ッ付かん位ぢやつた。私は後を追ッかけようと思うた。それであのモンテシノスが、そんな骨折りをしても無益であらうから、それに取りわけ私がその洞穴を去らねばならぬ時が近づいてゐるからと言はなんだら、さうしたであつたらうがの。それにまたモンテシノスは、自分もベレルマもドゥランダルテもその他其處に居る殘らずの人々も魔術を解かれる方法をその内私に知らせて呉れると言うた。しかし私があの地の下で實見し觀察したものゝうちで、一番私の心を痛ませたものは、モンテシノスが私に話をして居る折柄、あの不仕合せなドゥルシネアの二人の仲間の中の一人が私の氣づかぬ間に、私の傍へやつて來て、眼に涙を浮べて、低い顏へ聲で私にかう言うたことぢや。卽ち「ドゥルシネア・デル・トボソの姫君は、貴方樣に、恭しく御挨拶な

なさいまして、御機嫌いかゞに渡らせられますかお伺ひ申したいと仰有りました。それにまた姫君は非常に困つて居られますので、どうぞお情けに六リールだけ、或ひはお持ち合せだけのお鳥目を、わたしの着てをりますこの新しい手織り縞の下袴の上へ戴かして下さりますやうにと、それは〳〵心からの御願ひでござりました。また御返済は早速致しますとのことでござります。」と言ふのぢや。私はそんな使ひを受けて吃驚り仰天して、モンテシノスどのに向いてかう訊ねた「モンテシノス殿、身分の高い人でも魔術にかゝれば貧乏するといふ事が有り得べきことですかの？」と。それに對して彼は答へた、「ドン・キホーテ殿、實にこの貧乏といふものは何處にもあるもので、到る處に入り込み、あらゆる人々に達し、魔術にかゝつた人をさへ用捨はしません。そこで、ドゥルシネア・デル・トボソ姫が六リールの鳥目を借りに使ひをよこされ、またその抵當も何う見ても立派なものらしいからには、それをお貸しにならぬ法はありますまい。屹度何か非常な窮境に立つてをられるに違ひないですからの上の賴みだけを上げるとも出來ません。私には別にそんな抵當などは要りませんし、またその金は、のうサンチョー、途すがら行き逢ふ貧乏人へ施さうとて、この間お前から貰うて置いた錢ぢやが）渡して私は言うた、「のう、お前の姫君へ答へたのぢや。そして私はその四リールを（その金は、

かう傳へて下され、拙者は姫の御困窮に就いて心底から心を痛めて、もし拙者がフューカル（當時の名で
あつたら、お救ひ申したいものぢやと。また、姫に御目にかゝる嬉しさや、その賢いお言葉に接する
樂しさを奪はれて居る間は、拙者は健かになれもせず、なるべき筈もないのぢやと申し居りました
と。それから又。姫君よ貴女へ一身を獻げ居るこの僕に、この孤獨の騎士に、ぢき〳〵に逢うて言
葉をかけて下さるやう一向專心に祈つて居りまするとも傳へて下され、姫君は少しも思
ひ設けて居られまいが、拙者はマンテュアの侯爵が、あの連山の奥でその甥御ボールドウィンの斃
れんとするを見るや否や、その爲めに復讐せうと祈誓を立てたのに習うて、既に祈誓を立てまし
た。その祈誓とは卽ち、復讐をし遂げるまでは食卓に就いて食事をせぬこと、その他樣々の細かし
いことが附け加へてあつた。それで、拙者もあの姫君を魔術から釋き放すまでは、決して休息も
すまいし、またあのポルテュガルの公子ドン・ペドローが嘗て巡歴した地域（世界の四地方を巡
歷やりと傳へらる）よりも廣く世界の七地域を巡歷しませう』と。するその侍女は拙者に向つて「これと、まだ外にも貴方は私の御
姫樣にお借りがござりますよ」と答へて、その四リールを受け取り、私にお辭儀をする代りに、
跳ね踊りを舞うて二ヤードは十分宙へ飛び上つたわい。』

これを聞いてサンチョーは聲高く叫んだ、『やれまア！一體世の中にこんなことがあるものかの



う！魔術使ひや魔術が、私の旦那の正氣を變へて、これほど譫言だらけな氣違ひにしてしまへる
ものかのう！あゝ旦那樣、旦那樣、どうぞ後生でござりますから、よう物を考へて下されよ。名譽
を重んじて下されませよ。そんな馬鹿らしいことを當にして馬鹿や氣違ひになつて下さるなよ。』
『サンチョーよ、お前がさういふ風に言ふのは、私を愛するからのことぢや。』とドン・キホーテ
は言つた、『そしてまだ世事にうとい爲めぢや。少しでもむづかしいところのあるものは、何も彼
もお前には出來ぬことゝ見えるのぢやの。しかし、先きにも言うた通り、やがて今に私はこの洞
穴の中で見た事を話してやらう。さうすれば私の今の話も信じられようわい。それは問答を容さ
ぬ眞實ぢや。』

## 第二十四章　には、些細ながらも而もこの偉大なる物語を正當に理解するに必要な、無數の瑣事が記されてある。

この偉大なる物語を、その原作者シード・ハーメット・ベネンゼリーに依つて書かれた原作から飜譯した人はかう言つてゐる。卽ちモンテシノスの洞穴の冒險を述べたこの章まで來ると、その欄外にハーメットの自筆で、正しく次のやうな言葉が記入されてあつたと――

『私は前章に書かれてある一切の事が、勇壯なるドン・キホーテの上にその通りに降りかゝつたとは、信ずることも思ふことも出來ない。これまでに起つた一切の冒險は、有り得べきことであり、また有りさうなことであつたのであるが、しかしこの洞穴の冒險に至つては、あらゆる合理的範圍を越えて居るので、これを眞實として受け容れる道がないと思ふ。私としては、その當時に於ける最も眞實ある紳士にしてまた最も氣高き騎士であつた此のドン・キホーテが嘘を吐いたと信ずることは不可能である。彼は假令箭を以て射殺されようとも嘘は吐かなかつたであらう。



然しながら他の一方に於いて私は、彼が前に縷述したやうな一切の事情を含んだ物語を述べ語つたのであるとも、またそんな短かい時間にあのやうな大變な複雜な譫言を捏ね上げることは出來なかつたとも思ふ。されば、この冒險は信を措き難いやうに見えようとも、それは私自身の過ちではない。それで私は、その虛妄なるか眞實なるかを確かめることなくして書き下したのである。讀者よ、君の智慧に依つて自らこれを裁決せよ。蓋しこれ以上のことをするのは、私の義務でもなければ私の手に合ふことでもないのである。尤も傳ふるところによれば、ドン・キホーテは臨終に際して、これを取り消したさうである。そして、これは自分の讀んだ樣々の物語の中に出る冒險と匹敵し符合すると思つたので作り出したのだと告白したさうである。』而して譯者は進んで次のやうに言つて居る――

從兄弟はサンチョーの大膽にもまたその主人の忍耐にも驚いた。そしてこの主人の上機嫌は、よし姫が魔術にかけられてゐたにもせよ、その戀人ドゥルシネア姫を見たので、その嬉しさから來てゐるのであると推斷した。何故といふに、もしさうでもなかつたら、サンチョーが主人に言うた言葉や口振りは正しく亂打に値ひしたからであつた。蓋しサンチョーがその主人に對する振舞は不謹愼であると從兄弟には思はれたのであつた。さて從兄弟はドン・キホーテに言つた、『ラ・マン

チャのドン・キホーテ様、私は貴方にお伴して旅をしましたのは非常に有益であつたと思ひます。それはこの旅の間に四つの利益があつたからです。第一は貴方とお近づきになつたこと、これは非常な仕合せであつたと思ひます。第二には、このモンテシノスの洞穴に隠されてゐる物、及びグアディアナ川やルイデラの湖の變身に就いて知りました事、これは私が近いうちに出さうとして居ります「スペインのオヴィッド」に役に立ちます。第三には、骨牌の古くから有ること、少くともシャーレマン時代から使はれてゐたとを發見した事です。それは、あのドゥランダルテがモンテシノスに話しかけられながら長い間沈默してゐた後で遂に目を覺まして「仕方がない、骨牌を切れ」と言うたと仰有つた貴方のお言葉から推定されるのです。この文句や口吻は魔術をかけられて居る間に學ぶ筈がありません。屹度魔術にかゝらん以前、上述のシャレーマン皇帝の時代に學んだのです。そしてこの證明は、私が今書いて居りますもう一つの本「ポリドレ。ヴァジルの古事物發明考補遺」に丁度よいものです。あのポリドレは、私がしようとしてゐるやうに、その書物中へ骨牌の發明といふ項を挿入しようなどとはつひぞ考へなんだらうと信じますからな。そして、殊にドゥランダルテどのゝやうな嚴肅な信憑すべき權威者を引用することの出來ますからには、實に其重要な要項となりませう。第四のものは、これまで人類に知られて居らなんだあのグアディアナ河の源を確かめたことなんです。』

『御尤もぢや、』とドン・キホーテは言つた、『しかし失禮ながら、もし貴方のそんな書物が仕合せよく出版の許可を得ましたら——そりや怪しいと思ひますがな——さうしたら誰れに獻呈せうと思ひなさるかの?』



『スペインには、そんな書物を獻ずることの出來る大名諸侯は大勢居られますよ。』と從兄弟は言つた。

『大勢でもありません、』とドン・キホーテは言つた、『と言うて別に獻ずる値打のある人が少いと言ふのではないが、たゞそんな書物を受けたくなかつたり、また著者の骨折りや禮儀に對してふさはしいと思はれる謝意を表する義務を厭うたりしますでの。拙者の知つて居る或る公爵は、その餘の貴族たちの埋合せをして居りますわい。いやそれどころか——もツと〳〵、若し遠慮なしに言うたら、氣高い多くの人々の胸にも妬みを起させませうぞ。しかしもつと都合の好い折に讓るとして、さて何處か其處らへ行つて今夜の宿りを見付けるとしませう。』

『これから餘り遠からぬ所に隱者の庵があります、』と從兄弟は言つた、『其處に一人の隱者が住んで居りますが、それはもと軍人ぢやと言ふことです。そして善良なキリスト敎徒で、なか〳〵

聰明な慈悲深い人ちやといふ評判です。その庵の傍にその人は自分の費用で小さい家を建てゝ居ります。しかし小さいとは言へ、數人のお客を泊めるには十分の廣さです。』

『その隱者は雞を飼うてをりませうかの、何うでござりましよ！』とサンチョーは訊ねた。

『雞を飼はん隱者はまアあるまい、』とドン・キホーテは言つた、『近頃の隱者はエヂプトの沙漠の隱者のやうではない。あの隱者たちは棧櫚の葉を身に纏ひ、土中の草木の根を食うて生きて居つた。しかし私がそれを褒めたからとて今日の隱者を貶すと思うてはならん。私の言はうとしてをることは今日の隱者の苦行は往時の克己峻嚴には及ばぬと言ふだけのことぢや。これに依つて直ちに今日の隱者は凡て値打ちがないといふことにはならん。少くとも私はさう思うて居る。極く惡う見積つても、善を裝ふ僞善者は大びらの罪人よりか害が少ないのぢや。』

丁度この時、彼等が立つてゐる場所へと近づいて來る一人の徒歩の男を見た。その男は、槍や戟を澤山載せた騾馬を鞭ちながら急ぎ足で進んで來た。彼等のところに來ると、その男は挨拶をして立ち止らずに行き過ぎた。ドン・キホーテはその男を呼びかけた、『ちよッと、お前さん。お前さんはその騾馬の足に無理な位急いで居るやうぢやの。』

『貴方樣、私ア立ち止つちやをられません、』とその男は言つた、『御覽の通りこゝに運んでをります。この戰の道具は、明日使ふものですからの。ぐず〳〵しちやあ居られませんのぢや。左樣なら。しかし、もし何の爲めにこれを運んで行くのか、それが知りたいと言はしやるなら、私は今夜その庵の先きの宿屋へ泊る積りぢやで、貴方がたも同じ道を行かしやるなら、あすこでお目にかゝりましよ。そして珍らしい話を聞かせましよ。も一度左樣なら。』そして彼は非常に足早やに騾馬を驅つて行つたので、ドン・キホーテは、一體その話すと言うた珍らしい話といふのは何んなのであるかと訊ねる暇もなかつた。稍穿鑿好きで何時も何か新らしい事が知りたくてもが〳〵して苦しんでゐるドン・キホーテのことであるから、直ぐ樣出發して從兄弟が泊りたいと思つてゐた庵に泊る代りに、その宿屋へ行つてその夜を過ごさうと決心した。そこで彼等は各々打ち乘つて三人ともその宿屋へと眞ッ直ぐに進んだ。そして日暮れ前にそこへ着いた。その途中で從兄弟はその庵へ立ち寄つて一杯飮んで行かうと言ひ出した。これを聞くや否やサンチョーはダップルの首をその方へと回した。そしてドン・キホーテも從兄弟も同じやうにした。しかしサンチョーの不運がさういふ都合にして置いたと見えて隱者は不在であつた。その庵に居る隱居の女弟子が彼等にさう言つたのである。彼等は百藥の長を吳れと言つた。その女弟子は、こゝにはそんな物はありません、けれど安い水で宜しければ喜んで差し上げませうと答へた。

『水が入るのなら、』とサンチョーは言つた、『道ばたに井戸があるから、何ぼでも飲まれるわい。あゝあのカマチョーさんの婚禮、ドン・ディエゴーさんの豪かなお家、私ア何遍これを思ひ出すか分りやせん！』

庵を出て、彼等は宿屋へと進んだ。そして少し行くと彼等の前の方に一人の若者が歩いてゐた。それは餘り急いで居なかつたので、間もなく彼等は追ひ付いた。若者はその肩の上に一口の劍を擔いでゐた。そしてその肩には衣類の包か束ねたのらしいものを投げ掛けてゐた。それは多分そのズボンか股引かと、上着と一二枚のシャツであつたらう。といふのは、その身體には、處々縮子のやうな飾りの附いた短い天絨羢のジャケツを着てシャツを出してゐたからである。その長靴下は絹であつた。そしてその靴は宮庭で穿く物のやうに先が尖つてゐた。年の頃は十八か十九であつたらう。彼は陽氣な顏付きの男で、何處から見ても活潑の性質のやうに見えた。そして旅の疲れを紛らす爲めに小唄を歌ひながら歩いてゐた。彼等がこの若者に追ひ付いた時に、丁度彼は一つの小唄を歌ひ終へるところであつた。從弟兄はその小唄を暗記したが、それはかうであつた

さうである——

戰に行くのも



金のないためよ、
あゝあ、金さへあつたなら
もッと氣の利いたこともせう。

眞ッ先にこの若者へ話しかけたのはドン・キホーテであつた。彼は言つた、『若いお方、大層輕さうな風で旅をなさるの。何處へ行かれますかい？もしお差し支なくば、何うか承りたいもので。』

これに對して若者は答へた、『暑さと貧乏の爲めにこんなに輕さうな風をして歩いて居ります。そして私は戰爭へ行くのです。』

『その暑さは誰れにも分りますが、何うして貧乏の爲めに？』とドン・キホーテは訊ねた。

『貴方、この包みの中には、このジャケツと對の天鵞絨のズボンを入れて居りますよ。』と若者は答へた、『もし道中でこれを着て行けば、向ふの市へ行つてから見苦しからぬ裝をすることが出來ません。それに私は向ふで別のを買ふほど金もありません。さういふわけや、冷しくする爲めやで、こんな風をして道を急ぎ、十二リーグ向ふに居ります歩兵隊に追ひ付かうとして居ります。そしてその隊へ入隊すれば、荷馬車の便がありますから、それに乘つて乘船地へ行けます。それ

はカルタゼナであらうといふ話です。私は宮廷の貧乏人に仕へるより國王陛下に仕へて從軍しようと思ふのです。』

『そして、君は幾らか手當を貰うたのですか？』と從兄弟は訊ねた。

『もし私がスペインの權門か、えらいお方かに仕へて居りましたら、手當を貰ふのは雜作もなかつたでせうがな。』と若者は答へた、『良い主人に仕へればそのお蔭で、召使ひ部屋から出て小隊長になるとか大隊長になるとか手厚い恩給を貰ふとかするのですからな。しかし私は不幸にして何時も獵官連や山師連に奉公しましたので、その待遇や給料は非常に慘めな少いもので、半分はカラーの洗濯賃に消えようといふのです。志願小姓が相當な手當らしいものを貰うたら、それこそ奇蹟でござりませう。』

『餘り立ち入つたお訊ねぢやが、』とドン・キホーテは訊ねた、『若い衆、貴方はずッと奉公して居る間中制服を貰はなんだのですかい？』

『二着だけ貰ひました、』と小姓は答へた、『しかし、人が宗教團體を脫する場合には、その宣言をする前にその人から僧職の着物を剝ぎ取つて元の着物を返して呉れますが、丁度その通り私の主人等も私の着物を返して呉れました。主人等は宮廷へ行つて仕事を終へて家へ歸ると直ぐその



制服を取り返すんです。それはほんの見えに借した着物ですからの。』

『何たるスピロルチェリア（副次の意）で！――或るイタリア人の言ふやうに。』とドン・キホーテは言つた、『しかしそれはさうでも、お前さんがそんな偉い志望を抱いて宮廷を立ち去つたからには、まア幸福ぢやと思ひなさるがよい。何故といふに、先づ第一に神に仕へ、その次ぎには國王に、本來の君主に仕へるよりも名譽あり利益あることは、この天下にありませんからの、殊に軍職に就けば私は幾度も言うた通り、たとへ文官ほどの金にはならんにしても、少くとも名譽は多く得られますからの。文は武よりも大きな家を建てたかも知れぬといふものゝ、やはり武に依つて建てられた家は文によつて建てられた物より何の位優つてをるか分りません。そして武の家には一種の光彩が附隨してをツて一切の物に優つて際立たせる。私がこれから言ふことをよう心に止めて置きなさい。これはお前さんが困難に出遭ふ時に非常に役にも立てば慰めにもなるからの。即ち何時ぶりかゝつて來ようも知れん災難のことを案じぬといふことぢや。一番惡う見積つても死ぬるのぢや。そしてもしそれが名譽の死でもあれば、寧ろ死にまさる幸福はないのぢやからの。あの勇敢なローマ皇帝ジュリアス・シーザーは、何んな死が最も良い死であらうかと人に訊ねられた。すると彼は、思ひ設けぬ死、卽ち突然豫想されずに來る死ぢやと答へた。これは異敎徒らしく、

眞の神を知らぬ者らしく答へたのではあるが、それでも私等が人情といふものを重んじて考へて見れば、ジュリアス・シーザーの言葉は正しかつたのぢや。たとへばお前さんが、大砲の丸か私の打撃かに依つて、第一の合戰か小闘で落命したとすると、それが何うなる？たゞ死ぬるだけでもう萬事は終るのぢや。そしてテレンスに從へば、軍人は生きて安全に逃げ延びようよりも戰うて死んだ方がよいのぢや。善良な軍人は、その上に立つて居る隊長や上官に服從すれば服從するほど名譽を得る。そしてお前さん、ようく覺えて居るがよい、軍人には麝香より煙硝の匂ひが却つて良いといふことを。また、もしやお前さんがこの名譽ある職に居つて考齡に達したとすれば、假令全身に手傷を受け蹉跌者になることはあるまい。而もそれは貧乏を以てしても決して減すことの出來ぬものぢや。殊に今日では、老朽兵や癈兵を扶助し慰藉する爲めに設備が出來て居るからの。一體こんな兵士等に對して、あの黒奴等が年を拾うて役に立たんやうになると釋放して厄介拂ひをするやうな風には遇すべきものでない。人々はそんな黒奴を自由にしてやるといふ口實の下に、その家から追ひ出して、饑餓の奴隷にするのぢや。この饑餓に逢うては到底、死なぬ限りは脫れる見込みがない。しかし今は多くを言ふまい、たゞこの馬に私の背後に乘つてそこの宿屋まで來なさい。あそこで私等と一緒に夕飯を食べて明日また旅をつゞけなさい。神樣がどうかお前さんの志しを嘉して早く向ふへ着かして下さるやうに。』



小姓はその宿屋の夕飯の招待には應じたけれども、馬に乘ることは受けなかつた。そしてこの處でサンチョーがかう獨り言を言うたさうである、『やれまア、この旦那樣としたことが。たツた今言はしツやれたやうな、あんな善いことをもうんと喋舌れるし、またあのモンテシノスの洞穴の話のやうにあんな辻褄の合はんことも自分で見たとて散々に喋舌れるとは、これが同じ人に出來ることかい？まア〳〵、何うなるか見て居らう。』

そして今や恰も日の暮れがたに、彼等は宿屋へ着いた。そしてドン・キホーテが何時ものやうに、これを城とは思はずに本當の宿屋と思つたのを見て、サンチョーは滿足せぬでもなかつた。宿屋に入ると直ぐドンキ・ホーテは亭主に向つて、かの槍や戟を携へてゐた男のことを訊ねた。すると、その男は廐に騾馬の世話をしに行つて居るといふことであつた。サンチョーと從兄弟も廐に行つて自分等の獸の世話をした。そしてロシナンテには、その廐の最上の秣槽や最上の場所を與へたのであつた。

## 第二十五章　には驢馬の鳴き聲の冒險、傀儡師のをかしき冒險、並びに占ひ猿の記憶すべき占ひが記載されてある。

ドン・キホーテがかの武器を携へてゐた男の約束した珍しい事柄を聞き取つたまでは、諺にいふ通り、彼の麵麭は燒けなかつたのである。彼は、その男が居ると亭主から聞いたところへ搜しに行つた。すると見付かつたので、途中で自分が訊ねたことに對する答へとして兎に角言ふだけの事を言うて呉れと賴んだ。『私の不思議な物語は、立ち話ではいけんから、もッと緩くりせにやいけませんよ。』とその男は言つた、『貴方樣、まア獸に飼料をやらせて下され。それから貴方の吃驚なさるやうな話を致しましよ。』

『そんな事で引つ張つてほいかん、』とドン・キホーテはその男の爲めに大麥を篩うたり槽秣を洗つたりしてやつた。それほどそして、ドン・キホーテはその男の爲めに大麥を篩うたり槽秣を洗つたりしてやつた。それほど下手に出て來たのでその男は、何うしても彼の求めることを愛想よく話さねばならぬ氣がした。

そこでその男は、とあるベンチに腰を卸して、ドン・キホーテをその側に坐らせ、從兄弟や小姓やサンチョー・パンザや亭主などを、議員とも聽衆ともして、やがて次のやうに語り出した——

『これはこの宿屋から四リーグ半ある、或る村での出來事でござりますがの。そこの或る村役人は、家に使うてゐた下女の善からぬ姦計で（それを話せば餘り長うなりますんで）驢馬を一疋失くしましたのぢや。そこで村役人は手を盡してそれを搜しましたが、少しも手懸りがありませんだ。話によるとその驢馬が失くなつてから二週間も經つてからのこと、その驢馬を失うた村役人が廣市場に立つて居りますとな、やッぱり同じ村の別の役人がやつて來て、かう申しましたのぢや、「良いことを聞かせるから奢んなされ。貴方の驢馬は見つかりましたよ」。「それは〳〵、おごりますとも、たんと奢りましよ。けれどもア一體何處で見付かりましたんぢや？」と一方の人は言ひました。見付けた人は「林の中でぢや、私は今朝荷鞍も何にもつけずにをるのを見ましたのぢや。そしてまア、見るも痛ましいほど瘦て居りました。私は驢馬を驅つて來て貴方のところへ伴れて行かうとしましたがな、あれはもう非常に氣荒うなつて人怖をして、私が近寄ると林の一番茂つた方へ逃げ込んでしまうた。もし貴文さへよけりや、二人で行つて搜しませう。先づこの牝驢馬を家へ置いてから直ぐ行きますからの。」と申しました。驢馬の持ち主は、「そりやほんとに御親切

様ぢや。私はあれの代だけおごりますよ。」と申しました。この事件をすッかり知つて居る人たちの話すのも、殘らずこんな事情です。またその話しぶりも今私が話すのとそッくりですわい。それはさうとして、この二人の村役人は、徒歩で一緒にその林へと出掛けました。そしてその驢馬の居る場所と思はれるところへ參りましたが、一向に見付かりませんなんだ。また如何に捜しても何處にも見當りませんなんだ。そこで、驢馬の影さへ見えんので、先きにそれを見た方の村役人は相手にかう申しました、「もし貴方、私にうまい考へが浮びましたよ、これで行きや、こんな林は思か、たとへ地の底へ藏されて居らうとも、屹度あの驢馬は見つかるに違ひない、そりやかうです、私は本物のやうに驢馬の鳴き聲が出來ますんでな、それで貴方が少しでも出來なければ、もう事は成就したも同樣ぢや。」するとも一人の村役人は申しました、「少しでもと言ひなさるかい？大丈夫私ア誰れにでも本物の驢馬にでも負けはしませんぞ。」すると片方は、「そりや今に分りましよ。つまり私の考へはかうですよ——貴方は、この林の一方の側を行き私はもう一方の側を行つて、林をぐるりと廻ることにします。そして仕切りなしに、貴方が鳴き聲を出せばまた私が出す。さうすると何うしても驢馬はその聲を聞きつけて、この林に居りさへすればきつと受け答へをせずにやをりません。」これに對してその驢馬の持ち主は答へました、「なアる程なア、こりや結構な思ひ付



きぢや、貴方はえらい天才ぢや。」かう申し合せて二人は別れました。やがてするうちに、ぶと二人は一時に鳴き聲を出しました。すると二人は就れも相手の鳴き聲に欺されて、とう〳〵驢馬が出て來たのぢやと思うて、走つて見に行きました。互に姿が見えて來たので、失うた方の男が言ひました、「貴方、今鳴いたのは私の驢馬でないといふ筈はないですがの？」。すると相手は、いやあれは私ですよ。」驢馬の持ち主はかう申しました、「それぢやほんとに、鳴き聲だけは、貴方と驢馬との間にや毛ほどの相違もありまんの。私は生れてからこれほど本物らしいのは、見たことも聞いたこともござりませんわい。」すると、この工夫を立てた方の人は「そんな褒め言葉やお世辭は私によりか貴方のものですよ。ほんとに貴方は最上この上なしの驢馬にも優る聲を出しなさつたわい、貴方のは調子が深うて、聲にゆとりがあつて甲高うて、その抑揚はしッかりして早い。實際私は負けたと白狀しますよ。そして譽の冠は貴方に讓ります。この珍らしい貴方の藝には一本參りました。」すると持ち主は「それぢやこれから自分をもッと高う積つて一つ優れたところを持て居るからにや、自分にも取り柄があると思ひましよ。平生自分ながら驢馬の鳴き聲が上手ぢやとは思うて居りましたが、貴方の言はれる程申し分のない上手ぢやとはつひぞ思うたことがありませなんだからの。」すると相手は「もう一つ申して置きますがな、世にはだん〳〵無駄になつ

て行く稀代の才能がありますのぢや。そしてその才能の用法を知らん人たちに、それが授けられるといふやうな譯ですよ。」すると驢馬の持ち主は言ひました、「私等の才能は、今のこんな場合でもなけりや、何の役にも立ちやしませんよ。こんな時にでも役に立たせて貰ひたいものぢや。」さう言うて二人は別れて、またもや鳴き出しました。しかし仕切りなしに互に騙されて、またもや二人はでくはしました。そこで二人は合ひ圖として、自分等と驢馬とを聞き分ける爲めに、交る〳〵二た聲づゝ鳴き聲を出すことにしましたが、その失くなつた驢馬はとう〳〵返事もせねば影も見せませんら林を一廻りしてしまひましたが、だ。その哀な不運な驢馬に何うして返事が出來ませう？林の一番茂みのところで、狼に食ひ殺されてをるのを見つけましたもの。これを見付けるとその持ち主は申しました、「私はこの驢馬が何故返事をせんぢやろと不思議に思うてをりましたよ。もし死んでさへ居らにや、私等の聲を聞けば屹度鳴き聲を出しましたらうからの、さうでなきやこれは驢馬ぢやないのぢや。けれど、なア貴方、貴方があれほど上手に鳴きなさるのを聞かして貰うたから、この驢馬を捜し廻つた骨折にや十分の報ひがあつたと私ア思ひますよ、たとへ驢馬は死んで居つてもな。」すると相手は貴方そりや私こそさうぢや。和尚が上手に歌へば、小僧も餘り後れは取らんですからの。」と申しまし



た。そこで二人は、懲ぎこんで聲を嗄らして村へ歸りました。村へ歸ると友達や近所の人や知己にこの驢馬捜しで起つた事柄を話して、二人は互に片方の鳴き聲のうまいことを褒めそやして廻りました。この物語の一部始終はその近在の村々へ隈なく知れ渡りました。そこで何時も眠るこのない惡魔奴は行き着く先に喧嘩や仲違ひを撒き散らしたり種もないところから災難を産ませ諍をさせるのが好きなので他の村の人等に、私等の村の者を見さへすれば、丁度あの村役人の鳴き聲でも嘲るやうに、やたらに驢馬の鳴き聲をやらせますのぢや。そのうちに兒ども等がこれをやるやうになりました。かうなればもう地獄のありだけの惡魔の手や口にかゝつたのも同じことですよ。そして驢馬の鳴き聲は村から村へと擴がつて行つて、その鳴き聲を出す村の人等は丁度白と黒とが目立つやうな風に目立つて來ました。そしてこの不仕合せな申戲から駒が出て、嘲られた方は、嘲つた方に向うて、打ち物取つて戰をしかけるところまで進みました。かうなればもう王樣も飛車樣も恐れも恥もあつたもんぢやござりません。たしか明日か明後日かに、私等の村詰り鳴き聲を出す村の人等は、二リーグ離れてをる村の奴等と戰をする筈になつて居ります。それで、その用意を十分にしようとて、私は御覽なさつたやうな槍や戟を持つて來たのでござります。これが、お話しませうと申した珍しい話でござります

が、これが珍らしうないと仰有れば、もう外には何にもござりません。』かう言つてその律義な男は物語を終つた。

丁度この時宿屋の門から一人の男が入つて來た。それは長襪からヅボンから胴着まですッかり羚羊の柔革を着けてゐた。その男は大聲で言つた、『御亭主、明き部屋がありますかい？今丁度、占猿と「メリセンドラの救ひ」の人形がやつて來ますがの。』

『これはまア！』と亭主は言つた、『ペドローの親方ぢやないかい！今夜はえらいことぢやな！』私は記すのを忘れたが、この ペドロー親方は、その左の眼とその側の頰の殆と半分を綠色の琥珀織の布で蔽うてゐた。これはその側一面が何かで痛んでをる證據であつた。

『さ、何うぞお入りなされ、ペドロー親方、』と亭主は續けた、『けれどその猿や人形は何處にありますい。私にや見えませんがの。』

『あれ等はぢきそこに居りますがな、』と羚羊の韈を着けた男は言つた、『けれど、先づ私だけ部屋があるか訊ねにやつて來ましたんぢや。』

『ペドロー親方の爲めになら、たとへアルヴの公爵樣でも追ッ拂うて部屋を明けさしよわい。』と亭主は言つた、『猿や人形を伴れて來なされ。今夜は丁度、あの人形や猿の賢いのを見て御祝儀を



呉れさうなお客も泊つてござるからの。』

『そりや何よりのことぢや。』と布を當てゐる男は言つた、『見料はずつと負けませう。今夜の宿賃にさへなれば結構ぢや。それぢやちよいと行つて、猿や人形と一緒に車で急いで來ますから。』とさう言つて、その男は宿屋を出て行つた。

ドン・キホーテは直ぐ樣、このペドロー親方の何者であるか、また彼の携へて居る人形や猿はどんな物であるかを亭主に訊ねた。それに對して亭主は答へた、『あれはもうしばらく以前から此マンチヤ・デ・アラゴンを巡業して居ります名高い人形使ひで、あの名高いドン・ガイフエロスが作つた「メリセンドラの救ひ」といふ人形芝居を觀せて居りますのぢや。それはもう長い年月こゝらでは見たこともないやうな好い物語良い狂言の一つでござります。ペドローはまた非常に才のある猿を伴れて居りますが、それがまた猿にも人間にもつひぞ例のない程の賢こさでござります。もし貴方樣がその猿に何かお訊ねなさると猿はそれをじッと聽いて居りましてな。それから主人の肩へ飛び上ります。そして主人の耳にぴたと喰つ付いてその返事を囁きますと、ペドローがそれを述べ立てますのぢや。この猿は將來のことよりも前のことを餘計に申します。どんな事にでも百發百中とは行き兼ねますが大抵は餘り外れません、そこで猿の中にや惡魔でも宿つて居るか

と思はれる位ですよ。ペドローは、その猿が返事さへすれば、つまりその猿が主人の耳に囁いたのを主人が取りつぎさへすれば、その度に二リールづゝ取ります。そこでこのペドロー親方は非常に金持と思はれて居りますのぢや。ペドローはイタリー人の言ふやうに「勇ましい男」でおもしろい人間でこの上もない面白い暮しをして居ります。口の先は六人分以上利き、飲むことは十二人分以上やります。皆その舌と猿と人形とで儲けますのぢや。』

ペドロー親方はやがて歸つて來た。その後から人形や猿が車で續いた。それは多きな猿で尻尾は無く、臀は毛氈のやうに禿てゐたが、しかし醜い容貌ではなかつた。ドン・キホーテは猿を見るや否や訊ねた、『易者さん、私はどんな魚を捕へるか、またこれからの運氣はどうなるか、分りますかい？さア、こゝに二リールありますわい。』そしてサンチョーに、その錢をペドロー親方に與へよと命じた。しかしペドローは猿に代つて答へた、『旦那、この畜生は未來のことに就いちや返事もせねば知らせもしません。過ぎた事なら少しは知つて居ります。また今のことも幾らかは。』

『へーん、』とサンチョーは言つた、『自分の過ぎた事を言うて呉れたかて、一文でもやるものかい。自分のことア自分よりよう知ッとる者があるかい？私の知つて居ることを言うて貰うのに錢を拂うのはそれこそ大馬鹿ぢや。けれどな、今のことも知ッとると言ふなら、さア、私も二リ



ール出しますぞい。天下一のお猿さん、私の女房のテレサ・パンザは今何をして居るか、また何うして氣を紛らせて居るか言うて見なさい。』

ペドロー親方はその金を取るのを拒んで言つた、『先づその御用の濟まぬうちに、先き拂ひは戴きません。』そこで彼はその右の手で左の肩を二つ三つ敲いた。すると猿は一跳びにそこへ上つてその口を主人の耳にくッつけながら齒を忙しくがち〳〵と音させた。そして、人が使徒信經を誦む間位それを續けると、また一跳びに地面へ降りた。それと同時にペドロー親方は大急ぎでドン・キホーテの前に走つて行つて跪づいた。そして彼の兩脚を抱き上げつゝ喚び立てた、『私はハーキュリーズの二本の柱を抱くやうに、このお脚を抱きますぞよ。あゝ、あれほど長く世に忘られて居りましたあの武者修業を復興なされたお方樣！あゝ如何に讃めても讃め足りぬラ・マンチャのドン・キホーテ樣。氣弱い者の勇氣、よろける者の支棒、倒れる者の腕、あらゆる不仕合せな者の杖柱！』

ドン・キホーテは惚ッとした。サンチョーは吃驚仰天した。從兄弟は面喰つた。小姓は魂消げ、鳴き聲村の男は口をあんぐりさせ、亭主は慌てた。つまり、誰れも彼も、この人形使ひの言葉を聞いて吃驚したのである。人形使ひは更に言葉をつゞけた、『それからお前さん、えらいサンチョ

！・バンザさん。天下無雙の從士さん。そして天下無雙の騎士に仕へる從士さん！まア お喜びなされ。と申すのは。テレサのお上さんは達者で、そして丁度今は麻を扱いでござるところぢや、それにまた確かに、その左の手には上等の葡萄酒の入つて居る出口の缺けた壺を持つてござる。それに依つて仕事の疲れを慰めてござるのぢや。』

『そりや如何にもありさうなこッちや、』とサンチョーは言つた、『彼女は仕合せ者ぢやな。彼女がやきもちさへ焼かにや、私はあの女巨人のアンダンドナとても換へはしませんぞい。あのアンダンドナは、私の旦那の話ぢやア非常に賢いえらい女ぢやッたさうながの。あのテレサ奴はな、たとへ手前の髪の毛を賣つてでも手前の慾を滿足させるやうな手合の女でござりますよ。』

『さても〳〵、』とドン・キホーテは言つた、『多く書を讀み多くの旅をすれば、いろ〳〵樣々なことを見たり知つたりするものぢや。如何に說き聞かさるればとて、今拙者のこの眼で見たやうなこんな神通力の猿がこの世に在らうとはとても信じられんことぢやからの。拙者こそは、このえらい畜類が名ざして言うたそのラ・マンチャのドン・キホーテぢや。尤もその讃め方は拙者には分に過ぎたがの。しかし、拙者は何時も凡ての人に善を爲し何人にも害を加へんやうな性質を、優しい同情深い心を天から授けられたことを有り難く思うて居る。』



『もし私に金があつたら、』と小姓は言つた、『私のこの道中の間に何んなことが起るか、このお猿さんに訊ねたいがな。』

もうこの時はドン・キホーテの足許から起き上つてゐたペドロー親方は、これに對して答へた、『先きにも申した通り、この小さい畜生は、未來のことにや返答をしませんのぢや。しかし、もし返事をするなら、金があらうとなからうと構やしません。こゝにござるドン・キホーテ樣へお禮の積りで、どんな儲けも棒にふりますからの、それは兎に角、御約束のことでもあるし、ドン・キホーテ樣の御笑ひぐさに、操り人形を組み立てゝ、宿屋にござる皆さんにたゞで御覽に入れませう。』これを聞くや否や亭主は非常に喜んで、その舞臺を据ゑる場所をかれこれと差し圖した。それは卽座に出來上つた。

ドン・キホーテはその猿の占を餘り快く思つてはゐなかつた。それは、過去のことにせよ、未來のことにせよ猿などに占へる筈なものでないと思つてゐたからであつた。そこで、ペドロー親方が操り人形を据ゑ付けてゐる間に、彼はサンチョーを伴れて廐の隅へ退き、其處で誰れにも洩れ聞かれずに、サンチョーにかう言つた、『これ〳〵サンチョーよ私はの、あの猿の並はづれな智慧のことを眞面目に考へて居つたがの。屹度これはあの主人のペドロー親方が直接にか暗々の

裡にか惡魔の援助を受けよるに違ひないと判斷したのぢや。』

『もし惡魔から直接に來た便所なら、』とサンチョーは言つた、『そりや屹度ほんとに汚い便所でござりましよ。けれど、そんな便所を貰うてペドロー親方は何にしませうぞい？』

『お前は私の言ふことが分らんのぢや、サンチョーとドン・キホーテは言つた、『私の言ふのはの、あのペドローが屹度惡魔と相談して、あんな力を猿に吹き込ませて居るに相違ないといふのぢや。あゝいふ風にして暮しの料を儲けて行つて、金持ちになつてしまへば、惡魔に自分の魂を渡すのぢや。それこそ人間の敵たる惡魔の欲しがるものぢや。あの猿が過去と現在のことだけしか答へんのを見れば、惡魔の智惠もやはりそれより上には屆かんので、何うしても今のやうに信ぜぬわけに行かぬ。惡魔が未來のことを知るのは唯推量によるだけぢや、それも何時もさうは行かぬからの。前以て時と時節を知ることは、神のみに限られて居ることぢや。神には過去もなければ未來もなく、凡てが現在ぢや。これがさうとすれば、あの猿が、惡魔の靈によつて物を言ひ居ることは明白ぢや。それで拙者は今迄ようあの男が宗教局へ訴へられて審問を受け、その占をして居る惡魔の力を引き離されずに居つたことぢやと驚くわい。何故といふに、あの猿が占者でないのは確かなことぢやからの。また猿にせよ親方にせよ、俗に「お告げのトひ」と言うて居るあの



算木を置きもせねばその置き方も知らんのぢや。あのトひはもうこのスペイン國では、下女でも小姓でも老耄の補靴工でも、丁度地べたから骨牌のジヤックを拾ひ取る位に、手もなく立てゝ見る程流行つて來たので、そんな奴等の無學文盲や嘘僞りの爲めにこの驚くべき學問上の眞理も臺なしになつて來よる。私の知つて居る婦人が、自分の可愛がつて居る狆のことで、その算木を立てる男に訊ねたのぢや、この狆は仔を孕みませうか、そして產めませうか、また產まれればその仔は何疋で何んな毛色のでありませうかと。これに對してその易者先生は、算木を立てゝからかう答へた、この狆は孕みます、そしてその仔は三疋で、一疋は綠、一疋は肉色、一疋は斑色ぢや。但しこれはこの狆が晝なり夜なり十一時と十二時との間に身籠つて、そしてその日が月曜日か土曜日かであつたときのことぢやと。ところがそれから二日後に、その狆は食ひ過ぎで死んでしまうたのぢや。すると、その易者先生は、そんな易者が大抵持つて居るやうにこの上ない偉い占星家ぢやといふ評判をその地方一圓に轟かしたといふことぢや。』

『それでも、』とサンチョーは言つた、『あのモンテシノスの洞穴で貴方樣に降りかゝつた事が本當であるかないか、それをペドローに、あの猿に訊ねさせて見なさつたらようござりませうがな、私やどうもあんな事ア嘘僞りか、たか〳〵夢物語と

しか思はれませんからの。』

『そりや、さうかも知れん。』とドン・キホーテは答へた、『しかし、お前の言ふやうにして見よう。尤も私もあれに就ては疑はしいと思ふがの。』

丁度この時ペドローは、最早見世物の用意が出來ましたから、見る値打ちあるもの故見にお出でなされと言はうと思つて、ドン・キホーテを捜しに來た。ドンキホーテは自分の望みを話して、かのモンテシノスの洞穴の中で自分の身に降りかゝつた事は夢であつたか、事實であつたか自分には何れとも取られるので、直ぐ樣その實否を猿に訊ねて呉れよと言つた。そこでペドロー親方は返事はせずに猿を伴れに行つた。そしてその猿をドン・キホーテとサンチョーとの前に置いてから言つた、『お猿さん、これこゝにござる旦那がな、モンテシノス洞穴といふ洞穴の中でこのお方の身に降りかゝつた事が本當であつたか嘘であつたかとお訊ねなさるのぢや。』ペドローが何時もの合圖をすると、猿は彼の左の肩へ跳び上つて、その耳へ呟くやうに見えた。するとペドロー親方は直ぐに言つた、『その洞穴の中で起つたことは、半分は本當で半分は嘘であつたと此の猿は申します。そしてこの御尋ねに就いてはそれだけしか分らんと申します。しかし、貴方樣がもツと餘計に聞きたいとのお望みなら、この次の金曜日になれば訊かれるだけの事を御答へ申しませう。唯今はもうその神通力が疲れて居りますので、金曜日にならねば回復せぬと申して居りますから。』



『それ旦那樣、』とサンチョーは言つた、『あの洞穴の冒險に就いて貴方樣の仰有つたことアたゝへ半分でも本當のことゝは思はれんと、私が言はなんだこッてございましすかい？』

『だん〳〵するうちに分るであらうぞ、サンチョー。』とドン・キホーテは答へた、『一切の物を示す「時」は、何物をも日の光の中へ引き出さずには置かぬのぢや。たとへ地の底に埋められて居らうとも。しかし今はこんな事は措かう。さあペドロー親方の人形を見に行かうよ。屹度何か珍らしいものがあるに違ひない。』

『何がですかい！』とペドロー親方は言つた、『私の見世物にや六千からの珍らしいものがありますわい。ドン・キホーテ樣、今ではこの世界の最上の見世物の一つぢやと申してもよいのですよ。しかし「我を信ぜずともその業を信ぜよ」ぢや。そろ〳〵その業を初めませうかな。もう大分遲うなりましたから。そして業や言葉や見せ場が大分ありますからの。』

ドン・キホーテとサンチョーとは彼に從つてその人形芝居が既に据ゑ付けられ幕を上げられてゐる所へ行つた。その周りには灯の點いた小蠟燭がずらりと立つてゐたので、美しく明るく見え

た。彼等がそこへやつて來ると、ペドロー親方はその舞臺の内側へ身を隱した。その操り人形を使ふのが彼の仕事であつたからである。そして彼の傭人の小僧が一人、前面に立つて辯士の役を勤め、手に持つてゐる鞭で其處に出て來る人形を指さしつゝ、演ぜられる所作を說明した、そこでこの宿屋に居合せた人々は殘らずその見せ物の前に並んだ。そのうちの或る者は立つてゐたが、ドン・キホーテやサンチョーや小姓や從兄弟等は最上の席を占めた。辯士は、次の章を讀むか聞くかする人の見たり聞いたりすることを喋舌り出した。



## 第二十六章　には傀儡師のをかしき冒險の續き、並に眞に結構なるいろ〳〵の事ども。

テイール（最古の町）フエニシア人もトロイ人も、すべて寂としてゐた。卽ちこの操り人形の見物人等は皆、この不思議な物語の說明者の唇をのみ片唾を呑んで見守つてゐたのである。丁度その時、舞臺の内側から太鼓や喇叭の響きが聞え、大砲が鳴つた。これ等の響きは間もなく鎭まつて、やがて辯士の小僧は聲を張り上げて言ひ出した、『皆樣、こゝに御覽に入れまする實錄物語は、一々フランスの歷史とスペインの俗謠から取つたものでござります。このスペインの俗謠は、何方の口にも上りまして、町を行く童の口にも上つてをりまする。その題目と致しましては、あのドン・ガイフエロス殿がその奧方メリセンドラ樣を救ひ出されることでござりまして、その時奧方はスペイン國のサンスエニヤの市、つまり唯今ではサラゴッサと申す所がその當時は左樣に呼ばれて居りましたが、其處でムーア人の手に捕はれてお出でなされました。さて、そちらの方に御覽になる

のはドン・ガイフェロス様が雙六の遊びに耽つてござる有様で、それは丁度——

今はメリサンドラのことも忘れつゝ

ドン・ガイフェロスは雙六を弄びつゝ座し給ふ。

と申す歌の通りでございます。そしてそこに、頭には冠を被り、手には笏を持つて出て來られまするお方は、これこそメリセンドラ様の父君といふことに成つて居りまするシャーレマン皇帝に渡らせられまする。このお方は今、御自分の婿君の無頓着を御覽に成り御立腹なされて叱りにお出でになりました。さて御覽なされ、皇帝は荒々しく力を入れてドン・ガイフェロス殿をお叱りになりまする。その見幕は今にもその笏で五つ六つ敲き付け給ふかと思はれませう。また全く皇帝陛下はさうなされた、しかも手嚴しく御打擲なされたと申す作者もありまする。皇帝はドン・ガイフェロス様が、その奥方をお救ひ出しなさらぬ廉により御名譽も危からんとしたゝかお叱り置きになりました揚げ句に

朕は言葉を盡くして言へり。いざや心せよ。

と仰せあつたと申しまする。さア御覽なされ。憤りの餘りに、机も雙六盤も迴か彼方に投げ出して、大憤激の樣子。そうれ、御覽なされ。



急ぎで甲冑をとお呼び立てになりまする。そしてその從兄君ドン・ローランド樣に御祕藏のドゥリンダナの劍を拜借したいと申されます。けれどドン・ローランド樣は、この一大危急の場合拙者もお仲致しませうとて、劍はお貸しになりません。しかしドン・ガイフェロス殿は、大膽の勇士殊に御立腹中でござりますから、それを御承知になりません。そして、拙者の妻を救ひ出すには拙者一人で十分ぢや、たとへ妻は地の底深く囚へられて居らうともと仰有つて、甲冑を着ける爲めに退いて、卽座に御發足なされます。さて皆樣、何うぞそちらの方に見えます櫓に御眼を向けられませ。それはサラゴッサ、卽ち唯今ではアルジャフェリアと申す城廓の一つの櫓といふつもりでござります。その櫓の露臺の上に、ムーア人風の身裝をして現はれました御婦人こそは、類ひなきメリセンドラ樣でござります。この方は度々このところへ登られて、遙かフランス路を眺めやりつゝ、バリを想ひ良人を想うてその囚はれのもの憂さを露さうとなされます。さて、御覽なされ。新規の事が唯今不意に起つて參りまする。大方こんなことはとてもなかつたらうと思はれます。それ、メリサンドラ樣の背後の方から、その唇へ指を當てゝそッと忍びやかに近づいて參りまする一人のムーア人が見えませぬか。それ、その男がメリサンドラ樣の唇へ自分の唇を押し付けるところ、また姫の方では大急ぎで唾を吐いて、その白い肌着の袖で唇を拭きなさるところ、

また姫がその身の上を歎きながら、わが身の咎でもあるやうに御自身の美しい髪を引き裂らるゝところを御覽なされ。さてまた、その廻廊に立つて居りまする嚴丈なムーア人は、これこそサンスエニヤのマルシリオ王でござります。この方は、あのムーア人の無禮を見屆けられましたのでござります。』

（たとへわが身よりの者で。またお氣に入りの者ではありましたが）、卽座に捕縛させて、二百の笞刑に處し、剩へその風習に從つて、その前には泣き男どもを背後には警官を附けまして、町を引きずり廻れよと命ぜられます。さて此處には、今その犯罪があつたと思ふばかりに、早くも今の宣告を執行するとて人々が出て參りまする。ムーア人の中では、私どもの國でのやうに、公訴もなければ留置もないからでござります。』

こゝでドン・キホーテは叫び出した、『小僧よ、小僧よ。その物語を眞ツ直ぐに進めい。そんなにうね〳〵廻り道をするな。事實を明瞭にするには、證據が十分に必要なのぢや。』するとペドローが一番ぢや。歌はそのまゝに歌うて、その間に合の手を入れんやうにせい。それ親方は內側から言つた、『小僧、その臺本の通りに讀んで、その旦那樣の仰有るやうにせい。それ用過ぎて味を打ち壞してしまふからの。』

『さうしましよう。』と小僧は言つた。そして言葉をつゞけた、『此處に馬に乘つて、ガスコニー人



の上着を着て居りますのは、これこそドン・ガイフェロスその人でござります。この人の奧方は、もはや彼のいやらしいムーア人の無禮に仕返しをして、以前にも增した靜かな穩かな顏つきでその櫓の露臺から、わが良人を見て居られますが、それとは御氣が附かれません。そしてわが良人をどこかの旅人と思うて話しかけます。この二人の間に交されました言葉は——

騎士どのよ、もしフランスへ行かるゝならば、

あゝ！ガイフェロスを尋ねて——

といふ歌に歌はれて居りますが、あまり長うなると皆樣御退屈でござりますから、此處にその歌は繰返しません。兎に角ドン・ガイフェロス殿は素性をお打ち明けになりまする。するとメリセンドラ樣はこの通りわが良人ぢやとお氣附きになつて嬉しさうな樣子をなされます。それのみか御覽の通り奧方はその懷しい良人の馬の背中へ乘らうとて露臺の上から身體を下げなされます。しかし悲しや！お可哀さうに奧方は、その下袴の裾を露臺の柵に引ッ掛けて、地面にはとゞかず宙にぶら下つてしまはれる。けれども御覽なされ、御慈深い神樣は、困窮の絕頂に當りましていかにお助けを下さりますか。ドン・ガイフェロス殿は進まれて、奧方の御立派な下袴が裂けるのも構はずに、その身體を摑んで無理に引き卸されまする。唯ひと引きして奧方を御自分の馬の後方

に打ち乗せ、男のやうに打ち跨らせ、メリセンドラ様がかやうな乗り方には慣れなさらぬところから、落馬せぬやうに御自分の頸の圍りにその兩手を卷かせ、その手を胸の上で組み合はさせ、しつかり私にしがみ付いて居れよと申されます。さて御覽なされ。馬はその殿様や奥様を乘せてこの勇ましい美しい乘り手を喜ぶやうに嘶きます。御覽なされ。二人の方は馬の頭を回らして、この市を立ち去られ、よろこび勇んでパリへと向はれます。あゝ類ひなき眞の戀の戀人がたよ、さらば御無事で！何うか貴方樣方は、戀ひ焦れてござる御本國へ恙なく御到着になりますやうに。貴方樣方の樂しい旅路に何の故障も起りませんやうに。何うか、御親族やお友だちの中へ歸られて、殘る御生涯を平和に穩かにお過ごしなさりますやうに——その御生涯こそかのネストル（ホーマーのオデッシイに出る人、ギリシア方にて最も高齡にして最も賢明なりし人）の生涯のやうにありますやうに。』

こゝでペドロー親方は再ひ呼び立てゝ言つた、『簡單に〳〵！小僧！そんなおまけは止せやい。氣取つちやいかんぞ。』

辯士は返事をせずに續けた、『何一つ見落さんやうな閑人の眼が澤山ござりましたので、このメリセンドラが櫓から降りて馬へ乘つたことを、マルシオ王へ通告する者がありました。そこで王は卽座に警鐘を鳴らせよと命じました。御覽なされ、この騷ぎは何うでござります。殘らずの寺

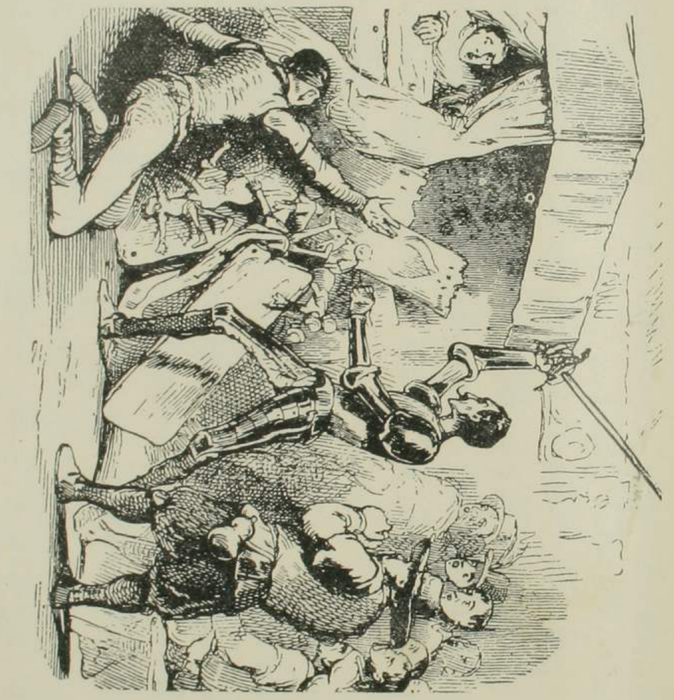


の鐘樓が撞き出す鐘の音に町中は鳴り轟いて居りまする。』

これを聞いてドン・キホーテは言つた、『いや、いや、この鐘の點は、ペドロー親方の大變な粗漏ぢや。何故といふに、ムーア人の間では、鐘は用ゐられんからぢや。たゞ銅胴の太鼓や、私等の方で使ふクラリオンのやうな小さい喇叭だけぢや。サンスエニヤでそんな鐘を鳴らすのは勿論非常な不條理ぢや。』

これを聞いてペドロー親方は鐘を鳴らすのを止めた、そして言つた、『ドン・キホーテ樣、小さいことは吟味立をなされますな。とても及ばぬ完全無缺の頂點まで持つて行けいとは仰有りますな。私等の周圍には大方毎日のやうに、粗漏不條理だらけの澤山の狂言を興行して居るぢやござりませんか。それでもやツぱり上景氣で通つて、喝采して見て頂くばかりか、實に大賞讃を博して居りますのぢや。小僧よ、先きへ進め。構ふことはない。私の財布を充たす分にや、私の芝居にたとへ太陽の黑點ほどの澤山の粗漏があらうとも構ふことアない。』

『それも道理ぢや、』とドン・キホーテは言つた。そこで小僧は續けて行つた、『御覽なされ、この誠心あつい二人の戀人等を追ひかけて、この町から雲霞のやうな騎馬武者の繰り出すのを。あの凄じい喇叭の聲きは、あの角笛の音は。あの太皷小皷を打つ音は、この軍勢はあの二人に追ひ附い



て、馬の尻にふん縛つて伴れ戻りはせんかと心配でなりません。さうなつたら物凄しい有様でござりましよ。』

しかしドン・キホーテは、かくの如きムーアの大軍勢を見かくの如き物音を聞いて、この落人たちを援けるこそ正當であると思つた。そこで突ッ立ち上つて大音聲に叫んだ、『やア～、拙者の生命ある限りは、拙者の面前でドン・ガイフェロスともいはれる程の高名の騎士、勇氣ある戀男に無禮をさせては置かぬぞよ。止れ！生れ損なひの暴徒ども。この人の後を蹤けるな、追ッ掛けるな。それを聞かずば、この拙者と戰場で見參せいッ！』言ふより早く彼はその佩劍を拔き放ち、一躍してその舞臺に近づき、未曾有の迅速と憤怒を以て、そのムーア人の人形の軍勢の上に劍の雨を浴せかけた。叩き付けられるもあれば頸を斬られるもあり、これは四肢を斷たれ彼は打ち壞された。その雨霰と打ちおろした中にも。殊に一と擊は、もしペドロー親方が身を屈め身を縮めてそれを避けなんでならば、彼の頭は宛ら扁桃の練物で拵らへた物のやうに折ぎ取られたに違ひなかつたのである。ペドロー親方は呶鳴りつゞけた、『止めなされ！ドン・キホーテ樣！貴方が薙ぎ倒し斬り殺してござるのは、本當のムーア人ぢやない、ほんの小さな厚紙の人形ぢやのに、それが分りませんかい？まア～～こりや何うしたこツちや！――貴方は私の身代を殘らず臺なしに

してしまうたわい！』しかしそれでも尚ドン・キホーテはその立て續けの打ち込み、撫で切り、拜み撃ち、返し撃ちを雨霰と浴びせかけた。そして遂に、信條の文言を二度繰り返すよりも短かい間に、舞臺全部を倒してしまつた。それと共にその小道具も人形も殘らず破壞され粉碎された。マルシリオ王は重傷を負ひ、シャーレマン皇帝はその冠も頭も眞ッ二つに割られた。見物人等は上を下へと混雜した。猿は宿屋の屋根へ逃げ登り、從兄弟は膽を潰し、小姓は慄へ上り、サンチョーパンザさへも非常に恐れてゐた。彼がその一嵐の終つた後で言つた通り、自分の主人のこれ程物凄い憤激はつひぞ見たことがなかつたからである。

かうして、この見せ物の完全なる破壞が成就したので、ドン・キホーテは少し靜まつて言つた、『拙者は今この面前に、すべて世に武者修業の道を無用のものと思ふ者等を殘らず引き据ゑて置きたいわい。まア考へても見るがよい、拙者が此處に居合はせなんだら、あの勇士ドン・ガイフェロスと美人メリセンドラとは一體どうなつたらうぞ！たしかに、もう今頃はあの犬どもが追ッ付いて二人の者に暴行を加へて居るに相違ない。さうして見れば、實に武者修業の道こそは今日この天下に存する何物にも優つて有り難いものであらうがの！』これを聞いてペドローは弱々しい聲で言つた、『そりや有り難うても勿體なうても宜しうございますがの。私ア一體どうなりますん

ちや。私ア不仕合せにもあのドン・ロドリゴー王のやうに——

昨日はスペインの君なりしが——

* * *

今日はわが物と呼ぶべき

一つの塔も殘れるはなし。

と言はにやなりませんわい。半時間前までは、いや、ほんのつひ今までは、私ア王様や皇帝の持ち主で、數限りない馬を入れた厩や派手な衣裝を無暗に詰めこんだ鞄や嚢を持つて居りました。それぢやのに今は身代限りをして落ちぶれて貧乏して乞食になりました。おまけに猿まで居りません。ほんとに彼奴をつかまへるにや齒に汗かく程骨が折れますからの。そしてこれが皆こゝにござる武者修業さんの向ふ見ずな御立腹から起つたことぢや。これを世間の人等は、孤兒を保護し、邪惡を直し、その他慈悲深い行ひをするのぢやと申しますわい。けれど私にだきやこのお方の御悲慈深いお心は向かなんだと見える！天道樣は有り難い恭いものぢや！　ほんとに、憂ひ顏の騎士どのは、私の顏まで窶らせたに違ひない。』

サンチョー・パンザはペドロー親方の言葉を聞いて可哀そうになつて彼に言つた、『ペドロー親方、泣きなさんな。歎きなさんな。それを聞けば私も胸が裂けますわい。なア、私の旦那のドン・キホーテ樣は、そりやほんとに心の廣い儿帳面なキリスト信者ぢやから、もしお前さんに少しでも惡いことをしたと氣が附きさへなされば、惡かつたと思うて喜んでそれ相當の償ひをして返して下さるぢやろ。ひよッとすると幾らか餘計に返して貰へるやらも知れんぞい。』

『いやもうドン・キホーテ樣が壞しなさつた物の幾らなりと拂つて下さればよいのぢや。』とペドロー親方は言つた、『さうすりや私も滿足しようし、旦那樣も寢醒めがよいといふものぢや。他人の物を承諾なしに取つて置いて返さん人は、救はれることア出來んものぢやからの。』

『それはさうぢや、』とドン・キホーテは言つた、『しかし、ペドロー親方、今のところ私はお前から何も取つた覺えはないぞよ。』

『えッ！』とペドロー親方は答へた、『この固い地べたの上にあるこの遺骸は——こりや貴方のその強い腕の途方もない力でなうて、何が打ち撒いたり叩き破つたりしたのでござりますぞ？　またこの死骸は、私の物でなうて誰れのものでござりますぞ？　まゝ私はこれがなかつたら何で生計が立てられましたぞ？』

『さてこそ拙者は以前にも度々信じたことを愈々十分に確信するわい。』とドン・キホーテは言つ

た、『拙者を窘める魔術使ひ等が屹度こんな人形を拙者の眼の前に現はして、彼奴等の好きな様な形に變へをつたに違ひない。眞實眞劍、今こゝに聞いてをられる方々に誓言する、卽ち此處で起つたことは何も彼も文字通りに、メリセンドラは本當のメリセンドラ、ドン・ガイフェロスは本當のドン・ガイフェロス、マルシリオ、またシャーレマンはシャーレマンであつたと拙者には思はれたのぢや。さてこそ拙者は怒り出したのぢや。そこで武者修業者たる拙者の職務に忠實ならんが爲めに、あの逃げた人々に加勢し保護しようとしたのぢや。その奇特な志から今見られたやうなことをしてのけましたのだ。それは拙者の落度ではない。それは拙者を窘める惡い奴等の咎ぢや。ぢやが、さうはいふものゝ自分の惡意から出たのでこそなけれ、拙者のこの過失に對しては喜んで相當の償ひをしませう。その駄目になつた人形の代は何程になるかペドロー親方勘定をして貰ひませう。拙者は卽座にカスティルの立派な通貨で拂ひますからの。』

ペドロー親方は頭を下げて言つた、『お見上げ申して居りました通り、それでこそ御勇壯なラ・マンチャのドン・キホーテ樣の、すべて困窮な流浪人等を助け護つて下さるお方の、世にも貴とい御仁俠と存じます。それではこの宿屋の御亭主とサンチョー・パンザさまを、貴方樣と私との間の仲



裁人とも鑑定役とも致しまして、この傷のついた人形を一々値踏みして貰ひませうかな。』

亭主もサンチョーも同意した。そこでペドロー親方は地面から、頭の取れて居るサラゴッサのマルシリオ王を拾ひ上げて言つた、『御覽の通り、この王樣を元の形にするのはとても出來ぬ相談でござります。そこで、まづお二人の御判斷を仰ぎまして、私はこの王樣の御死亡御逝去御崩御に對して、四リール半だけ頂戴致したうござります。』

『それから、』とドン・キホーテは言つた。

『次には、』とペドロー親方は切り割られたシャーレマン皇帝を取り上げて續けた、『この頭から臀まで裂けたのに對しては、五リールと四分の一を御請求しましても過分ではござりますまい。』

『餘り少うもないわい、』とサンチョーは言つた。

『餘り餘計でもないわい、』と亭主は言つた、『五リール四分の一そツくりやるがよい。』とドン・キホーテは言つた、『こんな災難の全額から見れば、四分の一多からうと少からうと大したことはないからの。ペドロー親方、手早く勘定を片づけなさい。もう晩飯時になるので拙者も少々腹が空いて來たやうぢや。』

『この人形には、』とペドロー親方は言つた、『こりや鼻もないし、目も一つ潰れて居るし、しかも

美人メリセンドラぢやから、二リールと十二マラヱディ頂きます。それでも御無理ではござりません。』

『いや〳〵、決してそんな筈はない。』とドン・キホーテは言つた、『もう今頃はそのメリセンドラは良人と一緒に少くともフランスの國境までは落ち延びて居る筈ぢや、あの人等の乘つた馬は疾走するといふよりも飛んで行くやうに見えたからの。そこであのメリセンドラは、今頃は大方フランスへ着いて、良人と共に樂々と樂しんでをらうに、そんな鼻のないメリセンドラなどを見せてお前は今更拙者に猫を兎として賣り付けようとするには及ばんぞよ。ペドロー親方、銘々正直にしたがよい。まア立派に正直にやつて行くがよい。さアそれから。』

ペドロー親方は、ドン・キホーテの氣が變になつて來て、またもとの妄想に返らうとしてゐるのを感づいたので、彼を取り逃がしてはならぬと思つた。そこで彼に言つた、『こりやメリセンドラの筈がござりません。屹度あの奥方に仕へてゐた侍女の一人でござりませう。そんなら、これの代として六十マラヱディも頂けばもう十二分大喜びでござります。』

さてかういふ風にして、彼は壞された人形の値段を一々數へ上げて行つた。二人の鑑定人が雙方の滿足するやうに案配した。その締め高は、四十リールと四分の三に達した。サンチョーは直ぐ樣その金高に幾らか附け足して支拂つた。ペドロー親方は、その猿を捕へる骨折賃として二リールを請求した。

『サンチョー、呉れてやれ〳〵。』とドン・キホーテは言つた、『猿を捕へる代でなく、酒手としてのまたもし誰にもせよ、あのドーニヤ・メリセンドラとドン・ガイフェロスどのとはもうフランスへ行つて味方の人々と一緒に居ると明かに告げることの出來る者があつたら、その好い知らせの褒美として卽座に二百リール呉れてやらう。』

『そりや私の猿より立派に言へるものはござりません、』とペドロー親方は言つた、『けれど、どんな惡魔でも唯今猿をつかまへられるものぢやござりません。しかし大抵今夜になつたら、また戀しうなつて腹が減つて私を探して戻つて來ようと思ひます、ぢやがもう直ぐ夜が明けませうから、また明日御目にかゝりませう。』

要するに操り人形の騷ぎは過ぎた。みな〳〵仲よく睦まじくドン・キホーテの御馳走で晩飯を食つた。彼は非常な氣前を見せたのであつた。槍や戟を持つてゐた男は夜の明けぬうちに出發した。夜が明けるとすぐ、從兄弟と小姓とはドン・キホーテに別れを告げにやつて來た。從兄弟は自分の家へ歸り、小姓はその旅をつゞけるのであつた。ドン・キホーテはその旅費の助けにとて十二リー

ルだけ小姓に惠んだ。ペドロー親方は、ドン・キホーテを非常によく知つてゐたので、この上の長談議にかゝり合ふ氣はなかつた。そこで彼は日の出ぬうちに起き出でゝ、操人形の殘骸を引き纏め、猿をつかまへて、やはり自分の冒險を求めて出發した。ドン・キホーテをよく知らなかつた宿屋の亭主は、彼の氣違ひじみた氣紛れや彼の氣前のよいのに驚いてゐた。つまりサンチョーは主人の言ひ付けによつて非常に豐かに宿料を拂つてやつたのである。そして彼等は亭主に別れを告げて、朝の八時頃その宿屋を出て旅路に上つた。われ〳〵はこゝで彼等にその旅路を續けさせて置かう。蓋しさうして置くのは或る他の事柄を記入するために已むを得ぬので、それはこの名高い物語を明確にする爲めに必要なのである。



## 第二十七章　にはペドロー親方とその猿の素性が明されてある。並びにドン・キホーテの好み通りにも豫期通りにも終らなかつた驢馬の鳴聲の冒險に於て彼の受けた災難のこと。

この偉大なる物語の記錄者シード・ハメットは、本章を始めるに『余は天主敎のキリスト信者として誓ふ、』といふ言葉を以てしてゐる。これに關してその飜譯者は次のやうに言つてゐる。卽ち、シード・ハメットのムーア人であつたことは炳乎として明かであるから、彼のこの天主敎キリスト信者としての誓ひは、唯單に、凡そ天主敎キリスト信者たる者が誓ひを立てる以上は、必ずその眞實なること及びその言明の眞實なることを誓ふのであるし、またさうある筈であるといふ意味に外ならなかつた。それ故、ドン・キホーテに就て彼が取り立てゝ記したところの物は、恰も天主敎キリスト信者として誓ひを立てたと同じやうに、悉く眞實の敍述であつたのである。殊にペドロー親方の素性、及びその神通力を以て治ねく村々を驚かした占ひ猿の素性を陳述するに當つ

ては尙更さうであつたのである。さて飜譯者はかう言つてゐる、この物語の第一卷を讀んだ人はかのジネス・デ・パサモンテなる者をよく記憶して居るであらう。これは他の船惣役人等と共に、モレナ連山でドン・キホーテの爲めに開放された者である。ドン・キホーテはこの親切の報いとして、これ等の惡性者困窮人どもから情ないお禮とそれ以上酷い返報とを受けたのであつた、このジネス・デ・パサモンテ——ドン・キホーテは彼をドン・ジネシロ・デ・パロピロと呼んだが——彼こそはサンチョー・パンザからダップルを盜んだ男であつた。これは、印刷者の粗漏から、第一卷にはその仕方もその時も記してなかつたので、可なり多くの人々を惑はせたのであつた。そんな人々は、印刷の粗漏から來たことを、作者の記憶の惡い罪に歸した。しかし實際ジネスはかのブルネローがアルブラッカ城攻めに際してサクリバンテの兩脚の間からその乘馬を盜み取つた時に使つた手段とたくらみとを用ゐて、丁度仰向きに眠つてゐたサンチョー・パンザからその驢馬を盜み取つたのである。その後ジネスは彼の數限りない罪科（それは非常に夥しくて且つ大それたものであつたので、彼が手づからその記錄を作つたら、優に大冊の本を成した程であつた）の爲めに彼を罪する爲めに探索して居る警官につかまるのが恐さに、アラゴン國内へその巢を變へることに決めた。そこで左の眼を包んで操り人形使ひの商買を始めた。この方にかけても手品と同



樣に、彼は申し分なく器用であつた。それにふとした事で、彼は蠻地歸りの奴隸あがりのキリスト信者たちから、例の猿を買ひ取つた。これに、或る合圖をすれば自分の肩の上へ跳び上つて來て耳うちをして何か囁くやうに、さう見せかけるやうに敎へ込んだ。かうして準備も整うたので、彼は自分がその見せ物や猿を持つて乘り込むつもりの村へ入らないうちに、そこから一番近い村で自分でいろ〳〵のことを聞き合せるか、そんなことを聞くに最も格好らしい人が見付かればその人について、その向ふの村では何んな特別の事件が起つたか、また誰れの身に起つたかを問ひ質して置くのであつた。そしてこれをよく心に止めて置いて、そこへ乘り込んでから眞先に操り人形を見せた。時々その藝題を變へたが、しかし何れも元氣のよい面白い馴染のあるものばかりであつた。その操り人形が終ると、直ぐ樣猿の藝を持ち出して、これはあらゆる過去も現在も占ますが未來のことには利きません、と、見物に言ひふらした。一つの問ひに對しては二リールづゝを求めた。そして或る問ひに對しては、恰かもその問ふ人の腹の底を見拔いたかのやうに、その料金を割引した。そして時々或る家にやつて行つて、そこの家の人等の身に起つた事を前以て知つて居る場合には、そこの人々は料金を拂ひたくないので何も問はぬのに、ペドローは猿に合圖をして、そして猿はこれ〳〵のことを言ひましたと逃べ立てる。さうするとそれがちやんと當る。

かういふ風にして彼はすばらしい評判を取り、誰も彼も彼を追ひ廻した。また或る場合は非常に巧みにやつて、問ひに的中するやうな答へをすることがあつた。そして誰も根問ひ葉問ひしたり猿の占ひ方を話せと強ひる人もなかつたので、彼は殘らずの人を馬鹿にして自分の財布を充たした。彼はその宿屋へ入るや否や、ドン・キホーテとサンチョーとをそれと知つたれ、ばこそ、この二人やその他そこに居合せた人々を驚かすのはわけもないことであつた。しかし前章に述べた通り、ドン・キホーテがあのマルシリオ王の首を打ち落し、その騎兵を殘らず殺した時に、も少しその手を下げたことなら、それこそペドローは大變な目に逢つたであらう。

ペドロー親方とその猿のことはこれだけにして、さてラ・マンチャのドン・キホーテに立ち歸らう——彼は宿屋を出發してから、サルゴッサ市に入り込む前に、先づ第一にエブロー河の堤やその近邊を訪れやうと、決心した。蓋しかの市での馬上試合までにはまだ〳〵澤山の日數があるので、そんなことをしてもさう差し支へなかつたからである。この心組みで彼はその方へと道を取つて二日の間旅を續けた。その間は何も記すに足る冒險に出逢はなかつた。やがて三日目にとある丘を登つて居ると、太鼓や喇叭や鐵砲の大變な音が聞えて來た。最初は何處かの聯隊がその邊を通つてゐるのだと想像した。そしてそれを見ようと、ロシナンテに拍車を當てゝ丘を登つて行つた。頂上に達して見渡すと、その丘の裾に當つて、二百人以上とも思はれる人々が投槍や弩や斧、戟、槍、それに少しばかりの鐵砲と澤山の楯など、種々樣々の武器で身を固めて居るのであつた。ドン・キホーテはその坂を下りて行つて、彼等の旗印の明瞭に見分けられるほどの近さまでその隊へ近寄つて行つた。そしてそれ等の旗に描かれてある紋章や地色をはツきりと見分けた。その中でも特に白繻子で拵へた旌旗が隊旗かの上には、サルディニアの小馬のやうな驢馬の形を生けるが如く描いてあつた。その頭を上に揚げ口を開き舌を出して、恰も嘶いてゐるやうな動作恰好を示してゐた。そしてその繪の周りには大文字で——

我が二人の法官等は
無益には嘶かざりき。

の二行が記してあつた。この意匠よりしてドン・キホーテは、この人々は必ずかの鳴き聲村の者に違ひないと判斷した。そこで彼はその旗の上の文字を說明しながら、その旨をサンチョーに話した。尙また、この事を先きに話してくれた例の男が、驢馬の鳴き聲を出したのは二人の村役人であつたと言うたのは間違ひである、何故といふに、この旗にある詩の句に據つて見ればそれは法官であつたからぢやとドン・キホーテは言つた。それに對してサンチョーは答へた、『旦那樣、そん

なことを氣にすることアござりませんわい。大方その鳴き聲出した役人達は、後でその村の法官になりましたらうからの。それなら、どッちの稱號でも通りましよ。それに、その鳴き手等が村役人であらうと法官であらうと、兎に角鳴いたのが本當なら、その話の本當なことにや何の差し障りもござりませんからの。法官も村役人ぐらゐにや鳴きさうなことですからの。』要するに彼等は、これぞ卽ち罵られた村の人々が、自分等を不當にも近村の好みも思はず嘲弄した他の村の者等に對して戰ひをしかけて居るのであると明かに見て居つたのである。

ドン・キホーテは彼等の中に加はらうと進んだ。サンチョーはこんな征伐に自分で入ることを喜ばなかつたので、少からず不安を覺えた。その隊の者どもは、自分等の味方になる者だと思つたので、ドン・キホーテをその眞中へ迎へ入れた。ドン・キホーテは兜の目庇を揚げて、悠々と落ち着き拂つて、その驢馬の旅印へと進み寄つた。その軍隊の重立つた人々は、彼を初めて見る人が誰も感ずるやうないつもの驚きを以て見守りつゝ、彼を取り卷いて眺めた。ドン・キホーテは、彼等に非常に注意ぶかく見守られてゐるのを知り、また一人として話しかける者もなく問ひかける者もないのを見て、自ら先んじてこの沈默を破らうと決心した。そこで口を開きつゝ聲を勵まして言つた、『方々よ拙者は方々に對して一場の演說を致したいと思ひますで、何うか興醒めて退屈



になられる迄は、話の邪魔をなさらぬやうに、衷心から御願ひ申す。もしさういふ事があれば、少しでもその樣子が見えたら、拙者はこの口に封をして、この舌には枚を啣ませるでありませう。』

彼等は喜んで傾聽するから、何でも言ひたいことを言うてくれと言つた。

この承諾を得てドン・キホーテは言葉を進めた、『方々よ、拙者は武者修業者でござります。その本職は武勇の道でありまして、日常の務めは保護を求むる人々に保護を與へ、助けを要する人々に助けを與へるに在りまする。二三日前拙者は方々の御災難のことを知りました。また方々が敵に復讐する爲めに、度々是非なく武器を執られるといふその原因も聞きました。そして屢方々の事業を心中に思ひ廻らした末、合戰の法から申せば、方々が自ら恥辱を受けたと思はれるのは間違ひであると思ひますのぢや。何故といふに、一私人が全團體を侮辱することは出來ません。但しその團體總體を謀反人として詰責する場合は別ぢや。その場合には、その詰責を受ける謀反人の罪を背負ふ特別な人が分らんからぢや。これに就ては一つの實例がありますわい。それは、あのザモラの町全體を詰責したドン・ディエゴー・オルドニェーズ・デ・ララである。この人はその君王を弑した叛逆の下手人がエリドー・ドルフォス唯一人ぢやと知らなんだのぢや。それであの人は町中の人を殘らず責めてその復讐返報を凡ての者に及ぼした。尤も、ドン・ディエゴー殿はどッ

ちかと言へば全くやり過ぎた。全くその詰責の境を大分乗り越したのぢや。あの人は。死んだ人や水や魚や未生の者や、その他記されてある樣々の物に對して詰責する必要はなかつたからの。しかしそれも仕方がない。憤りが勃發する場合には、父もなければ長官もなく、舌を抑へる面勒もないものぢや。さて、一私人で以て一國、一州、一市、一郡、若くば一團體を侮辱することが出來ぬといふのが事實とすれば、本當の侮辱でもない。そんなものに對して復讐をしかける事は明らかに理由のないことぢや。もし時計村の住民等が、自分等を「時計村の人」と呼ぶ者に行き逢ふ度びに撲り合ひを初めたら、それこそえらいことであらう——時計村に限らんこと、カゾレロ（ヴゥァリド町の人のこと、その町のガヴァついふ人宗教改革の時焚殺されしよりこの名あり）ぢやとかバレナト（マドリッド市民のこと、脂男の意）ヤボネロ（石壺男の意）とか、或はその他いつも大人や兒童等の口に上つてをる名前や稱號の持ち主がそんな事を初めたらどうであらう！そんな名高い市々の人が殘らず怒り立つて復讐するとて、少しの喧嘩にも年が年中進軍喇叭を吹き立てゝ進んだら、それこそ大したことであらう！いや〳〵飛んでもないことぢや！分別ある人や秩序ある國家として、武器を取り劍を拔き、その生命財産を賭するには四つの場合がある。第一は、天主敎を護る爲めぢや。第二は、自己の生命を護る場合、これは自然の法にも神の法にも適うたことぢや。第三は、自分の名譽や家族や財産を護る爲め。第四は、正義の戰爭に際し自己の君王に盡す場合。尙この上にもし第五條を加へるとすれば（それは第三に含めても置けるのぢやが）、それは自己の國家を護ることぢや。戰の重な理由たるこの五つのもの〻上に、正義と道理に適うたもの義務として武器を取らしめるものを多少は附け加へても宜しい。しかしながら、氣に障るといふよりも可笑しうて笑ひ出したうなるやうな埒もない些細の事で武器を取るに至つては、そんなことする者は如何にも常識に缺けてゐる人間としか見えぬのぢや。剩へ、不正な復讐をするに至つては（また正義の復讐などは有りやうがないのぢやが）、正にわれ〳〵の遵奉する神の掟に背いて居る。神の掟の中には、吾等の敵に善を行ひ吾等を憎む者を愛せよと命じてある。この命令は多少從ひ苦いやうには見えるが、それはたゞ神よりも此の世の事を、靈よりも肉のことを餘計に思ふ人にだけさうなのぢや。決して僞りを言はず、今も昔も決して僞りを言ひ得ぬ神にして眞の人間なるイエス・キリストは、吾等の立法者としてかう言はれた、卽ち、わが軛は易くわが荷は輕しと。それぢやからイエスは決して私等の從ふことの出來ぬやうな命令は下されなんだであらう。方々よ、かういふ次第ぢやから、方々は人間の掟によつても、神の掟によつても、鎭まらねばならぬのぢや。』

サンチョーはこれを聞いて獨り言を言つた、『いよ〳〵こりや私の旦那は神學者ぢやな。さうで

なうても、きッとそれに卵二つといふところぢや。』

ドン・キホーテは息を繼ぐ爲めに言葉を止めた。そして尙も沈默の保たれて居るのを見て、今少しその演說を續けようと思つた。もしサンチョーが機敏にそれを遮らなかつたら彼はそれを續げたであつたらう。けれどもサンチョーは主人の中休みしてをるのを見て、機先を制してかう言つた、『私の御主人のラ・マンチャのドン・キホーテ樣は、元は「憂ひ顏の騎士」と呼ばれてござつたが、今は「獅子の騎士」と呼ばれてござる。この方は大學校出のやうにラテン語も生れた國の言葉も知つてござる大學者樣ぢや。この旦那樣の扱はれることや勸めなさることア何も彼も勇ましい兵隊のやうに進みます。そして世間で言ふ合戰の掟や規則は殘らず旦那樣の指の先にあるのぢや。そこで貴方さん達も旦那樣の仰有る通りに任せなさる外はないんぢや。もしこれが間違うたら私の頭でも賭よう。お負けに、驢馬の鳴き眞似を聞いただけで腹を立てるのは馬鹿げてをると言はッしやれたらうがな。それで私も思ひ出したが、私も小供の折に氣が向きさへすりや何遍も何遍も驢馬の鳴き眞似をしたもんぢや。誰れ一人邪魔するものもなかつたから、そりや上手に本物のやうに鳴きましたんぢや。それで私が鳴くのを聞くと村中の驢馬は殘らず鳴きましたわい。けれどそれでも私はやッぱり私の兩親の、非常に敬はれとッた兩親の倅に相違なかッたんぢや。そ



れに私は、さういふ藝の有つた爲めに、村のえらい幅利きの人等に大分嫉まれたんぢやが、そんなことア三文にも思ひませなんだよ。私のいふのを嘘ぢやと思ふなら、ちよいと待つて聞きなされ、この藝は泳ぎと同じことで、一度覺えたら忘れんからの。』そこで彼は自分の鼻を抑へながらえらい勢ひで鳴き聲を立てた。それはそこらの谷々を鳴り渡らせた程であつた。

しかし、彼の近くに立つてゐた連中の一人は、自分等を愚弄するものと思つたので、携へてゐた長い杖でサンチョーをうんと撲つた。そこで彼は堪らず地べたに落ちた。サンチョーがかくも手荒い目に遇はされたのを見ると、ドン・キホーテは槍を揮つてその撲つた男に突いて掛つた。しかし大勢の人々がその間に分けて入つたので復讐することは出來なかつた。それどころか、ドン・キホーテは石塊を雨霰と打ち付けられ、無數の弩や鐵砲で狙ひ付けられたので、ロシナンテの首を廻らし、精一杯の駈け足で、彼等の中から逃げのびた。その間にも一步毎に鐵砲の丸が飛んで來て脊から胸へ突き貫きはせぬかと恐れ、仕切りなしに深い息を吐いてその丸の有無を檢べつつも、この危險よりわが身を無事に救ひ給へと一心不亂に神に願うた。しかし軍勢の者どもは彼の逃げ出したのを見て滿足し、鐵砲は打ちかけなかつた。彼等は辛ッと息を吹き返したサンチョーを驢馬に乘せて、その主人の後を追はせた。サンチョーはその獸を御するほどに十分正氣づい

てはゐなかつた。しかしダップルは、自分の寸時も別れて居られぬロシナンテの足痕を追うて行つたのであつた。ドン・キホーテはよい加減逃げ延びてから後を振り返つて見た。そしてサンチョーの來るのを見て待ち合せた。但し一人も追つ掛けて來ないと見たからである。その隊の人々は日の暮れるまで陣を張つてゐた。しかし敵は戰ひに出て來なかつたので、意氣揚々として自分等の村へ歸つた。そして若し彼等がギリシヤ人の古風を知つて居つたら、その場所に一つの戰勝記念碑を建てたことであつたらう。

## 第二十八章　注意して讀めば、讀む人はその意を解するであらうと、ベネンゼリの言ひし事ども。

勇者の逃げる時には、詭計分明である。而して身を棄てる場合を擇ぶのは賢者の常である。ドン・キホーテの場合もかういふ事になつた。彼はその村人等の激怒と怨れる軍勢の敵意の前には叶はずして遁げ出した。そしてサンチョーのことも、またその陷つて居る危險をも考へずに、彼はもう大丈夫と思つたまで遠く退却したのである。サンチョーは前に述べた通り、驢馬の上に横づけになつて、ドン・キホーテの後を追うた。そして漸く追ひ付いた時はもう正氣を回復してゐた。彼は追ひ付くと直ぐダップルから身體を下してロシナンテの足許にへたばつた。彼は痛く傷つき撲られてゐたのである。ドン・キホーテはその傷口を檢べようとて馬を降りた。しかし彼が頭の先から爪先まで滿足なのを見て、さも腹立たしげに彼に言つた、『サンチョー、お前は實に惡い時に驢馬の鳴き眞似をしをつたものぢや！　縛り首の刑を受けた人の家で細索のことを言ふがよいとは

何處で敎はつたのぢや？驢馬の鳴き眞似の音樂には、棒打ちの外に何な合の手があるものと思うたのぢや？サンチョーよ、丁度今あいつ等が棒で十字を切つたばかりで、僞月刀で十字を切らなんだことを神樣へお禮を申し上げるがよい。』

『私ア返事をすることも出來ません、』とサンチョーは言つた、『まるで肩で物を言ふやうな心持ちがしますからの。乘つてこゝを出かけませう。私アもう鳴き眞似はしません。けれど、武者修業さんが逃げ出して忠義な家來を敵の手に放ちらかして粉微塵になるまで打つ叩かせたと言ふのは止めやしませんぞよ。』

『退く者は逃げるのではない、』とドン・キホーテは答へた、『サンチョーよ、よう聞くがよい。卽ち智慮の礎の上に建つてをらん勇氣は向ふ見ずと言はねばならんぞよ。向ふ見ずな人の手柄は勇氣よりも寧ろまぐれ當りの爲めと言はねばならん。そこで拙者は退却したことは自ら認めるが、しかし逃げたとは思はん。また拙者はこれに依つて數多の勇士の手本に從うたわけぢや。その勇士等は、更によい時の爲めに身を全うして置いた。物語はこの事の實例に充ち滿ちてをる。しかし格別お前の爲めにもなるまいし拙者も別に面白いと思はんから、今はそれを述べ立てはすまいぞよ。』



やがてサンチョーはドン・キホーテに助けられて驢馬に乘つた。續いてドン・キホーテもロシナンテに跨つた。そして四半リーグ許り向ふに見えてゐる森に宿りを取らうとて、二人はゆッくりした步調で進んだ。サンチョーは仕切りなしに深い溜息を吐き物凄い呻き聲を出した。そこでドン・キホーテはそんな銳い痛みは何處から起つて來るのかと訊ねたので、サンチョーは、脊骨の下の端から頸の骨までが、大方氣絕でもしさうに烈しく痛みますと答へた。

『その痛みの起りは、』とドン・キホーテは言つた、『屹度お前を毆つたあいつ等の棒が非常に長かつた爲めぢや。あれで脊中ぢうを打ちおろしたから、そいつの當つた箇所が殘らず痛むのぢや。あの棒がもッと上の方まで當つたら、もッとひどいことになつて居つたらう。』

『やれまア、』とサンチョーは言つた、『貴方樣は私の大きな疑ひを解いて、美事な言葉で圖星を指して下されました！やれ〳〵！あの棒やならん程、私のこの痛みの起りにや深い謎がありますのかい？もし私の踝が痛むのなら、何故痛むのか占ひをして貰ふこともござりませうが、撲たれたところの痛いちう分にや占ひも何も入つたもんぢやござりませんわい。旦那樣、ほんとにな、「他人の痛さは髮の毛に引ッ懸つてをる」ぢや。私アもう日に日に貴方樣の御伴をしても何の望みもないちうことが段々わかつて來ました

わい。今度あいつ等に私をぶん殴らせたからにや、この次ぎは、いやまだ〳〵何十度も、日外のやうな毛布上げやいろ〳〵様々の悪戯に逢ふこッてござりましよ。それも、これ迄は肩の上へ受けよつたが、追々口の中へぶッ付けられましよわい。かうして飲むものもなけりや食ふ物もなしに何處を當てともなく途さへないところを貴方様に從いてほッつき廻るよりか、家へ歸つて神様のお恵み下さるもので女房子を養うて育てる方が、私アどの位好えか分りやせん（一生涯何一つ善い事もせんやうな馬鹿な畜生でさへなけりやな）ほんとに私アどの位えゝか分りやしません。それからまた眠るときになりやどうでござります！おいサンチョーよ、地べたに七呎だけ測り取れ、それで足らねばお前の好きなだけ取るがよい、お前が思ふ存分に身を伸ばすだけ測り取つて差支へないからのと、かうぢや。あゝ、あ、ほんとに武者修業など仕初めた男を、いや、せめて殘らず馬鹿ものに相違なかつた武者修業に奉公した一番初めの家來の奴を、焚き殺して灰にしてしまうたら好え氣味ぢやろ！今時の武者修業さんのことア私は何も申しません。貴方様もその お一人でござりますから、私や敬うて居りますからの。それにまた貴方様の仰有ることや考へなさることは惡魔より賢いことを私がよう知ッとりますからの。』

『おいサンチョー、』とドン・キホーテは言つた『お前は今誰も止めぬのでさうやつて喋舌つてゐるところを見ると、もう全身に何の痛みも感じて居らんことは間違ひなしぢやの。喋舌れ、喋舌れ。お前の頭になり口になり浮ぶことは何なりと言ふがよい。お前が痛みさへ感ぜねば、お前の無遠慮の爲めの私の腹立ちは、却つて私にはおもしろい。若しお前がそれほど家へ歸つて女房小供に逢ひたいなら、拙者は決してそれを妨けはせん。お前は拙者の金を持つてをるの。この三度目に村を出てから何日經つたか、月々お前はどの位儲けられるか、また儲けねばならぬか、勘定して見い。その上で自分でその給料を取るがよい。』



『貴方様の御存じのあのサムソン・カラスコー先生の親父さんのトム・カラスコーさんへ御奉公して居りました時にや、いつも向ふ飯で月に二デュカット（約十づゝ頂いて居りましたよ。』とサンチョーは答へた、『貴方様にや幾ら頂いてえゝか私にや分りません。尤も武者修業の家來は百姓仕事する者よりかひどい時があるちうことア承知して居りますがの。兎に角百姓仕事をします時ア、幾ら一日中働きづめでも、どんな事があつても、夜になりや土鍋から飯も食はれますし寢床の上にも眠られますのぢや。それぢやのに貴方様に御奉公してからはそれが出來ませんなんだからの、たゞあのドン・ディエゴー・デ・ミランダさんの家に逗留したちよッとの間だけは出來ましたがの。そして御馳走といへば、あのカマチョーさんの鍋の中から掬ひ取つた物と、それからバシリオさ

んの家で食うたり飲んだり眠つたりしたものだけでござりましよ。その外の時ァいつも青天井の下で固い地べたへ眠つて來ましたのぢや、世にいふ雨風に曝されて、乾酪のかけらや麵麭の外皮で生命を繋いで、旅の道中で、行き逢ふ小川や泉で水を飲みましての。』

『サンチョーよ、お前の言ふことは殘らず本當ぢやと私も思ふよ。』とドン・キホーテは言つた、『それでお前はあのトム・カラスコーから受けた給金より何れだけ餘計に貰へばよいと思ふのぢや?』

『もし月に二リールだけ足して下さるなら、それで十分ぢやと思ひましよ。』とサンチョーは言つた。『そりやその、私の働きの給金の方だけでござりますよ。けれど貴方樣が私を島の總督にしてやろと仰有つたあの御約束御誓言の償ひに、もう六リール足して皆で三十リールにして下さるなら結構でござります。』

『宜しい、』とドン・キホーテは言つた、『村を出てから二十五日になるからのサンチョー、お前が自分で決めたその給金の割で、私の方から幾ら拂ふ筈になるか勘定して見い。そして、先きに言うた通り、お前の預つてをる金の內からそれだけ取るがよい。』

『やれまア!』とサンチョーは言つた、『貴方樣のその御勘定は大變違うて居りますぞい。その島の約束の方になると、貴方樣がそれを私に約束なされてから今日唯今までを勘定せにやなりませんからの。』



『よし〳〵、サンチョー、それではお前にあの約束をしてから何れほどになるかい?』とドン・キホーテは言つた。

『私の覺えに間違ひがなけりや、三日の出入はありませうが、もう二十年から上になりますわい。』とサンチョーは言つた。

ドン・キホーテは自分の額をピシヤリと平手で打つて心から笑ひ出した。そして言つた、『はて、私がモレナ連山を彷徨したのや、その他殘らずの出遊期間を合せても、せい〳〵二ケ月を出て居らぬのぢや。それをサンチョーよ、お前は私があの島の約束をしてから二十年になると言ふのぢやの。さてはお前は、その手許に有る私の金を殘らず給金に取りたい考へぢやな。若しさうとすれば、またそれがお前の好みなら、今一どきにそれを殘らずお前に呉れてやるから、お前のよいやうに使ふがよい。お前のやうな碌でなしの家來に別れさへすれば、拙者は一文なしの貧乏人にならうとも却つて氣持ちがよいわい。しかしなア、これ、武者修業の從士の掟を亂す男よ、お前は一體武者修業者の從士なる者がその主君に向つて「給金を月に幾ら下され」と掛け合うた例しを何處で見たり讀んだりしたのぢや? この惡黨奴、ならずものめ、怪物め——お前はそんな者

としきや思はれんのぢや——こら、お前は騎士道の物語の大洋へ跳び込め、跳び込め。その上で若し今お前の言うたやうなことを言うたり考へたりした従士を一人でも捜し當てたら、拙者はこの額の上にそれを釘附けにさせてやらう。それのみかこの顔を四つ五つうんと平手で殴らせてやらうわい。貴様のダップルの手綱を、面勒を廻せ。そしてとッとゝ家へ歸れ。もうこの上は一歩でも拙者に從いて來てはならんぞよ。あゝ、養ひの恩を知らぬ奴め！この嘘吐きめ！この非人め！さても、さてもお前は、お前の女房の心も知らずに、他人から「殿様」と呼ばれるやうな高い身分に取り立てようとして居る間際になつて拙者を見棄てようとするのぢやな？拙者はお前を世界第一の島の總督にしてやらうと、聢と堅い決心をしてをる今になつて逃げて行くのぢやな？成る程、お前がいつぞや言うた通り、蜜は驢馬の口にや合はんものぢや。お前は驢馬ぢや。これからも驢馬でをらうぞ。そしてお前はその壽命の果てる時にや、やッぱり驢馬として世を終らうぞよお前が自分で畜生ぢやと感づいたり氣づいたりせぬうちに、お前は往生するに決つとるからの。』

ドン・キホーテがかやうに罵つて居る間中、サンチョーは彼を一心に見守つてゐた。そして非常に悔悟の情に責められて、兩眼に涙を浮べ、悲しげなおゝ～～聲で彼に言つた、『私の旦那様、私や全くの驢馬でござります。尻尾がないばッかりでござります。もし貴方様が尻尾を附けてさへ



下さつたら、私アそれを御尤もと思うて、生きて居る間は貴方様へ驢馬のやうに御奉公致しませう。何うぞ御勘辨なさつて、私の馬鹿を哀れと思うてやつて下さいませ。また私の物知らずを覺えといて下さつて、私が徐り喋舌りましても、そりや惡い心からぢやない性根が堅固せんからぢやと思うて下さりませ。けれど罪を犯して改める者は、神様が赦して下さると申しますわい。』

『サンチョーよ、もしお前がその言葉の中へ例の諺を混ぜなんだら、私は却つて吃驚したことぢやらう。』とドン・キホーテは言つた、『よし～～、赦してやるぞよ。但し今後は悔い改めてお前の利得のことばかり考へんやうにして、機嫌よう元氣を出して氣を引き立てゝ、私の約束の成就を待つことにするのぢやぞよ。この約束は遲れたとて駄目になりはせんからの。』

サンチョーは、その通り致します、そして出來るだけ元氣を出して居りますと答へた。やがて彼等は森の中へ入つた。ドン・キホーテは楡の根元に、サンチョーは栴の根元に各々身を置いた。蓋しこの種の樹木やこれに似寄つた樹木は、幹だけあつて枝はないからである。サンチョーは、夜露にうたれて例の杖の打ち痕がいよ～～酷く痛んで來たので、苦しみの裡にその夜を過ごした。ドン・キホーテは、彼のおきまりの冥想の裡に夜を過ごした。しかしそれに拘らず、彼等は一寸の間まどろんだ。そして日の光の現はれると共に、名高いエブロー河の岸邊を求めてその旅をつゞ

けて行つた。その岸で彼等に降りかゝつた事は次の章で語られるであらう。



## 第二十九章　魔の小舟の名高き冒險に就いて。

順次既に記した通り、いや、省略して記さなかつた通り、ドン・キホーテとサンチョーとは例の森を去つてから二日の後遂にエブロー河に到着した。この河を見てドン・キホーテは非常に喜び、その兩岸の美しい眺めや玲瓏たるその流れや、水流のしづかさや、溢るゝばかりの清冽の水などを眺め見守つたのである。そしてこの快き景色は彼の心に限りなき優しき思ひを呼び起こした。就中、彼はかつてモンテシノスの洞穴の中で見たことの冥想に耽つた。ペドロー親方の猿はそれを半ばは眞實で半ばは僞りであると言つたが、彼はあくまでもそれを僞りとするよりも寧ろ眞實とするのであつた。これは、その事の一切をまッかな嘘であると言ひ張るサンチョーとは正反對であつた。

かうしてその堤を進んで居ると、やがて一艘の小舟を發見した。それは櫂もなくその他の船具もなく、岸邊の樹の幹につながれて汀に浮んでゐたのである。ドン・キホーテは四邊を見廻した。

そして誰れも見て居る人がないのを見て、何の躊躇もなく直ぐ樣ロシナンテから降りて、サンチョーにもダップルを降りて、この二疋の獸をそこらの白楊か柳の幹にしッかり繋いで置くやうにと命じた。サンチョーは、突然馬から降りて繋ぐのは何ういふわけかと訊ねた。ドン・キホーテは答へた、『サンチョーよ、こゝにあるこの小舟は、確かに何の疑を挿む餘地もなく、これにお乘りなされと拙者に呼びかけて招いてをるのぢや。そして或る騎士か身分高い人かゝ助けを求めて居るので、これに乘つて助けに行つて呉れよと言ふのぢや。その人は言ふまでもなく非常な窮地に陷つて居るのぢや。これが騎士道物語やその中に出て來る魔法使ひのやり口ぢやわい。凡そ騎士が他人の力を藉らねばとても脫け出られないやうな窮地に陷つた場合には、魔法使ひは、たとへ二三千リーグ若くばそれ以上隔つたところに居つても、或ひは雲に乘せ或ひは小舟の用意をして乘せて行くのぢや。そして瞬きする暇もなくその伴れて行かうとするところ若しくばその助けを要する所へ運んで行くのぢや。そこでサンチョーよ、この小舟もそれと同じ目的でこゝに置いてあるのぢや。この事は今が晝であると同じく眞ぢや。そこでこの機を逸せんうちに、ダップルとロシナンテとを一緒に繋いで置いて、神の御手に私等の身を任せて行くことにしよう。拙者はたとへ跣足の托鉢僧たちから賴まれようとも、金輪際この船出を思ひ止りはせんぞよ。』



『かういふ事になつて、』とサンチョーは言つた、『そして貴方樣が――私ア何それを痴けごと、言うてよいか悪いか分りませんが――幾らずその通りにすると仰有るなら、「汝の主人の命ずるまゝにせよ、而して主人と共に食卓に着け」といふ諺を心に留めて、頸を下げて仰せに從ふ外はございませんわい。けれど、それでもやッぱりお諫め申さにや私の氣が濟まんから申しますが、この小舟は魔術使ひの物ぢやないので、この河の漁師の持ち物ぢやと私ア思ひますがの。この河では世界第一の鯰が捕れますからの。』

サンチョーはかう言ひながらその獸等を繋いで、心中非常に悲しみつゝ、彼等を魔術使ひどもの注意と保護に委ねた。ドン・キホーテはサンチョーに、この獸等をかうして置き放しにしたとて心配するには及ばぬ、それは彼等二人をこんな遠路遠國へ伴れて來た人が、必ずこれにも飼料を呉れるであらうからと言つた。

『遠路て私にや分りませんわい。』とサンチョーは言つた、『そんな言葉は生れてから聞いたこともございません。』

『遠路とは遠い路といふことぢや。』とドン・キホーテは答へた、『しかしお前にそれが分らんのは無理もない。知つたかぶりして實は知らん人のやうに、何もお前はラテン語を知つとらにやならん人

ん筈はないからの。』

『さア繋いでしまひました。これから何うするのでござりますかい？』とサンチョーは言つた。

『何うする？』とドン・キホーテは言つた、『銘々十字を切つて碇を揚げるんぢや、卽ちこの小舟を繋いである綱を切つて船出をするのぢや。』さう言つて彼はその小舟へ跳び乘つた。サンチョーも後につゞいた。ドン・キホーテが綱を切ると、小舟はゆるやかに岸邊を離れて漂ひ出した。二ヤードばかり河の中へ浮び出すのを見ると、サンチョーはもう生命がないものと思つて顏へ出した。しかし何よりも彼の心を悲しませたものは、ダップルの鳴き聲を聞きロシナンテが身を脫け出さうと躁くのを見たことであつた。そこで彼は主人に言つた、『ダップルは私等に置いて行かれるのを見て鳴いて居りますわい。ロシナンテも脫け出して後から河へ跳び込まうとして居りますわい。あゝ、可哀さうにのう、無事で居れよ。私等をお前たちから引き離して行くこの狂氣の沙汰が正氣に返つて、またお前等のところへ歸つて來られますやうに。』そしてかう言ひながら彼は非常に激しく泣き出した。そこでドン・キホーテは鋭く腹立たしげに彼に言つた、『この臆病者めがッ、何を恐がつてをるのぢや？何を泣くのぢや、この牛酪菓子の精めがッ？誰れがお前を責め苛むのか、この廿日鼠の精めがッ？山の山ほどあつても飽き足らん奴めが、何が欲しいのぢや　貴樣は大方



リフェアの峰を跣足で登つてゐも居ると思ふのか？この景色のよい河の澄み切つた流の上を大公爵のやうに腰掛けに坐つて居るのを忘れてしまつて。こゝからはもう間もなく大海へ乘り出すのぢや。それはさうと、私等はもう出てから七八百リーグは來たに相違ない。もしこゝに觀象儀を持ち合せて居つてそれで極の緯度を測れば、どれだけ旅をして來たかちやんと分るのぢやがの。尤も反對の兩極を眞中から分ける晝夜平分線を、もう通過してしまうたのか、やがて通過するのか、それは拙者は餘り承知して居らんがの。』

『そして貴方樣の仰有るその道まで、行けばどの位來たことになりますかい　』とサンチョーは言つた。

『大變な道程ぢや、』とドン・キホーテは言つた、『トレミーといふ世にも知られた大天文學者の測量に依ると、この水陸より成つた地球が三百六十度ある中で、今言つた線まで行けばその半分を旅したことになるのぢやからの。』

『ほんとに、』とサンチョーは言つた、『そのトロメンとやらの御苦勞で、貴方樣の言はツしやることにも立派な證據が出來ましたわい。』

トレミーの測量といふことをサンチョーがかう解釋するのを聞いてドン・キホーテは笑ひ出し

た。そして言つた、『サンチョーよ、よう聞け。スペインの人たちで、東印度へ渡らうとカディズから船出する人たちはな、今私が言うたその線を通過する時にそれと分る證據の一つは、船に乗つて居る人たちの身體の虱が死んでしまうて、一疋も生き殘らず、たとへ虱と黄金とを掛け代へに呉れようと言うても船の中にや一疋も居らんといふ事ぢや。そこでのサンチョー、お前も自分の股の下へ手を入れて探つて見い、若し何か生きたものに行き當つたら、この疑問は氷解するのぢや。もし當らなんだら、その時ア、もうその線を通過したわけぢや。』

『私ア少しもそんな事は信じません。』とサンチョーは言つた、『それでもまア貴方樣の仰有るやうにして見ませう。私ア何でそんな事をやつて見にやならんか分りませんがの。私等があの畜生の立つて居るところから二ヤードと下つて居らんし、岸からも五ヤードとは離れて居らんちうこと は、ちやんとこの眼で見れますからの。あれ、私等が置いて來たあの同じ場所にロシナンテもタッブルも居りますわい。そしてかうやつて一處に目標を付けて居りますと、私等が蟻の歩みほども動きも進みもして居らんことア、正直本當でござりますぞい。』

『サンチョーよ、今私が言うた試驗をやつて見い、』とドン・キホーテは言つた、『そして外の事は氣にかけるな。一體お前は、雨分圈とか、經度緯度、黄道帶、黄道線、南北極、回歸線、晝夜平分線、諸天體、十二支宮、方位、度合など、凡そ天地の兩界を組み立て居るものに就いては何にも知らんのぢや。もしお前が是等のことを殘らず、いや幾分でも知つて居つたら、もう幾緯度進んで居るか、或ひは何の天宮を見たか、或ひはもう星座を幾つ通り越して來て今何を通り越して居るかといふことを、はッきり見分けるであらうがの。しかし返すゝもお前の身體を撫でゝ探つて見い。お前がすべ〳〵した白紙よりも綺麗ぢやといふことは、大丈夫ぢやからの。』

サンチョーは片手をそッと用心深く差し入れて、自分の膝の凹みを撫でた。そして主人を見上げつゝ言つた、『この試驗は嘘でござりますぞい。それとも私等はまだ貴方樣の仰有る所へ着いてをらんか、何十里か手前までも行つて居りませんわい。』

『はて、何うしてぢや　お前一疋でも探り當てたのか』とドン・キホーテは訊ねた。

『ヘイ、何疋も。』とサンチョーは答へた。そして彼はその指を振つて手を河の水で洗つた。彼等の小舟はこの河の中流を靜かに滑りつゝあつた。それは玄妙な靈力とか眼に見えぬ魔術使ひとかに動かされるのではなく、たゞその滑らかな靜かな水流に依つてゞあつた。

やがて彼等の眼にはとある大きな水車が映つて來た。それは河の眞中に立つてゐた（中流に竪植せられたる浮き水車）これを見るや否や、ドン・キホーテはサンチョーに向つて叫び立てた、『おい、お前はあれが見えるか、

あそこには市か城廓か砦か〻立つて居る。屹度あそこには或る騎士か不仕合せな女王様か公主か姫君か〻監禁されてござるのぢや。それを助けに拙者は此處へ伴れて來られたのぢや。』

『旦那樣、貴方樣は一體市ぢやの城ぢやの砦ぢやのと、何を指して言ひなさるのぢや？』とサンチョーは言つた、『この河に立ツとるのは、ありや粉を磨く水車ぢやござりませんかい？』

『默れ、サンチョー。』とドン・キホーテは言つた、『あれは水車のやうには見えるが實はさうではないのぢや。魔術で物の形を變へてそのもとの姿を消すといふことは、もうお前に話した筈ぢや。それは魔術使ひどもが本當に甲の物を乙の物に變へてしまうと言ふのではない。たゞさう變へたやうに見えるだけぢや。それは拙者の唯一の望みの庫を——あのドゥルミネアを變貌させた事が何よりの證據ぢや。』

丁度この時小舟は流れの眞中へ出たので、これまでよりはやゝ速く動き出した。水車場の粉磨人等は、小舟が河を降つて來て、水車の勢でまさに卷き込まれようとしてゐるのを見て、五六人の者は長い棹で小舟を突き止めようと大急ぎで走つて來た。彼等は皆その顏から着物から粉を浴びて眞白になつてゐたので、妖怪變化のやうに見えた。彼等は聲を限りに叫んだ、『おうい〳〵、何處へ行くんぢやい？氣が違うたのかア？溺れて死にたいのかア、水車で微塵に碎かれたいのかア？』



ドン・キホーテはこれを見て言つた、『サンチョーよ、拙者が言はなんだことか。拙者の腕の力を見せるべき場所へ來たぞよ。拙者に手向うて來るあの惡黨どもを見い、あの化物どもが拙者に刃向うて來るのを見い！あの物悽い顏で私等を脅さうとするのを見い！この惡黨ども、今に見て居れ！』それから彼は小舟の上に突ツ立ち上つて、大音聲でその粉磨人等に脅し文句を投げかけ始めた、『この惡性の腹黒い暴徒ども、貴樣等がこの砦か牢屋に監禁して居る人を、その位階人品の高下はいづれにもあれ、自由にして放してやれ。拙者こそはラ・マンチャのドン・キホーテ、またの名は「獅子の騎士」ぢや。この拙者こそは皇天の御心に依つて、この冒險を目出度く成し遂げる爲めに遣はされたのぢや。』そして、さう言ひながら彼は劍を拔いて粉磨人等に向つて振り廻し始めた。彼等はドン・キホーテの言葉を聞いたけれども、この譫言は全く分らなかつたので、今や恰も急流を成せる水車の水道へ卷き込まれようとしてゐるその小舟を喰ひ止めようと努めた。サンチョーは跪づいて、この焦眉の危險をお助け下されと、一心不亂に天に祈つてゐた。しかし粉磨人等は敏活敏捷にやつたので、辛くもその小舟を棹の先で突き止めた。しかしそれと同時に小舟は轉覆して、ドン・キホーテとサンチョーとは水の中へ投げ込まれた。しかし幸にしてドン・

キホーテは蒼鵝のやうに泳ぐことが出來た。尤もその鎧の重みで二度まで底に沈みはしたが。そこでもし粉磨人等が水中へ跳び込んで引き上げて呉れなかつたら、この二人はトロイ町と化したであらう。渇きを止めるよりも餘計に飲んで陸へ上るや否や、サンチョーは地べたに跪いて、手を合せ天を見上げて、長い熱心な祈りを神に捧げ、自分の主人の向ふ見ずなもくろみや企てから永久に自分を救ひ出したまへと願つた。水車の車輪に突き當つて微塵に碎けた小舟の持ち主である漁師どもゝやつて來た。そしてその小舟の壞れたのを見ると、サンチョーの着物を剝きにかかり、ドン・キホーテにその代償を拂つて呉れと言つた。しかしドン・キホーテは宛ら我が身に何事もなかつたやうに落ち着き濟まして、その粉磨人どもや漁師どもに向ひ、この城中に監禁してある人を一人でも何人でも、無事に怪我なく自分に引き渡すといふ條件を附けるならば、喜んでその代償は拂はうと言つた。

『この氣違ひよ、廣ぢやの城ぢやので、一體お前さん何を言ふのぢや？お前さんは、この水車へ粉を磨きに來とるものを伴れて行かうといふのかい？』と粉磨人の一人は言つた。

『もう仕方がない』とドン・キホーテは思つた、『この暴徒等に懇願して有德の行ひをさせようとするのは、沙漠で說敎するやうなものぢや。この冒險では二人の魔術使ひが互に鎬を削つてをるに

違ひない。一人が企てることを一人が無駄にする。片方のは拙者にこの小舟を用意して呉れたし片方のは拙者を顚覆させた。神よ助けたまへ、この世は互に角衝き合ふ姦策詭計の巷ぢや。拙者はこの上の事は出來ませぬ。』そして水車の方へ向いて大聲で言つた、『方々よ、この牢獄に幽閉されて居らるゝ方々よ、何人にもせよ拙者をお赦し下されい。拙者と方々との不運の爲めに、拙者は方々を御救ひ申すわけに參りません。この勳功は必ず別の騎士の爲めに取り置かれ預定されてをりますのぢや。』

さう言つてから彼は漁師等と話を決めて、小舟の代として五十リールを拂つた。サンチョーは非常に厭々ながらその金を彼等に渡した、『こんな小舟騷ぎがもう二度もあれば私等の資本は空になるわい。』と言ひながら。

漁師や粉磨人等は、たゞの人と全で變つた樣子をしてゐるこの二人の姿を呆れ返つてぢろ〳〵と見てゐた。そしてドン・キホーテに言ひかけられた言葉や問ひは、何のことやらさッぱり分らなかつた。そこでこの二人は氣違ひぢやといふことに判斷して、彼等と袖を別ち、粉磨人等は水車へ漁師等はその小屋へと各々歸つて行つた。ドン・キホーテとサンチョーとはその獸のところへすご〳〵と歸つて來た。そしてこれが、この魔の小舟の終りであつた。

## 第三十章　美しき女狩人を相手にドン・キホーテの冒險。

騎士と從士とはすツかり悄氣切つて機嫌悪くその獸のところへ歸つて來た。分けてもサンチョーはさうであつた。といふのは、彼に取つては蓄への金に觸ることは自分の心臟に觸ることであり、多少でも金を取り去られる時には宛ら自分の眼の玉でも取り去られるやうに感じたからである。兎に角、二人は一ことも言葉を交さずに銘々の獸に打ち乘つてこの名高い河をあとにした。

ドン・キホーテは戀の思ひに耽りサンチョーは自分の出世のことをのみ考へて。それは丁度その時には、とても手に入りさうもないと思はれたのである。蓋し彼は馬鹿とはいひながら、自分の主人の行爲の殘らずは、いや、その大方は、全く正氣を逸して居るといふことを、明かに見たからである。そこで彼は折もあらば、譯も話さず別れも告げずに、この主人への奉公を辭して家へ歸らうと考へ出した。しかしながら運命は、彼が心に思ひ回らしたところとは非常な反對に事を導いて行つたのである。



偶〻その翌日の日暮れ頃、とある林を通り貫けてから、ドン・キホーテはとある綠の草原を眺めた。するとその草原の遙か向ふの端しに數人の人影を認めた。近づいて見ると、それは鷹狩の一行であつた。ずツと近寄つて來ると、その中に上品な顏つきの婦人を一人見分けた。その婦人は綠色の馬飾や銀覆輪の偏座鞍を着けた純白の仔馬か間の子馬かに乘つてゐた。その婦人もやはり綠の着物を着てゐた。そして、この婦人こそ華やかさの權化であらうと思はれる程花やかに麗しく着飾つてゐた。その左手には鷹を乘せてゐた。これに依つてドン・キホーテは、この婦人こそは必ず非常に見分の高い人で、この鷹狩の一行の女主人であらうと思つた。それは果して事實であつた。そこでドン・キホーテはサンチョーに言つた、『おい、サンチョーよ、走つて行つての、あの小馬に乘つて鷹を持つて居られる婦人にかう申し上げて來い。拙者卽ち獅子の騎士は、恭しく貴女樣のお麗しいお手を彼處より接吻致しますると。そして若し貴女樣がお許し下されますならば拙者はこれから參りましてぢき〳〵にお手を接吻致し、拙者の力に叶ふことで貴女樣の御命令下さることならば、何なりともお役に立ちたう存じまする。と。そしての、サンチョーよ、その言ひ方によう氣を附けての、この使ひは決して、お前の諺を入れんやうに氣をつけねばならんぞよ』『丁度』またさういふ事をしさうな人間でござりますからの！』とサンチョーは言つた、『まアそり

や私にお任せなされ！あんな身分の高いえらいお姫様へお使ひするのは、これが初めてゞもござりませんわい。』

『ドゥルシネア姫へ書面を持つて參つた外には、お前がこんな使ひをしたとも思はれんがの、少くとも拙者の用では。』と、ドン・キホーテは言つた。

『そりやその通りでござります、』とサンチョーは答へた、『けれど、良い勘定方には抵當は入りません、また御馳走のある家ぢや、料理を手早にしますわい。これはな、私にや何事についても言ひ聞かしたり戒めたりなさるにや及ばんちうこッでござりますわい。私ア何でもござれで、また何でも少しづゝア知つとりますからの。』

『サンチョー、そりや私もさう思ふぞよ。行つてうまくやつて呉れい。吉左右を待つぞよ。』とドン・キホーテは言つた。

サンチョーはダップルの並の歩調を無理やりに、全速力を出させて進んだ。そして、その美しい女狩人の立つて居るところへ來つて驢馬を下り、その人の前に跪づいて言つた、『お美しい奥方様、あそこに居られまするお侍は「獅子の騎士」と申しまして、私の主人でござります。また私はその家來で、村ではサンチョー・パンザと呼ばれてをりまする。この獅子の騎士様は、つひ此の間までは「憂ひ顏の騎士」と謂はれてをりましたが、その方の申されるには、何うぞ貴女様のお許し御承諾御滿足を持ちまして、どうか貴女様があの方へお目通りを御許し下され、お身分の高いお美しい貴女様へ何かの御奉公を致したい願ひをば叶へて下さりますやうにご申されます。もしこの願ひを叶へて下さりますするなら、必ず貴女様の名譽も揚がることになりませうし、また主人に於きましてもこの上ない御慈と仕合せに預る次第でござります。』



『御家來さん、お前さんはほんとうに、』とその婦人は言つた、『こんなお使ひに必要な儀式を殘らず守つて口上を述べましたの。お立ち、わたし等もその方のことはこゝで疾うからいろ〳〵承つて居つたことですから、その憂ひ顏の騎士ともいはれる偉い騎士の從士ともあらう方が、さうして跪づいて居られるのはいけません。さアさ、お立ちなさい。そして、こちらの別莊に滯在中は私の爲めにも良人の公爵の爲めにも何うぞ力を藉して頂きたいと、さうお前の御主人へ言つて下さい。』

サンチョーは、この婦人の美しさや、その氣高い樣子や、慇懃さに魅せられて立ち上つた。しかしこの婦人が、自分の主人の憂ひ顏の騎士のことを聞いて居ると言つたので殊に嬉しかつた。この婦人が獅子の騎士と呼ばなかつたのは、疑ひもなくつひ近頃この名乘を初めた爲めである。『御

家來さん、あの、』とその公爵夫人（しかしその名前は知られてゐない）は訊ねた、『お前さんの御主人は、今出版されて居る物語の中に出なさるあの、工夫に富める紳士、ラ・マンチャのドン・キホーテと仰有つて、ドゥルシネア・デル・トボソとかいふ御婦人を思ひ人にして居られる御仁とは違ひますか？』

『貴女樣、同じ人でござりますよ。』とサンチョーは答へた、『そしてその物語の中に、サンチョー・パンザちう名前で書いてござります、いや書いてある筈でござります。その家來が、この私でござりますよ。もしさうでなかつたら、その搖り籠の中で、卽ち活版所で私を變へたのでござりましよ。』

『これは面白いことになりました、』と公爵夫人は言つた、『パンザさんよ、さア行つて御主人へ、何うぞ私どもの邸へお出で下さい、私どもにはそれに越した喜びはありませんと、さう言うて下さい。』

サンチョーはこの喜ばしい返事を得て、非常に喜んで主人のところへ歸つて行つた。そしてこの身分高い奥方の言葉を殘らず主人に傳へてから、その田舍びた言葉でその婦人の世にも稀な美しさ、その上品で氣輕で、而も慇懃なことを天まで屆くほど褒め上げた。ドン・キホーテは素早く



馬上に身を固め、鐙を緊と踏み、兜の目庇を直して、ロシナンテに拍車を當た。そしてその公爵夫人に挨拶する爲めに欣然として進んだ。公爵夫人は、ドン・キホーテが近づいて來る間に、その良人の公爵を呼んで來させてその事情を話したのである。この夫婦は孰れもこの物語の第一編を讀んでゐたので、それに依つてドン・キホーテの狂氣のことは知つてゐた。そこで彼等はドン・キホーテと近付きにならうとの、この上ない喜びと待ち遠しさとを感じつゝ待つてゐた。それは彼の氣分をよく迎へ、萬事その言ふなり次第にして、自分等の家に逗留して居る間は、その讀んだ數多の書物に書かれてある一般の禮儀作法に從つて、武者修業者として彼を待遇しようといふ心からであつた。蓋し公爵夫婦は非常に騎士道の本を愛讀してゐたのである。

やがてドン・キホーテは兜の目庇を上げてやつて來た。そして馬を下りようとするらしく見えたので、サンチョーは大急ぎて主人の鐙を抑へに行かうとした。しかしダップルから下り際に、不仕合せにも荷鞍の繩に足を捕へられて、何うしても脫くことが出來なかつた。そこで顏や胸を地べたに擦り着けてその繩に足を引ッかけたなりになつてゐた。鐙を抑へて貰はずに降りることに慣なかつたドン・キホーテは、もうサンチョーが自分の爲めに鐙を抑へに來て居ること、思ひ込んで跳び降りたので、ひよろ〳〵とのめつた。そしてロシナンテの鞍もその後から從いて來た。こ

れは明かに腹帯の緩かつた爲めで、ドン・キホーテと鞍とはもう共に地上に倒れた。これはドン・キホーテに取つて大失策であつた。彼は、今尚足枷に足を突き込んで居る不仕合せなサンチョーを、口の中で夥しく罵つた。公爵はその狩人等に、この騎士と從士とを助けに行けと命じた。そこで彼等は、ひどく振り落とされたドン・キホーテを起したが、すると彼は跛を引き〳〵一生懸命の力でその貴き夫婦の前に進み寄つて跪づいた。しかし公爵は、どうしてもこれを許さなかつた。それどころか自分も馬を降りてドン・キホーテに進み寄り、抱擁しつゝ言つた、『憂ひ顏の騎士殿、貴方が私どもの領内へ來られ匆々、今のやうな不祥事に出逢はれたことを深く悲しみます。しかし從士の不注意からは往々にしてこれ以上の災難が起ります。』

『閣下よ、御面謁を賜はる際に出來ましたことは、』とドン・キホーテは答へた、『たとへ奈落の底に達するまで落ちて止まりませいでも、決して不幸とは申されません。御面謁の光榮によりまして其處から救ひ出され引き上げられるからでござりまする。あの忌々しい拙者の家來めは、馬の腹帶を緊り縛つて置くよりも、舌を緩めて無禮なことを喋舌る方が得意でございます。しかし、たとへ拙者は倒れて居りましても起き上つて居りましても、徒歩で居りましても乘馬して居りましても、常に貴方樣の御用と、御令室たるこの公爵夫人樣の、美の女王たり嬌德の女王たるお方の御用を勤めるでござりませう。』



『ラ・マンチャのドン・キホーテ殿、まア靜かに、』と公爵は言つた、『あのドーニヤ・ドゥルシネア・デル・トボソ姫の居られるところで、他の婦人の美しさを褒めるはよろしうござるまい。』

既にその縛れから解き放されてゐたサンチョーは、その側に立つてゐた。そして主人がまだ答へる暇のないうちに、口を出した、『そりや何うしてもいやとは言へません。あのドゥルシネア・トボソのお姫樣は非常に容貌よしといふことア、何うしてもさうしとかにやなりませんわい。けれど野兎はまるで思ひもよらんところから跳び出します。また天然といふものア、瀨戶物師と同じで、土塊から澤山の器を拵へるちうこと聞いて居りますわい。そして一つ美しい物を拵へる人は二つでも三つでも百でも拵らへられるちうことでござります。こんな事を申しますのは、この公爵夫人樣は、あのドゥルシネア・デル・トボソのお姫樣に決して劣りはなさらんからぞござりますぞよ。』

ドン・キホーテは公爵夫人に向き直つて言つた、『貴女樣は定めし、拙者の家來よりもお喋舌りな道化た家來を伴れた武者修業者はこの世に居らなんだとお想ひなされませう。もし貴女樣が、拙者に二三日御奉公を仰せつけ下さりますれば拙者の申すことが本當ぢやとお分りになりませう。』

これに對して公爵夫人は答へた、『そのサンチョーさんが道化て居るのは非常に結構なこと、存じます。それは拔け目のない、しるしでございますから。ドン・キホーテ樣、この道化て居るとか、氣轉の利くとか申すことは、貴方もよう御承知の通り、才智の鈍い者にはないことでございますよ。それで私は、このサンチョーさんが道化て氣轉の利いて居られるのを見まして、拔け目のない人と判斷いたします。』

『そしてお喋舌りで。』とドン・キホーテは附け加へた。

『さうあればよう〳〵結構です。』と公爵が言つた、『澤山の道化たことは少しの言葉では言はれませんからの。しかし、餘り話に時刻を移してはいけぬ。さア憂ひ顏の大騎士殿——』

『獅子の騎士と仰有らにやなりません、』とサンチョーは言つた、『もう憂ひ顏もなければ、そんな役もござりませんからの。』

『それでは、獅子の騎士と申さう。』と公爵は續けた、『さア何うぞ獅子の騎士殿には直ぐ近くの私の城へお出で下さい。城内へ參つて、貴方のやうにすぐれた方にふさはしい御歡待を致しませう。それは私と夫人とが、いつも武者修業者がお出でになれば催しますことですから。』

やがてサンチョーはロシナンテに鞍を置き腹帶を締た。そこでドン・キホーテはロシナンテに打ち跨り、公爵も立派な馬に乘つた。そしてその二人の中に公爵夫人を置いて、その城へと出發した。公爵夫人は、サンチョーの拔け目ない言葉に限りない興を覺えたので、自分の傍へ彼を呼びたいと望んだ。サンチョーは少しも強られる必要なく、ずん〳〵彼等の間に割込んで行つて、その話し仲間の四人目になつた。これは公爵と公爵夫人との非常な娛みであつた。この夫妻は、こんな武者修業者と口修業の積んだ從士とをその城に迎へることを稀有の仕合せと考へたのである。

## 第三十一章　は數多の大事件を傳へる。

サンチョーは何うやら公爵夫人のお氣に入つたと思つて、滿足の絕頂に達した。それはドン・ディエゴーやバシリオの家で受けたやうな待遇を、この夫人の城内でも受けられること、思はれたからである。彼は常に豐かな生活を好んだ。そして御馳走の機會が來れば何時もその前髪を摑んだのである。さても、この物語は傳へて言ふ、彼等がその別莊かお城かへ到着せぬうちに、公爵は一足先きに行つて、殘らずの召使ひにドン・キホーテ歎待の方法を敎へ込んだ。そこでドン・キホーテが公爵夫人と共にその城門に到着するや、足まで𨻶く緋繻子のモーニング、ガウンといふ物を着た二人の下男が別當かゝ、急いで出迎へをした。そしてドン・キホーテがまだ見付けも聞付けもしないうちに、彼の兩手を取つてかう言つた、『閣下、どうぞ公爵夫人樣をお馬からお下し下されますやうに。』ドン・キホーテはそれに從つた。そしてこの事に就て彼と夫人との間には、夥しい辭令が交された。しかし遂に公爵夫人の決心が勝を制した。彼女は、かゝる名高い騎士の手にかゝる不必要な荷厄介をかけることは氣恥かしいと言つて、公爵の手を揩いてはこの馬から決して降りぬと拒んだ。遂に公爵が出て來て夫人を助け下した。そして彼等が廣い中庭へ入ると、二人の美しい侍女たちが進んで來て、非常に地のよい赤い布で掩へた大きなマントをドン・キホーテの身體に投げかけた。それと同時に、この中庭のある限りの廻廊には、この家の男女の召使が列をなして『入らせられませ、武者修業者の花よ、粹よ！』と歡呼しながら殘らずの者が、いや、その大部分が香水入りの小球をドン・キホーテや公爵や公爵夫人に投げつけた。これ等はすべてドン・キホーテを仰天させた。そして彼が、たゞの幻想に依つてゞなく眞實自ら武者修業者であると感じもし信じもしたのは、これが初めてゞあつた。それは、彼が物の本の中で讀んだ往日の騎士たちと同一の待遇を自ら受けたからであつた。



サンチョーはダップルを擲りッ放しにして、公爵夫人の後につき廻つて城内へ入つた。しかしその驢馬を獨りぼッちにして打棄つて來たので良心が咎めるところから、一人の賤しからぬ侍女に近づいた。この女は外の侍女等と一緒に公爵夫人を出迎へに來てゐたのである。サンチョーは低い聲でこの女に言つた、『ゴンザレズ樣、いや、貴女樣のお名は何と仰有らうと――』

『私はドーニャ・ロドリヴェズ・デ・グリジャルバと申しますよ。』とその侍女は答へた、『何の御

用ですかえ、お前さん？』これに對してサンチョーは答へた、『どうぞお願ひでござりますから、お情にこのお城の門へ出て行つて下さいまいかの。あすこに私の鼠色の驢馬が一疋居りますで、どうぞあれを廐へ入れさせて下され。それとも御自分で入れて下され。あの小さい可哀さうな畜生は、ほんとに怖ぢけ易うて、とても獨りぢや居れませんからの。』

『御主人もこの御家來のやうに賢ければ。私等はとんだ安物を買ひましたわい。』とその女は言つた、『お前さん、出て行きなさい。お前をこゝへ引ッ張つて來た人も忌々しい人ぢや。あッちへ行つて、自分で自分の驢馬の世話をするがよい。私たちこのお家の侍女は、そんなお仕事にや慣れて居りませんよ。』

『それでもな、ほんとに、』とサンチョーは答へた、『私アいろ〳〵の物語に明るい私の旦那樣から聞いたのぢやが、旦那樣がランスロットの物語を話しなさる時に、そのランスロットがブリテンから來た時には、お姫樣たちはその馬の世話をなされたさうぢやよ。そして私の驢馬のことゝなりや、ランスロット樣の馬とでも私は換へッこはせんつもりぢや。』

『お前さんが道化師なら、』と侍女は言つた、『そんなおどけ事は仕舞うて置いて、それを見本に



してお金の儲かるやうな場所で出すがよい。私からはたゞ無花果（藤蔓のしるし）しか貰へませんよ。』

『どッちにせよ、そりやうんと熟れたのでござりましよの。』とサンチョーは言つた、『そのお年齡ぢやア、まさかその御習練に脫りはござりますまいからの。』

『畜生ッ、』と侍女は眞赤に怒つて言つた、『私が年を取つて居らうと居るまいと、それは神樣と御勘定をすることで、お前の知つたことぢやないよ。この大蒜詰めの惡黨めッ！』その聲が非常に高かつたので、公爵夫人に聞えた。夫人はふり向いて侍女を見ると、非常に興奮した樣子で眼を光らして居るので、誰れと口論して居るのかと訊ねた。

『この奴さんとでござります。』と侍女は言つた、『この男は私に頼みますことに事を缺いて、自分の驢馬がこのお城の門のところに置いてあるから往つてそれを廐へ入れて呉れと申すのでござりますよ。それに一つの例を引きまして何處のことかは存じませんが——何でもランスロットとかいふ人にはお姫樣がたがおかしづきなされ、そのお馬には侍女が世話をしたさうでござりますす。そればかりか、おしまひには、この私を年よりぢやと申しまして。』

『もし私にでもそんなことを言はれたら、この上もない無禮と思ひまそうぞよ。』と公爵夫人は言つた。そしてサンチョーに向つて言つた、『サンチョーさん、お前はね、このドーニャ・ロドリ

グェズは非常に年若でその頭巾を被つて居るのは老年のせいではなく、唯品位や習慣の爲めぢやと思はねばなりませんぞ。』

『もし私が惡氣であんな事を申しましたのなら、この先き不仕合せになつても構ひやしません。』とサンチョーは言つた、『私はた〳〵餘りあの驢馬のことが心配になつたから申しましたのぢや。そしてあれをお願ひしますにや、このドーニャ・ロドリグェズ樣より御親切なお人はないと思ひましたんでな。』

じつと耳傾けてゐたドン・キホーテはサンチョーに言つた、『サンチョー、場所がら構はずそんな口をきいてよいものか？』

『旦那樣、』とサンチョーは答へた、『人は皆な何處でゞも自分の言ひたいことを言はにやなりませんわい。私はこゝでダップルのことを思ひましたから、こゝでそのことを申しましたのぢや。もしあれのことを廐で思ひましたら、廐でさう言うたでござりませう。』

これを聞いて公爵は言つた、『サンチョーが全く正しい。サンチョーの落度を捜す道理は少しもない。ダップルには十分飼料をやるからサンチョーは安心して居れい。ダップルもサンチョーのやうに待遇させるからの。』



ドン・キホーテを措いて外の殘らずの人々には面白〳〵思はれるこんな會話が交されてゐる間に、彼等は階段を上つて行つた。そしてドン・キホーテは高貴な金襴や錦を懸けてある一室へと案内された。六人の侍女等は彼に小姓のやうに侍づいて、その鎧を脫がせた。彼女等は凡て公爵や公爵夫人の仕込みで、そのなすべきことも、ドン・キホーテを待遇ふすべも、ちやんと心得てゐた。そこでドン・キホーテは自ら一個の武者修業者として彼女等に取り扱はれてゐることを見且つ信ずることが出來たのである。鎧を脫いでしまふと、ドン・キホーテは身體にきッちり合うたズボンと羚羊の胴着だけになつて、痩せこけてひよろ長い姿になつた。その雙方の頰は内側で互に接吻してゐるやうに見えた。その姿は、もし彼に侍づいて居る侍女等がくす〳〵笑ひをせぬやうにと注意されてゐなかつたら（これはこゝの主人夫妻からの特別な指圖の一つであつた）、彼女等は吹き出してしまつたであらう。彼女等はシャツを着せて上げますからすッかり裸になりなさいとドン・キホーテに言つた。しかし彼は、身だしなみは勇氣と等しく武者修業者に似つかはしいものであると言つて、何うしてもそれを肯じなかつた。しかし彼は、そのシャツはサンチョーに渡して下さいといつた。彼はサンチョーと共に、善美を盡した寢床のある一室へと退いて、着物を脫いでシャツを着た。

やがてサンチョーと二人きりになつたので、彼は言つた、『おい羽の生へ立ての道化者奴、甲羅の出來た頓馬奴ッ。お前は先きのやうなあんな氣高い尊敬すべき侍女を侮辱したり怒らせたりしてよいと思ふのか？あの時はダップルのとなど考へるべき時であつたかい？またこんな身分の高い方々が、私等をこれほど丁寧に扱らうて下さるのに、私等の獸に飼料も十分呉れさうでないと思うたのか？サンチョーよ。後生ぢやから、愼んで居れよ。そしてお前のその下卑た土百姓の生地を此處の人等に感づかれんやうにせいよ。この業人奴、家來が丁寧で上品であればあるだけ、主人も一段と敬はれるといふことを、よう心に覺えて居れよ。また高貴の方々の他の人々に優つた何よりの一得は、自分と同じやうに立派な家來がかしづくといふことぢや。お前には分らんのか——お前は目先きの見えん男ぢやし私は運の惡い人間ぢや！——お前が人に下品な土百姓ぢやとか鈍いのろまぢやと見て取られると、自然私までが山師かペテン師ぢやと人に疑はれることになるといふことが？おい、おい、サンチョーよ。くれ〴〵もこの過ちの種を除くことぢやぞ。お喋舌や道化の癖のついた者は、一旦足を滑らせるが最後、見ッともない道化者になつてしまふのぢや。その舌を抑へて、口から滑り出ぬうちに言葉を考へ慮るがよいぞ。そして今こそ私等は、神の助けと拙者の武勇とに依つて、名譽にも福運にも非常な立身の出來るやうな地位に居るといふことを、よう心に留めて居るがよいぞよ。』



サンチョーは一生懸命自分の口を閉ぢてたとひ自分の舌を噛み切つても、場所がらに嵌らぬことや無分別なことは一言も言はぬと誓つた。そして自分の口からは決して自分等の素性を喋舌り出しはせぬから、この點では御安心なさつて宜しうござりますと言つた。

ドン・キホーテは着物を着てしまつて、飾帶に劍を吊るして、その上から眞赤なマントを引ッ掛け頭の上には侍女等の與へた綠繻子の帽子を被つた。さてかうして大廣間へと行つた。其處には大勢の侍女等が、同じ數づゝ二列に整列して、各々手洗ひ道具を持つてゐた。そして頻りに慇懃な辭令を用ひて、その道具をドン・キホーテに差し出した。やがて饗應係の執事とともに十二人の小姓がやつて來て、もう主人等は貴方をお待ち受け申して居りますから御案内しませうと言つた。そしてその大勢の眞中に彼を入れて大業に堂々と別室へ案内して行つた。そこには贅を盡した食卓が設けてあつて、その上には唯四人分の食事が仕度してあつた。公爵夫人と公爵とは戸口のところまで出て彼を迎へた。彼等と一緒に一人の嚴めしい僧侶がゐた。それは貴族の家を支配する僧侶の一人で自ら貴顯の生れでないところから、貴顯の人等に立居振舞を教へるすべを決して知らぬ者の一人で、また自分自身の狹い心でいつも貴族の大量を測る者の一人で、且つまた

自分等の支配してゐる家庭の經濟に、嘴を容れる場合には客臭いものにしてしまふ人々の一人であつた。全く、公爵や公爵夫人とともにドン・キホーテを迎へに出た嚴めしい僧侶は、上に述べるやうな者であつたに違ひない。

鄭重な挨拶が夥しく取り交された。そして遂にドン・キホーテを中に圍んで、彼等は食卓に就かうとて進んだ。公爵はその首席をドン・キホーテに強ひた。ドン・キホーテはこれを斷つたけれども公爵の切なる懇請によつて遂にそれを受けねばならなかつた。

僧侶はドン・キホーテの向ふ側に座つた。そして公爵と夫人とはその兩側に座つた。この間中サンチョーは、この偉い人たちが自分の主人を敬ふのを見て吃驚り仰天して立つてゐた。そして自分の主人を食卓の主席に就かせる爲めに、公爵とドン・キホーテとの間に交された鄭重な無理強ひを殘らず見てから、サンチョーは言つた。『旦那樣、もしお許しがござりますれば、私は座席のことで私等の村に起つた話を一つ申し上げませうわい。』

サンチョーがかう言ふのを聞いた途端に、ドン・キホーテはまた何か馬鹿なことを言ひ出すに違ひないと思つて身が顫うた。サンチョーは主人のこの樣をちらと見て、その心持を推量しつゝ言つた、『旦那樣、私ア外れ道もせにや、場所柄に適はんことも言ひませんから、御心配はなされますなよ。私はな、たつた今貴方樣が私に、口が多いとか少いとか惡いとか良いとかと、言うてお聞かせなさつたことア忘れちやをりませんぞよ。』



『サンチョー、拙者は何も左樣なことは覺えて居らぬ。何なりと言ひたいことを言ふがよい、たゞ手短に言ふがよい。』とドン・キホーテは言つた。

『さてとサンチョーは言つた、『私のお話し申さうといふことは、全くほんとの話で、そりやここにござる私の旦那樣のドン・キホーテ樣が私に嘘を吐かせはなさりませんわい。』

『拙者が聞いて居らうと、好きなだけ嘘を言ふがよいぞよ、サンチョー』とドン・キホーテは言つた、『拙者はお前を止めはせんからの。しかし、言はうとすることをよう考へるがよいぞよ。』

『私はもう、鐘撞きが大丈夫な鐘撞き臺にをる位、何遍も何遍も考へに考へぬきましたわい。そりやこれからの話で分りましよ。』とサンチョーは言つた。

『閣下、この阿呆は愚にもつかぬことを無暗と喋舌りますから此處を追ひ出すやうに御命じ下された方が宜しいかと存じます。』とドン・キホーテは言つた。

『公爵のお生命にかけてもサンチョーは寸時も私の側から伴れ去つてはなりません。』と公爵夫人は言つた、『私はこの人が非常に愼み深いのを存じて居りますので、大層氣に入つて居るのでご

ざいますよ。』

『貴女様のお行末のお慎み深いやうに祈ります。』とサンチョーは言つた、『私は何一つ智慧を持つて居りませんのに、貴女様がそれを褒めて下さるからの。けれど私がお話し申したい話はかうでござります。私の村の或る紳士が御馳走に人を呼んだことがござりました。この旦那は大した金持らでお負けに出が良うござります、何故といふと、あのメディナ・デル・カムポのアラモー家の出で、ドーニャ・メンシア・デ・クヰニヨーネスと夫婦になられました。その方はドン・アロンソー・デ・マラニョーンといふサンチャゴ黨のお侍の娘さんでござりました。そのお侍はヘラデュラ（スペインの一ラガ東方の港）で溺れ死にましたが——これに就ちや、もう何年か前に私等の村で喧嘩が起りまして、私の一番よう覺えてをるのア、私の旦那のドン・キホーテ樣もそれに掛り合ひなされたことで鍛冶屋バルバストローの息子のやくざ者のトマシローが傷を受けましたよ。——なア私の旦那樣、こりや皆本當でござりましよがの？貴方樣が生きた證據ぢやで、こゝにござる御歷々樣がたが私を嘘つきのお喋舌りぢやと思はッしやれんやうに、さうぢやと言うて下されませよ。』

『今のところでは、』と僧侶は言つた、『お前さんは嘘つきとよりもお喋舌りぢやと思ひますわい。しかし追々何う思ふことになるかは私にも分らんテ。』



『サンチョーよお前がそれほど澤山の證人や證據を引いて來るからには、是が非でもお前が本當のことを言ひよるに違ひないと言ふより外はないのぢや。』とドン・キホーテは言つた、『まア話しを進めい。そして手短かに濟ますがよい。そんな話しぶりでは、これから二日掛つても果てさうにないからの。』

『この人の話は端折つてはいけません。』と公爵夫人は言つた、『それどころか、私が許しますから、知つて居るだけを話さねばなりません。たとへこれから六日のうちに終りませんでも。もしそれほど長くかゝりましたら、それこそ私には、これまでにない面白い時でございませう。』

『そんなら、貴方樣がた、お話し致しましよ。』とサンチョーは言つた、『今申したその旦那が——その人は私は自分の手のやうによう知つて居りますがの、私の家とその人の家とは矢の届く程もないので——その旦那が貧乏ぢやが評判のよい一人の日雇取りを御馳走に呼びましたのぢや……』

『ずん〳〵進めなさい、お前さん。』と僧侶は言つた、『そんな話しぶりで行つたら、あの世に着くまでは話は果てまいよ。』

『都合がよかつたらその半分もかゝらずに仕舞ひませうよ。』とサンチョーは言つた、『そこでさ

てその日雇取りは、今申したその呼んだ紳士の家へやつて行きましたのぢや——何うぞあの世で浮びますやうに。もうあの人も死んだわい。そしてその臨終はほんとに天使のやうでござりましたさうな。私アその場に居りませんのでな。丁度その時私はテムブルクへ收獲に行つとりましたので——』

『ほんとに、お前さん、』と僧侶は言つた、『そのテムブルクから大急ぎで歸りなされ。そしてその紳士の葬ひはせずに話を片づけなされ。もしお前さんが、その上幾つもの葬式をしたくないならの。』

『さてもそれから、こんなことが起りました、』とサンチョーは言つた、『その旦那と日雇取りとが御馳走の席に着く段になりますとな——ほんに今は一番はッきりあの人等の姿が見えるやうに思はれる——』

このサンチョーのうねりくねりした滯りがちの話し風に、一方ではお寺さまは業を煮やして居るし、一方ではドン・キホーテがむしやくしやして腹を立てゝ居たので、公爵と公爵夫人との面白がりやうは非常であつた。

『さうして、今私が話しました通り、』とサンチョーは續けた『今申した通り、その二人が御馳走の席に着く段になりますと、日雇取りはその旦那さんに上座に着きなされと言張るし、旦那の方ではまた、私の家ぢやア私の言ひ付け通りに從はねばならんからお前さんが上座に着きなされと言ひ張りました。けれど日雇取りは自分の丁寧なことや行儀のよいことを自慢にして居りますんで、金輪際それを聽き入れませなんだ。そこでとう〳〵その旦那は癇癪を起して、その男の肩を引ッ摑んで、「この鈍間め、こゝへ坐れ。私ア何處へ坐らうとお前の頭ぢやわい」と言うて、力づくでその上座へ坐らせました。話と申しますのは、これだけでござります。ほんとにこりや、この場に外れた話ぢやないと、私ア思ひますがの。』



ドン・キホーテの日焦した顏色はいろ〳〵に變つて、とう〳〵碧玉のやうに見えるまで斑色になつた。公爵と公爵夫人はドン・キホーテを恥ぢしめまい爲めに、その笑ひを抑へた。それは二人ともサンチョーの憚らない話をそれと見拔いたからである。そして話題を變へて、この上サンチョーにつまらぬ事を言はせまいとて、公爵夫人はドン・キホーテに向つて何かドゥルシネア姫の新しい消息がありましたかと訊ねた。また、貴方のことだから必ず澤山の巨人や曲者を征伐なさつたに違ひないので、近頃にそんな者等をドゥルシネア姫へ贈られましたかと訊ねた。

これに對してドン・キホーテは答へた、奥方、拙者の不運は初めはありましたが終りはあるま

いと思はれます。拙者は數多の巨人を討ち從へ。また不屆者や曲者等をドゥルシネアの許へ贈りましたけれど、あんな奴等は何處でドゥルシネアに面會されることでござりませう？あのドゥルシネアが魔術をかけられて想像も及ばん程の醜い百姓女に變へられてをりますのに。』

『はてな、私にや世界第一の美人と見えますがの、』とサンチョー・パンザは言つた、『ともあれ、その素早いことや跳ぶ事にかけちや輕業師にも負けはなさりませんぞい。ほんとに、公爵夫人樣ドゥルシネア樣は地べたから驢馬の背中へ猫のやうに跳び上られますぞよ。』

『サンチョーよ、お前はその魔術にかけられてござるのを見たのか？』と公爵は訊ねた。

『何、見たかと言はれますかい！』とサンチョーは言つた、『はて、その魔術のことを初めて考へ附いたのはこの私でなうて誰れでござりましよ？あの人は金輪際魔術などにかゝつちや居りませんわいの。（このサンチョーの言葉は公爵〔の侍臣でなくてはならぬ〕』

僧侶は巨人とか曲者とか魔術とかと彼等が話して居るのを聞くと、この人こそ豫て公爵がその人の物語を讀んで居られラ・マンチャのドン。キホーテに違ひないと氣懸りになつて來た。そして僧侶はこれまでにも度々そんな痴けた事を讀むのは馬鹿らしいと言つて、公爵の讀まれるのを非難したのであつた。



そこで、彼はその懸念がいよ〳〵確かであると信じたので、公爵に向つて非常に怒つて言つた。

『閣下、貴方樣はこの仁の行ひに就いて神樣へお申開きをなさらにやなりませんよ。このドン・キホーテかドン・薄馬鹿か何か知りませぬが、この人は貴方樣がかうしてその狂氣妄想を增長するやうに奬勵なされて、御自分が思うてござるやうなそんな阿呆である筈はございません。』

それからドン・キホーテに向き直つて言つた、『また、この鈍間さん、誰がお前さんの頭の中へ、自分は武者修業者であるとか巨人を征伐したり曲者を生捕つたりしたといふ考へを吹き込みましたかい？まアよい加減の時分に家へ歸りなさるがよい。またかう申すことも手遲れにならねばよろしいがの。家へ歸つて、子供があれば子供でも育て上げて家業に精を出しなさい。そして知る人知らぬ人殘らずの物笑ひの種になつて後指さゝれながら彼方此方とほッつき廻ることを止めなさるがよい。ほんとに武者修業者といふものが今でも昔でも世にあつたといふことをお前さんは何處で見附出したのですかい？このスペインの何處に巨人が居りますかい？ラ・マンチャの何處に曲者が居りますかい？また魔術をかけられたドゥルシネアとか、その他お前さんの言ふ阿呆らしい物が何處に居りますかい？』

ドン・キホーテはこの僧侶の言葉にじッと耳傾けてゐた。そして彼が言ひ止めたと見て取るや

否や、公爵と公爵夫人との面前をも憚らず、憤怒の眼つきと激昂の顔色凄じく突ッ立ち上つた。そして言つた――。しかしこの答辯はそれだけで一章を成すに足るのである。

## 第三十二章　ドン・キホーテが彼の非難者に與へし答辯、並びにその他嚴肅にして滑稽なる出來事ども。

そこでドン・キホーテは突ッ立ち上つて、宛ら水銀を服藥した人のやうに、頭の天邊から足の爪先までぶる〳〵顫はせながら、急きこんだ烈しい聲で言つた、『只今のこの場所柄といひ、公爵閣下御夫婦の御面前といひ、且つは貴方の從はれる御職掌に對して今迄とても只今も拙者が捧ぐる敬意によつて、拙者の正しき義憤をば手に訴へることだけは控ませう。かやうな理由もあり、また誰も知る通り文人の武器は婦人の武器と同じく辯舌にありとは拙者も承知して居ること故、拙者もこの舌を以て對等に貴方と鎬を削りませう。貴方のお口からは、口汚ない罵詈ではなうて善良な助言をこそ承ることゝ思ひましたに、是非ないことぢや。凡そ眞心からの善意の非難は、その樣子も口吻も全く別でなければならぬ。ともかくも、人前で、しかもそのやうに亂暴に拙者を非難されるといふは穩當な非難の埒を超えてをる。一體穩當な非難は、亂暴でなく柔

和にあるべき筈ぢや。またその責むる罪の何たるかをも辨へずに、眞向から罪人を馬鹿阿呆呼ばはりするは宜しくないことぢや、さア拙者に如何やうな愚なところが見えたればとて、拙者を惡罵し譴責し、拙者に妻子の有る無しをも知らずに、家へ歸つて妻子の世話をせよとは申されたのぢや？何とか彼とかして他人の家へ入り込んで、その主人を支配するやうな地位を手に入れるより外には何もすることはないのですか？また大方何處かの狹い僧院の窮屈な中で生長して、二三十リーグ四方より外の世界は覗いたこともないくせに、輕卒にも騎士道を云々したり武者修業者を批評したりする資格がありますかい？快樂を求めるではなく、善良な人を限りなき生命に達せしめるやうな、骨の折れる勞苦を求めてこの世を遍歷して月日を送るのが、これが無益な仕事であらうか？これが無駄な暇潰しであらうか？若しも紳士や公卿や華族や貴族が、拙者を阿呆と見做したら、拙者はこれを取り返しのつかぬ侮辱ぢやと思ひませう。しかし、騎士道の徑に入つたことも踏んだこともない坊主どもが拙者を馬鹿と思はうと、三文にも思ひませんわい。拙者は騎士ぢや。そして神意これを許し給はゞ、騎士として死ぬる心ぢや。或る者は傲慢な野心の大道を往き或る者は卑しい奴隸のやうな追從の道を往く。また或る者は僞り深い僞善の道を往き或者は眞の宗教の道を往く。しかし拙者はわが宿命に導かれて武者修業の難路を辿り、この職に從うて富を



藐み名譽を重んじる。拙者はこれまで危害を救ひ、不正を正し、無禮を罰し、巨人を征伐し、怪物を退治した。拙者は。戀をしてをるが、それは別な理由からではない。さうあることは武者修業者の責務であるからぢや。しかし拙者は戀をしては居るが、肉情の戀人では更々ない、高潔無垢な戀人ぢや拙者の志は常に、凡ての人に善を爲し何人にも惡をなさずといふ立派な目的に向うて居る。此の志を有ちこれを行ひこれを修養する者が、阿呆と呼ばれてよいであらうか、その判斷は何うぞ公爵閣下並に公爵夫人閣下にお任せ致したう存じまする。』

『やれまアっ』とサンチョーは叫んだ、『私の旦那樣、もうその上言ひ譯はなさるなよ。もうその上に言ふことも考へることも頑張ることもありやしませんわい。それにこの旦那が今のやうにこの世にや後にも先きにも武者修業といふものは無かつたと仰有つても何の不思議もありやしませんわい、自分の喋舌つて居る物のことを何にも知らんとして見りや。』

『もし、大方お前さんが、あの本に書いてあるサンチョー。パンザぢやろな御主人から島を貰ふ約束をしたといふ。』と僧侶は言つた。

『へい、私でござりますとサンチョーは言つた。『それにまた世間の人並に其島を受けるだけの資格のある人間でござりますよ。私といふ男はな——「善い人に附け、さうすればお前も善い

人になら」といふ風な人間で、また「お前を育てた者よりかお前を養ふ者に」といふ風な人間で、また「善い木に倚りかゝる者は、善い蔭に蔽はれる」といふ風の人間でござりますわい。私は善い旦那樣を賴りにして、もう幾月も一緒に廻國しましたんぢや。そこで大抵私も旦那樣のやうになることでござりましよ。旦那樣も萬歲なら、私も萬歲ぢや。旦那樣も治める國に事は缺きなさるまいし、私も治める島には缺きますまいからの。』

『さうぢや、サンチョーよ、たしかにさうぢや、』と公爵は言つた、『私の自由になるなか〳〵重要な島の總督役を、ドン。キホーテ殿の名に依つてお前に授けるからの。』

『サンチョーよ、御前に行つて跪づけ、そしてその賜物のお禮に閣下のお足を接吻するがよからうぞ。』とドン・キホーテは言つた。

サンチョーはそれに從つた、之を見て僧侶は全く癇癪を起して食卓から立ち上つて叫んだ、『私の此法衣にかけて、閣下はこの業人共と同じ大馬鹿者でござると申し上げたい位です。正氣の人々がこの者等を氣違ひと認めますからには、この者等の氣違ひなのに何の不思議がござりませう！貴方樣はこの者等と御一緒にお出でなさるが宜しい。私はこの者等がこちらに滯在する間は、自宅に引籠つて居りませう。そして私の手が癒せぬものを癒さうとするやうな馬鹿骨は折り



ますまい。』そしてこの上一と言も言はず一口も食はずに行つてしまつた。公爵や公爵夫人の宥めも全く彼を止める力がなかつた。いや、實は公爵は餘り彼を宥めることが出來なかつたからである。思ひがけない立腹が可笑しくて、餘り宥めることが出來なかつたからである。

公爵は思ふ樣笑つてしまふと、ドン。キホーテに向つて言つた、『獅子の騎士殿、貴方は御自分の爲めになか〳〵しっかりと答辯をなされました。あれではもうあの侮辱に對してあれ以上腹癒せをするところはございません。尤もあれは一見侮辱のやうに見えますが、實は少しもさうでありません。それは貴方もよく御承知の通り、婦人が侮辱を與へ得ぬと同樣に僧侶もこれを與へ得ませんからです。』

『それは御尤もです、』とドン。キホーテは言つた、『その理由は卽ち、自ら侮辱を受けることなきものは、何人にも侮辱を與へることが出來ぬからです。女や小供や僧侶は、自ら護ることが出來ませぬから、たとへ侮辱を受けても恥辱を感じません。閣下もよう御存知の通り、侮辱と恥辱との間にはかやうな相違があるからです。卽ち恥辱はそれを與へるだけの力があつてこれを與へ、これを持續して行く人から出て來ます。侮辱は何處からでもやつて來ますが、しかしそれに恥辱は伴なひません。その一例を擧げますと、往來にうッかりして或る人が立つて居る。そこへ武器

を持つた十人の男がやつて來てその男を打つ。とその男は劍を引き拔いて男らしい振舞をする。しかし衆寡敵せずして、思ふまゝに働けず仕返しをすることが出來ぬ。この場合にはその男は恥辱を受けたのでなく、唯侮辱を受けたのです。いま一つの例を擧げるとこの事がいよ〳〵明かになりませう、一人の人が背後向きになつて立つて居るところへ、他の人がやつて來て毆る。毆つて置いて忽ち逃げ出す。毆られた男はその後を追ッかけて行つたがとう〳〵追付かぬ。この場合は毆られた方は侮辱を受けたのですが、恥辱は受けません。恥辱は必ず持續さるべきものでありますからの。もしその毆つた方がコッそりと不意打ちに毆りはしたものゝ、更に劍を拔いて正々堂々と打ち掛つたとすればその場合には毆られた方が侮辱と恥辱とを同時に受けた譯です。つまり騙し打ちを喰うた點で侮辱を受け、毆つた方が逃げ出さずに正々堂々と自分の態度を持ち堪へて行つた點で恥辱を受けたのです。そこで忌々しい試合の揚に從へば拙者は、侮辱を受けたかも知れません。しかし恥辱は蒙りません。女や小供にはこの恥辱を人に蒙らする力もなければ、傷ける力も正々堂々と立ち向ふ力も決してないからです。またこれは宗教に關係して居る人々に於いても全く同じ事です。この三種の人間は攻守共に武器を有ちません。そこで彼等も自然自衞はせねばなりませんが、他人を損なう權利は有ちません、そこで唯今拙者は侮辱を受けたかも知れん



と申しましたが、決してさうではないと言ひ直します。恥辱を受けることの出來ぬ者は、まして人に恥辱を與へるとは出來ませんからぢや。この理由によつて拙者は、あの上人の言はれたとで立腹すべき筈もなければ、また立腹も致しません。唯あの人がも少し玆に止まつてござれば好かつたと思ひますのぢや。さうすればあの人が、昔も今もこの世の中には武者修業者といふのものはなかつたと、想像し主張したその誤謬をば說き明してやれましたらうからの。あの人の口幅たい言ひ草を、もしやアマディスなり數限りない彼の子孫が聞き付けやうものなら、たしかにあのお方は良い目に逢ひはなさらなんでござりませう。』

『私もそりや保證致しますわい、』とサンチョーは言つた、『あの人等は屹度一太刀で、柘榴か熟れた瓜のやうに、あの人の頭から爪先まで眞ッ二つに立ち割りましたろぞい。あの人等はあんな串戲を辛抱するやうな奴ぢやござりませなんだでの。誓言、あのモンタルヴンのレイナルドスがあの小男の言ひ草を聞きでもしたら、向ふ三年の間口の利けんやうに口元を引ッぱたきましたろわい。ほんとに〳〵、あの人とあの人等と言ひ合ひさせたら、あの人等の手でどんな目に逢ふか思ひ當りましよわい！』

サンチョーに耳傾けてゐた公爵夫人は笑ひ死にしさうになつた。そして心の中で、サンチョー

の方が主人よりも餘計に道化てゐて餘計に氣違ひであると思つた。そして丁度その時そこに居合せた可なり澤山の人々も同じやうに考へた。

やがてドン・キホーテは氣も靜まつた。そして食事も終つた。卓布が取り片附けられると四人の侍女が入つて來た。その一人は銀の金盥を、今一人はやはり銀の水注を携へ、三番目のは眞白なタヲルを二た筋肩に引ッかけ、四番目のはその白い手（それは確かに白かつた）を肘のところまで出して圓いナポリ石鹸を持つてゐた。金盥を持つた侍女はドン・キホーテに近寄つて落ち着き濟ましてづう〳〵しく、その金盥を腮の下へ差し込んだ。ドン・キホーテはこんな禮儀に面喰つて、手の代りに髭を洗ふのがこの國の習慣であらうと、無言のまゝさう推察した。そこでドン・キホーテは精一杯その腮を突き出した。と同時に水注は水を注ぎ出し、石鹸を持つた侍女は手早く彼の鬚髯に石鹸を塗り着けた。するとその石鹸の泡は非常に白かつたので、その鬚髯ばかりか、この順良しい騎士の顔にも眼の上にも、雪白の飛沫を打ちかけた。そこで止むを得ず兩眼を閉ぢて居らねばならなかつた。この事に就いて何も知らなかつた公爵と公爵夫人とは、この異樣な洗ひ方の結果如何にと待ち構へた。その理髮係の侍女は、彼の顔の上に手の幅ほどの深さも石鹸の泡を立てると、もう水が無くなつた風をして、水注を持つた侍女に水を持つて來よと命じ

た。その間ドン・キ ホーテは待つてゐた。その侍女は水を取りに行つた。そしてドンキホーテは想像もされぬほどのこの上ない異様な滑稽な有様でそのまゝにして置かれた。そこに居合せた人々は可なり大勢あつたが皆ドン・キ ホーテを見守つてゐた。半ヤードも頸を差し延ばして、その頸がまた並外れて黒く、兩眼は閉ぢ、鬚髯には石鹸の泡を一杯塗り立てゝゐるその様子を見れば、實に一大奇觀であつた。そこで非常な謹愼によつて、僅かに皆々笑ひを抑へることが出來たのであつた。この串戯の發案者たる侍女等は、皆伏し眼になつて、その主人夫婦の顔をよう見上げなかつた。また主人夫婦に取つては、笑ひと怒りとが心の中で相闘つてゐた。そこでこの侍女等の横着を罰してよいか、またドン・キ ホーテのこんな様を見せて面白がらせて呉れた點で彼女等を褒めてよいか、何れとも判斷が附かなかつた。

遂に水注を持つた侍女が歸つて來た。そして彼女等はドン・キ ホーテの洗ひ方を終へた。それからタオルを持つた侍女が非常に念入りに彼の顔を拭いて乾かした。そして四人の侍女等は皆揃つてドン・キ ホーテに鄭重至極な敬禮式退をして、まさに退かうとした。この時公爵はドン・キホーテがこの串戯を看破らぬやうに思つて、金盥を持つた侍女を呼んで言つた、『さア、私も洗うて呉れい。よく氣を注けて十分水を用意しておくのだよ。』氣轉の利く素敏こいその侍女は、公爵の

ところへやつて來て、丁度ドン・キホーテにしたやうにその金盥を差し出した。そして彼女等は直ぐに石鹸を塗つて洗つた。そして拭いて乾かしてしまうと、敬禮して退いた。後になつてから公爵はもし彼女等がドン・キホーテにしたやうに公爵にもしなかつたならば、彼女等の無禮を罰する積りであつたといふことが分つた。しかし彼女等は公爵を同じやうに洗つたことによつて巧みにその贖ひをしたのである。

サンチョーはこの鬚洗ひの禮式を非常に注意して視てゐた。そして獨り言を言つた、『やれ〳〵もしお侍さまの鬚同樣に家來のも洗うて呉れるのが、この國の風であればえゝになア！ほんとに〳〵私アさうして貰ひたうて堪らんのぢやに。そしてその上に剃刀を一と當て當てゝ貰へば、いよ〳〵以ての御親切ぢやと思ひましたよ。』

『サンチョー、お前は何を獨り言を言うてゐますの？』と公爵夫人は訊ねた。

『奥樣、私はな、かう言うとりましたのぢや、』とサンチョーは答へた、『他の華族樣の御殿では、御馳走が濟むと手を洗ふ水を下さるちうことア何時も聞いて居りましたが、鬚洗ふ水のことア聞いたことござりませんわい。長生きしとりやお陰でいろんなことが見られますわいの。しかし長生きしとる人は澤山惡いことに逢ふといふのも、ほんとぢや。尤もこんな鬚洗ひに出逢ふのは



苦しいよりか氣持のえゝもんぢやが。』

『サンチョーよ、心配おしでない。』と公爵夫人は言つた、『侍女たちにお前も洗つて上げるやうに、また必要なら湯桶にも入れて上げるやうに言ひ付けますからの。』

『私は鬚だけで滿足致しますよ、とにかく只今のところでは。』とサンチョーは言つた、『後のことはまた後で神樣が授けて下さりましよ。』

『執事、このサンチョーさんの御所望をきいてお上げ。そしてその望み通りにしてお上げ。』と公爵夫人は言つた。

執事は、サンチョー殿の御命令通りに何事でも致しませうと答へた。さう言つて執事はサンチョーを伴れて食事をする爲めに出て行つた。その一方で、公爵と公爵夫人とドン・キホーテとは後に殘つて、いろ〳〵樣々の話に耽つた。しかし皆騎士道や武者修業に關したことであつた。

公爵夫人はドン・キホーテに貴方は非常に記憶力がお強いやうに見えますから、ドゥルシネア・デル・トボソ姫の美しさやその御容貌を詳しく目に見えるやうに話して下さい。世間でその姫の容貌を喧しく褒めたゝへてゐる評判から判斷すると、この婦人こそこの全世界でいや、このラ・マンチャ中で第一の美人に違ひないと信ずるからと言つた。

ドン・キホーテは公爵夫人のこの所望を聞いて吐息を吐いて言つた、『もし拙者が自分の心臓を引き抜いて貴女様のお眼の前にありますこの卓の上の皿に載せることが出來ましたら、とても思ひも寄らぬこのことをお話しする苦しみをば、この舌に見せずに濟みませうものを。卽ちその心臓にこそあの婦人の姿は十分に描かれて居るでございませう。しかしどうしてこの拙者が、あの類もないドゥルシネアの美貌を細やかに描き述べることをようしませう。この重任は拙者よりももッとすぐれた人の雙肩にかゝつて居ります。これには、パレーシウスやティマンティースやアペリース〔以上三人はギリシアの有名な畫家〕の筆やライシッパス〔ギリシヤの彫刻家〕の鑿を用ゐてこそ、あの婦人の美しさを畫にも描き大理石や青銅にも彫り出すべきで、またシセロニアンやデモスゼニアンの雄辯を以てこそ、その美しさを讃美すべきでありませう。』

『ドン・キホーテ樣そのデモスゼニアンとは何のことでございますか?』と公爵夫人は訊ねた、『それはつひぞ聞いたことのない言葉でございますが。』

『デモスゼニアンの雄辯とは、デモスゼニースの雄辯のことで、シセロニアンとはつまりシセロの雄辯といふことです。この二人は世界の最大雄辯家でございました。』

『全く、』と公爵は言つた、『そんなお訊ねするとはお前は何うかして居るに違ひない。それはさう



として、ドン・キホーテ殿、もしドゥルシネア姫の容貌を御話し下さるならば私等は實に悅ばしう思ひます。たとへその大體の輪廓だけでも吃度絶世の美人をも羨ましく思はせるに足りませうからの。』

『そりやもうお話しする筈でございますがな、』とドン・キホーテは言つた、『しかし、つひ此間ドゥルシネアの身になりかゝりました災難に依つて拙者の心の眼は朦朧となつて居りますので、その災難と申すのが、その容貌をお話し申さうよりも寧ろそれを歎きたいと思ふやうなものでございますのぢや。まア閣下お聞き下さい、つひ數日前のこと、拙者は此三度目の出發に當りましてドゥルシネアの祝禱や承認や許可を得ようと思ひまして、あの婦人に一寸挨拶に行きましたのぢや。するとあの婦人は拙者が求めてをつたのとは全く別種の人間になつて居りました。あの婦人は魔術をかけられまして、姫君から土百姓に、美しい者から醜い者に、天使から惡魔に、馥郁たる香から惡疾の匂に、上品から下品に、高貴の婦人からはねッ返りのお轉婆に、つまり一口に申せばドゥルシネア・デル・トボソから下卑たサヤゴー生れの阿魔に變つて居りましたのぢや。』

これを聞いて公爵は聲高く言つた、『おや〳〵! 一體誰がそんな不埒を働きましたのぢや? 一體何者なれば、世界を喜ばしたるその美しさを奪ひ取り、世界を魅したるその優雅と晴れやかさ

を奪ひ、世界に光を注いでゐたしとやかさを奪ひ取りましたのぢや？』

『何者と仰有るか？』とドン・キホーテは答へた、『それは嫉みから拙者を迫害する腹黒い大勢の魔術使ひの中のものでなうて何者でございませう——その魔術使ひこそは、善人の功績を葬つて無に歸せしめ、惡人の行爲を賞讃し賞揚する爲めに此の世に生れて來た忌々しい種族でございます。魔術使ひ等はこれ迄も拙者を迫害しました。現在もまだ迫害して居ります。また將來とても此の拙者と拙者の高潔なる騎士道とを、無限忘却のどん底へ沈めてしまふまではその迫害を續けるでございませう。あの魔術使ひ等は、拙者が最も手痛く感ずると知り抜いた箇處を損なひ傷つけるのでございます。一體武者修業者から、その思ふ婦人を奪ひ取るといふことは、卽ち物を見る眼を奪ひ取ることでございます。光を與へる太陽、生命を繋ぐ食物を奪ひ取ることでございます。これまでも度々申したが、今も再び繰返して申します、婦人を有たぬ武者修業者といふものは葉のない木、土臺のない建物、その『源』をなす實體のない影でござりますわい。』

『それはもう御尤も千萬です。』と公爵夫人は言つた、『けれどそれにしても、つひ近頃世間の喝采を博して出版されましたあのドン・キホーテの物語に據つて見ますと、私の思ひ違ひでさへござりませんなら、貴方は一度もドゥルシネアを御覽になつたことがなく、その姫君といふのは全



くこの世に居られる方でなく貴方の空想から出來た姫君で、貴方がお頭の中で孕んでお産みになつて、貴方のお好きなやうに申し分のない美貌に御拵へ上げになつたものと思はれますが。』

『その點ではいろ〳〵申すべき事もございます。』とドン・キホーテは言つた、『この世にドゥルシネアといふ者が居るか居らぬかは、またドゥルシネアが空想上の者であるかないかは、神樣が知つて居られます。こんなことは、その證據をどん詰りまで突きつめて行くべきものではありません。拙者はこの婦人を頭の中で孕んだり產んだりしたのではありません。尤もその婦人が必ず存在するとは思うて居りますがの。それは世界に洽く名を揚げるやうな一切の美質を一身に收めた婦人で、その美しさには瑕なく、威嚴はあれど傲慢ならず、優しうて而もつゝましやかに、慇懃なるが故に優雅にして育ちのよきが故に慇懃に、また最後には高い血統を受けて居る。蓋し美しさは生れの卑しい美人に於てよりも、良き血統のものに在つて眞に完全無缺に輝き出で立ち優るものでござりますからの。』

『それは御尤もです。』と公爵は言つた、『しかしドン・キホーテ殿、私は貴方の事績を書いた物語を讀んで、何うしても申さねばならんことがありますので、一寸言はして頂きたい。あの物語から推論しますと、エル・トボソ中に、或ひはその近くにドゥルシネアといふ婦人が居るものとし

まして、そしてまた貴方が唯今仰有つたやうに、その婦人は最高度に美しいものとしまして、さてその婦人の家柄の高いといふことでは、オリアナ家やアラストラジヤレア家やマダシマ家や、その他さういふ風な、貴方もよう御存じの通り物語に澤山出て來る、あゝいふ高貴の家柄などゝは同格ではないと思はれますがな。』

『それはかうお答へしませう、』とドン・キホーテは言つた、『卽ちドゥルシネアは己の力で出來た女です。それにまた、美德はその血統を改めます。且つまた身分の低い美德は身分の高い惡德よりも尊敬せられ貴ばるべきものです。それのみかドゥルシネアは冠を戴き笏を持つ女王ともならばなり得るだけのものをその身の中に有つて居ります。抑も美しくして德高き婦人の功德は、更に優れたる奇蹟を行ふの力があります。そしてあの婦人は形よりも德の上から非常な富を有つて居りますのぢや。』

『まア、ほんとうにドン・キホーテ樣、』と公爵夫人は言つた、『貴方は仰有ることにすべて用心に用心を重ねて、丁度諺に申すやうに、『手に測鍾を持つて』仰有りました。これから後は、今現在エル・トボソにドゥルシネアといふ方が住んで居られるといふとや、その御婦人は非常に御美しくて御身分が高くて、ドン・キホーテ樣程の騎士をさへ仕へさせるだけの資格を備へて居られることや、私の力の及ぶ限りの讃め言葉で、その御婦人を讃めねばならぬといふことを、私自身も信じませうし、また私の家の皆の者にも、またもし必要がございますなら公爵にも信じさせるやうに氣を附けませう。けれど私はまだ一つの疑念を霽らすことが出來ません。そして幾らかサンチョー・パンザを恨めしく思はずには居られません。その疑念と申しますのは、先きに申したあの物語にサンチョー・パンザが、貴方樣の御用でそのドゥルシネアといふ御婦人へ御手紙を持つて行きました時に、その御婦人が麥を篩うて居られたと書いてあることなのです。これでは私にはその御婦人の御身分が疑はされます。』



それに對してドン・キホーテは答へた、『奥方樣、貴女は拙者の身に起りますことは殘らず、いや、その大方は、他の武者修業者に降りかゝる事と違うて、普通の定規を脫してをると申すことを御承知下さらねばなりません。それは測り難い宿命の意志に依つて導かれてをりますか、それとも嫉み深い魔術使ひ等の惡意によつてゞありますか分りません。一體、名高い武者修業者たちの凡てが、いやその大方が、何か特別の天稟を有つて居りますことは、既に公然の事實でござります。その例としてはあのフランスの十二貴族の一人で名高いローランドです。あの人に就ては、また或る者は魔術に感じません、また或る者は斬つても斬れぬ不受身を有つて居りま

その左の足跡の外は傷がつけられなかつたと謂はれて居ります。それも唯、丈夫な針先でつけられるばかりで、外の武器では何を以ても出來なかつたと申します。そこであのベルナルドー・デル・カルピオがロンセスヴレスでこのローランドを殺した際には、とても刃物で斬ることは出來ぬと見て、兩腕で地面から抱へ上げて首を絞めました。それは昔ハーキユリーズが、あのテラの息子であつたといふ猛烈なる巨人アンテイウスに試みた殺し樣を、折よくも思ひ出したのです。かやうなことから推論しまして、多分拙者もこのうちの孰れかの天稟を有つて居りませう。が、その不受身ではございません。何故と申すに度々の經驗に依つて、拙者の身は柔かで決して不受身ではないことが明かになつたからです。また魔術に感ぜぬ方でもありません。拙者は既に或る檻にこの身を投げ入れて見たことがございます。その檻には、魔術の力を措いてはどんな力も拙者を閉ぢ籠めることが出來ませなんだ。しかし拙者はその檻から無事に出て參りました。そこで何うしても拙者を傷け得る力はないと信ずるやうになつて居ります。それで、とても拙者の身に惡いたくらみを加へることは出來ぬと見て取つた魔術使ひ等は、その仕返しを拙者の最も愛する者の上に加へました。そして拙者の生命の籠れるドゥルシネアの身を虐待して拙者の生命を奪はうとしてをりますのぢや。それ故拙者の從士がドゥルシネアへ拙者の手紙を持參した際には、あの魔



術使ひ等があの婦人を世の常の百姓娘に變へて麥飾ひのやうな卑しい仕事をやらせて置いたことと確信致します。しかし拙者は、その麥は赤麥でなく、いやそも〳〵麥ではなくて、東洋產の眞珠の粒であつたのぢやと、既に申して置きました。その證據として貴女に申し上げねばなりませんのは、つひ此の間のことエル・トボソへ赴きましたが、拙者もやはりドゥルシネアの宮殿を見出すことが出來ませなんだ、そしてその翌日、拙者の從士のサンチョーはドゥルシネアの本當の姿を、卽ち世界一の美しい姿を見ましたが、拙者には賤しい醜い百姓娘と見えました。またつゝましやかさの權化とも申すべきドゥルシネアが、實に口汚ない者に見えました。さういふ風で拙者は現在魔術にかゝつてをりませんし、また凡そ判斷の及ぶ限りでは、とても魔術にかゝりさうにはございませんので、魔術にかけられたのは、打ち惱まされたのは、取り變へられ變貌されたのは、あの婦人でござります。拙者の仇敵は拙者への怨みをあの婦人に仕返ししました。それであの婦人が元の姿に返るまでは拙者は絶えずその爲に涙の中に暮しませう。何人もあのドゥルシネアが麥を篩たり篩うたりして居るといふサンチョーの話を氣に懸けて下さらぬ樣にとて斯樣な事を申すのです。あの魔術使ひ等は拙者に對してドゥルシネアを變へて見せましたからはサンチョーに對しても變へて見せたとて何の不思議もございません。ドゥルシネアは貴顯高貴の出で

エル・トボソの數ある古い良い貴族の中から出ましたのぢや。そこで確かに、この比類なきドゥルシネアの天稟は薄からざるものでございます。この婦人に依つてそのエル・トボソの町は、恰もヘレン（トロイ戰爭の誘火となりし絶世の美人）に依つてのトロイの如く、ラ・カノ（男に誘惑され女の名ある艦隊に出づ）に依つてのスペイン國の如く、その名稱や理由に於ては一段と立ち優つて、未來永劫名高き町と歌はれませう。また別に、貴方がたに御承知置きを願ひたいのは、あのサンチョー・パンザは、凡そ武者修業者に仕へた中の最も道化た從士の一人ぢやと申すことでござりまする。時々あの男は非常に鋭敏なのか機敏なのかを試めして見分けるのも一興でございます。あの男は惡黨と銘を打たれるほどの意地の惡い惡だくみも有つて居りますし、また鈍間と見られるやうなへまもやりまする。あの男は何もかも疑ひ、何もかも信じます。方に愚直のどん底へ眞つ逆樣に陷るのかと思へば、天まで上るほどの拔目のないところを持つて出て來ます。とにかく拙者はたとへ一つの市を添へて換へようと申し込まれても、あの男と他の從士とを取り換へようとは思ひません。それ故拙者は、貴方が彼に授けられた總督として、あの男を遣つてよいか惡いかと疑うて居りまするのぢや。尤もあの男には總督の役に適する確かな才能があるとは認めますがの。彼の頭を少し仕上げましたら、王がその稅を處理するやうに、いかなる政治をも樂々と處理して行きませう。夫にま



た總督を勤めるにはさう大した才智や學問の入りやうがないことを、拙者等は十分の經驗に依つて疾うに承知して居りますのぢや。そこらには本も讀めるか讀めん位の總督が幾らでも居つて、それで大鷹（盲人の登に用ひられしならんといふ）のやうな治め方をして居るのぢや。要はつまり、善良な志を有つて萬事を正しく行ふといふ心さへあればよいわけぢや。何故と申せば、凡そ總督たるものは、その爲すべき事に助言を與へ指導を與へる人物に窮することはありませんからの。丁度あの軍政長官が自らは法律家でないけれども、法律顧問の助けを得て裁判をするのと同じことぢや。サンチョーに與へる拙者の助言はこれぢや、卽ち決して賄賂を取るな、決して自分の權利を讓るなと。それにまだ小さい事は數ありますが、それはその時になつてから、サンチョーの利益にもなり治める島の爲めにもなるやうに申し聞かせませう。』

公爵と公爵夫人とドン・キホーテとが會話をこゝまで進めて來た時に、この殿中に物々しい人聲や非常な騷ぎ聲が聞えた。そしてサンチョー・パンザが眞ッ赤に怒つて消魂しくこの室へ飛び込んで來た。彼は拭布を涎掛のやうな風に懸けてゐた。彼の背後には數人の僕が、いや、もッと適宜に言へば數人の炊事男や下男どもがつゞいた。その中の一人は水の一杯入つた小桶を携へてゐたが、その水はその色や濁つたところから見て、明らかに皿の洗ひ汁であつた。この桶を持つた男は何

處までもサンチョーの行くところへ追ひ廻して來て、頻りに執念くその桶をサンチョーの腮の下へ當てようとした。それから今一人の炊事番は頻りにサンチョーの鬚を洗はうとして居るらしかつた。

『お前たち、これは一體何うしたのだえ？』と公爵夫人は訊ねた、『何うしたのだえ？　お前等はこの人を何うしようといふのだえ？　何です！　この方は總督の候補者だといふことを忘れたのかえ？』

それに對して理髪係りの炊事番は答へた、『この旦那は何うしても鬚を洗はせて下さいません、これはこちらの風ですのに、そして公爵の殿樣もこの人の御主人も洗はせなさつたのに。』

『えーい、洗はせるわい、』とサンチョーは非常に怒つて言つた、『けれど私アもつと綺麗なタヲルともつと綺麗な灰汁でやつてほしいのぢや。そんな汚れた手ぢやいかん。私の旦那樣は天使水（香水の事）で洗うて私は惡魔の灰汁で洗ふちう程、そんな差別が二人の間にあるものかい。何ぼ國の風でも宮さまの御殿の風でも、人に厭な思ひをさせねばこそ結構なのぢや。けれどこの人等の洗ひ樣と來たら、苦行するより酷い。私の鬚は綺麗ぢやから、そんな風にして洗うて貰ふにや及ばんわい。誰でも彼でも、私の髪の毛に、そりやこのお鬚さまのこッちやが、一本でも觸つたり洗うたりしようもんなら、この拳骨を腦天へ叩き込んでやるぞよ。こんな禮儀ぢやの石鹸塗りぢやのは、丁寧な接待ぢやなうてまるで串戲ぢやわい。』



公爵夫人はサンチョーの憤怒を見、その言葉を聞いて、笑ひ死にさうであつた。しかしドン・キホーテは、薄汚ないタヲルを懸けて炊事場の蟲どもに取り圍まれてをるサンチョーの見るも哀れな樣子を見て甚だ面白からず思つた。そこで彼は發言の許しを乞ふもの、如く公爵夫妻に一揖して、そのわい〳〵連に向つて調子を改めて言つた、『あいや、皆の衆！その若者には構はずに銘々の出て來た處へ、いや、何處へなり勝手なところへ引き取りなさい。拙者の從士は他人樣に劣らず綺麗ぢや。またその桶どもは、その男には不向きな缺け德利のやうな物ぢや。拙者の言ふことをきいて、その者には構はずに置いて貰はう。その者も拙者も串戲は分らぬ方ぢやからの。』

サンチョーは主人の言葉の尻を捉へてつゞけた、『いや〳〵、皆の衆、やつて來てこの田舍者に串戲をして見るがえゝ。なんぼ私でもまさか靜として我慢はすまいぞよ！皆の衆、さア樂なり何なり好きな物を持つて來て、私のこの鬚を梳いて見るがえゝ。もし鬚の中から、何か汚ない物でも出て來たら、くる〳〵坊主に剪み取らせてやるわい。』

この間中笑ひつゞけてゐた公爵夫人は、これを聞いて言つた、『サンチョー・パンザの言ふのが

尤もです。そして何時もこの人の言ふことは尤もでありませう。この人は清潔ですから、その言葉の通り洗うて貰ふ必要はありません。そして此方の仕方が此の人の氣に入らねば、氣に入るやうにして上げねばなりません。それに、お前たち清潔法の勵行者は、非常に不注意で考へなしでありましたよ。こんなお方のこんなお髮を洗ふのに、純金の金盥や水注、それに麻のタヲルなどを持つて來いで、桶だとか木の椀だとかを持つて來るとは橫着と言はずに置かれませうか。けれど、どうせお前等は性質の良くない育ちの惡い意地の惡い人たちですから、武者修業樣の御家來衆に對して猜みを懷かずには居られませんよ。』

橫着な下僕等も彼等と一緒に來てゐた執事さへも、公爵夫人の言葉を本氣だと思つた。そこで彼等はサンチョーの頸から拭布を外して、幾らか恥かしさうに極り惡さうな顏をして、サンチョーをそのまゝにして皆々出て行つた。茲に於いてサンチョーは絶體絶命と思はれたこの危難を無事に脫したのを見て、公爵夫人の前に走り寄り跪づいて言つた、『えらい奧方樣からはえらいお慈を頂かれまする。貴女樣の今日のこのお慈はたゞもう私が武者修業の位を受けまして一生涯この身を貴女樣のお役に立てるより外に、御思報じの致し方はござりません。私は日雇取りのサンチョー・パンザと申します。私には女房も子供もござりまして、家來奉公を致して居りますわい。



もしこんなことをして貴女樣のお役に立ちますことなら、私ア貴女樣のお言ひ付けを待たずに御奉公を致しましよ。』

『サンチョーよ、お前が禮儀作法の學校で行儀よう振舞ふことを學んだのは一目で分ります。』と公爵夫人は答へた、『それを碎いて言へば、お前はドン・キホーテ樣のお胸の中で躾けられたのちやといふ事が一目で分ります。ドン・キホーテ樣は、申すまでもなく貴族の粹、禮儀の——お前の言葉で言へば禮儀の花ですよ。こんな御主從の御運こそ目出たかれと祈ります！一方は武者修業の龜鑑、一方は忠臣の手本！さア、サンチョーさんお起ち。私はお前のその丁寧さに報ひる爲め殿樣がお前に御約束なされた總督の役を出來るだけ速く授けて下さるやう願うて上げますよ。』

茲でその會話は終つた。そしてドン・キホーテは晝寢をする爲めに退いた。しかし公爵夫人はサンチョーに向つて、もし非常に眠くないなら一緒に來て、自分や侍女たちと一緒に非常に涼しい室でこの午後を送らぬかと言つた。サンチョーは答へて、實は自分は夏の日盛りにはいつも四五時間寢るのが習慣であるけれども、貴女樣への御奉公とあれば、せめて今日一日だけでも一生懸命に眠らぬやうにして見ませうと言つた。そして彼は出て行つた。公爵はドン・キホーテを武者修業者として取り扱ふことに就いて新に命令を下した。そ

れは昔の武者修業者を待遇す習ひであつたと、さま〴〵の物語が傳へてゐる通りに、そのまゝ一點一劃も間違ひなくすることであつた。



## 第三十三章　公爵夫人とその侍女等がサンチョー・パンザと爲したる眞に閲讀注目に價するおもしろき問答のこと。

物語の記すところに據れば、サンチョーはその午後晝寢をしなかつた。そしてその約束を守る爲めに晝飯も碌に終へないうちに、公爵夫人を訪づれた。夫人はサンチョーの話を聞くのが面白いので、自分の傍の低い腰掛に彼を坐らせた。尤もサンチョーは禮儀を守らうと思ふばツかりに、そこに腰を卸さうとしなかつた。しかし公爵夫人はサンチョーにお前は總督としてここに坐り、そして從士として話さねばならぬ、それはその孰れから見ても、お前はたとへあの勇者シード・ルイ・ディアズの椅子（彼がトレードの會場で腰掛けたといふ非常な椅子）にでも坐る値打があるからであると言つた。サンチョーは肩をすくめ、その命に從つて坐つた。そして殘らずの侍女たちは彼の周りに集つて、何を話し出すかと固唾を飲んで待ち構へた。しかし先づ口を切つたのは公爵夫人であつた。そして言つた、

『さア、もう私たちばツかりになつて洩れ聞く者もないから、もしこの總督樣が近頃出版になつ

た勇士ドン・キホーテの物語から起る私の心の疑ひを霽して下されゝば、どんなに私は嬉しからう。第一は、このサンチョーさんがドゥルシネアに、卽ちドゥルシネア・デル・トボソ姫に逢うたこともなければ、ドン・キホーテさんの手紙を届けたともないのに、それはあの手帖に書いたまゝモレナ連山へ置き忘れたのですから、それでありながらサンチョーさんは何うして返事やドゥルシネアが麥を篩うて居つたといふ話などを作り出したのです？あの話は全く嘘僞りで、その上あの類ないドゥルシネア姫の美名を非常に傷つけることなんですよ。こんなことは、善い御家來の人柄や忠義には全く不似合なものですよ。』

この言葉を聞くやサンチョーは一言も答へずに、椅子から立ち上つて身體を前屈みにして指を唇に當てゝ、跫音も立てずに部屋中の垂れ布を片ッ端から揚げて廻つた。それが濟むと元の席に返つて言つた。もし貴女樣、もうこゝにはこゝにござる人の外には立ち聞きしてをる間者もございませんから、今のお訊ねにも心配なしに御返答致しましよ。先づ第一に申し上げにやならんのは、私だけは、私の旦那のドン・キホーテ樣は全での氣違ひぢやと思うてをりますぞい。尤も旦那樣はな、時々えらい賢いことを立板に水でも流すやうに仰有りますんで、私でも誰れでも聞いてをる者は皆、ほんとにサタンよりも上手に言ひなさると思ひますわ

い。そりやさうでござりますが、やッぱり本當は、間違ひのないところ、旦那樣の狂うてござるちうことア確かちやと思ひますわい。さてそこで私にはこれが分つとりますので、私ア遠慮なしに旦那樣へ頭も尾尻もないやうなとを信ぜさせることが出來ますのぢや。あの手紙の返事もその一つでござりますし、七八日前の事もその一つでござります、これはまだその物語の本には書かれて居らんもので、つまり、ドゥルシネア姫が魔術にかゝつたといふ一件でござります。こりやもうあの「あの山越えて里越えて」ちう昔話のやうに、少しもほんとなこッちやござりませんけれど、旦那樣にはあのお姫樣は魔術にかけられてござると思はせるやうにしましたのぢや。』

公爵夫人はその魔術乃至瞞着のことを話して呉れよと頼んだ。そこでサンチョーはありし次第を殘らず精確に物語つた。すると聞き手たちは少からず面白がつた。そこで公爵夫人は言葉を續けて言つた、『サンチョーさんの話を聞いて見ると、私の心には一つ疑ひが起つて來ますよ。そして何やら私の耳の邊でこんな囁きが聞えて來ますよ「もしそのドン・キホーテが氣が狂うて、狂亂して、正氣を亂して居るのなら、そしてその家來のサンチョー・パンザがそれをちやんと承知しながら主人に附き從うて、當てにもならん約束を當てにして居るとすれば、全くそのサンチョーこそ主人よりも餘計に氣違ひで餘計に馬鹿な人間でなければならぬ。さうとすると公爵夫人樣、

もし貴女がそのサンチョーに島の治め方をお任せなさるとしたら、それこそ飛んだことになりますよ。何故と申しまして、自分の身を治めることさへ知らぬ者が何うして他人を治めることが出來ませうぞ？」と。』

『なる程、貴女樣、』とサンチョーは言つた『そのお疑ひは丁度よい時に出て來ました。けれど貴女樣、そのお疑ひは殘らず、はッきりと思ふまゝに仰有つてもよござります。貴女樣の仰有ることは、そりや尤もでござります。私も賢こけりや主人を疾つくの昔に見離してをる筈なんで。けれどこれが私の運でござります。これが私の惡い廻り合せでござります。私アそれを何うすることも出來ずに、それに從いて行かねばなりません。私等主從は同じ村の者で、私は旦那のパンを食うて來ました。私ア旦那が好きで有難いと忍うて居ります。旦那樣は私に驢馬の仔を下さつた。そして何はともあれ、私は律義者でござりますからの。それで鶴嘴やショベルでなけれや、何を持つて來たて私等を引き離すことアとても出來やしません。もし貴女樣が私にお約束なされた、その總督の役を呉れるのが御厭なら、神樣が私にその役目を授けて下さらんのでござりましよ。そして大方貴女樣がそれを私に呉れたうないとお思ひなさるのが、却つて私の本心の爲めでござりましよ。私はこの通りの馬鹿ではござりますが、「蟻に羽が出來ればその身の破滅」ちう



諺を知つてをりますからの。大方家來のサンチョーの方が總督のサンチョーよりも天國へ入り易うござりましよ。「此處でゝもフランスのやうに良い麵麭が作られる」。そして「夜になると何の猫も鼠色になる」。そして「晝過ぎの二時まで朝飯の食へん人は、隨分の難澁で」「誰の胃袋も手の幅ほど太いなどといふ事はない、」諺にある通り、「藁でゞも枯草でゞも」腹は膨れます。そして「野の小鳥は神樣を賄方や料理方にしてをる」し、「クエンカの粗末な厚羅紗の四ヤールは、セゴヴィアの上等幅廣セルの四ヤールよりか暖める」。そして「現世を去つて地の下へ置かれる時にや、王樣も職人と同じ狹い小徑を旅されます」し、「法王樣の身體も寺番人の身體より餘計の地面を塞ぎはせん」、たとへその身の程にや高下がござりませうとものう。何故と申しまして、私等は墓穴へ入る時にや身體を荷造りして小さうなつて、いや、私等アさうし度うなうても、他人が私等の身體を荷造りして小さうさせて、それから——あばよお休みぢや。そこで、も一度繰返して申しますが、私が阿呆ぢやからとて、貴女樣があの島を私に下さるのがお厭なら、私ア賢い人のやうに、そんなとで氣を揉まんやうにしましよわい。「十字架の背後にや惡魔が居る」、また「光る物が皆が皆金ぢやない」、また百姓のワムバは牡牛や犁や靴の中から取り上げられてスペインの王樣にして貰うたし、ロデリックは絹の着物や遊興贅澤の中から取り上げられて毒蛇に喰されたと

いふことを、もしあの昔の俗謠の文句が嘘でないなら、私は聞いて居りますが。』

『決してあれは嘘ではありません！』と聞き人の一人であつた侍女のドーニヤ・ロドリグエズは叫んだ、『でも、あのロドリゴー王様を蟾蜍や毒蛇や蜴蜥などの一杯居る墓穴へ生きながら入れたので、二日經つと王様は悲しい弱々しいお聲で、墓の中から聲を立て——

あゝ私を嚙る、私を嚙る

私が一番罪を犯したところをば。

と言はれたといふ俗謠がありますもの。それで見ますると、このお人が蟲に咬まれるやうなら王様になるよりも日雇取りで居りたいと言はれるのも尤もでございますよ。』

公爵夫人はその侍女の愚直さを笑はずには居られなかつた。またサンチョーの言葉や諺を驚かずには居られなかつた。彼の女はサンチョーさんに言つた、『サンチョーさんは、凡そ騎士たる者が一旦約束したことは、たとへその身の生命を賭ても必ず守るものぢやといふ事は、よう御存知でせう。私の殿樣の公爵は、廻國をなさるやうな騎士ではないけれど、さうかと言うてやはり立派な騎士ですから、たとへ世間の嫉み恨みを受けようとも約束なさつた島に就ては言葉を反古にはなさいません。サンチョーさん機嫌よくしてお出で、全く思ひもかけぬ時に、その島の玉座に總督の



席に卽かれませうからの。そしてその島を上手に治めて三段重ねの錦襴の褥の上に坐つて居る他の總督に鼻を開かせませうからの。私がこの人に一つ言ひ含めて置きたいのは、その島の臣民等は皆忠義で生れのよいといふことを心に留めて、その治め方に氣を附けて貰ふことですよ。』

『人民をよう治めるちう方にかけちや、さうせいと言ふにや及びませんわい。』とサンチョーは言つた、『私はな、根が親切な性質で、貧乏人には十分思ひやりがございますからの。「麵麭を掏く人から、麵麭を盜みやうはござりません」。そしてほんとに、私や瞞着の骰子はふらせません わい。私は年取つた犬ぢやから、「來い〳〵、」といふ呼び聲は知り拔いてをりますよ。もし用があれる箇所は分りますからの。かう申すのはな、私に逢うちや善人は助けても庇うても貰へますりや寢ずに見張つてをれますわい。私の眼の先に雲をかけさしやしませんよ。私は自分の靴の擦が、惡人は足場も寄りつき端もござりませんからぢや。それに政治向きにや初めが肝心のやうに私は思ひますわい。總督になつてから十四日も經てば、その役目はもう大抵お手の物で、生れ立ちからやつて來た野面仕事よりか樂になりましよ。』

『サンチョー、お前さんの言ふ通りですよ。』と公爵夫人は言つた、『誰も生れながらに知つて居る人はない。大僧正も人間から出來たので、石から出來たのではありません。ところで今話して

る題目に、ドゥルシネア姫の魔術に歸つて、さてサンチョーさんが御主人を一つ欺さうと思ひ付いて、その百姓娘はドゥルシネアで、御主人にその女の本性が分らなんだのは、その女に魔術がかゝつて居る爲めぢやと御主人に思ひ込ませたのは、全くドン・キホーテさんをいつも窘めて居る魔術使ひの工夫であつたといふことは確かなことで、火を見るよりも明かぢやと思ひますよ。ほんとうに確かに、その驢馬の上へ跳び乘つた下品な田舍女こそ全くドゥルシネア・デル・トボソであつて、またサンチョーさんは自分では瞞したと思うて居るけれども、實は瞞されて居るといふことも、又これが本當といふことにはもはやこの上疑ひを挿む道理はないといふことも、私はある立派な證人から聞いて居ります。サンチョー・パンザさんに御承知を願ひますのは、私たちの手許にも魔術使ひは幾人も居りまして、私たちに好意を有つて世間の出來事は殘らず明白にはツきりと何の言ひ拔けも僞りもなく話して呉れるといふことですよ。そこでサンチョーよ、その素敏こい田舍娘はその時も今もドゥルシネア・デル・トボソに違ひありません。その婦人は別に何にも魔術をかけられては居りません。それで私たちの思ひも寄らぬ時にドゥルシネア姫は正體を見せるでせう。その時になつたら、サンチョーも今の思ひ違ひの夢が醒めるでせう。』

『そりや、全くさうらしうございますの。』とサンチョー・パンザは言つた、『さてかうなると、私



の旦那樣があのセンテシノスの洞穴の中で見たと仰有つたことも信じたうなりますわい。旦那樣はその洞穴の中でな、あのドゥルシネア・デル・トボソ姫樣を御覽になつたさうで、その身裝衣裳は私が面白半分にあの婦人に魔術をかけた時に見たのと丁度そのまゝでございましたさうな。そりや成程貴女樣の仰有る通り全で別であつたの淺い智慧からあんな器用な詭計が一寸の間に作り出されるとは思はれませんからの。それにまた私のへろ〳〵した話しをば一も二もなく信じなさる程に、それ程私の旦那は氣が狂うてござるとも思はれませんからの。けれど奥方樣、奥女樣はそれですぐ私を惡性者ぢやと思うちやなりませんぞよ。私のやうな鈍間が、そんな惡い魔術使ひの考へや、たくらみを見拔かにやならんちう法はござりませんからの。私は全く旦那樣のお叱りを脫りよとて考へ付きましたのぢや。旦那樣に害をする氣は毛頭ござりませなんだ。けれどそれが若し違うた方へ向いて來ましたら、私等の心は神樣にお判じを願ふまでぢや。』

『成る程、』と公爵夫人は言つた、『けれど、サンチョーさん、そのモンテシノスの洞穴の話しといふのは一體どんなことですの、聞きたいものですこと。』

そこでサンチョーはその洞穴の冒險に就て既に述べられたところを、一語も洩らさず述べ立て

た。公爵夫人はこれを聞いて言つた、『その事柄から推して見るとサンチョーさんがエル・トボソの道で見たのと同じ田舎娘をばドン・キホーテ殿がその洞穴の中で見たと仰有るなら、それは屹度ドゥルシネアでありませう。そして非常によく働く忙しい魔術使ひどもがその邊に居るのでせう。』

『さうでございますよ、』とサンチョーは言つた、『若しドゥルシネア樣が魔術にかゝつてござつたら、いよ〳〵お姫樣に取つちや大變でございます。けれど私は私の旦那樣の仇敵に喧嘩は賣りませんぞい。それは數も多いしお負けに意地の惡い奴でございますからの。實のところ私の見たのは田舍女でございました。そこで私はそれを田舍女と鑑定致しました。それが若しドゥルシネアさまでございましたとしても、私の咎にはなりません。また私の知つたことでもなけりや、私の落度でもございません。けれど皆は「サンチョーがかう言うた、サンチョーがかうした、サンチョーがあッちへ行つた、サンチョーがこッちへ來たといふ調子で、何につけ彼につけ私をいぢめよるに違ひございません。まるでこのサンチョーは何うにでもなる者のやうに、また近頃世間に本になつて出て居るサンチョー・パンザと同じ人間ぢやないやうに。本になツとるちうことア、サムソン・カラスコーさんから聞きましたよ。あの人は、ともあれサラマンカ大學校の得業士と



いふ人物でございます。そんな人物になると、ふとしたムラ氣を起すか、それとも何か非常に立派な理由がなければ、嘘は吐きませんからの。さういふわけで、誰でも私に喧嘩を賣る理由は毛頭ございません。それに私は性質の善い人間で、私の旦那が名譽は巨萬の富にも優ると言はッしやるのも聞いて居りますからの。私をその總督の役につかせて見たら、皆吃驚しましよぞよ。良い家來ぢやつた者ア、良い總督になりますからの。』

『サンチョーさんの言はれることは、全くケトー（羅馬の雄辯家）のやうな名言ですよ。』と公爵夫人は言つた、『さうでなうても、とにかく青春にして逝いたミカエル・エリノー（十八歳にて死せるスペインの文人）の心の底から出たものゝやうですよ。全くあの人の言葉で言へば、『惡き上着の下に往々にして良き飲み人在り』といふのです。』

『なる程、奥方樣、』とサンチョーは言つた、『私ア未だ惡い考へから酒を飲んだことはございません。私ア僞善者臭いところはございませんから、渴く時にやよくやりますがの。私ア飲みたい時に飲みます。また、飲みたうない時でも勸められると、除り儿帳面過ぎたり、だらしないやうに見えん位に、やりますのぢや。友達が無事を祝うて呉れる杯を受けんやうな人情無しが居りましよかいの？けれど私は靴は穿いても汚しはしませんのぢや（飲んでも腐つの。それに武者修業の家來は大

抵水を飲みますよ。この人等は、酒に眼はとめても一滴にも有りつかずに、始終森や林や草原や山や巖の中をうろつき廻つて居りますからの。』

『さうでせうとも、』と公爵夫人は言つた、『さア、もうサンチョーに暇をとらせて寢かしませう。私たちはまた後でゆつくり話すとしませう。そして成るべく早く、サンチョーの言ふ通り、總督役につかせるやうに話を纏めませう。』

サンチョーは更めて公爵夫人の手に接吻した。そして自分のダップルによく氣を附けて呉れるやうにお言ひ付け下さい、あれは私の眼の光でございますからと公爵夫人に願つた。

『ダップルとは何ですか？』と公爵夫人は訊ねた。

『私の驢馬でございます。』とサンチョーは言つた、『それを私は驢馬と言はずに、ダップルと呼び慣れて居ります。私がこの御城へ入つて來ました時に、こゝにござるこの侍女頭に驢馬の世話をして下されとお願ひ申しましたら、この方はまるで私が醜い老いぼれとでも言うたやうに怒り出しましたわい。侍女頭にやお部屋の飾りをさせるより、驢馬の世話をさせる方がもと〳〵似合うたことでございますがの。御免を蒙りまして！私の村の或る紳士はこんな風な御婦人をえらう嫌うて居りえしたわい！』

『その人は屹度土百姓に違ひないよ。』と侍女のドーニヤ・ロドリグェズは言つた、『もし紳士で生れが良かつたら、嫌うどころかお月樣の角（新月の上弦の尖端）よりも高く褒め上げるでせうからの。』

『宜しい。』と公爵夫人は言つた、『もうよろしい。お默り、ドーニヤ・ロドリグェス。そしてバンザさんも安心してダップルの取り扱ひ方は私の手に任して置くがよい。あれはサンチョーの寶ですから私は自分の眼の玉の上にでも乘せて置いてやりませうから。』

『ありや廐の中で澤山でございますよ。』とサンチョーは言つた、『あれでも私でも、貴女樣の眼の玉の上なぞには一寸でも居るやうな値打はございませんわい。そんなことを承知するよりか、私は短刀でこの身を刺したがましぢやと思ひますわい。私の旦那樣の言ひなさるやうに一枚の骨牌で成るべく餘計に損をする方が禮儀に適うて居るのでございませうが、驢馬を相手の禮儀となつたら、私等はよう身の程を考へて、えゝ加減なところで切り上げにやなりませんぞい。』

『サンチョー、お前はその驢馬をお前の治める國へ伴れて行くがよい。』と公爵夫人は言つた。

『あそこへ行けばお前の好きなやうに世話が出來るし、また働きを免じて恩給を授けることも出來ませうからの。』

『公爵樣の奥方樣、そのお言葉は決して間違うちや居りませんぞよ。』とサンチョーは言つた、『私

はな、二匹から上の驢馬がお役所へ行くのを見たことがござりますのぢや。そこで私が驢馬を一緒に伴れて行つても、何も新發明ぢやござりません。』

サンチョーの言葉はまたもや公爵夫人を笑はせて、新しき慰みを提供した。公爵夫人はサンチョーを晝寢に下らせてから、公爵の許へ行つて自分とサンチョーとの間に交された會話を物語つた。そしてこの二人の間にはドン・キホーテに串戲をしかけようといふ目論見手筈が出來た。それは珍奇な、そして全く武者修業風のものであつた。彼等は同じ風の串戲を幾つもしたが、それは何れも似合はしい悧巧なやり方で、この偉大なる物語に收められた最上の冒險となつてゐる程である。



## 第三十四章

は比類なきドゥルシネア・デル・トボソを魔術より解くべき方法を知るに至りし次第を述べる。これ本書中の最も珍しき冒險の一つである。

公爵と公爵夫人とが、ドン・キホーテやサンチョー・パンザとの對話に依つて得た娯みは非常であつた。そして彼等はこの主從に對していかにも冒險らしく見える冗戲をしかけるといふ豫ての計畫にいよ〳〵心を傾けて、彼等はドン・キホーテに對してすばらしい冒險をしかける爲めに、その骨組をば、既にドン・キホーテの話して聞かせたモンテシノスの洞穴の話から取つた。しかし殊に公爵夫人の驚いたのは、サンチョーが現に自分で魔術使ひともなつてゐながら、ドゥルシネアが魔術にかけられたといふことを動かし難い眞實として信ずるほどに愚直であつたといふことであつた。そこで公爵夫人は、その召使ひどもに萬事なすべきことを言ひ含めて置いて、六日の後ドン・キホーテを伴れ出して、宛ら一國の王者とも思はれる程の大勢の獵夫や勢子を引き伴れて狩

獵に出かけたのである。

彼等はドン・キホーテに獵服を差し出した。そしてサンチョーにも最上等の綠の獵服を與へた。しかしドン・キホーテは、自分は直ぐ樣困難な武勇の道に歸らねばならぬので、衣裳戸棚や衣類などを持ち運ぶわけには行かぬと言つて、獵服着用を拒んだ。けれどサンチョーは、折のあり次第に賣り飛ばさうと思つて、與へられる物を受けた。

當の日が來たので、ドン・キホーテは鎧を着、サンチョーは身拵へをして自分のダップルに乘つた（彼は馬を勸められたが、このダップルに離れたくなかつたので）。彼は獵夫等の眞中に身を置いた。公爵夫人はきらびやかに着飾つて出て來た。するとドン・キホーテは全くの禮儀作法から彼女の乘馬の手綱を控へてやつた、尤も公爵は彼にさうさせたくは思はなかつたが。そして遂に一行は、とある森に到着した。それは二つの高山の間に在つた。此處でいろ〳〵の持ち場や伏せ勢や路筋などを決定し、全隊を各部署に分けてから、やがて凄まじい物音、叫び聲、喚き聲を以て狩は始まつた。そこで人々は獵犬の吠え聲や角笛の音などで互の言葉も聞き取れなかつた。公爵夫人は馬から降りて、鋭い猪槍を手に取つて、いつも野猪の通る場所だと知つてゐるところへ突ッ立つた。公爵とドン・キホーテも同樣に馬を降りて、公爵夫人の兩側へ一人づゝ立つた。サンチョ



ーは皆の殿部の立場を取つた。そしてダップルから降りなかつた。それはダップルの身に何か災難が降りかゝりはせぬかと恐れて、よう手離さなかつたからである。彼等が數人の從者と共に列を作つたか作らぬに、忽ち大きな野猪を目にとめた。それは獵犬に追ひ詰められ獵夫等に追ひかけられて、齒や牙を噛み鳴らし口には泡を立てながら、公爵等の方を目掛けて進んで來た。これを見るや否やドン・キホーテは楯を腕に引き寄せ佩劍の鞘を拂うて、その猪に向つて進んだ。公爵も猪槍を提げて同じく進んだ。しかし公爵夫人は、もし公爵に遮られなかつたならば、人々の眞ッ先きに進んだであつたらう。サンチョーだけは、この大きな獸を一眼見るや、ダップルを打ち棄てゝ一生懸命に逃げ出した。そして徒にとある樫の樹に登らうと骨折つた。しかし彼が枝に取り付いて半分位登つて、尙もその頂邊まで登らうともがいてゐると、不幸にも不運にもその摑まつてゐた枝が折れた。そして落ちしなに折れ枝に着物を引つかけたので、地面へも屆くことが出來ないで宙にぶら下つた。サンチョーはこんな羽目になつて自分の綠の服が今にも裂けさうになつたので、またもしこの方向へあの野猪がやつて來たら自分はその毒牙にかゝりさうだと思つたので、彼は非常な叫び聲を出して、一生懸命に助けを呼び始めた。そこでその聲だけを聞いてその樣子を見なかつた人々は屹度彼は野猪の牙にかゝつてゐるに相違ないと思つたのである。例り長い牙

の野猪は、眼の前へさしつけられた大勢の槍先にかゝつて遂に刺し殺された。そしてドン・キホーテは、サンチョーの叫び聲を聞いて、それと覺つて振り返つて見た。するとサンチョーは懈の樹から眞逆樣にぶらさがつてゐた。そしてその直ぐ側には、苦境に在る主人を振り棄てなかつたダップルが立つてゐた。而してシード・ハメットは言ふ、余は、ダップルを見ずしてサンチョー・パンザを見たることなく、またサンチョー・パンザを見ずしてダップルを見たことがないと。彼等互の愛着と忠義とはかくの如きものがあつた。ドン・キホーテはやつて來てサンチョーを外して吳れた。サンチョーは外して貰つて地面に立つや否や、獵服の裂け目を見廻した。そして心底から悲しんだ。それは、この服を貰つたことを、世襲の財産でも手に入つたやうに思つてゐたからであつた。

その間に人々はその巨大な野猪を驢馬の背中へ投げ載せた。そしてその上に迷迭香やマートル樹の小枝を載せて、今日の勝利の獲物として森の眞中に設けられてある大きな野營所へ運んで行つた。其處には、唯一目でこれを準備させた人の身分や地位の分るやうな、非常に莊重な贅澤な食卓や料理が用意されてあつた。サンチョーは自分の服の破けた裂け目を公爵夫人に見せて言つた、『もし兎や小鳥を狩りして居つたのなら、私の服はこんな態にならずにすみましたろに。全體まア、こんな獸を待伏せして居つて何が面白いのか分りやしません。もしか身體にでも飛びつか



れたら、牙で命を取られましよに。私はいつやら聞いた

名高いファヴィラの昔を追うて
お前も喰はりよぞ熊どもに。

ちう古い歌を思ひ出しますわい。』

『それはの』とドン・キホーテは言つた、『ゴス族の王樣であつたのぢや。そして狩りに行つて熊に喰はれたのぢや。』

『それ、その通りぢやから、』とサンチョーは言つた、『私は王樣や殿樣がほんの慰みにこんな危いことをなさるのは好きませんわい。それが面白いちうたところで、何の惡いこともせん獸を殺すことぢやから、面白いわけはないと私ア思ひますぞいの。』

『サンチョー、それは全く違うてをる。それはお前の間違ひぢや。』と公爵は言つた、『一體この狩獵は誰れよりも最も王侯に適した必要なものぢや。狩は戰ひの形ぢや。狩には、味方を損はずに敵に打ち勝つといふ戰略も詐術も巧妙な謀もある。狩には、極寒極暑を忍ばねばならず、怠惰や惰眠は排斥せねばならぬ。狩をする人は、體力は强壯になり、四肢の働きは敏活になる。一口に言へば、狩は何人にも害を加へずして多くの人々に樂みを與へる仕事ぢや。それに最も良いことは

この狩は他の野遊びと違うて誰にも出來るといふものでないのぢや。尤もその他の野遊びの中でも、鷹狩だけは、これはやはり王大君主に限られて居るがの。そこで、サンチョー、お前の考へをもう一變思ひ直して見るがよい。そしてお前が總督になつた曉には、狩をして見るがよい。これは良い物ぢやと思うであらうぞよ。』

『いや〳〵、』とサンチョーは言つた、『良い總督さまは片脚挫いて家にばつかり居らにやいけません。人民に何か面倒が起つて、その用事で總督さまに逢ひに來た時に、もしその總督さまが自分の道樂から狩に行つて不在ぢやつたら、さぞ結構なこツでござりましよ。さういふ風ぢや政治向きは具合ようは行きませんわい。ほんとに貴方樣、狩や遊ひごとは總督さまよりや惰けものに似合ひます。私が慰みにせうと思ふのは、イースター節（復活祭後の七週間）に骨牌をして遊ぶことゝ、日曜日や祭日に木毬遊びをすることでござります。こんな狩などは私や身分にもふさはんし、私の本心にも合ひませんからの。』

『何うかさうなればよいがの、』と公爵は言つた、『言ふと行ふとはなか〳〵隔りが在るものぢやからの。』

『そりや、さうかも知れませんがの。』とサンチョーは言つた、『良い勘定方は抵當を心配せぬ』まだ「神樣に助けられる人は、早起きの人に優る」ぢや。そして「足を運ぶのは胃袋で、足が胃袋を運ぶのぢやない」かう申しますのはの、神樣のお助けを受けて手前のする分を正直にしてさへ行きや、屹度大鷹よりも上手に治めて行きましよわい。まア〳〵、私の口へ指を入れてさへ見たら、私に噛めるか噛めんか〳〵分りましよ。』



『この罰當りのサンチョー奴ツ！神の呪いも一切の聖者の呪ひもお前の身にふりかゝれ！』とドン・キホーテは叫んだ、『これまでにも度々言つた通り——何時になつたら、そんな諺を混ぜずにちやんと一つに纏まつた、首尾一貫した話を開ける時が來ることかゝ。どうぞ、方々、この阿呆は取り合はずにお置き下され。こいつ奴は、二つとは言はず二千もの諺で方々の魂を引き碎いてしまひませう。その諺と申すのが、こいつ奴にも天罰が下れば、それを聞きたがる人にも天罰の下るやうな、折を外れた的外れのものでございますからの。』

『サンチョー・パンザの諺は、たとへあのギリシア提督（サラマンカ大學のギリシア語教授ヘルナン・ニューネズの事、彼は一五五五年ギリシアの諺集を出版した）の諺よりも多からうと、その爲めにその格言の意味まで貶すわけには參りません。』と公爵夫人は言つた、『私にとりましては、これよりも適切に折を外れず引用される諺よりも、却つてこの方が面白いと思はれます。』

かういふ風に面白い話をしながら、彼等は天幕を出て森へ入つた。そして彼方此方の持ち場や待ち伏せの場所を訪ねなどしてその日を過ごした。やがて夜が迫つて來た。けれど、この頃の季節、それは眞夏であつたので、この季節から期待される程に明るい靜かな夜ではなく、一種の靄が夜と共にかゝつて來たので、これは少からず公爵夫婦の目論見を助けたのである。かくして日は暮れかゝり、稍たそがれを過ぎた頃に、突然森の四方は火事のやうに見えて來た。そして間もなく、此處彼處四方八方に、夥しい喇叭の聲やその他の軍樂の音が聞えて來て、恰も幾團かの騎兵隊が、この森の中を進軍しつゝある如くであつた。火焰の輝き、軍樂の響は、近くに居る人々の、また實にこの森の中に居る凡ての人々の眼を昏まし耳を聾せんばかりであつた。やがてムーア人の突撃する時のやうな鬨の聲ラーアラーの外に神はなしの意アが聞えて來、大小無數の喇叭の響、太鼓の轟き、小笛の音などが、小止みなく烈しく鳴り渡つて來たので、これ等無數の樂器の混雜せる響によつて五官を攪亂されない者はなかつた。公爵は呆氣にとられ、公爵夫人は驚き、ドン・キホーテは訝かり、サンチョー・パンザは戰慄した。そして實に、この眞因を知つてゐる人々すらも吃驚したのである。恐ろしいので皆默つてしまつた。そして惡魔の風をした一人の馭者が、角笛の代りに物凄い嗄れ聲の出る巨大な角筒を吹きながら、彼等の前を通つた。



『もし〳〵！御使者さん、』と公爵は叫んだ、『お前は誰ぢや？何處に行くのぢや？この森を進軍して居るらしいのは一體何の軍勢ぢや？』

これに對してその使者は嗄れた割れ聲で答へた、『私は惡魔ぢや。私はラ・マンチャのドン・キホーテを搜してをるのぢや。この道を進んで來よるのは魔術使ひの六軍で、これは比類なきドゥルシネア・デル・トボソの凱旋の車を引いて來るところぢや。ドゥルシネアは魔術にかゝつたまゝ來よるが、何うすればこの婦人を魔術から解かれるかその方法をドン・キホーテに敎へようとて、あの勇ましいフランス人のモンテシノスも一緒に來よるのぢや。』

『お前さんの言ふ通り、またお前さんの樣子で見える通りに、もしお前さんが惡魔であつたら、お前さんはそのラ・マンチャのドン・キホーテといふ騎士を見分けさうなものぢやがの。こゝに、お前さんの前に居られるのぢやから。』と公爵は言つた。

『神かけて私の本心にかけて、』とその惡魔は言つた、『私は一向眼に入らなんだ。餘りいろ〳〵のことに心を囚はれて居つたので、かうしてやつて來た肝心の事を忘れるところであつたわい。』

『この惡魔は屹度正直者で熱心なキリスト信者に違ひない。』とサンチョーは言つた、『もしさうでなかつたなら、あんなに神樣や本心にかけて誓言するわけがない。ほんとに、地獄の眞中にも善

人が居るに違ひないわい。』

やがて惡魔は馬に乘つたまゝドン・キホーテに向き直つて言つた、『獅子の騎士よ（獅子の爪に引ッかゝるのを見たかつたよ）、不仕合せなれど勇敢なる騎士モンテシノスは余を汝の許に遣はしてかう告げよとのことであつたぞよ、卽ちモンテシノスはドゥルシネア・デル・トボソとなん呼ぶ婦人を伴なひ來り、その婦人より魔術を解き去るに必要なる事どもを汝に示さん程に、汝は余と何處如何なる所にて出で逢ふとも、その場所にてモンテシノスの來るを待ち合はすべしとぢや。余はたゞこれだけの爲めに來たのぢやから、もはや止まる用はない。余が族の惡魔等、汝と共にあらんことを。善き天使等はこの旦那方とともにあらんことを。』さう言つて彼はその巨大な角笛を吹き鳴らしつゝ、誰れの答へをも待たずに馬を回らして行つてしまつた。

彼等一同は更に不思議に思つた。しかしサンチョーとドン・キホーテとは殊にさうであつた。サンチョーは、事實はさうでないのに、ドゥルシネアの魔術にかゝつてゐることを皆が本當にして居るので、ドン・キホーテは、モンテシノスの洞穴の中で自分の身にふりかゝつた事柄の眞僞如何を確かめることが出來なかつたからであつた。ドン・キホーテがこんな事を考へ込んでゐると、公爵は彼に言つた、『ドン・キホーテ殿、貴方は待つて居られる御つもりですか？』



『何うして待たずに居りませう。』とドン・キホーテは答へた、『たとへ地獄を擧げて攻めて來ようとも、拙者は泰然自若として此の所に待ち受けませう。』

『はて、そんなら、』とサンチョーは言つた、『今のやうな惡魔の角笛をこの上見たり聞いたりするのなら、此處に待つてをりやフランダース（物騷な所）に居るやうなもんですわい。』

今や夜は全く眞の闇となつた。そして森の中には數多の光がピカ〳〵と飛び始めた。それは恰かも地面から立ち昇る燐火が、流星のやうに大空を飛ぶが如くであつた。それにまた、堅い牛車の車輪がよく立てるやうな物凄い音も聞えて來た。その牛車の車輪の小止みないガー〳〵ギーギーと軋む音には、もしその近くに熊や狼などが通りがゝりでもすると、驚いて逃げ出しさうである。すべてこれ等の騷ぎに加へて、尙もこの動亂を增す騷ぎが起つて來た。それは今や、その森の四方に當つて同時に四組の會戰が始まつたのがどうも事實らしく思はれたからである。一方では物凄い殷々たる砲聲が轟き渡り、また一方では無數の小銃を發射して、突擊の叫喚が殆んど直ぐ近くのやうに響いた。また少し向ふには、ムーア人の鬨の聲が幾度も〳〵揚がつた。

要するに、數限りない角笛、號角、大小の喇叭、太鼓、大砲小銃などが、殊にも牛車のすさまじい響きが、轟々殷々として物凄く鳴り渡つたので、ドン・キホーテは渾身の勇を揮つてこれに當

らなければならなかつたのである。しかしサンチョーは參つてしまつた。彼は氣絶して公爵夫人の長上着の裾の上に倒れた。そこで夫人はそのまゝ彼を臥かして置いて、早速その顏へ水を打ッかけさせた。かうしたので彼は正氣がついた。丁度その時一臺の牛車がギー〳〵と音を立てゝこの場所に到着した。それはすッかり黒い覆ひ物を被せられたのろ〳〵する四頭の牡牛によつて引かれてゐた。その牛どもの角には、殘らず火の灯つた大蠟燭が附けてあつた。そして車の頂上の一段高くなつた座席には、一人の尊とげな老人が坐つてゐた。その髯は雪そのものよりも白く、腰の下まで長々と垂れてゐた。彼は黒い膠硬布の長上着を着てゐた。この車には澤山の蠟燭を灯してあつたので、その車上の物は、悉く明らかに見られたのである。その車の馭者は、やはり黒い膠硬布を纏うた二人の巨大な惡魔で、その顏は非常に物凄かつた。これを一目見るや、サンチョーは二た目とは見ぬやうに眼を閉ぢた。その牛車がその眞ん前に來るや否や、老人は高い座席から立ち上つて、大聲で言つた、『余は賢人リルガンデオぢや。』そしてその上一と言も言はずに、やがて車は行つてしまつた。その後からまたもや同じ形の車がやつて來た。それにも一人の老人が据ゑてあつたが、彼は車を停めさせて、最初の老人に劣らぬ莊重な聲で言つた、『余は賢人アルクヰフェぢや。あの正體不明のウルガンダの親友ぢや。』そして行つてしまつた。またもや別の車



が同じ步調でやつて來た。しかしその座席の占有者は、先の人々のやうに老人ではなく、筋骨逞しい屈强な男で、むづかしさうな顏付をしてゐた。彼は其處へ來ると、非常に嗄れた非常に惡魔らしい聲で言つた、『余は魔術使ひアルケラウスぢや。ゴールのアマディス及び彼が眷族一同の不倶戴天の怨敵ぢや。』そして行つてしまつた。この三臺の牛車は少し進んで停まつた。そしてその車輪の單調な軋りは止んだ。すると間もなく、また一つの、軋る音でない氣持のよい調子のよい樂の音が聞えて來た。サンチョーはこれを吉兆と思つて喜んだ。そして彼は、一步も一瞬時もその側を離れなかつた公爵夫人に向つて言つた、『奥方樣、音樂があるところにや惡いことアありようがござりませんぞよ。』

『また、光のあるところは明るいよ。』と公爵夫人は言つた。それに對してサンチョーは答へた、『火は明りを出しますの。そして篝火のある所は明るうござりますよ。丁度これ、この私等の周圍にある篝火を見ても分りますやうに。しかもこれはひよつとすると私等を燒き殺すかも知れませんぞよ。けれど音樂ちうものア、喜びと樂しみの兆でござりますわい。』

『それは今に分らうぞ。』とドン・キホーテは言つた。彼はこの二人の間の會話を殘らず聽いてゐたのであつた。そしてドン・キホーテの言は正しかつた。それは次の章に於て見られる通りである。

## 第三十五章　にはドゥルシネアの魔術解除に關してドン・キホーテに與へられし訓戒、並にその他の不思議な出來事が續く。

この快い樂の音につれて、所謂凱旋車なるものが、だん〳〵進み寄つて來るのを見た。それは、白い麻の覆ひを被せられた六頭の灰色の騾馬に依つて曳かれてゐた。その騾馬の上には、やはり白衣を着た行者が一人づゝ乘つて、銘々の手には大蠟燭を點して持つてゐた。この車は前に來た車よりも二倍か、或ひは恐らく三倍もあつた。そして車の前の方の兩側には、別に十二人の行者が徒歩でついてゐた。すべて雪のやうに眞白で、各蠟燭を點して持つてゐる、見るも不思議に物悽き有樣であつた。一段高くなつた座席には、一人の女神が坐つてゐた。彼女は一面に輝く無數の黃金の小さな飾り物で縫ひ取りのしてある銀絲の薄布を纏うてゐた。それは、餘り高貴な身裝とは見えなかつたにしても、少くとも綺羅びやかなものに見えた。彼女は薄い透き徹つた薄絹で顏を蔽うてゐたが、その地質の薄い爲めに少女の美しい容貌はツきりと見えた。それに



また無數の燈火によつて彼女の美しさや年格好を判ずることが出來た。卽ち十七歲よりは下でなく、二十歲には達してゐないやうに見えた。その傍には、所謂正裝の長袍をその足先まで着流してその頭は黑い面被で蔽うてゐる一人の姿が立つてゐた。しかしその車が、公爵や公爵夫人やドン・キホーテの眞前に來るや否や、小喇叭の吹奏が止んで、やがて又車上の琵琶竪琴の音が止んだ。そしてその長袍の姿は突ッ立ち上つて、その顏から面被を取り去つて、人々の眼に肉の無い物悽い「死」そのもの、形を現はした。これを見てドン・キホーテは不安に感じ、サンチョーは膽を潰し、公爵と公爵夫人は稍や驚怖の色を見せた。この生ける死は、立ち上つてから、眠たげな聲で、まだよく醒めないやうな舌で、次のやうに誦み立てた——

我れこそはかのマアリンぞ、わがことを
惡魔の子なりと言ひ傳へつる僞りは
移り行く年とゝもに眞實と思はれ來りぬ。
魔術の國の王、陰陽學の寶庫を預る我は
今も昔に變りなく勇壯なる廻國騎士を愛すれば、
その健氣なる功績を隱さんとする

時勢の努力を苦々しくは思ふなり。
魔法師、魔術師の族はすべて
いと心なきものなれど、我は然らず。
わが心はやさしく柔和にして情あり
神秘の線と文字とを描きつゝ
わが心の喜びは凡ての人に善をなすにあり。
わが魂の今ぞ宿るなる
陰鬱なるディス王の小暗き洞穴に
美しき比類なきドゥルシネア・デル・トボソの
悲みに滿てる歎きの聲は聞えぬ。
貴とき身より賤の女に變へられし
ドゥルシネアが魔術と不運を我は知りて、
憐れの心に動かされて
先づ夥多しき魔法の書を繰りてひろげつ。



やがてこの物悽き闇黮の中に
わが魂を宿らせてこゝに來れり。
そはかくも痛ましき事を救ふに
ふさはしき道を敎へん爲めぞ。
あゝ汝、凡そ金剛不壞の業物を
佩び居る者の誇りよ、華よ！
あゝ汝、惰眠を唾棄して血塗れの劍を執り
千辛萬苦の境涯に身を獻ぐる人の子の
光よ、烽火よ、澪よ、道しるべの先達よ！
一切の頑辭に絕えたる偉大の英傑、
ラ・マンチャの光、イベリア（スペインの雅名）の星！
智勇兼備のドン・キホーテよ！われ汝に言はん——
比類なきドゥルシネア・デル・トボソに
その原初の姿と美しさとを回復せしめん爲めには、

汝が從士サンチョーをして
屈強なる臀部を裸にして天に向けしめ
それに自ら三千三百の鞭を加へしむべし、
而も烈しく嚴しく傷くほどに。
ドゥルシネアの禍を作りし者等はかく決したり。
而して、人々よ、我が來れるはこれが爲めなり。

これを聞いてサンチョーは聲を立てた、『ヒヤア、三千鞭は愚かなこと、三鞭でも私にや短刀で三突きされると同じこッちや。そんな魔法の解き方ア罰當りぢや！私の背中が魔法に何の因緣があるんかわけが分らんわい。ほんとに、このマアリン樣がもッと別の方法を見付け出して、ドゥルシネア・デル・トボソ樣の魔法を解いて下さらにや、あのお方の死ぬまでそのまゝ魔術をかけて置くがよいわい。』

『この大莫迦詰の百姓どの、』とドン・キホーテは言つた、『お前がさう言うても、拙者がお前を引ッ捕へて、お袋が生んで呉れた時のやうに眞裸かにして立木に括り付けて、三千三百鞭とは言はず六千六百鞭でも喰はしてやるぞよ。そしてのたとへお前が三千三百度もその鞭を避けようともがいても、決して外れんやうに叩き付けてやらうわい。一言も口答へをするな。さうせんとお前の魂を引き拔いてしまふぞよ。』



これを聞いてマアリンは言つた、『それはいけぬ。このサンチョーの受くべき鞭は、その隨意に任せて決して暴力を用ゐては相成らん。また別に決定した期限はないので、何時なりとサンチョーの好きな時で宜しいのぢや。しかしもしサンチョーがこの鞭の苦しみの半ばを減じたいと思ふならば、自分の手よりも幾らか重みのある手でさへあれば、他人の手で打つて貰うてもよいのぢや。』

『私の手でも、他人の手でも、重からうが輕からうが、觸らせるもんかい。』とサンチョーは言つた、『ドゥルシネア・デル・トボソ姬の眼の罪を私の背中で拂はにやならんなら、あのお姬樣を生んだのは私でござりますかい　私の旦那樣こそあの婦人の半分ぢや——何故と言うて、旦那樣は何時もあの婦人を「私の命」ぢやの「私の魂」ぢやの、やれ私の賴り所ぢやの支棒ぢやのと言うてござるからの——それで旦那樣こそ、あの婦人の爲めに鞭打の行をして、あの婦人の魔法を解くに入り用な面倒は殘らず見てやつてもえゝし、見てやる義理もありますわい。私にわが身を鞭で打てなんて！斷絕ぢや！』

サンチョーがかく言ひ終るや否や、マアリンの幽靈の傍にゐた銀絲の女神は立ち上つた。そしてその顏から薄い面被を取り去つて、非常な美しさよりも更に立ち優つて見える顏を現はした。そして恥ぢらう樣子もなく男のやうに平氣で、また貴婦人らしくない聲で、サンチョーに面と向つて言つた、『石ころのやうな腹をした言ひ甲斐のない家來め、水注の精奴、栓の樹の心奴。おのれ橫着な泥棒め、もしお前に高い塔から身を投げよと言ひ付けでもしたら、おのれ人類の怨敵めもしお前に蟾蜍を十二疋と蜥蜴を二疋と毒蛇を三疋鵜呑みにせよと言ひ付けでもしたら、またもしお前に、手前の女房子供を鋭い人殺し鎌で殺せと言ひ付けでもしたら、お前が頑固に強情を張つても別に不思議はないであらう。けれども、何處の哀れな小さい慈惠院の子供でも月々受けて居るやうな、僅か三千三百鞭の仕事を厭がるとは——これはもう、こんな話を耳にする殘らずの人たちの、いや、これから後段々これを聞く殘らずの人たちの、同情ぶかい心を吃驚り仰天させ膽を潰させるに十分ぢや。あゝこのあさましい無情な獸奴、お前のその臆病な梟の眼をこちらへ上げて、輝く星に比べられるこの私の眼を見るがよい。さうしたら、私の眼から瀧津瀨をなして流れ出る涙はこの美しい雙の頰面に畝を作り路や小徑を作つて居るのが見えようぞ。この狹い性惡の怪物め、私のこの花の盛りの若さでありながら——まだ二十歲にならんから十代ぢや下品

な百姓女の皮を被たまゝで年寄つて萎んでしまふのを見て、氣の毒とも思ふがよい。今私がさういふ醜い姿に見えぬとすれば、それはこゝに御座るマアリン樣の特別のお情を受けて、たゞもう私の美しさでお前の心を柔げやう一念からさうして居るのぢや。悲嘆に暮れてをる美しい者の涙は、巖をも綿に變へる獅子をも牝羊に變へるからぢや。このしたゝかな野育ちのまゝの獸め、お前のお臀を鞭打つがよい。たゞもう食ふことばかりに元氣のつくお前のさもしい勇氣を振り起すがよい。そして私の肌の柔かさ、本性のしとやかさ、顏の美しさを、元に返して呉れるがよい。またもしお前が、私の爲めに心を改め思ひ返すことをするのが厭なら、お前の傍にござるそのお氣の毒な騎士樣の爲めにさうしてお呉れ。それはお前の御主人のことぢや。その御主人の魂は今も今とて私には見えて居る。それはそのお前のお唇から一尺とはない咽元まで出かゝつて、たゞもうお前の否か應かの返事に依つて、今にそのお口から飛び出すか、また元の胃の腑へ返らうかと待ち構へて居るのぢや。』

これを聞いて、ドン・キホーテは自分の咽元を觸つて見た。そして公爵に向き直つて言つた、『閣下、たしかにドゥシネアの言ふのは眞でございます。拙者の魂は丁度弩弓のねぢ止めのやうにこの咽元に膠着いて居りますよ。』

『サンチョーよ、お前は今のお言葉に何とお答へするのですか』と公爵夫人は言つた。

『奥方様、私ア先程申したやうに申しますわい。』とサンチョーは答へた、『鞭打のことは、斷絕ちや。』

『サンチョーよ、謝絕と言ふのぢや。お前のやうに言ふのではない。』と公爵は言つた。

『御前様、構はずに置いて下され。』とサンチョーは言つた、『私ア唯今はそんな細かいことや文字の間違ひの詮儀立てをするやうな氣持でござりません。私ア自分の手か他人の手でこの身に受ける鞭のことで氣が氣でないのぢやから、自分で何を言ふとるか、何をしとるかわけが分りません わい。けれど私アこのお姫様に、このドゥルシネア・デル・トボソのお姫様に、一つお訊ね致したいことがござりますよ。そりやな、全體今のやうな物の頼み方を何處で習うてござつたかといふことぢや。この婦人は私の身體に鞭の痕をつけさせうと頼みに來てをりながら、私を水注の精ぢやとか、野育ちの獸ぢやとか、惡魔に持つて來いの惡い名前を珠子繋ぎにして呼ばはるのぢや。私の身體は眞鍮かい？またこの婦人が魔術にかゝつてござるかござらんか、それが私に何うしたと言ふのぢやい。この婦人は私に取り入ろとてリンネルや、シャツや、下着や、ハンケチや靴足袋を——私はそんなものは一つも身に着けちや居らんがの——一籠も持つて來なさつたかい？どうして、後から後から貶し付けるばつかりぢや。こんな時にや、「黄金を載せた驢馬は足輕う山へ登る」ぢやの、「贈り物は岩をも碎く」ぢやの、「神樣へは御祈り金槌は働く」ぢやの、「（お前に遣らう）の二つよりか（手に入る）の一つが優し」ぢやのいふ諺が丁度當てはまるちうことを知つて居るくせに。それにまた私の旦那樣が、私を叩き据ゑて羊の毛かほぐしの綿のやうにしてしまはふのぢや。旦那樣は、私を引ッ捕へたら裸にして立ち木へ括り付けて鞭の勘定をしてやろと仰有る。こゝにござるお優しい皆樣方ア、その身を打てと言ひなさる相手は、唯の家來だけぢやなく總督ぢやといふ事を考へて見なさるがよい。家來と總督は丁度、櫻子と酒のやうなものぢやからの。へん、物の頼み方や願ひ方や行儀をよう習うて來るがよい。物ほ時と場合で違ひもするし、人はいつでも上機嫌ぢや居りませんからの。私ア今は、青い服が破けたのを見てもう泣き出しさうな氣分ぢや。それにこの人等がやつて來て、私が些ッとも、印度の酋長になりたい程にも望んでをらんのに、私に自分から進んでわが身を鞭で打てと言ふのぢや。』

『そんならサンチョーよ、實はかうぢや、』と公爵は言つた、『お前が熟れた無花果よりも軟かになければ、總督の役には就かれまいといふのぢや。火打石のやうな腹を有つた冷酷な總督を島の領民どもへ送るのは、私としては面白うない事ぢやからの。そんな總督は悲嘆に暮れて居る處

女等の涙にも、賢い嚴めしい年を取つた魔術師や賢人等の嘆願にも從ふまいからの。兎に角、サンチョーよ、お前は自分の手で鞭打つか、或ひは他人に鞭打たれるか、それとも總督にならぬか、この三つの一つより外はないのぢや。』

『御前樣、』とサンチョーは言つた、『何れが私に一番えゝか考へたうございますから、二日の御猶豫を下さりますまいかの？』

『いや、決して出來ぬぞ。』とマアリンが言つた、『こゝで、今の今、卽座にこの事は決めねばならぬ。さうせねばドゥルシネアはモンテシノスの洞穴へ歸つてもとの百姓女の有樣に立ち戻るか、或ひはこのまゝの姿でエリジアの野邊へ伴れ行かれ、彼處でその規定の鞭打の數が果てるまで待たされるであらうぞよ。』

『そんならサンチョー！』と公爵夫人は言つた、『勇氣をお出し、そしてお前が今迄養うて頂いた御主人ドン・キホーテ樣へ御恩返しをなさい。私たちは皆このお方の慈悲ぶかい御氣性や氣高い騎士道の爲めにこのお方に御親切を盡して喜ばせて差し上げねばならんのですよ。さア、この鞭打を承知なさいよ。惡魔は惡魔に、恐れは臆病者に遣つておしまひ。お前もよう知つて居る通り「强い心は不運を碎く」ですよ。』



これに對してサンチョーは見當違ひの返事をした。卽ちマアリンに向つてかう言つたのである、

『マアリン樣、貴方樣へお訊ね致しますがの——先程あのお使者の惡魔さんが、モンテシノス樣からのお使ひで私の旦那樣のところへござつた時にや、あのモンテシノスさんが御自分でこゝへござつてドゥルシネア・デル・トボソ姬の魔術の解き方を敎へて下さるから此處で待つて居れと言はッしやれましたよ。それに今までモンテシノスさんもそれに似寄りの人も見えんやうでござりますがの。』

それに對してマアリンは答へた、『サンチョーよ、あの惡魔は阿呆で而もえらい惡者ぢや。私がお前の御主人を搜がさせようとてあいつを寄越したので、モンテシノスからではない私からであつたのぢや。あのモンテシノスは自分の洞穴の中で、自分の魔術を解いて貰ふことを期待して、いやもッと適切に言へば、それを待ち構へて居るのぢや。まだあの人は尻尾の皮が取れてないからぢや。もしあの人がお前に何かの借りがあるとか、或ひはお前の方で何かあの人に用事があるなら、あの人を伴れて來てお前の好きな所へ置いてやらう。ぢやが差し當つてはお前の心を決めてこの鞭打の苦行を承諾せい。さうすればお前は必ず靈にも肉にも非常にお前の爲めになるのぢや——卽ちこの苦行をすればその慈悲に依つてお前の靈の功德になり、またお前は見たところ血の多い

性質ぢやから少し位血を出しても害にならんから身體の爲にもなるのぢや。』

『世の中にや澤山お醫者さまのあることぢや。魔術使ひまでお醫者さまぢや。』とサンチョーは言つた、『けれど誰も〳〵同じ事を私に言ひますから——私は自分ぢや分りませんが——日や時刻を決めずに私の好きな時に打つてよければ、私ア其の三千三百鞭を自分で打ちましよわい。そして私ア精一杯早うそれをやつてのけて負ひ目を拂うて、ドゥルシネア・デル・トボソのお姫樣の御美貌を世間に見せてやりませう。私の思うたのとはあべこべで、やッぱりドゥルシネア樣はお美しいのらしうござりますからの。それからも一つは但し書きが入りますがの、鞭で打つても血は流さいでもよいこと、萬一打つ間に蠅を叩く位のが混つても勘定に入れることでござりますよ。尙もし私が勘定を間違へるやうなことがあつたら、マアリン樣は何でも知つてござるから、勘定をして下さること、そしてまだ幾ら多過ぎたとかを私に敎へて下さること。』

『多過ぎたのをお前に知らせるには及ぶまい。』とマアリンは言つた、『何故といふに、お前がその數に達しさへすれば、ドゥルシネアは卽刻立ち所に魔術を解かれて、有難がつてサンチョーさんを捜しに來なさる、そして禮を言うてこの良い働きに對して御褒美を下さらうからの。そこで多過ぎるとか少な過ぎるとかで氣を揉むわけはない。私は頭の毛一筋でも人を瞞すやうなことは神



かけてないぞよ。』

『そんなら宜しいやうに賴みます。私は身の不運を受けますよ。今のやうな但し書きをつけて、この苦行を受けますよ。』とサンチョーは言つた。

サンチョーがこの最後の言葉を口にするや否や、小喇叭の音樂がまたもや始まつて、無數の鐵砲がまたもや發射された。そしてドン・キホーテはサンチョーの頸に絡り付いて彼の額や頰に接吻した。公爵夫人も公爵もその他並み居る人々も殘らずこの上なき喜びの情を現はした。車は動き出した。そして行き過ぎながら美しいドゥルシネアは公爵と公爵夫人とに一揖し、サンチョーには丁寧にお辭儀をした。

やがて晴れやかな微笑める曙は急いで來た。野邊の百花は生氣づいてその頭を揚げた。小川は小川の水晶のやうな水は灰色や白の小石の上をちよろ〳〵と流れて、待ち構へてゐる河々へ、その貢を納めようとて急いだ。喜べる大地も霧れた大空も爽かな微風も澄める光も、何れも皆、朝の裳裾を踏んで來る今日の日の靜けさ晴れやかさを示した。公爵と公爵夫人とはこの狩や。その計畫を上手に見ごとに成り遂げたことを喜んで、この戲れを續けて行かうと心を決めて城へと歸つた。彼等に取つては、これより面白いことはなかつたのである。

## 第三十六章　には惱める侍女別名トリファルデイ伯爵夫人の不思議な思ひも寄らぬ冒險、並びにサンチョー・パンザが女房テレサ・パンザに送れる手紙が傳へられてある。

公爵には、非常に剽輕な遊び好きの氣質の家令があつた。そしてマアリンの役を演じたのも、今度の冒險の一切の手配りをしたのも、例の詩を書いたのも、また小姓をドゥルシネアに扮裝させたのもすべてこの人であつた。そして今や、彼は主人夫婦の助力を得て、想像の及ぶ限りの滑稽至極な不思議至極な新な工夫に取りかゝつたのである。

その翌日公爵夫人はサンチョーに向つて、彼がドゥルシネアの魔法解除の爲めに爲すべき筈の例の鞭打の苦行に取りかゝつたかどうかと訊ねた。彼はもう取りかゝりまして、昨夜中に五つ打ちましたと言つた。

何で打つたかと公爵夫人は訊ねた。



手で打ちましたと彼は答へた。

『それは、打つのではない撫でるやうなものですよ、』と公爵夫人は言つた、『賢人マアリンはきツとそんな手柔かなことでは滿足なさるまいよ。サンチョーよ、お前は鈎附きの笞か九條鞭を用意して痛みが身に應へるやうにせねばいけません。血で書いた文字が役に立つのですから。そしてドゥルシネア姫のやうなあんなえらい姫樣の放免は、さう安くは、そんなけちなお値段では許されますまいよ。サンチョーよ、よう考へて御覽、慈悲の働きは、なま溫い中途半端の心でしては效果もなければ役にも立ちませんよ。』

それに對してサンチョーは答へた、『貴女樣が手頃の笞か細索を下さつたら、傷をつけさへせにやそれで打ちましよ。ほんとに何ぼ私が百姓ぢやとて、私の身體は大麻よりか綿に似てをりますからの。それにまた、他人の爲めに我が身を殺しちや何にもなりませんからの。』

『よし〳〵、』と公爵夫人は言つた、『明日になつたら、お前の用に間に合ふし、お前のその柔かい身體とも姉妹のやうに釣り合ふ笞を上げませう。』

そこでサンチョーは言つた、『私の大事な奥方樣、どうぞ開いて下されませ、私はな、女房のテレサ・パンザへ宛てゝ手紙を書きました。その中にや、私が女房と別れて來てからのことが殘らず

書いてござります。その手紙はこの懐に入れてをりますが、もう宛名さへ書けばよいのでござりまする。貴女様がこれを一つ讀んでやつて下さるなら有り難うござりまするが。この手紙は總督風に總督たちの書くべきやうに書いてあると思ひますでの。』

『そして誰れがその文を作つたの？』と公爵夫人は訊ねた。

『いくら私が馬鹿でも、自分で作らずに誰れに頼みませうかい？』とサンチョーは言つた。

『それぢやお前は自分で書いたのですか？』と公爵夫人は訊ねた。

『そりや私ぢやござりません。』とサンチョーは言つた、『私は手前の名だけは書けまするが、讀み書きは出來ませんからの。』

『見せて御覽。』と公爵夫人は言つた、『屹度お前はその手紙にも、お前の才智のすぐれたところをどッさり見せて居ることでせう。』

サンチョーは懐から一通の開封の手紙を引き出した。そして公爵夫人がそれを取つて見るとその文面は次のやうであつた。

女房テレサ・パンザへ宛てたサンチョー・パンザの手紙



拙者事見ごとに鞭打たれ候はゞ、紳士のやうに乘り歩き候べし（筆耕後孃馬に乘せて町を引廻すといふ故事に出づ）。若し良き總督役手に入り候はゞ、それは良き鞭打にて買ひ入れたるものに候。御身は唯今のところこの意味を會得すまじく候へども、おひ〳〵にその意を悟らるべく候。テレサよ、御身に申し置きたきは箱馬車にて出歩かるゝこと肝要なりと申すことに候。その他の出歩き方はすべて四つ這ひにて歩くやうなものにこれ有り候故に候。御身は總督の妻に候へば、何人にも後指さされぬやう心懸けらるべく候。拙者はこゝに綠色の獵服一着差し送り候。これは公爵夫人様より拜領の品に候。これを仕立て直して娘の下袴と胴着になさるべく候。拙者の御主人ドン・キホーテどのは、この邊での噂が眞ならば、一種の狂人にて且つ滑稽なる阿呆どのに候。また拙者も後れは取らぬ者の由にて候。拙者等はモンテシノスの洞穴へ參り候が、賢人マアリンは、あのドゥルシネア・デル・トボソ、卽ちその地にてアルドンザ・ロレンゾと呼ばれ居る婦人の魔法祓ひの役を拙者に申つけ候。拙者が自ら打たねばならぬ筈の三千三百より五つ差し引きたる鞭打にて、その婦人は全く綺麗にその魔術を祓はれ申すべく候。これは何人にも御洩らしこれあるまじく、但し、「汝の内所事を世間に廣めて見よ、或るものは白といひ、或る者は

黒と言ふべし」にて候。拙者は二三日中に此處を立ち任地へ赴き候。その地へは金錢を得たき非常な大心願にて參り候。人の話によれば、すべて新總督は同樣の心願にて赴任するとのことに候。拙者はかの地の脈を見たる上にて、御身に來り同居せよともせざれとも通知致すべく候。ダップルは達者にて、吳々宜しくと申し出で候。拙者はたとへトルコの大王にとて招かれ候とも、ダップルを棄てゝは參らず候。公爵夫人樣は千度も御身に接吻を與へ申されと候。御身も二千度返し參らさるべく候。そは、主人の仰せの通り、禮儀ほど元のかゝらぬ安上りのものはなき故に候。いつぞやの如き、百クラウン入りの旅行鞄は、今度は生憎と見つからず候。されど、テレサよ、ゆめ心配被成まじく、鐘撞く人は安全の位地にあり、總督の役にて萬事の勘定は立ち申すべしと存候。たゞ一つ非常に心にかゝり候ことは——一度總督を勤めた後では自分の手まで喰うてしまふといふ人の申し條に御座候。もしさうならば拙者に取つて頗る安上りとは參らぬことに候。尤も手足を截たれる者は、その願ひに應じて扶持を惠まれることは確實に候。それ故何れにしても御身は有福に仕合よく相成るべく候。神樣のお手輕にこの惠みを御身に與へたまひ、拙者をいつまでも御身に添はせ給はんことを祈り候。



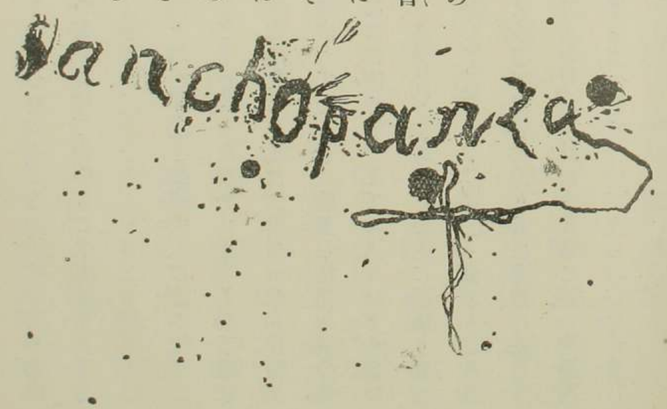
この城内にて、一千六百十四年七月二十日

御身の夫なる總督

サンチョー・パンザ

公爵夫人は此手紙を讀み終へるとサンチョーに言つた、

『總督さんは二ケ所だけ少し踏み外して居りますよ。その一つは、この總督さんは、私の良人の公爵がその島の總督役を約束なされた時には誰れも鞭打などといふことは夢にも知らなんだといふことをちやんと知つて居りながら（それは何うしても打ち消すことは出來ませんが）、それですのにその鞭打の代に總督の役を授かつたやうに、書いたりほのめかしたりして居ることです。もう一つは、この手紙の中では餘り慾深さうに見えることですよ。私はこの總督さんを金欲しがりにさせたくはないのです。「慾張りは嚢を裂く」慾深の總督は正義を守らぬからですよ。』



『奥方様、そんな積りぢやござりませんぞい。』とサンチョーは言つた、『もしこの手紙が當り前に書けてをらんとお思ひなさるなら、これを引き裂いても一つ書くだけでの事でござります。もし私の思ふ存分に書かせたら、大方もッと悪い手紙が出來ましよぞい。』

『いえ〳〵、これで宜しい。私はこれを公爵のお目にかけたいのです。』と公爵夫人は言つた。

かうして彼等は食事をする筈になつてゐる庭園へ身を運んだ。公爵夫人がサンチョーの手紙を公爵に見せると、彼はこれを見て非常におもしろがつた。彼等は食事をした。卓布が取り片付けられてから、暫くの間サンチョーのおもしろいお喋舌で面白がつてゐると、陰氣な横笛の音や嫌な亂調子の太鼓の響が聞えて來た。この鈍い混雜した殺伐な音に依つて、凡ての人々は多少驚いたやうに見えた。取り分けドン・キホーテは、たゞ落ち着いて居られなくて、その席に居堪り兼ねた。サンチョーに至つては、恐怖に驅られて何時もの逃げ場所なる公爵夫人の傍へ、据のところへ逃げて行つたといふことは言ふを俟たぬ。そして實際本當に彼等の聞いた鳴り音は非常に悲しげな陰鬱なものであつた。彼等が尚腑に落ちずにゐる間に、二人の男が、騎れも非常に長い、地面に裾を引きずる程に長い喪服の長衣を着て、この庭園を彼等の方へと近づいて來るのが見え出した。その二人は二つの大太鼓を鳴らしながら進んで來た。その太鼓もやはり黒い布で蔽うてあつた。彼等と共に、やはり同樣に黒衣を着た陰氣な笛吹きが一人ついて來た。それに續いては一人の巨大な人物がやつて來た。その人は漆黒のガウンを着てゐるといふよりは寧ろそれにくるまつてゐた。その裾は無暗に廣いものであつた。そのガウンの上には、やはり黒色の幅の廣い飾帶を卷いて、いな、横樣に引ッかけてゐた。そしてその飾帶から、鞘も飾も黒い大形な偃月刀を吊してゐた。その人は透明な黒の面被で顏を蔽うてゐた。それを透して雪のやうに眞白な非常に長い髯が透いて見えた。彼は太鼓の音に足を合せて威儀堂々と進んで來た。要するに彼の體格や彼の歩き振や彼の陰氣な顏付や彼の隨行者などは、彼の何者であるかを知らずに見る人を凡て驚愕せしめたが、それも尤もの次第であつた。この足取りと儀容とを以て、彼は他の人々と一緒に待ち受けて立つてゐる公爵の前に進み寄りつゝ跪づいた。しかし公爵は、彼が立ち上らないうちは何うしても口を利かせなかつた。その物凄い人はこれに從つて立ち上つて顏から面被を取り去つた。すると、今が今まで凡そ人間の眼に映つたことのないやうな、非常に圖拔けた、長い眞白な非常に濃い髯が現はれた。それから彼は、その廣い量のある胸の底から莊重な明々たる聲を出して、その眼を公爵に据ゑながら言つた、『畏れながら謹んで申し上げまする。私は白髯のトリファルディン伯爵夫人、別名惱める侍女樣の御家

來でござりまして、その方の御申し付けによつてお使ひに參りましてござりまする。そのお使ひの儀は、御前樣の特別のお許しお情けを頂き、夫人が御前に伺候いたしまして、その身の難儀をお耳に達したいとのことでござりまする。その難儀と申しますのが、凡そ難儀といふものにこの上なく馴染んでゐる人の心にも想ひ及べぬほどの世にも異樣な不思議なものでござります。しかし夫人が先づ第一に承りたいと申して居りますのは、あのお勇ましい天下無敵の騎士ラ・マンチャのドン・キホーテ樣には今尙この御城中に御逗留遊ばすかどうかと申すことでござります。實は夫人はカンディー島の一部國からはる〴〵この御領地まで徒歩で斷食してそのドン・キホーテ樣を搜して參つたわけでござります。こんなことは大方、いえ、必ず一つの奇蹟とも見られ魔術とも思ひ做されることでござりませう。夫人は唯今もこの御城門に控へ居りまして、入城の御許可を一向に待つて居ります。委細は以上の通りでござりまする。』かく言つてから彼は咳をした。そしてその兩手で自分の鬚を撫で下した。そして公爵の返答を待ちつゝ非常に靜かに立つてゐた。その返答はかうであつた、『これは白髭のトリファルディンであつたか。トリファルディ伯爵夫人が魔術使ひ等の爲めに惱める侍女と呼ばれねばならぬやうになられたといふ御不幸のことは、久しく聞き及んで居つたことぢや。あゝ、巨大なる從士よ、何うぞお通り下さるやうに申し上げるがよい。



それにまた、その勇敢な騎士ラ・マンチャのドン・キホーテ殿は今こゝにござると申し上げるがよい。このお方は寬大な御性質であるから、いかなる保護援助をも必ずこのお方から頂けるものと思はれて宜しからうと申し上げるがよい。尙また、もし私の援助も御入用なら、決して吝みは致しませぬと申し上げるがよい。この私も、騎士の本分によつて御加勢をすべきぢやからの。騎士の本分の中には、あらゆる婦人を、取り分け伯爵夫人のやうに寡婦となり、辱しめを受け、惱んでござる御婦人を保護する事が含まれて居るのでナ。』

これを聞いてトリファルディンはその膝を地べたまで曲げた。それから笛吹きや太鼓方に鳴らすやうに合圖をして、向き返つて、先程入つて來たときと同じ調子同じ步調を以て、庭園を出て行つた。後に殘つた人々は皆々、その威儀堂々たるに驚いたのである。公爵はドン・キホーテに向つて言つた、『名高き騎士殿、結局怨恨や無智の雲霧も勇氣と美德の光明を隱し翳らすことは出來ませぬ。かやうに申すわけは、貴方がこの城内へお出でになつてからまだほんの六日にしかなりません。然るに早や不幸難澁の人々が、はる〴〵と遠い土地から貴方を搜して參ります。しかも馬車にも駱駝にも乘らずに、徒步で、斷食して、そして貴方のその逞しいお力に依つてこそ自分等の悲しみや難儀が助かることと確信して。これも皆貴方の大偉勳のおかげです。それはもう世界

に治ね〳〵知れ渡つて居りますわい。』

『公爵閣下、』とドン・キホーテは答へた、『拙者は、いつぞや食卓で武者修業者に對して非常な惡意と烈しい敵意とを示されたあの坊樣が唯今こゝにござつて、世にはこの種の騎士が必要であるかないかを、直き〳〵に見られたらと思ひますわい。兎に角、退引ならぬ場合や法外な不幸に逢うて何か非常な惱みや悲しみを受けて居る人は、裁判所や村の寺番のところへ助けを求めては行かんし、また自分の村から一歩も乘り出したことのない騎士や、世に歌はれ記し傳へられるやうな功名手柄を他人の爲めにしてやらうと努めることはせずに唯何か噂の種になる新しい話ばかりを漁つて居る懶けもの〻殿上人などのところへも行かぬといふ事を、あの坊樣は經驗上知りませうわい。惱める者の救ひ、窮せる者の助け、處女等の保護、寡婦の慰め、これ等は凡て如何なる人よりも最もよく武者修業者によつて得られますのぢや。そこで拙者は、自らその一人たることを絶えず天に感謝し、かゝる譽れある職務を勤めるうちにわが身に降りかゝる不幸や惱みは堪へ忍んで然るべきものと思うて居りますのぢや。その御婦人はお出でなされて何なりと拙者へお賴みになるがよい。拙者はこの武力に依つて、またこの剛勇不敵の決心によつて、その御婦人を救ひ出して差し上げませう。』



## 第三十七章　には惱める侍女の著名なる冒險がつゞく。

公爵と公爵夫人とは自分等のたくらみにドン・キホーテが手もなく陷つたので非常に喜んだ。しかしこの途端にサンチョーは言つた、『こんな侍女さんが出て來て、御約束の私の總督役に邪魔を入れにやえゝが。金翅のやうにようお喋舌るトレドーの藥劑師から聞きましたがの、侍女が混つて居つたら碌なことはないといひますよ。ほんとにまア、あの藥劑師は侍女を嫌うたの嫌はんので！　そこで私が思うのに身分や暮しが何うあらうと、侍女になるものが厄病神でおせッかいなら、この三枚裾（トリアルデイーは三つか三本尻尾の伯爵夫人のやうに、難儀をして居る侍女は何んなぢやろ！——私の國ぢや、裾でも尻尾でも、尻尾でも裾でも同じこッてござりますからの。』

『サンチョー、默つてをれ。』とドン・キホーテは言つた、『この御婦人は、あんな遠いところから拙者を尋ねて來られたからには、その藥劑師の言うたやうな侍女衆と同じであらう筈がない。それのみか、これは伯爵夫人ぢや。伯爵夫人が侍女を勤められるとすれば、それは女王樣か皇后樣に

仕へられるのぢや。何故といふに、伯爵夫人などは、御自分の邸内では一家の女主人公であられて、やはり自ら數多の侍女を使はれるのぢや。』

こゝに居合せたドーニヤ・ロドリグェズは、これに答へて言つた、『こちらの公爵夫人様は、もし運好く行けば伯爵夫人になつたかも知れぬお方を侍女として使うてお出でになりますよ。「けれど掟は王様のお好きなやうに行はれます」。何人にも侍女のことを、取り分け年取つた獨身の侍女のことを惡く言うては頂きますまい。私自身は獨身者ではございませんが、それでもこの獨身で通した侍女は寡婦のに優つたところがあると、ちやんと承知して居りますから。けれど「私たちを剪んだ人は、その鋏を藏つて居ります。」』

『それでもやッぱり、』とサンチョーは言つた、『侍女たちにやまだ〳〵澤山剪むところがございますぞい。私の知つた床屋が言ひましたが、「米が焦げついても、そッと混ぜずに置いた方がえゝさうで。』

『こんな家來衆は、いつでも私たちの仇敵ですよ。』とドーニヤ・ロドリグェズは答へた、『この人たちは控へ部屋に出入りする幽靈で、何かにつけて私たちを見張つて居ります。そして銘々お祈りを唱へん時には（また大抵いつもさうですが）、私たちの惡口をして隙を潰します。私たちの骨



を掘り出して、私たちのよい評判を葬つてしまひます。けれど私はこんな生きた首斬り臺にかう言うてやります……いくらお前さんたちが惡口を言うても私たちは生きで居る、しかも大きな家の中に居るのです、たとへ私たちは饑ゑ死にをするほどでも、また肌は荒かろと細かゝろと、丁度お大名様のお通りの日に糞堆を匿すやうに、寡婦の喪服でこの身體を包んでは居つても、やッぱり生きては居るのですよ。ほんとうに、もし私に折さへあつてさうさせて貰へるなら、侍女に劣けた美德は一つもないといふことを、こゝに御出でなさるお方にばかりか、世界中の人に證して見せて上げますのに。』

『ドーニヤ・ロドリグェズの言ふのは尤もです、確かにその通りと私も思ひますよ。』と公爵夫人は言つた、『けれどこの人は自分の爲めや他の侍女たちの爲めに辯護をするには、時を待つた方がよいでせう。さうしてその善からぬ藥劑師の惡口を打ち碎き、サンチョー・パンザさんの心の思ひ違ひを根こぎにするがよいでせう。』

それに對してサンチョーは答へた、『私は總督役の匂ひを嗅いた時以來もう家來氣質は棄てゝしまひましたわい。世界中の侍女が皆で何うしようと氣にも止めませんわい。』

彼等は尚もこの侍女の議論を續けて行きたかつたが、しかし例の横笛や太鼓の音が再び聞えて

來た。これに依つて彼等はその、惱める侍女が入つて來たのだと判斷した。公爵夫人は、あの方は伯爵夫人で身分の高い婦人であるから出迎へするのが本當ではありますまいかと公爵に訊ねた。

『伯爵夫人ぢやちう方から言ふと、』と、サンチョーは公爵の返事を待たずに言つた、『御二人樣がお出迎へなさることに贊成でござりますわい。けれど、侍女ぢやちう方からいへば、一足も動くに及ばんと思ひますわい。』

『サンチョー、誰がこの事に嘴を容れいと言うた?』とドン・キホーテは言つた。

『誰れがて?旦那樣、』とサンチョーは言つた、『私は嘴を容れる權利があるから容れましたぞい。禮儀のことにかけちや世界一の丁寧な上品なお侍樣でござる貴方樣の御仕込みで、禮儀の規則を覺え込んだ家來でござりますからの。そして禮儀の方では、貴方樣から聞きました通り、一枚の骨牌で少し損するも餘計に損するも同じことでござりますからの。また耳の開いた人にや、一言か二言で澤山でござりますよ。』

『サンチョーが尤もぢや。』と公爵は言つた、『その伯爵夫人の人柄を見た上で、それ相應の禮儀をしよう。』

やがて太皷や橫笛は前のやうに入つて來た。作者はこゝでこの短い章を終り、章を改めてこの



同じ冒險をつゞけるのである。この冒險はこの物語の中の最も著名なるもの、一つである。

## 第三十八章　には惱める侍女の不運の物語が傳へられる。

陰鬱な塑手筆につゞいて、十二人ばかりの侍女が二列に並んで庭園へ入つて來た。皆々晒しセルとも見える裕な黒い長喪服を着て、立派な白紗の頭巾を被つてゐた。それはたゞ長衣の端だけが見える位に長く垂れてゐた。その背後から從士白髯のトリファルディンに手を引かれつゝトリファルディ伯爵夫人が來た。彼女は節を除つた最上黒粗毛布を身に纏うてゐたが、それは若し節がついてゐたら、その粒々はマルトス（アンダルジア州の一區）産の埃及豆の大きさはあつたであらう。その着物の垂れとも裾とも何とでも言うてよいが、それは三つの尖端に分れてゐた。その一つ一つを、やはり喪服を着た三人の小姓が支へ持つてゐた。それで、その三つの尖端に依つて形作られた鋭角と相照應して優雅な幾何學的の形を成してゐた。この尖がつた裾を見た人々は殘らずこの三つの尖端から判斷して、これある爲めにこの婦人はトリファルディ卽ちいはゞ三つ裾の伯爵夫人と呼ばれるのに違ひないと思つた。而して原作者ベネンゼリは言ふ、正にその通りである、そして彼女

の正當の名前はロブナ伯爵夫人であつたと。それは彼女の鄕國には狼が非常に多く產するからである。そしてもしその狼の代りに狐があつたら、彼女はゾルナ狐の伯爵夫人と呼ばれたであらう。それは、その地方の風習として、領主等はその領內に最も多く產出する物から自分等の特別の稱號を取つたからである。しかしこの伯爵夫人は、その裳裾の新形の爲めに、ロブナを捨てゝトリファルディを取つたのであつたと。

十二人の侍女とこの婦人とは行列の步調で進んで來た。彼女等は黑い面被で顏を蔽うてゐた。それもトリファルディンの面被のやうに透明な面被でなく、それを通しては何物も見えない程の厚いものであつた。この侍女の一團の姿が十分に見えるやうになるや否や、公爵も公爵夫人もド・キホーテも立つた。それと共にこの徐々と進む行列を見守つてゐた者は殘らず立ち上つた。十二人の侍女等は立ち停つて、その列を成した。件の惱める侍女は、尙もトリファルデンに手を引かれつゝその列に沿うて進んだ。これを見て、公爵と公爵夫人とド・キホーテとは、彼女を迎へようとて十二步ばかり步み出た。すると彼女は地面に跪づいて、美しい快いといふよりも寧ろ嗄れた荒つぽい聲で言つた、『何うぞ御前樣がた、この僕をいえ、なにこの婢をそのやうに丁重になされませんやうに。私はもう非常に心を惱まして居りますので、とてもふさはしいお答

禮を致し兼ねますから。それは私の不思議な類のない不仕合せが私の正氣を奪ひ去つてしまうたからでござります。そして何處へ持ち去りましたかは存じません。けれど、それを捜せば捜すほど見付からぬところを見ますと、ずつと遠方へ行つたに違ひござりません。』

『伯爵夫人樣、貴女のお身分を見分けぬ人こそ、正氣を蝕いて居る者でござりませう。』と公爵は言つた、『唯一目で、この人こそ禮儀の粋、禮節の華であるとは分りますからな。』そして、彼女の手を取つて立ち上らせて、公爵夫人の傍の座席へと導いた。公爵夫人もまた非常にしとやかに彼女を迎へた。ドン・キホーテは默つてゐた。その間にサンチョーは、このトリファルディやその他の一人二人の侍女の容貌を見たくて堪らなかつた。しかし彼女等が自分の方からすき好んでその顔を現はさぬ限りは、その術はなかつたのである。

皆々じッとして、誰れがこの沈默を破つてから言つた、『御威勢の高い殿樣、お美しい奥方樣、またこゝにお出で遊ばす皆樣がた、屹度皆樣がたは、この私のこの上もない可愛さうとも哀れとも思召し下さることでございませう。そも〳〵私の不仕合せは、大理石をも溶かし、金剛石をも柔らめ、またこの上もなく頑なく心の鋼鐵をさへ軟かにするに十分でござ



ります。けれどこれを貴方樣がたのお耳にとは申さずとも、お聞きに達しまする前に、前以てお聞き申したいことがございます。それは、このお仲間、お閨閥、お連中の中に、あの清淨無垢に渡らせられまする騎士、ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ樣と、その從士パンザ樣がお出でになりますでござりませうか如何でござりませう。』

『そのパンザはこゝに居りますぞい。』と、サンチョーは誰れも答へぬうちに言つた、『そしてドン・キホーテ樣もやツぱり此處に。それでな、世にも御苦勞をなさるお局さま、貴女樣はおすきな事を言はツしやれても宜しうござりますぞい。私等は何なり貴女樣のお爲めに御奉公を致しますからの。』

ごゝでドン・キホーテは立ち上つて、そして惱める侍女に向つて言つた、『御愁嘆の御婦人よ、貴女のお嘆きが、武者修業者の勇氣や武力で癒やされる望がござりますなら、こゝに拙者の勇氣と武力があります。拙者の勇氣武力は、力弱く限られたものではございますが、これを悉く貴女の御用に獻げませう。拙者はラ・マンチャのドン・キホーテで、拙者の職務はすべて助けを求める人々に助けを與へることでございます。さういふわけでありますから、貴女樣、別に貴女は慈悲心に愬へなさる必要もありません。唯貴女のお嘆きを飾りなく

眞ッ直ぐにお話しなされば宜しいのです。こゝに聞いて居ります者は、たとへそのお嘆きを癒やす法は知りませんでも、せめてそれに御同情するすべだけは知つて居ります者ですから。』

これを聞いて惱める侍女は、恰もドン・キホーテの足許へ身を投げかけようとするやうな樣子をした。そして本當にその足許へ平伏して、その兩足を抱かうとしながら言つた、『あゝ、天下無敵の騎士樣、私はこのお足を武者修業の道の基礎柱石とも心得まして、この御前に身を平伏すのでございます。私はこのお足に接吻致したいのでございます。このお足の歩みにこそ、私の不幸を癒やす唯一つの途が據りかゝつて居りますから。あゝお勇ましい武者修業樣、貴方樣の眞實僞りなきお手柄は、あのアマディスやブランティアンやベリアニスなどいふ人たちの作りごとの手柄を凌ぎ光りを消してしまひますよ！』そしてドン・キホーテからサンチョー・パンザに轉じて、その兩手を摑みながら彼女は言つた、『おゝ、お前さん。凡そ古今の武者修業者に仕へた從士のうちの並びない忠義な御家來よ。お前さんの御親切は、こゝに私の伴れて居りますトリファルディンの脊よりも廣いのです。お前さんは、この大ドン・キホーテ樣に御奉公をなさるのは、凡そこの世に武器を執つた殘らずの騎士へ一どきに御奉公なさることになるのですから、それを自慢しても宜しいのです。私はお前さんが一番大事にして居られるものにかけて、お前さんへ厚く

頼みますから、どうぞお前さんの御主人がこの賤しい不仕合な伯爵夫人へ速かにお助けを下さるやう、親切な執成役を勤めて下されよ。』

これに對してサンチョーは答へた、『奥様、私の親切なちうことが、長さも廣さも貴女様の御家來の髯位ぢやといふことア、私にや何でもござりませんぞい。この世をお暇する時になつて、私の魂に口髯や腮髭がよう生へて呉れりやよい、そこが大事なところですわい（これは恐らく當時流布した諺（私の環に餘さ（出來たちその他のことはどうでもよい）といふのであらう）。腮の下の髯などは、私アあんまり、いや、根ツから氣にはかけません。ぢやがそんなお世辭やお願ひをなさらんかて、私ア旦那様へお願ひ申して（私の旦那様は私を可愛がつてござるし、お負けに今は丁度去ることで私がなけりや濟まんことは分つとりますからの）旦那様の力一杯貴女様を助けて貰うて上げませう。さア、貴女様の辛い事を解いて私等の眼の前へ打ちまけなされ。私と旦那様は一つ心ぢやから、二人で一緒にそれを始末して上げますわい。』

公爵と公爵夫人とは、この冒險を編み出した當の人々であつたので、この一部始終を見て吹き出しさうになつた。そして心の中でこのトリファルデイの巧みな所作を感心してゐた。トリファルデイは自分の席に歸つて言つた、『ドーニヤ・マグンシア女王殿下はあの名高いカンディー國を治めてをられました。この國は大トラポバナと南海の間にございまして、コモリン岬から二リー

グの向ふです。女王様はその夫の君に渡らせられましたアーチビエラ王様に先立たれて寡婦にお
なり遊ばしました。このお二方の間にはアントノマシア姫といふ御世繼ぎの君がお出でゝありま
した。このアントノマシア姫君は私の御保育御指導の下にお育ちなされ御成人なさいました。
それは私がその母君の侍女たちのうちでは年も位も一番上でございましたからです。時は遷つ
て、この幼いアントノマシア様もお十四にならせられ、しかもその調うた御美貌は、造化の力
もこの上に加へることは出來ぬ位でございました。またこの姫君の御才智を幼いものと思うて
はなりません。姫君はお美しいやうに御聰明に渡らせました。そしてそのお美しさは世界に並び
もござりませなんだ。そしてまた、嫉み深い運命や情ない宿命の妖婆たちが御生命の絲を裁ちさ
へせねば、今も尚お美しくお出で遊ばします。けれど運命も宿命もそんなことは出來ません。何
故と申しますと、それはこの地球の表から一番美しい葡萄畑の葡萄をば、熟れぬうちにもぎ取る
やうなものですから、神樣は決してそんな酷いことをこの地球に向つてなさりはしません。私
の鈍い舌ではとてもその本當のところを申し上げることが出來兼ねますが、そのお美しさには、國
內ばかりでなく他の國々からまでも、數限りない殿方が戀をなさいました。その中に宮廷に出入
する一人の無官の紳士がありました。その人は自分の若さや凜々しい樣子やいろ〳〵樣々の技藝



に堪能なことや、頓才機智に長けて居ることなどを賴みにして、畏くもかほどまでお美しい高嶺
の花にその思ひを向けました。貴方樣がた、もし御退屈でなければお聞き下さいませ。その人は
わが心を傳へる程に六絃琴を上手に彈きました。それにその人は詩人でもあり、大の舞踏者でもございま
した。それにそれは〳〵鳥籠作りの名人で、全く貧乏になりましても鳥籠を作るだけでも生計は
立てられるであらうと申す程でした。そしてこんな才能天禀は年端も行かぬ小娘などは愚かなこ
と、山さへ覆すに足りまする。けれど、このづう〳〵しい泥棒が、先づ第一に私を手に入れ
る策略を取りませなんだなら、この人の凜々しさも、才智も、晴れやかさも、また一切の天禀才
藝も、殆んど、いや少しも私の敎へ子の砦を乘り取る役には立たなんだでござりませう。先づ
第一に、その惡い無情な浮浪人奴は、私の好意を買ひ、私を手なづけようと努めました。さ
うして置いて、私を裏切りした見張り人のやうにして置いて、私の預かつて居ります砦の鍵
を卷き上げようと致しました。手短に申しますれば、その男は私の心を取りこみ、私の決心
を挫いてしまひました。それはいろ〳〵の珠や寶石を私に吳れまして。しかし或る夜のこと、
その男の住んで居りました家の街路へ向いて開いた格子から、その男の歌ふ詩を聞きましたが、
それが何よりも私の心を折つて、身の破滅のもとゝなりました。私の覺え違ひさへありませ

ねば。その詩はかうでござりました——

かのなつかしきわが仇人より
血汐流るゝわが胸は深傷を負ひぬ。
惱めども、それを示すよしもなければ
是非もなし痛みはつのる。

その詩の文句は 私 には眞珠とも見え、その聲は舍利別のやうに甘く思はれました。その後は、それからはずッと、私 の陷りました不仕合せを見るにつけて、あのプラトーが勸めました通り、秩序の整うた國からは詩人を殘らず追放せねばならぬと思うて居ります。せめて戀の詩人はさうせねばいけません。戀の詩人たちは、婦人や小供等を喜ばせ涙を流させるあの「マンテュアの侯爵」のやうな詩は書かずに、寸鐵人を殺すやうな詩を書きます。それは人の外形だけは元のまゝに殘して置きながら、その心臟をば柔かい刺のやうに突き刺し電光のやうに擊つのでございます。その人は、また或る時かう歌ひました——

死よ來れ、何時いかにして來るぞとも
見え分かぬやうに巧みに面を蔽ひて。



さあらずば、死の甘きを味ひ知りて、
われは再び生命を受けもやせん。

——この外にも澤山これと同じやうや詩や歌を歌ひました。それは實に歌へば人を迷はし、書けば人を蕩かすやうな物でござりました。それにまた詩人がセグイディラスと申して當時カンデイー國で流行して居りました一種の詩を書いたりなぞしました時には、その時には胸は躍り、顚は外づれ、五體はぢつとして居られぬやうになり、五感は水銀のやうになるのでござります。それで、このやうな歌作りはほんとに蜥蜴島へ流罪にしてもよいと思ひます。尤もその落ち度はこの詩人等にはなく、それを褒めそやす馬鹿者やそれを信ずる阿呆どもにございますが、もし 私 がさうなうてはならぬやうな律義な侍女でありましたら、その人のそんな月並の文句では決して動かされはせなんだでございませう。またあの人たちの書いた物の中に一杯ありますやうな「われは死に生く」とか「われは氷に燒ける」とか「われは焰に慄ふ」とか「望なきに望む」とか「行きまた止る」とかいふやうな逆さの文句に釣られるやうなことはなかつたでござりませう。それからまた、あの人等がアラビアの不死の鳥やアリアドネの王冠や太陽の馬や南海の眞珠やタイバア河の黃金やパンチヤイア（アラビア・フエリキスの州の名）の香油などを贈ると約束しますのは、それはたゞさう筆が

滑つただけでございます。あの人等は、さうする氣もなければそれを果たす力もないのに、そんな約束をするのですから、一錢の損も致しません。けれどまア 私 は何處へ話を外らして行くつもりでせう？あゝ〳〵、この不運な者が！自分のことに就いて申さねばならんことが澤山ございますのに、他人の落ち度ばかり述べ立てゝ、まア何といふ氣狂ひでせう、馬鹿でせう？あゝ〳〵、ほんとにこの不仕合せ者が！ 私 を靡かせたのはあの詩ではありまん。 私 の愚かな爲めです。 私 を從はせたのは音樂ではありません。たゞ自分の考への淺い爲めです。自分が愚かで不用心な爲めに、あのドン・クラヴィゴーの進む途を開いて邪魔を除けてやつたのです。それが 私 の御話し申す紳士の名前でございます。さういふ風で、その紳士は 私 を媒介役としまして、幾度も〳〵正當の良人といふ名目で、その瞞された（その男にでなく 私 に瞞された）アントノマシア樣のお部屋へ入り込みました。如何に 私 が罪深い女でも、姫君の夫といふのでなうてどうして、あの人を姫君のお靴の裏の端へでも觸らせはいたしません。いや〳〵、さうではありません。今申し上げますやうな事に就いては、何より先きに結婚の式がなければなりません。けれど、その結婚には一つの故障がございました。それは身分の不釣り合ひです。ドン・クラヴィゴーは無官の一紳士で、アントノマシア姫は、先程も申した通り、一國の御世繼ぎでおありなさいます。この



隱し事は 私 が巧みに用心して隱して置きましたので、暫くは知れずに濟みました。が、そのうちにアントノマシア樣のお腰が少し膨れて來ないと感づきました。この露顯を恐れて 私 たち三人は額を集めて相談しました。そしてこの粗相が明るみへ出ぬ前に、ドン・クラヴィゴーの方から正式にアントノマシア樣を妻にすると副僧正の前に申し立てることに決めました。それにはお姫樣のお手で書かれた結婚承諾の契約書を添へることにしました。そして、この契約書には 私 の頭を絞つて工夫をしまして、たとへサムソンの大力でもこれを破ることは出來ぬ程の堅いものに拵へ上げました。必要な手續きはすべて踏みました。副僧正はその契約書を見て、お姫樣の懺悔を聞きました。お姫樣は逐一洩らさず懺悔をなさいました。すると僧正はお姫樣を、宮中の或る立派なアルグワシル（スペイン宮廷の警官）の手に預けました。』

こゝでサンチョーが言つた、『やツぱり、そのカンディー國の御殿にも、アルグワシルがありますかいの？それから詩人ぢやの、セグイディラスぢやのも？やれ〳〵、世界は何處へ行つても皆同じぢやな！けれど、トリファルデイ樣、先をお急ぎなされ。もう遲うなりました、私はこの長物語のおしまひが聞きたうて堪りませんわい。』

『急ぎませう。』と伯爵夫人は答へた。

## 第三十九章　にはトリファルディの驚くべき且つ記憶すべき物語が續く。

サンチョーの一と言に、ドン・キホーテは絶望へ追ひ立てられるやうに感じたが、公爵夫人は却つて大に喜んだ。ドン・キホーテはその舌をおさへよとサンチョーに命じた。そこで惱める侍女は話を進めた、『到頭、何遍も問答のありました末に、お姫さまは以前の御申立てを少しもお變へなさらずに、そのお言葉を固くお執りなされましたので、牧師さまはドン・クラヴィゴーの利益になるやうにお取りきめなさいました、でお姫さまはドン・クラヴィゴーの正妻として其の方へ引き渡されました。アントノマシア姫の母君、マグンシア王妃さまはその爲めに大層御心痛あそばされましたが、三日と經たぬうちに私達は王妃さまを埋葬いたすことになりました。』

『王妃さまはきつとお亡くなり遊ばされたのぢや。』とサンチョーは言つた。

『勿論の事です。』とトリファルディンは言つた。『カンディー國では生きて居る人を埋めはしません、たゞ死んだ人ばかりです。』

『御家來さま、』とサンチョーは言つた、『昔、氣絶した人が死んでしまうたと思ひ違へられて埋められたといふ話があります。マグンシア王妃さまはお亡くなり遊ばされたのぢやなうて氣絶なさつたに相違ないと思はれますがの。一體世の中には大事件が澤山起つて來るものぢや、お姫さまの馬鹿な御所業は王妃さまがそれ程きつうお感じなさるほどの大事件でもなささうぢや。もしお姫さまが、よう噂に聞くことぢやが、世間に澤山あるやうに、お姫さまの小姓とか、館の他の御家來とかと結婚なされたといふのなら、その過ちを救うことは出來ませなんだろが、今お話しなさつたやうにあんな上品な藝のある紳士と結婚なさることは——ほんに〳〵、それは馬鹿な事ぢやあるけれど、貴方がお考へなさる程の大した馬鹿げた事ではありません。此處においでなさる私の御主人の規則によると——主人は私の嘘つくことを許しませんでの——學問のある仁は僧正に擧げられるやうに、紳士の騎士からは王樣にも皇帝にも昇られます、それにその騎士が諸國を修業して歩いた人であるなら尚の事ぢや。』

『サンチョーよ、お前の言ふことは本當のことぢや、』とドン・キホーテは言つた、『武者修業をした上にたつた指二本ほどの廣さの幸運がありさへすれば、此の世の大王となるのは有り得べきことぢやからの。しかし惱める侍女がもつと話されるのをお聞き申さう。拙者が思ふに、夫人はま

だ此の大層面白いお話の苦いところはお話しにならぬやうぢや。』

『本當の苦いところはこれからでございます、』と伯爵夫人は言つた、『これに比べればコロシンス（瓢簞狀の小果）も甘く、オレアンダア（夾竹桃科屬）も旨いと思ふ程に苦いのでございます。その時、王妃さまはお亡くなりなされたので、氣絶なされたのではござりませぬから、私達は埋葬したのでござります。さうして私たちが王妃さまの上に土を被ひ、最後のお別れの辭を申し上げるか上げないのに、誰がそれ位の言葉で涙を止めることが出來ませうぞ？』（アジルの爵士ベニアスの句）王妃さまの墓場の上に、マグンシア王妃さまの第一のお從兄弟、巨人のマランブルノーが木馬に跨つて現はれ出ました。この方は殘酷の上に魔法使ひでございます。マランブルノーは王妃さまの敵を討たうとして、ドン・クラヴィゴーの大膽不敵とアントノマシア姫の不從順とを怒り罰しまして、その魔法で以て二人をそのまゝ墓場の上に留め置きました。お姫さまは眞鍮の猿に變へられ、男は名の分らぬ金屬の恐ろしい鰐に變へられました。ところが二人の間にやはり金屬の柱が一本立ちまして、その上にはシリア語の文字が彫り込まれてありました。それをカンディー語に譯し、今又カスティリア語に譯しますと、次のやうな文句になります。「これら二人の輕率なる相愛者は彼の勇敢なるマンチャの騎士が來つて我と一騎打の勝負を決するまでは以前の姿を回復せざるべし。如何となれば運命は唯彼の偉大なる



勇氣の爲めに此の例しなき冒險を保有し置けるが故なり。」これが終つてからマランブルノーは大身の偃月刀の鞘を拂ひまして、片手に私の髮を摑み、丁度私の咽喉を切り私の頭を斬り落とさうとする樣子をしました。私は恐ろしさに死ぬやうに思ひ、聲は咽喉に引ツついたやうに出なくなり、深い悲しみに陷りました。それでも私はあらん限りの力を振ひおこしまして、哀れな顏へ聲であの人にそんなに嚴しい刑罰を加へることは思ひ止まつて下さるやうにと言ひました。すると、あの人は、現在こゝに居ります、宮中の侍女を皆呼び寄せまして自分の前へと並ばせました。そして私たちの容易ならぬ罪科を數へ立てました上に、侍女たちの人品、その惡い遣り方、極惡な陰謀などの罪を鳴らし、私一人だけで罪を受けねばならぬ筈の咎を以て侍女たちを責めまして、あの人はかう申しました、死罪を加へることは許してやるが、緩漫な自然の刑罰を加へて全く永久に公權を剝奪してやると。さうしてあの人が言葉を止めたと思ひますと、私たちの顏の毛孔が開くやうな氣がしまして、針の先でつゝかれるやうな思ひがしました。私たちは急に手をあげて顏を撫で廻しますと、貴方さまが今御覽の通りの姿形となりましたのでございます。』

こゝで惱ある侍女とその他の侍女たちは、被うて居たその覆面を揚げて顏を露はした、その顏には皆髯が生えて居て、或るものは赤く、或るものは黑く、或るものは白く、或るものは灰色の髯

が密生してゐた。この光景を見て公爵と公爵夫人とは驚異の念に満たされたやうな面持をした。ドン・キホーテとサンチョーとは引ッくり返らんばかりに打ち驚き、傍に控へた面々も仰天してしまうた。トリファルディはその先を話しつゞけた。『かやうに其の意地のわるい悪漢のマランブルノーは、私たちのしなやかな柔かい顔をこんな粗い髯で被うて罰したのでございます！あゝ思へば私たちの顔を被うて居る刷毛のやうな髯で顔の光を隠すよりは、一層一と思ひにあの人の大身の偃月刀で首を刎ねて貰うた方がよろしうございました。何故と申しまして皆さま方、私たちが此の事を考へますと（私が今お話いたさうと思ひます事は眼から瀧のやうに涙を流して申し上げるのでございますが、私たちの不仕合せな事を餘り思ひ詰めましたものですから、泣いて泣きつくし、涙の海が麥の稈のやうに乾いてしまひました、それで私は涙を流さずに此の事をお話し申します）、髯のある侍女が何處へ參ることが出來ませう？その父や母はどんなに不憫に思ひませう？誰が助けてくれませう？皮膚が滑らかで、その上いろ〳〵な種類の化粧品やコスメチックに浮き身を窶して顔を磨きあげても、戀人を得ることはむづかしうございますのに、藪のやうな髯り果てた顔を人さまにお目にかけましてはどうなりませうぞ？おゝ侍女たち、私の友だち！不仕合せな時に私たちは生れ合せました、そして星の惡い時に親御たちは私達を生んだのです！』



彼女はかう言つた時に息も絶え入るやうな風に見えた。

## 第四十章　この冒險とこの記憶すべき物語に關係しまた附屬する事柄に就いて

實にまことに此のやうな物語を讀んで興味を覺えるあらゆる人々は、その原作者シード・ハメットに感謝の意を表さねばなるまい。彼はそのあらゆる微細な事件を我々の前に差し出す爲めに非常に細心な注意を要したのである。そしてどんな些細な事柄でも、これを明瞭に判然としないで殘して置くといふことは決してなかつたのである。彼は思想を描く、彼は空想を表示する、彼は暗々裏の疑問に答へる、疑ひを拂ひのけ、反駁を靜めてしまふ。そして一言に言へば、何も穿鑿ずきの人が知らうと思ふやうな極く微妙な點をも分明にするのである。おゝ名聲ある作者よ！おゝ幸福なドン・キホーテよ！おゝ剽輕なサンチョー・パンザよ！すべて御身たちは、この世に住む人々に喜びと慰めとを與へる爲めに、無限の年を生き得んことを祈るのである！



さて物語は進んで、サンチョーは惱める侍女の氣絶するのを見て叫んだ。『私は今までこんな冒險を見たことも聞いた事もありません。又私の旦那樣もお話しなさつたこともなけりや心の中に想うて見なされたこともありませなんだといふことは、正直な男の信仰にかけて、又冥土に御座る私の祖先パンザ家の人たちにかけて、誓ひますわい。一千の惡魔よ——彼奴を呪ふのではないが——彼奴を連れて行つて吳れい、魔法使ひで巨人であるマランブルノーを！マランブルノー、お前はかういふ罪人だちに對して鬚を生やさせるより外の刑罰を見出すことが出來なんだのか？この人たちの顏に鬚を生やすよりも、よし話す時に鼻にかゝるにしても、鼻の眞中から下の半分を斬り取つた方が好かつたではないかい？——その方がこの人たちには餘つぽどよかつたのぢや。この人たちは髯を剃る爲めに床屋へ拂ふ費用を持つて居らんことは私が賭をしてもよいのぢや。』『ほんにさうでございます、あなた、』と十二人のうちの一人が言つた。『私たちは髯を剃るお金を持つて居りません、それ故私たちの二三人は儉約なお藥としまして貼膏藥を用ひ初めました、その膏藥を顏へ貼りつけまして、痙攣るやうな勢ひでそれを引き拔きますと、その跡が石臼の底のやうに裸かに滑らかになるのでございます。たしかにカンディーの王國には、毬毛を除き眉毛を整へるために家から家へと歩き廻り、婦人用のコスメチックを製造へる女がございます。けれど

も奥方の侍女を致して居ります私たちは、さういふ者を内へ入れません。なぜと申して、さういふものは大抵本妻であることをやめた妾のやうな匂がするからでございます。それで、もし私たちがドン・キホーテさまに救はれませなんだら、私たちは髯の生えたまゝ墓場へ運ばれることになるでございませう。』

『もし拙者があなたがたの髯を根絶せぬならば、』とドン・キホーテは言つた、『拙者はムーア人の國へ行つて自分の髭を引き抜きませう。』

この瞬間にトリファルディは息を吹き返して言つた、『勇ましい騎士さま、そのお約束のお聲は、私の氣絶して居る中にも私の耳へ通じました。それで私は息を吹き返して正氣に還りました。もう一度あなたさまにお願ひ致します、名高い武者修業さま、不屈不撓の騎士さま、あなたのそのお優しいお約束を實行して下さりますやうに偏へにお願ひ申します。』

『拙者の方では一刻も躊躇は致しませぬ、』とドン・キホーテが言つた、『奥方、拙者がせねばならぬ事をお考へ下さい。拙者の心は貴女のお役に立つ事をしようとして非常に熱心になつて居るのでございますよ。』

『その事と申すのはかうでござります、』と惱める夫人は答へた、『陸路をお取りになれば此處からカンディーの王國までは五千リーグに一二リーグ多いか少いかといふ程の道のりでございますが、空中を一直線にお進みなされば三千二百二十七リーグございます。それから、何時に限らず運命が私たちの救主の騎士を遣はしました場合には、マランブルノーはその騎士に、驛馬より遙かに好くて惡戲することの少ない馬を送つてやらうと私に申しました、といふことを御承知願ひたうございます。その馬と申すのはあの勇敢なピーアレスがあの美しいマガローナを伴れて行きました時の木馬と同じものでございませう。その馬は額に持つて居る一本の木釘に導かれますので、それが手綱の代りになります。そして惡魔がその馬を運んで居るとお思ひになる程の迅さで空中を飛んで參ります。昔の傳說によりますと、この馬はマアリンが造つたとのことでございます。マアリンは友達のピーアレスにその馬を貸しました。ピーアレスはそれに跨つて長い旅を致しまして、先刻も申した通り、美しいマガローナを連れ出して、馬の鞦に乘せ、空を飛んでその女を擔ひ去り、地上から見て居る人々をば、あんぐり口を開けさす程に驚かしたといふことでございます。ピーアレスは此の馬を、自分の愛してをる人かお金を澤山拂ふ人の外には誰にも貸しませなんだ。大ピーアレスの後今まで誰が此の馬に乘りましたか私たちは存じません。マランブルノーはその魔法で此の馬をピーアレスの手から盜み取りました。あの人は今もあの馬を持つ

て居るのでございます。そしていつも世界中のどんな處へ行きますにも此の馬に乘つて旅行するのでございます。あの人は今日此處に居るかと思へば明日はフランスに居り、又次ぎの日はポトーシに居ります。それに一番宜しいことは、此の馬が喰ひも眠りもせず靴を穿きへらすこともなく、翼もないのに始終輕跑で空を進んで行くことでございます。それですから此の馬にお乘りになる方は水の一杯入つて居りますコップを一滴の水もこぼさずお持ち運びが出來るのでございます。それ程この馬は快く易々と進んで行くのでございます。美しいマガローナ姬がこの馬にお乘りになるのを大層お好きでいらッしやいましたのも、さういふ譯からでございます。』

『快く易々と行くことにかけちやァ、憚りながら私のダップルです、』とサンチョーは其の話を聞いて言つた、『あいつァ空を飛ぶことア出來ませんが、陸路を行くとなりや世界中の馬よりも乘り心地がよござりますよ。』

これを聞いて皆は噴飯した。が惱める侍女は話し續けた。『それで今お話し申した其の馬は、もしマランブルノーが私達の不仕合せを最早や救うて下さるお意向であるならば、日が暮れて半時間と經たぬうちに私たちの目の前の此の場所へそれを送つて下さるでせう。私が探し索めて居りました騎士を尋ね當てたことが分るやうにあの人は徽をして下さるし、また取り敢ずあの人が何



處に居りましても馬を私のところへ送つてやると、申したからでございます。』

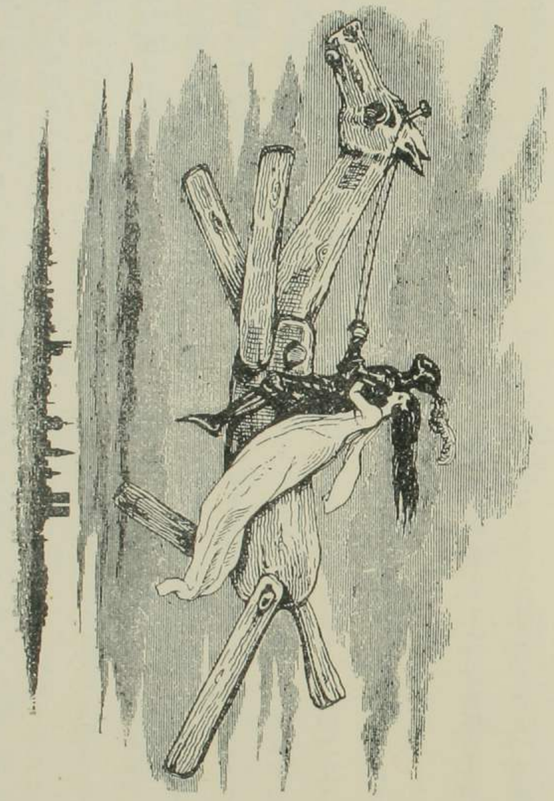
『其の馬の上には席が幾つござりましよか?』とサンチョーが尋ねた。

『二つでございます、』と惱める侍女は言つた、『一つは鞍の上に、も一つは鞦の上に。そして連れ出す娘のありません節は、大慨騎士さまと御家來とお二方がお乘りになるのでございます。』

『貴女樣、一寸伺ひたうござりますが、その馬の名前は何と言ふのでござりましよ?』

『その馬の名は、』と惱める侍女は言つた、『ペガサスと呼ばれましたベレロフォーンの馬や、ピューセファラスと呼ばれましたアレキサンダー大帝の馬や、ブリグリアドルといふ名前のオルランドー・フュリオソーの馬や、又はモンタルヴァンのレイナルドスの馬ベヤルドや、ルッギイローの馬フロンティノーや、太陽の馬と呼ばれやうと言ふ噂のあるブーテスやペリトアや、戰場を乘り廻して敢ない最後を遂げられ王國をも失はれたゴス族の最後の王さま、ああのお不仕合せなロドリゴ王がお乘り遊ばされたといふオレリアなどゝ同じものではござりません。』

『あの人がその馬にそういふ有名な馬の名高い名前を附けなんだやうに、あの人等が私の旦那樣のロシナンテの名前をその馬に附けなんだことも請合ひちや。旦那樣の馬は今言うた殘らずの馬よりも立派なのぢや。』





『それはいかにも、』と髯の生へた伯爵夫人は言つた、『けれどもあの馬は快速のクラヴィレニョウ（Clavileño を分解すれば Clavo は釘の意 leño は木片の意）と呼ばれて居りますので、大層あの馬には似合うて居ります、その名はあの馬が木で拵へてあること、額にある木釘と、それからあの馬の歩みの迅速いのに依つたものでございます。それですから名前の續く限りは、あの馬は有名なロシナンテと比べてもよいのでございます。』

『私アその馬の名前をけなすつもりぢやございません、』とサンチョーは言つた。『ぢやが何んな勒や羈絆でその馬を扱ふのでございますか？』

『それは木釘で扱ふのですと、私はとうに申し上げましたよ、』とトリファルディは言つた、『その木釘を右の方へなり左の方へなりお廻しなさいますと、あの馬に乗つておいでの騎士さまは、お望み次第に乗り廻されることが出來まする、空高く飛ぶことも、低く地面を掃ふやうに掠めて飛ぶことも、又その眞中の一番正しい望ましい道をもお進みになることは自由でございます。』

『私アその馬が見たうございますよ、』とサンチョーが言つた。『しかし私がその馬の鞍か靽へ乘らうと思うて居るとお思ひなさるなら、そりや檢の棲から梨の實を取らうとするやうなものでございますぞ。冗談ぢやない！私アダップルの背中に、しかも絹より柔かい荷鞍の上にさへ漸うの

思ひで乘つて居るのに、蒲團らしい物も見えん板の上へ乘せようとは！へん、私ア誰かの鬚を取る爲めに自分に傷をつけようといふ考へはないのぢや。めい〳〵、出來るだけ自分で鬚を剃るがよい。私は主人のお供をしてこんな長旅をしようとは思ひません。その上、私は姫君ドゥルシネア樣の魔落しの時のやうに、この人たちの鬚を剃ることには手助けをすることア出來ませんからの。』

『いゝえ、あなたはそれが出來るのですよ。』とトリファルディは答へた。『さうして貰方が助けて下さらねば、ほんとに私たちはまるで何にもすることが出來ませんのですよ。』

『王樣の御名にかけて申します！』とサンチョーは叫び出した。『一體家來は御主人の冒險と何の關係があるのですかい？日那方はこれ〳〵の事を仕遂げたといふ名譽を受けなさる、そして私たちは苦勞を引き受けにやならんのですかい？本當に！物語の作者が「かく〳〵の騎士がかくかくの冒險を仕遂げた、それはその家來の何の某の助力に依ることも多かつたのである、それが無かつたらその冒險を仕遂げることは彼には出來なんだであらう。」とでも言うて呉れりやよいけれど、あの人たちはそツけなく斯う書いて居る、「三つ星のドン・パラリポメノンは六つの怪物の冒險を成し遂げた。」と。そして始終そこに居つた家來と言ふやうな人間の事は何にも書いてないの

て、まるでさういふ人は一人も居らなんだやうぢや。皆さま方、もう一度申しますが、旦那さまがお一人でおいでになる方がよろしうございます。その方が旦那さまに大變御都合が宜からうと思ひます。私は奥方公爵夫人と御一緒に此處に止まつて居りましよ。さうすりや大方旦那さまがお歸りの時分には、ドウルシネア姫の一件は大分捗取つてゞござりましよ。私が暇な時や怠けて居る間に、自分で鞭打ちの符咒を受けまして、私の身體に一本の毛もなくなる程に打たうと思うて居りますからの。』

『それにしても必要とあるならお前は行かねばなりますまい、サンチョーよ、』と公爵夫人は言つた、『あの人たちはお前の助けを求めて居る立派は人々です。又お前がつまらぬ恐れを抱いてをるからとて、この婦人たちのお顔を此のやうにいつまでも鬚をはやしたまゝで置く譯には行きません。それこそ本當にひどい事でせう。』

『も一度、王さまの御名に誓ひます！』とサンチョーは言つた、『もし此の慈悲ぶかい仕事が幽閉られて居る御婦人か慈惠院の娘の爲めにでもするのでございますのなら、隨分な難儀な仕事も致し兼ねませんが、侍女たちの鬚を取る爲めに辛抱せんならんといふのぢや！馬鹿らしいこッちや！私アそれよりも、あの人たちを、一番背の高い人から一番低い人へ、一番澄まし込んで居る



人から一番氣取つて居る人へと、皆鬚を生へさして置く方がおもしろい。』

『お前は隨分侍女に辛いよ、サンチョー、』と公爵夫人は言つた、『お前は大分トレドーの藥劑師の考へに似てをるけれど、そりや全くお前の間違ひです。邸のうちには侍女の模範ともなる侍女が何人も居ります。そして此處に居るドーニヤ・ロドリグェスですが、此の人は私の言ふことを證明して居ります。』

『奥さまの御氣に召ますならばさう仰有つても宜しうございませう、』とロドリグェスが言つた、『神樣は總てのものゝ眞を知つておいでになります。そして私たち侍女が善いか惡いかといふことも、鬚が生へて居るかすべ〳〵して居るかといふことも、私たちは他の婦人のやうに母の娘であるといふことも御存知でございます。又神樣は此の世の中に私たちをお送りになつたのでございますから、神樣は何故さうなされたかも知つて居られます。私は神樣のお惠みにおたより申しますし、誰の鬚にも賴りはしませんのでございます。』

『さてロドリグェスさま、こゝにおいでになる皆樣がた、』とドン・キホーテは言つた、『拙者は神を信じます、神は貴女がたの難澁を親切な御眼で御覽なされませう。サンチョーは拙者が命じまする通りにしませうから、唯クラヴィレニョーが早く此處へ現はれて、拙者

をマランブルノーと面と向はせてくれるやうになることを望みます。さうすれば如何なる剃刀も拙者の剣がマランブルノーの首を肩から斬離すよりも容易く貴女がたの鬚を剃り落すことはあるまいと確かに思ひます。」「神は邪悪なる者を忍び給ふ、然れども永久には忍び給はず」と申しますからな。』

『あゝ！』とこの時悩める侍女は叫んだ、『勇ましい騎士様、どうぞ天上界のありとあらゆる星が貴方の其偉大な御身の上を御親切な御眼で見下して下されますやうに。そして貴方の御心の上にあらゆる繁榮と勇氣とを濺がれますやうに。貴方の御心は辱められ虐げられた侍女たち——薬剤師には深く憎まれ、家來たちには冷笑され、小姓たちには愚弄にされました侍女たちの楯ともなり保護者ともなるでございませう。花の盛りの年頃に侍女となりまして尼になることを好まなんだやくざ女には不幸がふりかゝるのでございます！私たち侍女は不仕合せな者でございます！私たちはトロイのヘクトルの直系の男性の血統を傳へて居るかも知れないにしましたところで、私たちの奥方は決して私たちを「お前がた」とお呼び遊ばすことをお止めになりません。丁度さうすることが女王様にでもおなりになる手段であるとお考へなされますかのやうに。おゝ巨人のマランブルノーよ、貴方は魔法使ひではあるけれども、約束には忠實です。私たちに天下無類の



クラヴィレニョーを只今お送り下さいましたし。さうしたら私たちの不仕合せも打止めになるでございませう。もし暑い天氣が押し寄せて來ましても、私たちの此の鬚がまだ生えて居りましたら、あゝどんなに私たちは苦しうございませう！』

トリファルデイは、そこに居合せた人々が皆それを聞いて眼から涙を流した程感傷的な様子でかう言つて、サンチョーの眼をさへも涙で一杯にさせた。そこでサンチョーは、もしさうすることによつて、この人々の貴げな顔から鬚を取り去ることが出來るならば、世界の果までも主人と一緒に行つて見ようと決心した。

## 第四十一章　クラヴィレニョーの到着及び長く續いたこの冒險の終末。

かくして今や夜が來た。それと同時に名馬クラヴィレニョーの到着すべく取極められた時刻が來た。その馬の現はれて來ないことが、既にドン・キホーテをして不安を感じはじめさせたのである。何故といふに、マランブルノーがそれを送るのにこんなに長くかゝるのは、ある騎士の爲めに此の冒險が取つて置かれたといふけれど、自分はその騎士ではなかつたのであらう、又さうでないとすれば、マランブルノーが自分に逢うて一騎打ちすることを敢てし得ないのである、とドン・キホーテには思はれたからである。然るに見よ！突然、綠の常春藤を身に纏うた四人の野蠻人が肩の上に一疋の大きな木馬を擔うて庭の中へと入つて來た。彼等はその木馬を地上に立たせ、そして此の野蠻人の一人は言つた、『勇氣のある騎士は此の機械にお乘りなされ。』

此の時サンチョーは叫んだ、『私は乘りません、なぜちうて私は勇氣も持たにや騎士でもありませんからの。』



すると野蠻人は言葉を續けた、『もしその騎士に家來があるなら、その家來を鞦の方に乘せるがよろしい。そして勇ましいマランブルノーに出會せねばならぬ。何故なれば彼の劍の外は如何なる劍も又如何なる人の惡意もマランブルノーに打つてかゝることは出來ぬからぢや。馬に乘つたら其の頸のところにある木釘を廻しさへすりやよい。さうすれば木馬は二人を乘せたまゝ空中を飛んでマランブルノーが待つてをる場所へ到着する。しかしながら高い大空を馳けるのであるから眩暈のせぬやうに、馬が嘶くまで眼を掩うてをらねばならぬ、馬が嘶くのはその旅の終つたしらせである。』

かう言ひ放つて、彼等はクラヴィレニョーを後に殘し、威儀を正して、もと來た道へと引き返した。惱める侍女は此の馬を見るや否や、殆ど涙を流さんばかりにして、ドン・キホーテに呼びかけた、『お勇ましい騎士さま、マランブルノーの約束はたしかに證明されました。あの馬が參りました。私たちの鬚は長く延びました。さうしてその鬚の毛の一本々々にかけまして、私たち一同は此の鬚を剃り剪んで下さるやうに貴方さまに切にお願ひ申します。貴方さまは御家來と御一緒に此の馬へ御乘りなされて首尾よう初旅をおはじめなされませ。』

『伯爵夫人トリファルディさま、拙者は心から喜んでそれを致しませう。時を失ふ恐れがござい

ますから、蒲團を敷き拍車をつけることは略しまして取敢ず參ることに致します。貴女さまをはじめ侍女たちが皆綺麗に鬚の剃り落されました御樣子を見るのが拙者の願ひでございます。』とドン・キホーテは言つた。

サンチョーは言つた、『善意からでも悪意からでも、何からでも、私はさうするのはいやでございます。若し此の鬚を剃り落すには、私が鞍に乘らにや出來んと仰有るなら、旦那樣は一緒に乘つて行く他の家來をお探しなさつた方が宜しうございましよ。そしてこの婦人たちは何か別の工夫でお顏を綺麗になさつたがよからんぢやござりませんからの。それに總督が風に乘つて空を駈け廻つたといふことを島の者共が聞きましたら何と言うでござりましよ？その上此處からカンディーまでは三千リーグの上もありますで、もし途中で此の馬が疲れるとか、あの巨人が怒り立てるやうなことがあつたら、それこそ私等は歸ッて來るばッかりにも五六年はかゝりましよ。おまけに此の世の中にア私を知つて居る島がなうなるでござりましよ。それから「猶豫には危險あり」、「人汝に牝牛の犢を與へんとする時は繩絆を取つて走れ」といふのはよう聞くことでござりますから、此の婦人たちの鬚は私を怨してくれるに違ひござりません。「聖ペテロはローマに於て甚だ健全なり」です。私ア大層厚いも



てなしをして下さる此の家に居る方が餘程結構でござります。そして旦那さまが私を總督にして下さるやうな善いことを待つて居らうと思ひますよ。』

これを聞いて公爵は言つた、『サンチョーよ、私がお前に約束した島は移り動くものでもなければ走り去つてしまふものでもないのぢや。それは地の底深く埋れて居る根を持つて居るのぢやから、その在る場所からそれを動かしたり移したり引き拔いたりすることは決して容易い事ではないのぢや。如何なる重要な役目も、多かれ少かれ、ある種類の賄賂で得られぬことの無いといふことはお前も知つて居り私も承知して居ることぢや。それで私がその總督の代りとしてお前に望むのは、お前が御主人のドン・キホーテと一緒に行つて、此の記憶すべき冒險に結末をつけてくれることぢや。さうしてお前がクラヴィレニョーに跨つて、あの馬の進み得る限りの速さで歸つたにしても、又は不幸にして旅館から旅館へ宿屋から宿屋へと巡禮者のやうに徒歩旅行で歸つて來たにしても、お前は歸つて來ればいつも殘して行つたあの島を見出すであらうぞよ。そして島の者共はいつも持つて居ると同じ熱情を傾けてお前を島の總督として歡迎するに違ひない。又私の好意も同じことで變りはない。此の事の眞實を疑ふな、サンチョーよ。疑ふといふことは、お前の爲めに盡す私の心持ちをひどく傷ねることになりませうぞよ。』

『もう仰有りますな、』とサンチョーは言つた。『私ア貧乏な家來でござります、でござりますからそんな御丁寧な御言葉を頂くべき者ではござりません。私の主人をお乘せなされませ。私の眼を目隱しして下され、そして私を神樣の御心に任せて下されませ。それから私等が空へ昇つて參りました時に、主なる神さまに私の身を委ね、私をまもつて下さるやうに天の使を呼んでも宜しうございませうか？』

トリファルディはこれに答へた、『サンチョーさん、貴方は自由に神樣なり貴方のお好きな方なりに貴方の身をお任せなさつて宜しうございます。マランブルノーは魔法使ひではございますが、キリスト敎徒でございます、さうして何人にも妨害をせぬやうにと大變よく注意しまして非常に愼重に魔法を使ふのでございますから。』

『それでは、』とサンチョーは言つた、『神樣と最も神聖なゲエタの三位一體よ、私に助けを與へて下されませ！』

『布晒し機械の記憶すべき冒險以來、』とドン・キホーテは言つた、『拙者はサンチョーが今のやうに恐れるのを見たことがない。もし拙者が他の人のやうに迷信的でありましたなら、彼の見苦しい恐怖は拙者の精神をいくらか戰慄せしめたでございませう。しかし、サンチョー此處へ來い、



このやうな高貴な方々とお別れをするに當つて、拙者は一言二言內證でお前に言ひ聞かせることがある。』そしてサンチョーを庭の木立の中へつれ出して彼の兩手を握りつゝ言つた、『お前の承知の通り、サンチョーよ、私たちは目の前に長の旅路をひかへて居る。そして私等が何時歸るやうになるかは分らぬのぢや。又此の仕事は何んな暇や何んな好機會を私たちに與へてくれるかも分らぬのぢや。それ故に私はお前に賴みたいことがある。卽ち今お前は何か旅に必要なものを取りに行くやうな風をして部屋へ引つ込んで、お前が受ける義務のあるあの三千三百の鞭打ちを早うますます爲めに、唯つた五百鞭でもよいから大急ぎでやつて來て貰ひたいのぢや。それはみんな貸し越しとなるのぢや、のう、ある事をよう始めるのはその事を半ば成就したのであるといふではないか。』

『やれまア、』とサンチョーは言つた、『旦那さまはきつと氣が觸れたのぢやな！それは「お前は私の孕んでをるのを見ながら、私に處女になつてほしいといふ」といふ諺のやうでござります。今私は裸か板の上へ坐らうとして居るのに、旦那さまは私の背中へ鞭痕を印けようとなさるのでござりますか！全く、全く、そりや御無理と申すものでござります。私等は此の侍女どもの鬚を剃り落してやりませう。そして歸つて來ましてから、旦那さまが御滿足なさるほどあの義務を綺

麗さツばりと果して御覧に入れます、これは堅く御約束いたしますわい。私アこの上申すことは出來ません。』

『よし、拙者はその約束で自ら慰めよう、善良なサンチョーよ、』とドン・キホーテは答へた、『そして拙者はお前がそれを守ること、信ずる。實際お前はうすのろの方ではあるが律義ではあるからの。』

『私ア吝嗇や慾張りちやござりません、』とサンチョーが言つた、『唯少し口いやしいのでござりますす。しかしさうぢやからとて、私は自分の言葉を守ります。』

そこで二人はクラヴィレニョーに乘る爲めに歸つて行つた。そして二人がさうしようとした時にドン・キホーテは言つた、『目隱しをせい、サンチョー、それから馬に乘れ。何故といふに斯ほどの遠方の國から我々を招く御仁は、その人を信じて居る此の我々を欺いて得られるやうな償値のない光榮を得よう爲めに、我々を欺かうとは考へられぬからぢや。總てのものが拙者が望んで居るところのものと反對に變り行かうとも、如何なる惡意も此の勳功を企てた光榮を曇らすことはできぬであらうぞ。』

『さア參りませう、旦那さま、』とサンチョーは言つた、『この婦人たちの鬚と涙は私の心の底に沁



み込みました。私はあの人たちが以前の鬚のない顏に戻つたのを見んうちは、美味は一片も食はうとは思ひません。さア旦那さま、お乘んなされ、そして目隱しをなされませ、なぜちうて、若し私が鞦に乘つて參りますのなら、鞍の方へ乘る人が最初に乘らねばならんことは分りきつたことでござりますからの。』

『それは尤もなことぢや、』とドン・キホーテは言つた、そして、ポケットからハンケチを取り出して、彼はよく注意をして目隱しをして呉れるやうにと惱める侍女に賴んだ。しかるに目隱しをした後で彼は又それを取り除けて言つた、『もし拙者の記憶が拙者を欺かぬなら、拙者はヴァージルのトロイのバラデュウムを讀んだとを覺えて居ります。それはギリシヤ人が女神パラスへ獻じた木馬で、非常に大きなもので、その中には武裝した騎士たちが入つて居つたが、これが後にトロイの滅落のもとゝなるのです。それで先づ第一に、クラヴィレニョーが腹の中に持つて居る物を見たいものです。』

『もうさうします必要はございません、』と惱める侍女は言つた、『私が此の木馬の保證をいたします。又私はマランブルノーが此の木馬に就いて何の喘着も裏切りも持つて居らぬことは承知して居ります。ドン・キホーテさま、貴方は少しも御心配なくお乘りなさるが宜しうござります。もし

も何かの禍が貴方の上にふりかゝるやうでございましたら、それは私の頭の上にふりかかるやうに神さまにお祈りいたしませう。』

ドン・キホーテは自分の身を安全にしようとして此の上何かを言ふことは、自分に勇氣がないやうに考へられることになるであらうと考へた。そこでもう一言も發せずに、彼はクラヴィレニョーに跨つた。そして木釘を試めして見たところが、それは容易く廻つた。鐙がなかつたので彼の足はぶらさがつた。彼はフランダース人の織物に描かれ又は刺繍られたローマの戰勝者の像としか見えなかつた。

不承無精に、馬鹿にのろ〳〵と、サンチョーは馬に乘らうとして進んで來て、出來るだけ具合よく鞦の上に坐を占めてから、それが滅法堅くて、少しも柔か味といふものゝ無いのを見出した。そこでサンチョーは、どんな物でもよいから枕か蒲團の御恩惠に預りたいと公爵夫人に願うた。公爵夫人の蒲團のお下りでも、お小姓の寢床のものでも何でも構ひません、この馬の腰は水といふよりも大理石のやうですから、と願ひ求めた。すると、トリファルディはクラヴィレニョーは何んな種類の馬具又は馬飾りをも載せません、ですから婦人のやうに横向きにお坐りになるのが一番よいでせう、さういふ風にすれば左程堅くは感じないでせうと言つた。



サンチョーはそのやうにした。そして彼等に別れを告げ、目隱しをして貰つた。しかしすぐさま其の目隱しを取り去つて、庭の中に居る人々をやさしげに涙を浮べながら見廻して、主の祈りと聖母の祈りを何遍も繰り返して、現在の窮境に陷つて居る自分を助けてくれるやうにと彼等に申し出た。さうすれば神樣は、貴方さまがたが同樣な不慮の事變に出會はれた場合に、祈禱を捧げる人を用意して置いて下さるでせうと言つた。

これを聞いてドン・キホーテは叫んだ、『お前は斷頭臺の上に居るのか、臨終の床に居るのか、そのやうな哀れな嘆願をするとは？　臆病な、元氣のないやつよ、お前は美人マガローナが占めて居つたその位地に居るではないか？　そして物語に書いてあることが僞りでなければ、彼女はフランスの女王になる爲めにそこから下りたのではなかつたのぢや。また拙者は此處にお前の側に居るが、拙者が今跨つて居る此の場所に跨つたあの勇敢なピーアレスと拙者は同等に並ぶことが出來ぬであらうか？　お前の眼をかくせ、お前の眼をかくせ、見苦しいやつよ、お前の恐ろしさをお前の唇から出すな、少〳〵とも拙者の前では。』

『目隱しをして下され、』とサンチョーは言つた。『貴方樣は私が自分で神さまへ賴むことも他が私の爲めに賴んで呉れることもさせなさらんから、此の邊に私等をペラルヴィロ（小さな町の名、ここで諸聖徒禮讚記念は常にその葬列を先頭に擔した）

へ伴れて行く惡魔の國があるのを私が恐がつたとて何の不思議がありましよぞい。』

彼等はこゝで目隱しをした。そしてドン・キホーテは自分の滿足の行くやうに席を定めると、木釘を注意して探索した。そして彼が指をその上に置いたその途端に總ての侍女と傍に立つてゐた總ての人々は聲を高く張り上げて叫び出した、『御機嫌よろしう、勇ましい騎士樣！御機嫌よう、大膽な御家來樣、いよ〳〵貴方がたは矢よりも早く空を劈いて行きなさる！いよ〳〵貴方がたは地上から見て居る皆の人を驚かし始めました！よろめき廻らんやうにお氣をつけなされ、勇ましいサンチョーさん！落ちぬやうに御用心なされ、貴方が落ちなさつたら、あの向ふ見ずの若者が父の太陽の戰車を進めようとして落ちたのよりもつとひどい目にあひますから！』

サンチョーは此の聲を聞いた時、彼の主人にしつかりと絡りつき、兩腕を主人のまはりに卷きつけて言つた、『旦那さま、あの人たちは私等が高く昇つて行くと申しますのに、あの人たちの聲は此處に居る私等にも聞えるし、その上私等に極近い處で話して居るやうに思はれるのは、何ういふ譯でござりましよの？』

『そんな事を氣にせんでも好い、サンチョー、』とドン・キホーテは言つた。『總じて此の種の事柄や此のやうな飛行は物の常道をはづれて居るのぢやから、お前は心の欲するがまゝに一千リーグ

も離れた物を見たり聞いたりすることが出來るのぢや。ぢやがさうひどく私の身體を締め付けてくれるな、それをやめぬとお前は私を顚倒させてしまうわい。それに全くのところ、私はお前がなぜそんなに落ちつかずに驚いて居るのか不思議でならぬ。何故というて、私は今まで一生涯にこれほど難なくやす〳〵と進む馬に乘つたことがない、それは大丈夫誓言することが出來るのぢや。人は私等は一つ場所から少しも動かぬと思ふぢやらう。恐れをしづめい、サンチョー、實際すべての事があるべきやうに進んで居るのぢや。風は私等の後の方へと吹いて行くやうぢや。』

『本當にさやうでござりまする、』とサンチョーは言つた、『丁度千の轅鞴で私を煽いで居るやうに思はれますほどに、強い風がこツち側を私の方へと吹いて參ります。』それはその筈である、此の時は、彼等が澤山の轅鞴で以て彼を煽いで居たのであつた。すべて此の冒險は公爵、公爵夫人、家令などに依つて非常に巧に計畫されたのであつて、何一つ省かれた物はなく、完全に成功を得たのであつた。

ドン・キホーテは今や風が烈しく吹くのを感じたので、言つた、『サンチョーよ、きつと私等は既に空の第二層に達したに違ひない。此處で霰や雪が生ずるのぢや。雷や、電光や、霹靂やは第三層で生ずるのぢや。そして若し私等が此の速さで進み登つて行つたなら、私等はやがて火の國

へ飛び込むことになるであらう。しかし焼かれるやうなそんな國へ昇らぬやうにするには此の木釘をどう取扱うたらよいのやら私は知らぬわい。』

すると今度は彼等は、遠方から、容易に燃えつき又は消えやすい麻を長い棒の先につけて、それで以て二人の顔を溫め始めた。熱に氣がついて、サンチョーは言つた、『私等はきつととうにその火の國へ着いて居るか、その極近くに居るのでござりますよ。私の髯は大方焦げました。私ア、旦那さま、此の目隱しを取りのけて今どの邊に居るのか見たいものでござります。』

『決して左樣のことをするものぢやない。』とドン・キホーテは言つた、『學士のトルラルヴァの眞の話を想うて見るがよい。彼は一本の棒に跨り、眼を閉ぢて、惡魔につれられて空中を飛んで行つたのぢや。そして十二時間でローマに着いて、トルレ・ディ・ノーナといふある街路へと下りた。さうして掠奪や騷擾やブールボンの死などをすつかり見て、翌朝マドリットへ歸り、こゝで彼が見た事を物語つた。ユーゼビオ、トルルヴァ博士は一千五百二十八年キュエンカに於て種々の冤罪を蒙れど、神に賴つて二夜の中にローマからマドリットへ飛行したと主張したのほその一である。「ブールボン」は一千五百二十七年五月帝國主義者のローマ襲撃によつて殺された公爵である。そして彼はその上にかういふことを言うて居る、彼が空中を飛んで居る最中に、惡魔は彼に眼を開けいと命じた。そこで彼はその通りにした。すると自分は月のぢき近くに居つて、手で月を攫めさうに思はれた。そこで彼は眩暈をしてはならんと地球を見ることをようせなんだといふことぢや。ぢ



やから、サンチョー、私等の責任を持つて居る人は私等の爲めに更に責を負はねばならぬことになるからの。多分私等は最高度へ達するところであらう。しかしかう高く昇つてもたつた一と飛びでカンディーの王國へ下ることが出來るであらう。丁度鷹がどんなに高く天に冲つて居つても、蒼鷺を捕へようとする時は、すうッと一と飛びに下りるやうに。私等が庭を離れてから未だ半時間と經たぬやうに思はれるが、もう大分遠くまでやつて來たやうぢやのう。』

『私アどういふものやら少しも分りませんが、』とサンチョーは言つた、『私に分りますのは、もしマガラネス姫とか、マガローナ姫とか〳〵此の人々は柔かうなかつたに相違ないといふことで、此の鞦に滿足しておいでなされたのなら、そのお方の肉公爵、公爵夫人、それから、庭に居つたあらゆる人々は、二人の勇者の會話を聞いて非常に興に入つた。そして今はもう此の珍らしいよく工夫された冒險も千秋樂にしようと思つて、彼等はクラヴィレニョーの麻の尻尾に火をつけた。すると馬の腹の中は花火と爆竹で一杯になつて居つたので、忽ち非常な物音と共に爆發した。そしてドン・キホーテとサンチョー・パンザとは半燒けになつて地上に投げ出された。此の時には鬚の生えた侍女たちの一隊と、トリファルディと皆とは此の庭から姿をかくして、あとに殘つた人々は氣絕でもしたやうに長々と横になつて居た。ド

ン・キホーテとサンチョーとは身ぶるひしながら起き上り、あたりを見廻して、自分たちが出發した時と同じ庭に居るのを見、又數人の人々が地上に横はつて居るのを見て仰天した。そして彼等の驚きは、庭の一と隅に一本の長い投槍が地上に突つ立つて居るのを見て更に一層加はつた。その投槍には、二本の綠色の絹の紐で一枚の滑らかな白い羊皮紙が吊り下げられてあつて、それには次のやうな銘が大きな金文字で書かれてあつた。

『勇名赫々たるラ・マンチヤの騎士ドン・キホーテは、單にそを企てしのみにて、既に業に伯爵夫人トリファルディ、又の名「惱める侍女」の冒險を完成し了れり。マランブルノーは今やあらゆる點に於て滿足しつゝあり。侍女等の願は今は淸く滑らかとなれり。而して王ドン・クラヴィゴと女王アントノマシアとは、そが本來の姿に還ることを得たり。而して從士の鞭撻が完成せらるゝ曉には、白き鳩はかの殘酷なる大鷹の迫害より免るゝを得て、そが親愛なる伴侶の手に歸らん。蓋し是れ魔法家中の魔法家たる賢人マアリン の命令なればなり。』

ドン・キホーテは此の羊皮紙の銘を讀み了るや否や、これはドゥルシネアの魔法を解き除くことに關した事であることを明かに認めたのである。そして何等の危險を冒すこともなくして、これらの敬愛すべき侍女たちの顏を以前の形に還すほどの、左やうな大手柄を仕遂げたことを喜び、



天に向つて心からの感謝を捧げた。その侍女等は今は最早見えなかつた。ドン・キホーテは未だ我に歸らずに居た公爵と公爵夫人の方へ進み、公爵の手を取つて言つた。『お氣をたしかにお持ちなされ。全く何でもござりませぬ。冒險はもう終りました。何の傷害もござりませなんだ。それは此の杜について居りまする銘が明かに示して居りますわい。』

公爵は深い睡眠の後に意識を回復しつゝある人のやうに、そろ〳〵と我にかへつて來た。そして公爵夫人も、庭の中にへたばり倒れて居た皆の者どもゝ、同じやうにした。如何にも驚き呆れたといふ風にして、そろ〳〵と起き上つた。冗談とは言ひながら極めて巧妙にやつてのけたので、自分ながら實際に起つた事であるやうに信じたらしく見えた。公爵は眼を半ば開いてその下げ紙を讀んだ。それから走つて行つて兩手を開いて、ドン・キホーテを抱き、貴君は今まで如何なる時代にも見られなかつた立派な騎士であると言つた。サンチョーは、鬚のなくなつた顏はどのやうであらう、あの上品な姿は豫期して居たやうに美しくなつたらうかと、それが見たさに惱める侍女を探し廻つて居た。けれども人々はサンチョーにかう話した、クラヴィレニョーが空中に燃えながら下つて地上に落ちた刹那に、全隊の侍女たちはトリファルディと一緒に消え失せてしまつた。そして侍女はとうに鬚は剃り落されて、一本の剃り落としも殘さなかつたと。

公爵夫人は、何のやうにしてその長い旅を進んで行つたかとサンチョーに訊ねた。サンチョーはその問ひに答へた、『奥方樣、私は主人が私に申しました通り、火の國を通つて飛んで參りました。そこで私は一寸目隱しをはづしたいと思ひました。けれど主人は、私がそれを願ひましても許しませんなんだ。ちやが私はちつとばかり物奇きといふものを持ち合せて居りますのでな、禁められたり隱されたりする物事を知らうと思ふ氣が起りましたので、そうッと誰にも知れぬやうに目かくしのハンケチを鼻の近くへ引き寄せました。そしてその下から地球の方を見下しました。するとそれは全く芥の實の粒より小さい位のやうに見えました。そしてその上を歩いて居る人は棒の種よりも小さかつたやうに思ひます。それぢやから、私等が其時どんなに高く昇つて居りましたかは、大抵御分りになりませうがの。』

これに對して公爵夫人は言つた、『サンチョーよ、お前は言ふ事に氣をつけなければなりません。お前は唯その上を歩いて居る人だけが見えて地球は見ることが出來なんだやうに思はれますがの。もし地球がお前の目には芥粒のやうに見え、人の形が棒の實のやうに見えたとすると、たつた一人の人が地球全體を掩うてしまふ筈ですよ、それは分りきつたことでせう。』

『全くでございます、』とサンチョーは言つた、『ではございますが、それでも私は一方の隙から、ちらと見たのでございます。そしてそれを皆見てとつたのでございます。』

『氣をおつけ、』と公爵夫人は言つた、『傍の方からちらと見たばかりでは、そのもの、全體は見えぬものですよ。』



『私アさういふ物の見方は分りません。』とサンチョーは言つた、『私等が魔法によつて、飛んだやうに、やはり魔法によつて、どんな方法で見たにしても、地球全體と殘らずの人間を見ることが出來たのでございます。どうぞさう思うて下さるがよろしうございます。私はこれだけしか分りませんからの。若し貴女樣がこれを本當になさらんなら、私が目隱しを大方眉のところまで除けて見ると、天へは非常に近うて、その間がたツた五六寸位になつて居つたといふことも、やつぱり本當にやなさりますまい。奥さま、私は何にでもかけて誓ひます、それは實に大きなものでござりましたよ！ ところが丁度私等は七匹の山羊の居る側を通りました 七匹の山羊とは、七曜星の事なるべし。神樣にかけ私の魂にかけて申しますが、私ア若い時分に私の國で山羊飼ひをして居りましたので、私がその山羊を見ますと、暫時その山羊どもと一緒になつて見たうて堪らんやうになりました。もしさうせなんだら、私の身體は破裂したであらうと思ひますよ。それで私はどうしましたか？ 誰にも何とも言はずに、私の御主人にも默つて、こツそりクラヴィレニョーから下りまして、その山羊ども

と遊び戯れました。その山羊どもは葦のやうでもあり、花のやうでもありました。私は大方四十五分ばかりといふもの、さうして居りました。クラヴィレニョーは一つ場所から動きもせねば移りもしませなんだ。』

『そしてサンチョーが山羊どもと遊んで居る間、ドン・キホーテ様は何をして遊ばれたのですか？』と公爵夫人は言つた。

ドン・キホーテはそれに答へた、『すべてこれらの事柄や斯やうな出來事は自然の常規を逸して居りますから、サンチョーがあのやうな事を言ひますのは何の不思議もありませぬ。しかし拙者におきましては上へも下へも目隱しを片寄せはしません。又空をも地上をも海をも海岸をも見ませなんだ。拙者が空氣の國を通過しつゝあつたと感じ、なほ火の國にも觸れたと感じましたことは眞實でございます。けれども私どもがその先まで通過して行つたとは信じられませぬ。なぜと申しますに火の國は月の世界と空氣の最後の國との間にあるのですから、私どもは身を燒き焦さずには、サンチョーが申した七匹の山羊の居る天界へ達することは出來ぬのでございます。然るに私どもは燒き焦されはしませなんだので、サンチョーは嘘を吐いて居るのか或は夢を見てをるのかでござりませう。』



『私ア嘘も吐かにや夢も見ては居りません、』とサンチョーは言つた。『その山羊どもの目じるしを聞いて御覽なされ、さうすりや貴方がたはそれで私が嘘を申して居るか何うかお分りになりましよ。』

『そんならその目じるしをお話し、サンチョー。』と公爵夫人は言つた。

『その中の二匹は綠、二匹は血紅色、二匹は青で、殘りの一匹は殘らずの色の混ぢつたものでござりました。』とサンチョーは言つた。

『可笑しな種類の山羊ぢやのう、それは、』と公爵は言つた、『この世ではそんな色のものは見られぬ。私はそのやうな色の山羊が欲しいわい。』

『そりや分りきつた事でござります、』とサンチョーは言つた、『勿論天上の山羊と下界の山羊とぢア、違ひがなけりやならん筈でござります。』

『言うて聞かせい、サンチョー、』と公爵は言つた、『お前はその山羊の中に雄山羊が居るのを見たかい？』

『いゝえ、貴方樣』とサンチョーは言つた。

『ちやが私は、今までに月の角を通り越したものは一つもないと言ふのを聞きました。』

彼等はサンチョーに彼の旅に就いてこれより以上何かを聞かうとは思はなかつた。何となれば彼等はサンチョーが此の庭から少しも動きもしなかつたのに、その通り過ぎたあらゆる事柄の話をして居る間に、天上界をぐる〳〵さまよひ歩いて居るやうな氣持になつて居たことを認めたからである。簡單に言へば、かやうにして惱める侍女を救ふ爲めの冒險は終つたのである。それは公爵と公爵夫人とに、啻にその時かぎりのみならず一生の間の笑柄を與へたのであつた。そしてサンチョーには、もしも彼が長命したとするならば、生涯話すべき材料を與へたのである。しかしながらドン・キホーテはサンチョーの耳の近〳〵へ來て、彼に言つた、『サンチョーよ、お前は天上で見た事を私等に本當と思はせた故、私がモンテシノスの洞穴で見た事をも、お前に本當と思うて貰ひたいぞよ。私はこの上は何も言はぬ。』



## 第四十二章　サンチョーが島の總督として赴任する前にドン・キホーテが彼に與へた訓戒、並びに他の熟考せられたる事どもに就いて。

公爵と公爵夫人は惱める侍女の冒險の成功した滑稽な結果を大層喜び、彼等は更に此の冗談を續けて行らうと決心し、それを皆本當だと思はせるには何のやうな適當な題目を取扱はねばならぬかを考へた。そこで下男や從僕どもに其の計劃と仕方とを敎へ、約束した島の政治に就いてはサンチョーに對して如何に振舞うべきかを言ひ含め、クラヴィレニョーの飛行の次の日、公爵はサンチョーに總督となつて行くべき用意をするやうに、何となれば彼の島の者どもは既に五月の驟雨を待ち望んで居るやうにサンチョーを待ち構へて居るからであると話した。

サンチョーは公爵に敬禮をして言つた、『私が天から降つて來ましてから、そして天の絕頂から地上を見下して、まことに小さな物であるを見ましてから、總督にならうといふ私の大望は幾らか冷めました。一粒の芥種に政治を行ふことが何の豪いことでござりましよ。又私に見えたとこ

ので申しますと、この全世界は、棒ほどのものでございます。その棒ほどの大きさの上で少しの者を支配するのに何の威嚴や權威がございましょう？もし閣下が御親切に天の一小部分を私に下さるなら、それが半リーグとないにしても、私はこの世の中の一番立派な島よりも、それの方が持ちたいのでございます。』

『よう思ふがよい、サンチョー、』と公爵は言つた、『私は天の一部分を與へるとは出來ぬのぢや。如何なる人にもこの爪の先ほども出來ぬのぢや。此の種の報酬や恩惠は唯神の爲めに保存されてあるのぢや。ぢやから私が與へられるものをお前に與へる。それは眞實の本當の島である、堅實でよく釣り合ひが取れた、非常に豐饒で實入りの多い島ぢや。もしお前が好機會を用ひる方法を知つて居るならば、お前は此の世の富の助けを以て、天の寶を得るであらう。』

『よろしうございます、』とサンチョーは言つた、『そんなら、その島を頂戴いたします。そしてその島に惡黨が居りましても、私は天國へ行くやうな立派な總督にならうとし、又實際さうなりませう。しかし私が今の卑しい身分を捨てますのは、何も慾の爲めとか身の爲めを計るとかいふ考へからではございません。唯總督になると何んな味がするのか一寸嘗めて見たいと思ふ心からでございます。』



『もしお前が一度それを味うて見たら、』と公爵は言つた、『お前は政治を行つた後でお前の指さへ喰うてしまうであらう。それ程人を支配し人に從はれることは美味いものぢや。それでお前の御主人が皇帝とならるるやうな場合には（それは疑ひもなく御主人の今の樣子からは自然さうなるであらうから）、その皇帝の威嚴を取り上げることは容易なことではあるまい。それにしても御主人が長い間皇帝とならずに居られることは、心中さぞ辛く悲しく思うてござることであらう。』

『閣下、』とサンチョーは言つた、『たとひ一と群の家畜にしましても、それを支配するのは好いものぢやと私は思ひますよ。』

『私はお前と一緒に埋められでもしたいぞよ、サンチョー、』と公爵は言つた、『お前はいろ〳〵な事を知つて居るからのう。私はお前の聰明が豫め示して居るやうに好い總督になることを希望する。それが私の言はねばならぬ總てぢや。さて明日はお前が政治を執る爲めに出發せねばならぬ日であることを覺えて居るやうに、そして今夜は人々がお前の着るべき適當な衣服を用意して呉れるであらう。又お前が立つに就いて必要なあらゆる物を準備して呉れるであらう。』

『私はその人たちの好きなやうに着せて貰ひましよ、』とサンチョーは言つた。『何のやうな着物を着ましても、私アやッぱりサンチョー・パンザでございます。』

『それはさうぢや、』と公爵は言つた。『ぢやが人の着物といふものは、其の人が保つて居る役目や位に適合するものでなければならぬ。何故と言うて、法律家に取つては兵士のやうな裝ひをすることは不似合ひぢや、又兵士が僧侶のやうな風をするのも可笑しなものぢや。サンチョー、お前は半は法律家として行き、半は將帥として行かねばならぬ。と言うのは、私がお前に上げようとして居る島に於いては、武器が文字ほどに必要であり、文字が武器ほどに必要であるからぢや。』

『文字といふものは私ア大方知りませんが、』とサンチョーは言つた、『私アABCさへも知らんのでござります。ぢやが好い總督になるにはクリスタス（教科書の中のアルファベットの初めに置かれる十字架の絵）さへ覺えて居れば、私には十分でござります。武器の方は、皆が私に吳れる武器を私が落すまでひねり廻しまするよ、その上は、神さまのお助けに任せるばかりでござります。』

『そのやうに善い記憶を持つて居るからには、』と公爵は言つた、『サンチョーは何事にも間違ひはないであらう。』

このときドン・キホーテは彼等のところへやつて來た。そして事の次第を知り、そしてかくも速にサンチョーが政治をしに行くやうになつたことを知つて、彼は公爵の許しを得てサンチョーの手を取り、サンチョーが如何にその役目に處すべきかに就いて訓戒を與へる爲めに、一緒に



彼の部屋へ退いた。彼等が部屋へ入るや否や、ドン・キホーテは戸を締め切つて、殆どむりやりにサンチョーを自分の側に坐らせた、そして物靜かな調子で斯う彼に話しかけた『サンチョーよ、拙者が幸運に遭遇せぬ中に、幸運がお前に出逢う爲めに進んで來たことを、拙者は天に向つて限りなく感謝するのぢや。お前の勤勞の酬ひを拂ふ爲めに自分の幸運を當てにして居つた拙者は、なほ立身を待つて居らねばならぬのに、然るにお前は、その時に先んじて、又あらゆる道理に叶ふ期待に反して、心願成就を祝福されて居る。或る者は賄ひ、願ひ、請ひ求め、早く起き、嘆願し、固執しても、その求めるものを得られぬ。然るに他の者はふらりと來て、なぜ又何の爲めといふことも知らずに、多くの人が願うて居る地位や役目を附與される。であるから「願ひ事には運不運」といふ一般の諺が應用されるのはこゝぢや。私の考へによれば、無論愚物であるお前は早起きもせず、晩の務めもせず、又これと言うて面倒の仕事をするといふ譯でもなかつたのに、お前の上にかゝつた武者修業の呼吸ばかりで、恰も勿論の事でゞもあるかのやうに、大して骨も折らずに島の總督となつたのぢや。私はかう言ふぞよ、サンチョー、お前はそれをお前自身の勳功に對して受けた恩惠に由るとは思はずに、惠み深く事を配劑する天に感謝を捧げるがよい。又第二には武者修業の職の中に含まれて居る大なる偉力に感謝を捧げい。それから、私がお

前に言うたことを信ずるやうな心持ちで、お前に訓戒を與へ、お前の北極星となり、お前が將にその中に捲き込まれようとして居る暴風雨の海から安全な港へ指向け導かうとして居る此のお前のカトーの言ふことをよく聽くがよい。官職や大なる義務は大きな難儀の淵に外ならぬものぢやからの。

『先づ第一に、サンチョーよ、お前は神を畏れねばならぬ、何となれば神を畏れることには智慧があるからぢや。そして賢くあれば何事にも間違ひやうはない。

『第二に、お前はお前の本來の性質をよく考へ、お前自身を知らうと努め、心の想像することの出來る一番むづかしい事を知らうとせねばならぬ。もしお前がお前自身を知るならば、牡牛のやうに大きくならうと努めた蛙のやうに脹れ上ることはあるまい。もし其のやうな事があるならば、お前が故郷で豚を飼うて居つたことを想ひ出すがよい。それはお前の忌かしさの車輪に對する醜い足として役に立つであらう。（孔雀がその尾の美しいことを誇って脚たが、その尾の醜いのを見て、その誇りが減められたといふ寓話を引用したのである。スペインにおいては孔雀のひろげられた尾を孔雀の車輪と呼んである。）』

『全くさうでござります、』とサンチョーは言つた。『ぢやがそれは私が子供の時のことでござりまして、それは此の度のことには何のかゝはりもないのでござります。なぜと申しまして、總督となる人が皆、王樣の系統を引いて居るとは限りませんからの。』

『全くぢや、』とドン・キホーテは言つた、『ぢやが、その理由によつて、貴い家系から出て居らぬ人々は尚のこと、その保つて居る役目の威嚴に優しい溫和が伴ふやうに心せねばならぬのぢや。これを巧にやりこなす人は、如何なる地位にある人も免れることの出來ぬ彼の惡意ある人の冷笑を免れるであらうぞ。



『どうぞお前の賤しい素性に光榮のあらんことを、サンチョー。それからお前が農家の生れであると言ふのを恥づることはない。何となればお前が恥て居らぬと見れば、誰もお前を辱めようと身を入れるやうな者はあるまい。身分の高い罪人であるよりは、身分の低い德のある人の中の一人であることを誇るがよい。賤しい家柄に生れて、法王とか皇帝とかの、最も高い威嚴のある位地に昇つた人々は數へ切れぬ程にある。そしてこれの眞實なことに就いては、私はお前が倦きてしまう程澤山の例證を擧げることが出來るのぢや。

『よう覺えておけ、サンチョー、もしお前がお前の志して居る德行をするならば、そして德ある行ひをすることに誇りを覺えるならば、お前は何も皇族や君王の生れである人々を羨み嫉む理

由はない。何故といふに「血は遺産であるが、徳は勞して得たものである」からぢや。そして徳は血統も有つて居らぬ價値を、ひとりそれ自身に持つて居るのぢや。

『かやうであるから、もし萬一お前の同族の者が、お前がその島に居る時に訪ねて行くやうなことがあつたら、お前はその人を逐ひ還したり輕蔑したりしてはならぬぞよ。それどころかその人を歡迎し歡待し尊重せねばならぬ。さうすればお前は神樣に賞讃せられるであらう（神さまはその爲りたまふところのものを輕蔑する人を悦ばれぬ）、またよく秩序立つて居る自然の法則に從ふことになるであらう。

『もしお前がお前の家内を引き取つて行くなら（そして長い間家内なしに居ることは政治を執り行ふ人々にとつては餘りよいことではない）、家内に敎へ諭して、その自然の粗野を圓滑ならしめるやうに努めるがよい。何故なれば賢明な總督によつて得られる總てのものが、無作法な魯鈍な妻によつて失はれ費されるからぢや。

『もしお前が鰥夫となつて後に殘る時には——それは起りがちのことぢやが——そしてお前の職務上もつと高級の匹偶を求める場合には、釣針として、又は釣竿として、又は托鉢僧の頭巾として「私はそれを選りはせぬ（頭巾の中へそれを投げて言お前の役に立つやうな者は選まぬがよい。確かに、私はお前に言うておく、裁判官の妻が受ける總てのものに對して、夫は一般の審判の際には勘定をすますべき責を負はされるであらう。そこで彼は死んでから、生きて居る中は何でもないと見て居つた項目を、四倍も支拂はねばならぬことになる。

『自分勝手の法律を決して執り行うてはならん、それは怜悧を裝ふ無知の人によつて大いに利用されるであらう。

『貧乏人の涙には、有福な人の申し立てよりも、餘計に惻憫の心を示してやれ。そして餘り多く正邪の別を問ふな。

『富裕な人の約束や贈物のうちにあつても、貧乏人の嗚咽や歎願のうちにあると等しく、眞理を暴露すやうに努力せい。

『もし公平正義を運用することの出來る場合、または運用せねばならぬ場合には、罪人に對して法律の極限の嚴罰を課するな。嚴格な裁判官の評判は、同情ある裁判官の名聲より高くは上らぬものぢや。

『もしお前が賞罰の杖をそらすことを許すとしても、それは贈物の重さによらずに、慈悲の深さによるべきぢや。

『もしたま〳〵お前の敵である人の事件に判決を下すべき場合があるならば、お前が受けた損害から考へを轉じて、その訴訟の正義を決定すべきであるぞよ。

『他人の事件において、お前自身の感情の爲めに目がくらむやうのことがないやうにせよ。斯やうにして起る誤りは、往々救濟の途があるまい。あるにしてもお前の名聲と財産とを犧牲として救濟せられるのである。

『もし見目よい女が來てお前の裁判を求めるならば、その女の涙からお前の目を反け、その女のなげきからお前の耳をふさげ。そしてもしその女の泣くのによつてお前の理性が奪ひ去られ、その女の溜息によつてお前の廉直が取り去られなかつたなら、その女の要求の眞價をゆる〳〵と考へるがよい。

『行爲で罰せねばならぬ人を言葉で罵言するな。何故といふに刑罰の苦痛は、お前の譴責を附け加へずとも、不幸な人には既に十分であるからぢや。

『お前の法權の下に來る科人は唯人間の邪しまな性癖に服從したみじめな人であることを心に留めて置くがよい。そしてお前の力で出來る限りは寬仁と寬恕とを示すがよい。神の屬性は總ての人に平等であるけれども、人間の眼には慈悲の屬性が正義の屬性よりも一層輝かしく一層崇高く



見えるものぢやからの。

『もしお前がこれらの格言と規則に從ふならば、サンチョーよ、お前の一生は長く、お前の名譽は永久につゞき、お前の報酬は豐かに、お前の幸福は言ひ盡すことができぬ程であらう。お前はお前の子供たちをお前の思ふがまゝに結婚させるであらう。お前の子どもや孫どもは爵位を帶びるであらう。お前は平和に生きて總ての人と調和するであらう。そして一生の終りに近づいた時には、死は靜かに熟した老年のお前に來るであらう、そしてお前の曾孫の輕やかな愛らしい手がお前の眼を閉ぢるであらう。

『私がこれまでお前に言ひ聞かせた事は、お前の心の飾の爲めの教訓ぢや。さて今度は身體の飾の爲めの訓言を聞かせよう。』

## 第四十三章　ドン・キホーテがサンチョー・パンザに與へた訓戒の第二部。

ドン・キホーテの以上の說話を聞いて、誰か彼を非常に思慮分別の發達した非常に公正な目的を持つて居る人と思はぬものがあらう？しかしながら、しば〳〵此の偉大なる物語の中に見えたやうに、彼は唯騎士道に言ひ及ぶ時には無意義な事を話したのであつたが、しかも其の他のいろいろな事を論ずるに當つては、明瞭な偏見のない理解力を持つて居ることを示したのである。それ故、到る處に彼の行爲は彼の智能に僞りを與へ、智能は行爲に僞りを與へたのである。けれども彼がサンチョーに與へた此の第二の訓戒の場合には、彼はその快活な氣質を示し、著しく彼の智慧と痴愚とを露はしたのである。

サンチョーは深い注意を以て彼の言葉に耳傾けた。そして其の訓戒を彼の記憶の中にしかと留めておくやうに努めた、いかにもその訓戒に從はうと思うて居る人のやうに、又その助けによつて充分有望なその政治を仕合せな結果に導かうとする人のやうに。その時、ドン・キホーテは言葉



をつゞけた——

『サンチョーよ、お前がお前の身體や家屋を始末すべき方法に就いて、私がお前に與へねばならぬ第一の訓へは、淸潔にすること、爪を切ることであるぞよ。或る人は長くして置くが、あのやうに延ばしてはいけぬ。長い爪は手の飾りであるといふ者もあるが、それは其の人が無知である故にさう想ふのぢや。彼等が切ることを怠る無用の長物は爪であると思うて居るらしいが、實は蜥蜴を捕へる雀鷹の爪のやうなものぢや——不潔な不自然な惡弊ぢや。

『サンチョーよ、着物をほどいたり、しまりない風をして歩くなよ。だらしのない服裝は心の落ち着かぬ證據であるからぢや。實際、自墮落な服裝や無精な身形をすることが一種の技巧であると認められるのでなければ、さうせぬがよい。ジュリアス・シーザーの場合には、一般の意見はさうするのが技巧であると思つたのぢや。

『お前の役目から如何ほどの收入があるか、綿密に調べて知つておくがよい。そしてお前の下僕に揃ひの服を與へる位の餘裕があるならば、相應した長持ちのするものを與へて、見掛けのよい華美なものは與へるな。そしてそれをお前の下僕と貧民に分ち與へよ。卽ち、もしお前が六人の小姓に着物を着せることが出來るならば、三人の小姓と三人の貧民に着せてやれよ。さうすればお

前は天の小姓と地の小姓とを有つことになる。虚飾家などは決して揃ひの服を與へるこの新しい方法を思ひつきはせぬのぢや。

『大蒜または玉葱を食ふな。その匂ひでお前が賤しい素性であることが解るやうなことになるかも知れぬ。ゆつたりと歩み、ゆる〳〵と話せ。ぢやがお前が自分の話すことに自分で聞き惚れて居ると人から思はれるやうな風に話してはいけぬ。なぜなれば「あらゆる氣取りは好ましくない」からぢや。

『晝飯は少い位に認めよ、そして夕飯は尚一層控へ目にするがよい。全身の健康は胃の工場で鍛へられるものぢやからの。

『酒は節すべしぢや。度を過して飲む時は、秘密を打ち開け約束を破りがちのものであるといふことを、よう心にとめて置け。

『サンチョーよ、口一杯に物を頬張らぬやうに注意せい。又如何なる人の前へ出ても噯をせぬやうに注意せい。』

『噯！』とサンチョーは言つた。『私アそれはどういふものか存じませぬ。』

『噯をするといふのは、サンチョー、』とドン・キホーテは言つた、『ゲップをすることなのぢや。ゲ



ップといふ言葉は、甚だ適切に意味を傳へる言葉ではあるが、これはスペイン語のうちの最も賤しい言葉の一つぢや。それ故に氣むづかしい人たちは上品な言葉を用ひて、ゲップするといふ代りに噯をすると言ひ、ゲップの代りに噯と言うて居るのぢや。しかし斯やうな言葉が分らぬにしたとこうで、それは大したことはない。習慣といふものが時の經つに從つてそれを用ひるやうにしてくれるものぢや。それ故さうした言葉は直き覺え込んでしまふぢやらう。これが言葉の豐富になる方法ぢや。此點では習慣と世間といふものが大いに力のあるものぢやからのう。』

『本當に、旦那さま、』とサンチョーは言つた、『私が肝に銘じて覺えて置かうと思ひます御教訓や御注意の一つは是れでござりますよ。ゲップをせぬことでござりますよ。私アしよッちうそれをしますのでな。』

『噯といふのぢや、サンチョー、ゲップではない、』とドン・キホーテは言つた。

『噯でござりますの、私もこれからはさう申します。私アそれを忘れんと誓ひましよ。』とサンチョーは言つた。

『それと同じ樣に、サンチョーよ、』とドン・キホーテは言つた、『お前は話しをする際に、餘り澤山の諺を取り入れてはならぬ。諺といふものは短い格言である。けれどもお前は、その諺が格

言といふよりも譫語の味のする位亂暴にむやみに引き出すからいけぬわい。』

『私にやそれを直すこたア出來ません』とサンチョーは言つた。『私ア一冊の本よりも澤山の諺を知つて居りますからの。そして私が話しをする時にア、それが早く出ようとして押し合ひへしあひいたします。それでつひ私はその眞先に來たやつを口から出してしまふので、話しの心に適るか適らんか考へる暇なんかないのでござりますよ。ぢやが私もこれからは私の役目の威儀に合ふ諺を使ふやうに氣をつけましよ。「澤山ものゝある家では、夕飯がすぐ料理される」し、又「縛る者は縋らさぬ」そして「鐘を鳴らす人は安全な地位に居る」又、「與るにも保ツとくにも頭腦が要る、」といひますからの。』

『それぢやよ、サンチョー！』とドン・キホーテは言つた。『さういふ諺を一緒に荷造りして、緊めつけて、紐でからげてしまへ。誰もお前を妨げるものはない！「私の母が私を打つ、それでも私は惡戯をする。」私はお前に諺を避けるやうに命じて居るのぢや、然るにお前は瞬くひまに諺の百萬遍を射出した。それは「ユヴェダの山越えて」などゝ同じことで、私等の話して居ることとは何の關りもないことぢや。サンチョー、注意せい、私は話題としツくり嵌まつた諺が非難すべきぢやといふのではないが、諺を出たらめに積み重ねて一緒に紐でからげることは會話



を退屈にし野卑にするといふのぢや。

『馬に乘る時には身體を鞍の背後に凭せるやうにするな。又足を突つ張つたり、馬の腹から突き出したりするな。しかしお前がダップルの上に乘つて居る時のやうに、だらりと坐つて居るのもわるい。總じて紳士らしう見えるのも、馬丁らしう見えるのも、馬の乘り方一つにあるのぢやぞよ。

『睡眠は程よい加減にせい。朝早く起きぬものは晝の恩惠を得ぬわい。サンチョー、よう覺えておけ、勤勉は幸運の母であるぞ」。そしてその反對に、怠惰は決して正直な大望の目的を達せさせぬものぢや。

『私が今お前に與へようとする最後の訓戒は、身體の改良の方ではないが、注意してお前の記憶の中に持つて居つて貰ひたいのぢや。なぜといふに、それは既にお前に與へた訓戒と同じ程に必要であらうと信ずるからぢや。それはかうぢや——家族間の論爭には決して與るな、少くとも彼等を比較するやうなやり方はするな。斯うして比べられたもの、一方は、必ず一方より好いであらう、そしてお前はお前が惡く言うた一方から憎まれるであらうし、またお前が譽めた一方からは何んな形にもせよ何にも得はすまい。

『お前の服裝は、充分に長い靴下、長い胴衣、それから些ッと長めの上衣などがよからう。ゆるやかな裾着は決して用ひてはならん。いふまでもないことぢやが、あれは紳士や總督などには一向不似合ひなものぢやからの。

『サンチョーよ、これが差し當つて私がお前に訓戒せうとて心に浮んで來た殘らずぢや。又程經て折があつたなら、そしてお前が忘れずにお前の樣子を知らしてよこすなら、私はいつでも意見を述べてやらう。』

『旦那樣、』とサンチョーは言つた、『貴方樣が私に敎へて下されましたことは皆結構な、神聖な、有益になるお言葉であるちうとア充分よう飲み込めました。しかし私がそのお言葉を一つも覺えてをりませなんだら、それは私に何の役に立ちましよう？ たしか爪を延ばして置くなといふことゝ、もし折があつたら、も一度緣組みしてもよいちうことだけは私の頭から滑り出はしますまい。がその外のいろんな事、ごた〳〵した、くしや〳〵させるやうな、ごッちや〳〵になつたやうな事は、去年の雲の形を思ひ出すよりも思ひ出すのがむづかしうございますよ。それで一つそれを書いて下されませ。私は讀み書きは出來ませんが、私の懺悔司僧にそれを渡しておきまして、必要な時にいつでもそれを讀ませて思ひ出すやうにしましよわい。』



『あゝ、困つたやつぢやのう！』とドン・キホーテは言つた、『總督が讀み書きが出來ぬとあつては誠に不都合千萬ぢや。サンチョー、お前はかういふことを知つて置かねばならぬ、人が讀み書きができぬとか、又は左利きである場合には、それは次の二つのうちの一つであることを證明して居るのぢや。卽ちその人は非常に卑しい下樣の兩親の子であるか、又はよい仲間も良い敎育もその人には何の印象をも與へなんだ程に矯正の出來ぬ惡い狀態にあるか、その一つを示して居るのぢや。お前が困つて居ることは大缺點ぢや、それ故私はとにかくお前が署名の出來るやうに敎へてやりたいわい。』

『署名することなら、ちやアんと存じて居りますで、』とサンチョーは言つた、『私が村の組合の會計方をして居りました時分に、貨物の梱の上に私の名前を書けと皆に言はれまして、私ア印に文字を書くことを習ひました。その上、私ア右の腕が利かんやうなふりをすることができます。そして誰か他の者を私の代りにして書かせますことア出來ます。それに、「死ぬといふことの外には何にでも藥はある」ものでござりますから、私は私の好きなやうにすることが出來ます。それに、父が法官である者は——』（この話の後の方は「一平氣で法廷へ行く」といよのである。）と申しますが、私は總督さまでござりますから法官より一段と上でござります。まあ見ておいでなされ！ 皆の者が私を輕蔑す

るなら勝手にするがよし、悪口するなら悪口するまゝに任せて置きましよ。」彼等は羊の毛を取りに來て刈られて歸る」のでございます。「神の愛し給ふものゝ家はその者に愉快なり。」、「金持ちの愚かしい言葉は世間には格言として通る、」ともございます。私が思うて居りますやうに、有福になり、總督になつて、そして寛仁大度でありますれば、過ちといふものは少しも私にはあるまいと思ひますよ。私の祖母がいつも申しましたやうに、「お前が自分で蜜となりさへすれば蠅はお前を吸うであろ。」「お前は持つてをると同じ度合だけの價値がある」でございます。又「お前は富裕な人に向いては仇を復すことが出來ない、」とありまする。』

『あゝ、忌々しいやつぢや、サンチョー！』とこゝでドン・キホーテは叫んだ。『六千の惡魔がお前とお前の諺とを持つて飛んで行け！お前は此の一時間ばかりといふ者は諺を紐でからげて、そして其の諺の一つ一つで私に拷問の劇痛を加へてをつたのぢや。さういふ諺はお前をいつか斷頭臺へ連れて行くぢやらうぞ、それは請け合ひぢや。お前の家來どもはお前から政治を取り上げてしまふであらう、さうでなければ家來どものうちに謀叛が起るであらう、それもみんな其の諺の爲めぢや。これ、何處からお前は諺を拾ひ上げるのぢや、この馬鹿奴？お前はどういふ風に諺を應用するのぢや、阿呆奴が？拙者の如きは諺一つを言ひ表し、それを適切に應用



するにも大汗で、まるで地を掘るやうな骨折りをするのぢやぞ。』

『本當に、私の旦那樣、』とサンチョーは言つた、『貴方樣は誠に些細な事に大騷ぎをなされまするの。私が持つて居ります物を使ひましたとて貴方樣はまあ何でそのよに御立腹なされますのかい？諺また諺の外には私は何にも有つちや居りませんので、商賣の資本とても何も他にはないのでござります。丁度たツた今私の頭に浮んで來ました諺が三つござります、それは丁度持つて來いの諺で、籠の中の梨のやうなものでござります。しかし私アそれを言ひますまい、」沈默の賢者はサンチョーと呼ばれる」でござりますよ。』（サンチョーは「サントー」（聖神の惡）の訛りらしい、）

『サンチョー、お前はさうではない、』とドン・キホーテは言つた、『お前は賢こい沈默でないばかりか、お前は忌々しい無駄口たゝきで、つむじ曲りぢや。しかし丁度今お前が想ひ出したといふその三つの諺を知りたいものぢや。私は自分の頭を引ツくりかへしてしまうたので——そしてそれは善い頭ぢやが——何にも思ひ浮ばんからの。』

『「お前の拇指を二本の絲切齒の間へ置くな、」といふのより良いのがありましよかい？又「（私の家から出て行け）」と（お前は私の女房に何の用があるか？）とには何の答へもない。」又「水差しが石を打つにしても、石が水差しを打つにしても、どツちも水差しにとつて惡い事ぢや。」殘らずち

やんと適ります。誰も總督なり自分より權力のある人なりと喧嘩はしません。自分が一番ひどい目に逢ひますからの、丁度指を絲切齒の間へやる人と同じやうに。それが絲切齒でないにしてもあるにしても齒でさへあれば違ひはありません。また總督が言ふことには何も返し口はしません、「私の家から出て行け、」と「お前は私の女房に何の用があるか？』とに返事がないのと同じとでござります。それから、石と水注子のことは、盲目でも分ります。ちやから他人の眼に微塵を見るより、自分の眼にある梁を見なけりアなりません。「死んだ女が咽喉を切つた女を見て驚いた、」といふやうなことを言はれんやうに。それに貴方樣は、悧巧な人が他人の家の事を知つて居るよりも、もつとよく馬鹿な人が自分の家の事を知つて居るといふとア、よう御承知でござりましよ。』

『いや、さうぢやない、』とドン・キホーテは言つた、『愚かな者は何にも知らぬ、自分自身の家の事も他人の家の事も知らぬ。いふまでもなく如何なる種類の賢こい構造も愚かな基礎の上には立つことができぬからぢや。しかし私等はそれに就いてはもう言ふまい。サンチョー、もしお前が悪い政治を行うたら、お前には恥辱であらうからの。けれども私は私の出來るだけ熱心に又賢明にお前に訓戒すべき義務を果したことを以て自ら慰めるわい。かうして私は私の義務と私の約束とから解放されたのぢや。御機嫌よう、サンチョー、お前の政治をするにつけて自



分を支配するがよい。さうしてお前がその全島を顚覆させはせぬかといふ私の懸念から私を救うてくれい。尤もさういふ事に立ち至るのを、私はかうすることに依つて防ぐことが出來るのぢや、卽ちお前のその肥えた小さい身體は、諺とへらず口とで一杯になつてをる一つの袋に外ならんといふことを公爵に申し上げて、お前といふものが何ういふ者であるかを證明するのぢや。』

『旦那樣、』とサンチョーは言つた、『若し貴方樣が此の私を政治向きに似合はんとお思ひなさるなら、私ア直ぐにもそれを捨てゝしまひます。何故と申して釘の頭ほどの私の靈魂の方が身體全體よりも私にア貴いものでござりますからの。そして總督さまが鳩鳩やきんぬき闇鷄を食うて生きてござるやうに、この平民のサンチョーは麪包と葱で結構暮して行けますよ。それにまた、私たちは眠つとる間は偉い人もつまらぬ人も金持ちも貧乏人も皆同じことでござります。ところで貴方樣が一寸お考へなさると、私をこんな政治向きの仕事に向けなさつたのは貴方樣ばかりの勢ちやことがお分りになりましよ。私が島の政治を知りませんのは、私が蒼鷹を知らんのと同じことでござります。若し私が總督になつた爲めに惡魔が私に取り憑くであろと思ふ理由が何かありますなら、私ア總督となつて地獄へ行きますよりか、サンチョーそのまゝで天へ昇る方がよござります。』

『尤もぢや、サンチョー、』とドン・キホーテは言つた、『お前が最後に言うた言葉だけで、お前は一千の島々の總督となるにも足ると私は考へる。お前は善い自然の本能を持つて居る。それがなければ何んな知識も何の役にも立たぬのぢや。お前の身を神樣へお任し申せ。そしてお前の肝心の目的を追うことを踏み迷ふな。卽ちお前の前に來る總ての事柄を正しくするといふことを、お前の志ともし、堅い目的ともするがよい。天はいつでも善意を助け給ふものぢや。さあ一緒に食事に行かう、さぞ公爵と夫人とが私等を待ちかねてゐあらう。』



## 第四十四章　サンチョー・パンザが總督府に案内された次第、又城中に於てドン・キホーテが遭難せし不思議なる冒險に就いて。

此の物語の眞實の原本には、原作者シード・ハメットが此の章を書いた時に彼の飜譯者は彼が書いた通りには飜譯しなかつたと逃べられてある、といふ話である——卽ちドン・キホーテのやうな乾燥で何の變化もない物語を企てたことに對して、そのムーア人が自ら一種の嘆聲を發したのが此章であると譯者は思うたらしい。何となれば彼はもつと眞面目でもつと興味のある枝話や插話に耽ることを得せずして、明けても暮れてもドン・キホーテとサンチョーの事を話さねばならぬやうな羽目になつたからである。彼はまた斯うも言つて居る、心も手もペンも、常にたツた一つの事柄を細かに書き立て、而も少數の人物の口を通して語るやうに限られて續けて行くことは、堪へがたい辛氣くさい仕事であつた。その結果は決して作者の勞力に當らなかつた、そこでこれを避ける爲めに彼は第一篇に於て「無分別な好奇心」と「いふ小說や捕虜の物語などを挿入して、これを

利用した。あの小説や物語は言はゞ此の物語から離れたものである。あの中にあつた他の物語はドン・キホーテ自身に起つた事件であるから省くことは出來なかつたのである。彼はまた考へた、ドン・キホーテの勳功に興味を覺えて夢中になつた多くの讀者はこれらの小說には少しも注意せぬであらう、そしてその結構の優美な點や技巧などには目も止めずに忙しくせつかちに看過してしまふであらう、かうした結構の優美なことや何かは、これらの小說が、ドン・キホーテの發狂とサンチョーの無知との附屬物としてゞはなく、それらが個々に單行本として出版されたならば、きつと非常に目に立つに相違ないのだが、と言つて居る。それ故此の第二篇に於ては、個々に引き離したにしても又は繰り込んだにしても、何れにせよ小說を挿入することは最上の策ではないと彼は考へた。しかし事實が表はすところの事情から起つてくる挿話、又はそれらと似たやうなものばかりは取り入れることにする。そしてこれらのものも極く僅かしか取らない。言葉とても簡略にして話を明瞭にするに充分であるだけに止めて置く。彼は全宇宙を取扱ふ程の能力と才能と頭腦とを持つて居るのであるけれども、今は物語の狹い範圍に閉ぢ込められ制限されて居るが故に、彼が書いたところのものに對してゞはなくして、彼が書くことを控へたところのものに對して、彼の勞力の輕蔑せられざらんこと、並びに評判を與へられんことを要求してゐる。



かくして彼は物語を進めてゐる、それはかうである。ドン・キホーテがサンチョーに訓戒を與へた日の午後、食事が濟んでから、彼はサンチョーが誰かに讀み聞かして貰ふことの出來るやうにと、訓戒を紙に認めて、それをサンチョーに渡した。然るにサンチョーはそれを受取ると間もなくそれを落としてしまつた。そしてその書き物は公爵の手に渡つた。公爵は公爵夫人にそれを示した。そして二人はドン・キホーテの狂氣と才智とに今更に驚いたのであつた。さて、あの狂言を續けてやる爲めに、その晩方、彼等はサンチョーには島であると思ひ込ませたところの村へと、彼に多勢の從者を從へて出發させた。偶々サンチョーを托せられた人は公爵家の家令で、思慮分別に富み滑稽の才を持つた人であつた——尤も如何なる滑稽も思慮分別なしにはあり得ないので——そして既に書き記した滑稽な狂言において、伯爵夫人トリファルディの役目を演じたのと同じ人であつた。彼はかういふ資格がある上に、彼の主人夫妻からサンチョーを取扱ふべき方法を敎へられたので、此の企てを見事にやつてのけた。ところが今度はかういふ事が起つた、それはサンチョーが此の家令の顏はあのトリファルディの顏に似て居るや否や、此の家令の顏はあのトリファルディの顏に似て居ると思つたのである。そこで主人の方をふり向きながら言つた、『旦那樣、私がお人よして惡魔にだまされて居るのでないなら、此處に居る公爵家の家令の顏はあの惱める侍女の顏とそツくりでは

御ござりませんかい？。』

ドン・キホーテは意を留めて家令の顔をぢつと注視した。さうしてからサンチョーに言つた、『サンチョーよ、お人よしであらうがあるまいが、悪魔がお前をだますべき理由はない――どういふつもりでお前がそんな事を言ふか、私には分んぞよ。惱める侍女の顔は此の家令の顔と似ては居る、しかしやツぱり家令は惱める侍女ではない。何故と言ふに、もし彼がさうであるならば非常な矛盾を含むことになるからぢや。しかし今はかやうな問題に沒頭すべき時ではない。そんな事をして居つたら私等は脫け出やうのない迷宮の中へ捲き込まれてしまふであらう。のう、サンチョー、私等は一生懸命に主にお祈りを捧げねばならぬ、主が邪惡な魔術師や魔法使ひの手から釋して下さるやうに。』

『こりア、冗談ぢやござりませんよ、旦那樣、』とサンチョーは言つた、『何故でも、前に私アあの人の物を言ふのを聞きましたが、そツくりトリファルディイさまの聲のやうに聞こえましたよ。まア、私は默つて居りましよ。ぢやがこれからは氣をつけて、此の疑ひを惱めてくれるか取りのけてくれるやうな、何か確かな證據になるものを探し出しましよ。』

『それが宜からう、サンチョー、』とドン・キホーテは言つた、『そしてお前はそのことに就いて發見したものを皆私に知らせてくれい。又お前の政治の上でお前の身に起つたことを知らせてくれい。』



サンチョーは遂に大勢の人々を從へて出發した。彼は全體に朽葉色と水色の硬硬毛の寬かな上衣を羽織り、同じ材料で拵へた遊獵用の帽子を冠り、法律家のやうな扮裝に着飾つて、騾馬の上に跨つた。公爵の命令に依つて、彼の後には、烙印を押された新しい馬具と絹の裝飾で飾られたダップルが續いた。サンチョーは絶えず後を振り返つて見て自分の驢馬を眺め、ドイツの皇帝と位地を換へようと言はれても、それに應じないだらうと思はれる程に、わが驢馬を引き連れて行くのを喜んだ。別れに臨んで彼は公爵と公爵夫人の手に接吻し、彼の主人に祝福を請うた。ドン・キホーテは涙を流して彼に祝福を與へ、彼は泣きじやくりしながらそれを受けた。溫良なる讀者よ、實直なサンチョーをして平和に行かしめよ、そして彼に幸運を下らしめよ。さうして彼がその役目に就いて振舞うたことの話が、諸君に供する夥多しき笑草を待ち設け給へ。それはさておき、同じ夜に彼の主人に起つた事に諸君の注意を向け給へ。而して諸君はそれで笑はないとしても、とにかく諸君は齒を露はす程には口を擴げるであらう。蓋しドン・キホーテの冒險は驚異もしくは哄笑を以て迎へらるべきものである。

さてかういふ事が記されてある、サンチョーが去つてしまふや否や、ドン・キホーテは孤獨の寂しみを感じた、そして若しサンチョーに取つて其の命令を破棄することが可能であつたならば、又彼から總督たるの權を取り去ることが出來るなら、彼はさうしたであらうと。公爵夫人は彼の落膽してゐるのを見て取つて、何故さう陰鬱になつたのかと訊ねた。彼女は言つた、もしそれがサンチョーを失つた爲めであるならば、わが家にはドン・キホーテが充分滿足するやうに取りなす多勢の家來や侍女や小間使が居ると。

『奥方、實はかやうでございます、』とドン・キホーテは答へた、『拙者はサンチョーを失ひましたことを心に深く感ずるのでございます。しかしそれは拙者の顔に表はれました悲しみの重な原因ではござりませぬ。そして貴女が拙者に仰有りましたいろ〳〵の御申出の中で、拙者は唯その御好意の程を有り難くお受けいたしまする、そしてその上はたゞ、何うか拙者を唯一人部屋へお遣し置き下さるやうにお願ひいたしたうございます。』

『なるほど、ドン・キホーテ樣、』と公爵夫人は言つた、『けれども、それはなりませぬ。花のやうに美しい、私の侍女の中の四人を、貴方にお附添ひいたさせませう。』

『拙者には、』とドン・キホーテは言つた、『その少女たちは花ではなうて、心を貫す刺のやうなものでござりませう。その少女たちやそれに似たものは、蠅のやうに速く拙者の部屋へ入るでござりませう。もし貴女さまが尙一層拙者を滿足させやうとお思ひ下さるなら、拙者はそれに相當するものではござりませぬが、どうか拙者を喜ばして下さるやうに、自分の部家に自分だけを置かせて下されませ。なぜと申しますに、拙者は自分の好き好みと道德との間に彊界を置くからでござりまする。拙者は貴女樣がお示し下さる寬大なお心を忝なうは存じまするが、此の規則を破らうとは思ひませぬ。要するに。拙者は何人にもせよ拙者の着物を脫がさうとするのを待たずに、この着物を着たまゝ眠らうと思うのでござります。』



『もう仰有りますな、ドン・キホーテさまま、もう仰有りますな、』と公爵夫人は言つた。『少女とは言はず蠅一匹も、貴方のお部屋へ入らぬやうに命令ますでござりまそう。私はドン・キホーテさまの御心を無にするやうなものではございませぬ。貴方のいろ〳〵の德のうちでも最もすぐれて居りますのは謙遜の德であると申すことを私は感じて居ります。貴方のお氣に召すやうに、又貴方のお氣の向いた時に、貴方は着物をお脫ぎなさつてお寢卷にお着換なさいませ。そして貴方の御自由になさいませ、誰も貴方のお邪魔をいたすものはございませんから。さうして貴方のお部屋には必要の道具は總て備へつけてございますから、貴方が戶口に錠をお下しになつてお眠みなさ

いましても決して御不自由はございません。どんな自然の必要が起りましても戸を開けずにすむやうに出來て居ります。ドゥルシネア・デル・トボソ姫が千年の壽を保たれますやうに、又あの方の名譽が全世界の到る處にひろがりますやうに。あの方はかくも勇敢にかくも德高い騎士どのに戀せられるに足るだけの方でございますもの。それからわが總督サンチョー・パンザの心の中へ御親切な神樣が、速にあの罰を果たさうとする熱心を注ぎ込んで下さいますやうに。さうすれば世の中の人々は、も一度あの大なる御婦人の美しさを見て喜ばしく思ふことができるでございませう。』

この言葉にドン・キホーテは答へた、『貴女は實際貴女樣らしいことを仰有りました。貴とい御婦人のお口からは惡いことゝ言うては少しも出て參りません。さうしてドゥルシネアは更に幸福になるでございませう。又この世の第一の雄辯家が彼女に與へることの出來るあらゆる讃辭に依るよりも、一層よく貴女樣のお賞贊によつて世界に名高くなるでございませう。』

『さあ、さあ、ドン・キホーテさま、』と公爵夫人は言つた、『もう夕飯時でございます。それに多分公爵が待ちかねて居りませう。さあ、食事をいたしに參りませう。そして早くやすむやうにいたしませう。昨日のカンディーからの御旅行は可成り長うございましたから、きつと貴方は疲れて



おいでに相違ありません。』

『奥方、拙者は少しも疲勞は覺えませぬ、』とドン・キホーテは言つた、『拙者は一生の中に、クラヴィレニョーよりも靜かな、愉快な步調の動物に乘つたことはございませぬと、貴女樣にお誓ひ申します。如何なるものがマランブルノーを誘うて、あのやうに速いおとなしい馬を見棄てさせ、あのやうに無鐵砲にそれを燒かせましたか、拙者には分りませんわい。』

『多分、』と公爵夫人は言つた、『マランブルノーはトリファルディやその友達や、その他の者に加へた惡行を悔ひて、又あの人が妖術家や魔法使ひとして行うた罪を悔ひて、自分の技巧で拵へたいろ〳〵な道具を破り棄てたのでございませう。それで、その重な物として、國から國へと彷徨うて、あの人を落ち着かせることのなかつたあのクラヴィレニョーを燒いたのでございませう。そして其の灰によつて又貼札の分捕物によつてラ・マンチャの大ドン・キホーテ樣の剛勇は永久に確かめられたのでございます。

ドン・キホーテは公爵夫人に更に感謝の意を表した。そして夕食が終つて、一人彼の部屋へ退いた、誰も拙者の部屋へ來て附きそうて居るには及びませぬと斷つて。ドゥルシネア姫への憂らぬ忠實を忘れさすやうに自分を導き驅り立てるやうな誘惑に出逢ふことを彼が恐れて居たことは、

これ程であつた。何となれば彼は常に武者修業者の花でもあり鏡でもあるアマディスの徳を心ひそかに慕うて居たからである。彼は部屋の戸をかたく締め切つて、二本の蠟燭の光で着物を脱ぎ、それから彼の靴下を取り去つた時に――あゝ斯様な人物にふさはしからぬ何といふ不幸ぞ！――かういふものが突発した。それは溜息でもないし、又彼の上品やよい躾を辱めるものでもないそれは實に彼の靴下の一つに凡そ二十幾個の穴があいてゐたことで、それで靴下は格子細工のやうに見えたのであつた。此の貴ぶべき紳士は非常にがつかりしてしまつた。で此の時丁度半ドラム〔一ドラムは我が一匁〇三六餘〕の綠の絹絲を手に入れることが出來たなら、彼は一オンス銀をも與へたであらう。敢て綠の絹絲と言ふ、何となればその靴下は綠の色であつたから。

こゝでシード・ハメットは書きながら叫び出した、『あゝ貧乏なるかな、貧乏なるかな！コルドーヴァの大詩人がお前を呼んで「有り難いと思はずに受けた神聖な賜物」と言うたのは、一體どんな憑物がしてゐたのであらう？私はムーア人ではあるが、キリスト信者と交際したので、神聖は慈善、謙遜、信仰、服從、貧窮で成り立つことを、充分によう知つて居る。がそれにも拘らず、私は言ふ、實際かの最も偉大な聖者の一人が「爾はそれらのものを持たざるが如く總てのものを持て」〔シード、ハメットは聖林多前書の第七章三十節と第六章十節の二句を誤記したのである〕というた言葉のやうな種類の貧乏であるのでなければ、貧乏であ



りながらも何か滿足を見出し得る者は敬神の念を多く持つて居るに違ひない。前のものは彼等が精神の貧乏と呼んで居るものである。しかしながら、他の方の貧乏たるお前は――何となれば私が今話して居るのはお前に就いてゞあるから――何故お前は他の人々よりも紳士や生れのよい人々を苦しめることが好きなのか？何故お前は彼等をして靴の割目を塗りかくしたりさせるのか、何故彼等の上衣の釦を一つは絹の、一つは毛の、一つは硝子のを着けさせるのか？何故彼等の綢頒が始終キクヂシヤの葉のやうに縮れて居らねばならぬのか？しかもそれは皺よらす火熨斗で皺よらせたのではないのに。』（これによつて我々は硬ばつた皺をよらせた綢領を用ひた古代の風を認め得るのである。）それから彼はつゞけて行く、『善良な家庭の貧しい紳士よ！常に名譽といふものに甘やかされ、みじめにこツそりと食事をして、何にも食はないのに小楊枝を口に咬へ、如何にもそれを使はねばならぬやうに見せかけて路へ飛び出して行く！人々が一リーグも遠くから、彼の靴の補片、彼の帽子の汗の汚れ、彼の外套のみすぼらしさ、彼の胃の飢ゑ、を認めるであらうと思ふてゐる神經質な名譽心を持つたあはれな者よ！』

靴下の破れたことはドン・キホーテの胸に應へた。けれども、彼はサンチョーが一對の旅行用の長靴を殘して行つたことを思ひ出し、翌日はそれを穿くことにきめて、自ら心を慰めた。遂に彼

は寢臺へ行つた。彼はサンチョーを失うた爲めと、彼の靴下の修繕することのできない程に破れたことなどの爲めに、悄然として心痛んだ。彼は靴下の破れを逢つた色の絹絲でゞも繕ひたかつた。それは紳士たるものが長く〳〵當惑の間に示し得る貧乏の最大徽候の一つである。彼は蠟燭を消した。けれども其の夜は暑かつたので眠ることが出來なかつた。彼は寢臺から起ち上つて、美しい庭に面して居る格子窓を僅かばかり開けた。さうしたので彼は庭の內を步いてゐる人影を認め、話し聲が耳にはいつた。彼は注意して聞かうと耳をすました。下に居たそれらの人々は聲を高めた。それで彼は下のやうな言葉を聞くことが出來た。

『さう歌へ〳〵とお勸めでない、エメレンシア。あのお方が此のお城へおいでになつて、私が一と目お見かけ申してからといふもの、私は唯泣くばかりで歌ふことはできないのだもの。それに奧樣はぐつすりお寢みになる方ぢやないのだもの、私は世界のあらゆる富をかけても私達が此處に居ることを奧樣へはお知らせ申したくないのだから。よし又奧樣はようお眠入りになつてお覺めなさらないにしても、私の歌は何の役にも立たないでせう。私を冷嘲す爲めに近くへおいでなされた彼のエーニアスの再生のやうな騎士さまが、ようお寢つていらしつて私の歌を聞いて下さらないのですもの。』



『そんなこと御心配なさりますな、アルティシドラさま、』と一人の聲が答へた、『奧樣は疑ひもなくようおよつて居らつしやる、そしてお邸のうちの人は皆寢入つてしまひました、あなたのお心の君、あなたのお心を亂しなさるお方の外は。丁度今あの方がお部屋の格子窓を開けなさるのを私はお見うけ申しました。ですからあの方はお目覺めでいらつしやるに相違ありません。お歌ひなさい、お可哀相に、あなたの竪琴に合せて低い美しい調子でお歌ひなさい。たとひ公爵夫人が私達の歌をお聞きなされても、私たちは夜の熱さに罪を負はすことができますよ。』

『私の考へるのはさうぢやないんですよ、エメレンシア、』とアルティシドラが答へた、『私がいやに思ふのは、私の歌が私の心の裡を露はして、戀の宏大な力を知らぬ人々に輕薄な蓮葉娘と思はれることなのです。けども、なるやうになるがよい、心の痛みよりは頬の上の赤味の方がよいと言ひます。』そして今や輕く觸れた竪琴は微妙な音を出した。ドン・キホーテはこれを殘らず聞いて驚きの爲めに息も止まるばかりであつた。何となれば彼が騎士道の書物で讀んだやうな無數の冒險が、窓や格子や、庭や、夜樂や、戀を仕掛けることや、思慕の惱みなど〻一緒に、忽ち彼の心に起つて來たからである。彼は直ちにかう結論をつけた、公爵夫人の小間遣ひの或る者が自分を戀慕うては居るが、少女心のつゝましさから燃え立つ情を胸に堅く秘め隱して居るのであらうと彼

は心の動き出すことを虞れて身も慄へた。そして従ふまいと心の中に決した。そして彼の婦人ドリルシネア姫へ彼の全力全精神を以て身を委ねつゝその音樂を聞かうと決心した。そこで自分が此處に居ることを知らせる爲めに、彼は態と嘘を一つした。それを聞いて少女たちは大いに喜んだ。何故ならば彼等少女たちの欲するところは、ドン・キホーテが自分たちの歌を聞かんことであつたからである。そこで竪琴を掻き鳴らしつゝ、アルティシドラは、次の唄を歌ひはじめた。

おゝ、寢臺の上の、
粗麻布の敷布の中に横たはり、
夕より朝まで、
兩脚打ちのばしうまゐせる御身よ。

おゝ、名だゝるマンチャ生れの、
いとも勇ましの騎士よ、

アラビヤの黄金よりも、
いや清く〳〵いや貴き御身よ。

ながう生ひたちぬれど幸うすき、
なやめる少女の嘆き聞き給へや、
御身が二つの太陽の光こそは、
少女が胸に火とは燃えぬれ。

冒険を求めて御身は漂泊ひ、
他人に苦痛を持ち來す。
御見は創傷を撒きちらす、さはれ、
あゝ、それを癒やすべき香油は與へず！

あな、御身若き勇士よ、

神は御身の企圖を早め給はんことを、
リビアの眞砂のうちに、ジャカの巖の中に、
初めて光を見しは御身か？

鱗ある大蛇、御身に乳を與へしか？
御身嬰兒たりし時養ひ育てしは誰ぞや？
荒き森かげに搖り眠らされしか、
あるはほの暗き山の窟にてか？

おゝ、ドゥルシネアこそは誇り得め、
肥えて健かなるかの少女こそは、
猛き虎をも馴れしむる、
力を持てるは彼女のみなれば。



これによりて彼の少女は、
デーガフよりジャラマまで、
マンザナレスよりゼニルまで、
デュエロよりアルランザまでその名聞えん。

喜びて我かの少女と變へんものを、
下袴をも附け添へて、
わがいとよきいと美しきものを、
すべて黄金の紐にて裝はれしものを。

おゝ御身の力ある腕に抱かるゝ、
幸ある美女となり得たらんには、
よしせめて御身が寢臺の側に坐りて、
御身が塵にまみれたる頭を掻き得たらんには！

我は泣き叫ぶ——求むるに足らぬ、
かゝるなさけを求めてぞ、
御身の御足を擦ぐりなば、
われの如く卑しきものには十分なり。

いかなる帽子、銀のレースつけたる如何なる上靴を、
我は御身に贈らなん！
いかなる綾布のズボンをか御身の爲めに作らん、
いかなる美しく長き麻布の上衣をか作らん！

また樫の五倍子ほどにも見ゆらん
眞珠を御身に贈らまし。
その一つ〳〵が比ひなき大きさの、



いと大いなる「唯一つ」とも呼ばれ得べきを。

マンチヤのネロよ、此の燃ゆる心の上を、
御身のタルペイの岩より見下しなせそ、
また御身の怒りの心に、
新に薪を加へなたまひそ。

われはかよわき處女にて、
年まだ若く十五に滿たず。
（われは僅かに十四と三月のみ、
われわが靈魂にかけてぞ誓ふ。）

われ足なへず跛ひかず、
いかなる傷もわが身にはなし、

われ歩む時百合のごとわが髪は、
地の上を輕く曳くなり。

わが鼻はむしろ低くはあれど、
わが口はむしろ廣くはあれど、
わが齒は黄玉のやう高けれど、
わが美しさは天にものぼらん。

御身はわが聲の麗しきを知る、
御身聞き給はゞさあらん、
さてわが此のからだは、
中背よりは稍低うぞ造られたる。

かゝる愛嬌やさま〴〵のものは御身のもの、
すべて御身が槍と弓との獲物なり、
われは此の館の小間づかひ、
名はアルティシドラと申すなり。



こゝで心に傷みあるアルティシドラの歌は終つた。然るに誠心こめて戀ひ求められたドン・キホーテは驚きを感じはじめた。そして深い溜息をついて獨り言ちた、『あゝ、いかなる少女も私を一目見て戀に陷らぬものはないとは、私は何たる不幸な騎士であらう！あゝたぐひなきドゥルシネア姫は、人々が姫をして何事もなく拙者の無類の信實を享けしめぬ程に不幸であるとは！女王たちよ、貴女がたは彼の女を何うなさる御つもりですか？　皇后陛下がたよ、貴女がたは何故彼女を迫害なさるか？十四から十五歳までの處女たちよ、何故貴女がたは彼女を追ひ立てなさるか？彼女に拙者の心を引渡し拙者の靈魂を譲り渡すことにおいて、戀が彼女に與へることを欲した其の運命の勝利と歡喜と光榮とに、不幸な彼女を任せて置かれよ。戀に襲はれた人々よ、ドゥルシネアに對しては拙者は捏粉か砂糖菓子のやうなものに過ぎぬが、他の人々には燧石であるといふことを御承知下されい。彼女には拙者は蜂蜜でありますが、貴女がたには盧薈の濃汁でござります。拙

者に取つてはドゥルシネア姫のみが美しく、賢く、徳があり、優美であり、高い教育もあるので、その他の人たちは皆不仕合せな、愚かな、輕薄な、卑しい育ちの人ぢや。自然は拙者を彼女のものとしてこの世に送りました、他の人たちのものとしてゝはありません。アルティシドラは泣かうと歌はうとまゝぢや。その婦人の爲めに拙者はあの魔法にかゝつたムーア人の城でひどく打たれましたが、あの婦人も絶望してしまはうとまゝぢや。拙者は羨られやうが、燒かれやうが、この世の中のあらゆる魔法の力を以てしても、純潔な、嫻雅な、節操堅固なドゥルシネアのものでなければならぬのです。』かう言ふと共に彼は俄に窓を閉ざした。そして、何か大不幸が彼に落ちかゝつたかのやうに、疳癪を起して苛々して寢臺の上に長々と横たはつた。吾々は差當り彼をそこに殘しておかう。彼の有名な政治を將に始めんとして居る、偉大なるサンチョー・パンザが、今や吾々の注意を要求して居るが故に。



## 第四十五章　偉大なるサンチョー・パンザが島を領せしこと及び彼が政治を始めしことども。

おゝ地球上反對面の國の永久に存する發見者、世界の松明、天空の眼、冷水器の快い刺戟者よ！此處ではシンプレアスであり、かしこではフィーバスであり、ある時は弓術家、ある時は醫者、詩の父、音樂の發明者よ、御身は常に登り、沈むやうには見えるけれども、決して沈むことがない！おゝ太陽よ、御身の助けによつて人は人を生む。私は御身に願ふ、私を助けて私の智慧の闇を照らし下さるやうに、その智慧によつて私は大サンチョー・パンザの政治の物語をするのは細心な精確を以て進むことが出來るであらう。何故ならば、私は御身なしには自分を弱く氣力なく覺束なく感ずるからである。

さて眼目に立ち返つて――サンチョーは彼の總ての從者を引きつれて人口凡そ一千ばかりの或る村へ到着した。その村は公爵が領して居る一番大きな村の一つである。家來どもはサンチョー

に、此處はバラダリアの島と呼ばれて居りますと告げた。それは此の村の名がバラタリオであつた故か、又は冗談半分にこの政治がサンチョーに授けられたからか、どちらかによつたのである。Barato は現今は英國の意である、昔のスペイン語では或は生活費又は冗談を意味する名詞である。城壁を以て取り圍まれてある市の門に達すると市の役人がサンチョーを迎へに出て來た。鐘の音が一と鳴り鳴り響いた。そして住民等は大滿悦のあらゆる徴しを示した。そして非常に派手な行列を作つて、神に感謝を捧げる爲めに大寺院へと彼を導いた。それから愚弄的な儀式で彼等は彼に市の鍵を讓り渡した。そして彼をバラタリアの島の永久の總督であると承認した。新總督の衣裳、髯、その肥えてづんぐりした姿は、事件の眞相を知らなかつた多くの人々、又事件の眞相を知つて居る人々（これも少くはなかつた）をさへも驚かした。終に彼を寺院からつれ出して、人々は彼を裁判所へ案内してそこの席へ彼を坐らせ、公爵家の家令が彼に言つた、『この島には昔からの習慣がございまする。總督樣、この有名な島の總督職にお就きなさいます方は、與へられました問題にお答へなさらねばならぬのでございます。それは聊かこみいつた難問題に相違ござりませぬ。して其のお答へに依りまして住民どもは其新總督の聰明の程をお察し申し上げ、それによつて喜んで祝福しましたり、又はその到着を悲しんだりいたすのでございます。』



家令が此の話をしてゐる間、サンチョーは彼の席の向ひ側の壁の上に書き記された二三の大文字を見つめて居た。けれども彼は讀むことができなかつたので、壁の上に描かれてあるのは何ぢやと尋ねた。家令はかう答へた、『閣下、あれには閣下が此の島の總督になられました日が書き記されてあるのでございます。その文面はかやうで、「何年何月何日の此の日、ドン・サンチョー・バンザ殿此の島を領す、願くは彼ながく此の島を享有せんことを。」とござります』

『そして誰をドン・サンチョー・バンザと呼ぶのぢや？』とサンチョーは訊ねた。

『閣下のことでございます、』と家令は答へた。『何故と申しますれば、只今その椅子の上にお坐りになつて居りまするお方の外には、バンザといふお名前の方は未だ曾て此の島へ入られたことがござりませぬ。』

『よし〳〵、それではお前に話さうが、』とサンチョーは言つた、『私は「ドン」といふ稱號を持つたことはない。又私の家族の誰も今迄それを持つたものはない。私の名前は只のサンチョー・バンザで、私の親父さんの名前もサンチョーであつたし、私の祖父さんの名前もサンチョーであつた。ドンとかドーニャとかいふ稱號は添へたことがない。私は此の島にはドンが石より澤山あるのかと思ひますよ。しかし心配しなさんな。神樣は私の言ふ意を知つてござる。そして若し私の此の

役目が四日も續くやうであつたら、私はかういふドンを排除けてしまはう。それはほんとに廚のやうに隨分厄介なもので、おまけに餘り澤山ある。ちやがまあ問題をお出しなされ、私は出來るだけの一番よい答へをしましよ。人民が歎くか歎かぬかは分らんが。』

この途端に二人の老人が法庭へ入つて來た。一人は散歩杖のやうな一本の杖を携へてゐた、杖も何も持たずに居た一人は言つた、『總督樣、餘程以前に私は此の人に、請求次第返却するといふ條件で、此の人を滿足させ此の人の役に立つやうに金貨十枚を用立てました。大分長い間私はそれを請水しませなんだ。それも、私が此の人へ金を貸しました時には、この人は隨分難澁して居りましたが金を返す爲めにその上の難澁をさせたくないと思ひましたからでございます。けれども此の人が一向に拂ふ樣子が見えませぬので、私は二三度金を請求いたしました。ところが此の人は金を返さんばかりか、金を借りた覺えはないと申すのでございます。又もし借りたとすれば、それは疾うに拂うてあるとか申すのでございます。けれども私は貸付金や支拂の證據は何も持つて居りません。それは此の人は私に返濟せぬからでございます。私は閣下が此の人に誓ひを立てさせて下さるやうに願ひます。そして若し此の人が私に金を返濟したと答へますなら、私は此處で、神樣のお前で此の人の負債を許します。』

『お前さんはこれに對して何といふか、杖を持つた老人よ?』とサンチョーは言つた。

これに對して其の老人は答へた、『總督樣、私は此の人が私に金を貸したといふことは認めます。しかし閣下、貴方樣の權標をお下げ下されませ。此の人は私が誓ひさへすればよいと申しますから、私は金を返濟したと誓ひませう、實際眞實此の人に返却しましたと誓ひませう。』

總督は權標を低くした。そして彼がさうした時に杖を持つて居た老人は自分が誓ひをする間代つて持つて居て呉れるやうにと、其の杖をも一人の老人へと手渡した、恰もそれが邪魔であつたかのやうに。それから彼の手を權標の十字の上に置いた。彼は只今請求された金貨十枚を借用したことは眞實であつたこと、しかしながら自分は手づから一方の老人の手へ金を返却したこと、しかるに此の老人はそれを思ひ出さずに、始終その金を請求して居つた、といふことを述べた。

これを見て總督は相手が言つたことに對して爲ねばならぬ債權者の答辯は何うかと尋ねた。彼は、全く債務者は眞實のことを語つた、それは自分は彼が正直な男であり又善良なキリスト敎徒であると信じて居るからで、また自分は何時如何にして彼が金貨を返却したかを忘れたに相違ないといふこと、又これから先は最早金を請求すまいといふことを言つた。

債務者は再び彼の杖を手に取つた。そしてお辭儀をして法廷を去つた。これを見て、又その上

のおしやべりをしないで急いで立ち去る様子を見て、また更に原告の斷念を見て、サンチョーは頭を胸に垂れ、眉と鼻へ右の手の人差指を當てゝ暫しの間は深く考へ込んで居た。それから彼は頭を擧げ、人々にあの杖を持つた老人を呼び戻すやうにと命じた。その老人はもうとうに出掛けてしまつてゐたからである。人々は彼をつれて戻つて來た。サンチョーは彼を見るや否や言つた、『正直な人よ、私にその杖を借してくれ。私はそれが入り用ぢやから。』

『總督樣、お安い御用で、さアこれを。』と言つてその老人は其をサンチョーの手に渡した。

サンチョーはそれを取つて、更にそれをも一人の老人に渡しながら言つた、『行きなさい、御機嫌よう。もうお前さんは支拂ひを受けたから。』

『私が、總督樣！』とその老人は答へた、『なぜでござりますか、この杖は金貨十枚の價値がござりますかい？』

『さうぢや、』と總督は言つた、『もし私が世界一の大馬鹿者でなければの。今お前さんは、私が王國中を治める頭を持つとるかどうかゝ分るぢやらう、』さうして彼はその杖を此處で、皆の見て居る前で、二つに折るやうにと命じた。言はれたまゝに杖は二つに折られた。すると其の眞中に十枚の金貨が入つて居た。一同は驚いてしまつた。そして自分たちの總督を第二のソロモンとあが



めた。人々はどうして彼が杖の中に十枚の金貨が入つて居るといふ見極めがついたかと尋ねた。彼はかう答へた、誓ひをした老人が誓ひを立てる間その杖をも一人の老人に渡したその樣子や、又彼が實際眞實にあの老人へ金貨を返却したといふその誓ひの言葉や、又誓ひを爲し終るや否や彼が再び杖を求めたその態度などを見て、要求された金額がその中にあるに違ひないといふことが頭の中に浮かんで來たのであると。そして此事から、たとひ其人が愚かであつても、總督たるものが裁判をする場合には神樣が時々導いて下さるといふことが分るとサンチョーは言つた。それに彼は村の牧師補が丁度これと同じやうな事件を話したのを聞いて知つて居たのであつた。そして若し彼が覺えて居らうと思つた總ての事を忘れたことがなかつたとすれば、この島ぢうに斯樣な記憶力を持つて居るものは居ないであらうと思はれる程の良い記憶力を彼は持つて居たのである。遂に老人たちは出て行つた。一人は悄然て、も一人は大滿足の體で。この場に居合せた者はみな驚いた。そしてサンチョーの言葉、行爲、動作などを記錄して居た人は、馬鹿として彼を見下すべきか悧巧な人として彼を見上ぐべきかを判斷しかねて居た、

この事件の始末がつくや否や、工面の好ささうな家畜商人らしく裝つた一人の男にしつかとしがみついて、一人の女が法廷に入つて來た。そして彼女は大聲をあげながら進んで來てかう叫ん

だ、『裁判して下さい、總督さま、裁判して下さい！そして若し私がそれを此の世で得られませんなら私は天國へ參つてそれを求めませう。私の靈魂の總督さま、この性質のわるい男が野原の眞中で私を捕へました。そしてよく洗ひもせぬぼろ布片かなんぞのやうに私の身體を使うたのでございます。そして、悲しいことには！私が此の二十三年以上も、ムーア人やキリスト信者や、土地の人や他國の人に對して、今まで防いで持つて居りましたものを私から取り上げてしまうたのでございます。私はいつも樫のやうに堅うございました。そして火の中のサラマンダー〔火中に住むと傳へられる動物〕のやうに、又荊棘の中の羊毛のやうに、純潔にこの身を保つて參つたのでございます、私を扱ふには此の男も清淨な手をして來ねばなりませんように？』

『この男の手が清淨であるかどうかはこれから吟味して見ねばならぬ。』とサンチョーは言つた。そしてその男を顧みて、この女の訴へに對する答へとして彼の言ふべきことは何かと尋ねた。

その男は全くどぎまぎして答へた『總督樣、私は貧しい豚商人でございます。今朝ほど（閣下の前で恐れ入りますが）四匹の豚を賣らうと思ひまして村を立ちました。そして稅金やら飼料やらで彼是その豚の値段位取り立てられてしまひました。私は村へ歸らうと歩いて行きますと途でこの婦人に出會うたのでございます。すると何事にもどさくさ騷ぎをし出かす惡魔が、私



たちを一緒に結びつけたのでございます。私はあの女に相應に拂ひました。けれどもあの女は滿足しませんで私を摑まへて離しません。到頭こゝへ私を連れて來ました。あの女は私があの女に無體をしたと言ひますが、それは僞です。それは私が誓ひます、いつでも誓ひます。そしてこれは全く眞實でございます、その中の一點一畫も皆眞實でございます。』

總督はこゝに於いて、彼が身のまはりに銀貨を幾らか持つて居るかどうかと彼に聞いた。彼は懷の柔皮の財布の中に銀貨二十枚ばかりを持つて居りますと言つた。總督はそれを取り出して、それを原告に渡せと命じた。彼は震へながらその命に從つた。女はそれを取つた。そして總ての人に何遍となく禮をしながら、又苦しんで居る孤兒や處女に斯ほどの注意をして下さる總督さまの健康と萬歲を神に祈りながら、彼女は兩手に財布を摑んで急いで法廷を出て行つた。けれども、先づその財布の中に入つて居る金が銀であるか否かを調べようとする樣子をして。

彼女が出て行くや否やサンチョーは家蓄商人に言つた。商人の淚は既に流れ落ちようとして居た。そして彼の眼と心は彼の財布を追うて居た、『お前さん、あの女の後を慕うて行つて、あの女から力づくで財布を取戻して來なさい。そしてそれを持つて此處へ戻つて來なさい。』そして彼がさう言うた相手は馬鹿や聾ではなかつた。卽ちその男は直ちに電光の如くに去つて、自分が命ぜ

られた通りにしようと立つて行つたのである。

傍觀者は皆この事件の終りを見ようと氣づかいつゝ待つて居た。やがて男と女とは以前よりはもつとひどく摑み合うてやつて來た。女は下袴を上げて、その前垂に財布を隱し込んで居た。男はそれを取り返さうとして激しく爭うた。けれども何の効もなかつた。女の防禦はそれ程に強かつた。女はその間中叫び立てゝ居た『神さまのおさばきを下さい！御覽なさい、總督さま、この男の恥しらずの大膽さには呆れてしまひます。この惡漢は町の眞中で、街路の眞中で、貴方樣が私に下さるやうにお命じなされた財布を私から奪ひ取らうとするのでございます。』

『してあの男はそれを奪ひ取つたか？』と總督は聞いた。

『それを取つたかと仰有るのでござりますか！』とその女は言つた。『私は財布を取られる位ならそれより先に私の命を取られる方がましでござります。子供ぢやあるまいし！こんなけちな汚い横着者にしてやられるものですか。鉄錐でも金槌でも木槌でも鑿でも私がかうしがみついて居るのを離すことはできません。獅子の爪でも駄目です。まア私の身體から心をさきに取るがよい！』

『その通りで、』とその男は言つた。『私はひどく打たれて、もう力がなくなりました。打ち明けて申しますが、私はもうあの女から財布を取り返す力がなくなりました。』かう言つて彼は女を捕へ



て居たその手を離した。

この時總督はその女に言つた『その財布を私にお見せ、お前さんは見上げた頑丈な人ぢやの。』彼女はすぐさま彼にそれを渡した。すると總督はそれを男に返した。そして力強い押へられぬ女に向つて言つた『のう、もしお前が財布を防ぎ守る爲めに表はした程に、いやその半分ほどでも、お前の身體を防ぎ守る爲めに元氣と勇氣とを示したならば、ハーキュリース（ギリシア傳說の英雄）の力と雖もお前を强ることはできなんだであらう。行きなさい、神樣がお前に不幸を下し給ふやうに。またこの島ぢうにお前の顏を見せるな。又この島の四方六リーグ以内へは立ち入るな。もし反けば二百の鞭打ちの罰ぢや。卽刻立ち去れい、この恥知らずの、騙りの、あばずれ女め。』その女は威壓されて、悲しげに、頭を垂れて立ち去つた。そこで總督はその男に言つた『正直な男よ、お前の金を持つて家へ歸りなさい、そして神樣がお前を助けて下さるやうに。又この後とも、もしお前がその金を失ひたうないと思ふなら、何人にも無體をせうと考へてはならぬぞよ。』その男は極めて不器用な恰好で彼に謝した。そして家路に向つた。傍觀者は再び彼等の新總督の裁判と宣告とを聞いて感心してしまつた。

次ぎに、一人は見るところ小作人で、も一人は手に一對の鋏を持つて居たので仕立屋であるこ

とが分る、この二人がサンチョーの前に現はれて、先づ仕立屋が言つた、『總督樣、此のお百姓と私が閣下のお前へ罷り出ましたのは斯ういふ次第でございます、昨日この人が私の店先へ參りまして(憚りながら私はどこへ參りましても立派な仕立屋で通ります、ありがたいことに、)私の手に布地を置きまして私に「貴方、帽子を一つ拵へて貰ひたいのぢやが此の布地で澤山ですかい?」と訊きますので、私はその布地をとくと見さして結構出來ますと申しました、ところが大方此の人は、私がこの布地を盜むだらうと疑うたものと見えまして——さう私は想像したのでございますが、その想像は當りました——一體かういふ疑ひは、この人の持ち前の不正直な心によつてさう考へるやうになりましたので、又世間で仕立屋といふものを惡く思うて居りますところからさういふことになつたのでございます。それで此の人はそれで二つ拵へられるかどうか見てくれと私に申しました。私はこの人の思うて居ることが解りましたので、「出來ますする」と申しました。この人は、尙も元からのつまらぬ考へを何處までも續けまして、もつと出來るだろ、もつと出來るだろと言ひますので。私は出來ますと、到頭五つまで拵へることにしました。この人は丁度只今その帽子を取りに參りました。私はこの人にその帽子を渡しました。然るにこの人は其の手間賃を拂はうとしません。それどころかこの人は私に布代を拂うてくれと言ひまして、夫が出



來ねばあの布地を返せとかう申すのでございます。』

『今申したことは皆本當のことか、おい?』とサンチョーは言つた。

『左樣でございます、總督さま、』とその百姓は答へた、『しかしこの仕立屋が私の爲めに拵へた五つの帽子を、此處へ出させて見て下さりませんか?』

『出しますとも、』と仕立屋は言つた。そして彼の手を上衣の下から引き出して、彼はその五本の指の上に着けた五個の帽子を示した。そして『これが此のお人の頼まれた五つの帽子でございます。神樣に誓ひまして、又私の良心にかけまして、私は布地の殘りはほんの小片さへ取つて居りません。また私はこの仕事を檢察官に調べて貰ひませう。』

こゝに居た凡ての者は帽子の數と告訴の新奇なので笑つた。サンチョーは暫くの間ふかく考へ込んだ、それから言つた、『この事件に於いては長々とうねりくねつた議論を述べ立てる必要はないやうに思はれる。たゞ正直な人間の卽座の判決を與へることが必要なのぢや。それ故に私の判定は、仕立師は手間賃を失ひ、又百姓は布地を失ひ、そして帽子は監獄の懲役人にやつてしまはう。それでこの事件に就いてはもう何にもないことにしよう。』

もし家畜商人の財布に就いての前の判決が傍聽者の賞贊の念を惹き起させたとすれば、これは

彼等の哄笑を招いたのであつた。けれどもこの總督の命は結局實行された。これはみんな、彼の記錄係によつて書きとめられたので、直ちに公爵のもとへ發送されたのであつた。公爵は非常な熱心を以てそれを待ち受けて居たのである。さて吾々の此の善良なるサンチョーを此處へ殘して置かう。何となればアルティシドラの音樂によつて痛く心になやみを覺えた彼の主人は、今や吾々を切に要求して居るからである。

## 第四十六章　戀せるアルティシドラの戀の求めの間にドン・キホーテが出あひ恐ろしき鐘の音と恐ろしき猫のこと。



吾々は戀せる少女アルティシドラの音樂によつて引き起されたいろ〳〵な物思ひに取り纏はれて居るドン・キホーテを其のまゝ殘しておいた。彼は心の中にいろ〳〵な物思ひを抱いて寢臺へ行つた。そしてその物思ひは丁度蚤かなんぞのやうに彼を眠らせず、一瞬間も落ち着かせて置かなかつた。それにあの靴下の破れ穴までが彼の眠りの邪魔をしたのであつた。けれども「時」は飛び行くこと早く、如何な障害物もその進みを止めることが出來ないので、「時」は刻々と進みつゝ、朝は早くも到着したのである。それを見るとドン・キホーテは柔かな床を離れ、すこしも愚圖々々せずに、彼の羚羊の衣服をまとひ、彼の靴下の災難を隱す爲めに旅行用の長靴を穿いた。彼はその上に眞紅のマントを投げかけ、銀のさゝ緣で飾られた綠の天鵞絨の狩獵用の帽子をかぶり、銳利な劍のついて居る飾帶を肩から斜に投げ、いつも手ばなしたことのない大きな珠數を取り上げ、

非常に勿體ぶつて、歩きぶりもの〳〵しく控の間へと進んで行つた。そこには公爵と公爵夫人とが既に衣裝を着けて彼を待ち構へて居た。然るに彼が廊下を通つて行くと、アルティシドラと其の友達の今一人の少女とが、彼を待ち受けて居た。そしてアルティシドラはドン・キホーテを見た途端に氣絶したやうなふりをした。彼女の友達は自分の前垂へ彼女を抱き上げて、急いで彼女の着物の胸をくつろげた。

ドン・キホーテはそれを見て、二人に近寄つて言つた、『拙者は此の發作が何うして起つたかよう知つて居ります。』

『私は何うして起りましたのか分りません、』とその友達は答へた、『アルティシドラさんは此のお邸ぢゆうで一番お丈夫でしたから、こんな事は起らない筈なのでございます。私はかうして長年一緒に居りますが、ついぞ溜息一つ洩らしたのを聞いたこともありません。若し世の中の武者修業さまがみんな恩知らずでございますなら、その人たちに災禍がふりかゝりますやうに！ドン・キホーテさま、あちらへ行らつしやいませ、此の可哀相な子は貴方が此處にゐらつしやる間は正氣に返りますまいから。』

それに對してドン・キホーテは答へた、『お前さん、お願ひですから、今夜私の部屋へ琵琶を置いて下さい。それで私は私の力の限りを盡して此の哀れな少女を慰めようと思ふのです。總じて戀の初めのうちは何でも早く夢をさましてしまうのが最も安全な藥です。』かう言つて彼は退いた。自分が此處に居ることを人に見付けられないやうに。

彼が退くや否やアルティシドラは息を吹き返して、自分の友達に言つた、『琵琶をあの方のお部屋へ置かなければなりません、きつとあの方は私たちに琵琶を聞かせようと思うておいでなのです。あの方のことですからお下手ではないでせう。』

二人は直ちに公爵夫人のもとへ駈けつけて、これ〳〵でございますとありし次第を報告し、又ドン・キホーテが琵琶を要求したといふことを話した。すると公爵夫人は非常に喜ばれて、公爵と二人の小間づかひとで、面白くて罪のない冗戯をドン・キホーテに演じてやらう、といろ〳〵とその仕組みをもくろんだ。そして彼等は大陽氣で夜になるのを待ち兼ねた。晝が速に來たやうに夜も速に來た。晝間のうちは公爵と公爵夫人とはドン・キホーテと愉快な會話をして過したのであつた。

十一時が鳴ると、ドン・キホーテは彼の部屋に一個の六絃琴を見出した。彼は窓を開いて、庭に二三人の人が歩いて居るのを認めて、その六絃琴を試みた。そしてその六絃琴の假柱の上にわが

指を走らせ出來るだけよくそれを掻き鳴らした。彼は唾を吐いて咳拂ひをし、それから少し喉れては居るが充分調子のある聲で次のやうな唄を歌つた。それは彼が自分で其の日作つたものであつた——

力強き戀は少女の心を
ゆり動かし掻き亂す、
その用ふる道具は、
最も多くは怠惰なり。

裁縫、刺繍、その他何にてもあれ、
つねに爲すべき仕事を持つは、
戀が注ぎ込む毒にまで、
最もたしかなる解毒劑なり。

母てふ名を望む、



心正しき少女には、
しとやかさこそ持參金なれ、
しとやかさこそこよなき譽なれ。

思慮ある分別ある人々、
きらびやかなる廷臣や華美なる騎士は、
肆いまゝなる少女等と戲るれども、
しとやかなるをこそ妻には選べ。

世には束の間にして、疾く過ぎ行く熱情あり、
旅の宿りにて言ひかはす戀はこれ、
朝に戀して夕に終る、
旅人立ち去れば跡かたもなし。

速く急かに起る戀は、
今日こゝにありて、明日は飛び去る、
過ぎ去りて、何のあとも殘さず、
心に何の姿像をも留めず。

繪の上に描かれたる繪は、
何物をも現はさず何物をも示さず、
一人の麗人のあるところは、
他し人は占むること能はず。

ドゥルシネア・デル・トボソ、
わが心に描かれたる姿をわれは持つ、
その畫板より、いかにしても、
その姿を拭ひ消しがたし。



戀人のあらゆる性質のうちにて、
いとも貴ばるゝは貞節なり、
戀の不思議をなすはその力による、
これぞ彼等をば大空高く揚ぐるなる。

ドン・キホーテはそこまで歌を歌つた。それを公爵、公爵夫人、アルティシドラ、それから城内の者ども殆んど皆聞いて居た、その時突然丁度彼の窓の眞上に當る廊下から、鈴を百以上も結びつけた一本の索が釣り下がつて來た。そのすぐ後から猫を一杯つめ込んだ大きな袋を下ろしてよこした。その猫の尻尾にもまた小さい鈴が結びつけられてあつた。この鈴の鳴り響く音と猫の鳴き聲とは、此の惡戲の案出者たる公爵と公爵夫人さへも驚いた程であつた。こちらではドン・キホーテが怖ろしさに立ちすくんで居た。そして不仕合せなことには、二三匹の猫が彼の部屋の格子窓から入つて來て、あつちの隅からこつちの隅へと飛び廻つて、まるでそこには夥しい惡魔の軍勢が居るのかと思はしめる程であつた。これらの猫は室内にとぼつて居る蠟燭を消してしまつ

た。そして逃げ道はないかと探しながら、そこらぢう駈けづり廻つた。大きな鈴を結びつけた索はまだ鳴りやまずに段々と下がつて來た。そして實際に何事が起つたのか知らない城内の多くの人々は、驚きの爲めに氣が轉倒して爲すところを知らなかつた。ドン・キホーテは飛び上つて、彼の劍を拔き、格子窓の方へと突き進んだ、『去れ、惡意ある魔法使ひよ！去れ、汝、妖術をはたらく暴徒等！拙者はラマンチヤのドン・キホーテぢや、拙者に向つてはお前等の邪惡な隱謀も役には立たず何の力もないのぢや。』と叫びながら。そして室内を走り廻つて居る猫の方に向つて、彼等に五六刀切り込んだ。猫どもは格子窓につき進んでそこから逃げて行つた。唯一匹あとに殘つたが、これはドン・キホーテが劍を揮つて無茶斬りをやるので進退谷まつて、ドン・キホーテの顏に飛びついて彼の鼻にすがりつき、齒と爪を深くつぎ込んだ。その痛さに堪へかねてドン・キホーテはあらん限の大聲を出して叫んだ。公爵と公爵夫人はこれを聞いて、何事が起つたのかを察し、大急ぎで彼の部屋へ走つて行つた。すると哀れな紳士が自分の顏から猫を引き離さうとして全力を盡してもがいて居るので、彼等は合ひ鍵で戸を開け、燈火を持つて中へ入り、この不釣合な戰ひを見た。公爵は戰士どもを分けようとて進み寄つた。ところがドン・キホーテは聲高に叫び出した、『何人も彼を拙者から取り除けて下さるな。どうかそのまゝに置いて、拙者にこの惡魔、この魔法使ひ、この妖術者と一騎打をさせて下されい。拙者は彼に敎へませう、拙者こそラ・マンチヤのドン・キホーテであることを。』けれども此の猫はこんな威嚇には一向頓着なく唸りいがんで喰ひついて居た。けれども遂に公爵がそれを引き離して窓から拋り出した。ドン・キホーテは篩のやうに穴だらけの顏をして、あまり結構な狀態でない鼻つきをしてそこに殘された。そして自分が此の魔法使ひの惡者と强硬に戰ひつゝあつたその戰ひを、皆が自分に完成せしめなかつたことを非常に憤慨した。彼等はセント・ジョン藥草の油を少し持つて來させた。そしてアルティシドラ自らが彼女の美しい手で以てその怪我した部分殘らずに繃帶を卷いた。そして彼がそれをしてしまつてから低い聲でドン・キホーテに言つた、『貴方の身にふりかゝりましたかやうな御災難はみんな貴方樣の無情や强情の罪の爲めでございます。情知らずの騎士さま。貴方樣の御家來のサンチョーどのが自分を鞭打つことを忘れるやうに、神さまのお許しなさいますやうに。さうすれば貴方樣のあの深く愛してござるドゥルシネア姫さまは決してあの魔法を釋されることはありますまい。又貴方樣があの御婦人と樂しくなさることも、あの御婦人の床へ參られますことも叶ひませんでせう。少くとも貴方樣を崇める私の生きて居ります間は。』



すべて此の言葉に對してドン・キホーテは深い溜息を洩らすことの外何の返事もしなかつた。そ

れから彼は寝臺の上に長々と横になつて、公爵と公爵夫人の親切に對して感謝した。それは猫の形をした魔法使ひの鈴のやうに鳴る暴徒を恐れて居つたからではなうて、彼等が自分を助ける爲めに入つて來たその親切な心を彼が認めたからであつた。公爵と公爵夫人とは休むやうに彼を殘して、冗談の不幸な結果を大いに悲しんで引き退いた。彼等は此の冒險はドン・キホーテには大層重大なものであつたといふこと、又は彼に取つては非常に高價なものであつたといふことを考へなかつたのだ。これは彼をして五日間彼の部屋へ閉ぢ籠もらしめたからである。その間彼は他の冒險をやつた、それは先のやつよりも餘つぽど興味あるものである。その話は彼の記錄係がサンチョー・パンザの方へ注意を向けようとしてゐるので、丁度今はそれの方は話さぬであらう。サンチョー・パンサは彼の政治において非常な勤勉と滑稽とを以て進んで行きつゝあるのであつた。

## 第四十七章　にはサンチョー・パンザが如何に政治を處したかについての物語が續けられてある。

この物語にはかう記されてある、サンチョーは裁判所から壯麗な宮殿へと案内された。その廣々とした部屋には王家らしい莊嚴を以て飾られた一脚のテーブルが据ゑられてあつた。サンチョーがその部屋へ入つて行くと小喇叭の音が鳴り響いた。そして四人の小姓が進んで來て、手洗ひの水を捧げた。それをサンチョーは非常に勿體ぶつて受取つた。音樂は歌んだ。そしてサンチョーは食卓の上席に坐つた。尤もその席より外には席がなく食事の用意もそこだけにしかしてなかつたのではあつた。一人の人物が、それは後で醫者であることが分つたが、手に鯨骨の棒を持つて彼の側に立つて控へて居た。その時小姓等が、果物やいろ〳〵な種類の皿の樣々な食物を覆て居た綺麗な白い布を取り上げた。學者のやうな樣子をした一人の人が食前の祈禱を捧げた。そして一人の小姓がサンチョーにレースの緣のついた前掛をかけた。又賄頭の役を務めた

他の小姓がサンチョーの前に一皿の果物を置いた。しかるにサンチョーが一口もそれを味ふか味はないに、鯨骨の棒を持つた人がその皿に觸れると、小姓どもは出來得る限り迅速に彼の前からその皿を運び去つた。ところが今度は、あの貯頭が彼の前に他の皿を持つて來た。でサンチョーはそれを食はうと手を出した。しかし彼がそれに手をつけぬうちに、それを食うてはいけませんと言ふやうに、件の棒がそれに觸れた。それで一人の小姓が果物の時と同じやうな迅さでそれを運び去つた。サンチョーはこれを見て呆れてしまつた。そして一人の顏から一人の顏へと順繰に眺めて、この食事は手品のやうな仕方によつて食はねばならぬのかと尋ねた。

この問ひに對して件の棒を持つた人が答へた、『總督さま、總督の居られます他の島の仕來りや習慣であるもの〻外は、召しあがつてはならないのでございます。閣下、私は醫者でございます。それで私は、もしも閣下が御不快の折などにはそれを療治できますやうに、閣下の御體質を夜晝研究いたしよく覺え置きまして、自分の身體よりも閣下の御健康に綿密な注意をいたして居るのでございます。私がせねばなりませぬ重なる仕事は、閣下の御中食なり御夕飯なりの時に側に御つき添ひ申して閣下の胃を害しそこなふやうに思はれまするものは差上げぬやうにいたすことでござ



ります。それ故私は其の果物の皿は餘り濕つて居りまするから取り去るやうに命じました。又次の皿は餘り熱くて渴きを刺戟する藥味が多分に含まれて居りますので取り除けるやうに命じました。どうしても澤山飮む人は、生命の成り立ちまする根本の水氣を殺し絶やしまする。』

『よしそれでは、』とサンチョーは言つた、『その燒いた鷗鵠はこの身に何の害もなさゝうな香味を持つて居るやうに思はれるがな。』

醫師はこれに答へた、『閣下、貴方樣はこれらのものを私が生きて居りまする間は召しあがつてはなりませぬ。』

『そりや、何うしてぢや?』とサンチョーは言つた。

『何故と申しますれば、』と醫者は答へた『私どもの先哲、醫界の北極星又は水路標といはれて居りまするヒッポクラテースは、その警句の一つにかう申して居りまする、オムニス・サテュラティオ、マラ、ペルディシス、アウテム、ペシマ、卽ちその意味は「すべて滿腹するまで食ふはわるし、殊に鷗鵠の如きはその中の最もあしきものなり。」とござりまする。』

『そんれならば、』とサンチョーは言つた、『このテーブルの上に乘つて居る皿のうちで一番良いもので一番害にならぬものをお前が見て、そしてその棒で叩かずに私に食はしてくれい。何故

というて總督の命にかけて、又神樣が私にその生命を許して下さるやうに願ふのぢやが、とにかく私は腹がへつて死にさうぢや。お前がお醫者にしろ又お前が何と言うたにしろ、私に食物を拒むのは私を長命させるよりも私の命を取るといふものぢや。』

『閣下のおつしやることは御尤もでございます、總督さま、』と醫者は言つた、『それでございますから、私が考へまするに、貴方樣はそこにありますシチウに料理いたしました南京兎をお召しになつてはいけませぬ。それは食物の中でも危險な種類のものでございますから。もしその小牛の肉が、燒かれてなく又鹽水で漬けてありませなんだら、それを御試みなされてもよろしうございましたらうに。あれでは到底差し上げられません。』

『向ふに湯氣の立つて居るあの大きな皿は、』とサンチョーは言つた、『私にはオーラ、ポドリダ（香腸の他いろ〳〵なものが含まれてゐるゴッタ煮料理で、豚の足や、臓詰や其）のやうな土鍋にあるいろ〳〵なもの、中から、私の口に合ふ旨い物を探し出すことは間違ひないのぢや。』

『飛んでもないことを言はれます、』と醫者は言つた。『そんな悪いお考へは以ての外でございます！　世の中にはオーラ、ポドリダより滋養分の少いものはございません。僧職や、大學の先生がたや、百姓どもの結婚などには此のオーラ、ポドリダも適しませうが、總督の食卓にはふさはしうございません。その食卓に出されますものは、もつと輕く美味な上品なものでなければなりません。その理由は、あらゆる場所、あらゆる人に取りまして常に、簡單な藥は複雜な藥よりも尊ぶべきものでございます。私たちは簡單なものでは間違ひがありませんが、複雜なものになりますると、得て間違ひが起りやすうございますから、私の愚見を申し上げますれば、閣下には御健康を保たれたいけでもさやうでございまするから、百個ばかりのウェーファと橙檸の實の薄片を少し召し上がると宜しうございませう。それらのものは胃の腑をおちつけ消化を助けるものでございます。』



サンチョーはこれを聞いて背を椅子に投げ寄せ、醫者をぢろ〳〵と檢分し、そして嚴格な調子で彼にその名は何といひ何處で勉強したのかと尋ねた。

彼は答へた、『總督閣下、私の名はドクトル、ペドロ・レシオ・デ・アグェロと申します。私はティルテアフェラと申すところの產でございます。そこはカラキュエルとアルモドヴァル・デル・カンポとの間の右手にございます。そして私はオスーナ大學から博士の學位を授けられて居りまする。』

サンチョーは眞赤に怒つて答へた、『しからば、吾々がカラキュエルからアルモドヴァル・デル・

カンポへ行く際に右手に當る場所、ティルテアフェエラの生れ、オスーナ大學を卒業したドクトル。ペドロ・レシオ・デ・マル・アグェロ（マル・アグェロはわるい、間落の意味、ティルテアフェエラ（文字通りに「次百姓を取り出れ」と言ふやうな一村である。）卽刻目通りから立ち去れい。でなければ私は太陽にかけて誓ふが、私はその棒を取り上げ、打ちのめして、お前を初め、島全體に一人の醫者をも留めて置かぬであらうぞ。少くとも懶惰者ぢやと私の知ッとる奴等をば。學問があり、賢くて、分別のある醫者に就いては、私は僧侶と同じやうに彼等を尊び敬ふであらう。もう一度私は言ふ、ペドロ・レシオ此處から出て失せい、でなければ私は私が坐つとる此の椅子を取り上げてお前の頭の上でそれを壞すであらうぞ。もし人々がそれを說明してくれと求めるならば、私はきツぱりと言うてのける、わるい醫者―一般公衆の死刑執行者―を殺して神に事へたのぢやと。さア何か食べるものをくれい、さうでなければ此の總督職を取つてしまへ。その主人を養はぬやうな商賣は二粒の豆ほどの値打もないのぢや。』

醫者は總督がこれほどまでに立腹したのを見て魂消てしまつた。そしてサンチョーはこのティルテアフェエラ生れの男を此の部屋から逐ひ出さうとしたその刹那に、早打ちの角笛が町の方から聞えて來た。

賄ひ頭は窓から頭をつき出して見て、ふり向いて言つた、『公爵閣下からの御使者でございます。きつと大切な御用で參つたのでございませう。』



使者は全身に汗をかいて慌しく入つて來た。そして胸から一枚の紙を取り出して、それを總督の手に渡した。サンチョーはそれを家令に渡しその表書を讀むやうに命じた。それはかやうに書かれてあつた。『バラタリア島の總督ドン・サンチョー・パンザ閣下。直披もしくは祕書官親展。』サンチョーはこれを聞いて言つた、『誰が祕書官なのぢや？』『閣下、私でございます、』とそこに控へて居た一人の者が言つた、『私は讀み書きが出來まして、ピスケイの出身でございます。』『さういふことなら、』とサンチョーは言つた、『お前は皇帝陛下の祕書官も勤まるであらう（ピスケイ人はチャールス五世とフイリップ二世の御世に多く宮中に勤めてゐた）この手紙を開いて何が書いてあるか讀んで見い。』出來立ての祕書官はその命に從つた。そしてその內容を讀んで、これは內證に申しあげねばならん事件でございますと言つた。サンチョーは人拂を命じたので、家令と賄頭とだけが殘つて、醫師とその他の者は退いた。それから祕書官はその手紙を讀んだ。それは次の如くである――

ドン・サンチョー・パンザ殿、近頃拙者奇怪なる事を傳聞いたし候。そは拙者及び島の敵どもが夜陰に乘じて猛烈なる攻撃をなさんとする由の風聞に御座候。拙者不幸にしてその時を聞きもらし候。何はともあれ彼等が貴殿を驚かすことなからんやう、豫めよく注意して警戒を怠

られざること肝要と存じ候。拙者は又信頼すべき密偵の報告によりて、貴殿の生命を失はん爲め變裝して島へ乘り込める四人の兇漢あることを探知いたし候。彼等は貴殿の大なる才能に恐怖を抱ける者に候、油斷なく見張り注意して貴殿に面會を求むる者を近付けず、尙贈られたるものは何に限らず口に入れぬがよろしかるべく候。拙者は若し貴殿が危地に陷り候やうの場合には早速助勢いたすべき心構へに御座候。頓首。

八月十六日朝四時

此城より

貴殿の親友たる

公爵

サンチョーは驚いてしまつた。そして側に立つて居た者どもゝ亦た驚いたやうな風をした。そこでサンチョーは家令の方へ振り向いて言つた。『吾々が第一にせねばならぬ事は、また今すぐにせねばならぬ事は、ドクトル・レシオを拘留所へ閉ち籠めることぢや。何故といふに若し誰か私を殺さうとする者があるとすれば、それは彼奴に違ひないからぢや。緩漫な方法で殺すので、これが一番たちのわるいやり方ぢや、卽ち餓ゑぢや。』

『同じやうに』と賄ひ頭は言つた、『貴方樣は此の食卓の上にございますいろ〳〵なものを召し上



がらぬ方が宜しうございませうと私は考へまする。これは全體ある尼さんたちから贈られましたものでございますから。「十字架の後には惡魔が居る」と世間では申しまする。』

『私はそれを打ち消しはせぬ、』とサンチョーは言つた、『そこぢや、差し當つて一片の麵麭と四ポンドばかりの葡萄の實とを持つて來て貰ひたい。かういふものには毒のはいりやうがないからの。食はずには生きて行かれぬのは事實ぢや。又若しも吾々を脅かして居る戰爭に對して準備せねばならぬなら、吾々は充分に糧食の用意をして置かねばならぬ。「胃の腑は心を支へるが、心は胃の腐を支へぬ」といふからの。して祕書官、お前は公爵閣下に御返事を認め、逐一御命令に從ひます、お指圖通りにいたしますると書くがよい。それから公爵の御夫人の御手に私が接吻しまする、と申し上げてくれい。そして私がお賴み申した手紙と小包は、使ひの者を遣はして私の家內テレサ・パンザの許へお屆け下さることをお忘れなきやうにとお願ひ申せ。すれば私はそれを大恩惠と心に銘じて、わが力で叶ふことは何でも夫人の爲めに盡すであらう。尙序でに私の御主人ドン・キホーテへ私が御主人の恩を感謝して居ることが分るやうに宜しうお禮を述べて呉れい。お前は善良な祕書官で善良なビスケイ人ぢやから、お前が好きなこと又は頭に浮んでくる一番よいことを附け加へてもよろしい。そしてもう此の卓布を取り去つて、何か食ふものを持つて來て呉れい。

かうして私は私や島に對して敵意を以て來る密偵や刺客や魔法使ひに出逢ふ用意をしておかう。』

この瞬間に一人の小姓が入つて來て、『只今一人の百姓が參りまして、ある重大な事件について閣下にお話し申し上げたいと申します。』

サンチョーは言つた、『さういふ人たちが用事があるとは奇妙ぢやのう。彼れ等は、今時分は用向きの爲めに來る時刻ではないちうことを知らんやうな馬鹿なのか？總督であり裁判官である私たちは——肉や血の人ではないか、大理石で拵らへた人ぢやあるまいし、休むに入り用な時間が與へられないでは堪つたものぢやない、それを奴等は許さぬといふのか？神にかけ我が良心に誓うて、もし此の政府がまだ私の手の中のものならば（私はそれは續かぬであらうといふ考へを持つて居るのぢやが、）私は用事の人間は何人でも責めつけてやるつもりぢや。しかしその人には來いと言へ。ぢやが先づ第一にそやつが密偵か暗殺者ではないか氣をつけい。』

『いゝえ、閣下、』と小姓が言つた、『その男は正直さうに見えまする。ではございますが私はその男が麵麭のやうによいかどうかは存じません。』

『何にも恐れることはない、』と家令は言つた、『私等がみんな此處に居るから。』

『賄頭よ、ドクトル・ペドロ・レシオが此處に居らぬから、』とサンチョーは言つた、『何かがツしりした身になるやうなものを食はしてくれることは出來ぬぢやろか。麵麭の切れや惣菜などでも構はぬが？』



『今晩の夕食の時に、晝食の不行屆きは償ひまするで、閣下におかせられても十分に御滿足をなさることゝ存じます。』と賄頭が言つた。

『どうかさうしたいものぢや。』

その時その百姓が入つて來た。一千リーグ離れて居ても正直な善良な心の男であると解るやうな、人品のよい男であつた。彼が言つた最初の事は、『こゝにござる何方が總督さまでござえますかな？』といふ言葉であつた。

『椅子の上に坐つておいでなさる御仁を措いて誰が總督さまであらうぞ？』と秘書官が言つた。

『それぢや私アあの人の前にお辭儀しましよかい。』とその百姓は言つた。そして跪づいたまゝ進んで行つて、接吻する爲めに彼の手を要求した。サンチョーはそれを拒んだ。そして彼に立ち上つて用事を言へと命じた。百姓はそれに從つて、それから言つた、『私は百姓でござえまして、總督樣、シウダッド・リールから二里ばかり離れた村の、ミグェルチウラの生れでござえます。』

『第二のティルテアフュエラぢや！』とサンチョーは言つた。『お前、その先をお話し。ミグエルチウラは私の町から大して遠いこともないのぢやから、私はよう知つとるぞよ。』

『總督樣、事件ちうのはかうでござえます。』と百姓は續けた、『神樣のお恵みによりまして、私アとも學者で、次男は學士になる爲めに勉强して居りまする。私は寡夫でござえます。私の家内が死うなをる牧師さまにならうとして勉强して居りまする。私は寡夫でござえます。私の家内が死うなりましたので、いや、もツとよい言葉で申しますれば、わるいお醫者が家内を殺しましたので、家内が孕んで居ります時に下劑を飲ませましたのぢや。若しその子が神樣のお許しを受けて生れまして、そしてそれが男の子でござえましたら、私はその子を醫者になるやうに勉强させたでござえませう。學士ぢやの免許狀のある牧師ぢやのをしてをるその兄どもを羨みませんやうな。』

『それぢやから若しお前の家内が死うならなんだとすれば、又は殺されなんだとすれば、お前は今寡夫になつては居らなんだらう。』とサンチョーは言つた。

『全くその通りでござえます。』と百姓は言つた。



『それはそれでもうよい。』とサンチョーは言つた、『先をお話し、用事の時間は過ぎてもう寢る時間になつた。』

『よろしうござえます、』と百姓は言つた、『學士にならうとして居る私の倅が、今申した町のクラウディオ・ペルレリナといふ娘と戀中になりました。その娘はアンドレス・ペルレリノーといふ有福な農家の娘でござえます。さうしてこのペルレリノーといふ名は先祖や他の血統から來たものではありません。一家族がみな中風やみ（ペルレシア中風の意）でござえますから、それで人々は好い名ぢやと言うてペルレリネスと呼んで居ります。實を申しますればその娘は、右の側を見ますと東洋の眞珠のやうに野の花のやうに綺麗でござえますが、左の方を見ますとさう綺麗ではござえません。その双眼は疱瘡で失くなつたので眼がござえません。その娘の顔は一杯に深く穴があいて居るのでござえますが、あの娘ッ子を可愛がる者は皆かう申します、そこにあるのは穴ではない、戀人の心が埋められてある墓場だつて。あの娘ッ子は顔を汚くせぬやうにとて、鼻を上向けて持ち運んで居りまして居ると思ふ人もあるだらうと皆の者が申します。それでその鼻が口から遁げ出さうとしす。それでそのにあの娘つ子はえらい好う見えます、それは大きな口を持つて居るからで。歯が十一二本もなく臼歯もないといふことさへないなら、一番綺麗な人とも比べることも競ふこともできるの

でございます。唇のことは私ア何にも申し上げません。その唇といふなア、もしそれが紡ぐことができますなら、それから一疋の絲を造り出せさうな綺麗な薄い唇なのでございます。だがありふれた唇とは違うた色なので、不思議なことに青だの絲だの紫だのいろ〳〵な色になつて居るのでございます。――やれまあ總督さま、私がいつかは家の妻になります此の娘ッ子の美しいことをかう細々と述べたてるのをどうかお許し下されませ。私はあの娘ッ子を可愛がつて居りますので、何にもあの娘ッ子の不都合な點を知りません。』

『お前が思ふ通りに並べたてるがよい、』とサンチョーは言つた、『私はお前が並べたてるのが面白い。もし食事が濟んでをつたなら、お前が並べ立てる御馳走よりか私の氣に合うた食後の菓子はないぢやらう。』

『もつとお話しがございますので、』と百姓は言つた、『けれども今話さなくても今度またお話し申す時が參りませう。總督樣、若し私があの娘ッ子のしとやかなこと、それから背のすらりとしたことなどを見えるやうに話せたら、まツと貴方樣もびつくりなされませう。けれどもあの娘つ子の膝が口まで曲つて、身が二重になつて居りますので、それは出來ません。それでも、もしあの娘ッ子が立ち上ることが出來ましたら、娘ッ子の頭は天井にぶつかるのは造作ないこツてございましよ。あの娘ッ子が私の息子の學士の女房になりますやうに、以前に手を出して握手をすればよかつたのでございますが、あの娘ッ子の手は縮かまつてをつて、それを伸ばすことが叶はんのでございます。けれどそれでもまだ、長い溝のある爪を見りや上品で美しいのが分ります。』

『もうよろしい、お前はその娘の頭から足まで並べ立てたといふことにして、それでお前が今要求することは何なのぢや？脇路へそれたり端片やおまけは抜きにして、要點を述べるがよい。』

とサンチョーは言つた

『總督さま、私は貴方樣が、』と百姓は言つた、『あの娘ッ子の親父へ宛てた推薦狀を私にお認め下さるやうにお願ひ申したいのでございます。その推薦狀と申しますのは、私どもは財産でも性質でも釣り合ひがわるうないから、此の結婚を取り行ふがよいであらうと、あの親父どんに賴むのでございます。總督樣、實のところを申し上げますと、私の倅は惡魔にとり憑かれたのでございます。そしてその惡魔が倅を三四度苦しめぬ日とてはございません。そして或る時火の中に落ちましてから、倅の顏は羊皮紙の切れのやうに皺よりました。そしてその眼は涙が一杯になつて居りまして何時も流れて居ります。けれども彼は天の使のやうな性分を持つて居ります。それで若し自分で自分を打ち打擲しませなんだら、彼は聖者でございましよ。』

『その外に何かお前の願ふことがあるかの？』とサンチョーは言つた。

『も一つお願ひ申したいことがござりますが。』と百姓は言つた、『けれども私はそれを申すのを憚つて居りますので。しかし申さにやなりません。つまるところその私の腹の中でそれを腐らしてしまふことはできませんからの。總督樣、私はその貴方樣が私の倅の婚禮の金に助力をして下されまして、三百兩か六百兩私にお惠み下さるやうにお願ひ申し上げたいのでござります。彼に家をあてがはうと思ふのでございますで、何故と言うてつまり彼等二人の者は舅の口出しを受けずに、彼等の力で暮して行かねばならんからでござります。』

『まだ他にお前の願ふことがあるか考へて見い。』とサンチョーは言つた、『內氣や遠慮からして申し述べることを控へてはいかん。』『いゝえ、全くもうござりません。』と百姓は言つた。

彼がかう言つたその時に總督は急に立ち上つて、彼が坐つて居つた椅子を摑んで叫んだ、『やい〳〵〳〵、この無作法なづう〳〵しい田舍者め、直ぐ此處から立ち退いて、私の眼から姿を隱さぬなら、私は此の椅子でお前の頭を叩きつぶしてしまふぞ。邪神の子の惡漢め、この惡魔の畫工め、今時分六百兩强請らうとて此處へ押しかけるとは何たる奴ぢや、私が何處にそんな金を持つとるか、惡臭い四足獸め？　又私が金を持つて居つたにしてからが、お前に與る理由がどこにあるのぢや？　出て失せい、でなきや私の主人の公爵の命にかけても私は私の言うた通りにするぞよ。お前はミグエルテュラから來たのぢやない、私を試める爲めに地獄から此處へ送られた惡黨ぢや。畜生、私はまだ半日と政治を行はなんだのぢやないか、それにお前はもう六百兩を私から請求するとは何事ぢや！』



賄頭は百姓に此の部屋を立ち去るやうに合圖をした。彼は頭を下げてさうした。そして外見上は總督がその威嚇を實行しはせぬかと恐れて居るやうに見せた、この惡漢は如何に彼の役目を演ずべきかを十分によく知つて居たからである。しかし吾々はサンチョーを怒つたまゝに殘して置がう。皆々お變りもないやうに。そして吾々はドン・キホーテの方へ歸らう。吾々は彼を顏に繃帶をしたまゝで殘して置いた。彼は猫から受けた傷を治療して、それが全治する迄には八日間を要した。そしてその中の或る日のこと、シード・ハメットが精確と眞實とを以て話すことを約束した事がドン・キホーテの身の上に起つた。シード・ハメットは此の大いなる物語に關することは何事でも、それがどんなに小さいことであらうとも、精確に眞實に述べるのを慣らひとして居るのである。

## 第四十八章　ドン・キホーテと公爵夫人の侍女ドーニヤ・ロドリグェズとに起つた事に就いて、並びに記錄と永久の記憶に價ひするその他の出來事ども。

痛ましく傷ついたドン・キホーテは非常に機嫌惡く氣落ちして居た、顏には繃帶をして、神の手に依つてゞはなく猫の爪によつて標しをつけられて。蓋し武者修業には偶然の災難である。六日の間彼は人々の中へ顏を出さずに居た。ところが或る晩彼が橫になつてまだ眠らずに自分の仕合せな事やアルティシドラが自分を追ひ求めることなどを考へて居ると、誰かゞ鍵で以て彼の部屋の戸を開けようとして居るのに氣がついた。で彼はすぐさま戀に惱めるあの少女が自分の品行方正を攻擊し、又わがドゥルシネア・デル・トボソに捧げて居る誠忠の心を無くしてしまふやうな危險に自分を沼れようとして來たのである、と自分で定めてしまつた。『決して、』と彼は彼の思つた事が本當であると堅く思ひ込んで言つた（そして彼はそれを人の耳にはいる程に高く言つ



た）、『此の世の第一の美人でも、拙者の心の奥に又拙者の心腸の人知れぬ底深く印しつけ彫りつけてあるあの君に對する拙者の崇拜歸依の心を棄てさせようとするには、何の役にも立たぬであらう。わが歸依する婦人よ。御身は不恰好な田舍の婢と變相しておいでなされ。或ひは絹や金の網を編みつゝある黃金のテーガスの女神に身をかへておいでなされ。マアリンやモンテシノスをして彼等の欲する場所に御身を幽囚しめよ。御身は何處に居られようと、拙者のもの、拙者は何處に居らうとも御身のものでなければなりませぬ。』彼がこれらの言葉を發したその刹那に戸が開いた。ドン・キホーテは頭から足まで一枚の黃色い繻子の上被を卷きつけて床の上に立ち上つた、頭には帽子をかぶり、顏と髭とは包み、（卽ち顏は掻き傷の爲めに、髭は垂れ下がるのを止める爲めに）、その外貌において彼は想像せられる限りの最も非凡な案山子のやうに見えた。彼は眼を戸の上に定めてちつと見つめた。そして彼は丁度戀になやんだ不仕合せなアルティシドラが現はれて來ることであらうと思つて居ると、一人のいとも床しげな侍女が、長い、白く緣どつたヴェールで頭から足まで總體につゝんで現はれて來るのを見たのである。彼女の左手の指には短く燈つて居る蠟燭を持ち、右手で光りを蔽うて自分の眼へ達かぬやうにして居た。その眼は大きな恰好の眼鏡でおほはれて居つた。そして彼女は足音を立てずに、非常に物しづかに步み寄

つて來た。

ドン・キホーテは自分の望樓から彼の女を注視して居た。そして彼女の着物を觀察し、彼女の沈默に注意して、彼はそれは自分に何か禍を働く爲めに斯やうな扮裝でやつて來たのだと思ひ定めた。そして彼はやたらに十字を切りはじめた。怪しの物は尙も進んで來た。そして部屋の眞中に達して、目を上げて、ドン・キホーテが根限り十字を切つて居るのを見た。そして若し彼が彼女のやうな姿を見て愕いたとすれば、彼女はまた彼の樣子を見て恐れをなした。上被を被り繃帶の爲めに顏が醜くなつた彼の丈高い黃いろい姿を見た途端に彼女はきやつと叫んで聲を立てた、『まア、これは何でせう?』彼女は驚いて蠟燭を落した。そして眞暗になつたので、出て行かうとして身を返した。が周章てたので自分の裾につまづき、どさりとばかりひどい勢ひで倒れた。

驚怖を感じて居たドン・キホーテは言ひ始めた、『幻影か又は何物か知らぬが、拙者はお前に祈り訴へる、お前は一體何ものぢや、又拙者に何の用があるのぢや。もしお前が苦しみ惱んで居る靈魂ならば、さう言へ、拙者は力の及ぶ限りお前の爲めに盡してやらう。拙者は天主敎徒で、全世界の爲めに善を爲すことを好むものぢや。それで此の目的を達せんが爲めに、拙者は武者修業の職



を選び、それに屬して居るものぢや。その範圍は淨罪界における靈魂にさへも善を施す程に廣いのぢや。』

不仕合せな侍女は斯やうに祈るのを聞いて、自分が恐れてゐたのでドン・キホーテの恐れて居ることも讀めた。そこで低い哀れツぽい聲で答へた、『ドン・キホーテさま——もし貴方さまが本當にドン・キホーテさまでございますならば——私は、貴方樣がお考へなさるやうに、幻影でもございませねば、變化の物でもございません、又淨罪界の靈魂でもございません。奧方公爵夫人の名譽ある侍女ドーニャ・ロドリグェズでございます。そして私は貴方樣がお救ひ下さるやうな憂患を持つて參つたのでございます。』

『お話しなさい、ドーニャ・ロドリグェズ、』とドン・キホーテは言つた、『もしや貴女は媒介役をする爲めに來られたのではないか? さうであるならば拙者は貴女に言うておかねばならぬ、拙者はわが歸依するドゥルシネア・デル・トボソの比ひなき美しさのお蔭で、其の他の如何な人の目的に對しても一向に役に立たぬものであるといふことを。ドーニャ・ロドリグェズさん、簡單に申せば、もし貴女がいろ〳〵の戀の使ひを捨てゝ置いておいでなさるなら、行つて蠟燭に火をつけて、歸つて來られてもよろしい。そして貴女が拙者に賴みたい事願ひたい事は何でも御相談いたしま

せう。但し拙者が申したやうに誘惑するやうな御たよりなら一切御免を蒙ります。』

『私は何方のお使ひにも參つたのではござりません、』と侍女は言つた。『貴方樣は私を少しも御存知ないのです。いゝえ、私はそのやうな子供らしい惡戯を面白がる程に年は取つて居りません。まことに有り難いことには私はまだ私の肉體の中に精神を持つて居ります。そして私の口の齒は奥齒とも滿足でございます。唯その中の一二本は此のアラゴン地方に普通る感冒にかかりました時に取られました。行つて蠟燭に火をつけて參りますから暫くお待ち下さいまし。私はぢき歸つて來まして、全世界の人々を救はれるお方の前に申しますらしく、貴方の前に私の悲しみを申述べませう。』彼女は一言の答へをも待たずに部屋を出て行つたので、ドン・キホーテは彼女を待つて居る間靜かな物思ひに取り殘された。直ちに此の新らしい冒險の問題に就いて澤山な暗示が起つて來た。そして彼が歸依する婦人へ誓つた信仰を破るやうな危險に身を曝すことはつまらぬ無分別であると彼は思つた。そして彼はひとりごちた、『あの狡猾で悧巧な惡魔が、皇后陛下や女王や公爵夫人や侯爵夫人や伯爵夫人を以ては失敗したので、侍女を以て拙者を係蹄にかけようと、試みてをるのかも知れたものではない。屢々拙者は多くの悧巧な人が言ふのを聞いたことがある、惡魔は人を試めすには鷲鼻の女よりも先きに平たい鼻を持つた女を見せるといふことを。そして



この秘密、この機會、この沈默が拙者の眠つて居る願ひを醒し、拙者が決して踏み外したことのないところへ拙者をこの晩年に及んで打ち落さうと導くのかも分りはせぬ。かうした場合には戰爭を待つて居るよりも逃げる方がよつぽど優しぢや。しかし拙者は斯やうな馬鹿らしいことを考へたり言うたりするのは少し氣が觸れたのに違ひない。何故と言うて長い、白い被ひをかぶり、眼鏡を掛けた侍女が世界の中で一番情の強いこの胸に、肆いまゝな考へを醸し出し掻き起すことが出來ようとは思へぬことであるからぢや。世の中には美しい肌の老女中があるか？この世の中には不機嫌で、皺寄つて、そして淑女ぶつて居ることを免れて居る老女中が一人でもあるか？然らば、あらゆる人類に不愉快な、汝侍女どもよ、去つてしまへ。あゝ、しかし人の話しにかういふことを聞いたが、あの婦人は宜うしたものぢや、その應接室の隅の方へ二つの人形の侍女を据ゑ、眼鏡をかけ、レースの蒲團を持つて丁度仕事をして居るやうにさせて置いた。そしてこれ等の人形はまるで本當の侍女であるかのやうに其の部屋に禮儀の風を與へるに十分役に立つたと申すことぢや。』

さう言ひながら彼は寢臺から飛び下りた。ロドリグエズさまがはいつて來ないやうに戸を閉めようと思つて。ところが彼が戸を締めに行つた時に、ロドリグエズさまは蠟燭を燈て歸つて來

た。そしてドン・キホーテが目の前に突ッ立つて、上被を身に纏ひ、繃帯をして夜帽をかぶつて居るのを見て、彼は更に驚いたのである。で一歩二歩退いて叫んだ、『大丈夫でございますか、騎士さま？私は貴方様が寝床からお起き上りなされたことを甚だ高いお徳の證據とは思ひませぬ。』

『拙者も同様にお尋ね申したいのぢや、貴女。』とドン・キホーテは言つた、『そして拙者は、攻撃せられたり暴力を加へられたりすることは大丈夫でありますまいか御尋ね申します。』

『誰から又誰に對して貴方様は大丈夫でありたいと仰有るのですか、騎士さま？』と侍女は言つた。

『貴女から、又貴女に對して拙者がそれを要求するのぢや、』とドン・キホーテは言つた。『拙者は大理石ではありませぬ、また貴女も眞鍮ではありませぬ。又今は午前の十時ではありません、眞夜中です。いや少し眞夜中過ぎかと思ひます。そして私たちは、あの二た心ある大膽なエーニアスが美しい心のやさしいディドーを享樂した洞穴よりももつと閑靜なひッそりした部屋に居るのですぞ。ぢやが貴女のお手を拙者に與へなさい。拙者は自分の自制と自分の禮儀の心より以上によい保護を求めません。その床しき頭被ひの尊さの外には。』かう言つて彼は彼女の右の手に接吻

して自分の手にその手を取つた。彼女も同樣な禮式に遵つてドン・キホーテに手を渡した。こゝでシード・ハメットは一つの挿句を挿入して居る、卽ち彼はかう言つて居るのである、このやうにして二人の者が手と手を繋ぎ合せて、戸口から寢臺まで進んで行くのを見たとすれば、自分は自分が持つて居る二つの下着の好い方を與へたであらうと。

ドン・キホーテは遂に寢床に行つた。そしてドーニヤ・ロドリグェズは彼の寢床から少し離れた椅子の上に坐を占めた。例の眼鏡をはづさず蠟燭も側へ置かずに手に持つたまゝで。ドン・キホーテは身の廻りに寢卷を纏ひ、全身をすつかり掩うてしまつた。見えるものとては彼の顏だけであつた。そして二人の心が再び落ち着くや否やドン・キホーテは沈默を破つた、『さて、ドーニヤ・ロドリグェズさまよ、貴女は貴女の悲しいお心や惱める腸のうちに持つて居られる總てのものを打明けてお話なさるがよい。さうすれば貴女は拙者の潔らかな耳に聽かれ、同情ある働きによつて助けられるでありませう。』

『私はそのお言葉を信じます、』と侍女は答へた。『貴方樣のおやさしい人の心を惹くお人柄からこそ、はじめて斯やうなお情け深い御返事を待ち受けることが出來るのでございます。それではドン・キホーテさま、事實を申し上げませう、貴方樣は、アラゴン王國の眞中の此處に、此の椅子の

上に坐つて居る私を御覽になり、又賤しい棄てられた侍女の服裝をして居るのを御覽になりますけれども、實は私はオヴイエドーのアステュリアスの產れでございます。そしてその州の多くの上流の家と血族の關係のあります家庭に生れたのでございます。けれども私の不運と兩親の浪費のせいで、私はマドリッドの宮廷へつれて來られたのでございます。私は兩親がどうして時ならぬに貧困に陷つたのか知りません。マドリッドで兩親は用意の爲めと又その上の不仕合せを避ける爲めに、私を高貴の御婦人にお針師として私を仕へさせました。私はお針仕事にかけましては生涯誰にも引けを取つたことのないといふことを御承知願ひたうございます。私の兩親は私を勤めさせまして故郷の方へ歸りました。そして數年經つて天國へ昇りました。兩親はすぐれて良い天主敎の信徒でございましたから天國に昇つたに違ひありません。私は此のお館で私のやうな奉公人たちに與へられますみじめな賃銀と些細な贈物との外には、何一つ持たぬ孤兒となつて殘されたのでございます。けれども此の時分、私の方には何にも氣を引きたてる張り合ひといふものがございませんので、この家の一人の家來とよい中になりました。その男は可成り年も行きまして、髯がたつぷりとあり、人品も好く、まあ王樣ほどに立派な紳士で、山國の產れでございました。

山國の產れの者は、ロデリゴ人に對してゐるのである。私たちのこの戀の秘密は洩れまして奧方がそれをお



さとりなさいました。けれども奧方はそれに就いては少しもお騷ぎなさらずに、私たちをローマの天主敎會の聖母の許可を得て結婚させて下さいました。その結婚の後一人の娘の子が產れました。若し私が幸運を持つて居りましたなら、それはこの出產でなくなりました。それは私が子を產んだ爲めに死んだからではございませう、私は安全に日立よく過ぎました。ですが其の後間もなく私の夫が或る打擊を受けまして死くなりましたからでございます、それを十分貴方樣にお話し申しましたならば、貴方はお驚きなさるでございませう。』かう言つて彼女はわつとばかりに泣き出して言つた、『ドン・キホーテさま、おゆるし下さいまし、こんなに取り亂しました樣子を御覽に入れまして。これといふのも私は不仕合せな夫のことを思ひますと、何時でも涙が目に一杯になるのでございます。本當に、黑玉のやうに黑い、丈夫な騾馬に跨りまして、そのうしろに奧方をお乘せ申して練り步く時の威嚴のある樣子のよさ！その頃は一體に四輪馬車や二輪馬車は用ひませんでした。今では皆乘りますけれども。それで御婦人方はその家來のうしろへお乘りになつたものでございます。私の夫がどんなにしつけがよく、どんなに規帳面でありましたか、貴方樣がようくお分りなさいますやうに、私は少くとも此の事だけは申し上げずには居られません。夫がある時マドリッドのカル・ド・サンチアゴの方へ曲らうとして居りますと、この町は狹い通りで

ございますが、裁判所の法官が、自分の前に二人の守衛を立てまして、向ふから參りました。夫はそれを見ますと直ぐ驟馬の向きをかへて曲つて法官の後から從いて行かうとでもするやうにしました。夫のうしろに乘つて居られました夫人は、低い聲で夫に申されました、『何うしたの、お前、お前は私が此處に居るのを知らぬのかい?』法官は禮儀正しい人のやうに自分の馬を止めて夫に言ひました、『お進みなさい、貴方、ドーニャ・カシルダ夫人のお伴をしなければならんのは寧ろ私ですから。』——カシルダと申すのがその夫人のお名前なのでございます。それでも私の夫は、帽子を手に取つて、その法官のあとにならうとして固く執つて動かないのでございます。これを見ますと夫人は、憤怒の念ひが胸一杯になりまして、大きなピン、と申しますよりも、私の考へでは寧ろ大針を針箱から引き出して力を籠めて私の夫の背中へそれを突き刺しました。夫は高い叫び聲をあげまして、身悶えしながら夫人と一緒に地上に落ちました。夫人の二人の從僕は走つて來て夫人を助け起し、又法官と守衛も同じやうにいたしました。グアダラジャラの門は全く大騷動となりました——私はなまけ者や彌次馬がそこへ集まつたといふことを申すのです。夫人は徒歩で歸つて來られました。私の夫は臟腑の上を貫されたと言ひまして、床屋の外科醫者の店へと急ぎました。私の夫の禮儀厚いことが廣く騷ぎ立てられまして、子供たちが夫を町中でち



つと捨て、置かぬ程になりました。この爲めと、又夫は少し近眼でもありましたので、夫人は夫を解雇してしまひました。夫が亡くなるやうになりましたのは確かにこれの煩悶からであつたと私は信じて居ります。私はよるべない寡婦となつてあとに取り殘されました。私の手で海の泡のやうに美しく育てあげました一人の娘と一緒に。けれども、到頭、私がすぐれた針師であるといふ評判がありましたので、私の奥方公爵夫人が、その時は旦那樣の公爵さまと御結婚遊ばされたばかりのところでしたが、此のアラゴンの王國へ私を伴れて行かうと言うて下さいました私の娘も一緒に。そして此處で月日が經ちまして、私の娘は生長しまして世にも美しい女となりました。娘は雲雀のやうに歌ひ、思ふやうに速く踊り、ジプシイ人のやうに躍り跳ね、學校の先生のやうに讀み書きが出來、富家のやうに計算をします。娘の小綺麗なことに就いては私は何にも申しません、流れる水もそれより清くはないからです。そして娘の年齡は今、もし私の記憶が確かでございますなら十六歲五ヶ月の三日そこ〳〵でございます。さて肝腎の話になりますが。こゝからさう遠くありませぬ私の主人公爵さまの村に住んで居ります大層幸福な農家の息子が私の娘に戀慕しましたのでございます。つまり私はどうしてそんな事が起つたか知りませんのですが、二人は一緒になりまして、そして結婚するといふ約束の下に、その息子は娘を弄び、今はもう

先の言葉を守らうとしませんのでございます。さうして主人の公爵さまは、其の事をよう〳〵御存じで居らつしやるのでございますけれども、（何故と申すに私は一度ならず何遍も〳〵も公爵様に訴へまして、あの百姓が私の娘と結婚いたしますやうに命じ下されませと嘆願いたしましたら）、公爵さまは空耳を走らして殆んど私の申し上げることをお聴きなさいません。その譯はあの嘘つきの父親は大層な金持ちなので、公爵さまにお金を貸し、そして公爵さまの御借財にいつも證人に立ちますので、公爵さまは何んなことがあらうともその百姓を怒つたり苦しめたりしようとはお思ひなさらぬのでございます。さて、貴方様、私は貴方様が嘆願によつて腕づくでなりと、此の不法を正して下さることを、御引き受け下さるやうに願ひたいのでございます。世間一般の噂によりますと貴方様は患ひあるものを救ひ、惡きものを正し、不幸な者をお助けなさる爲めに此の世へおいでなされたと申しますから。どうか私の娘のたよりない有樣や、娘の美しさや。若さや、それから私が娘が持つて居ると申しましたいろ〳〵な申し分のない性質をお考へ下されませ。そして神樣の前に又私の良心にかけまして、私の奥方がお使ひ遊ばす殘らずのお小間づかひたちの中には、私の娘の靴の底にも及ぶ人は一人もありません。そしてアルティシドラと呼びまして、あのうちで一番大膽で一番綺麗だと思はれて居りまする娘も、私の娘に比べますれば足もとにも及ばぬのでございます。私は貴方樣に輝くものが皆金ではないといふことを御承知願ひたいのでございます。又その少女アルティシドラは樣子がよいといふよりもづう〳〵しいのでございます。その上あまり丈夫ではございませんので、一寸でもあの娘の側に居るのが堪へられぬ程にいやな息をするのでございます。それに奥方の公爵夫人も——けれども壁に耳ありとも申しますから、私は舌を抑へませう。』



『一體また公爵夫人が何うなされたと言ふんです、ドーニャ・ロドリグェス？』とドン・キホーテは聞いた。

『そのやうに御尋ね下さいますると、』と侍女は答へた、『私はそのお尋ねに答へて本當の事をみんなお話し申さずには居られません。ドン・キホーテさま、貴方は私の奥方公爵夫人の優美なお姿、あの研ぎ磨いた劍のやうな滑らかなお肌色、牛乳と洋紅色のやうな頰の色、お歩ひなさる時の、といふよりも、此の土地を蹴飛ばされるやうに見えまする、あの華美やかで陽氣なお歩きぶり、誰でも奥方がお通りなされるところには健康の光を射出しながらお歩ひなされると想ふやうなあのお姿を御覽なさいましたか？それでは申しますが、奥方は先づ第一に、それの爲めに神樣に感謝し、次ぎに奥方の兩脚に一つづゝありまする血液の漏口、そこから惡い液が流れ出ますので、

お醫者は奥方の御身體はそれで一杯ちやと申しましたが、この爲めにも神樣へ感謝を捧げられてもよろしいのでございます。』

『あゝ！』とドン・キホーテは叫んだ、『奥方公爵夫人が此のやうな傷口を持たれるとは有り得べきことであらうか？拙者は若しそれが跣足の托鉢僧でも話して聞かせたのだとすればそれを信じはせなんだであらう。ちやがドーニャ・ロドリグェズどのが斯う言はれるからには、それはさうに違ひあるまい。しかし確かに斯やうな場所は、分泌液を出さずに、液體の琥珀を出すのであらう。實際、拙者は今この開いた傷口の出來ることが健康の爲めに非常に大切な事であるといふことを信じまする。』（この血を出すことにおいては當時行はれた刨瀉法のこと時々瀉血を施すことに行はれたのである）

ドン・キホーテが斯う言ふか言はないに、部屋の戸がすさまじい響をたてゝ開け放たれた。その物音に驚いてドーニャ・ロドリグェズは手に持つて居た蠟燭を取り落した。と部屋の中は、諺に言ふ狼の口のやうに眞暗になつた。あはれな侍女は不意に二本の手が自分の咽喉をつかむやうに感じた。それが餘りきついので彼女は聲立てることさへ出來なかつた。其の間に誰か他の者が、一言も發せずに、非常に手荒く彼女の下袴を引き揚げて、上靴のやうに見えるもので、誰れでも彼女に同情を寄せるであらうと思はれる程に、一生懸命にひどく打つた。ドン・キホーテはそ



れを感づいたけれども、寢臺から動かずに靜かに默つて横になつて居た。けれども毆打の順番が來るのではなからうかと懸念しながら。その懸念はむだではなかつた。その侍女（彼女は泣き出すことも得なかつた）を十分に毆りつけると、それはそのまゝにして、此の沈默せる刑罰執行者はドン・キホーテの方に打つてかゝつた。そして彼から敷布と上被とを剝ぎ取り、ドン・キホーテを抓つた。その速さその劇しさ、ドン・キホーテはたまらず拳固をかためて自分を防いだ程であつた。そしてこれが皆驚くべき沈默のうちに行はれた。戰ひは殆んど半時間も續いた。それから幻影は逃げ去つた。ドーニャ・ロドリグェズは裾を引き寄せ自分の運命を哀しみながら、ドン・キホーテには何とも言はずに出て行つた。そしてとりこの部屋に殘された。そこで吾々は彼をこゝへ殘して置かう、彼を斯やうな狀態に陷れた意地の惡い魔法使ひは果して誰であつたらうかと怪しむがまゝにして。尤もそれは追つて好機會を見て話すであらう。今はサンチョーが吾々の注意を要求して居るし、又この物語の順序立つた布置がそれを要求してゐるから。

## 第四十九章　サンチョー・バンザが自分の島の巡視中に起つた事について。

吾々はあの百姓が描くが如くに述べた事によつて憤り怒つた總督を打ち捨てゝ置いた。あの百姓は家令に敎へられてさうしたので、家令はサンチョーを慰みものとしようとした公爵に敎へられたのであつた。サンチョー・バンザは、愚者で、武骨漢で、又滑稽者ではあつたけれども、彼等すべての者に對しては自分を主張した。彼の周圍の者どもや、公爵の手紙の內密の事の仕末がつくや否や部屋へやつて來た醫者のペドロ・レシオなどに斯う言ひながら、『さて私は裁判官や總督は眞鍮で造るもので又造られねばならぬものぢやといふことが十分あきらかに分つた。始終年中聞いて呉れとか、自分等の用事を早く片づけてくれとか、自分等の用事には注意して他人の用事には何が起らうとも、注意せぬやうにと言ふ請願者どもの無理強ひな厚かましさを感じないやうにするのにはの。そして可愛さうにも裁判官が彼等の言ふことを聞き入れず又事件を定めぬと——總督は彼等の言ふことを一々取上げることは出來ぬし又それを聞く爲めに別に取つて置き



の時間はないのぢやから——すぐに彼等はあらを探したりする。お前等馬鹿な頓間な請願者、さう氣を急ゝな。用事をするに適當な場合と時節を待て。飯時や寢就時には來るな。何故と言うて裁判官でもたかゝ肉と血の人間ぢや、食うたり眠つたりはせずには居られぬ。私は例外ぢや、私の場合には私は何にも食ふべきものを腹へ入れぬ、ドクトル・ペドロ・レシオ・ティルテアフェエラさんの御かげでな。この人は私を飢ゑ死させるつもりぢや、そして死ぬるのは生きることぢやと言ふのぢや。どうぞ同じやうな生き方を神さまがあの男にもあの男と同じ種類の殘らずのものにも——それは惡い醫者のことぢやが——授けて下さるやうに。善い醫者は棧橋と月桂樹の花輪を受る値打があるからの。』

サンチョー・バンザを知つて居た者は皆彼が此のやうに上品なことを言ふのを聞いて驚いた。そしてかうした役目や眞面目な責任などが人の智慧を鋭くしたり、鈍くしたりするのでなければ、その原因を何に歸すべきかを知らなかつた。遂に醫師ペドロ・レシオ・アグエロはサンチョーに、夜になつたら夕飯を差し上げませう。ヒポクラテースの警句には違背するけれども、と言つた。これで總督は滿足し、夜の近づくのを樂しんで待ち、夕飯時を大に待ちかねた。そして彼の心には、時はぢつと立ち止まつて進まぬやうに思はれた。けれども彼が非常に待ち設けた時刻

は來た。そして彼等は彼に葱のないビーフサラダと少し古くなつた犢の足を養たのとを出した。こゝに於て彼は料理番がミランのフランコリン(第一ローマの雉子、ソレントの犢肉、モロンの鴫鳩、ラヴァジョースの鴛鳥などを彼に出したよりも旨がつて食事に取りかゝつた。そして食事中醫者の方をふり向いて言つた、『これ、お前は、この後私においしいものを出したり選りぬきの皿を出さうと心を痛めるには及ばぬ。さういふ物は私の胃の腑の調子を狂はせるばかりぢや。私の胃の腑は山羊、牝牛、臘乾、掛け乾にした牛肉、蕪菁、葱などに慣れきつて居る。若し何かのはづみで、そんな上品な料理を出されると、胃の腑はそれを嫌や〳〵ながら受け容れ、又時には嘔氣を催すこともあらう。賄頭が一番よくしてすめてくれることは、世間で雜炊と言うて居るものを私にすめてくれることぢや、(それは濃ければ濃いほど香味があつて旨いのぢや)。賄頭は自分の好きなものを何なりとその中へ入れてよい。食ふによい限りはの。私は賄頭を德として、いつか彼に報いをせう。しかし誰も私に惡戯をしちやいかん、人は相見たがひぢや。私等は平和に仲よく暮しもし食ひもせうではないか、神が曙を送る時には、總てのものに向つてそれを送るのぢや、私は權利も棄てず賄賂も取らずに此島を治めようと思ふ。めい〳〵その眼を開けて、自分の矢を探せぢや。何故なら私はあれ等に「惡魔はカンティラナに居る、」(惡魔の農場な話で、カンティラナはマイーンの東北の一村で「一つの歌明はこれはアルホンスヤ」一世の御代に起つた騒



(惡な惡魔したジョブレ・テノリオの話下の行爲に關することであるといつてゐるが要するにこの何ら不明としてゐる、)と言ふことができるからぢや。若しあれ等が私をそこまで追ひ立てると驚くやうな事が出來て來る。いや!「自分を蜜にすりや蠅が食ふ」とも言ふわい。』『確かに、總督閣下、』と賄頭が言つた、『閣下が仰せになつたことはみんな御尤もでござります。私は此の島の殘らずの住民の名前にかけまして御約束申します、彼等は熱心と、愛情と、好意とを以て閣下につとめるでありませう。何故と申しますれば、閣下が最初にお示しなさいました實例によりまして、親切な溫和な政治ぶりが人民の心に分りまして、決して閣下の御不利益になりますやうな事をしたり考へたりする餘地を殘さぬであらうと存じられますから。』

「『私もさう信ずる、』とサンチョーは言つた、『そして彼等が若しそれと違うた事をしたり考へたりするならば、彼等は大馬鹿ぢや。も一度私は言ふ、私の食物とダップルのとに氣をつけてくれい。何故ちうに、それが肝要で眼目であるからぢや。そして時が來たら私等は巡視に行かう。私は穢れた者や怠け者のやくざな浮浪者をみんな追ひ拂うて此の島を拂ひ淸めようと思ふからぢや。それからお前がたはかういふことを知らねばならぬ、國になまけ者のあるのは、丁度蜂の巢の中に雄蜂が居るのと同じことぢや。雄蜂は勤勉な蜂が拵へた蜜をみんな食うてしまふのぢや。私は百姓を保護し、紳士の特權を保持し、德ある人に報い、中んづく宗教を敬ひ僧侶を尊ばうと思うと

るのぢや。それに就いて意見があるか？私が言ふことに何か間違うた事でもあるか、また私は何の役にも立たぬ空なことを言うて居るか？』

『閣下の仰せになることは實に御尤もな事でございます、』と家令は言つた、『私は閣下のやうな、全く學問のないお方が（私は閣下は全く學問勉強はなされなかつたと信じますると）、斯やうに立派な格言や賢い言葉に充ち滿ちたお言葉をお話しなさるのを承りまして、心から驚きました。閣下のお話しなさることは、私どもを此處に送られましたお方や又此處に來ました私どもが、閣下の御智慧の程を推察して居りましたとは、まるツきり違うて居りました。私どもは毎日此の世界で何か目新しいものを見ますると。冗談が實際となりまして、そして冗談をする者は彼我の形勢が一變したことを知りました。』

夜が來た。そして醫師ペドロ・レシオの許しを得てサンチョーは夜食を認めた。（作者セルヴアンテスは既にサンチョーが夜食を認めたことを忘れ）彼等はそれから巡視に出かける用意をした。サンチョーは家令、祕書官、彼の行爲を記錄すべき責任を持つて居る記錄係り、令狀執行官、書記などを引連れて出發したが、その同勢は可なり大きな隊を造るに十分であつた。サンチョーは誰でも見たいと思ふやうな立派な觀物の如く、彼の權標を手にして其の眞中に進んで行つた。しかるに此の市の二三の街路を歩いて行くと、



劍の丁々と相擊つやうな音が聞えて來た。彼等はその場所へと急いだ。そして戰ふ人は唯二人きりであることを見出した。彼等は役人の近づいて來るのを見て靜かに立つて居た、そしてその中の一人が叫んだ、『お助け下さい、神樣と王樣との御名にかけまして！此の町の眞中で盜みすることが許されてありますか、又この道に居る人々を突擊し攻擊することが許されてありますか？』

『まあ、鎭まりなさい、お前さん、』とサンチョーは言つた、『此の喧嘩の原因は何であるか話しなさい、私は總督ぢやからの。』

打ち合ひの相手の男は言つた、『總督閣下、私はごくかいつまんでお話し申しあげます。閣下は此の紳士が丁度今向ひの賭博場で一千リール以上儲けましたことを御承知ください。又神樣はこの次第を知つて居られます。私はそこに居りました。そして疑はしい場合には私の良心の命ずるところに逆らひながらも、何遍も此人の都合のよいやうに智慧を貸しました。この男はお禮の印しとして少くも一クラウンやそこらは私に呉れるだらうと堅く思つて居つたのでございます。勝負の不正か公平かを見たり、詐欺の後押しをしたり、喧嘩の起らぬやうにする爲めに側に居ります私のやうな者に幾らか呉れますのは

きまりとなつて居りますのでな。然るにこの男はその金をポケットに押し込み、その家を出て行きました。これを見ますと赫となつて私はこの男のあとを追ひかけました。そして僅か八リールでも宜いから下さいと言葉を低くして叮嚀に頼んだのでございます。何故と申しますにこの男は私の正直なこと又私が何の職業もなく財産もないこと、これは私の兩親がこれと言ふ定つた仕事を私に教へ込みませず又私に何にも殘さなんだからですが、こんな事を知つて居りますからか私はこの男に頼んだのです。ところが、ケーカスよりも大泥棒でアンドラディラよりひどい詐欺師でありまする此の惡漢は、四リール以上は私に呉れようとしません。閣下はこの男が恥といふことを知らず、又良心といふものを殆んど持つて居らぬといふことがお分りになりませう。しかし私が信じますには、若し貴方樣が此處へおいでにならなかつたなら。私はこの男の手に入れた物をみんな戻させましたらう。そしてこの男に何オンスが磅になるかを教へてやつたでありませう。』

『これに對してのお前の答辯はどうぢや？』とサンチョーは尋ねた。その者はその反對者が言つたことは皆眞實であると答へた。又彼は度々その男に金を與へたので四リール以上をに與へたくは思はなかつたのであると答へた。そして贈り物を待ち設けてゐるは叮嚀でなければならぬ、また自分に與へられたものを愉快さうな顏つきをして受取らねばならぬ。そして確かにその人が詐僞師であると知つて居るのでなければ、又その儲け得たものが不正なことをして得たのでなければ、その勝つた者に對して何等の要求をもなすことが出來ないといふこと、又自分は何物をも與へることを拒んだのであるが、自分の正直な男であることはその拒んだといふことよりよい證據はないと思ふ、何となれば詐僞師は自分等を知つて居る見張番には常に貢を拂うて居るからであるといふ事などを答へた。

『そりや尤もぢや、』と家令は言つた。『總督閣下此の二人の者をどう處置なさるかお考へ下さいませ。』

『此の二人を處置する方法はかうぢや。』とサンチョーは言つた、『勝ち手であるお前は、善いにせよ、惡いにせよ、どちらつかずであるにせよ此のお前の攻撃者に卽刻一百リールを與へい。そしてお前は哀れな囚徒どもの爲めに三十リール以上を出さねばならぬ。又職業もなく財産もなく、島ぢうをぶら〳〵とぶらついて居るお前は今この數百リールの金を取れ。そして十年間追放の宣告の下に明日中に此の島を立ち去れい。又若しお前が此の宣告を破るならば來生においてそれを果たさねばならぬのぢや。何故ならば私の斷頭臺でお前を縛り首の刑に處するであらうから。せ

めて縛り首の役人が私の命令でさうするであらう。それに對してお前等には一と言も出させはせぬ、さうせぬと私はどちらにも罰を呉れるぞ、』

一人は金を支拂つた。も一人はそれを受取つた。そして後者は此の島を立ち去つた。前の者は自分の家へ歸つて行つた。それから總督は言つた、『私はどうも堪まらぬ。私はかうい賭博場は取り除けてしまはう。あゝいふものは非常に有害であるやうに思はれるからの。』

『兎に角そのうちの一つだけは、』と一人の書記が言つた、『閣下もお取りのけなさることは出來ますまい。何故と申しますれば或るえらい人がそれを所有して居りまして、その人が、毎年失うところはその人が骨牌で儲けるものとは比べものにならぬ程多いのでございます。小さい方の賭博場なら閣下のお力を加へらることが出來ます。そして最も多くの害をなし又最も大膽な惡事をかくして居りますのはそれらでござります。上流社會の王侯や紳士たちの家では有名な詐僞師はその術を演じようと企てることが出來ません。また賭博の惡德が普及しましたので、商賣人の家でやるよりも名聲のある人の家でやる方がよくなりました。それでは皆夜中過ぎに不仕合せな男を捕へて生きながら皮を剝ぎ取つてしまうのです。』

『私はとうに知てとるのぢや、書記どの、その點に就いて言ふべきことの澤山にあるのは知つと



るのぢや。』とサンチョーは言つた。

今度は一人の捕吏が若者を一人捕へてやつて來た。そして言つた、『總督閣下、この若者は吾々の方へ向つて參りました。ところが裁判官がたを見ますると否や、振り返つて鹿のやうに走りました。これは此奴が何か惡いことをした確かな證據でござります。私はこれの跡を追ひかけて走りました。そしてこれが躓いたり倒れたりしませなんだら、私は捕へ損じたでござりませう。』

『何の爲めにお前は逃げ出したのぢや?』とサンチョーは言つた。

それに對して若者は答へた、『閣下、それは裁判官たちが出しまする、さま〴〵の質問に答へることを避けよう爲めでございます。』

『お前は何商賣をして居るのか?』

『織人でございます。』

『してお前は何を織るのか。』

『失禮ながら槍を防ぐ頰當てでございます。』[こゝに原語では樣匠といふ語と頰當てといふ語との音相似て言葉の混淆となつてゐる]

『お前は私のやうにおどけ好きぢやの! お前は剽輕者を自慢にして居るのか? 結構ぢや。して今

お前は何處へ行かうとして居つたのか？』

『閣下、散歩です。』

『此の島ではみんながどの邊で散歩するかの？』

『空氣の流れますところで。』

『よし！お前の答へは大層要領を得て居る。お前は氣の利いた若者ぢや。しかし私が空氣である
ことに氣をつけい、又私がお前を船尾の方に吹きつける、そしてお前を牢屋へ送るちうことに氣
をつけい。ホー、そら！彼を捕へて送り込め。私は彼を今夜空氣なしで眠らせよう。』

『本當に、』とその若者は言つた、『閣下が私を王にして下さつたら牢屋の中で眠らせることが出來
ませう。』

『何故私がお前を牢屋の中で眠らせてはならぬか？』とサンチョーは言つた、『私はお前を取押へ、
又いつでも私の好きな時にお前を許す力を持つて居らぬと言ふか？』

『閣下のいかなる御力も、』と若者は言つた、『私を牢屋の中で眠らせることは出來ませんでせう。』

『なに？出來ぬと言ふか！』とサンチョーは言つた、『自分の眼で自分の間違ひの分る場所へ、今
すぐにあれを連れて行けい。監守があれの爲めを計つて寛大に取扱はうと思うたところでそれは



駄目ぢや。私は監守が一歩でもあれを牢屋から出させるやうな事があつたら監守を二千デューカ
ットの罰金に處する。』

『それは可笑しいことです、』と若者は言つた、『ほんとに、世界中の殘らずの人も私を牢屋の中で
眠らせることはしないでせう。』

『なに、惡魔め、』とサンチョーは言つた、『お前は其身を救ふ天の使でも手に入れたのか。又私が
言ひつけてお前に付けさせようと思ふ足枷を取り除けることでも出來るのか？』

『まあ、總督閣下、』と若者は元氣な樣子で言つた、『私たちは筋道を立てゝ考へて要點に進みませ
う。閣下は私を牢屋へぶちこむやう命令することも出來ませう、又私へ足枷をかけ鎖をつなぐこ
ともできませう。又檻房へ閉ぢ籠めることもできませう。又監守が私を出させるやうなことがあ
つたら重い罰金を課することもできませう。そして監守は貴方の命令に從ふでございませう。そ
れでも、私が眠らうと思ひませんでも、夜ッぴて眼を閉ぢずに醒めて居らうと思ひますれば、
閣下は貴方の全力を以て、私が眠らうと思ひませんでも、私を眠らせることが出來ますか？』

『いや、全く、』と秘書官が言つた、『この男は鬪星を指しました。』

『そんならば、』とサンチョーは言つた、『お前が眠りを押へて居るのは全くお前の好むことで、私

の心に逆らうてではないといふのぢやの？』

『さやうでございます、』と若者は言つた、『全くその通りでございます。』

『それでは行つてもよい、御機嫌よう。』とサンチョーは言つた。『家へ歸つて眠るがよい。そして神樣がお前をぐッすり睡らせて下さるやうに、私はお前からそれを盜み取らうとは思はんからの。しかし今後、私はお前が役人をからかはんやうに勸めるのぢや。誰かお前の頭の上へ冗談を御見舞ひ申す人に出逢はんとも限らんからの。』

『その若者はその道をつゝけて行つた。そして總督はその巡視をつゞけた。すると間もなく二人の捕吏が一人の男を捕へて近寄つて來た。そして言つた、『閣下此の人は男のやうに見えますが、さうではございません。婦人でございます。男の着物を着て居りますが、姿も醜くはございません。』彼等はその女の顏へ角燈を二つ三つさしむけた。その光で彼等は誰にも十六七と見える女の顏形を見分けることができた。頭髮は金色と綠色の絹の網で束ねられ、無數の眞珠のやうに綺麗であつた。彼等はその女の頭から足の先まで篤と見た。そして彼女が赤い絹の靴下をはいて、金と眞珠で縁どつた白い琥珀織の靴下止めで止めて居るのを見た。彼女の据着は金と綠のきれ地であつた。そして同じ地の開いたジャケツか胴衣の下に、この上もなく綺麗な白い黃金色の布の



胴衣を着て居た。彼女の靴は白くて、男の穿くやうなものであつた。その帶には劍を下げては居なかつた、が唯一本の贅澤に飾られた短刀を吊るして居た。そして彼女の指には五つ六つの立派な指環をはめて居た。簡單に言へば、この娘はあらゆる人の眼に熟視せられる程の美人であつた。しかし彼女を見た人々のうちの誰もが彼女を知らなかつた。町の人々は彼女が誰であるか想像することが出來ないと言つた。そしてサンチョーをかつがうといふ此の冗談の黑幕にあつた人々こそ、最も驚かされた人々であつた。といふのは此の偶然の出來事もしくは發見は、彼等によつて仕組まれてなかつたからである。で彼等は此の出來事が如何になり行くかを見ようとて心配しながら看守つて居た。

サンチョーは此の娘の美しいのに魅せられた。そして彼は彼女の名前は何といふか、何處へ行きつゝあるのか、又如何なる事が彼女をして斯やうな扮裝を裝ふやうにさせたのか、などゝいふことを彼女に訊いた。彼女は地上を見つめて少しどぎまぎしながらおとなしやかに答へた、『私は貴方樣に申上げることは出來ません。秘密にして置かねばなりません。私の大切な事を、こんなに多勢の人たちの前で申し上げることは出來ません。私が知つて頂きたいのは、私は盜人でもございませぬ、唯嫉妬の力によつて、しとやかさに受くべき面

目を損ずるやうなことになりました、不仕合せな娘でございます。』

家令はこれを聞いてサンチョーに言つた、『閣下、人々をお遠ざけなさいませ、さうしますれば此の御婦人はお含羞なさらずに思ふことが述べられませうと存じます。』

サンチョーは命令を下した。そこで家令と賄ひ頭と秘書官とを除いては皆うしろの方へ退いた。自分の前から大勢の人々が立ちのいたのを見て、その少女は話し出した、『總督さま、私はペドロ・ペレス・マゾルカといふ此の町の羊毛を採る百姓の娘でございます。この人は私の父の家へ度々參る慣はしとなつて居ります。』

『お嬢さん、それはお間違ひでせう、』と家令が言つた、『私はペドロ・ペレスはよう存じて居ります。そしてあの人は全く子供のないことも私は知つて居ります。息子さんも御嬢さんも。それに又貴女はあの人が貴女のお父さんだと言はれますが、貴女は又、あの人は貴女のお父さんのところへ度々來られると、附け足して言はれましたな。』

『私も疾うにそれに氣がついて居つた。』とサチンョーは言つた。

『私は只今は間違へたのでございます、皆さま、』とその少女は言つた、『そして私は自分が何を言うて居りますやら分りません。けれど私は、貴方がたみんな御存じに違ひございませんが、ディエゴ・デ・ラ・ラーナの娘でございますことは確かでございます。』



『あゝ、それでよろしうございます、』と家令は言つた、『何故と申しますに、私はディエゴ・デ・ラーナを存じて居ります。又あの人が位地も高く財産もある紳士であることも存じて居ります。又あの人が息子さんを一人と御嬢さんを一人持つて居ることも存じて居ります。あの人が御内儀を亡はれましてからは、此の町中の何人もあの人のお娘の顔を見たと言へるものがなくなりました。それはあの人がそのお娘さんを家の奥深く閉ぢ籠めて、太陽にさへお娘さんを見る機會を與へぬ程であつたからでございます。しかしそのお娘さんは非常に美しいといふ評判でございます。』

『それは本當でございます、』とその少女は言つた、『そして私がその娘なのでございます。私の美しさに就いての評判が僞りでございますかございませぬかは、只今貴方がたが目のあたり私を御覽なさいましたので、御決めなさいましたでせう。』かう言つて彼女ははげしく泣き出した。

この樣子を見て祕書官は賄ひ頭の耳に凭りかゝるやうにして、低い聲で言つた、『こりやア疑ひもなく何か重大な事が此の可哀さうな娘の身の上にふりかゝたに相違ない。あの娘がこんな樣子をしてこんな時刻に家を飛び出して彷徨ひ廻るといふのは、しかも斯ほどに身分の高い娘の身で

ありながら、かうしてぶらつくといふのは。』『そりやさうぢや。それに就いては何の疑ひもない、』と賄ひ頭が答へた、『のみならずあの娘が流す涙が君の疑ひを確かめて居る。』サンチョーは自分の出來る最もよい慰藉を娘に與へた。そしてお前さんの身の上にふりかゝつた事柄を、何の憚るところなく私たちに話して下さいとその娘に頼んだ。私たちは皆本氣である、そしてあらゆる手段を講じて身の及ぶ限りお前さんを救ふやうにつとめますからと言つて。

『皆さま、實を申しますと、かやうでございます、』と彼女は言つた、『私の父はこの十年の間私を閉ぢ籠めて置きました。私の母が草葉の蔭の人となりましてから、それ程月日が經ちましたのでございます。家にあります立派な禮拜堂で供養は行はれます。此の時ばかり私は晝には天の太陽を見、夜には月や星を見ました。私は町がどのやうであるか知りません。又廣市場も教會も、それから私の父と弟と羊毛屋のペドロ・ペレスの外には人といふものをも知りません。ペレスさんは度々私の家へ參りましたから存じて居るのでございます。私は私の父の名前を言ふのを避ける爲めに、その人を私の父と言はうと不圖思ひついたのでございました。私は出歩くことを差し止められまして家にとぢこもつて居りました。たゞお寺へは參ることができました。この事が、過ぎ去りました幾日幾月の間といふもの私の心を亂したのでございます。私は世間を見たうございました。せめて私の生れました町を見たうございました。此の願ひは良い身分の家の娘が自分に對して持たねばならぬ面目といふ考へと兩立せぬものとは私には思はれませんでした。私は鬪牛が催され、投槍仕合（馳け寄つた二頭の猛牛を馬上にて槍を以て突き伏せる仕合）が行はれ、芝居の興行があるといふことを人々が話しますのを聞きますと、私より一つだけ歳下の弟にさういふ物は何ういふものであるか話して聞かせてくれと頼みました。又私がまだ見ませんなんだ多くの事どもを聞かせてくれと頼みました。弟はできるだけよく私にそれらの事を說明してくれました。けれどもさうすることの唯一つの效果は、さういふものを見たいといふ一層強い望みを私の心に焚きつけるだけでありました。私の身の破滅の物語を端折つて申し上げますと、到頭、私は私の弟に頼みもし願ひもしたのでございます——あゝ斯やうな願ひはせなんだ方がよかつたのでございますツと泣きくづれた。



『先をお話しなさい、お嬢さん、』と家令は言つた、『そして貴女の身の上にふりかゝつた其の物語を終ひまでお話しなさい。貴女のお言葉や涙の爲めに、私たち皆のものは默つて待つて居るのですから。』

『涙は澤山出ますけれど、お話しすることはもう澤山はありません、』とその少女は言つた、『誤つ

て抱きました望みは唯こんな風に報いられるのでございます。』

この少女の美しさは賄ひ頭の心に深い印象を與へた。彼は再び角燈を差し上げてもう一度彼女の顔を見た。そして彼女が濺ぐのは涙ではなくて眞珠の粒か草野の露であらうと考へた。いや、彼はそれを尙一層高く考へて、その涙は東方の眞珠であらうと思つた。そして熱心に、彼女の不幸が、彼女の涙と啜り泣きとが示すやうに思はれる程大きくないやうにと望んだ。總督は少女がその物語をするのに要する時間が長いので、辛抱しきれなくなつた。そして最早この上自分を待たしてくれるな、時刻も大分移つて、しかも巡視せねばならぬ町は澤山に殘つて居るからと、彼女に告げた。

彼女は、泣きじやくりながら半ば抑へて居た溜息をつきながら、言ひつゞけた、『私の不仕合せ、私の災難はこれだけの事でございます、私は弟に賴みまして弟の一襲の着物を着て、お父さんがお眠みなさいましてから、町中を見る爲めに、夜中に私をつれて行つてくれるやうにと迫りましたのでございます。弟は、私の歎願に我を折りまして、同意いたしました。そこで私に此の着物を着せまして、弟は私の着物を着ました。その着物は弟の爲めに拵へたかと思はれる程しッくりと身體に合ひました（弟は願には一本の毛もございませんので、大層綺麗な若い少



女と思はれるやうでございましたから）今夜、一時間そこ〳〵前に、私たちは家をぬけ出ました。そして私たちは自分等の若い愚かな心に導かれて、町中を廻り歩きました。それからそろ〳〵家へ歸らうとして居りますと、大勢の人々がこちらへ來るのを見ました。其の時弟は私に言ひました、『姉さん、これは巡視に相違ありません。さあお急ぎなさい、足に翼をつけたやうに。そして出來るだけ早く私についておいでなさい。あの人たちに見つけられんやうに、見つかりますと事が面倒になりませう。』かう弟は言ひながら、方向を轉へて走り出しました。いゝえ、走ると申すよりも飛ぶと申す方がよろしうございませう。六歩と進まぬうちに、私は恐れの爲めに倒れました。そこへ裁判所の御役人が來られまして、私を總督さまの前へとつれて來られました。私は恥しくも、氣まぐれな不身持な少女として皆さまの前に立たされることになつたのでございます。』

『それでは、お嬢さん、』とサンチョーは言つた、『その外には何にも貴女の身に災難はふりかゝらなんだのですな　又貴女がお話しの初めに仰しやつたやうに、貴女を家出させたのは嫉妬ではございませんでしたのですな？』

『私には何事も起りませなんだ、』と彼女は言つた、『又私をつれ出しましたものは嫉妬ではなかつたのですな。』

ませう。唯もう世間を見たいといふ憧がれの情だけでございます。それも此の都市の街路を見ま
す以上には出なんだのでございます。』

二三人の捕吏が彼女の弟を捕へて現はれて來た。弟は姉と別れて走つた時に一人の捕吏に
追ひつかれたのであつた。この事が今や十分にこの少女が話した事の眞實であることを確かめた
のであつた。弟は贅澤なズボンと綺麗な金のレースのついてゐる短い青い絞織の上衣のほかに
は何にも着て居なかつた。頭には何にも冠らずに唯自分の頭髪で飾つて居た。それは金の輪のや
うに見え、大層かゞやいて、そして縮れてゐた。總督、家令、賄ひ頭は弟をつれて傍の方へ行
つた。そして、姉には聞かれないやうに、何うしてそのやうな着物を着るやうな事になつたのか
と弟に聞いた。すると弟は少しも恥ぢる樣子もうろたへる樣子もなく、彼の姉の話しと同じ
話を精確に話した。それを聞いて慕はしく思うてゐる賄ひ頭は非常に喜んだ。然るに總督は彼等
に言つた、『實際、お若い婦人と紳士よ、これは實に子供らしい事柄であつた。そして貴方がたの
馬鹿らしさと輕はづみとを說明するのに、何もこんなにぐず〳〵して泣いたり溜息を吐いたりす
るには及ばなんだのぢや。若し貴方がたが私に吾々は斯く〳〵である、そして吾々はぶらつき廻る
爲めに斯うして父の家から逃げ出して來たのである、そしてそれは唯好奇心からさうしたので、



外には何の目的もなかつたのであるとお話しなさつたら、事件はもう疾うに決着して居つたらう
に。そしてしやくり上げて泣くことも入らねば涙を流すにも及ばず、その他のいろ〳〵な事もせ
ずにすんだであつたらうに。』

『本當にさやうでございます、』とその少女は言つた、『けれどもあの通り私は當惑してしまひまし
て、ちやんとすべきことをする事が出來ませんなんだのでございます。』

『何もわるいことはなかつたのぢや。』とサンチョーは言つた、『さあ、私は貴君がたをお父さんの
お家へおつれ申しませう。大方お父さんたちはまだ貴君がたの居られぬのには氣がついて居られ
まい。これからは世間を見るとて、そんなに子供らしく熱心にならぬがよろしい。尊敬すべき少
女は足のないものゝやうに家に居つてよう家を整へて行かにやならんものぢや。そしてぶらつき
廻る女と牝鷄はすぐ見えんやうになるものぢやからの。見ることに熱心な女は、見られようとす
ることにも熱心ぢやとも言ひますよ。私はもうこの上は言ひません。』

若い人たちは總督が自分たちを家までつれて行つてくれるといふ親切な申し出に對して感謝し
た。そこで彼等はその家の方へ足を向けた。その家はさう遠くはなかつた。家に達すると若者は
一つの格子へ小石を抛げつけた。すると直ぐに彼等を待つて居た一人の女婢が下りて來て、彼等

の爲めに戸を開けた。で、夜中に、而も此の村を出ずに世の中を見ようといふ彼等の空想にも驚いたが、それと同じやうに二人の上品さと美しさとにも驚いて居るこの一行の人々を後に殘して、二人は入つて行つた。そしてその美しさを彼等はあの二人の若さの爲めと思つたのである。

賄ひ頭は深く〳〵貫き通された心を抱いて取り殘された。彼は明日になつたらば、あの娘の父へあの娘に對する緣談を卽時に申込まうと決心した、自分は公爵家の家來だから決して拒絕されるやうな事はなからうと腹をきめて。のみならずサンチョーの心にも、自分の娘のサンチカへあの若者をめあはしてやらうといふ考へと企てとが起つて來た。そして彼は總督の娘には如何なる婿も拒むやうなことはあるまいと自分で自分を說得して、適當な時機を見て談判を開始しようと決心した。そこで夜の巡視も終りになつた。そして、二三日の後にはその政府もろとも彼のあらゆる計畫が顚覆され拂ひ去られてしまつた。それはやがて分る。



## 第五十章

此の信憑すべき物語の微細な點を精勵刻苦して研究するシード・ハメットは言ふ、ドーニヤ・ロドリグェズが自分の部屋を出てドン・キホーテの部屋へ行つた時、彼女と一緒に眠つてゐた他の一人の侍女が彼女を見て居たのである。そして總ての侍女が覗き、聽き、嗅ぐことを好むやうに、この侍女もお人よしのロドリグェズが少しも氣がつかなかつた程に、こつそりと彼女の後をつけて行つたのである。そしてロドリグェズがドン・キホーテの部屋へ入るのを見るや否や、侍女に附きものゝおしやべりの癖を失はず、彼女は早速ドーニヤ・ロドリグェズがドン・キホーテの部屋へこつそりと入つて行つたといふことを公爵夫人に報告しようとて急ぎ去つた。公爵夫人は公爵

には侍女を打ちドン・キホーテを抓つた魔法使ひと刑の執行者とは何人なりしかを述べ、並びにサンチョー・パンザの妻テレサ・パンザに手紙を持つて行つた小姓の身にふりかゝつた事が記されてある。

に話した。そしてあの侍女がドン・キホーテに何の用があつて行つたのか、私とアルティシドラと二人で行つて見て來ても宜しうございませうかと公爵に願つた。公爵は二人の願ひを許した。二人は用心ぶかく靜かにドン・キホーテの部屋の戸口へと這ひ寄つた。そして中で話して居る事がよく聞き取れるやうにと、ぴッたり戸口に身を寄せて立つて居た。けれども公爵夫人はロドリグェズが自分の傷口のアラジュ エス傷口 Llaga（「傷」と呼ばれてゐる、スペイン王の離宮、アラジュエスの噴泉はフランスのヴェルサイユの噴泉のやうにスペインでは有名である。）のことを暴露したのを聞いて腹に据ゑかねた。アルティシドラも同樣であつた。それで憤怒の思ひに滿ち復讐の念に渦してその部屋へ躍り込み、既に記したやうな方法でドン・キホーテを責めさいなみ、ロドリグェズを打つたのであつた。つまり彼等の美と自尊に對する侮辱は、大いに二人の激怒を買ひ、彼等をして敵を討つことに一生懸命にならしめたのである。公爵夫人はその出來事を公爵に話した。公爵はそれを聞いて大層おもしろがつた。公爵夫人はドン・キホーテを玩弄にして慰みものにしてやらうといふ計畫を立て、それに從つて、かねてドゥルシネアの魔法を解除するに就いての（それをサンチョー・パンザは政治の心づかひの爲めに全く忘れてしまつてゐたので）押問答の際にドゥルシネアの役を演じた小姓を、サンチョーの妻テレサ・パンザの許へ遣はし、サンチョーの手紙と公爵夫人の手紙と、それから贈物として美しい珊瑚珠の立派な紐とを持つて行かせた。



さて物語の記すところによれば、この小姓は大層機敏で覺えの早い性質であつたとある。また公爵と公爵夫人とに事へるに熱心であるので、彼は喜んでサンチョーの村を志して出發した。彼がその村へ入る前に、小川で洗濯してゐる大勢の女たちに目がついた。そこで、ラ・マンチャのドン・キホーテといふ騎士の家來で、サンチョー・パンザといふお方の奥方、テレサ・パンザといふ御名前の御婦人は何處に住んで居られるか御存知の方はありませぬかと、その女たちに尋ねた。この質問を聞いて、洗濯してゐた一人の若い娘が立ち上つて言つた、『テレサ・パンザは私のおッ母さまで、そのサンチョーと言ふのは私のお父さまでございます。』

『有りがたうございます、お嬢さま、』とその小姓は言つた、『どうかこつちへ來て貴女のお母さまが何處においでになるか敎へて下さいませ。私は貴女のお父さまからの御手紙とお贈物をお母さまへ持參いたしたものでございます。』

『えゝ〳〵敎へて上げますとも、貴方。』とその娘は言つた。年の頃は十四五位に見えた。そして今迄洗つて居た着物をその友だちの一人に賴み、頭にも足にも何にも着けずに、跣足で、頭髮をまはりに垂れ下げ、小姓の馬の前に跳ねまはりながら言つた、『さあ、私の家は市の入口にありま

すよ。私のおッ母さはそこに居ります。此の長い間といふものお父さんの便りが一向ないのでひどう悲しんで居りますよ。』

『よろしうございます、』とその小姓は言つた、『私はこんなよいお便りを持つて參りましたのでございます。お母さまは屹度神樣に御禮を申されるでございませう。』

それから、娘は躍り上つたり飛び廻つたりしながら村へ着いた。そしてまだ家の中へ入らないうちから戸口のところで叫び出した、『出てお出でよ、おつ母さ、出てお出でよ、お父さの手紙と何やら外の物を持つて、よその旦那が此處に來とるよ。』この言葉を聞いて娘の母テレサ・バンザが一續きの亞麻を紡ぎながら出て來た。身には灰色の下袴を着(「人々が彼女を辱める爲に下袴を短く切つた」と想はれる程に短いものを)(昔罪を犯す切ることは不名譽な行ひ即ち刑罰であつた)同じ布地の胴衣と肌衣を着て居た。彼女は明かに四十を越して居たが、さう老けては居なかつた。強くて丈夫で元氣があつて、日に焦けて居た。娘と馬上の小姓の姿とを見て、彼女は叫んだ、『何かえ、お前?このお方はどうした人かえ?』

『ドーニヤ・テレサ・バンザさま、私は貴女さまの御家來でございます、』と小姓は答へた。そして自分の行動を言葉に適はせて彼は馬から跳び下り、非常に謙遜にテレサ夫人の前に進んで膝まづ



いて言つた、『貴女の御手に接吻することをお許し下さいませ、ドーニヤ・テレサさま。バラタリアの島の正當な總督ドン・サンチョー・パンザ樣の正式の唯一の奥方としまして。』

『あれ、貴方、お立ちなされ、そんなことをなさるなよ、』とテレサは言つた、『私は御殿女中のはしきれでもございません、唯貧乏な田舍の女でございますよ。土塊搗碎者の娘で家來修業の家内でござります。全く總督さまなどの奥さまではございません。』

『貴女さまは、』と小姓は言つた、『最も貴い總督さまの最も貴い奥方でございます。そして私の申すことの證據といたしまして、この御手紙とこの御贈物とをお受取り下さいませ。』かういふと同時に彼は衣嚢から黄金の釦のついた珊瑚珠の紐を取り出して、それを彼女の頸へとかけて、そして言つた、『この御手紙は總督閣下からのので、それから、も一つの御手紙と並びにこれなる珊瑚珠は私の奥方公爵夫人からのでございます。してその奥方が私を貴女さまの許へお遣はしになつたのでございます。』

テレサは驚いてしまつて突ッ立つて居た。そして彼女の娘もまた同じやうであつた。その時その娘は言つた、『この事の奥にはきつと私たちの御主人ドン・キホーテさまがおいでなさるに違ひない。ドン・キホーテさまはお父さに度々お約束なさつたやうに、お父さを總督か大守にして下さ

つたに違ひない。』

『それは全くさうでございます、』と小姓は言つた。『この御手紙によつても分りますやうに、サンョーさまがバラタリアの島の新總督となられましたのも、ドン・キホーテさまのお力によつてゞございます。』

『貴方それを私に讀んで聞かせて下されませよ、なア、』とテレサは言つた。『私は紡ぐことはできますが、讀むことは紙片一枚も出來ませんぞの。』

『私も、』とサンチカは言つた。『けれど一寸待つて下さい、誰か讀める人を連れて來ますからの、牧師さんか得業士のサムソン・カラスコーさんを。あの人たちはお父さのたよりなら喜んで聞きますよ。』

『いゝえ、何方もお連れなさるに及びません、』と小姓は言つた、『私は紡ぐことは出來ませんが讀むことは出來ますから。ぢや、私がそれを讀み通した。しかしながらそれは既に記されてあるから此處にはもう挿入すまい。それから小姓は公爵夫人の手紙を取り出した、それは次のやうに認められてあつた。



なつかしきテレサさま——御身の御良人サンチョーどの、御心もお頭もいと優れたる性質なるを見込み、妾は強て妾の夫公爵を說得いたし多くの島の一つの總督職をサンチョーどのに與ふるやう切に勸め申し候。噂に聞けばサンチョーどのは大鷹のやうに政治を執り行はれ候由、妾は一方ならず喜び居り申し候。又夫公爵の喜びは勿論のことにて申し上ぐる迄もござなく候。妾はサンチョーどのを總督に選び候ことの選擇を誤らざりしを天に感謝いたし候。當今は良總督を見出すことはなか〳〵困難にて、サンチョーどのが善く政治を執り行はれ候やうに妾も神かけて祈り候こと御承知置き下されたく候。幸便によつて黄金の釦つきたる珊瑚珠の一紐送りまゐらせ候。東方の眞珠を送りまゐらせたしと思へども、「一本の骨にもせよ、これを與ふる人は、その與へらるゝ人の死なんことは願はざる習ひなり、」とも申し候。やがて我等互に相逢ふ折りの來るべしと存じ候。さはいへ未來は唯神の知らるゝのみに候。御序ながら娘御サンチカさまへ宜しく御傳へ被下度、又妾よりも十分御結婚の御用意これあるやうお勸め申し候。と申し候は娘御の思ひもよられざる折に好き婿がねをお世話申さんと存居候故に御座候。承れば御地には大粒の橡實出來申候由、二三十粒御惠與下されたく、妾は御許樣のお手より送られたるその品を大に珍重いたすべく候。終りに何卒時折りのお便り願ひ上げたく、御許樣

の御健康と御幸福とを祈り上げまゐらせ候。尚もし何事によらず御用おはしまし候節は、一と口お聞かせ下されたく、さすれば何かの手段これあるべくと存じ候。めでたくかしこ。

このところより、

御身の親愛なる友、

公爵夫人

『あゝ、何といふ結構な淡白した腰の低い奥方ぢやろ！』とテレサはその手紙の文句を聞いて言つた。『私はそんなお方と一緒に埋められたいものぢや、この村に居る御婦人たちと一緒はいやぢや。あの人たちは、自分は上品な人間ぢやから風も當つてはならんと思うて居ります。そして女王さまのやうに高慢ちきな顔をしてお寺へお參りしますが、その様子と言うたら、まるで百姓の家内なぞ見るのは身の恥ぢやと思うて居るやうな風ですもの！それにまあ、どうでしよ、此の御方さまは、公爵夫人でおありなさるのに、私風情を「友だち」と言うて下されて、私がその奥方と同じ人間でゞもあるやうに扱うて下さるのぢやもの——さぞその奥方はラ・マンチャの一番高いお寺の塔のやうに高い立派なお方ぢやろうなア！そして貴方、稼實は澤山に奥方へ進ぜましよ。こりや見物ぢや不思議ぢやと仰有つて見に來なさる程の大きいのばかり差し上げましよ、さあサン



チカ、この御方をお藥にして差し上げな。此のお馬のお世話をして、それから厩から卵を持つておいで。そして燻肉を澤山切つて、王子さまのやうに御馳走して上げるんぢやよ。此のお方は好い報知を聞かして下さつたのぢやし、それにあの綺麗なお顔に對してもさうする値打はあるわいの。その間に私は一寸一走りして近所の人たちに私たちの仕合せな報知を裾分けして來ませう。牧師のおぢさんや床屋のニコラス親方などは何時もお前の父さんの仲好しであつたし、今でもさうぢやからの。』

『それア私がしませう、お母さん、』とサンチカは言つた、『けれどお母さん、その紐を半分私にお呉れよ、私はあの奥方さまがそれをみんなお母さんへ下さるやうな馬鹿な方ぢやなからうと思ふよ。』

『なあにみんなお前のぢやよ、』とテレサは言つた、『けれどまア二三日はかう私の頸のまはりに掛けさせて置いておくれよ。ほんとにこれを見ると嬉しうなつて來るわいの。』

『貴女もまた、』と小姓は言つた、『此の旅行革嚢の中に入つて居る包みを御覽になつたらお喜びなさるでせう。それは一襲の實に見事な着物でございます。それは總督閣下が唯一度狩りにおでかけになるときに御着用になつたものでございます。それをそつくりサンチカさまへお送りなさい

ますのでございます。』

『總督さまが千年も生きられますやうに、』とサンチカは言つた。『そしてそれを持つて來て下さつたお方も同じやうに。いゝえ若し入り用なら二千年も生きられますやうに。』

この時テレサは手紙を二通持つて家の外へ急いで走つて出た。頸のまはりには珊瑚珠の紐をかけ、恰も羯鼓でもあるかのやうに手紙を叩き鳴らしながら走つて行つた。すると偶然副牧師とサムソン・カラスコーに出逢つた。彼女は踊りあがつて言つた。『さあ私たちは誰ももう貧乏ではありません、ほんとに！私たちは小さな總督になつたですよ！えゝ、一番綺麗な女でも私に克たうとてやつて來るなら來るがよい。叫ましてやるからな、』『一體どうしたんぢやえテレサ・パンザ、』と彼等は言つた。『その氣違ひめいた樣子は何ぢや、してその紙は何ぢや？』

『氣違ひといふのはこれだけのことですよ、』と彼女は言つた、『これは公爵夫人さまからと總督閣下からの御手紙です。それから私の頸にかけて居るのは立派な瑚珊珠です、そして展べ金のエーヴェ・マリア（珠數の中の珠の名と、パターノスター（天主教の珠數の中一日甸の珠をいふ）があるんですよ、そして私は總督夫人なんですよ。』

『いやはや、』と牧師補は言つた、『お前の言ふことは少しも分りやせん、テレザ、お前の樣子も一向合點が行かんよ。』



『さア、方貴がたは自分で見なさるがよい。』とテレサは言つた、そして彼女は手紙を二人に渡した。

牧師補はサムソン・カラスコーに聞えるやうにその手紙を讀みあげた。サムソンと彼はその內容を讀み下すと、驚いた樣子をして互に顏を見合せた。そして得業士は誰が手紙を持つて來たのかと訊いた。テレサはそれに答へて、自分と一緒に家まで來るやうにと彼等に說きすゝめた。さうすれば其の使者である非常に華美やかな若者を見ることもできる、その若者はその外にもつと値打のある贈物を持つて來たのであると言つた。牧師補は彼女の頸から珊瑚珠を取つて何遍も何遍もそれを調べた。そしてその珠の綺麗なことを確かに見て取つたので、更に新しく不思議な思ひに滿たされた。そこで彼は言つた『私が着て居るガウンにかけて言ふが、私は此の手紙や贈物とに就いて何と言ひどう考へて好いのか分らぬ。一方では私はこれらの珊瑚珠の綺麗なことを見もし感じもすることが出來る。然るにまた一方では公爵夫人が椽實を二三十迄つて貰ひたいと手紙の中で言うてござる。』

『出來るならその兩方を照らし合せて見なさるがよい。』とカラスコーは言つた、『まアしかしその御使者を見に行きませう、そして持ち上つて來た此の不思議に就いてそのお使者から聞いて見ま

せう。』

彼等はさうした。テレサは彼等と一緒に歸つた。彼等が行つて見ると小姓は自分の馬の爲に大麥を篩うて居た。又サンチカは彼の食事の爲めに卵と一緒に燒くべき燻肉を薄く刻んで居るのである。その小姓の樣子やその美しい衣裳は彼等二人を大いに喜ばせた。彼等と彼とはたがひに丁寧に挨拶した後、サムソンは自分たちにドン・キホーテやサンチョー・パンザに就いての新しいたよりを聞かしてくれと賴んだ。そして言つた——自分たちはサンチョーと公爵夫人からの手紙を讀んだけれども、まだ惑うて居るので、サンチョーの總督といふことが何ういふ事なのか少しも分らない。又殊に地中海の中の島の全部又は大部分は國王陛下に屬して居るのに、或る島の總督になつたといふことは全くのみこめない話しであると。小姓はそれに答へた、『サンチョー・パンザさまが總督閣下になられたことは何の疑ひもございません。けれどもあの方が支配なさるのが島であるか無いかといふことに就いては、私は何の關係もないのでございます。千以上の住民の居る町であると申すだけで澤山でございます。橡實につきましては、奥方公爵夫人は百姓の女から橡實を送つて下さいとお願ひなさる程に、高慢ぶらぬ傲らぬ御方なのでございます。つひ此間も御近所の方から櫛をお借り申す爲めに使ひをお出しなされたことがございます。これは世間の人々



はよう存じて居ります。アラゴンの御婦人がたはまことに有名ではございましても、カステリアの御婦人のやうに儀式ばるやうなこともなく高漫でもないことは、皆樣もよう御存じのことでございませう。あの御婦人がたは非常に親密に人々をお扱ひなさるのでございます。』

この會話の最中にサンチカは袴の裾へ卵を一杯入れてはいて來た。そして彼女は小姓に言つた、『貴方、私のお父さんは總督になつてから腰袴行はれたものを着て居りますかえ?』

『私は氣がつきませんでした、』と小姓は言つた。『しかしきつと閣下は着て居られるでせう。』

『あゝ! ほんとに!』とサンチカは言つた、『お父さんがきちんと身に合ふ着物を着たお姿はどうでしよ! 私は生れる早々お父さんが腰袴を穿くのを見たいと思うて居つたんですが、可笑しいでせう?』

『目下の樣子では、貴女が生きておいでなさるなら御覽になれるでせう、』と小姓は言つた、『全く總督閣下が二月も今の位地にお留まりなさるなら、緣廣帽子をお冠りになつて道中をなさるでせう。』

牧師補と得業士とは小姓が冗談を言つて居るといふことを十分明かに分つた。しかしながら珊瑚珠の綺麗なことやサンチョーが送つた(テレサは現にそれを彼等に見せた)狩獵用の着物とは彼

等の印象を打ち消した。そして彼等はサンチカの願ひを聞いて笑はずには居られなかつた。がテレサが次のやうに言ふのを聞いては、尚更であつた、『牧師さま、誰かマドリッドかトレドーへ行くやうな事がありましたら、私に締骨のはいつて居る下袴を買うて來るやうに賴んで下されよ、當世流行の上等無類の品をな。本當に〳〵私は精いッぱい夫の總督の名譽になるやうせにやなりません。いゝえ、それを着たら、私は御殿へ行つて、世間の人のやうに馬車を仕立てゝ行きます。總督を夫に持つほどの者は馬車の一臺や二臺は持つて居つてもよいでせうからの。』

『お母さん、何の惡いことがあるもので！』とサンチカは言つた、『明日よりは今日と少しでも早い方がよいのです、世間の人は私がお母さんと一緒に馬車に乘つて居るのを見て、「あのやくざものを見ろ、あの大蒜喰ひの娘を見ろ、まるで女の法皇さまだと言はぬばかりに馬車の中にゆッたりと氣樂に横になつて居やがる！」と言うたて構ひませんぞい。そんな人たちは泥の中を歩いて行くがよい。世界中の陰口言ひはみんな不運になるがよい。「私は溫かうして行きませう、人が笑ふなら笑はせて置け」ですよ。お母さん、さうぢやないかえ？』

『たしかにお前の言ふことは尤もぢやよ。』とテレサは言つた、『そしてこんな仕合せな事を、これの以上の事も、サンチョーさんは私に前から言うてござつたよ。そしてサンチカ、お父さんは私



を伯爵夫人にするまでは止めませんよ。初めがよければ何事も仕合せに行くからの。お前のお父さんが度々言ふのを聞いたやうに（お父さんはお前のお父さんでもあるのぢやから）、「人がお前に若い牝牛を呉れたら、それを受けい。人がお前に國を呉れたら、それを取れい。人が何か好いものを持つて居つてお前に（こゝへおいで、此處へおいで！）と言うたら、それを呑み込んでしまへ」ぢやよ。それがいやならあつちへ行つておやすみ、そしてお前の家の戸を叩いて仕合せと運とが訪ねて來ても返事はせんことぢや！』

『私がちやんと構へて居るのを見て、「あれ犬が麻のズボンを着て威張つて居る、」とか何とか人が言うたて、私は氣にかけるものですかい。』とサンチカは言つた。これを聞いて牧師補は言つた『バンザ家の人はみんな手ん手にお腹に袋一杯ほどの諺を持つて生れて來たのに違ひない。私はどんな時にも場合にも此家の人たちが諺をのべつに言はんのを見たことがない。』

『實際さやうでございます、』と小姓は言つた、『總督閣下サンチョーさまも何か折がある毎に諺を仰有います。そしてその諺の大部分は適切ではございませぬが、それでも面白いものでございます。それで公爵夫人や公爵閣下は非常にその諺をお褒めなさいます。』

『それでは貴方はサンチョーの總督といふことに就いては、殘らず眞實であるとやはり言はれるのですか？』と得業士は言つた、『又實際に公爵夫人がサンチョーに贈物を送り手紙をお書きなされたと言はれるのですか？私たちは此の贈物を手に取つて見、この手紙を讀んで見ても、それが本當ぢやと信ずることが出來ません。何事によらず魔法によつて作られると想像する私たちの友達のあのドン・キホーテ流のものぢやないかと思ふのです。こんな理由で私は貴方が唯幻の使者であるか血肉を具へた人間であるかを見る爲めに、貴方の身體に觸つて感じて見たいと思ひますよ。』

『私の存じて居ります事と申しては、』と小姓は答へた、『私が眞の使者でありますること、サンチョー・パンザさまは正銘の總督でありますこと、私の主人公爵と公爵夫人はこれと同じやうな總督職を授けられることがお出來になりますること、又サンチョー・パンザさまはそこで大層お丈夫に居られると承つたことなどでございます。べて此のうちに何か魔法がありますかありませぬか、それをお定めなさるのは貴方さま方のお仕事でございます。私は堅く誓ひますが、これが私の存じて居りまする殘らずでございます。まだ生きても居りますし私の非常に愛して居りまする私の兩親の命にかけてこの事を申します。』



『それはさうかも知れません、』と得業士は言つた、『しかしデュピタート、アウグスチヌスぢや。』

アウグスチヌスはこれを疑ふ、即ち惡はしいものだの意。

『疑ひたいお方はお疑ひなさい、』と小姓は言つた。『私が貴方がたにお話しましたことは眞實でございます。「油が水の上に浮くやうに眞實は常に虛僞の上に現れる」でせう。「行爲を信ぜよ、言葉は信ずるな、」とも申します。貴方がたのうち何方か私と一緒にいらツしやい、さうすれば耳で信じなさらぬものを目で見られるでございませう。』

『私が行きませう、』とサンチカは言つた、『貴方、私を連れて行つて下さい、貴君の馬の後ろの方へ乘せて。私はお父さんに逢ひたいから喜んで行きますよ。』

『總督のお嬢さまともある方が、』と小姓は言つた、『お一人でお徒歩で御旅行なさつてはいけません。馬車や轅の車にお召しになつて、大勢のお供の者を從へてゞなければいけませんほん。』

『ほんとに、』とサンチカは言つた、『私は馬車の中に居るやうに、牝驢馬に乘つて行けますよ。貴方は私をよつぽど弱い女の子と思うて居られると見えますの！』

『靜かにおしよ、サンチカ。』とテレサは言つた『考へもなしにしやべつて。このお方のおツしやる事は本當の事ぢやよ。「その時相應に振舞へ」といふことがあるぢやないかえ。サンチョーと言

はれて居つた時は「サンチカ」であつたし、總督になれば「御令嬢」と呼ばれるのぢや。私の言ふことは間違うてをるかも知らんけれど。』

『テレサ令夫人は知つて居られるより以上の事を仰有ります。』と小姓は言つた。『さて何か食べるものを頂戴いたしたうございます。私はすぐに參りませう。私は今晩歸るつもりでございますから。』

これを聞いて牧師補が言つた、『さあ私と一緒に來て罪滅ぼしの苦行をしなさい。テレサ令夫人はこんなに貴いお客を歡迎するには品物よりも心持の方を餘計に持つて居りますかの。』

小姓は拒んだ。しかし遂に自分自身の爲めに同意しなければならなかつた。そこで牧師補は非常に喜んで彼を家へつれて行つた、ゆる〳〵とドン・キホーテと其の行爲とに就いて質問する好機會を得ようとして。得業士はテレザの爲めに返事の手紙を書いてやらうと申し出た。けれども彼女は自分の事の中へ彼の立ち入ることを欲しなかつた、何となれば彼女は彼は何か冗談でもしでかしさうに考へたから。そこで彼女は書家であつた若い侍僧に菓子を一つと卵を二つ與へた。それで彼は彼女の爲めに二通の手紙を書いた。一通は彼女の夫に宛て〻、他の一通は公爵夫人に宛て〻、彼女自分の頭から書取らせたのである。それは後の章で見られる如くに此の偉大なる物語



に挿入せられてある最も惡いものではない。

## 第五十一章　サンチョーの政治の進歩に就いて、その他其やうな面白き事柄に就いて。

總督の巡視の夜のあとに晝が來た。その夜賄ひ頭は一晩眠らずに過して、例の變裝した少女の顏や容子やその美しさなどの思ひが一杯になつて居た。然るに家令は、サンチョーが言つたり行つたりした事を、公爵と公爵夫人に報知する爲めの手紙を書くことに殘りの時間を費した。サンチョーの言行には鋭敏と單純とが入り混つて居るので、彼の言葉は彼の行爲ほどに面白味があつた。總督閣下は起き出でた。そして醫師ペドロ・レシオの指圖によつて、人々は朝飯として少しばかりの砂糖漬と四口ばかりの冷水とを彼にすゝめた。サンチョーは喜んでそれを一片の麵麭とも一房の葡萄とも取り換へたであらう。しかし何うにも仕方がないので、少なからぬ心の悲しみと胃の不滿足を覺えながらもそれに從つた。ペドロ・レシオは輕くて上品な食物は才智を活潑にするといふこと、又命令を與へ且つ單に體力のみならず精神力をも使用せねばならぬ責任ある



位地に居る人に取つては、それが最も肝要なものであるといふことを彼に說いた。

この詭辯の力でサンチョーは飢えを堪へしのぶやうにさせられた。そしてその飢餓は、彼が心中總督たることを呪ひ、又自分にそれを與へたところの人をさへ呪つた程に鋭かつた。けれども空腹を抱へて砂糖漬で我慢して彼は今日の裁判を始めようとした。そして彼の前に來た最初のものは、見知らぬ人が家令や他の從者の面前で彼に提出した一つの質問であつた、それは斯うであつた、『閣下、一筋の大きな河が同一の君主の二つの管轄地の間を流れて居りました——閣下どうか宜う御氣を留めさなさるやう願ひます、此の事件は大切ななか〳〵錯雜した事件でございますから。さて此の河の上に一つの橋が架かつて居りました。そして其の一方の袂に斷頭臺と一種の裁判所とがございました。此處には普通四人の裁判官が坐つて居りまして、その河の橋の君主が制定した法律を司どつて居りました。そしてそれはかういふ趣意でございます、「若し人が此方から對岸へ此の橋を渡つて行くならば、何處へ行くのか何の目的で行くのかを誓ひをかけて言はねばならぬ。若し眞實に誓つたならば彼は通過することを許されされる。」しかし僞りの誓ひをかけたならば、何の赦免もなく、その爲めに此處に建つてゐる斷頭臺にかけて死刑に處せられるであらう。」といふ法律に嚴重な處罰とは知れ渡つて居りましたが、多くの人々は渡りました。しかし其

の申開きによつて、彼等ほ眞實の事を語つて居るのだといふことを直ぐに見ることは容易うございました。それで裁判官は彼等を通過させて居りました。ところが、偶然一人の男が參りまして、裁判官たちが彼の申開きを聞かうとしますると、彼は誓ひにかけて言ひました、私は此處に建つて居りまするその斷頭臺の上で死なうと思ふのでございます、その外には何の用もないのでございますと。そこで裁判官たちはこの誓ひに關して評議を開きました。そして彼等は言ひました、「若し吾々がこの男を自由に通過させたら彼は虚僞を誓つたことになる、で法律によつて彼は死なねばならぬ。が若し吾々が彼を絞刑に處するとしたら、彼はその斷頭臺の上で死なうと思つて居るのであると誓つて居るから、又それでその誓ひは眞實であるのだから、同じ法律によつて彼は自由に赦されねばならぬ。」總督閣下、これを閣下にお伺ひ申したうございます、裁判官がこの男を如何取り計らふべきでございませうか？彼等裁判官は今なほ疑ひと當惑の中にをるのでございます。閣下の鋭く高き智慧のことを傳へ聞きまして、閣下が彼等の爲めに、此の入り組んだ途方に暮れさせる事件に對して御意見を下さるやうに嘆願して參れと申して、彼等は態々私を此處へ送りましたのでございます』

これに對してサンチョーは答へた、『實際お前をわざ〳〵私の許へよこした裁判官たちは、そんな面倒をせずに置いたがよかつたかもしれぬ。何故なら私は鋭さよりも鈍さを餘計に持つて居るからの。しかし、その事件をもう一度くり返してくれい、私がよう呑み込むやうに。さうしたら私は大方肝心のところをつかむ事が出來るぢやらう。』



質問者は前に言つた事を繰り返して何遍も言つた。するとサンチョーは言つた、『私はその事件は卽座に解決が出來るやうに思ふ。つまり斯うするのぢや。その人は斷頭臺の上で死なうと思つとると誓うて居る、然るにその斷頭臺の上で死ぬとしても、その人は眞實の誓ひをかけたのぢやから、制定された法律に依つては自由に行つて橋を渡ることが出來るのぢや。が若し裁判官たちがその人を絞罪に處分せなんだら、その人は虚僞の誓をかけたことになる。そこで同一の法律によつて絞刑に處してよいものぢや。』

『それは總督閣下のおつしやる通りでございます、』とその使者は言つた。『そして此の事件の滿足な解決に就きましては、この上に願ふことも躊躇すべき事も殘つては居りませぬ。』

『よろしい、それでは、』とサンチョーは言つた、『この人に就いては裁判官たちは其の眞實に誓つた方の部分をして橋を渡らせ、そして僞つた方の部分を絞刑に處するのぢや。かういふ方法で初めて法律の條文は十分に當てはめられるぢやらう。』

『ではございますが、それでは、總督閣下、』と質問者は答へた、『その人は二つの部分に分けられねばなりません。してその人が分けられましたならば、勿論その人は死にませう。そしてさうしますと法律の命令は何も成就されますまい。然るに法律に適合することが絶對に必要なのでございます。』

『善う聽きなさい、お前さん、』とサンチョーは言つた。『私が鈍物であるにせよないにせよ、その通行人に對しては、生きて行くと同じやうに死ぬことにも理由があり、又橋を渡る理由もあるのぢや。何故ならば、若しその男を眞實が救ふならば虚僞は同樣に罪するからぢや。さてさういふ次第であるから、私の意見を言うて見ればかうぢや、その男を罪しようといふ議論と赦さうといふ議論とが丁度きツちりと平均して居る故、裁判官たちは彼を自由に通らせてよい。どんな時にも惡を爲すより善を爲す方が賞讃すべきことであるからぢやと、お前を使ひによこされた裁判官がたへさう返事をしなさい。私が署名する方法を知つて居るなら、これには私の署名をするんぢやが。私が今この事件に就いて言うた事は私の頭から出たものぢやない。私がこの島の總督となつて出發しようとする前の晩に、私の主人のドン・キホーテどのが私に與へられた、訓戒のうちの一つなのぢや。それが私の頭に浮んで來たのぢや。それは訴訟を裁判するに當つて何か疑はしいことのある時には、慈悲によるようにと仰せられた。私が今その言葉を思ひ出したのも神の御意思ぢや。何故といふに、この言葉はこの事件の爲めに作られたやうによう當てはまるからぢや。』



『御尤もでございます、』と家令は言つた、『私はラセデモニア人へ法律を與へましたライカルガスその人も、大パンザさまがお與へなさいましたより立派な決斷を申し渡すことはきつと出來なんだでもらうと考へます。朝の聽聞はこれで切り上げませう、そして總督閣下が御滿足なさるまで御晝餐を差上げ申すやうに取り計らひませう。』

『それは私の望むところぢや——卽ち公平な扱ひをすることぢや。』とサンチョーは言つた、『まづ食事をさせてくれ、それから私に訴訟でも質問でも雨のやうに降らすがよい。私は瞬く間に埒をあけませう。』

家令はその約束を守つた。斯やうに賢明な總督を餓る死なすことは、彼の良心に反くやうに思はれたのである。われて彼はその夜サンチョーを擔ぐやうに命ぜられてあつた最後の冗談を演じ出さうと心構へて居つたからである。

さてドクトル・ティルテアフエラの規則と警句とに反いて、サンチョーは其の日健か晝食を認

めた後、卓布（テーブルクロース）を片づけて居るところへ、たま〳〵急使がドン・キホーテから總督への手紙を持つて到着した。サンチョーは祕書官に讀んで聞かせいと命じた。そして若しその中に祕密を要する事がないなら、それを聲高く讀み上げいと言つた。祕書官は命令どほりにしてその手紙の内容を走り讀みしてから言つた、『聲高に讀みましても差支なからうかと存じます。ドン・キホーテさまが閣下へお書きなさいましたものは、黄金の文字で印刷し又は書かるべき程に立派なものでございます。してそれはかうでございます。』

ラ・マンチヤのドン・キホーテがバラタリア島の總督、

サンチョー・パンザに宛たる手紙。

拙者貴殿の暗愚失錯の評を聞かんことを預期し居り候處、却つて貴殿の聰明賢察の噂を耳にし、大慶この事に候。拙者はこれに對して陋巷より貧者を助け起し愚者を賢者となし能ふ天帝に對し特に感謝を表すべく候。傳承するところによれば貴殿は人間なるかの如く政務を執られ、又獸類なるかの如き人なりとのことに有之、貴殿行動の謙讓は甚だしきものと申候。しかしながら拙者は役目の權威の爲めにはその謙讓を拒否被成候事往々にして適當且つ必要なることに留



意あらんこと希望致し候。何となれば重大なる義務を附與せられたる人に似つかはしき正裝は、其の役目の要求するが如きものたるべく、決してその人自身の卑き趣味の選むものによつて割り出さるべきものには無之候。正裝なさるべし。棒もよく裝へば棒とは見えぬものに候。拙者は貴殿に美服を着、小珠玉の飾り物をつけよと申すにはあらず、又裁判官なるが故に貴殿は軍人のやうに裝ふべしと申すにもあらず、唯貴殿の役目が要求する衣服を纏ふべし、而して同時に清潔にして、目に快きものを用ふべしと申すなり。貴殿が支配する人民の好意を得んが爲めに取り分けて爲さねばならぬ二つの事あり。一つは總ての人に禮儀あることにて（こは拙者が以前貴殿に告げたり）他の一つは食物を豐富ならしめんことに注意することなり、何となれば飢渇と物價騰貴とは貧民の心を苦しむると最も甚だしきものなればなり。多くの布告をなすこと無用たるべく候。而して之を出す時は善良なる布告たらんことに意を用ふること肝要に候。就中その布告は遵奉せられ實行せられんことに意を致すべく候。遵奉せられざる布告は存在せざるにひとしく候。のみならず遵奉せられざる布告は、その布告を制定すべき智慧と權威とを有する主權者が、該布告を實施する力を有せずとの觀念を人に抱かしむるに有力なるものに候。脅迫して實施せられざる法律は丸太の如きものにて、又譬に申す蛙の王が初めのうちこそ蛙どもを驚かしたれ、や

がて間もなく彼等に輕蔑せられ、背中に上らるゝに至れると同樣の儀と相成申すべく候。美德には父たるべく、惡德には繼父たれ、常に嚴格ならず又常に寬大ならず、此の兩極端の間なる中道を守れ、智慧の志すところはそこにあればなり。牢獄、屠殺場、市場を視察すべし。總督が臨場することは斯やうの場所には非常に重要なることなればなり。斯くすることは、速に放免せらるべき望みある囚徒等の慰めとなり、又肉屋の恐るゝところとなり、それが爲めに彼等は正しき量りをなすやうになるべし。又斯くすることは同じ理由によつて市場の物貰り女の恐怖する所となる。又貴殿は貪慾（かりに然りとして、拙者は勿論信ぜざれども）なること、婦人の追ひかけ手なると、大食家なることを、人に知らしむる勿れ、如何となれば人民又は貴殿と關係ある者どもが、貴殿の特殊なる弱點を知り得し以上は、彼等はその砲列をその部分へと正面に向けて攻擊し、遂に彼等は貴殿を破滅のどん底になげ倒さんこと必定なるが故に御座候。この地より貴殿が領地へ出發する以前に拙者が貴殿に與へし忠告又は訓戒を考一考し、再考三考、熟慮熟考せられんことを望ましく候。若しあの訓誡に從ひなば、貴殿は一步毎に總督を妨ぐる困難と難儀とを貴殿の爲めに輕減するところの救助の手近に有ることを、あの訓戒のうちに發見なさるべく候。貴殿の恩主公爵夫妻に音信怠るまじく、貴殿が感謝の程を示さるゝが宜しかるべく候。忘恩は



傲慢の娘にして、吾々が知れる最大の罪惡の一つに候。己に善を與へし人々に對して恩を忘れぬ者は、己に多くの幸福を與へしところの又現に與へつゝあるところの神に對しても斯くのごとくあるべしてふ事を示すものに候。

我が公爵夫人は一使者を派して貴殿の衣服一着と他の贈物とを貴殿の夫人テレサ・パンザへ送られ申し候、吾々は今か〳〵とその返事を待ち受け居り申し候。拙者は思ひも寄らず我が身にふりかゝりし或る搔き傷によつて少しく不快を覺え居り申し候。我が鼻に取つては餘り利益にならぬ搔き傷に候。さりながらそは物の數にも御座なく候。故如何にとなればよし、拙者を虐待する魔法使ひあるにせよ、他方には又拙者を防禦するところの魔法使ひもこれあるべき筈に候へばなり。貴殿と共にある家令は、果して貴殿が疑ひを抱きし如く、トリファルディの演出に於て一役を演ぜしものなるや否や知らまほしく候。又道程も極めて近きことに候へば、貴殿の身の上に起りし總ての事を逐一御報導下されたく候。拙者は怠惰なる生活を送らんが爲めに生れ出でしものにあらざれば、現在暮しつゝある如き懶惰なる生活は一寸も早く切り上げん所存に候。拙者の身の上に起りし或る一事によつて、拙者は公爵並びに公爵夫人の恩寵を失ふに至るべしと存じ居り候。併し乍ら拙者はそれを哀しむと雖も決して心を痛めず、畢竟拙者は彼等の樂

しみよりも寧ろ我が本職に從事せざるべからざるが故に候。これアミカス・プラトー・セド、マジス、アミカ、エリタス（プレートーは我が朋友なり、然れども眞理尤も我が朋友なり）といふ諺に從うてのことに候。拙者は貴殿が總督となりて以來ラテン語を學びしならんと推察いたし候故此のラテンの諺を引用いたし候。さらばなり。神が貴殿をいかなる人の憐憫の目的物ともならしめざらんことを。

貴殿の友

ラ・マンチヤのドン・キホーテ

サンチョーは非常に注意してその手紙に耳傾けてゐた。その手紙はそれを聞いた總ての人々によつて賞讃せられ、聰明であると考へられた。サンチョーは其の時テーブルから立ち上つて、彼の秘書官を呼び、一緒に彼の部屋に閉ぢ籠つて、少しも遲滯することなく直ちに主人ドン・キホーテへ返事を出さうと決心した。そこで彼は秘書官に、彼が話した事を增しも減らしもせず、書き下すやうにと命じた。秘書官は命のまゝにした。その返答は次のやうなものであつた——

ラ・マンチヤのドン・キホーテへ送りしサンチョー・パンザの手紙。



政務の切迫は頭を掻き爪を切る暇だに有せざる程に甚だしく御座候。されば小生の爪は延びるがまゝに候——神よ、これに對する良藥を送り給へ。小生が心の主君よ、小生が今まで此の總督府にあつて、よかれ惡しかれ、遭遇せし事を一度も御報導申し上げざりしを御訝り遊ばされるやう、斯くは一筆申し上候。小生總督の職に就きてよりは、その昔二人森林原野をさまよひ廻りし折よりも以上の饑餓に苦しめられつゝ暮し居り申し候。

我が公爵は先日わざ〳〵一書賜はり、二三の探偵小生を殺戮せん爲め此の島へ渡來せし由御警報下され候。しかしながら今日に至るまで小生は左樣の者を一向に見掛け申さず候、唯こゝに、此の島の總督として赴任する總てのものを殺すことによつて此の町より月給を受取り居る一人の醫師が有之候。彼は名をドクトル・ペドロ・レシオと呼び、ティルテアフエラの出身にて候。されば貴下は手を下して小生を殺さんとする者の名前を御了解の事と存じ奉り候。此の醫師は自らたとひ病人ありとも之れを治療せずと公言いたし、却つて患者の來訪を防ぎ、彼が用ふる藥用品としては唯一の食物の制限にて、病人が骨と皮ばかりになる迄食物を限定することに御座候。その有樣は恰も痩することは熱病より惡しからずとなすものゝ如くに候。

要するに彼は饑餓を以て小生を殺しつゝあるものに候。而して小生は窘迫の爲めに一歩々々

死に近づきつゝあるものに候。小生はあたゝかき食物冷たき飲料を得、羽蒲團の上の麻製の敷布の上に樂々と身を横たへんが爲めに此の總督府へ參ること、思ひ居りしに、何事ぞ恰も隱者の如く難行苦行をなさんが爲めに來りしならんとは。然り而して小生それを心より好んで爲すにあらざれば、遂には惡魔が小生の命を奪ひ去るならんかと、毎日疑懼の念に攻められ居る次第に有之候。

小生これ迄は租稅を取扱ひ賄賂を取りしこと御座なく候へば、これを如何に考ふべきかを存じ申さず候。如何となれば此處の人々の申すを聞けば、此の島に來る總督は此處に入り來る前に市の人々より與へられ貸し渡されたる金を澤山所持し居る由、又これは單に此處のみに限らず總督府に入る總ての者には共通の習慣なる由に聞き及び申し候。

昨夜この島巡視中、男裝せる一人の美しき少女に出逢ひ申し候。而して少女の弟は女の如く裝ひ居り候ひき。賄頭はこの少女に懸想し、心の中にこれこそ我が妻なれと選び定め候由彼は申し候。又小生はその少年をわが娘の婿がねにと選び定めし次第に候。今日小生等は二人の父親に小生等の意思を發表せんと存じ候。その父親と申すはディエゴ・デ・ラ・ラーナと申す紳士にて、貴下の好まゝ如きキリスト信者に御座候。



貴下が御忠告下され候やう、市場を見廻り申し候に、昨日新しき棟實を賣りつゝありし一人の露店商人を見出し申し候。彼女はその新しき荷の中に古くして空虛になり腐れる實を一荷差し加へて商ひ居りしこと判明いたし候。小生は慈善學校の小兒等の爲めにそれを全部沒收いたし候。その小兒等はその新舊をよく區別することを知り居るならんと存じ候。而して小生は彼女に二週間この市場に立ち入るべからずと申し渡し候。人々は小生が立派に振舞ひたりと申し候。此の都市にては市場の女よりも惡しきものはあらず、彼等は厚顏にして、良心なく、しかも破廉恥なりとは、此地にて一般の評判に御座候。小生も他の町にて彼等を實見せしところより察して、しか信ぜんと欲するものに御座候。

公爵夫人の君が愚妻テレサ・パンザに御玉章を賜はり、剩へ過分の御贈物を下され候こと貴下より承り欣喜この事に御座候。時到らば感謝の意を表したく日夜心がけ申すべく候。何卒小生の爲めに公爵夫人の御手へ接吻なし下されたく、又夫人が決して孔ある袋へ物を投げ入れられしにあらざることは、やがて分明いたすべしと、小生申せし由、貴下より夫人へ宜しく御傳言下されたく候。小生は貴下が公爵閣下並びに公爵夫人と仲たがひなされ候やうの事は、心より願はしからず存じ候。申す迄もなく貴下がお二方と御不和にならせられ候場合には、禍

の小生に下るは火を見るよりも明かに御座候。のみならず貴下は小生に謝恩の念厚かるべきやう御忠告下しおかれながら、貴下にあれほどの御親切をお示しなされし公爵御夫妻に對して感情を害され候こと然るべからずと存じ奉り候。

御掻き傷の事に至つては小生の理解し能はざるところに候。されどそは惡意ある魔法使ひがいつもながら貴下に爲しつゝある危害の一つに相違なかるべくと推察仕り候。拜顏の折には小生萬事了解いたすべくと存じ候。小生は貴下に何物かお送り申し上げたく存じ候。されど此の島内にては人々が膀胱もて造る或る甚だ奇妙なる洗腸管の外には、何をお送り申してよきやら小生に一向見當つき兼ね申し候。併し乍ら小生現職にあること長く續かば兎も角も送り參らすべき何物かを發見するならんと存じ候。若し愚妻テレサ。バンザより小生へ宛て消息これあり候節は、甚だ恐縮には候へども郵稅お拂ひ下され小生方へ御廻送御願ひ申しあげ候。小生家鄕を思ふ心切にて、妻子は如何に暮し居るやらんと、願ふは其の動靜を聞かんことに御座候。さて神の貴下を惡意ある魔法使ひの手より救ひ給はんことを、又この總督職より小生に幸福と平和を下し給はんことを。さはれ小生はそを疑ふものに御座候。その故はドクトル・ペドロ・レシオが小生を待遇する方法よりして、小生は此の職と共にわが生命にも告別せんことを預期いたし居



る故に御座候。頓首。

貴下の僕

總督、サンチョー・バンザ

秘書官はその手紙を封じた、そして直ぐさま急使を遣はした。サンチョーに對して冗談を行ひつゝあつた人々は、相談をこらして、如何にして此の總督府から彼を追放すべきかを取り極めた。サンチョーは其の日の午後、彼が島だと想像して居つたこの土地の善い行政に關する或る法令を草することに費した。そして彼は此の國家に於いては資本なき商人は居つてはならぬ事、人はその欲する如何なる場所からでも酒を輸入し得ること、少くともし彼等がそれが何處から來たかを公言さへするならば輸入し得ること、それ故に値段はその品質、その評判、一般の評價等によつて定められなければならぬと。それから酒に水を割つた者、名を變じたものは、その爲めに生命を失はねばならぬなどを決めた。彼は靴、長靴、靴下、特に靴の値段を引き下げた。これらの値段は餘りに高くなつて行くやうに思はれたからである。彼は從僕の給料に對しては一定の割合を立てた。それは無鐵砲に法外になりつゝあつたのである。彼は晝でも夜でも、淫蕩なみだらな

歌をうたふ者に極端に重い罰金を課した。また如何なる盲人といへども、それが眞實であるといふ確實な證據を出し得るにあらざれば、詩の中にあるいかなる奇蹟に就いても歌ふべからずと命じた。彼は貧乏人の檢察官を設定し創設した。それは貧乏人を惱ます爲めではなく、唯彼等を檢査して、彼等が本當に貧乏人であるかどうかを見る爲めであつた。嚴丈な泥棒や又はのんだくれなどがつくり裝つた跛足を引きずり、嘘の傷などの假面をかぶつてぶらつき廻る者が多いからである。一言にして言へば、彼は非常に多くの善良な法則を作つたのである、それは今日まで其處に保存せられて、そして「大總督サンチョー・バンザの憲法」と呼ばれて居るのである。



## 第五十二章

には第二の苦しみ惱める侍女、又の名ドーニヤ・ロドリグェズと呼ばるゝ者の冒險が記されてある。

シード・ハメットは斯う逃べて居る、ドン・キホーテは今やその掻き傷が癒つたので、彼が此の城中で送つてゐる生活は彼が信奉してゐる騎士道の制度と全く兩立しないといふことを感じた。そこで彼はサラゴッサへ向つて出發することを許して呉れるやうに、公爵夫人に願はうと決心した。祝祭の時が段々近づいて來たので、彼は此の種の祝祭に於て褒賞として與へる一着の甲冑を得ようと望んだのである。然るに或る日公爵と公爵夫人と一緒に食卓に就いたので、彼は丁度今こそ自分の決心を實行して公爵夫妻の許可を得ようと心の中に待ち構へて居ると、見よ、突然大廣間の扉をあけて、それは後で明かになつたのだが、二人の婦人が入つて來た。彼等は頭から足まで喪服を纏ひ、彼等の一人はドン・キホーテに近づいて來て、彼の足下へ長々と身を投げ出し、その唇を彼の足に押しつけ、そして哀れな、深い、悲しげな呻吟を洩した。その聲を聞きその

樣子を見たすべての人々は、當惑して爲すところを知らなかつた。公爵と公爵夫人とは、これは誰か家來の者がドン・キホーテを慰み物にしようとしての冗談に違ひあるまいと想像したけれども、その女が溜息をつき、悲しみ、泣くその風が餘りに眞面目なので、見てゐたものは途方に暮れ不安を感じ出した。遂にドン・キホーテは同情の念に動かされ、その婦人を立ち上らせ、その涙に滿ちた顏から覆ひをはづしマントルを脫がせた。その女は何人も豫想することの出來なかつたものを露はし示した、といふのは彼女はこの邸の侍女ドーニヤ・ロドリグェスの顏を露はしたからである。も一人の喪服を着た女性は、有福な農夫の息子に弄ばれた彼女の娘であつた。彼女を知つて居た總ての人は驚きを以て滿たされた。そして公爵と公爵夫人の驚きは誰よりも大きかつた。公爵夫妻は彼女が薄馬鹿で弱い女であるとは考へて居たが、氣違ひじみた惡戲が出來ようとは考へなかつたからである。ドーニヤ・ロドリグェズは、遂に彼女の主人と女主人の方へ向き直つて二人へ言つた、『旦那さま奥さま、私が一寸の間このお方にお話し申すことをお許し願ひたうございます。あの大膽な腹黒い土百姓の爲に罹つた災難から首尾よう逃れ出ますには、左樣致しますことが必要なのでございます。』

公爵は、少なくとも私は彼女の願ひを許す、そして彼女の好きなだけ話しても宜しいと言つた。



彼女は其の時、ドン・キホーテの方へ向き直り、彼に話しかけて言つた、『お勇ましい騎士さま、二三日前に私は貴方さまに、私の可愛い可愛い娘、此處に貴方さまのお前に居りまする不仕合せな娘が、罪深い百姓に不法な所行をされ棄てられたことをお話し申し上げました。さうして貴方さまは娘の味方をして下さいまして、娘が受けた不正を正して下さるやうに御約束下さいました。けれども唯今お伺ひ申しますれば、貴方さまは神さまが下さる立派な冒險をお求めなされて此のお城から御出發なさるさうでございますが、それで私はお願ひがあるのでございます。貴方さまが旅立ちなさる前に、あの片意地な田舍者に決鬪を申し込んで下さいまして、あの男が私の娘を唆かさぬ前に娘の夫になるといひましたる其の約束を履行して、是非とも私の娘と結婚しますやうにお力そへを願ひます。公爵さまが私の爲めに正義を行うて下さるのを待ちますのは、丁度檢の樹から梨を求めるやうなものでございます。さういふ譯でございますから、私は貴方さまに内證でお話し申し上げたのでございます。何卒神さまが貴方さまに御健康をお授け下さいますやうに、そして私たちをお見棄て下さいませんやうに。』

これらの言葉に對してドン・キホーテは非常に嚴肅にもの〳〵しく答へた、『尊ぶべき侍女どのよ、貴女の涙を止めなさい、寧ろその涙を乾かしなさい。そして貴女の溜息を控へなさい。私は

貴女の娘さんの寃を雪ぐことは引き受けます。お娘さんはさう容易く戀人の約束を信じなさらん方が宜しかつたのです、約束といふものは兎角急いで出來て至極ゆる〳〵と行はれがちのものです。それでは公爵閣下の御許しをもちまして、私は早速その不人情な若者を探して參りませう。そして若し彼がその約束した言葉を守ることを拒みましたなら、彼を見出し次第決闘を申し込んで彼を斬殺しませう。私の職務の重な目的は、謙遜る者を助け傲慢な者を懲らすことですから。』

『貴方は』と公爵は言つた、『この侍女が欺き愬へたその田舍者をお探しになる必要はありません。又彼に決闘を申し込むことに就いても私の許可を得る必要はありません。私は彼に正當の決闘が申し込まれたものと認めます。そして彼が決闘の申し込みを知るやうにしてやりませう。そして彼がそれを受けて、その答へをする爲めに彼身づから私のこの城へ參るやうにさせます。私は斯やうな試みに通例適當に守らるべき條件を總て注意しまして、立派な試合場をお二人に提供しませう、あらゆる縉紳の方々が、其の主權の爲すべく限られてある範圍内で、戰士に自由な試合場を提供するやうに、そして兩方の正義といふものを注意しませう。』

『それではその保證と閣下の立派な許可をもちまして、』とドン・キホーテは言つた、『拙者は是に



由つて此の度は貴族の出身たる拙者の特權を抛ちませう、そしてこの不正な賤しい身分の者と同等の位地に拙者の身を置きませう。彼と拙者とを平等にしまして、彼が拙者と試合することを許してやりませう。それで、もとは無垢の處女であつたが今は彼の失行の爲めに何でもなくなつた此の哀れな少女との約束を破つたその惡行の言ひ譯として、よし出席しませんでも、拙者は彼に決闘を申し込み彼に戰ひを挑みます。そして彼女の正式の夫となると言つたその約束を實行せよ、さうでなければ命がけで議論をせいと申します、』

かう言つて彼は手袋を引き抜き、それを廣間の眞中へ投げやつた。すると公爵は、彼が前に言つたやうに、自分は自分の家來の名に於いて此の決闘の申し込みを受取つた、と言ひながら、それを拾ひ上げた。そして時としてはこれから六日間、場所としては城内の中庭、そして武器としては騎士の慣例のもの、槍と楯と甲冑の一と揃ひ、そして其の他の附屬物一切を用意すること、但し瞞着手段や策略やいろ〳〵な種類の呪ひを禁じ、試合場の裁判官によつて檢査され通過されることを定めた。『しかし先づ第一に、』と彼は言つた、『此の尊むべき侍女と卑しむべき少女とはドン・キホーテ殿の御手に正義に對する要求をお任せすることが必要ぢや。何故と言うてさうしなければ何にもすることが出來ぬのぢや、又その決闘の申し込みも正當な結果に取り運ぶことが出來

ぬのぢや。』

『それはお任せいたしまする。』と侍女は答へた。

『私も、』と彼女の娘がつけ加へた。涙に濡れて、恥しさときまり悪さに消え入るやうに。

此の申し立てがなされ、公爵はこの事件に於いて爲すべき事を心に定めたので、喪服を着た婦人たちは退いた。公爵夫人はこれから後は彼等を公爵家の召使として取扱はずに、正義を要求する爲めに此の邸に來た婦人の冒險家として待遇せよと命令を下した。そこで家來どもは彼等の爲めに一室を用意した、そして客人を接待するやうにもてなした。それで他の召使女どもは大いに驚いた。彼等はドーニヤ・ロドリグェズと彼女の不仕合せな娘との愚かしさと鐵面皮しさの止まるところを知らなかつたのである。

さて、この饗宴の樂しみを完全にし又この食事を滿足に終らせる爲めに、見よ、總督サンチョーの妻テレサ・パンザに手紙と贈物とを持つて行つた小姓が、廣間の中へと入つて來た。公爵と公爵夫人とは彼を見て大いに喜ばれた。そして彼の旅の結果を知らうと切望せられた。しかし彼等が彼に尋ねると、その小姓は斯やうに大勢の前では申し上げかねまする、又一口には話し切れるものではございませぬと答へて、どうか都合の好い時が參りますまでお待ちを願ひます、それまでの處先づこの手紙を御覽なされてお慰み遊ばしませと言つて、手紙を取り出してそれを公爵夫人の手に置いた。一つの表書には「住所不明、公爵夫人何の某さまへ」とあり、も一つには「バラタリアの島の總督、わが夫サンチョー・パンザさまへ、神よ願はくば妾より長く榮えしめたまへ」とあつた、諺にも言ふやうに、公爵夫人がその手紙を讀み終るまでは、公爵夫人の麵麭は燒かれなかつたであらう。それを夫人自身は讀み通して、公爵その他の此の場に居合せた人々の爲めに聲高に讀んでも差し支へないと見て、夫人は次のやうに讀み上げた。



## テレサ・パンザより公爵夫人へ。

奥方樣より賜はりし御玉章、なつかしさの餘り、いと〳〵嬉しう拜しまゐらせ候。一紐の珊瑚珠はげに美事にて、わが夫の獵衣一着も至極結構なる品、何れ劣らずと存じまゐらせ候。奥方樣がわが夫サンチョーを總督に任命遊ばされしことは全村こそつて大喜びにござ候、されど何人もそれを信じ申さず、わけても牧師補と床屋のニコラス親方、得業士のサムソン・カラスコーなど申す人々は頭より疑ふ有樣に候。されど妾はそれらの事は氣にも留申さず、事實が眞實な

る上は、話が何と申さうと差支へなく候。とは申すものゝ、心の底を打ちあけ申し上ぐれば、若し珊瑚珠と獵衣とをお送り下され候はずば、妾もそれを信じ申さゞりし事と存じ申し候。この村にてはわが夫を愚者と思はぬはなき程にて、山羊の群を見張ることを除いては、如何なる總督が彼に似合ひ候や想像することも叶はずと申し居り候。何事も神樣の御心にあれば、必要に迫れるを見たまはゞわが夫を導き指圖し給ふやうにと祈り申し候。妾は奥方樣のお許しを得て、早速花やかなる暮しをいたし、馬車の中にゆたかに身を横たへて總督府へ參り申すべく候。かくして妾を羨み居り候世間の人の眼を見張らせたく御座候。それ故金子少々送りくれ候やう、また相當澤山に送りくれ候やう奥方樣よりサンチョーへ御命じ下されたく願ひ上げ申し候。宮中は諸式高にて、麪包一切れ一リール、肉一磅三十マラヴェディス（スペイン往時の小貨幣）といふ驚くべき値段の由。若しまたサンチョーが當方より參ることを望まぬ節は、早速その旨お知らせ下さるやうお指圖くだされたく、妾は參りたさの一念より既に浮足に相なり居り申し候。若し妾と妾の娘とが美々しく扮裝ち嚴かに宮中へ參り候はゞ、妾の夫は、妾が彼によりて有名に相成り候よりも、妾の爲めに一層ひろく世間に知らるゝならん、何故ならば多くの人々が「あの馬車の中の婦人は誰にや？」と問はゞ、その時妾の召使は「バラタリア島の總督閣下サンチョー・パンザ殿の奥方と御令嬢なり」と答ふべく、これによりてサンチョー殿は一層有名になり給はん、と妾の友だちや近所の人々など妾に語られ候。げに斯くしてサンチョーは有名に相なり候はん、又妾も尊敬せられ候はん。かくて「何事もローマまで」も傳はり候はん。今年わが村にて人々穆實を拾ひ集めざりしことは腹立たしきが中にも腹立たしき限りに御座候。そはとまれ妾は奥方さまへ半ペック（一ペックは五升四勺強）程御高覽にそなへ申し候。まゝ何卒御笑納下されたく願ひあげ候。これは妾が林にわけ入りて拾ひ集め、一粒選りに選り取りしものに御座候。これより大きなのが見當らざりしは口惜しく候。妾はこれが駝鳥の卵ほどにも大きからばと思ひ候。



奥方さまにはお忘れなく折々のお便り御願ひ申しあげ候。妾も御返事おこたるまじく候。妾の樣子、當地の樣子など聞えあげまゐらすべく候。妾は遙の此方にて奥方さまの御幸福にわたらせられ候やう、又妾をお忘れこれなきやう祈りあげまゐらせ候。

妾の娘サンチャ及び妾の息子も奥方さまのお目にかゝり候ことを切に望みをり申し候。

娘は文かき送りまゐらすよりも奥方さまのお手に接吻しまゐらせ候。

かしこ

御めしつかひ

總ての人はテレサ・バンザの手紙を聞いて大いに興に入つた。別して公爵と公爵夫人とはさうであつた。公爵夫人は總督サンチョー宛に來た手紙は一層面白からうと想像して、その手紙の封を開いても宜しいかとドン・キホーテの意見を尋ねた。ドン・キホーテは公爵夫妻を滿足さす爲めに、それを開封しませうと言つた。そしてその言葉どほりにした。その手紙は次のやうに書かれてあつた。

夫サンチョー・パンザに宛たテレサ・パンザの手紙。

いとしきサンチョー殿、お手紙拜しまゐらせ候。妾は餘りの嬉しさに今一歩にて氣も狂はんかと思ひし程に候、こは天主教徒として誓言眞實に御座候。妾がはじめてお前さまが總督になられしことを聞き及び候ときは、喜ばしさのあまりに此のまゝ往生するにてはなきかとさへ思ひ申し候。お前さまも御承知のことにて候が、俄の悦びは大いなる悲しみと等しく人を



して死に到らしむとは世の人の申すところに候。娘サンチカはと申せば、嬉しさの餘り涙の頬を下るを覺えざる程にござ候ひき。妾は目の前にお送り下されし獵衣あり、頸のまはりには公爵夫人より頂戴せし珊瑚珠あり、手には御手紙を持ち、側にはお使の方立ち居り候にも拘らず、妾が見且つ手に觸れ候物はすべて夢にはあらずやと、眞實全く思ひ候ことに御座候。まことに一個の山羊飼ひ男が島の總督となるべしとは、誰か思ひ及び候ふべき？わが母親が常に「人は多くの事を見る爲めには長生をせねばならぬ」とお言ひなされしことはお前さま御存知のことに候。妾は若しこの上ながらへ候はゝこの上に多くのものを見るべしと思ひ候まゝその言葉を申し上げ候。妾はお前さまが收稅受負人又は收入取立人となられ候を見るまで止まらんとは思はず候、彼等は、惡魔がその役目を惡用する者を奪ひ去り候ても、やはり金を造り取扱ふところの役人に候。公爵夫人は妾が宮中に行かんと願ふ由をお前さまにお話しなさるべく候。その事をとくとお考へ下され、お前さまの御考へおきかせ下されたく候。妾はお前さまの名譽になるやういたし申すべく候。

牧師補も。床屋の親方も、得業士も、坊守さへも、お前さまが總督なることを信じ申さず、皆これはお前さまの御主人ドン・キホーテさまについてをるいろ〳〵の事のやうに、幻想か魔法使ひ

の業ならんと言ひ合ひ居り候。サムソンはお前さまを捜索に出かけ、お前さまの頭より總督を驅り出し、ドン・キホーテさまの頭蓋骨よりは狂氣を追ひ拂はねばならぬと申し居り候。妾は唯笑うて、珊瑚珠の紐を眺め、お前さまの獵衣より娘の爲めに仕立て直さうと思ひをる着物のことを考へ申し候。妾は公爵夫人へ橡實を少しお送り申しあげ候、それが皆黄金ならましかばと願ひ申し候。その島にて眞珠が流行いたし居り候はゝその紐五六本御送り下されたく願上候。こゝにわが村の珍聞ござ候、ラ・ベルーエカはその娘をやくざ繪かきへめあはせ申し候。その繪かきは何か儲けのある物を描かんとて當村へ參り候。村會にては此の公會堂の扉に皇帝陛下の御紋章を描くやうに命じ候。彼は二デュカットを要求いたし候。それを村では前金にて支拂ひ申し候。彼は八日間はたらき、しかも其の終りに何物をも描かずして言ふやう、我は斯かるつまらぬ物を描く氣はなしと。彼はその金を返納いたし候が、それにも拘らず、良畫工なりとのうれ込みにて結婚いたし候。たしかに彼は今は繪筆を抛ち、手に鋤を取つて、紳士らしく田畑へと參り候。ペドロ・ローボの子息は牧師とならん心掛にて第一の僧職を得、剃髪いたし申し候。ミンゴー・シルヴァトーの孫娘ミンギラがその事を聞き、結婚するといふ約束にそむくものなりと彼を相手どりて訴へ申し候。彼女は彼の胤を宿したりと口さがなきものは言ひはやし



候、されど彼は極力それを打ち消し居り候。今年は橄欖は殆どこれなく、全村に醋は一滴もなき有樣にござ候。一隊の兵士この村を通過いたせしこと候ひき。彼等が此處を立ち去る時村の娘三人を奪ひて連れ行き申し候。妾はその娘たちの名を此處には打ち明けまじく候。恐らくその娘たちはやがて歸り來るならんと存じ候。その娘たちは善かれあしかれ、身に瑕瑾ありても妻として迎へ取る若者を見出すことは請合ひに候。サンチカは打紐レースを造りて、日一杯に八マラヴェディを儲け候、あの子は家計を扶けん爲めにとて貯金箱に納め置くが習ひに候。されど今はあの娘も總督の息女なれば、あの仕事は止してお前さまよりのお仕送りを待ち申すべく候。廣市場の噴泉は枯れ切つて上らぬやうに相なり候。雷さまが斷頭臺を打ちくだき候。妾はあれが皆燒け落ちることを願ひ候。何卒御返事下されたく待ちあげ候。又妾が宮中へ參ることに就きお前さまの御心中伺ひあげたく候。さらば、神樣がお前さまを妾よりも長くこの世に留め給はんことを、また妾と同じ程に留めたまはんことを、妾はお前さまを此の世にお殘し申して去ることは願はず候。

お前さまの妻

テレサ・パンザ。

この手紙は喝采され笑はれ、面白がられ、感心せられた。その時、恰も此の仕事に打止めの封印を置くが如く急使が到着した。サンチョーからドン・キホーテへ宛た手紙を持參したのである。それでこれもまた讀み上げられた。そしてこれは總督の單純な人であることに就いて疑ひを起させた。公爵夫人は退いてあの小姓からサンチョーの村での冒險について聞いた。小姓はそれを十分精しく一寸した事件をも落さずに物語つた。小姓は公爵夫人に橡實と乾酪を差し出した。その乾酪はトロンチョン（テルエルとモレラとの間にあるアラゴンの都市）の乾酪よりも際立つて良くすぐれて居ると言うてテレサが小姓に與へたものである。公爵夫人は大喜びでそれを受取つた、こゝに吾々は彼女を捨てゝ置いて、あらゆる島の總督の花でもあり龜鑑でもある大サンチョー・バンザの政府の終末を書き記さう。



## 第五十三章　サンチョー・バンザの政府の紛々擾々たる結末と終局に就いて。

この人生に於いて、それに屬する總ての事が永久に同じ狀態に止まるであらうと想像するのは、いたづらなる空想である。それどころか人生に於ける有らゆる事柄は、輪をなして、卽ちまはりまはつて流轉して行くやうに思はれる、春は夏につゞき、夏は初秋に、初秋は秋に、秋は冬に、そして又冬は春につゞいて行く。斯うして時は小止みなき輪でまはつて行く。ひとり人の命に到つては、時の歩みよりも速に、果しもなく限りもない他界の生の中でなければ何等更新の望みもなく、その終局の方へと進んで行く。マホメット敎の哲學者シード・ハメットは斯う言うて居るのである。信仰の光なしに、單に自然の光のみで、疾く過ぎ去る自然や、この現し世のはかなさや、又は我々が待ち望むあの永生の無限の繼續などに就いて理解して居る人も澤山ある。しかし我が作者は此處でサンチョーの政府が結末に來ることの餘りに速であることを言うて居るのである。それはまるで烟や影で出來て居たやうに、解け去つて、見えなくなり、消え去つてしまつ

たのであつた。サンチョーは麵麭や葡萄酒には飽かされずに、裁判を言ひ渡すことや、意見を與へることや、法律や布告を作ることには飽かされて、彼が政治を執つてから七日目の晩に寢臺の上に横たはつて、腹がへつてたまらないにも拘らず、段々と眼瞼を閉ぢて漸く寢入りかけた時、この島全體が底の方へ沈んで行きつゝあるのだと思はれるやうな鐘の鳴る音と叫び聲が聞えて來た。彼は床の上に坐り直つて、斯やうなひどい喧囂の原因は果して何であらうかと一心になつて考へ出さうと努めたけれども、彼はそれが何であるか分らないばかりか、今や無數の大皷や喇叭の音が手傳つて鐘の音と叫び聲の喧噪を增したので、サンチョーは嘗てない程にどぎまぎして、恐怖と心配の念にみたされた。彼は立ち上つて、床が濕つて居るので上靴をつッかけ、上衣も其の他の何物も身に投げかけずに、部屋の戸口から外へ走り出た。丁度その時廊下を二十人以上の一隊が松火を振りかざし、手に拔刀を携へて、皆の者が『武裝なされ、武裝なされ、總督閣下、武裝なされ！敵が無數に此の島の中に居ります、閣下の技倆と勇氣とで私どもをお守り下さらなければ私どもの命はあぶないのでございます。』と叫んだ。

この物音、騷擾、喧噪をつゞけながら、彼等はサンチョーの立つてゐるところへやつて來た。サンチョーは自分が見たり聞いたりしたところによつて眩惑し昏迷して、ぼんやり立つて居た。

彼等は近づいて來るとその中の一人がサンチョーに言つた、『總督閣下、さあ一刻も早く武裝をなさい、閣下の身を破滅させず島を失ふまいとお思ひなさるなら早く用意をなされ。』

『私が甲冑を着たとてどうなるものか？』とサンチョーは言つた。『私か武器の事や守備の事などをどうして知るものか？みんな私の旦那さまのドン・キホーテさまにお任せするとよいのぢやが、旦那樣はそれを始末してすつかり大丈夫にして下さるのぢやが。神樣お助け下されませ、あゝ私は何たる因果な身ぢや、戰のことは分らんわい。』

『あゝ閣下、』と他の者が言つた、『何たる臆病な事でございますぞ！武裝をなされ。こゝに貴方の甲冑がございます。これを着て攻めたり守つたりなさるのです。廣市場へお出かけなさい。そして私どもの大將となり指揮者となつて下さい。貴方は私どもの總督でございますから、貴方がさうなさるのは當然の權利なのでございます。』

『それでは私に甲冑を着せてくれい、どうぞ。』とサンチョーは言つた。すると彼等は直ちに彼等が用意して來た二つの大きな楯を持ち出して、サンチョーには他には何にも着せずに、シャツの上へその楯をつけ、一つの楯は前へ、も一つの楯は後へ當て、彼等が拵へて置いた孔から兩腕を通じ、彼を繩でしつかりと縛りつけた。それ故にサンチョーは壁で圍まれた紡錘のやうに眞直に板

圍ひされた。そして膝を曲げることも出來ないし、一歩も動くことも出來なかつた。彼等は彼の手に槍を持たせた。その槍にすがつてサンチョーは倒れることを免れたのである。このやうに縛りつけてしまふや否や、彼等は彼に前進するやうに頼んだ。そして彼等を導き、彼等に勇氣を與へるやうに、頼んだ。彼が彼等の先導者となり、燈火となり、曉の明星となつてくれゝば、此の事の結果をうまく附けることは確かであると言つて。『私はどうやつて進むのぢや、やれ〳〵私は不仕合せな者ぢや、』とサンチョーは言つた、『私の身體にしつかりと縛りつけられてあるこんな板が身動きをさしてくれぬので、膝蓋骨を動かすことも出來ぬわい。お前方がせねばならぬことはお前方の腕で私を運ぶことぢや。そして何處の裏門に横にならせるか眞直に立たせて置いてくれい、さうすれば私は槍か身體かでそこを守るわい。』

『お進みなさい、總督閣下！』と他の者は言つた、『貴方がお進みなさらぬのは板の爲めではなうて臆病風に吹かれたからでございませう。さあ、お急ぎなさい、お進みなさい、ぐづ〳〵して時を失つてはなりませぬ、敵の數は次第に增して參るばかりでございます、叫び聲は段々高くなつて參ります、そして危險は目の前に迫つて來ました。』

これらの勸告と非難とによつて說きすゝめられて、あはれな總督は前進しようと企てた。けれ



ども、彼が自分の身體が粉微塵になつたのではないかと想像した程の音を立てゝ、彼は地上に倒れた。そこに彼は甲の中へ圍まれて居る龜のやうに、二つの担ね鉢の間の鹽豚の片側のやうに、濱邊に底を上げて引つくり返つてゐる小舟のやうに平伏つた。惡戯者の一隊は彼が倒れたのを見ても彼に對して同情の念などは爪の垢ほども起さなかつた。それどころか、もつとひどい事には、彼等はその松火を消して更に叫び始めた。そしてあはれなサンチョーの上をどしん〳〵と踏みつけ、彼等の劍で楯の上から彼を切りつけた。その勢ひといつたら、もしサンチョーが身を縮めて小さくなり、二つの楯の間に頭を引つ込めなかつたなら、屹度ひどい目に遭つたであらうと思はれるやうなはげしさであつた。彼は狹い範圍の中に壓し潰されて、汗びつしよりになつて横はり、心を籠めて現在の危險から助けて下さるやうにと神に祈つた。或る者は彼の上に躓き、またある者は彼の上に倒れ、又一人の者は可成り長い間彼の上に位地を占めて、そこから恰も物見櫓から軍勢に命令を發するやうに叫び出した、『この方へ進め！この方面に敵軍が密集して居る！そこの崩れ口を守れ！その門を閉ざせ！この梯子を遮斷せい！此處へ樹脂と松脂の入つてをる其の惡臭を放つ鍋を持つて來い！煮え立つ油を持つて來い！羽蒲團で街路を塞げ！』簡單に言へば、彼は一生懸命にあらゆる細かな事を言つた。それか

らいろ〳〵な戰爭の道具や機關の名を並べ立てた。その間揚き碎かれ傷つけられたサンチョーはへたばつてそれを聞いて居たが、自分では『今すぐに此の島を失ひまするることが神樣の御意に召しますならば失うても構ひませぬ。私はこのまゝ死にますか、それとも此の苦痛から逃れますか、どちらか一つを願ひます！』と言つて居た。天はこの祈りの言葉を聞し召し給うた。そして彼は思ひがけぬに『勝利！勝利！』と叫ぶ聲を聞いた。『さあ、總督閣下、お起きなさい。そして來て此の勝利をお喜びなさい。それから其の無敵の腕の力によつて敵から得た分捕品をお分ち下さい。』

『私を扶け起してくれい、』とみじめなサンチョーは悲しげな聲で言つた。彼等は彼を扶け起した。彼は起ち上るや否や言つた、『私が討つた敵を私の面前で釘づけにするがよい。私は敵の分捕品を分たうとは思はぬ。私は若し一人でも私の親友があるならば、その人に一杯の葡萄酒を持つて來てくれるやうに嘆願する。私の咽喉は乾いて焦げつくやうぢや。それから私の身體を拭うてくれい、私は水になりさうぢや。』

彼等は彼の身體を拭き淸めてやつた。また葡萄酒を持つて來てやり、楯を解き放してやつた。それで彼は寢臺の上に坐り、恐怖と動顚と疲勞とで氣が遠くなつてしまつた。この冗談に關係し



てゐた者どもは、今は餘りやり過ぎたことを氣の毒に思つた。けれども、彼が氣絕した爲めに引き起された彼等の心配は、彼が息を吹き返したことによつて救はれた。彼は何時であるかを尋ねた。彼等は丁度夜明けでございますと言つた。彼はそれから一言も口を利かなかつた。そして無言の中に着物を着始めた。その間皆の者どもは、彼がこんなに急いで着物を着るのはどうしたことかと怪しんで彼を見守つて居た。

彼は漸く着物を着終つた。それから、彼はひどく搗き碎かれたので早く行くことが出來なかつたので、のろ〳〵と廐へ進んで行つた。そこに居合せた者は皆後からついて行つた。彼はダップルのところへ行つて、馬に抱きつき其の額に愛のこもつた接吻を與へた。そして眼に涙を浮べて言つた、『さあ、來い、私の苦痛や悲哀の連れよ、友達よ、仲間よ、私がお前と一緒に居つて、お前の馬具を繕ふ外には私をなやます心配といふものが無く、お前の小さな身體を養うて居つた時分は私の一番仕合せな日、仕合せな年であつたわい。ぢやが私がお前と離れてからは、そして功名心と傲慢心の高い塔に登つてかう入つて來た。』かういふ調子で話して居る間に彼は驢馬に荷鞍をつけて居た。誰も一言も發するものがなかつた。ダップルに鞍を置いてから、非常に苦しんだ揚句やッとの思ひで驢馬に乘り、家

令や、秘書官や、賄ひ頭や醫者のペドロ・レシオや、それからそこに立つて居た其の他の五六の者に、言つた、『路を明けて通してくれ、皆の衆、私をもとの自由に歸してくれ、私の前の暮しに戻らしてくれ、此の今の死の苦しみから引き上げてくれ。私は總督になつて、敵が攻撃しようと覗ひをつけた島や町を保護する爲めに生れて來たのではなかつた。耕したり掘り返したり、葡萄の手入れをしたり刈り込んだりすることが州や王國を防ぐよりももツと私の柄にはまつとるのぢや。ペテロ聖者はローマに居ればこそ大層結構なのぢや。人は生れついた職業に從ふのが一番よいと私は思ふわい。私の手には總督の權標を持つよりも一丁の鎌の方が似合ふのぢや。私はかつえさして殺すおせつかい好きな醫者の非道に從ふよりも、ガズバチョー（アンダルシア農民の一番好きな正午の食品、胡瓜の鈴關に御長く切つたものへばんのきれ、酢、非酎な水などで作る）の新を腹一杯、食べた方がよい。そして夏の日には樫の樹の蔭に横になり、冬は自由に二重の羊毛のジャケツを着る方が、窮屈な政府の下に麻製の敷布の上に寢て黒貂の着物を着るよりも餘程ましぢや。皆さん御機嫌よう。公爵閣下には斯う言うて下され、「私は裸かで生れて、裸かになりました。損もせにや得もござりませんで出て行くのぢや。世間の總督が島を立ち去る場合とは雲泥の相違ぢや。側へよけて私を通してくれ。私はこの手足がみんな壓し潰されたやうに思ふで、膏藥を貼らにやならぬ。これも昨夜私



を踏みつけた敵のおかげぢや。』

『それは御無用でございます、總督閣下、』とドクトル・レシオが言つた、『何故と申しますれば私は閣下に轉落や打身の妙藥を一服差し上げますから、その藥を召し上れば貴方樣はすぐに平生のやうに健全に强壯になられます。それから御食事に就きましても私は一段とよく取り計らひまして、貴方さまがお好み次第に澤山差しあげますやうに御約束をいたします。』

『もうおそまきぢや、』とサンチョーは言つた。『私の心が變つた以上はもう留まることではない。こんな冗談を二度とやられてたまるものか。私が此の政府に留まるなら、翼なしで天へでも昇つて行くわい。他の政府とて同じことぢや。たとひその王國が二枚の皿の間に盛られてすゝめられたにしても。私はサンチョーの家の出身ぢや、サンチョーの家の人といへば皆が皆强情で名を取つたものぢや。その人が「半」といへば半に違ひないのぢや　それが「丁」であつたにせよ、又世間がみんな反對しても構ふことはない。私を食ふ鵜鶘やその他の鳥の爲めに空へ私を持ちあげた蟻の翼は、この厩へ殘して置いて行く。も一度この足で大地を踏みならすのぢや。この足がスペイン皮の飾り靴を穿かんにしても、粗い麻の草鞋にや事は缺くまい。「牝羊は牝羊づれ、」といふし、「誰も敷布の長さを越えて足をのばすな」とも言うてある。ぢやからもう私は出て行かう、時刻も移

つて遅うなるから。』

これに答へて家令は言つた、『總督閣下、私どもは滿腔の誠意を捧げて閣下の御出立をお送り申します。私どもが只今閣下を失ひまするることは非常に悲しいことでございますけれども。何故と申しますれば閣下の才智とお慈悲ぶかい御處行とを見ますると、自然に私どもが閣下を尊敬するやうになりますからな。しかしどんな總督も今まで支配して居つた場所を立ち去ります前に、先づ第一に勘定をせぬ人のないと申すことは知れ切つたことでござります。閣下が政治をお執りなされた十日間の計算をいたしませう。それから閣下はお出かけなさいませ、神の平和が閣下と共にあらんことを。』

『誰も私に勘定を催促することは出來ぬ。』とサンチョーは言つた、『公爵閣下が任命なさつた人の外にや。私は公爵閣下にお目にかゝらうと思うとるのぢや、そして閣下に一部始終を申しあげるつもりぢや。その上、私が此のやうに裸で行つたなら、私が天使のやうに政治を行うたといふことを見せるに別に何の證據も入るまい。』

『まことに大サンチョー殿のおツしやることは御尤でございます。』と醫師のレシオは言つた、『閣下を御出立させ申すのが正當でもらうと私は思ひますわい。公爵閣下は總督閣下にお逢ひなされ



て屹度大變喜ばれるに違ひござりませんからな。』

彼等は皆この意見に同意した。そしてサンチョーを出立させた。初めはお伴をしませうと申し出た。又心を慰める爲めに或は旅に必要な物を整へて上げませうと申し出た。けれどもサンチョーはダップルの爲めに大麥を少しばかりと、自分の爲めに乾酪半くれと麵麭半くれとより外には何にも欲しくないと言つた。それは、距離が近いので何にも立派な大した準備品を要する場合がないからである。彼等は皆サンチョーを抱いた。そして彼は涙を流して彼等を皆抱いた。そして單に彼の言葉のみならず、彼の確固たる智慮ある決斷に對する賞讃の念を抱いた彼等を後にしてサンチョーは出かけた。

## 第五十四章　は此の物語に關係ある事柄を取扱つてゐるので、他の物語に關係あることを取扱つては居らぬ。

公爵と公爵夫人は、既に述べた理由で、ドンキホーテが彼等の家來に與へた決鬪の申込みを處置しようと決心した。そしてあの若者はドーニア・ロドリグェズを姑として持つことを避ける爲めに逃れてフランダースに居つたので、彼等はトシロスと言ふ、ガスコン出の從僕を身代りに立たせやうと手筈を定めた。そして先づ最初に彼がせねばならぬ事をすツかり彼に注意をこめて敎へ込んだ。二日たつてから公爵は、今日から四日目に相手の者が騎士のやうに武裝して戰場へ現はれる、そして彼が結婚の約束を彼女に與へたのだとあの娘が斷言したとすれば、それは、あの娘は髯半分だけ、否殘らずの髯だけ僞つて居るのであると主張するであらうといふ事を、ドン・キホーテに話した。ドン・キホーテは其の知らせを聞いて大いに喜んだ。そして試合場では不思議な事をしてお目にかけますと約束した。彼はこの好機會が彼の强い武力の成し得るところを



彼の高貴な主人等に示すべき時を與へたことを、實に稀なる幸運であると思つた。そこで意氣揚々と大滿足で、その四日間の滿期を待つて居た。その間といふものは、彼のはやりにはやる心には、四百年にも引き延ばされたやうに思はれた。さて我々は彼等を捨てゝ通り過ぎよう、我々が外の物をさうする如くに。そしてサンチョーと一緒になりに行かう。彼はダップルに跨つて、半ば喜び、半ば悲しみつゝ、主人に逢はうとて、路を急いで驢馬を進めた。彼には主人と一緒になつて居る方が世界におけるあらゆる島の總督となるよりも餘程幸福であつた。さて、たま〳〵彼が彼の政府の島（その支配した所が島であつたか、市であつたか町であつたか、村であつたかを、彼は一向に研究しようとして氣を揉むやうなことはなかつた）からさう大した道のりも進まぬ中に、彼が歩いて居つたその道を六人の巡禮がやつて來るのを見た。各々手に杖を持つて、歌を歌つて施物を乞うて歩くやうな種類の外國人であつた。彼等が近寄つて來ると一列に並び、一緒に聲をはり上げて、サンチョーに理解の出來なんだ事を何か彼等の國語で歌ひはじめた。その中唯一語「施物」と明瞭に響いたのだけは判斷がついた。彼はその言葉からして彼等が歌の中に要求して居つたものは施物であると推量した。シード・ハメットが言うて居るやうに、サンチョーは非常に慈悲深い性質であつたから、彼の鞍嚢から、用意して居つた半くれの麵麭と半くれの乾酪

を取り出して彼等に與へた。自分はこの外には何にも遣るものがないと手眞似で彼等に說明した。彼等はそれを大層喜んで受取つた。しかし又『グルド！グルド！（お金お金！）』と叫んだ。『私はお前さんたちが何を望んで居るのか分らんよ、』とサンチョーは言つた。

これを聞いて彼等のうちの一人が自分の懐から財布を取り出して、それをサンチョーに見せた。そこで始めてサンチョーは彼等が金を要求して居たのであつたと了解した。彼は拇指を咽喉に當てゝ、それから手を上の方に擴げて、自分は身のまはりに一錢の金も持つて居ないといふことを彼等に呑み込ませた。そしてダップルをせき立て彼等の列を破つて進んで行つた。しかるに彼がそこを通り過ぎようとすると、彼等のうちの一人はサンチョーを非常に綿密に見つめて居たが、急に彼の方へ進んで來た。そして腕をサンチョーの首のまはりに投げかけ、高い聲で、しかも立派なスペイン語で叫んだ、『本當に思ひがけぬことぢや！これは一體どうしたことぢや？私の腕の中に抱いて居るこの人は私の親しい友達、私の隣りの人好しめサンチョー・パンザではないかい？さうぢや、一點の疑はしいこともない。私は今眠つても居らねば酒に醉うても居らんからのう。』

サンチョーは自分の名を呼ぶのを聞いて驚き、又自分が見知らぬ巡禮に抱かれて居るのを見て



驚いた。そして何にも言はずにおろり〳〵と其の人の顏を見たが、それでもなほ彼はその人が誰であるかを見分けることが出來なかつた。するとその巡禮は彼が當惑して居るのを見て叫んだ、

『どうしたんぢや！サンチョー・パンザ、お前は隣りのリコーテを知らんことはあるまい。お前の村のモリスコ（スペインに永住せるムーア人）人の店の亭主ぢやよ。』

サンチョーはこの言葉を聞いて一層注意して彼を眺め、漸く彼の顏形を思ひ出さうとした、そして到頭すツかりそれと氣附いた。そこで驢馬から下りる暇もなく巡禮の頸のまはりに自分の腕を投げかけて言つた、『リコーテ、お前はこんな茶番役者の着物なんぞを着こんでるんだもの、誰がまアお前といふこたあ氣がつくものかいの？なあ、おい、誰がお前をフランス風にさせたのぢや。また何うしてお前はわざ〳〵スペインへ歸らうとするのぢや？もし人がお前を捕へたりお前を見知つたら屹度お前はひどい目に逢ふぢやらうに。』

『サンチョーさん、お前さへ裏切りをせんなら、』と巡禮は言つた、『私は大丈夫ぢや。何故ちうにこの着物を着て居れば誰も私とは見知るまいからの。しかしまア道から横へそれてあの森まで行かうぢやないか。連中はあそこへ行つて食うたり休んだりしようと言ふのぢや。お前もあれらと一緒に食ふがよい。あれらはみんな人のよい奴らぢや。私はさうすればお前も聞いた通り、この

國の中の不仕合せなモリスコ人等に對して嚴しい脅かしをしたあの國王陛下の勅令に依つて、私が村を見すてゝから起つた事を、ゆつくりとみんなお前に話せるであらう。』

サンチョーは同意した。リコーテは他の巡禮等に話したので、彼等はその道路から可なりの距離を迂回して、向ふに見えた森へ引き上げた。彼等はその杖を投げすて、巡禮着を脱いで下着だけになつた。彼等はみな容貌の見にくからぬ若い者どもであつた。リコーテだけは彼等より餘程年とつてゐた。彼等は皆自分たちの鞍嚢を持つて居た。そしてそれは見たところ皆一杯になつて居た。少くとも渇きを刺戟する物がはいつてゐた。それは二リーグも離れて居ても渇きを刺戟するやうなものであつた。彼等は地上に横になつて、草の食卓を拵へ、その上にパンや鹽やナイフや胡桃や乾酪の片やよく精選した骨つきのハムなどを並べひろげた。そのハムは嚙めない迄もしやぶるにはよかつた。彼等はまた、世間でカヴィアルと呼んで居る、魚の卵で作られた黒い美味な物を置き並べた、それは非常に渇きを喚起す物である。又橄欖もないことはなかつた。それが乾いてゐたことは事實であつたが。又或る藥味もあつた、それは餘り旨く快くはなかつたが。しかしながら此の宴會の席場に於て最も立派であつたものは、六本の葡萄酒の壜であつた。彼等の各々が自分の鞍嚢から自分のものを取り出した。モリスコ人からドイツ人かオランダ人かに變裝



してゐた、善良なリコーテさへも、彼の分を取り出した。それは大きさに於いては他の五人のものと張り合ふ位であつた。そこで彼等は非常にうまさうに非常にゆつくりと食ひはじめた。ナイフの先きへ取り上げた——どの品でも最も小さい切れを——彼等はゆつくりと出來るだけ口の中で味うて、それから皆一緒に彼等の腕と壜とを高く上げ、口をその口へおしつけて、恰かも覗ひをつける如くに目を一樣に天の一方に据ゑた。そしてこの態度で彼等は長い間ぢつとしてゐた。彼等が自分等の胃に壜の中味を靜かに注ぎ込んで居る間に彼等が樂しみつゝある愉快を認めるが如くに、横から横へと頭をふりつゝさうしてゐた。

サンチョーは皆の者がさうするのを見た、而も何にも彼に苦痛ではなかつた。それどころか、彼がよく知つて居つた「汝ローマ人のなす如くに爲せ、」といふ諺に循つて行動し、彼はリコーテから一壜を乞うて、彼等のやうに天を睨んだ。そして彼も人々に劣らず愉快であつた。四たび壜は持ち上げられた。が五たび目には殆どさうするのは無駄であつた。つまり壜はもう空になつて燈心草のやうに乾いて汁氣がなくなつて居たからである。これで今まで彼等が示して居たのび〳〵した心持ちがゆるみ出したやうに見えた。

とき〳〵彼等の或る者はサンチョーの右の手を摑ん自分等の國言葉で「スペイン人もオランダ

人もみんな好い友だちだ」といふとサンチョーは「好い友だちだ、ほんとに！」と答へる、そしてから〳〵と笑ひ出して一時間も笑ひつゞける。暫くの間は彼の政府に於いて彼にふりかゝつたいろ〳〵な事などは考へなかつた。つまり、吾々が飲んだり食うたりしてゐる間は通例心配は吾々の心には起らぬものである。遂に葡萄酒がなくなつてしまふと、睡氣が彼等を襲ひはじめた。そして彼等はテーブルでもありテーブルクロースでもあつたその場所へごろりと横になつて熟睡した。リコーテとサンチョーのみは覺めて居た、彼等は多く食つて少し飲んだからである。その時リコーテはサンチョーを傍の方へ連れ出し、快ささうに熟睡してゐる巡禮たちから離れて、とある榲の樹の根もとに坐つた。そして一度もモリスコ語の訛りを出さずに純粹なカスティリア語で次のやうに話した。

『お前はよう知つとる、なあ、サンチョー・パンザ、國王陛下が私等に對して發布するやうに御命令なされた布令や勅令がどんなに私等を怖がらせびツくりさせたことか。宗教上の堕落より來れるモリスコ人の放逐に關する第一の法令は一千六百〇九年七月二十二日に發布され、第二の法令は一千六百十三年十月二十六日に發布された。少くとも私にはそれ程に思はれた。私はスペインを立退く爲めに私等に許された時間が盡きてしまふ前に、刑罰の暴力がはや私や私の子供の上に落ちたのかと思うた程であつた。私はその時決心した、そして私は賢こくも考へた、（丁度何月何日に自分の住うて居る家が



自分の手から取り上げられるといふことを知つて、前以て代りの家を探し出す人のやうに）、私はあの市を立ち去らうと決心したのぢや。家族のものは引き連れずに、唯一人でそして安樂に家族の者を引越させる何處かの場所を探しに出かけようと決心した。が他の人たちがするやうに大急ぎで慌てゝ出發するやうなことはせなんだ。何故といふに私は、誰かゞ言うたやうにその布令はほんの一時の嚇かしでなく、指定された時に是非實施せらるべき斷乎たる法令であることをちやんと知つたからで、それは私等の間の老人には皆分つたことぢや。そして私にさうと信じさせたのは、私等の方の人たちが匿まうて置いた賤しい法外な企てを、私が知つて居つたからぢや。その企てといふのは、國王陛下がしツかりした決心でそれを行はれたのは神のお告げによることぢやと私さへ考へるほどのものぢや。私等の皆が皆罪あるのぢやない。中には本當に濫らぬ忠實なキリスト敎徒もあつたからの。しかしとても衆寡敵せずであつたのぢや。それでも家の中に敵を持つて、胸の中に毒蛇を養ふことは思慮に富んだやりかたぢやなかつた。つまり我々が追放の刑罰を受けたのは正當な原因があつたからで、或る人の眼には溫和な寬大な罰であるやうに見えたらう。しかし私等には自分に加へられる刑罰の中で一番恐ろしいものゝやうに思はれた。私等は何處へ行つてもスペインが戀しうて泣くのぢや。つまり私等はそこで生れたから、それは

私等の祖國であるからぢや。何處へ行つても私等は自分の不幸な境遇から求めて居るやうな待遇は受けなんだ。そして蠻地やアフリカのあらゆる場所で私等は歡迎せられ、護られ、もてなされること、思うて居つたのに、そこでは一番侮辱され虐待された。「我々は身の幸運を失ふまでは幸運を知らぬ」であつたのぢや。そして私等は大抵皆スペインへ歸りたがつて居るのぢや、つまり私のやうにスペイン語を知つて居る者の大方はな。またその連中がなか〳〵多いが、スペインへ歸つて又妻子を棄てゝ立ちのいて來る、國に對する愛はこれほど深いのぢや。そして私は今經驗によつて「人のその生國に對する愛は快いもの」といふ諺の意味を知りましたよ。

『私が話した通り、私は自分の村を立ちのいた。そしてフランスへ行つた。人には親切に迎へて貰うたが、私は見られるものは皆見たいと思つた。私はイタリーへと渡り、ドイツに着いた。ドイツでは私等はもつと自由に暮すことができるやうに思はれた。住民等は些細な點には何の注意も拂はんし、誰れも彼れも自分の好きなやうに暮して居るから。それといふのは彼等は大抵信仰の自由を樂しんで居るからぢや。私はアウグスブルグの近くの町に一軒の家を持つた。それからこの巡禮たちの群に加はつた。あの人たちは毎年大團體を組んでスペインへ行つて方々の社に參拜する習慣ぢや。その社をあの人等は自分たちの印度と思ひ、確かな安全な儲けの元と考へ



て居る。あの人等は殆ど國中を遍歷つて歩く。そして世間で言ふやうにその町々で食物や飲料などを十分に貰はぬ町はなかつた。又少くとも一リールの金は貰うた。そこであの人等は旅行の終りには百クラウン以上の貯へを以て歸るやうになる。あの人等はそれを金貨にかへ、その王國から窃に運び出す。それは杖の穴の中や巡禮着の補布の中へかくしたり、その他いろ〳〵の工夫で運ぶのぢや。そして檢べられる場所や路々の守衞の目をくらまして自分の國へ持つて行く。さてサンチョー、私の目的といふのは私が埋めて置いた寶を持ち出すことなのぢや。それはこの町の外側にあるから、別段の危險もなしに旨くやりおほせる事が出來よう。それからこゝからかヴァレンシアから、か私の娘と女房とに宛てゝ手紙を書かうと思ふのぢや。二人は今アルジィルスに居ること私は知つてをる。それで二人をフランスのどこかの港へつれ出す工夫をして、そこからドイツへ呼びよせるのぢや。そこで神樣がどれほど私等をお助け下さるかを待たうと思ふ。つまり、サンチョー、私は私の娘のリコータや私の家内のフランチスカ・リコータは天主敎徒であることをよう知つとるからぢや。そして私は全くといふ譯ではないが、やはりムーア人といふよりもキリスト敎徒ぢや。それでいつでも神樣が私の理解の眼を開いて下さるやうに、又私が何う神樣にお仕へ申してよいかを示して下さるやうにお祈りをしてをるのぢや、しかし私が驚きもす

るし分らんとも思ふのは、何故私の家内と私の娘とがキリスト教徒として住むことの出來るフランスへは行かずに蠻地の方へ行つたかといふことぢや。』

これに對してサンチョーは答へた、『リコーテ、大方それはあの人等の勝手に出來なかつたのぢやろ。何故といふにお前のお上さんの兄のファン・ティオピエヨが二人を連れ出したのぢやからの。あの男は本當のムーア人ぢやから一番たやすく行ける所へ行つたのぢや。それから私がもう一つお前に話したいことは、お前が埋めて置いたものを探しに行つてもきツと無駄ぢやといふことぢや。それはお前の義理の兄弟とお前のお上さんとが澤山の眞珠やの金貨を所持して通らうとした時に、それを取り上げられたといふことを私たちは聞いたからの。』（設利財産の殘る高は運び去る前を言されたが、後に追放されたモリスコ人は何物をも所持して行くことを許されぬことになつた。）

『そりやさうかもしれん。』とリコーテは言つた、『ぢやが私はあれ等が私の貯へに手を觸れなんだことを知つて居る。なぜと言うて私は萬一の事を氣づかうたので、それのある所をあれ等には知らさなんだからの。それで、もしお前が私と一緒に來るなら、サンチョーよ、そしてそれを取り出して、それを匿すことを手傳うてくれるなら、私はお前に二百クラウン上げよう。それで以てお前はお前の貧乏を救ふことが出來るのぢや。そして、お前も知つとる通り、私はお前の貧乏は



が随分ひどいことを知つとるのぢや。』

『私はさうしてもよいが、』とサンチョーは言つた、『しかし私は全くの貪慾ぢやない。私は今朝あ る役目をやめて來たのぢや。若し私がそれをつゞけてやつて居つたら、六ケ月と經たぬ中に家の壁を金で造り銀の皿で飯を食ふやうにもなつたであらうが。かういふ譯でもあるし、また若し私が王樣の敵を助けたら王樣に對して謀叛の罪を冒すことにもなるぢやらうと思ふから、お前が二百クラウンを呉れるといふ約束の代りに四百クラウンを此處で卽座に私に呉れても、私はお前と一緒には行くまい。』

『そしてお前がやめて來たといふその役目は一體何ぢやい、サンチョー？』とリコーテは訊ねた。

『私はある島の總督の役をやめて來たのぢや、』とサンチョーは言つた、『そして、實際、お前などがなか〳〵見つけられんやうな立派な役目ぢや。』

『そしてその島は何處にあるのぢや？』とリコーテは言つた。

『何處ツて？』とサンチョーは言つた。『こゝから二リーグ離れたところで、バラタリアの島と呼ばれて居るのぢや。』

『馬鹿言へーサンチョー、』とリコーテは言つた。『島といふものは海の中に離れて居るものぢや

よ。本土に島はありやせんわい。』

『何？島がないと！』とサンチョーは言つた、『それぢや言ふが、おい、リコーテさん、私は今朝そこを立つて來たのぢやよ、そして昨日私はサジッテリアス（サンチョーの言ふ意味は此處では總督が明瞭でないセルバンテス流の訛りのサジッテリアスは即ち中を除れたれながら通る人のことをである）のやうに思ひのまゝに政事を行うたのぢや。ぢやが、それでも私はそれをやめたのぢや。總督といふ役目は、危い役目のやうに私には思はれたからの。』

『そしてお前は總督をやつて何を儲けた？』とリコーテは問うた。

『私は、』とサンチョーは言つた、『家畜を飼ふ外には、政治を執ることには向かぬといふ智慧を手に入れた。又政治によつて得られる富は、人の休息と睡眠と、さうさ、その上に食物まで棒にふつて得られるものぢやといふことを。何故といふに島では總督は少しゝか食はれん、殊に總督の健康を見張る醫者が居る場合には猶更のことぢや。』

『私にはお前の言ふことが分らんよ。サンチョー、』とリコーテは言つた。『お前がしやべつて居ることは皆譫語のやうに私には思はれる。誰がお前に支配する島を與へるものか？この世の中には總督としてお前よりも悧巧な人が、そんなに乏しいのかい？氣を落ちつけなさい、サンチョー、そしてお前の本心に立ち返つて、私が埋めておいた寶（實際それは寶と言うてもよいものぢや、それは實に澤山ある）それを取り出す爲めに手傳うて呉れるかどうか考へて見るがよい。さうすれば私がお前に話したやうに、お前の身を立てるだけのものをお前に與らうよ。』



『私はもう手傳はんとお前に言うたのぢやないか、リコーテ、』とサンチョーは言つた。『お前は私が密告したりはせんといふだけで滿足するがよい。そしてほんとにお前はお前の道を行き私は私の道を行かう。私は「善く得られた利得は、その利得と共にその持ち主をでも失くなる」といふことを知ッとるからぢや。』

『私はお前に強ひはせん、サンチョーよ、』とリコーテは言つた、『だが、お前は私の家内と娘と義理の兄弟とが村を立ちのく時には村に居たつたかい？』

『居つたよ、』とサンチョーは言つた、『それからのう、お前の娘が村を立ちのく時は滅法可愛らしかつた。それで村中の者がお前の娘を見る爲めに戸外へ駈け出した位ぢやよ。そして誰も彼もあの娘はほんに世界中で一番綺麗なあまつ子ぢやと言うた。あの娘は出かける時に泣き出した、そしてあの娘の友だちや知り合ひやそれからあの娘を見に出て來た人たちを抱いた。そしてあの娘は神樣と聖母さまに私を祈つて下さいと皆に賴んだ。そのいぢらしい樣子と言うたら、めッたに涙をこぼすことのない私も、到頭泣かされてしまうた程ぢや。實際多勢の人たちは、あの娘を隱

すか出て行つてつれて行かうとしたかツたのぢやけれども王樣の命令に反くことを恐れて皆そのまゝ控へて居つた。一番心を動かした樣子を見せたのは、お前も知つて居る、あの富裕な若い世嗣のドン・ペドロ・グレゴリオであつた。そしてあの娘が立ちのいた後は、あの若者はあの娘と深い戀仲であるといふ噂であつた。それであの若者は村に姿が見えんやうになつた。そこで私等は皆あの若者はあの娘を盜み取らうとて後をつけて行つたのぢやと思うとる、けれどもその後の事は何にも聞かなんだ。』

『私はいつもあの人が私の娘に思ひをかけてをるらしいと思うて居つた。』とリコーテは言つたぢやが私はリコータの心の確かなことを知つて居る故に、あの人が娘を愛して居るといふことを聞いても別段不安を感じなんだ。サンチョー、お前も聞いて居るに違ひないが、モリスコ人の女は決してキリスト敎徒と情事の約束はせぬ、するにしても稀ぢや　そして私の娘はどつちかと言ふと信心の堅いキリスト敎徒で戀などする氣はあまりないと私は思うとるからあの娘はその人の懸想に就いても餘り心配するやうなことはあるまいよ。』

『あゝ勿體ないことぢや、』とサンチョーは言つた、『それは何方の人にも惡いことぢや。しかし、もう私を立たせてくれ。リコーテ、私は御主人のドン・キホーテさまがござる所へ今晩中に着きたいと思うとるのぢやから。』

『それぢやア達者で行くがよい。兄弟のサンチョー、』とリコーテは言つた、『私の仲間も起き出したやうぢや。私等も旅をつゞける時になつた。』そして二人は相抱いた。それからサンチョーはダップルに乘り、リコーテは彼の杖に凭り、かうして彼等二人は別れた。

## 第五十五章　道中サンチョーの身の上にふりかゝつた事、並びに見過ごすことの出來ぬ他の事どもに就いて。

サンチョーは途中リコーテに出逢つて大分時間がおくれてしまつたので、その日のうちに公爵のお城へ到着することが出來ず、僅か半リーグといふところで夜になつて、段々暗く曇りがちになつてきた。けれども、これは丁度夏であつたので、彼に多くの不安は與へなかつた。それで彼は朝の來るのを待たうとして道の横へ折れて行つた。ところが惡い時にはわるいもので、彼の不幸と彼の惡運とは此處にもついて廻つた。彼は身を休める爲めに出來るだけ氣持のよい場所を探し廻つて居る時に、ダップル諸共ある非常に古い建物の下にある深い暗い窖へ落ち込んだのである。彼が落ちた時彼は全心を傾けて神に我が身を捧げたのであつた。底のない坑の底に達しないうちは到底止まることはあるまいと想ひながら。しかしさうはならなかつた。人の丈の三倍よりも少しあるかと思はれるところでダップルは底についた。そして彼はダップルの上に乘つて居て



少しの傷も怪我も受けなかつた。彼は自分の身體が無事であるらしく感じた。そして自分が全く健全であるか又は身體の何處かに傷があるかを試す爲めに呼吸を押さへて見た。そして全く無事で滿足で立派な健康體であることを見出して、神が彼に示し給うた惠みに對して十分感謝を捧げた。何となれば彼は確かに自分の身が千々に碎けたに相違ないと思つて居たからである。彼はまた若しや此の坑から人の助けをからずに、拔け出ることが出來はしまいかと、手を以て窖の周圍を探つて見た。けれども此の窖の周圍は滑らかで、何處にも何の手がかりもないことを知つた。こゝに於いて彼は大に悲しんだ。殊に哀れつぽく悲しげにダップルが鳴き聲をあげるのを聞いた時は、身も世もあられぬ思ひがした。彼が嘆くのも不思議はない。又不機嫌からさうしたのでもない。實際彼はあまり都合のよい境界に居るのではなかつたからである。『あゝ、』とサンチョーは言つた、『このみじめな世の中に生きて居る者に、何といふ思ひがけぬ不意の出來事が一歩ごとに起つて來ることぢや！昨日は島の總督として、玉座の上に坐り家來どもや奴僕どもに命令を與へてをつた者が、今日は坑の中に陷ちて誰一人助けるものもなく、家來も奴僕も救ふためにやつて來ぬやうなはめに陷らうとは誰が思はう？此處で私等は飢ゑて死ぬるに相違ない。私の驢馬と私とが枕を並べて。初めは死なぬにしても、やがて驢馬は打傷や怪我の爲めに、そして私は嘆きや

悲しみの爲めに死ぬであらう。とにかく私は御主人のラ・マンチヤのドン・キホーテさまのやうに仕合せではないらしいわい。御主人があの魔法をかけられたモンテシノスの巖窟へ落ちた時は、皆で自分の家に居るよりも大事にしてくれたとやら。先づ御主人が入つて行くと食卓は用意されてあり寢臺は整へられてあつたといふことぢや。そこで御主人は美しい愉快な幻影を見たといふことぢや。しかし此處では蟾蜍や毒蛇などに出逢ふこと、想ふわい。私は不仕合せな奴ぢやのう！私の愚かさと妄想とは何んな結着になることやら！天の御覺召で、私がさつぱりした白い磨きあげられた骨になつて見出される時分には、皆は此處から私の骨を拾ひあげるであらう、ダップルの骨と一緒に。そして大方せめてサンチョー・パンザは決して彼の驢馬から離れなんだ、又彼の驢馬もサンチョー・パンザから離れなんだといふことを聞いた人によつて、私等が誰であるかといふことが見出されるであらう。何遍も言ふやうぢやが、私等のつらい運命の神は私等を自分の國で、自分の村の人たちの中で死なして呉れぬ、あゝ何たる哀れなことぢや國に居たならたとひ難澁の爲めに何うすることも出來んやうになつたにしても、とにかく救うてくれる人の一人や二人はあるし、又私等が死んだときには眼を閉ぢてくれる人もあるぢやらうに！おゝ、私の仲間でもあり友達でもあつたダップルよ、私はお前の忠實な奉公に何といふひどい報いをしたことぞ！許してくれい、そして私等二人が陷つて居る此のみじめな窮地から我々を免れるやうにお前が出來るだけ、幸運を祈り求めてくれい。さうしてくれゝば私はお前の頭に桂の冠をかぶせよう、そして桂冠詩人のやうに見えるやうにしてやらう、そしてきつとお前に二倍の糧料を呉れてやらう。』



かういふ調子でサンチョーはわが身の不幸を嘆いた。彼の驢馬は彼の言葉に耳を傾けて居たけれども一言の返答もしなかつた。この憐れな獸が惱み悶えを感じて居ることはそれ程であつた。到頭、はげしい歎きと哀傷とのうちに一夜を過して、晝が來た。そしてその光によつてサンチョーは、人の助けをかりなければ此の坑から逃れることは不可能であることを見出した。それで彼は又彼の運命を歎き始めた。そして若しや此の聲の屆くあたりに人が居はしないかと、高い叫び聲を發し見た。けれども彼の全力をあげての叫び聲も、唯空しく荒野のうちに響き渡るのであつた。それは此の近くには何處にも彼の叫び聲を聞くべき人が居なかつたからである。それで遂に彼はわが身を死の手に任せた。ダップルは仰向きになつて横たはつて居た。サンチョーは彼を助けて起き上がらせようとしたが。彼は殆んどそれをつゞけることが出來なかつた。それから麵麭の切れを彼の鞍袋から取り出した。その鞍嚢は彼等と運命を共にして同じく墜落したのであつ

た。彼はそのパンを驢馬に與へた。驢馬にはそれが嬉しくないものではなかつた。サンチョーは恰も驢馬が彼の言葉を理解するかのやうに『パンがあればどんな悲しみも薄らぐ』と言ひながらそれを與へた。

ふと彼は、坑の一方にてもし屈み蹲まつて小さくなつたなら、充分人を入れ得る程の大きさの窖があるのを認めた。サンチョーはその方へ近よつた。そして腹這になつてその中へは入つて行つた。するとその內側は廣々として茫漠たるものであつた。屋根ともいふべき物を透して入つて來る太陽の光線が、極めて明かにその中を照した時に、彼はこれを見ることが出來たのである。彼はまたそれが他の廣い穴へと開いて廣くなつて行くのを觀た。それを見て彼は驢馬の居た所へ後戻りして、石で以てその穴から土を突きくづしはじめた。そして遂に僅かの間に驢馬が樂に通れる程の大きさにした。これが完成すると、彼は驢馬の羈絆を取つて、この窖の向ふ端には何か出口でもあるかもしれないと、それを探す爲めに窖を通つて進んで行つた。彼は、或る時は暗い中を、ある時は明るい中を進んだ、しかし內心少々びく〳〵ものであつた。『全能の神樣、私をお助け下さい！』と彼は獨り語を言つた、『私には災難である此の事が、御主人のドン・キホーテさまには好い冒險になるであらうに。御主人は確かにかういふ深い穴や窖の中を花園がガリ



アナイアルカ人の住居、洞穴の宮殿の意味はレアノールの宮殿と思はれるであらう。そして此の暗い閉ぢ籠つたところから或る花盛りの牧場が生れて來ると信じなさるであらう。しかし私は不仕合せぢや、私は望みもなく元氣もなく、一步毎に初めのよりも深い別の窖が足の下に開いて來て、私を呑み盡してしまうのを待ち設けてをるばかりぢや。「若し禍がひとりで來るならば、歡迎する」ぢやわい。』

かういふ風にして、又かういふ風な考へを抱いて、彼は半リーグ以上も歩いたやうに思つた。その時彼は日中の光線のやうに見える朧な光りを認めた。又一方に於いてその道を見出した。彼には他の世界へ通ずる道のやうに思はれた此の道は、何處かその邊に出口がありさうに見えたのであつた。

こゝでシード・ハメットは彼を去つて、ドン・キホーテに歸る。ドン・キホーテは大元氣大滿足の體で、ドーニヤ・ロドリグニズの娘からその名譽を奪ひ去つた者と戰ふその決鬪の爲めに定められた日を、鶴首して待つて居た。その若者に對してドン・キホーテは、彼がその娘に恥づべくも爲した惡事と虐げとに報ゆるの滿足を得ようと望んだのである。その時丁度かういふ事が起つた、ドン・キホーテは、その翌日のことゝして待ち設けて居たその會戰に於いて爲すべき事を練習稽古しようと思つて、或る朝勇ましく立ち出でた。彼は或る時はロシナンテの手綱を締め或る時は輕

く走らせなどしてやつて行くと、計らずもある坑のすぐ近くまで馬の足を進めた。若し彼が手綱を堅く引きしめなかつたならば、それに陥ることを避けるのは彼には不可能のことであつたらう。けれども彼はロシナンテを引き止めたので、落ちはしなかつた。そして馬に乗つたまゝ、少し間近に寄つて其の坑を調べて見た。然るに彼がそれを見て居ると、その中から高い叫び聲が聞えて來たのであつた。よく氣を付けて聽いて見ると、その叫び聲を發した人は、かういふことを言つてゐるといふことが分つたのである、『オーイ、上のお方！私の聲を聞きつけるお情深い方は居りまんか、生き埋めになつた業人を憐んで下さる思ひやりの深い紳士は居られませんか！この不仕合せな治めぞこないの總督をお助け下され。』

ドン・キホーテは耳に入つた其の聲が、どうやらサンチョー・パンザらしいと思つた。それで彼は大いに驚き怪しみ、聲を出來るだけ高くはりあげて叫んだ、『下に居るのは誰ぢや、嘆き悲へて居るのは誰ぢや？』

『こゝに居りまする者は、嘆き悲へて居りまする者は、』とサンチョーは答へた、『寄る邊ないサンチョー・パンザでなうて誰でござりませう。その罪の爲め、バラタリアの島を誤つて支配しました爲めに、この坑へ陷りましたもので、私は有名な騎士ラ・マンチャのドン・キホーテさまの家來



サンチョー・パンザと申すものでござります。』

ドン・キホーテはこれを聞いて、その驚きは二重になつた。彼の不安は倘々增して來た。何となればサンチョーは屹度死んだに違ひない、そして彼の靈魂が苦惱の爲めに此處に留つて居るのだといふ閃きが、彼の心を通り過ぎたからである。そして此の考へに捕へられてしまつて彼は叫んだ『天主敎徒として私がお前に祈願することの出來る總てのものにかけて、私はお前に祈願する、お前は誰であるか言へ。そして若しお前が苦しみ惱んで居る靈魂であるならば、かう〳〵して貰ひたいと私に言へ。何故といふに拙者の職務は、此の世に於いて救助を要する人に助力と救濟を與へることであるからぢや。拙者はまた自分自身を救ふことの出來ぬ他界の惱める者をも助けようと思うて居るのぢや。』

『大方、』と下の聲が言つた、『さう仰有る貴方さまは私の御主人のラ・マンチャのドン・キホーテさまに違ひございません。いゝえ、そのお聲の調子から他の方でないことははツきりと分ります。』

『私はいかにもドン・キホーテぢや、』とドン・キホーテは答へた、『私の職分といふのは生きてをる人でも死んだ人でも、必要な事がある場合にはそれを助け濟ふことであるのぢや。ぢやからお前は誰であるか言へ、拙者には少し氣懸りのこともあるのぢや。若しお前は拙者の家來のサンチョー。

バンザであるならば、そして死んでしまうたのであるならば、悪魔がお前を伴れて行かぬので煉獄で神の御慈悲に願つて居るのならば、我々の神聖な母なる天主教會はお前が陷つて居るその苦痛からお前を救ひ出すに十分な執り成しの方法を有つて居るのぢや。又拙者でその爲めに辨疏をするであらう。ぢやからして、此上遲延せずに言ふがよい、お前の名は何といふのぢや。』

『殘らずの善いものにかけまして、』と下では答へた、『又貴方さまがお好きな何方かの御誕生にでもかけまして、私は貴方さまの御家來サンチョー・パンザで、私は決し死んだのではござりませぬと誓ひます。ラ・マンチヤのドン・キホーテさま。ぢやが申し上げれば隨分暇のかゝる譯柄がござりまして、私は總督の職をやめまして、昨夜今居る此の宮へ落ちたのでござりまする。このダップルが何よりの證據でござりまする、嘘は申しませぬ。その證據には驢馬が私と一緒に此處に居りますから。』

これだけではなかつた。人はその驢馬はサンチョーが言つた事を理解したと思ふであらう、何故といふに其の時驢馬は宮中が反響した程に高く鳴きはじめたからである。

『立派な證據ぢや！』とドン・キホーテは叫んだ、『拙者はその驢馬の母親のやうにようその鳴き聲を知つて居る。又サンチョー、お前の聲も知つて居る。拙者が公爵の城へ行く間待つて居るがよい。それはちき近所ぢや。屹度お前の罪がお前をそこへ落としたのであらうが、拙者はその坑からお前を救ひ出す爲めに誰かを連れて來よう。』

『行つてお出でなされ、旦那さま、』とサンチョーは言つた、『そしてどうぞ直ぐ歸つて下されませ。私は最早こゝに生き埋めになつてをることは辛抱が出來ません、死ぬ程恐ろしうござりまず。』



ドン・キホーテはサンチョーと別れて城へと急ぎ、公爵夫人とにサンチョーに起つた事柄を話した。彼等はそれを聞いて少からず驚いた。彼等は大昔から宮がそこに在るといふ確かな事實を知つて居るので、サンチョーが落ちたといふことは容易く了解した、けれども彼等は、歸つて來るやうにとの通知を受取りもしないのに、サンチョーが何うして總督の職をやめたのか想像がつかなかつた。要するに所謂繩や複滑車を持ち出して、大勢の手の力と大骨折のおかげで、ダップルとサンチョー・パンザとを暗黒から日の光の中へと引きあげた、彼を見た一人の學者は、『すべての惡い總督は、此の一人が死ぬ程に飢ゑて、青くなつて、大方一文も持たずに坑の底から出てくるやうに、丁度そんな風にその政府から出てくるのぢや。』と言つた。

サンチョーは彼の言葉を漏れ聞いた。そして言つた、『そんな蔭口をおッしやる方、皆が私に呉

れた島の政府へ私が行つてからたかゞ八日か十日です。そして其の間は、しよッちう腹一ぱいに飯をたべた事がないのです。一時間でも腹のくちかつた時はなかつたのです。醫者は私を迫害するし敵は私の骨をくだいた。又私は賄賂を取り稅金を徵收する折がなかつた。そして實際これが本當の事ぢやから、私はこんな風になつて出て來る筈ぢやないと思ひます。しかし「人が申し出て神が定める、」と言うて、神樣は何が一番善いか御存じで、又何が一番めい〳〵に合ふかも御存じぢや。「その折に應じて行へ、」「私は此の水を飲まぬとは誰にも言はすな、」とも言ふし、「人が鹽豚があると思ふころには一本の木釘もない」といふこともある。神さまは私の言ふ意味がお分りになる、それで澤山ぢや私はもう何も言はん、言へば何ぼでも言へるけれど、』

『小耳にはさんだ事でそんなに怒つたり氣にかけたりするな、サンチョー、』とドン・キホーテは言つた、『さうせねば際限がないからの。落ちついた心を持つて居るがよい、そして人には好きな事を言はせて置くがよい。何故といふに「惡口屋の舌を止めようとすることは、野原に門を拵へようとするやうなものぢや、」總督がその職によつて金を得て來ると、人は彼は泥棒をしたと言ふ又總督が貧乏で出てくると、人は彼は鈍物で愚人であつたと言ふのぢや。』

『今度は人が、』とサンチョーは言つた『私を泥棒と思ふよりも馬鹿と考へることは請合ひでござ

ります。』

かやうに話しつゝ、子供等や人群に取圍まれて、彼等は城に達した。城内では廊下の一つに公爵と公爵夫人とが彼等を待つて立つて居た。しかしサンチョ！は先づダップルを厩に繋ぐまでは公爵にお目通りしようとはしなかつた、ダップルは最近の場所で大層ひどい晩を過ごしたからと言つて。それから彼は公爵と公爵夫人とに面謁しに二階へ行つた。そして彼等の前に跪づいて言うた、『閣下の御意でございましたので、私は何の手柄もある譯ではござりませぬが、閣下のバラクリアの島を治める爲めに參りました。私は「裸で參りまして今も裸でございます。私は損も得もしませなんだ。」私の政治ぶりの善し惡しは、證人どもがございますから、めい〳〵好きなことを申しましよ。私は質問に答へました。私は訴訟を判決いたしました。そしていつも死ぬ程空腹でございました。何故と申しますれば、醫者のペドロ・レシオが、それはティルテアフ ユエラの産れでございまして、島つき總督づきの醫者なのでござりますが、それが左樣にしむけるのでございます。敵は夜我々を攻撃しました。そして我々を非常な窮境に陷れました。しかし島の人々が申しますには、彼等は私の腕の力によつて平定され我が軍は勝利を得たと申すことでございます。が彼等の申すことが眞實でござりますなら、それだけ彼等に神樣が健康を授けて下さります

やうに。つまるところ、その間私は政治に伴なふ心配と責任との殘らずを負ひました。それで私の考へでは、自分の肩はさういふ物を擔ひ切らんといふことが分りましたのでございます。又さういふものは私の腰にも恰好な荷ではござりませんし、私の箭筒にも恰好な矢ではございません。そこで政治が私を投げ出さんうちに、私は政治を投げ出す方を取つたのでございます。それで私が初めて島へはいりました時と同じ町や家や屋根のあるその島を、初めて見た時のまゝにして昨日の朝歸つて來たのでございます。私は誰からも金を假らうとはしませなんだ、又私は懷を肥やさうともしませなんだ。私は或る必要な法律を制定しようと思ひ立ちましたけれども、どうせ後に殘らんだらうと思ひましたから、殆んど作らずにしまひました。あゝいふ事情では制定しましてもしませんでも同じ事でございますからの。私はあの島を捨てました、今申したやうに、私の驢馬の他には一人の警護の者も召しつれずに立ちのいて來ました。私はある坑へ落ちました。私はその中を突き進みました。辛と今朝太陽の光りで私は出口を發見しました。けれどもこれが私に取りましては中々容易なことではなかつたのでございます。もし天が私の御主人のドン・キホーテさまを私のところへ送つて下さらなんだら、私は世の終りまでそこに止まつて居つたでございましよ。そこで閣下並びに令夫人さま、こゝに閣下の總督サンチョ・パンザが居ります。



私は僅か十日足らず政治を執りました間に、たゞ島だけについて申すのでなく、全世界について申しても、總督となつて何の得もないといふ知識を得たのでございます。で此の點が定まりましたから、閣下令夫人の御足に接吻いたしまして、『お前飛べ、それから私が飛ばう』と言ひまする子供の遊戲に倣ふて、私は總督の職から飛んで、御主人ドン・キホーテさまに仕へませう。何故と申して、さうなつても私は恐れながら慄へながらパンを食ふのではござりますが、とにかく腹一ぱいは頂戴いたします。そして私の身にとりましては、腹一ぱいで居りさへすれば胡羅葡であろが鳩鴿であろが同じことでござりますからの。』

こゝでサンチョは彼の長い演說を終へた。ドン・キホーテは始終彼が他愛のない事を澤山並べ立てることを恐れて居たのである。それでサンチョが斯やうに手短に切り上げたのを見て、ドン・キホーテは心の中で天に感謝をさゝげた。公爵はサンチョを抱いた。そして彼が斯やうに早く總督職をすてたことを心から悲しく思ふといふこと、しかし自分の領地のうちで苦勞が少くて利益の多い何處か他の場所を用意して置くやうにしようとサンチョに話した。公爵夫人もまたサンチョを抱擁した。そして家來共に手厚く彼をもてなすやうにと命じた。何となればサンチョは明かにわるい取扱ひを受け、ひどく痛めつけられたらしく見えたからである。

## 第五十六章　侍女ドーニヤ・ロドリグェズの娘を保護する爲めにラ・マンチヤのドン・キホーテと從僕トシロスとの間に起つた大袈裟な類なき戰ひに就いて。

公爵と公爵夫人はサンチョー・パンザを總督にして慰みものにしたあの冗談を後悔すべき理由は少しも持たなかつた。彼等の家令が同じ日に歸つて來て、サンチョーがその間に言つたり爲たりした殆んど總ての言行を詳細に陳述したのである。家令は辯舌さはやかに島の攻撃やサンチョーの恐怖や出發などの事を述べてその話を結んだ。公爵夫妻はその話を聞いて少からず興に入つた。この後物語は進んで、定められた決闘の日の着いた事、公爵は彼の從僕トシロスに、殺しもせず傷つけもせずに勝つやうにドン・キホーテをあしらふ方法を何遍も敎へてから、キリスト敎徒のなさけといふことを自慢にして居るドン・キホーテに向ひ、生命が危くなるほどまでに戰ふ決闘はキリスト敎の方では許されないと言つて、槍からその鐵の穗を取り去るやうにと命じた事、



又彼の領地内で決闘場を定める申出に同意せねばならなかつた事（神聖會議の命令には反して居るけれども）、そして斯やうな一生懸命の冒險を極限のところまでは押しつめないやうにする事、などを述べてゐる。ドン・キホーテは、拙者の方では何事も閣下の仰せに從ひますから此の事柄に關するあらゆる事は閣下が御意に召すやうにお指圖下さいと言つた。恐ろしい日は到着した。公爵は決闘場の審判者たちの爲めに城の中庭に面して廣い臺を建てるやうに命じた。そして告訴人たる侍女の母と娘の二人を初め、大群集が決闘といふ珍しい觀物を見る爲めに、近隣の村や少村から群り集まつて來た。何人も、死んだ人も生きて居る人々も、此の近所では今まで斯やうな觀物を見たこともなければ聞いたこともなかつたのである。

この決闘場即ち埒の中へ入る最初の人は、この儀式の式長であつた。彼は決闘者をして躓かし め倒れしめるやうな不正な物が置かれてあつたり又は隱されてあつたりしはせぬかとグラッンドを隈なく歩き廻つて檢べた。次に侍女の母子が入つて來て席についた、彼等は身にマントを纏ひ、彼等の眼を覆ひ、否彼等の胸さへもかくして居た。そしてドン・キホーテが場内に現はれて來た時にも、少しも心を動かしたやうには見えなかつた。その後間もなく、二三の喇叭手を先に立て、滿場を壓するやうな勢の強い馬に跨つて大從僕のトシロスが庭の一方に現れて來た。彼は帽子

の眉庇を下げ、一着の丈夫な輝くばかりの甲冑で一分の隙もなく頑丈に鎧うて居た。馬は明らかにフリースランダーであつた。背中が廣く、白地に褐色の斑點があり、そして足の突起部關節には房々した距毛が生へて居た。此の勇ましい戰士は、勇敢なラ・マンチヤのドン。キホーテに對して何のやうに振舞ふべきかを、主人の公爵から豫め敎へ込まれてゐたのであつた。彼はどんな理由があつてもドン・キホーテを殺してはならぬ、彼を殺す危險のない爲に最初の試合は避けるやうにするがよいと注意されて居た。彼は力があるので、全力をあげて衝をする時には、屹度彼を殺すに違ひないからである。彼は場内を横ぎつて歩いた。そして侍女たちが坐つて居る所へ來ると、自分を夫として要求したこの娘を見る爲めに立ちどまつた。試合場の司はドン。キホーテを招いた。彼は既に試合場に居つた、そしてトシロスの側に立ちながら侍女たちに話しかけ、ラ・マンチヤのドン・キホーテが彼等の權利の爲めに決闘することに同意して居るかどうかと訊ねた。彼等は同意すると言つた。又この件に就いて彼がした事は確實に堅く正しく爲られたと思ふと言つた。此の時公爵と公爵夫人とは、構内を見渡す棧敷に位地を占めた。構内は此の危險な類ひない果し合ひを一生懸命に見ようと思つてゐる人々の山で溢れる程一杯になつて居た。決闘の條件は若しドン・キホーテが勝利者となつたならば、彼の相手はドーニヤ・ロドリグェズの



娘と結婚すること、しかし若しドン・キホーテが彼の相手に負けたならば、相手は自分に對して要求された約束から、又滿足を與ふべきあらゆる義務から免れるといふことであつた。式長は彼等に晷を分けた。そして彼等を各々その立つべき場所へ立たせた。太鼓が鳴つた。喇叭の響きが空中に滿ちた。地は震へた。眺めて居る群衆の心は心配で一杯になつた。或る者は幸福な結果を望み、或る者は此の事件の面倒な結果を氣遣うた。そして最後に、ドン。キホーテは彼の全心を傾けて主なる神とドゥルシネア・デル・トボソの君に身を任せ、手始めに必要な合圖の與へられるのを待つて居た。然るに、我が從僕は何か全く違つた事を考へて居た。彼は次に述べようと思つて居ることばかり考へて居たのである。

彼が自分の敵なる娘を眺めて立つた時、彼女は彼が一生に見たうちで最も美しい女であるやうに思はれた。そして世間で普通にキユピッドと呼んで居る小さな盲目の少年は、從僕の心を征服し、それを自分の戰利品の目錄に加へる機會をのがしてしまはうとは思つて居なかつた。それで、見つからないやうに、そツと彼の側へ忍び寄つて、彼はあはれな從僕の左側へ二ヤードの長さの投げ槍を突きさし、そして彼の心臟の奥深く突き通した。それを彼は全く樂にすることが出來たのであつた。何となればキユピッドは見えないものであり、自分の好きな時に出たり入つた

りするし、誰も彼のすることを咎めるものもないからである。さて、開始の合圖が鳴り渡つた時、我が從僕は彼女の美しさに思ひ恍つて恍惚となり、彼女を既に自分の自由の妻にしたやうな氣になつた。そして喇叭の響きには少しも注意をしなかつた。それに引きかへドン・キホーテは合圖の喇叭を聞くか聞かぬに、ロシナンテの出來るだけの全速力で、敵に立ち向はうとして進んで行つた。彼の善良な家來サンチョーは、主人が突き進むのを見て壯に叫んだ、『神樣よ、お導き下さりませ、武者修業者の粹であり花である御旦那さまを！神樣どうぞ勝利をお與へ下さりませ、此方は正しい權利があるのでござります！』然るにトシロスはドン・キホーテが自分の方へやつてくるのを見たけれども、彼は立つて居た場所から一歩も動かなかつた。そしてさうする代りに試合場の司配者に聲高く呼びかけた。何の用かとやつて來た司配者に彼は言つた、『もし、この戰ひは私があの婦人と結婚するかせぬかを決定するのではありませぬか？』『さうぢや』と司配者は答へた。『そんなら、』と從僕は言つた、『私は良心の咎めを感じます。そして若し私が此の上決鬪を進めて行きますと、其の上尚更重荷を置くことになります。それ故私は勝ちを讓まして、卽刻この婦人と結婚しようと思ひます。』

試合場の司配者はトシロスの言葉を聞いて大に驚いた。そして彼は此の事件の協定に與つて居つた人々の中の一人であつたので、彼は何ういふ答へをしてよいやら分らなかつた。ドン・キホーテは敵が一向進んで喰つてかゝる樣子が見えないので、突進の途中で手綱を控へて止まつた。公爵は何故戰ひが進行しないのか其の理由を解することが出來なかつた。然るに試合場の司配者は急いで彼のところへ驅けつけて、トシロスが言つた事を告げ知らせた。さうすると公爵は驚いたばかりでなく非常にそれを怒つた。その間にトシロスはドーニャ・ロドリグェズの坐つて居るところへ進んで聲高に言つた、『貴女、私はあなたのお娘さんと結婚しようと思ひます。そして私はおとなしく私の生命に何の危いこともなしに手に入れることの出來るのを、爭ひや戰ひで手に入れようといふ望みは持つて居りません。』



勇敢なドン・キホーテは彼の言ふことを聞いて言つた、『事情がさういふ風であるからには、拙者は約束から許され解かれたのぢや。彼等を是非結婚させるがよい。そして神が彼の女に與へられたやうに聖ペテロもその祝福を加へられんことを。』

公爵は今や城の庭に下りて行つた。そしてトシロスのところへ行つて彼に言つた、『騎士よ、貴方が勝を讓るといふこと、又良心の疑惑から起る躊躇に動かされて、この娘御と結婚なさると思はれるのは、本當ですかの？』

『閣下さやうでございます。』とトシロスは答へた。

『うまくやるわい、』とサンチョーは言つた、『何故つて「汝鼠に與へんと欲するものあらば、猫に與へよ、然らば汝はあらゆる面倒より免る、を得ん、」といふからのう。』

トシロスはその間に肯の紐を解かうとして居た。そしてすぐに來て手傳うてくれるやうにと彼等に賴んだ。彼の呼吸の力は衰へつゝあつたので、彼はその狹くるしい冠りもの、中に長く閉ぢ籠められたまゝで居ることは堪らなかつたのである。人々は大急ぎで彼の肯を取り去つた。するとかの從僕の顏が皆の目の前に露はれた。これを見てドーニヤ・ロドリグェズと彼女の娘とは大きな叫び聲を發した『これはごまかしです！これはごまかしです！本當の夫の代りに、公爵さまの從僕のトシロスを身代りにしたのです。騙りとまでは申さずとも、こんな瞞着に對しては神樣と王樣の御さばきを願ひます！』

『左やうにお嘆きなさるな、』とドン・キホーテは言つた、『これはごまかしでもなければ瞞着でもありません、若しさうとしましても、その根柢に居るものは公爵ではなくて拙者を迫害するわるい魔法使ひでござります。その魔法使ひは拙者がこの勝利の光榮を贏ち得ることを嫉んで、貴女の夫の顏形を、あなたが公爵の從僕ちやと仰有つた此の人の顏形に變へたのです。拙者の忠告を



お用ひなされ、そして拙者の敵の惡意などには構はずに此の人と結婚なされ。確かにこの人はあなたが夫として得ようと思はれる其の人に違ひありませぬ。』

公爵はこの言葉を聞くと、今迄の怒りは殆ど消え去つて笑ひこけた。そして言つた、『ドン・キホーテどの、身に起りました事は、私が私の此の從僕を從僕でないと信じようとした程に非常なものであります。しかし私たちはかういふ企てなり工夫なりを採用しようではありませか、私たちは此の結婚を、まア二週間ばかり延ばしませう。そしてどうも怪しい此の人に見張りをつけて置きませう。さうすれば恐らくは時が經つ中に元の姿に返るでせう。ドン・キホーテ殿に對して魔法使ひ等が懷いて居る惡意といふものも、さう長くは續きようがないです。殊に人を欺き姿を變へることは彼等には少しも利益はないのですから。』

『あゝ、閣下、』とサンチョーは言つた、『かういふ大惡黨どもは私の旦那樣に關係したことゝいふと、いつもいろ〳〵の形に變へまする。先頃も旦那樣がお勝ちなされた鏡の騎士と申しまする騎士を、奴等は私等の町の生れで私どもとは仲のよい友達の得業士サムソン・カラスコーさんの姿に變へてしまひました。又ドゥルシネア・デル・トボソ姫を奴等は唯のありふれた田舍娘に變へてしまひました。それで私アこの御家來衆も一生涯下男として生き下男のまゝで死ぬちやうと思ひ

ますよ。』

此の時ロドリグエズの娘は叫んだ、『私を妻に求められる此のお方が何であらうとも構ひませぬ。私は此のお方に御禮を申します。私は紳士の妻となつて欺されますよりは、下男の正しい妻となる方がよろしうございます。尤も私を欺した人は紳士ではございませんけれど。』

かい摘んで言へば、凡ての話し、起つたところの凡ての事は、トシロスの變形が何う變るかそれを見るまでは閉ぢ込めて置くといふ事で終りを告げた。凡ての者がドン。キホーテを勝利者として祝した。しかしながら多くの人々は、切りに待ちかねて居た戰士たちの互ひに怪我するまでの打合ひの起らなんだのを見て怒り又失望した。丁度それは子供が、一人の男の絞刑に處せられるのを見ようとして待つて居たのに、起訴者か法廷かゝその男を赦したので、其の場へ出て來なかつたのを見て失望したと同じやうなものであつた。群集は四方に散らばつた。公爵とドン。キホーテは城へ歸つた。彼等はトシロスを押し籠めた。ドーニヤ。ロドリグエズと彼女の娘は、兎にも角にも此の事件が結婚に終るに違ひないと見て取つて、全く滿足して居た。そしてトシロスもまさにこれを望んだのに他ならなかつたのである。



## 第五十七章　はドン・キホーテが公爵に暇乞ひの次第、並びに公爵夫人の侍女の一人なる頓才ある厚かましいアルティシドラとの間に起りしことを取扱ふ

ドン・キホーテは今や彼が城中で送つて居たやうな懶惰な生活を棄てるべきであると感じた。彼は主人夫妻が武者修業者として彼をもてなした無數の豪奢と悦樂のうちに閉ぢ籠つたまゝ、空しく無爲に日を暮すことに依つて大なる誤りを爲しつゝあると想つたのである。又彼はこの懶惰と隱遁に就いては、天に向つて支拂未濟の精算を嚴重にしなければならぬと感じた。そこで或る日公爵と公爵夫人とに、出發すべき許可を與へて呉れるやうに願つた。彼等はそれを與へた。同時に彼等は彼が出發して行くのを非常に悲しんで居るといふ意を表はした。公爵夫人はサンチョー・パンザに彼の妻の手紙を與へた。サンチョーはその手紙の上に涙を濺いで言つた、『私が總督になつたといふ報知が私の家内にこんな大望を抱かせたのでございますか、それが今私の御主人のラ。マンチャのドン。キホーテさまの、浮浪人のやうな冒險に後戻りをする爲め

におしまひになるであらうとは、誰が思ひ設けて居ましたろ！けれども私はテレザが橡實を送りまして義務を果しましたことを見て喜びまする。若しあれが橡實を送りませなんだら、私は殘念だつたでございましよ。又家内は恩知らずであるといふことを見せることになつたでございましよ。その贈物を人が賄賂と言ふことの出來ませんのが私には愉快でございます。何故と申しますに、私は家内が橡實を送らんうちにもう總督になつて居りましたからでございます。そして恩を受けた人がほんの些少な物にしましても、禮心を表はしますことは、道理に叶うたことでございます。つまり私は裸かで總督府へ參りまして裸かでそこから歸つて來ました。それで私は落ちついた心で言ふことが出來まする――そしてそれは決して小さな事ではありませぬ――「裸かで私は生れた、裸かで私は今生きて居る、私は損もせにや得もせぬ」と。』

かやうにサンチョーは彼等の出發の日に獨り言を言うた。前夜の中に公爵と公爵夫人に別れを告げて置いたドン・キホーテは、朝早く城の中庭に甲冑で充分に身を堅めて出て來た。城のうちの者共は皆廊下から彼を見て居た。公爵と公爵夫人も亦彼を見る爲めに出て來た。サンチョーはダップルの上に跨がつて居つた。彼の鞍嚢、旅行鞄、袜などを一緒に乘せた。中にも仕合せであつたのは、トリファルヂィの役を演じたと同じ人の公爵の家令が、道中の必要な費用にあてる爲めに、二百クラウンの金貨の入つてゐる小さな財布を彼に與へたことである。しかしその事はドン・キホーテはまだ何にも知らなかつたのである。今言つたやうに、總ての人がドン・キホーテを見て居る間に、俄かに公爵夫人の侍女たちと腰元どもの中から、厚かましい頓智のきゝアルテイシドラが聲を上げて、傷ましげな調子で歌つた――



聞き給へや、つれなき騎士よ。
手綱を控へよ。そのやせ馬の
横腹に拍車をあつる
必要は何處にかある？
何より汝は飛び去らんとするや？
我は龍にあらず、
又羊にもあらず
若くやさしき小羊なるを。
ダイアナの水の女神

またいにしへのヴィーナスのごと
見るにうるはしき一人のをとめを
汝は弄びぬ。

ビレノー、エーニアス、如何に惡ざまに汝を呼ぶべき?
バラッバス汝と共に行け! あらゆるまがつみ汝が上にふりかゝれ!

無慈悲の盜人よ。汝が爪に
汝が餌としておとなしき
愛らしき少女の心を
なれは持ち去る。
ハンケチを三枚汝は盜めり。
又いと白き大理石よりも
なほうるはしき足より
一對の靴下止めを盜めり。



なれを追ふ長大息は
もしトロイの都市
二千もありしならんには
そをことごとく焼き盡すならん。
ビレノー、エーニアス、如何に惡ざまに汝を呼ぶべき。
バラッバス汝と共に行け! あらゆるまがつみ汝が上にふりかゝれ!

サンチョーには情けの露の
かゝることをゆるされざれ、
また汝がドゥルシネアは今も尙
魔法にかけられしまゝ殘し置かれん。
われに對する汝が僞りは
ドゥルシネアに其の罰下らん、
わが國にてはしばゝ

正しきものが罪人の爲めに拂ふが故に。
汝が大いなる冒險も
失望となれよかし、
なが悦びは皆夢となり
なが戀は忘られ果てよ。
ビレノー、エーニアス、如何に惡ざまに汝を呼ぶべき?
バラッバスなれと共に行け! あらゆるまがつみ汝が上にふりかゝれ!

なれが名よ、亂行の爲めに
ロンドンよりイギリスまで
セヂールよりカディズまで憎まれてあれ。
なが骨牌よ運惡かれ、
なれプリメラを遊ぶとき
手には五も七も一も入らざれ。



なが白齒妝かるゝ時は
その根よ痛め。
ビレノー、エーニアス、如何に惡ざまになれを呼ぶべき?
バラッバスなれと共に行け! あらゆるまがつみなが上にふりかゝれ!

不仕合せなアルティシドラが右の歌でわか身を歎いてゐる間、ドン・キホーテは彼女を眺めつゝ立つて居た、そして彼女には一言の返答もせずにサンチョーの方を振り返つて言つた、『サンチョーよ、拙者はお前の先祖の命にかけてお前に願ふが、お前眞實の事を話してくれ。お前は何かの拍子でハンケチを三枚と靴下止めとを此の戀に惱む少女が言ふやうに取つたかの?』
これを聞いてサンチョーは答へた、『ハンケチは三枚私は持つて居ります。けれど靴下止めなどは一向知りません。』
公爵夫人はアルティシドラの鐵面皮なのに驚いた。彼女はアルティシドラの大膽で、活潑で、厚かましいことを知つて居た。けれどもこんな風に無遠慮に振舞はうとは殆ど思ひ寄らぬことであつた。それにこの冗談に就いては一向豫め知つてゐなかつたから、彼女の驚きは尙一層大き

かつたのである。公爵はその冗談を續けてやらうと思つた。で彼は言つた、『私は貴方が徐り立派な事をなされたとは思ひません。騎士どの、この城であのやうに款待をお受けになつた上に、三枚のハンケチまで持つて行かれるなどゝは、靴下止めのことは言はにしても、ようもまア出來たことです。それは貴方の惡心を見せる所業で、貴方の名譽にふさはしからぬことを存じます。この者の靴下止めをお返しなされ、さもなければ私は貴方に決鬪を申し込みます。私は貴方と對戰した男の顏を從僕トシロスの顏に變へたやうに私の顏形を變へるあの横道な魔法使ひなどは恐れては居りませんからの。』

『これ程大恩を受けました高貴の御仁に對して、』とドン・キホーチは言つた、『拙者はどうして劒の鞘を拂ふやうな仕打ちが出來ませう。ハンケチはサンチョーが所持いたして居ると申しましたから、それをお返し申しませう。靴下止めの方はそれは出來ぬ事でございます。何故と申して拙者はそれを持つて居りませんし、又サンチョーも持つては居りませんからの。此處に居るこの腰元が隱し場所を探して見たら、きツとそれは見つかるでござりませう。公爵よ、拙者は泥棒ではありません。又拙者が生きて居る限りは泥棒にならうとも思ひません、神が拙者を見守つて下さることを止められぬ限りは。この少女は自分の告白によつて戀して居る人のやうに言うて居りますが、それに對しては拙者は何にも咎はありませぬ。それ故にあの少女からなり閣下からなり御宥しを願ふ必要はありませぬ。拙者は皆樣が拙者をもつと善意に解して下されて、再び旅をつゞける爲めに御暇を下さるやう願ひまする。』



『どうぞ御道中御變りのないやうに、ドン。ホーテさま、』と公爵夫人は言つた、『いつも貴方のお手柄のよい御しらせを聞かして頂けますやうに。さア早く御立ちなされませ。貴方が長く留まつてござればござる程、貴方を見て居ります小間づかひどもの心を燃え立たせます。また私の此の小間づかひのことは、眼でも言葉でも二度と間違ひのないやうに懲らしめます。』

『もうたツた一と言だけ聞いて下さいませ、おゝ、勇ましいドン・キホーテさま、』とアルテイシドラは言つた、『それは私が貴君を靴下止めの盜人と申しました事のお宥しを願ふことでございます。實は私はそれを使つて居りましたのでございます。そして丁度驢馬に乘つて居る間その驢馬を探したと申す人のやうに、大間違ひをしたのでございます。』

『私がさう言はなんだことか?』とサンチョーは言つた、『私を盜人ぢやの品を隱すやうな人間ぢやのと! 若し私がそんな事をする氣があるなら、總督になつとる間にや都合の好いことは幾らもあつたのぢやもの。』

ドン・キホーテはお辭儀をした。そして公爵や公爵夫人やそれから側に立つてゐた人々に會釋した。そしてロシナンテの頭を囘らし、サンチョーはダップルに乘つて彼に從ひ、サラゴッサへの道を取つて城から騎り出して行つたのである。

## 第五十八章

は冒險が互に息つく暇もない程に數多くドン・キホーテの上に群り起りし次第を語る。



ドン・キホーテは廣々した野原へ出て、アルティシドラの執念から免れ救はれて、やれ〳〵と思ひ、更に再び騎士道の職務を繼續しようといふ新しい元氣の振ひ興るのを覺えた。そこでサンチョーを顧みて言つた、『サンチョーよ、自由は天が人に與へた最も貴重な賜物の一つぢやの。土の中に埋まつて居り海の底に隱れて居る如何なる寶も、これとは比べることが出來ぬわい。自由の爲めには、名譽の爲めと同じく、身命を賭しても宜いし又賭すべきものぢや。それと事かはつて囚はれの身となることは人の運命に落ちて來る一番わるいことぢや。サンチョーよ、私がこれを言ふのは、我々が今立ち去つた此の城で、享けた丁寧なもてなしや澤山の珍味を御前が見たからのことぢや。さて、かうした美味の饗應や雪のやうに冷たい飮料のうちにあつて、拙者は恰も飢餓の窘迫を受けつゝあつたやうに感じたわい。何故と言うて見い、拙者はさういふ御馳走を、自

分のものであると同じやうな自由な心持ちで咏合はなんだからぢや。受けた恩や惠みを返すべき義務を負うてをるといふ感じは、精神の獨立を抑へ止める束縛なんでの。天から一片のパンを與へられた人は仕合せぢや、その人は天の外には何物にも感謝を捧ぐべき義務を有つて居らぬからの！』

『さうは仰有りますが、』とサンチョーは言つた、『公爵家の家令が小さな財布に入れて私に呉れました二百クラウンの金貨に對して、私等の方で何のお禮も言はぬちうことア、ちッと似合はぬことでござりますよ。その財布は不時の折の用意にと、溫め膏藥や毛の襟巻のやうに胸につけて持つて居りますわい。私等は款待をして呉れるお城をいつでも見つけるわけには行きませんからの。又折には路ばたの宿屋へ泊つて棍棒で打たれることもござりますからの。』

このやうな會話をしながら騎士と家來の武者修業は其の旅をつゞけて行つた。彼等が半リーグ以上も進んだと思ふ頃、勞働者のやうな着物を着た十二三人の男が、綠りの牧場の草の上に上衣を敷いて辨當を喰べて居るのを認めた。彼等はその側に、下に何物かを隱して居る白い敷布のやうに見えるものを持つて居た。それは眞直ぐに突つ立つて居るものもあれば平たく横になつて居るものもあり、また間を置いて並べてあつた。ドン・キホーテは食事をして居る者の方へ近寄つ



て、先づ叮嚀に挨拶して、この布の下には何があるのかと彼等に訊いた。『貴方、』とその仲間の一人は答へた、『この布の下には私等の村へ建てまする祭壇の背面にせうとて浮彫に彫らせたお像がござります。私等は其の像の汚れんやうに被ひを掛けて、破れんやうに肩に乘せて運ぶのでござります。』

『拙者はそれを拜見いたしたいものぢやが、』とドン・キホーテは言つた、『それほど注意して持ち運ぶお像ならば屹度立派なものに相違あるまい。』

『私ア立派なものぢやと思ひます！』と他の者が言つた。『これにかゝつた金高を聞いただけでも分ります。全く五十デュカット以上かゝらぬものは一つもありません。そりや貴方が見なされたら分ります。一寸お待ちなされ、貴方の目で見て見なされ。』そして彼は食事を止して立ち上つて行つて、第一の像の被ひを取りのけた。それは聖ジョージの像であることが分つた。通例畫に描かれてあるやうに、馬に跨つて其の足下には一匹の龍がのたうちまはり、そしてその咽喉には烈しい勢ひで槍が投げ下されてあつた。彫群像全體が謂はゆる黃金の光であつた。これを見てドン・キホーテは言つた、『この騎士は天の軍勢が曾て有して居つた最上の武者修業者である。彼はドン・セイント・ジョーヂと呼ばれて居つた。そして其の上に少女等の守護者であつた。その次のものを

拝見いたしたい。』

その人は彼ひを取りのけた。それは馬に乗つて、自分の上衣を乞食に分ち與へてゐる聖マルチンの像であるやうに見えた。ドン・キホーテはそれを見るや否や言つた、『この騎士もまたキリスト教徒の冒險家の一人であつた。しかし拙者が信ずるには、此人は勇敢であるよりは寧ろ寛大であつた。サンチョー、お前は此人が乞食に上衣を分けてその半分を與へて居るのを見て、それが分るぢやらう。きツとそれは冬であつたのぢや。』

『それは大方さうぢやござりません、』とサンチョーは言つた、『この人は「吳れるにも保つて居るにも考へてする必要がある、」とちと諺によつて居りますわい。』

ドン・キホーテは笑つた。そして次の布を取りのけるやうに頼んだ。その下には馬上に乘つたスペイン守本尊の聖者の像が見られた。彼の劍は血で汚ごれ、ムーア人を踏みつけて其の頭を足下に踏みにじつて立つて居た。それを見るとドン・キホーテは叫んだ、『あゝ、これは基督の軍勢に屬する騎士の一人ぢや！この人はムーア退治のドン・セイント、ジェームスと呼ばれ、この世に曾て生れ來り且つ現に天國に居る聖者たち騎士たちの中の最も勇敢な一人なのぢや。』



やがてまた他の布が取り上げられた。その布は馬から下り立つて居る聖者ポーロを掩うて居たのである。それは通常彼の改宗を描いた繪に表はされてある細かいところをそなへて居た。ドン・キホーテは、それがキリストは話しつゝありポーロは答へつゝありと言ひたい程に生き〳〵とした樣子に出來てゐるのを見て、言つた、『これは其の當時にあつては、我々の主たる神の敎會の爲めには最大の敵であつた。が後には並びない最大守護者となつた。彼は生前は武者修業者であり、死しては金剛不壞の聖者である。彼は主の葡萄園に於ける倦むことなき勞働者ぢや、彼は異敎徒の敎師であつて、その學校は天國ぢや。そしてその敎師校長はイエス・キリスト御自身であつたのぢや。』

もうその他には像はなかつた。そこでドン・キホーテは彼等に又その像に布を被はした。そして像を持ち運ぶ人々に言つた、『皆さん、拙者は只今これを拜見した事を仕合せな前兆と思ひます。これらの聖者たち騎士たちは拙者と同じ職業の人で、卽ち武道の人でありましたからの。唯拙者との相違は、此人等は聖者であつて神聖な武器を以て戰ひましたが、拙者は罪深い人間で、人間の武器を以て戰ふといふ點です。彼等は武器の力によつて天國を得ました。天國も暴力になやまされることがあるからぢや。然るに拙者は、今まで難業によつて何を得たといふものもない。しかし

若しわがドゥルシネア・デル・トボソガその身の自由を取り戻したらば、恐らくは運も開け心もちに回復して、拙者が現在追求して居るよりももツとよい道に歩みを向けることが出來ることと思ひます。』

サンチョーはこれに對して言つた『神樣がお聞きなされて罪あるものには聞えませぬやうに、』

人々はドン・キホーテの服裝に驚いて居たが、其の言葉には尙一層驚きを以て滿たされた、尤も彼等はその言葉の意味の半分も理解しなかつた。彼等は食事を終へて、その像をば背中に擔ひ。ドン・キホーテに別れを告げて旅路をつゞけた。

恰も今まで少しもドン・キホーテを知らなかつたかのやうに。サンチョーは主人の知識の廣いのに今更驚いた、何となれば此の世の中にドン・キホーテが通曉せぬとか記憶してゐないとかいふ話や事柄は無いやうに彼には思はれたからである。彼は主人に言つた、『旦那樣、ほんとに今日起つた事が冒險と言はれますなら、それは今までの道中で私等にふりかゝつたうちで一番心持ちのよい一番おもしろいものでござりました。私等は擲りつけられたり面喰はせられたりせずに通り抜け、私等劍を拔きもせねば、身體で地面を打ちもしませず、飢ゑ渴えもしませなんだものな。この眼でこんな事の見られたのは有りがたいことぢや！』



『よう言うた、サンチョー、』とドン・キホーテは言つた、『ぢやがのう、始終同じではないと思うとれよ。いつも同じ道を走るものぢやないと思うとれよ。俗人は一般にかういふ事を凶兆と言うてをるが、それは如何なる自然の理由にも土臺を据るてをらぬので、唯賢人によつてのみ幸福な出來事と思はれ考へられるのぢや。凶兆を信ずる人々のうちの或る者は、朝早く起きて家を出かけて行つて、祝福された聖フランシス派の托鉢僧に出逢ふと、まるでグリッフィン（神話にある牛に獅子の如き半ば鷲に似た怪獸）にでも出逢うたやうに向きをかへて家に歸つて來る。又メンドーザのやうな人間は、鹽をテーブルの上にこぼすと心の上に陰氣の影が掩うて來る。それは丁度自然が、このやうな些細な事によつて、今に來る不幸に對して警告を與へたか何ぞのやうににぢや。（家庭の迷信はスペインに於いては一般普通の事になつてゐる、セルガアンテスの有名な短篇集ターゴエドーは、その驚物の本の中に此のメンドーザの家庭の事を言つてゐるが、もし君が讀んだならば、それで前兆は消えるのだ」と賢人やキリスト敎徒は天が爲さんと欲する事を潰すやうなことはない。シピオがアフリカへ遠征した時、彼は岸へ上らうとして躓いて倒れた。兵士等は惡い前兆であると思うた。然るに彼は手のうちに土を掴んで叫んだ、「お前は私から免れることは出來ぬ、私は腕の中にしつかりとお前を押へて居るぞ。」このやうに、サンチョーよ、かういふ像にも出逢うたことは拙者には最も仕合せな出來事であつたのぢや。』

『私は十分さうとは信じられます、』とサンチョーは言つた。『しかし旦那樣に伺ひますが、スペイ

ン人が戰さにかゝる時に、あのムーア人殺しの聖者ジェームスに願をかけて「サンチャゴぢやスペインを閉めよ！」（スペインの昔の闘の聲）と言ふのは何ういふ理由でございませう、其の頃は、スペインは開いて居りましたので、それで閉める心要があつたでございますかい。さうでたけりやこれは何ういふことでござりますか？』

『お前は甚だ單純ぢや、サンチョーよ、』とドン・キホーテは言つた。（ハルツエンブツシュはここで何かドン、キ』『お前も知つてをる通り、神樣は其の保護者たる聖者としてまた擁護者としてスペインに赤十字のあの偉い騎士をお與へなされたのぢや。殊にスペイン人とムーア人とが激しい戰爭をした際の。それ故に彼等は軍の場合には何時でも守護者として彼に歎願し祈るぢや。それで彼は幾度もあらゆる人々の目前でハガレーン人（ムーア人はハガールの子孫であるといふ傳說に從つたのである）の軍勢を打ち倒し、足の下に踏みつけ、滅し殺して呉れた。その事實に就いては拙者はお前にスペインの正史に記錄されてある多くの例を擧げて聞かせることが出來るわい。』

サンチョーは話題を變へた。そして主人に言つた、『旦那樣、私ア公爵家の小間づかひのアルテイシドラの大膽なのにや驚きましたわい。世間でキューピッドと言うて居る者が、むごたらしうあの女に矢を突きさして傷をつけたに違ひござりません。世間で言ふには、キューピッドといふ



奴は盲目の腕白小僧であつて、彼奴はかすみ眼で、もツと本當に申しますれば眼が見えませんが、彼奴が心臟を狙ひますと、それがどんなに小さうても、きツと彼奴の矢を心臟の奥深くまで突き差すさうでござります。私はまたキューピッドの矢は娘らしいしとやかさと内氣とで先を鈍くしたり取りのけたりも出來ると聞きましたぞよ。けれどもものアルテイシドラにかゝつちや、その先が鈍くなるよりも尖る方のやうに見えますわい。』

『サンチョーよく氣をつけい、』とドン・キホーテは言つた、『戀といふものは何んな思慮にも影響されず、どんな理性の拘束をも認めず、死と同じ性質のもので、金殿玉樓の王をも貧しく賤しい小屋の羊飼をも同じやうに襲ふのぢや。そしてそれが心の全體を占めてしまふと、それが爲始める第一の事は、心から恐怖と羞恥の念を逐ひやることぢや。それ故恥かしいと思はずにアルテイシドラは心のたけを述てをるのぢや。あれは拙者の心には氣の毒とよりも寧ろ當惑を感ぜさせたわい。』

『ひどい邪慳なことぢや！』とサンチョーは叫んだ。『聞いたこともない情知らずぢや！私ア内證で言ふのでござりますが、彼の娘のほんの一寸した可愛らしい言葉を聞いたばかりでも、私はその言ふなりになつて奴隷のやうになつたでござりませう。えゝい！貴方は、何といふ大理石のや

うに冷たい心ぢや！何といふ眞鍮のやうな腸ぢや！何といふセメントのやうな魂ぢや！ぢやが私はあの娘が旦那樣の何を見てあんなに參つてしまうたか考へつきませんわい。何んな華美やかなお姿が、何んな大膽な御樣子が、何んな元氣なおやさしが、何んな顏形の美しさがさ、さういふもの、一つ一つか全體か、一體何がまアあの娘に旦那樣を思はせることになりましたやら？全く何遍も私は立ち止まつて旦那樣の足の底から頭の頂邊の髮まで眺めましたが、人に思ひをかけられるよりか怖がらせる方が多からうと思ひましたよ。それに戀の心を起す第一の重なものは、美しいことぢやと人のいふのを聞きました、けれども旦那樣は少しもお美しいところはないのぢやから、私はあの可愛さうな奴めが何に思ひをかけたのか分りませんわい。』

『考へて見るがよい、サンチョー、』とドン・キホーテは答へた、『美しいといふのにも二た通りある、一つは心の美しさで、も一つは體の美しさぢや。心の美しさは智慧に、溫和に、貴い行ひに、心の寬さに、良いたしなみに表はれるのぢや。そしてかういふ性質は醜い人にも在るものぢや。人の心を引くものが、此の種の美しさでなくて形の美しさであつて、戀は急激に烈しく突發し易いのぢや。サンチョーよ、私は明かに自分の美しうないことを認めてをるが、それと同時に自分の醜怪でないことも知つて居る。若し人が上に述べたやうな心の天賦を持つて居るならば、



怪物とはならず戀の的となるには、正直な人にとつてはそれで充分ぢや。』

こんな話をしながら彼等は或る森の下の細道を辿つて進んで行くと、急に少しも思ひがけもなく、ドン・キホーテは樹から樹へと掛け渡した綠の絲の網に引ッかゝつた。そしてそれは何であるか考へつかなかつたので、彼はサンチョーに言つた『サンチョー、この網の事件は最も世にも不思議な珍事となるであらうと拙者には思はれる。これは拙者を迫害する魔法使ひが、アルティシドラに對する拙者の無情な仕打ちに復讐しようとて、拙者をこの網にからませ、この旅を遲延させようとして居るに相違ない。よしそんなら、たとひこの網が綠色の絲ではなくて、最も硬い金剛石で造られてあつたにしても、又は嫉妬ぶかい鍛冶の神がボーナスと軍神とを網にかけたあの網よりも強いにしても、拙者はそれが燈心草か木綿絲で造られてあるかのやうに容易く破つてみせてやらうわい。』

然るに恰も彼が遮二無二おし進んでその網を破り捨てやうとした時、突然木立の間から二人のすぐれて美しい女羊飼ひが彼の目の前に立ち現はれた——少くとも少女等は綺麗な錦襴で拵へた胴衣とサヤス（農家の女の着る一種の女袴）との外は、羊飼ひのやうに裝つて居た。語をかへて言へば、そのサヤスは金の縫箔した波紋布の褊骨のついた立派な腰衣であつた。太陽の光線とも競ふべき金色に輝くその

頭髪はゆるやかに肩の上にふりかゝつて、縁の月桂樹と赤い莵とを巻きつけた花環で飾られてあつた。そして彼等の年は誰の目にも十五より下ではなく十八より上とは見えなかつた。その有様にサンチョーは驚きに満たされ、ドン・キホーテは魅せられ、太陽をして彼等を見る爲めにその歩みを止めしめた程であつた。遂に羊飼ひの女の一人が最先にドン・キホーテに話しかけて言つた。『お待ちなさい、騎士さま、この網をお破りなさいますな。この網は貴方に邪魔をする爲めに張つたのではございません。私どもの慰みの爲めに張つたのでございます。何故網を張つたか又私どもの名は何といふかと、貴方がお尋ねなさることゝ思ひますから、手短に貴方にお話しいたしませう。此處から二リーグ程はなれて居ります或る村に、身分の高い幸福な紳士がたが澤山居られまして、この方々が澤山の友達や親類の方と御相談なさいまして、その方々の奥様、御子息さん、お嬢さん、近所の人や、お友達、御親類などを誘ひ合せ、この場所へ來て遊び樂しまうといふことになつたのでございます。こゝは此の界隈では一番樂しい場所なのでございます。それで私どもの中で新しい田舎風のアルカディア（ギリシヤの高い仙境）の名を造り、私ども娘たちは羊飼ひ女のやうに裝ひ、若い男の方は羊飼ひのやうに裝うたのでございます。私どもは二つの牧歌の問答歌を用意して來ました。一つは有名な詩人ガルシラソの（ガルトガルの詩人）ので、も一つは最もすぐれたカモエンの



います。それはポルトガル語で書いたものでございます。けれども私どもはまだこれを演じて見たことはないのでございます。昨日私どもは初めて此處へ參りました。私どもは此の牧場中を肥やします廣い川の岸邊の木立の中に野外テントといふものを張りました。そして昨夜馬鹿な小鳥を捕ります爲めに此處の樹の間に、此の網をかけました。その小鳥を私どもは驚かして網へ飛び込ませるやうにするのでございます。若し貴方が私どものお客樣になつて下さいますならば、私どもは心から喜んで叮嚀にお迎へいたします。此處へは今は心配も悲哀も入つて來ぬのでございますから。』

彼女は默つてもうその上は言はなかつた。でドン・キホーテは答へた、『誠に美しい御婦人よ、アクティオンが思ひもかけずダイアナの小川で浴して居るのを見た時でも、拙者が貴女がたの美しい御樣子を見た時ほどに引きつけられ驚きに打たれはせなんだでござりませう。拙者は貴女がたの御遊樂のなされ方を結構と存じます。又貴女がたの御深切な御招待を感謝いたします。若し拙者が貴方がたの御役に立ちますならば、貴方がたは拙者が服從いたすものと充分にお信じなされてお命じ下さい。拙者の職掌は、どのやうな境遇の人々にも、殊に貴女がたのやうな高貴の人々、それは御樣子で知れますするが、身分の高い方々に、謝恩の意を表し其の方々のお役に立つや

うにする外にはないのです。網を張りましたところで、それは極く狭い場所をふさぐに過ぎませんが、よし其の網が全世界の表面を占めたとしましても、拙者はそれを破らぬ爲めに、他の新しい世界を求めて、そこを通り過ぎるやうにいたすでございませう。そして拙者の此の誇張した言葉を貴女がたが幾分なりとも御信用下さるやうに、斯やうな名前は貴女がたのお耳に達して居るかもしれませぬが、貴女がたにかゝる事を申し上げるものは正しくラ・マンチャのドン・キホーテその人であることを御承知願ひます。』

『あゝ！貴女、』と忽ち今一人の女羊飼ひが叫んだ、『何といふ大幸運が私たちの上にふりかゝつて來たのでせう！貴女は私たちの前においでなさる此のお方を御覽ですか？此のお方こそ世界中で最も勇敢な最も熱誠な最も禮儀正しい紳士でいらつしやるのですよ。刷物になつてをつて私の讀みました此のお方の御手柄の物語が嘘を言つて私を欺して居るのでなければ、此のお方と一緒に居られる此の善いお人は御家來のサンチョー・パンザさんに違ひありません。この人のおどけには誰も叶ひません。』

『全く左樣でございます、』とサンチョーは言つた、『貴女が仰有る通り私はその剽輕者の家來でございます。そして此の紳士は私の主人ラ・マンチャのドン・キホーテさまでございまして、物語に



あつたり人が噂をしたりするのと同じ人でございます。』

『もし貴女、』と一人の娘は言つた、『私たちはあのお方がお留まりなさるやうにお願ひしませう。さうしたら父や兄弟たちはどんなに喜びますでせう。私もまたお一人は勇敢でお一人は剽輕ぢやと貴女がおツしやつた通りのことを聞きました。それからまた人の噂では、あのお方は今まで聞いたこともない程に心變りのせぬ忠實な戀人で、そしてその御婦人はドゥルシネア・デル・トボソと申す方で、その御婦人がスペイン中の美人の譽れを一人で取つて居られるさうですよ。』

『實際、貴女の比類なき御美しさは彼女よりもすぐれておいでなさるかもしれませぬが、さうでないとしますれば彼女がその譽を受けるのは正當なことでございます。しかし御婦人がた、拙者を強てお留め下さることは御無用になされませ。何故と申すに、拙者の職掌上焦眉の急が迫つて居りますので、如何なる事情の下にも休息することは出來ませぬから。』

この途端に四人が立つてゐた此の場所へ、一方の女羊飼ひの兄弟が一人やつて來た、二人のやうに羊飼ひの着物を着て、そして二人のやうに贅澤に華美やかに着飾つて。二人は彼に、この二方は貴方が既に物語を讀んで知つて居られる、あの勇敢なラ・マンチャのドン・キホーテと其の家來のサンチャーであると紹介した。そのはでやかな羊飼ひは、ドン・キホーテに會釋して私と御一

緒にテントまでおいで下さいと請じた。そこでドン・キホーテは拒むことが出來ないで同意した。恰もその時獲物は驚かされて飛びたつた。網はいろ〳〵な種類の小鳥で一杯になつた。それは綠の色に欺かれて、逃げ去らうとした危險に却つて陷つのである。羊飼ひと女羊飼ひのやうに裝うた派手やかな三十人以上の人々が、此の場所に集まつた。そして直ちにドン・キホーテと家來のサンチョーは紹介せられた。それを聞いて彼等は少なからず喜んだ。彼等は皆物語を讀んで彼の事を知つて居たのである。彼等はテントへ入つた。そこには食卓の設けが整へてあつて、そして精選して澤山にまた清潔に備へられてあつた。彼等はドン・キホーテを有名な人として取扱ひ、彼に名譽の坐席を與へ、そして皆彼に注目し、その樣子を見て驚いて居つた。遂に食事が終りになつたので、ドン・キホーテは落ちつき拂つて聲をあげて言つた。

『人間の犯す最も大なる罪の一つは――或る人は高慢であるといひませうが――拙者は忘恩であると申します、地獄は恩知らずで一杯ぢやといふ世間の言草に從ひまして、、拙者は力の及ぶ限りこの罪を、理性の能力を享け得た時以來つねに避けようと努めました。若し拙者が他の方から善行に報いることが出來ませぬならば、せめて拙者はそれに報いたいといふ拙者の志を以てこれに代へまする。また若しそれが充分でありませぬならば、拙者はその善行を公表いたします。なぜかといふに、自分に受けた善行を世の人々に知らせる者は、もしその力に及びさへすれば他の善行を以てこれに報いるでありませうから。これに大抵恩惠を受ける者は、恩惠を與へる人よりも劣つたものでありまする。そかるが故に神は總てのものに優れてをられます。何となれば神は最上の與へ者であるからです。そこで人間の供物は神の賜物に對する充分な報恩としては遙に〳〵及びません。しかし或る程度に於ける感謝は、此の缺陷不足を償ひます。それ故に拙者は此の處で拙者に與へられた御恩に對して感謝しはしながら、拙者の力の狹い制限に依つて限られて居りますので、同じ度合に御報い致すことは出來ませぬので、拙者は拙者なりに、力に及ぶ事と拙者が捧げねばならぬものとを捧げまする。卽ち此處においでなさる女羊飼ひの裝ひをしてござる御婦人がたは――こゝにござる淑女紳士の御免を蒙つて申しますが――拙者の心中に思うて居る唯一の婦人、比ひなきドゥルシネア・デル・トボソを除きましては、此の世の中で一番綺麗で一番禮儀正しい御婦人であるといふことを、サラゴッサへ通ずる此の大道の眞中でまる二日間拙者は主張することにいたします。』

熱心に耳傾けて居たサンチョーはこれを聞いて大聲で叫び出した、『一體世の中に私の此の御主人が氣違ひぢやと言うたり誓うたりする人があるものかい？さア旦那衆の羊飼ひの方々、村の坊



いたします。なぜかといふに、自分に受けた善行を世の人々に知らせる者は、もしその力に及びさへすれば他の善行を以てこれに報いるでありませうから。これに大抵恩惠を受ける者は、恩惠を與へる人よりも劣つたものでありまする。そかるが故に神は總てのものに優れてをられます。何となれば神は最上の與へ者であるからです。そこで人間の供物は神の賜物に對する充分な報恩としては遙に〳〵及びません。しかし或る程度に於ける感謝は、此の缺陷不足を償ひます。それ故に拙者は此の處で拙者に與へられた御恩に對して感謝しはしながら、拙者の力の狹い制限に依つて限られて居りますので、同じ度合に御報い致すことは出來ませぬので、拙者は拙者なりに、力に及ぶ事と拙者が捧げねばならぬものとを捧げまする。卽ち此處においでなさる女羊飼ひの裝ひをしてござる御婦人がたは――こゝにござる淑女紳士の御免を蒙つて申しますが――拙者の心中に思うて居る唯一の婦人、比ひなきドゥルシネア・デル・トボソを除きましては、此の世の中で一番綺麗で一番禮儀正しい御婦人であるといふことを、サラゴッサへ通ずる此の大道の眞中でまる二日間拙者は主張することにいたします。』

熱心に耳傾けて居たサンチョーはこれを聞いて大聲で叫び出した、『一體世の中に私の此の御主人が氣違ひぢやと言うたり誓うたりする人があるものかい？さア旦那衆の羊飼ひの方々、村の坊

さんは悧巧で學問もありましよが、私の御主人が申したやうな事の言へる坊さんがありますかい。又たとへどんなに剛氣ぢやといふ評判を取つてをらうと、今私の御主人が申し出ましたやうな事を申し出られる武者修業者がありますかい？』

ドン・キホーテはサンチョーの方を振り返つて、怒りに燃える顏をあげて言つた。『サンチョー、一體この全世界にお前が馬鹿でないと言ふ人があるといふのか？腹まで馬鹿で無遠慮で惡ごすい人間ぢやと言はぬ人があるといふのか？拙者の事に餘計な世話を燒くことを、又拙者が賢いか馬鹿かを研究するやうに、誰がお前に賴んだか？默つて居れ。一言も返答するな。ロシナンテに鞍が置いてないなら置くがよい。そして拙者の申し出を果たしに出かけよう。正義は拙者の方にあるによつて、それに疑ひを挾まうとする者は殘らず征伐されることゝ、さう思がよい。』と大いに立腹して、その忿怒を明かに表はして、驚き異しむ人々を後に殘し、狂氣か正氣か何れであると彼を見るべきかと人々に疑はしめつゝ、その席から立ち上つた。人々は其のやうな挑戰に身を捲き込ませることを思ひ止まらせうとつとめて、彼等は彼の報恩の精神には既に滿足して居ることと、又彼の功業の歷史に語られてあるもので十分であるから、彼の勇敢な精神を信ぜさせる爲めに何等新しい證據を要さぬといふことをドン・キホーテに吳々言つたのであるけれども、ドン・キホーテは尙も彼の決心を固守した。かくてロシナンテに打ち跨り、腕には圓楯を引き寄せ槍を握つて、綠の野から程遠からぬ大道の眞中へと突ツ立つた。サンチョーはダップルに乘つて、野天の集ひの人々と共に後からついて行つて、ドン・キホーテの見え坊な途方もない申し出の結末が何うなるか見やうと思つて行つた。



ドン・キホーテは、其の時彼が先刻言つたやうに、大道の眞中に立ちはだかり、天にも鳴り響く大音聲でかういふ意味の事を言つた、『のう〳〵この二日の間に此の道を行き過ぎ又は行き過ぎようとする旅人、旅行者、騎士、家來、徒歩の人、馬上の人よ！武者修業者ラ・マンチャのドン・キホーテが意中の婦人ドゥルシネア・デル・トボソを除いては、この牧場と森の中に住居する女神に宿れる美しさ恭しさは、此の世の總てのものに勝ると、武器にかけて主張する爲め此處に控へて居ると知られよ。ぢやによつて、反對の意見を抱くものは來れ、拙者はその人を此處で待つて居るのぢや。』

二度彼は同じ言葉を繰り返した、そして二度ともその言葉は一人の冒險者にも聞かれなかつた。然るに好きが上にも好く彼の爲めに事を導きつゝあつた運命の配劑で、やがて間もなく一團の乘馬の人が路上に現はれて來た。彼等の多くは、手に槍を提げ、密集して大急ぎでやつて來た。ド

ン・キホーテと共に居つた人々は、彼等を見るや否や方向をかへて路から少し離れた所へ退いた。何となれば彼等は、若し彼等が其處に止まつて居たならば、禍が身におちて來るに違ひないと思つたからである。然るにドン・キホーテはびくともせずに其の場所に立つて居た。サンチョーはロシナンテの尻の方に身を隠した。槍手の一隊は近づいて來た。先頭に居つた彼等の一人はドン・キホーテに向つて叫び出した、『道をどけやい、惡魔の小倅め、どかぬと此の牡牛どもが貴さまを滅茶〳〵に蹴き潰してしまふぞ！』

『暴徒ども！』とドン・キホーテは答へた、『拙者は牡牛なんぞは物の數とも思はぬわい、たとへジャラマ川の岸で育てられた最も猛烈なものであらうとも。惡者ども、速に拙者が宣言した事は眞であると白狀せい。それがいやなら拙者と合戰をするがよい。』

牛追ひは返事をする暇もなかつた。又ドン・キホーテも路を避けようとしたにしてもさうする暇がなかつた。そこで猛烈な牡牛と馴れた若い牡牛との一群は、明日鬪牛のある村へ彼等を驅りつゝあつた牛追ひや其他の者どもの一團と共に、ドン・キホーテの上を、サンチョーの上を、ロシナンテとダップルとの上を通り過ぎた、彼等を悉く地上に投げ倒し、そこら中にのたうち廻らせて。サンチョーは押し潰されたまゝになつて居た。ドン・キホーテは魂消てしまつた。ダップルは打たれ、ロシナンテもあまり滿足ではなかつた。けれども遂に彼等は起き上つた。そしてドン・キホーテは此處に蹲きかしこに倒れながら大急ぎで、その一群のあとを追うて走り出した、『待て！止まれ！この惡者ども、唯一人の騎士がお前等を待つて居る、而もその騎士は「逃げる敵には銀の橋を造れ」と言ふ人々と氣質や意見を同じうするものではないのぢや。』と叫びながら。けれども、退却しつゝある一群は急ぎに急いで、その爲めに止まりはしなかつた。又彼の脅迫は、去年の雲ほどにも氣に留めなかつた。ドン・キホーテは疲れたので立ち止まつた。復讐されたよりも激怒して、サンチョーとロシナンテとダップルの來るまで待たうと路の上に坐つた。彼等がドン・キホーテのところへ着くと、主人も家來も又再び乘つて、模擬のアルカディアの人々と暇乞ひをしに後戻りもせずに、滿足するよりも屈辱を感じつゝ、旅をつゞけて行つたのである。

## 第五十九章　にはドン・キホーテにふりかゝつた一つの冒險とも見做さるべき不思議な事が傳へてある。

彼等が涼しい森の中で見出した清い澄みきつた泉は、牡牛の一群の無禮な行ひによつて得た塵と疲勞からドン・キホーテとサンチョーとを救うた。ダップルとロシナンテから面勒や手綱を取り外して、自由に放して置いて、寄る邊なきこの一對即ち主人と家來とは、泉の側に坐つた。サンチョーは彼の鞍嚢の中を掻き探つて、自分でコンデュミオと呼んでゐるものを取り出した。ドン・キホーテは口を嗽ぎ、顔を洗つた。冷やしたので彼の衰へた精力は回復した。彼は全く分の前にあるものに一口もよう觸れないで、ひたすらに主人がその毒吻をするのを待つて居た。の腹立たしさから、物を食はうともしなかつた。そしてサンチョーは全く禮儀を守る心から、自けれども、主人が物思ひに沈んで、口へ麪麭を持つて行くことを忘れてゐるのだと感づくと、彼は一言も發せずに、有らゆる善良な躾を足下に踏みにじつて、麪麭や乾酪を手當り次第に片ッぱ



しから腹の中へ貯へ始めた。

『食ふがよい、サンチョーよ』とドン・キホーテは言つた。『命を大事にせい。それは私によりもお前に大切なのぢや。私の方はこの胸の苦しみとこの不幸の重荷の下にこのまゝ死なしてくれい。サンチョーよ、私は死にながら生きる爲めに生れ、お前は食ひながら死ぬ爲めに生れたのぢや。私の言ふことが本當ぢやといふ證據には、よう私を調べて見るがよい。私は物の本に印刷され、武器を取つては名高くなり、立居振舞は恭々しく、王侯貴人には尊敬され、處女等には機嫌を取られた。それだのに、今朝も今朝とて自分の勇敢な功績によつて贏ち得た榮譽や勝利や冠を喜び待つて居た矢先きに、私はあの不潔な汚い動物どもの蹄に踏み蹴り碎かれるやうな目に遭うたのぢや。かう考へると、私の齒は鈍り、顎は麻痺れ、手は痙攣り、そして何を食ふ氣もなくなつてしまふわい。その果ては、飢え死にといふ、あらゆる死のうちでも一番殘酷な死に方をしたいと願ふくらゐぢや。』

『それぢや、』とサンチョーは一生懸命むしや〳〵嚙みながら言つた、『旦那樣は「マルタを死なせてもえゝが、その代りたらふく食はせて死なせろ」ちう諺にア贊成なさりませんな。私アどッちにせよ、自殺したうはござりません。それどころか、私は補靴工がやるやうにやりたうござりま

す。補靴工は、自分の歯で自分の要りやうなだけに革を噛み延ばしますからの。私ア神樣が定めておくんなさつた壽命のお仕舞ひになるまでは。食うて命を延ばしましよ。旦那樣、くれ〳〵も申しますがの、旦那樣のやうに自暴で死なうと考へるほど馬鹿げたことアございませんぞい。私の勸めを聞き入れて、腹を拵へてからこの綠りの草疇の上に横になつて一と眠りおやんなされ。さうして、起きなされたら、些とア氣分がようなりましよわい。』

ドン・キホーテは彼の勸めるまゝにした。このサンチョーの理屈は、愚人の理屈とよりは寧ろ哲學者のそれのやうに思はれたからである。そしてドン・キホーテは言つた、『サンチョー、私が今言ふことをお前がして呉れたら、私の心はいよ〳〵確かに安まらうし、また私の重々しい胸もこれ程ではなくならうぞよ。それはかうぢやお前の勸めるまゝに私は眠るから、その間にお前は彼方へ行つて、そしてお前の圖體を曝け出して、ロシナンテの手綱で三四百鞭打つて呉れい。それはドゥルシネアの魔術を解く爲め、かねてお前に言ひ付けてある三千幾らの鞭打ちの爲めぢや。お前の無頓着や怠慢から、あの哀れな婦人が今だにあのまゝ魔術にかゝつて居るとは、まことに氣の毒千萬ぢやからの。』

『その事ぢやア、うんと申し分がございます。』とサンチョーは言つた、『まア〳〵差し當り御一緒



に一と寢入り致しましよ。その後で、神樣のお差し圖通りに、ことは運びませうわい。旦那樣へ申しますがの……きまじめで我が身を鞭打つことアお斷りぢやい。それも肥立の惡い精分の少ない身體を引ッぱたくんぢや、尚更のことでございますよ。ドゥルシネアのお姫樣にや暫く御辛抱を願ひましよ。さうすりや、根ッから思ひがけもなさらん時に、私や鞭打つてこの身を篩にしてお姫樣に見せましよ。死ぬまぢやぴち〳〵生きとります」わい。それはな私にアまだ命がございますから、御約束は果たす考へがあるちうこッてございますよ。』

ドン・キホーテは彼に感謝した。そして少し許り食つた。サンチョーは澤山に食つた。それから二人は横になつて眠つた。ロシナンテとダップルと、この二匹の離れ難ない友達仲間は、そのまゝ草原に放つて置いて、其處に供へてある潤澤な草を好きなだけ制限なく食はせた。

彼等は晩方になつて目を覺まし、再び獸に乘つて旅をつゞけ、一リーグばかり向ふに見える、とある宿屋へと志して路を急いだ。とある宿屋といふ譯は、ドン・キホーテが有らゆる宿屋をお城と呼ぶ何時もの習慣を破つて、今度は宿屋と呼んだからである。彼等はそこに到着した。そして泊められるかと宿の亭主に訊ねた。亭主は宜しうございます、サラゴッサの旅館で見るやうな氣持のよい善い料理がござりますと言つた。彼等は馬から下りた。そしてサンチョーは亭主か

ら、とある部屋の鍵を受け取つてその部屋へ鞄を擔ぎ込んだ。それから彼は獸等を廐へつれ込んで飼料をやつた。そして自分の主人が此の宿屋を城と思ひ込まなかつたことを取り分け神に感謝しつゝ、主人に何か御用はないかと、今し戸口の椅子に腰をおろして居るドン・キホーテのところへ歸つて來た。夕飯時が來たので彼等はその部屋へ赴いた。そしてサンチョーは夕飯には何があるかと宿の亭主に尋ねた。これに答へて、亭主はお口が目安でございます、唯お好きなものを仰有れば宜しうございます、この宿屋には空の鳥から地上の家禽、海の魚に至るまで何でもございますと言つた。

『それが皆入りはせん、』とサンチョーは言つた、『雞雞二羽を燒いて呉れりや滿足ぢや、私の旦那樣は誠に食が細く、また私も大食といふ程ではないからの、』

宿の亭主は、『それでは、』とサンチョーは言つた、『御亭主牝鷄を一羽燒くやうに言ひつけて下され、柔かけりやええゝから。』

『牝鷄ですかい！まア〳〵、』と亭主は言つた、『いや全くそれは私が昨日五十羽から上町へ賣りにやつたばツかりでございます。その外のものなら何でもお好きなものをいふて下さりませ。』



『そんなら、』とサンチョーは言つた、『小牛の肉か子山羊はないことアなからうの？。』

『今丁度使うてしまひましたで、』と亭主は言つた、『家にはござりません、しかし來週になれば十分有り餘る程參りませう。』

『不都合なこッちや、』とサンチョーは言うんとあらうの。』

『やれまア、』と亭主は言つた、『このお客はふのに、卵があつて欲しいて言はしやるもの！すみませんが外の物では如何でござりませうな。もう牝鷄は御用捨を願ひますわい。』

『やれ〳〵！』と、サンチョーは言つた、『何とか早う極めて下され。全體お前さんは何を持ち合せとるのか、さツさと言ふがえい。そしてこんなことアもう言はんことにしよう。』

『全くほんとに、お客樣、』と亭主は言つた、『持ち合せ品と申しましては犢の足のやうな牝牛の後足が二本、つまり牝牛の後足のやうな犢の足が二本でございます。これを孔雀の雛や葱や、臘乾と一緒に煮て居ります。そしてもうそろ〳〵「おあがんなさい〳〵」と叫んで居りませう。』

『そりやもう私のものに極めた。』とサンチョーは言つた。『誰にも手をつけさせまいぞ。私は誰よ

り高く拂ひませう。そいつに越した大好物はないからの。たとへ足ぢやらうと、後足ぢやらうと針の尖ばかりも氣にやかけませんぞい。』

『誰にも手はつけさせません。』と亭主は言つた、『外のお客樣がたは御身分の高い方々なんで、御自分用の料理番や給仕や食料庫などお持ちでございますからの。』

『身分の高い人といふことちやァ、』とサンチョーは言つた、『私の旦那樣より上の者はない。けれど旦那樣のやつてござる御役柄は食料庫や貯藏寶を一緒に持ち運ぶ譯には行かんのぢや。私等は草原の眞中に寢たり、橡實やさんざしなどを食うて腹を滿たすのぢやわい。』

こゝでサンチョーと亭主との會話は終つた。サンチョーは亭主の問ひに答へて話をつゞけようとは思はなかつた。何となれば亭主は既にサンチョーの主人は何んな職務を有して居るのかをサンチョーに聞いて知つて居たからである。

夕飯の時が來たので、ドン・キホーテは自分の部屋へ戻つた。亭主は丁度今言つた通りの、シチウ鍋を持つて來た。でドン・キホーテは、うんと思ひ切つてそれを吸はうと食卓についた。その時、ドン・キホーテの部屋とは僅かに薄い隔壁で隔てられてゐる隣室かららしく、『さう〳〵、ドン・ジェロニモさん、食事の用意が出來まする間、私たちは「ラ・マンチャのドン・キホーテ」の第二卷をもう一章讀みませう。』とかう言つてゐる言葉が漏れ聞こえた。



ドン・キホーテは自分の名を聞くや否や、跳び上つて、彼等が自分の事を話して居るのを聞き取らうと耳をすました。そして話しかけられたドン・ジェロニモが答へて斯ういふのを聞いた、『ドン・ジュアンよ、「ラ・マンチャのドン・キホーテ」の物語の第一卷を讀んだ人は誰でも此の第二卷を讀んで興味を感じよう筈もないのに、どうして君はそんな荒唐無稽なものを讀まうとするのか？』

『それでも、』とドン・ジュアンと呼びかけられた人は言つた、『私たちはそれを讀めばやッぱり得をしますよ。どんな惡い本でも何か知らん善いものを有たん本はありませんからの。その中でも一番嫌な感じをさせますのは、もはやドン・キホーテをドゥルシネア・デル・トボソの戀から醒めたやうに書いてあることでございます。』

これを聞いてドン・キホーテは憤懣激怒の思ひに滿たされ、聲を張り上げて言つた、『ラ・マンチャのドン・キホーテがドゥルシネア・デル・トボソを忘れたとか忘れ得るとか言ふ者は誰であらうとも、そんな言ひ草は眞赤な僞りちやといふことを、刀にかけても思ひしらせてやらうわい。それも〳〵譯へもないドゥルシネア・デル・トボソは忘れられるものでもなく、またドン・キホーテのうちには忘れツぽさが巢をくふこともできぬのぢや。ドン・キホーテの言葉は確固不動ぢや。そして

その職務はその生命と生死を共にして決して冒すべきものではないのぢや。』

『私等に返事をなさるのは誰方ぢや？』と隣室で彼等は言つた。

『ラ・マンチヤのドン・キホーテ御本人でなうて誰でありませうかい。』とサンチョーは言つた、『この方は今言はしやッたことも、これから言はッしやる事も、殘らずやり終せなさらうわい。「質草は善く拂ふ人にや苦にならん」からの。』

サンチョーが此の言葉を言ひ切るか切らないうちに、二人の紳士らしく見える人が部屋の中へ入つて來て、そのうちの一人は腕をドン・キホーテの頸に投げかけて彼に言つた、『この御風采はお名前に就いて露疑ひを殘しません。また貴方のお名前はこの御風采とぴッたり一致して間違ひ ません。貴方は、疑ひもなく、眞實のラ・マンチヤのドン・キホーテ樣に相違ございません。これ此處に、私が持つてをります此の本の著者が企てましたやうに、貴方のお名前を冒し、貴方の功績を無に歸せしめようとして居る者がありますが、それにも拘らず、やはり貴方は衆人瞻仰の的、武者修行の曉の明星でございます。』と、かう言つて彼は仲間のものが持つて來た一冊の本をドン・キホーテの手に置いた。ドン・キホーテはそれを受け取つて、そして返事もせずに眼をその本の上に走らせた。しかし彼は直ぐ樣それを返しつゝかう言つた、『今見た少しばかりのうちにも此の作



者が當然非難されてよい三つの事を私は見出しましたわい。その第一は序文に出てをる言葉です。第二は用語がアラコニア語で、時々冠詞なしに書いてあるといふことです。そして第三は、分けてもこの作者の無知を麗々と現はしてをることで、つまり此の物語の一番肝心なところで澁滯したり或は事實からかけ離れたりして居ることです、といふのは此の作者はこゝに拙者の家來サンチョー・パンザの女房をマリイ・グティエッレッズと呼んで居るが、彼女はそんな風には呼ばれて居らぬ。たゞテレサ・パンザぢや。こんな肝要な點を間違ふやうな人なら、此の物語の到る處で間違うてはをらぬかと氣遣うても、至極尤もなことですわい。』

これを聞いてサンチョーは叫んだ、『ほんとに見事な作者さんぢや！その作者は私の女房をマリイ・グティエッレッズと稱ふ位ぢやア、私たちの事をよう知つとるに違ひござりませんわいな。旦那樣、もう一度その本を取つて、その中に私がをるか、また私の名前を變へてあるか何うか見て下さりませ、』

『ちよいと、お前さんの話しぶりで見ると、』とドン・ジェロニモは言つた、『きッと、お前さんはあのドン・キホーテ樣の御家來のサンチョー・パンザさんぢやな。』

『左樣、私がさうですぞい。』とサンチョーは言つた。『そして私はそれを自慢にしとりますわい。』

『それでは、たしかに、』とその紳士は言つた、『この新な作者はお前さんの身に輝いてをる行儀正しさなどは記してをりません。この作者はお前さんを大の食ひしん坊で、阿呆で、些ともおどけのない物に拵へ出してゐますよ。そしてお前さんの御主人の物語の第一巻に描いてあるサンチョーとは大分違うて居りますよ。』

『いま〳〵しい奴ぢや、』とサンチョーは言つた。『彼奴は私のことで頭を痛めまいとて私を隅ッこへ差し置いたかも知れんな。「鳴らし方を知つた者に鐘は鳴らさすがえゝ。」「聖ペテロはローマでなか〳〵達者ぢや。」と言ふわい。』

二人の紳士はドン・キホーテに向ひ、私どもの部屋へ來て一緒に食事をなさいと強ひた。それは此の宿屋にはこんな身分の人の口に合ふやうな物は何もないと、よく知つて居つたからであつた。常に禮儀に厚いドン・キホーテは、彼等の勸めに應じて彼等と共に晩餐を喫した。サンチョーは肉汁鍋と共に後に殘つた。そして缺くるところない代理の全權を授けられたので、食卓の上席に坐つた。そして亭主も彼と共に席についた。彼もサンチョーに劣らず牝牛の後足や犢の足が好きであつたからである。

食事をしながらドン・ジュアンはドン・キホーテに訊ねて言つた——ドゥルシネア・デル・ト



ボソ姫から何か消息があつたか、彼女は結婚したか、產褥についたか、或は妊娠して居つたか、それとも或は今尙處女を立て通してその嬌德や優雅を保ちドン・キホーテ樣のやさしい情の記憶を胸にはぐゝんでをるか何うかと。

ドン・キホーテは是れに答へた、『ドゥルシネアは今尙處女で居ります。そして私の愛情は以前に優してます〳〵堅く根を下して居ります。が、二人の交際は以前の通り不滿足です。そしてドゥルシネアの美しさは見苦しい田舍の娘の醜さに變へられて居りますわい。』こゝで彼は進んでドゥルシネアの魔法にかゝつたことを逐一洩らさず物語り、モンテシノスの洞窟で起つた事や、賢人マアリンがドウルシネアの魔術を拂ひ落す爲めに指圖した方法、卽ちサンチョーの鞭打ちのことなどをも話した。

ドン・キホーテが不思議な出來事に充ちた身の上話をするのを聞いて、二人の紳士は非常におもしろがつた。そして若し彼等が彼の愚妄によつて驚かされたとすれば。同樣に彼等は彼の優雅な話しぶりにも驚かされたのである。一方に於いてはブッ〳〵いふ阿呆であるやうに思つた。一方に於いて彼等は彼を頓智分別の人と看做し、そしてまた彼の邊に彼を置いたものか判斷がつき兼ねた。

サンチョーは晩飯を濟ましたので、亭主を大の字なりに酔ひ潰して置いたまゝ、主人の居る部屋へと行つた。そして部屋へ入つて言つた、『旦那樣がた、貴方樣がたの持つて來なされた此の書物の作者が、本の中の私と本人の私とを一つものにせうなどゝ思うてをつたら、お目にはかゝりませんわい。貴方樣がたの言はッしやるところぢやア、その作者は私を阿呆と稱うて居るさうなが、そんな調子でまた私を飲んだくれと言はんやうにして貰ひたいもんぢや。』

『しかしその作者はさう言うて居るよ、』とドン・ジェロニモは言つた、『けれどどんな風に書いてあつたか思ひ出せない。尤もそれは無禮な言葉であつたことは知つて居る。そしてもッとひどいことには嘘であつた、そりや今私の目の前に居るこのえらいサンチョーさんの面相見たばかりでもはッきり分りますのぢや。』

『ほんとに』とサンチョーは言つた、『その物語の中のサンチョーやドン・キホーテはあのシード・ハメット・ベネンゼリの書いた物語に出てゐる者とは屹度違うてをりますわい。あの方はほんとの私等ぢやつたが。私の旦那は勇ましくて、賢うて、戀にかけては眞實が有りなさる。そして私は正直一圖で剽輕ではござりますが、食辛棒でも大酒家でもござりませんぞい。』

『さうでせうなア、』とドン・ジュアンは言つた、『そして出來ることなら、ドン・キホーテに關する



事は一切、その原著者シード・ハメットの外には何人も僭越に手をつけてはならぬといふ命令を出せばよいのぢやがな。丁度アレキサンダーが自分の肖像はアペレスの外には誰も描くやうな横着をしてはならぬと命令したやうにですな。』

『描きたいと思ふ者には私を描かするが好い。』とドン・キホーテは言つた、『ぢやが私を凌辱させんやうにしたいのぢや。堪忍はその上に餘り澤山侮辱を積み上げられると、よく破裂するものぢやからの。』

『ドン・キホーテ樣にかゝつては、どんな者でも復讐されずに濟ませることア出來ませんよ。』とドン・ジュアンは言つた、『もしドン・キホーテ樣が御自分の忍耐の楯でその復讐を逐ひ斥けなさらん限りはですな。が、その忍耐の楯なるものが大きくて嚴丈ぢやと私は思ひます。』

その夜の大方はこんな會話のうちに過ぎた。そしてドン・ジュアンはその本に何んなことが書いてあるか、もッと讀んで御覽なさいとドン・キホーテに望んだ。けれどドン・キホーテは、自分はこの本を讀了して、そしてこれを全く馬鹿げたものと宣言したも同樣に見做すのだと言つて、とても肯がふ樣子もなかつた。そして若し何かのはずみで自分がその本を手に取つたといふことが其の作者の耳に入りでもしたら、自分が其の本を讀んだものと作者に思はせて得意がらせたく

ないのである。それは我々の思想は、それに我々の眼は殊更、そんな穢らはしい汚ないものから遙かにかけ離れたところへ着けなければならぬからであると言つた。

彼等はドン・キホーテに向つて、これから何の方面へ足を向けるかと問うた。彼は、サラゴッサへ行つて、毎年同市で行はれる馬上試合に參加しようと思ふと答へた。するとドン・ジュアンは彼に話した——この新しい物語には闘技場の馬上槍試合に參加したドン・キホーテは、これは誰のことか分らないが全く發明創意の力を缺き、格言は殆ど知らず、着物といへば極めてみじめな物を纏うて、唯一つ豐富なものは愚かしさのみである、といふことが描かれてあると。

『さういふ譯なら、』とドン・キホーテは言つた、『拙者はサラゴッサへは一歩も立ち入るまい。そして是非とも拙者は此の新しい物語の作者の嘘なことを世間に曝露してやる。さうしたら拙者はその作者がいうて居るそのドン・キホーテでないのぢやと、世間の人々には分りませう。』

『それが一番宜しいでせう』とドン・ジェロニモが言つた。『またバルセロナにも馬上試合がございます。そこでドン・キホーテさんはその武勇をお示しなさることができます。』

『私がしようと思ふのはそれぢや。』とドン・キホーテは言つた、『さて夜も大分更けましたから、皆さんに御免を蒙つて寢室へ退きませうかい。どうぞ皆さんの御親友のうちへなりと、また僕のうちへなりと拙者を加へて下されたい。』

『どうぞ私も宜しく、』とサンチョーは言つた、『何かの御役に立ちたいもんで。』

かうして彼等は別辭を交換した。そしてドン・キホーテとサンチョーは自分等の部屋に退いた。あとに殘つたドン・ジェロニモとドン・ジュアンはドン・キホーテの立派な分別と精神錯亂との混淆を見て驚いた。そして此のドン・キホーテとサンチョーは、彼のアラゴン人の作者が描寫した人々ではなくして、本當のドン・キホーテとサンチョーだと十分に呑み込めたやうに感じた。ドン・キホーテは早や〳〵と起き上つた。そして隣室の隔壁を叩いて新しい友だちに別れを告げた。サンチョーは宿の亭主に十分に拂ひをした。そして宿の食料品をもッと少く述べ立てるか、それでなくばもッと澤山食糧品を用意して置くやうにせよと亭主に勸めた。

## 第六十章　ドン・キホーテがバルセロナへ向つて行く道で起つた事ども

ドン・キホーテが宿屋を立ち出でた時は爽かな朝で、日中は嘸涼しからうと思はれた。サラゴッサへは立ち寄らずにバルセロナへ行く最も近い道を確かめることに先づ第一に心を留めた。彼は自分をあしざまに書いてをるといふその新しい作者を、何でも嘘つきであると證明したくて堪らなかつた。さて、それから六日の間は記錄する程のことは何にも起らなかつた。その六日目に道から側へそれて樫の木や栓の木の茂林へ入つた時に、日はとつぷりと暮た。此の點に就いて、シード・ハメットはいつもと違ひ他の事を記すほどに精確ではないのである。

主人と家來とは獸から下りて、そして樹の根に腰を据ゑるや否や、サンチョーは、その日は晝飯を饑腹やつてゐたので、造作なく眠りの門を通り過ぎた。しかし、空腹で眠れないよりもずッと以上に色々の物思ひで眠れないドン・キホーテは、何うしても眶が合はないので、空想の中にあちらこちらと樣々の場所をうろつき廻つた。ある時はモンテシノスの洞窟で、田舍娘に變形した



ドゥルシネアが牝の驢馬に飛び跨るのを見てゐるやうにも思つた。賢人マアリンの言葉が彼の耳に響き渡つてドゥルシネアの魔法を解除する爲めに遵ふべき條件や爲すべき努力を述べ立てゝ居るやうにも思はれた。彼は家來のサンチョーの怠慢や無慈悲を考へると、もう居ても立つても居られなくなつた。それは、彼が信じられる限りに信じたにしても、サンチョーは唯五笞しか打つて居ないので、請求された莫大な笞數に比べれば殆んど何にもならない不釣合な數であつたからである。かう考へると、彼はもうむしやくしやして來て、このことをかう思ひ廻らした、『アレキサンダー大帝が「切るも解くも同じことだ、」と言つてゴルヂアスの結び目（ギリシア神話の故事ゴルヂアスの結んだ結び目、これをうまく解き了せたものはアジアの君主となるといふ言ひ傳へがある、アレキサンダーは劍を抜いてこれを兩斷した。）を切つて、しかも全アジア最高の君主になり損じなかつたとすれば、それと同じやうに今もし私がサンチーョの意志に反して笞打つたなら、ドゥルシネアの魔術が解けんことはなからう。サンチョーが三千有餘の鞭打ちを受けることが救濟の條件であるのぢやから、根本の土臺はたゞサンチョーがそれを受けさへすれば好い、何處からその鞭打ちを受けやうと差支へはない。と、さうなればサンチョーが自分で加へやうが、他の誰かゞ加へやうが私の知つた事でない。』

こんな考へを抱いて彼はサンチョーの方へ近寄つた。先づロシナンテの手綱を外して、それで

鞭打たれるやうにしつらへ、そしてサンチョーのズボンを留めて居る紐を（彼は前には唯一筋はめて居たと一般には信じられて居る）解き始めたけれども、彼がサンチョーに近寄るや否や、サンチョーは目を醒まして正氣に返り、そして呶鳴り出した、『何をするッ？私に觸つて衣服を解くのは誰ぢや？』

『私ぢや、』とドン・キホーテは言つた、『私はお前の落度を償ひ私の惱みを減らさうと思うて來たのぢや。サンチョー、私はお前を鞭打つて、お前が引き請けた負債の幾分かを辨濟させようとて來たのぢや。ドゥルシネアは今死にかゝつて居る、お前は無頓着に生きて居る。私は望みが遠くなつた爲め死にさうぢや。それで好意でお前の着物を脫がせ、此處、此の人里離れた場所で、お前にせめて二千鞭だけでも喰はさうと思ふのぢや。』

『いえ〳〵、一鞭でも。』とサンチョーは言つた、『貴方樣、氣を落ち着けなされ。さうせんと、ほんとに、聲にでも聞えるやうな大聲を出しますぞ。私が引き受けました鞭打ちは得心づくでなければやりやいけません。無理強ひしてはなりうけません。そして只今私は鞭打つ氣はござりません。その氣にさへなれば自分から鞭でひッぱたきさうすると御誓言致しさへすりや、それで申し分はござりませんぢやらう。』



『サンチョー、お前の心に打ち任せて置いてはいけまいぞよ。』とドン・キホーテは言つた。『お前は心は頑固で、百姓男ながら、肉は柔かいからな。』かういふと同時に彼はサンチョーの着物を脫がさうともがき爭つた。

之を見てサンチョーは起き上がつた。そして主人と摑み合ひつゝ、双腕に全力を籠めて主人を取押へた。そして踵で小股を取り、主人を地べたへ仰向きに投げ倒し、自分の右の膝で主人の胸を壓しつけ、主人の手を自分の手で押へつけたので、主人は身動きも呼吸も出來ない程であつた。

『これはまあ何事ぢや、この不忠者め！』とドン・キホーテは叫んだ。『貴樣はおのれの主人に、正當な主君に謀反をするのか？貴樣は貴樣にパンを與へてをる人に手向ひをするのか？』

『私ア王樣をおとしもせにや　奉りもしません、』とサンチョーは言つた、『私ア私といふほんとのわが主人に助太刀しますのぢや。貴方樣がもう靜まると約束なさりや、そして今私を鞭打たうとおつしやらにや、放して上げてお邪魔はいたしません。もしさうでなければ——

叛逆人、ドーニヤ・サンチャの敵、
汝は立ちどころに死なん。』

ドン・キホーテはさう約束した。そして彼の思想の生命にかけて、サンチョーの着物の毛にも觸

りもせねば、またサンチョーを全く自由にして、その氣の向いた時に、いつなりとも自分の任意に鞭打たせようと誓つた。

サンチョーは起きあがつて其の場所から少し離れた所へ退いた。しかし、彼がまたも樹に寄りかゝらうとした時、何か頭に觸はるのを感じた。そして兩手を差しあげると、靴や靴下を穿いて居る人の二本の足に當つた。彼は恐ろしさに慄えて外の樹に行つた。そこでも全く同じ事に出逢つた。そこで彼は叫び出して、ドン・キホーテに助けに來てくれと賴んだ。ドン・キホーテはやつて來て何事が起つたのか、又何を恐れてゐるのかと問うた。サンチョーは總ての樹が人の足や脛に充ち滿ちて居ると答へた。ドン・キホーテはそれらの足に觸つて見た。そして直ちにそれが何であるかを解してサンチョーに言つた、『お前何も恐れることはない。お前がさはりはしても確かめることの出來なんだこの足や脛は、疑ひもなく、これらの樹でしばり首にされた浮浪人や流賊のものに違ひない。此の地方の其筋ではそんな手合ひを引つ捕へた場合には、二三十人位づゝしばり首にする慣らはしなのぢや。これで推し量るともう此處はバルセロナの近くぢやな。』實際それは彼が推測した通りであつた。薄明りにすかして見ると、これらの樹にぶらさがつてゐる果實は流賊の身體であることが分つた。



やがて夜はあけはなれた。そして若し此の死んだ流賊が彼等を威かしたとすれば、生きた四十人から上の流賊にかゝつては尚更心を亂された筈である。この賊等は突然二人を取卷いて、カタロニア語で『立つて居れ、そして頭目の來るまで待つて居れ』と言つた。ドン・キホーテは馬の手綱をはずしたまゝ徒歩で居つた。そして槍もとある樹に立てかけてゐたので、全く防禦がなかつただ。それ故彼は自分の腕を組み頭を垂れ、もつと都合のよい時と場合が來るまで差控へて居るのが上分別だと考へた。盜賊どもは急いでダップルを探し出して、鞍嚢や旅鞄などの中に入れてあつたもの、一つをも殘さなかつた。が、サンチョーに取つて仕合せであつたのは、公爵から贈られた金と家から持つて來た金とは自分の身のまわりについていた帶の中へ入れて置いたことであつた。けれどもそれに拘らず、これらの善良な人々は、サンチーを素裸にして、それのみならずその皮と肉との間に隱してゐるものでも檢べて見ねばかりの見幕を示した。が、しかしその途端に頭目がやつて來たので事なくすんだ。頭目は見たところは三十四歳位で、體格がガツしりして、中背よりも高く、嚴格な容貌で顏色は黑かつた。彼は屈强な馬に跨り、鎖子鎧の上衣を着、腰には此の地方でペトロネルと呼んで居るピストルを四挺つけて居た。彼は自分の家來共（かういふ商賣に從事して居るものはさう呼ばれて居たから）がサンチョー・パンザの財を掠め取らうとして

居るのを見た。そこで彼は家來どもに止めろと命じた。彼等は卽座にその命令に從つた。そこでサンチョーは帶を掠められることを免れた。頭目は、樹に立てかけてある槍や、地べたに横たはつてゐる楯や。鎧を着て悄氣て、悲哀そのもの、作り出し得る最も悲しげな最も憂鬱な顏をしたドン・キホーテやを見て不思議に思つた。そしてドン・キホーテの所へ行つて彼は言つた、『まア〳〵、さう落膽しなさるな。殘忍なピュシリスの手に落ちたのではなくて、ローケ・ギィナールトの手に落ちたんぢやからの。これは殘酷どころか却つて慈悲ふかい方なのぢや。』（このローケ・ギィナールトは適當に言へばロビン・フッドとギィナールダとを合せたやうに傳奇的に表現した思ひくを實行した、彼はドン・キホーテに表現したアンテスが憧いたやうに振舞つた義賊であつたらしい。一千六百十一年にネープルに行つて、そこで平和に死んだ。彼はセルバンテスが書かれた三四年前に罪刑になつた、カタロニアの山賊であつた、）

『あゝ勇ましいローケ、お前の名聲は天下に洽く轟き渡つてをるわい。』とドン・キホーテは言つた、『私の氣落ちしてをるわけはお前の手に落ちたからではない。たゞ私は、自ら遵うてをる騎士道の掟に則つて何時いかなる時も自ら警戒し自ら見張りをしてをらねばならんのに、馬の面勒をはづしたまゝでお前の手の者等に捕へられるやうな、それ程の大手ぬかりを仕出來したとは返すがへすも殘念ぢや。大ローケよ、私はお前に打ち明けるがの。私が馬に乘り槍や楯を持つて居る時この者等がかゝつて來たら、私を降參させることはこの人々にや容易なことではなかつたうぞ。私こそは、身の功業で全世界を震駭せしめてをるのラ・マンチャのドン・キホーテぢや。』



ローケ・ギィナルトは直ちにドン・キホーテの弱點はから威張りよりも寧ろ氣違ひに類するものだと感づいた。彼は時々ドンキホーテに屬することとは思はなかつたし、また斯樣な氣持ちが人の心を支配するやうになり得ようとは信じなかつた。そこで彼はこの人に出逢つて、自分が離れて聞いたことを近く寄つて試めすのを非常に喜んだ。さう思つて彼はドン・キホーテに言つた、『勇敢な騎士よ、落膽なさるな、今の御境遇を厄介な災難ぢやとも思ひなさるな。斯樣な失錯によつて貴方の曲つた運命も眞直になることもありませう。と申すのは、人には神秘でわけの分らんやうな不思議なまはり遠い方法で、神樣は倒れた人を起し貧乏人を金持ちにしますからの。』

ドン・キホーテが丁度彼にお禮を言はうとした時、後の方から一隊の馬蹄の音のやうな物音が聞て來た。しかしそれは唯一頭の馬であつた。その若者は、見たところ二十歲前後で、金の緣を取つた綠の綾織りの着物を着、ヅボンをはき、ゆるい上着を着て居た。その上には一人の若者が打ち乘つて一目散に走つて來たのであつた。ウァルーン風に曲つた帽子を戴き、しつくりと合つた麿き立ての靴を穿き、鍍金した拍車、短刀に劍、手には短銃を持ち、腰には一對のピストルを下げて居た。

ロークェは其の物音にふり返つた。そして此の容貌秀麗な若者の姿を認めた。若者は近寄つてロークェにかう話しかけた、『勇ましいロークェ、私は身の不運をいやす法、とまでは行かんでもせめて氣安めでも見付かりはしないかと、貴方樣を捜しに來ましたのぢや。貴方は私を御存じないやうですから、貴方樣に氣を揉ませんやうに名を名乘りませう。私は、貴方の御親友、シモン・フォルテの娘、クラウディア・ジェロニマでございます。父はクローケル・トッレッラスの非常な敵ですが、あの人は貴方の反對黨なので、やはり貴方にも敵でございます。御承知の通り、トッレッラスにはドン・ヴィセンテ・トッレッラスといふ、いえ、二時間前まではさういはれてゐた一人の息子がございました。まア、私の不仕合せの物語を手短にするために、その若者が私にし向けました事を二た言三言で申しあげませう。その若者は私を見まして、私にちやほや言ひ寄りました。私はあの人のいふことを聽きまして、父に知られませぬやうに私かにあの人を愛しました。何んなに人目にふれぬ暮しをしてゐましても、どれほど堅く閉ぢこめられて居りましても、向う見ずの煩惱に驅られる折を有たなんだり、それを差し控へたりする婦人はございません。一言に申しますれば、あの人と私とは互に變らじ變るまいと約束いたしました。その約束より先きへは深入り致しませんだが。ところが昨日のこと、あの人が私への誓言を忘れてしまつて、外の婦人



と結婚しようとして居ることや、そして今朝その婚儀を結ばうとしてゐることを聞きました。この知らせで私は赫ッと取り上せてしまひました。父が家に居りませなんだので、私は御覽の通りの此の着物を着ることが出來ました。そして一散に馬を走らせて、此處から一リーグばかり離れた所でドン・ヴィセンテに追ひつきました。そして問ひ責めたり言ひわけを聞いたりする隙も貸さずに、この鐵砲や、このピストルであの人を擊ちました。そしてたしかにあの人の身體に彈丸を二つから上射込んだに違ひないと存じます。それであの人の血に包まれて居りました私の名譽が、自由になるやうな戸口を開けてやりました。私はあの人をその家來どもの手にそのまゝ任せました。家來どもはあの人を屁はうとてよう手出しもせねば、そんな力もなかつたのでございます。そこで、私はフランスへ行く旅行券を貴方に頂きませうとて參りました。あちらには同居の出來る親類がございます。それにまた、ドン・ヴィンセンテの數多い身寄り者が私の父に理不盡な復讐をようせぬやうに、どうぞ貴方樣のお力添へをお願ひ申します。』

その勇ましいそぶりや凛々しい姿や、美しいクラウディアの冒險などを心から感嘆しつゝ、ロークェは彼女に言つた『それぢやお嬢さん、その貴女の敵が死んだかどうか見に行きませう。その後で、貴女の爲めに最上の手段を考へませう。』

クラウディアが言つたことやロークェ・ギィナルトがそれに答へて言つたことを聞いて居つたドン・キホーテは叫んだ、『何人も此の御婦人を保護する面倒を見るには及びません。拙者がそれを引き受けましたわい。拙者に馬や武器を下さい。そして此處で拙者をお待ちなさい。拙者はその騎士を捜し出して、死んでゐても生きてゐても、こんなお美しい人に誓つたその約束は必ず守らせるやうにしませうわい。』

『何方もそれを疑ひなさるにや及びません。』とサンチョーは言つた、『私の旦那は大層結好な媒酌の手並を持つて居られますぞい。ほんの此間も、同じやうな手で自分の約束を反古にしようとしてをつた男を強てその言ひ交した娘と一緒にしてやんなさつたのぢや。そしてもしあの時、旦那樣を窘めよる魔術使ひどもがあの男の生れつきの形を下男の形に變へなんだら、あの娘はもう今時分は處女ぢやないことになツとりませうわい。』

ロークェは主從の言葉によりも寧ろ美しいクラウディアの冒險に一層多く注意を拂ひつゝあつたので、これには耳を貸さなかつた。彼はダップルから剝ぎ取つた總ての物をサンチョーに返すやうに家來どもに命じてから、夜中屯營して居た場所へ歸れと一同に指圖した。それからクラウディアと共に全速力で、傷ついてゐるか死んでゐるかするドン・ヴィセンテを探しに出かけた。彼等はクラウンテが彼に出逢つたその場所に到着した。けれども生々しくこぼれた血汐の外には何にも見出さなかつた。しかし、あたりを隈なく見廻してゐると、上の方の丘の斜面に人の居るのを發見した。そこでこれこそドン・ヴィセンテであると判斷した。それは實際さうであつた。ヴィセンテは死んだのか生きて居るのか、その家來どもは彼の傷を直す爲めか、それとも彼を葬むる爲めにか彼を運びつゝあつた。二人は彼等に追ひつかうとして急いだ。その一行はゆる〳〵進んで居たので、二人はたやすくこれに追ひつくことが出來た。二人は家來どもの腕に抱かれて居るヴィセンテを見た。彼は家來どもにかすれた弱い聲で、傷が痛んで一歩も行けぬ程に苦しいから、此處へ捨てゝ置いて死なしてくれと嘆願して居た。クラウディアとロークェとはおの〳〵馬から下りてヴィセンテの方へ進んで行つた。家來どもはロークェの姿を見ると縮み上つてししまつた。クラウディアはドン・ヴィセンテを見ると心が亂れた。そして半ばやさしげに半ば腹立たしげに彼に近づいてその手を取つてかう言つた、『私たちの誓ひに從つて貴方が此手を私に與へて下さいましたら、こんなことはおなりなさらなんだでせうに。』



傷ついた紳士は殆んど落ちかゝつてゐる眼を開いた、そしてクラウディアを見とめて言つた、『美しい無分別な人よ、私を殺したのはお前ぢやと私はツきり知つて居る。こんな罰に當るやう

な心は私は毛頭お前に對して有つてゐない。何故というて、私は心の中でも、行爲でも、お前の心を傷りようと思ひもせねば、出來もしなかつたのぢや。』

『それでは、』とクラウディアが言つた『貴郎があの金滿家バルヴァストロの娘のレオノラと今朝結婚なさるところだといふのは眞實でござりませんか？』

『決して〳〵、』とドン・ヴィセンテは答へた。『そんな知らせをお前に齎らしたのは、お前に嫉妬の情を起させて、私の命を取らさうとする無慈悲な因果に相違ない。これを尙も確かめたければ、お前さへよければ、お前の夫としてこの私の手を握り締めてくれい。お前が私から受けたと思ひ込んでゐるその罪咎の申し聞きには、これに優ることは何にもないのぢや。』

クラウディアは彼の手を握りしめた。そして彼女の胸は非常に烈しく悶え苦しみ、つひにドン・ヴィセンテの血だらけの胸の上に悶絶して倒れてしまつた。これと同時にドン・ヴィセンテも死の痙攣にとらへられた。ロークェは當惑して何うして宜いか分らなかつた。家來どもは彼等の顏に洒ぐ水を走つて取りに行つた。そして持つて來た水を彼等の顏にかけた。クラウディアは息を吹き返したが、ドン・ヴィセンテは襲ひ來た發作から回復しなかつた。彼の生命は切れてしまつたのである。これを認めて、クラウディアは、自分の愛する夫が最早この世に居ないことを確かめら

れるや、その溜息で空氣を裂き、泣き聲て天を鳴り渡らせた。彼女は頭髪を引きむしッてそこらにまき散らした。彼女は自分の手で自分の顏を打つた。そして、惱み苦しむ心から來ると想像される限りの悲しい傷ましいあちるゆ身振を示した。『ひどい、向ふ見ずの女め！』と彼女は叫んだ、『お前はこんな罪深い考へをしてのけるやうな氣に、どうしてうか〳〵となつたのぢや！おゝ火のやうな嫉妬の力、お前はまア、お前を胸に宿らせる人たちを何處々々までもめちやくちやにしてししまふ！おゝ良人、私の夫となつたばかりに貴方の不仕合せな運命は貴方を結婚の床から墓場へと運び去りました！』

クラウディアの慟哭は餘りに烈しく痛ましかつたので、平生どんな場合にも泣いたことのなかつたロークェさへもその目から涙を流したほどであつた。家來どもは泣いた。クラウディアは何遍となく悶絶した。そして此の場所全體が悲哀の野、不幸の住處のやうに思はれた。遂にロークェ・ギィナルトは、ドン・ヴィセンテの死骸をその父の村へ運んで行つて埋めるやうに家來どもに指圖した。その村はすぐ近くにあつた。クラウディアは自分の伯母が或る尼僧院の院長をして居るからそこへ行つて、更にすぐれた永遠の夫スポーサに仕へて餘生を送りたい、とクロークェに話した。ロークェは彼女の敬虔な決心を賞讃して、彼女が何處でも行かうと思ふ所へは一緒に行かう、そ

して彼女の父にドン・ヴィセンテの親類または其の他の總ての者が害を加へないやうに保護してやらうと言つた。クラウディアは彼が自分と一緒に來ることをどうしても許したくなかつた。そこで精一杯彼の申し出に感謝して、涙を流しつゝ彼と別れた。ドン・ヴィセンテの家來どもは彼の死骸を運び去り、ロークェは自分の仲間のところへ歸つた。クラウディア・ジェロニマの戀はかうして終りを告げた。しかし彼女の悲しい物語の網を織り出したのは嫉妬の打ち克ちがたい殘酷な力であつたからには、何の怪しむべきことがあらう?

ロークェ・ギィナルトは先きに家來どもに行けと言ひ付けておいた場所に彼等を見出した。そしてドン・キホーテはロシナンテに打ち跨り彼等の眞中に突ッ立つて彼等に演說をして居た。そして心靈にも身體にも斯程に危險の多い暮し方を止めよと說き勸めつゝあつた。けれども彼等の大多數はガスコニア人で、あらくれた無法な奴等ばかりであつたから、彼の演說は彼等に多くの印象を與へなかつた。ロークェは歸つて來てから、家來どもがダップルから盜み取つた財產や寶石を返してやつたかとサンチェーに問うた。サンチョーは皆受取つたが三つの市にも價する三枚のハンケチは紛失した、と言つた。

『おい〳〵、お前は何の事を言うて居るのぢや?』と側に立つて居た一人の者が尋ねた。『そりやぢやからですよ。』



私が持つて居るがあれは三リールがもありやせんわい。』

『それはさうぢや、』とドン・キホーテは言つた、『けれども私の家來は今いうた位にそのハンケチを大事に思うてゐますのぢや。それはな、この私にあのハンカチを下さつたあのお方から出たものぢやからですよ。』

ロークェ・ギィナルトは家來どもに直ぐ樣返せと命じた。そして家來どもを整列せしめて、最近の分配以後盜み取つたものは着物も寶物も金錢も殘らず持ち出すやうに言ひ付けた。そして急いで價ぶみをして、又分配することの出來ないものは金に直して、それらの物を全員に分配した。如何なる場合にも嚴格な分配上の公平に過不足のないやうに非常に公平に注意ぶかく分配したのである。

これがすんで皆の者が滿足し、悅び樂しんで居た時、ロークェはドン・キホーテに言つた、『もし、こいつ等にかうきちんと嚴正が守られなんだら、こいつらにや渡世が出來んでせうよ。』

これを聞いてサンチョーは言つた、『これを見ても泥棒の仲間でさへも、嚴格がなければ仕方がないちう位なら、嚴格ちうことアえゝもんでござりますな。』

家來のうちの一人はこれを聞いて、火繩銃の臺尻をあげた。若しロークェ・ギィナルドが彼にその

手を控へよと呶鳴り付けなかつたならばそれでサンチョーの頭を打ち砕いたであらう。サンチョーはびツくり仰天した。そして斯んな手合の中に居る間は決して口を開くまいと心の中に誓つた。丁度この時、家來が一人二人歸つて來た。それは街道に番兵として立つて居て、その前を往來す人々を見張り、何か事あれば頭目に知らせに來る役目を持つて居る連中であつた。『お頭、今大勢の一隊がすぐそこから、バルセロナの方へとやつてきました。』

それにロークェは答へた、『我々をやツつける者か、それとも我々がやツつけるものか、どちらや?』

『われ〳〵がやツつける方です。』とその家來は言つた。

『よし。おい、みんな繰り出せ。』とロークェは言つた、『そして一人も洩らさず直ぐ樣こゝへつれて來い。』

彼等は命に從つた。そしてドン・キホーテとサンチョーとロークェとは後に殘つて、家來どもが連れて來る者を見ようと待つて居た。待つてゐる間にロークェはドン・キホーテに言つた、『ドン、キホーテさんにはさぞ私等のやうなこんな生活は不思議なものに見えませう。不思議な冒險、不思議な事件や危險に滿ちたものと見えませう。さう見えても私は別に怪しみはしません、實際私等の生活より氣の休まらん心配な世渡りの法はあるまいと私も思ひますわい。私をこんな風にしてしまうたのは復讐したい一念でした。それはどんなに穩かな心でも攪き亂すほど強いものでした。私は生れつき心やさしく親切でしたが、今申したやうに人から受けた凌辱に復讐したいといふ一念から、私の善い性分は全く打ち壞されて、本心の聲も聞き入れずにこんな世渡りをするやうになましたのぢや。そして一つの深みはまた一つ深みを呼び、毒をなむれば皿までといふ風で、復讐は復讐へとだん〳〵繋がつて行きました。そして私はたゞ自分の復讐のみか他人の復讐まで引き受けました。けれどもお蔭樣で私はかう縺れ合うた迷路のうちにあつても、それを脫れて安全な港に着きたいといふ心願は失ひませんでした。』



ドン・キホーテはロークェが斯やうな優れた正しい感情を言ひ表はすのを聞いて驚いた。それは、こんな盜みや人殺しや待ち伏せなどの商賣に從事してゐる者等のうちにも、善良な事を考へることの出來る人があり得ようとは考へなかつたからである。そして彼は容へて言つた、『ロークェさん。健康の初まりは病氣を知つてそして醫者の處方して呉れた藥を病人が喜んで服むにありますのぢや。貴方はその惱ますものを知つてござる。そして天は、いや、もつと適切にいへば神樣は、我々のお醫者ですから、貴方の身體を治す藥を下されませう。不意や

奇蹟には依らずとも、段々に直して下されませう。それに、辨別のある罪人は馬鹿なものどもよりか回復し易いですよ。そして貴方は今のお言葉にも思慮分別が見られたやうに、たゞ善根を持ちこたへて本心の弱點の強くなるといふことを信仰なされればそれでよい。そして若し貴方がこんな世渡りを早く切り上げて見やすく救ひの道へ入らうと望まれるなら、私と一緒においでなさい。私は武者修業者になる方法を貴方に敎へて上げませう。その職分に從へば、それりや澤山の難儀や災難に會出ひますわい。それで、もしこんなものを罪滅しの苦行と見られたらその功德で瞬く間に貴方は天國へ行かれませう。』

ローケェはドン・キホーテの忠告を聞いて笑つた。そして話題を轉じてクラウディア・ジェロニマの悲劇的な事件を話した。それを聞くとサンチョーは非常に悲しんだ。それはその若い女の美しさや大膽さや元氣などに少しも缺けるところがないと思つてゐたからであつた。

やがて、分捕する爲めに差し送られた家來どもが歸つて來た。彼等は、馬に乘つた二人の紳士が二人の徒歩の巡禮と、それから徒歩や馬上の下男を六人つれてゐる女たちの一杯に入つた一臺の馬車と、それにまた紳士たちが連れて來た二人の贐馬を馭する者などを引き連れて來た。その家來どもは彼等のまはりに環を作つた。勝つた方も負けた方も共に鳴りをひそめて大ローケェ・



ギィナールトが口を開くのを待つた。ローケェは其の紳士等に向つて。名は何といふか、何處に行くところか、金はどの位持つて居るかと訊ねた。その一人が答へた、『貴方私等は二人ともスペインの歩兵大尉です。私等の仲間はネープルに居ります。で私等はシシリイに行けといふ命令を受けてバルセロナに碇泊して居るといふ四艘の軍艦で船出しようとて行くところです。それから私等は二三百クランの金を所持して居るが、私等はこれで金持ちぢやと滿足に思うてゐますわい。一體軍人は貧乏なので、これより上の蓄財は許されませんのぢや。』

ローケェは大尉に問うたのと同じ問ひを巡禮にもした。其の答へによれば、彼等はローマへ船出しようとするところで、二人の間には六十リール許りも持つて居らうといふのであつた。彼はまた、馬車に乘つて居た人にも。何處へ行く筈なのか、金はどの位持つてゐるのかと訊ねた。すると、馬に乘つてゐた男が答へた、『馬車の中においでなさる方々はネープルの宗敎法院長の奥方ドーニャ・ギィオマール・デ・キィニョーネスさまと、小さいお嬢樣と腰元に、老女でございます。私等六人の若者は奥方のお伴でございます。』

『それでは、』とローケェ・ギィナールトが言つた、『我々は九百クラウンと六十リール手に入つたのぢや。私の手下はかれこれ六十人ある筈ぢやから、銘々に幾らづゝ渡るやうになるかな。私は算

術は不得手ぢやから。』

盜賊どもはこれを聞くや否や叫び喚いた、『ロークェ・ギィナールト萬歳！お頭の破滅を望む泥棒があつたとて何するものかい。』

大尉たちは心に感じた心配を明かに表はした。法院長の奥方は打ちしほれて居た。そして巡禮たちはその財産の沒收されるのを見て少しも喜ばなかつた。ロークェはかういふ風にして暫時彼等を懸念の裡に引き留めた。が彼は彼等の心痛を長びかすことを望まなかつた。その心痛は矢頃を離れて見ても見られた位であらう。そこで彼は大尉等に向き直つて言つた、『貴方がた、どうか御親切づくで六十クラランだけ私に貸して下さい。それから法院長の奥方は八十クラウンだけ。そして私についてをる此の一隊の者どもを滿足させて下さい。』坊主も歌をうたへば御馳走にありつきます」からの。さうなされば、貴方がたに旅行券を上げますから、それがあれば自由に邪魔されずに直ぐ樣貴方がたの旅をつゞけなさつても宜しい。さうすれば、若し私が此の邊に散らばしてゐる他の隊の者にお出逢ひなされても、そいつ等は貴方がたに何の害も加へません。私は軍人とか御婦人とか……それも殊に身分のある方には害を加へようといふ考へは毛頭ございませんからな。』



大尉たちがロークェの禮讓や寬大に對して感謝したその感謝の言葉は手篤くて心から出たものであつた。彼等はロークェが自分等の所持金を取らなかつたことをそれほどに有り難がつたのであつた。ドーニア・ギィオマール・デ・キィニョーネスは馬車から身を投げ出して大ロークェの足や手に接吻しようとした、しかし彼は決してそれをさせなかつた。それどころか寧ろ、彼は自分の不仕合せな職業上避けがたい必要に迫られて、彼女に損害を加へたことを詫入つた。法院長夫人は直ちに自分の分擔として割り當てられた八十クラウンを與へるやうに一人の下男に命じた。大尉たちは既に彼等の六十クラウンを拂つてゐたからである。巡禮たちは將に彼等の僅かばかりの蓄財殘らずをぶちまけようとした。しかしロークェはそれをそのまゝ取つて置くやうに命じた。そして自分の家來どもの方をふりむいて言つた、『この金から銘々二クラウンづゝ取れば、二十クラウン殘るんだ。そのうち十クラウンをこの巡禮衆にやつてあとの十クラウンは此のえらい御家來にやらう、さうすればこの人は今度の冒險を都合のよかつたものとして吹聽できるぢやらう。』それから彼は、常に用意して居る筆や紙を取り出させて、部下の諸隊の小頭どもにあてた旅行券を書いて彼等に與へた。そして彼等に別れを告げて自由に行かせた。で八人々は彼の豪俠、彼の寬大な氣質、彼の並ならぬ行爲を胸一杯讃嘆して、そして彼を名題の盜賊とよりも寧ろアレキ

サンダー大帝と見做したくなつた。

一人の家來はガスコン語とカタロニア語を取り交て言つた、『おいらのお頭ア山賊よりか托鉢坊主になつたらよからう。またとこんな善根を施したけりや、おいらの財でなく、御自分のものを使うてもらひたいな。

この不運者は餘り低くは言はなかつたのでそれがロークェに洩れ聞こえた。そこでロークェは剣を引き抜いてその男の頭を殆んど眞二つに斬り割つて、かう言つた、『これ、無禮な生意氣な奴の刑罰はこれ、この通りぢや。』人々は殘らずぎよッとして、一人として敢て一語も發しようとはしなかつた。彼等はこれほど彼を畏敬してゐた。ロークェはそれから一方に退いてバルセロナに居る自分の一人の友だちに宛て、一通の手紙を書いた。その文面には。あの有名なラ・マンチヤのドン・キホーテといふ武者修業者が自分と一緒に居るが、それは天下無双に滑稽で且つ賢い人である と保證した。そして尚、この日付から四日目に、卽ち、洗禮者ヨハネの聖日に、そのドン・キホーテは甲冑に身を堅めその乘馬ロシナンテに跨りそして驢馬に乘つた家來のサンチョーを引きつれて、バルセロナ市の河岸の眞中に現はれるであらう。そこで私の味方であるニアルロスの人々に此の事を知らせて、このドン・キホーテを對手に無聊を慰めるやうに傳へて呉れるやうに。自分は



自分の敵たるカデルスの人々（カタルニアのニアルロスとはカタロニアの一つの國で、ここの境は凶ひに爭つてゐた）はこの樂しみに預からないことを望むと書いた。しかし、それは不可能であつた。何となればドン・キホーテの狂氣や抜け目ない言葉や、その從士サンチョー・パンザの滑稽は、全世界に一般に慰めを與へずには置かなかつたからである。ロークェは一人の家來にその手紙を持つて行かせた、その家來は山賊の着物を農夫の着物に着換へて、バルセロナへと出發した。そして宛て名の人へその手紙を渡した。

## 第六十一章　ドン・キホーテがバルセロナへ入つた際に起つたこと、並びにその他、作り出したといふよりも寧ろ眞實味を帶びた事ども

ドン・キホーテはロークエと共に三日三晩を過ごした。そして若し彼が三百年を過ごしたとしても尙ほロークエの渡世には十分に見て驚くべきものが見出されたであらう。彼等は黎明には或る場所に居り、そして晝飯の時には別の場所に居た。或る時は誰から逃げるとも分らずに逃げ、或る時は何を待つとも分らずに待ち伏せした。彼等は方々へ移動するので、その安眠を破られ、立ちながら眠つた。探偵や斥候を送り出したり、番兵を立てゝ置いたり、火繩銃競技を行つたりする多には爲すことも無かつた。尤もその火繩銃は僅かしか持つて居なかつた。といふのは、大抵燧發銃（昔まだ雷管のなかつた頃燧石と鐵片とを以て銃口を打ち發火せしめた銃）を用ひてゐたからである。ロークエは自分の部下の者等にその居處を知らせまい爲めであつた。といふのは、彼處で夜を過ごした。それは部下の者から離れて此處ルセロナの總督が彼の命を取るやうにと澤山の布告を出してゐたので、彼は恐怖と不安のうちに



あつたからである。そこで彼は自分の部下すらも自分を殺したり官憲へ引き渡したりするであらうと氣遣つて、誰もよう信じなかつた。實に厭なみじめな生活だ！　遂に、人通り少い路や捷徑や祕密の道を辿つて、ロークエとドン・キホーテとサンチョーとは、六人の家來を引きつれて、バルセロナへと出發した。彼等は聖ヨハネ祭の前夜、夜の中にその河岸へ到着した。そしてロークエはドン・キホーテとサンチョーに約束だけしてまだ與へてなかつた十クラウンを與へた）、を抱擁してから、双方で手厚い挨拶を取りかはしつゝ立ち去つた。

ロークエは元來た方へ歸つた。けれどドン。キホーテは、そのまゝ、夜の明けるのを待ちつゝ、馬上に留つた、すると間もなく美しいオーロラの顏が東方の欄に現はれ始めて、よし耳とまでは行かずとも草や花やを喜ばせた。けれども、やはりまたこれと同時に耳を喜ばせる爲めにも小喇叭の音や太鼓の音、鐘の響き、それにそく〳〵といふ人の跫音や通行者の「路をあけい！」といふ叫び聲などが聲えてきた。その通行者は市から立ち出でて來るやうに見えた。東雲は楯よりも大きな顏をした太陽の爲めに道を開いた。太陽は低い地平線の上にゆる〳〵と昇りはじめた。ドン・キホーテとサンチョーは周圍を眺めまはした。彼等は海を見た。それは彼等が今まで見た事のない光景であつた。それは非常に大きくひろ々として彼等がラ・マンチヤで見たことのあるル

イデラの湖水よりは餘程廣いと思はれた。彼等は岸に碇まつてゐる數々の軍艦を見た。それ等は日除を卸して、微風に飜りつゝ水面を接吻したり掃つたりしてゐる旗や吹流しで、美々しく飾られてあつた。その間に船内では角笛や喇叭や小喇叭の音が響き渡つて遠近の空氣を曉々たる勇ましい音響で滿たしてゐた。それからそれ等の軍艦は動き出して、靜かな水の上で一種の小闘を演じた。一方では、立派な馬に跨りそして美華な制服を着た多數の騎兵が市から繰り出して來て略ぼ同樣な調練をやつた。軍艦の中に兵士等が絶えず發砲すると、市の城壁や要塞に居る兵士等はそれに答へて發砲した。巨大な大砲はすさまじい響を立てゝ空氣を劈いだ。それに對して軍艦からは舷門の大砲が答へた。輝ける海、微笑む陸地、澄みきつた空氣――時々大砲の煙によつて暗くされたけれども――これ等は總て全群集を望外の喜びに滿たすやうに見えた。サンチョーは海の上を走るこれらの大物體が、何うしてこんなに多くの足を有つてゐるのか了解することが出來なかつた。

今度は制服を着た騎兵等か叫び聲や異樣な鬨の聲や喝采をあげつゝ、驚き怪しんで立つて居るドン・キホーテの所へ疾驅して來た。そして彼等のうちの一人――これはロークェから手紙を受取つた人――が、ドン・キホーテに叫んで話しかけた、『ようこそ此の市へお出で下さいました。この世界ぢうでありとある武者修業者の龜鑑、指導の狼煙、衆人瞻仰の的、明星！勇敢なラ・マンチヤのドン・キホーテどの、ようこそお出でなさいました。近頃僞りの物語の中に紹介してある。あの僞りの、作りものの、贋物のドン・キホーテ樣！』

ドン・キホーテは答へをしなかつた。また騎兵等も返事を待たなかつた。そして從者どもと一緒にぐる〳〵とドン・キホーテのまはりを低く輕く馬を飛ばして廻つた。ドン・キホーテはサンチョーを顧みて言つた、『この紳士たちは明かに私等を見知つて居る、この人等は確かに私等の物語を讀んだに違ひない、それからあのアラゴン人が新しく出版したものまでも。』

ドン・キホーテに話しかけた例の騎兵は再び彼に近寄つて言つた、『私等と一緒においでなさい、ドン・キホーテ樣。私等は殘らず貴方の僕で、またロークェ・ギイナルトの親友でございますから。』

この言葉にドン・キホーテは答へた、『騎士どの。若し禮儀が禮儀を生むものなら、貴方の禮儀は大ロークェの禮儀の娘かそれとも極めて近い親族でございます。何處へなりと御隨意にお伴れ下されい。私はたゞ貴方の御意まかせで別に何の積りもございません。取り分け貴方が私の爲めを思つて御盡力下さるなら尙の事です。』

その騎兵も劣らず鄭重な言葉で答へた。やがて、總ての人々はドン・キホーテを眞中に取り圍み、小喇叭や太鼓の囃に連れて市の方に向つて出發した。彼等が市へはいると、有らゆる惡戲の作者たる惡戲者と、その惡戲者にもまして惡戲をする子供等がかう工夫を凝らした。つまり、これらの圖々しい制し難い腕自小僧のうちの二人の者が、群集をこぎ分て進んで行つて。その一人はダップルの尾を、も一人の者はロシナシテの尾をおの〳〵持ち上げて、その下へはりえにしだの束を挿し込むことにした。可哀さうな獸等は變な拍車を當てられるやうに感じ、そしてその劇痛は尻尾でばた〳〵叩くごとにます〳〵增して行つたので遂にやたらに躍りあがつて、主人たちを地べたへ投げ出してしまつた。ドン・キホーテは恥辱を感じ面目を潰して、走つて行つて、あはれな自分の痩馬の尾からその羽毛を引き拔いた。サンチョーもダップルの爲めに同じ事をした。彼の案內者等は大膽不敵な子供等を罰しようとした。けれども子供等は後からついて來る群集のうちに身を隱して見えなくなつたので、それは全く出來なかつた。ドン・キホーテとサンチョーとは再び馬に乘つて、そして同じやうな音樂や喝采に伴はれつゝ、彼等の案內者の家に達した。その家は大きくて立派なもので、簡單にいへば豪家の邸宅であつた。そして現在のところは、彼等をこゝに殘して置かう。それがシード・ハメットの本意であるから。



## 第六十二章

は魔法術をかけられた首の冒險、並びに、瑣々たる事柄ながら話さずには置けない事どもを傳へる。

ドン・キホーテの招待者はドン・アントニオ・モレノーといふ人で、財產もあり、知識もあり、そして手綺麗な性質の良い手段で鬱を遣ることが好きであつた。さてドン・キホーテを自分の家に置くやうになつたので、彼は少しも害のない風にしてドン・キホーテにその狂的な諸點を曝らけ出させるやうな方法を工夫しはじめた。一體、苦痛を與へるやうな戲事は戲事でない。また、どんな慰みでも、他人を傷つけるやうでは何の價値もない。アントニオ・モレノーが第一にやつた事は、ドン・キホーテにその甲冑を脫がせ、そして我々が既に何遍となく述べ描いた、例の身體にぴッたりと合ふ鞣革の衣服を着せて、そしてこの市第一の街路に面した露臺の上に出して、群集や子供等に十分に見せることであつた。群集や子供等はまるで猿でも見るやうな風にドン・キホーテをじろ〳〵眺めた。制服を着た騎兵等はドン・キホーテの前をまたもや疾走して行つた。そ

の制服を纏つたのは宛ら、その日の祝祭に活氣を添へる爲めではなくて、唯ドン・キホーテへ見せる爲めであるかのやうであつた。サンチョーは有頂天に喜んだ。そのわけは分らないが、何となく、第二のカマチョーの結婚式や、第二のドン・ディエゴー・デ・モレナの家や、第二の公爵の館に行き遇つたやうに思はれたからである。其の日ドン・アントニオの五六人の友達は、彼と一緒に饗應に與つた。そして凡ての者がドン・キホーテに敬意を表した。そして彼を武者修業者としてあしらつた。そんなわけから彼は鼻が高くなり得意になつて、われながら滿足の情を抑へることが出來なかつた。サンチョーのおどけ言は非常なもので、この家の殘らずの下男等もまた凡て聞くほどの人も皆、彼の唇から目を離さない程であつた。食卓に着いて居た時ドン・アントニオは彼に言つた、『サンチョーさん、お前さんはマンジア・ブランコ（牛乳、砂糖、米粉を煉元して調理した小鳥料理）と肉團子が大好きでもし食ひ餘す時には、懐にしまつて明日のに取つて置くさうぢやな。』

『いゝえ、貴方樣、そりや嘘でござります。』とサンチョーは言つた、『私は食ひしん坊ぢやなうて口綺麗な方でござりますよ。此處にござる私の旦那のドン・キホーテ樣もよう御承知の通り私等ア一摑みの橡實か胡桃で、一週間も生命をつないだもんでござります。そりや、「牝の犢を呉れうと差し出されたら、私は羈絆を持つて走つて行きます。」私や頂戴した物は食ひますし、また、好い機會にぶつかればそれを役に立たせます。けれど誰方にせよ、私を法外な食ひしん坊ぢやとか、口いやししいとか仰有るなら、その方ア間違うてござる。もしや私が、こゝに御食事中のお歴々樣がたを何とも思ひませなんだら、別の申し樣を致しましたぢやろ。』

『實際、』とドン・キホーテは言つた、『サンチョーの食事に節制なこと、淡白なことは眞鍮の板に彫りつけて、未來永劫の記念にして置いてもよいですよ。腹の空いた時には、大急ぎで口一杯に入れて嚙むから、幾らか貪食のやうに見えるのは事實です。しかしいつも節制に心掛けて居ります。そして總督になつてゐた時、上品な食ひ方を習ひました。それはもう、葡萄も、柘榴さへも肉叉で食ふ程でしたよ。』

『えゝ！サンチョーは總督になりましたか？』とドン・アントニオは言つた。

『さうですよ、』とサンチョーは言つた、『バラタリアといふ島の總督になりましたぞい。私は十日の間は見事に治めましたよ。そして其の間私はまるで氣が休まりませんなんだ。そして世の中の殘らずの總督ちうものを見下す氣になりました。私はそこから逃げ出しましたが、ひよいとした穴ん中へ落ち込みした、くの穴ぢやもう私は死ぬ覺悟をして居りましたがな、ひよいとした奇蹟で生きてのがれ出ましたわい。』

それからドン・キホーテはサンチョーの治め方を殘らず精細に話して聞かせた。これに依つて彼は大いに聽衆を樂しませた。

ドン・アントニオは食卓が片づけられたので、ドン・キホーテの手を取り、彼と共に離れた一室へ赴いた。そこには調度らしいものは何にもなく、唯一脚のテーブルがあつた。それは見たところ碧玉作りらしく、そして同じく碧玉の臺の上に据ゑられてあつた。そのテーブルの上には、ローマ皇帝の半身像の樣式の、靑銅製の首が一つ置いてあつた。ドン・アントニオはドン・キホーテと共に部屋中を歩き廻り、そして何遍もそのテーブルの周圍を歩き廻つた。それから言つた、『さて、ドン・キホーテどの、誰も私等の話しを聞いて居らず、また戸口も閉まつてゐるから安心して貴方に稀有な一つの冒險を、いや、もつと適當に言へば、想像も出來ないやうな不思議な事をお話し致しませう。それには一つの條件がいります。つまり、私がお話しすることをご〳〵大祕密にして置いて貰ひたいのです。』

『誓ひませう、』とドン・キホーテは言つた、『なほ更に安全にする爲めに、その誓ひに敗石を据ゑませう。ドン・アントニオどの（もう此の時は彼の名を知つて居た）、聞く耳は持つて居ても話す舌を持たん人に、貴方は話しかけてござるのぢやと御承知を願ひたい。それだから貴方は胸に懷いて居なさることを何なり私の胸に移されても大丈夫です。貴方はそれを沈默の深淵に引き渡したと御安心なされ。』



『そのお約束に信賴しまして、』とドン・アントニオは言つた、『私は貴方が吃驚なさるやうなことを貴方に見聞きさせて上げませう。さうすれば、私はこの祕密を打ち明けられる人がない爲めに感じてゐました。この苦しみを、幾分か減らすといふものです。と申すのは、その祕密といふのが誰にも打ち明けられんものなのですから。』

ドン・キホーテは、かくも用心して話されることの本體は何んなものであらうと怪しみ心惑うた。是に於いてドン・アントニオはドン・キホーテの手を取つて、その靑銅の首や、テーブルや、それの載つて居る碧玉の脚などにその手を渡して、それから言つた、『ドン・キホーテどの、此の首は古今未曾有の大魔術師、大魔法使ひの作でございます。その生れはポーランド人で、あの有名なエスコティロの弟子であつたと思ひます。エスコティロに就いては非常に不思議な物語が澤山傳つてゐます。（ミカエル・エストロ卽もエスコティロはバルマの生れであつた、占星術に巧みであつたからプランダー人の間に大に名聲が擧つた。彼はアレキサンダー・ファーネーズの時代にプランダー人の間に大に名聲が擧つた。そして魔術を取扱ふと疑はれて殺された。）あの人は此の家に居りました。そして私がやつた一千クラウンの返しに此の首を作りました。此の首は其の耳に入る問ひには何にでも答へるといふ性質や力を有つてゐます。エスコティロは羅針盤の方角を觀察し、ま

た圖表を描き、また星を研究し、また都合の好い瞬間を見守つて、そして遂にこれを完全なものに仕上げました……それは明日お分りになりませう。いつも金曜日には默つてゐますから、今日は金曜日なんで明日まで待たなきやなりません。それまでの間に貴方はこれに訊ねたいと思ひなさることをよく考へなさるが宜しい。これの答へはすべて眞實だとは、これまでの經驗で分つてをります。』

ドン・キホーテはその首の效力や性質に驚いた。そしてドン・アントニオの言ふことを信ずる氣がしなかつた。けれども其の事を檢す爲めに待つべき時間が短いので、何も言はうとはしなかつた。唯それ程に重大な秘密を自分に打ち明けてくれたことを彼に感謝したのみであつた。彼等はやがてその部屋を出で、ドン。アントニオはそこの戸に錠をかけた。そして彼等は他の紳士たちの集つて居る部屋へ赴いた。此の間サンチョーは自分の主人にふりかゝつた冒險や偶然の出來事などを幾つか人々に物語つたのであつた。

その日の午後ドン・キホーテは散歩につれ出された。彼は鎧は着ずに、外出服を着せ、その上に朽葉色の上衣を着せた。それは其の時候では氷にでも汗をかゝせさうな衣裳であつた。サンチョーを此の家から出さないやうに饗應をするやうにとの命令が家來どもに與へられた。ドン・



キホーテはロシナンテの代りに、足の輕い華美に飾られた丈高い騾馬に跨つた。人々は彼に上衣を着せ、その背中には、彼に感づかれないやうに、大文字で、『これはラ・マンチヤのドン・キホーテなり』と書いた羊皮紙を縫ひつけた。彼等が散歩に出かけると、其の貼札は偶まドン・キホーテを見る殘らずの人の眼を引いた。そして人々は「これはラ・マンチヤのドン・キホーテなり」と聲を出して讀んだ。そこでドン・キホーテはいかにも多くの人が自分を眺め、自分の名前を呼び、自分を見知つて居るのに驚いて、そして自分の側に馬に乘つて歩いて居るドン・アントニオを顧みて言つた、『實に武者修業の特權はえらいものですな。武者修業を奉じて居るものは世界いづくに到つても知られて名高くなつてをりますからの。御覽なさい、ドン・アントニオどの、まだ私を見たこともない此の市の子供までが、私の名を知つて居りますわい。』

『本當ですな、ドン・キホーテどの、』とドン・アントニオは言葉を返した、『一體火は隱して置くことも秘密にして置くこともできないやうに、美德は認められずにをることは出來ません。それに武の職によつて得られた德は何よりも際立つて輝きますのぢや。』

然るに偶々ドン・キホーテが今記したやうに大喝采の中を進みつゝあつた時、一人のカスティリア人が、ドン・キホーテの背中の銘を讀んで聲高に叫び出した、『またしてもラ・マンチヤのドン。

キホーテか、いま〳〵しい！おい！貴様はその肋骨を滅多やたらに打ッたゝかれても死なずに此處に居るのか？貴様は氣違ひぢや。貴様が本當に氣違ひでも、その氣違ひをそッとわが身に隠して置くんなら、さほど惡くもなからうが、貴様は何か貴様にしたり言うたりする人を片ッぱしから馬鹿にし阿呆にするやうな天才を持つて居る。まア貴様にお伴して居る紳士たちを見るがよい！愚か者、手前の家へ歸れ、そして手前の仕事や女房子供の世話をせい。そして手前の腦を壞したり分別心を破滅させるやうなたはけた事は止めるがよい。』

『おい、自分は自分の勝手にするがよい、』とドン・アントニオは言つた、『何もお前に賴みもせぬ人に餘計な世話を燒くにや及ばん。ドン・キホーテどのは十分正氣なのぢや。またお伴をしてゐる我々とても馬鹿ではない。德は見出されさへすれば何處でも尊敬されるのぢや。この罰當り奴、とッとと立ち去れい。差し出口をたゝくな。』

『なる程、貴方のおッしやる事は尤もぢや、』とそのカステリア人は答へた。『この奴さんに意見するのは刺ある笞を蹴るやうなものぢや。それでもやッぱり、此のお馬鹿さんは萬事にかけてはしかとした判斷を持つてゐながら、それを武者修業の溝から漏らしてしまふといふ人の噂を聞いて可哀さうでたまらんのぢや。けれど私はたとへメテウセラーより長生きをしようとも、今日こ

のかた他人に意見をしようものなら……して呉れよと頼まれた場合でも……その時にや貴方の仰有るやうに、私の上にも私の子孫の上にも罰が當らうと構ひません。』

意見をした者は立ち去つた。そして彼等は又散歩をつゞけた。けれどもその貼札を讀まうとて子供等や群集が餘りにひどく押しかけて來るので、ドン・アントニオは、宛ら何か外の物を取り去るやうな風にして是非なくもその貼札を取り去つたのである。

日が暮れたので、彼等は家へ行つた。そしてその家では貴婦人連の舞踏會があつた。抑もドン・アントニオの妻は身分も良く華美な美しい氣の利いた婦人であつた。この婦人は、自分の家の客人に敬意を表し、且つはその客人の異樣な空想で氣晴らしをする爲めにお出で下さいといつて、五六人の友達を招待したのであつた。それ等の女友だちが來た。彼等は贅を盡した夕食を共にした。そして舞踏は十時頃に始まつた。此の婦人たちのうちには、惡戲好きで快活で、そして全くしとやかではあるが、罪のない愚みの爲めには可なり自由に惡戲をする性質の婦人が二人あた。此の二人は非常に根氣强くドン・キホーテに舞踏をさせたので、彼は肉體のみならず精神までも疲れてしまつた。長く、細く、痩せて、黄いろく、その着物はぴつたり身に膠着き、無ざまに、取り分け全く輕快の趣を缺いたドン・キホーテの姿は實に見物であつた。その快活な婦人たちは

彼にひそかに言ひ寄つた。彼の方では密かに彼等を反撥した。けれども婦人たちに色々と甘つたるく言ひ寄られて、堪へられなくなつたので、遂に聲をあげて叫んだ、『彼方へ行つて下され、私を氣樂にさして下され、いやな申し出はお止めなされ、立ち去りなさい、御婦人がた、そんな汚らはしい望みを持つてござるなら。私の女王たる準へもないドルシネア・デル・トボソは、自分を措いては、誰にでも私をとりこにさせたり從はせたりはしませんのぢや。』かう言ひながら彼は舞踏の爲めにがツかり疲れ果てゝ部屋の眞中にどツさり坐つてしまつた。

ドン・アントニオは彼を助け起して寢床へつれて行くやうに指圖した。そして彼に手をつけた最初の者はサンチョーであつた。手をかけながら彼は言つた、『旦那樣、貴方はわるい時に舞踏をなされましたなア。貴方は勇ましい大方の人は皆舞踏者で、殘らずの武者修業者は踊りに身を打ち込むものぢやとお思ひなされますかい？もしさうお考へなさるなら、そりや貴方の間違ひぢやと申しますぞい。踊りおどるよりや、巨人を斬り殺さうと思ふ人が多ござります。若し貴方の今の踊りが靴投げ踊りぢやツたら、私でも貴方のお代りが勤まりましたろ。私はこれで、靴投げ踊りなら立派に踊れますからの。けれど舞踏と來ちや、から駄目でござります。』

こんなさま〴〵の事を言つてサンチョーは舞踏室に居る人を悉く〳〵笑はせた。それから主人を



寢床へ寢かせ、舞踏の後の寒氣を排出させるやうにとて上からよく夜具をかけてやつた。

次の日、ドン・アントニオは魔術のかゝつた首の吟味を精一杯うまくしようと考へた。そして彼は、ドン・キホーテとサンチョーと自分の友だちを二人とそれにまた、かの舞踏會でドン・キホーテをへと〳〵にさせた二人の婦人——これは昨夜彼の妻君の許に、此の邸に泊つてゐた——これらの人々と共に、例の首のある部屋に鎖ぢ籠つた。彼はその首の持つて居る性質を皆の人に說明して、彼等にその秘密を打ち明けつゝ、此の魔術のかゝつた首の效力を試すのは今が初めてだ、と言つた。しかしドン・アントニオの二人の友だちを除いては誰も此の魔術の秘密を與かり知つては居なかつた。そして若しドン・アントニオが最初その二人の友だちにそれを明かして置かなかつたなら、彼等も自餘の者のやうに必ず同じやうな風に驚かされたであらう。それ程たくみに上手にそれは工夫されてあつた。

その首の耳に眞ッ先きに近寄る者は、ドン・アントニオ自身であつた。そして低い聲で、しかし皆に聞える位に、彼はその首に向つて言つた、『首よ、お前のうちにある德にかけて訊ねるが、私は今何を考へて居るのぢや？』

その首は、唇を動かさないで、皆に聞えるやうに朗かなはつきりした聲で答へた、『私は心の

思ひの判斷は出來ぬ。』

これを聞いて皆の人々はぎよッとした。そして ます〳〵皆を驚かしたのは、そのテーブルの近くにも、また此の部屋ぢうにも、答へるやうな人がないと分つたからである。

『此處に私たちは何人居るか？』とドン・アントニオはもう一度たづねた。すると先きと同じやうにやさしく彼に答へた『お前とお前の細君と、お前の友だちが二人、細君の友だちが二人、それからラ・マンチヤのドン・キホーテといふ名高い騎士とその家來のサンチョー・パンザといふ者。』

そこでいよ〳〵更に驚かれた。何人の頭髮もぞッと逆立つた、そこでドン・アントニオは其の首から退いて叫んだ、『あゝ賢こい首よ、物をいふ首、受け答へをする首、不思議な首！それでも う十分ぢや。私はお前を私に賣つた人に瞞されてはをらん。今度は誰か外の人が行つて何でも好きな質問をおかけなさい。』

大抵の女は物に感じ易くて穿鑿好きなので、眞ッ先きに進んで行つたのはドン・アントニオの細君の二人の友達のうちの一人であつた。彼女の質問はかうであつた、『もし。お首さん、ごく〳〵綺麗になるには何うしたらいゝでせう？』すると彼女が得た答へは『あくまでしとやかになさい、』といふのであつた。



『私はもうお前さんには訊ねません、』とその美しい質問者は言つた。

次には彼女の友だちが進んで行つて言つた、『お首さん、私は私の夫が私を愛して居るかどうか知りたいのですよ。』彼女に與へられた答へは、『御主人が貴女をどう取扱つて居られるかお考へなさい。さうすればお分りになりませう。』といふのであつた。そこでこの奥さんは『その答へならきくこともありません、そりやもう人は自分の受けてゐる取扱ひで、相手の氣質が分りますとも。』と言ひつゝ退いた。

その時ドン・アントニオの二人の友だちのうちの一人が進んで行つてそれに問うた、『私は誰ぢや？』『お前が知つてをる。』といふ答へであつた。『私が尋ねるのはさうぢやない、』とその紳士が言つた、『ぢやが若しお前が私を知つとるならば言つて見い、』『フム、私はお前を知つて居る。お前はドン・ペドロ・ノリスぢや、』といふ答へであつた、

『私はこれから上訊ねようとは思はない、』と其の紳士は言つた、『あゝお首さん、これだけ聞けばもうお前は何でも知つてをるものと十分信じられるわい。』彼が引つ込むと、も一人の友だちが進み出て問うた、『お首さん、私の長男の心願は何でせうかの？』

『先きにも言うたことぢや、』と首が答へた、『私は心願の判斷は出來ませんわい。けれども、お前

の息子の心願はお前を葬ることぢや、とは私も知つてをる。』

『それは「自分の眼で見るものを自分の指で指す」やうなものぢや。』とその紳士は言つた、『そんなことならもう訊ねまい。』

ドン・アントニオの妻がやつて來て言つた、『お首さん、私はお前さんに何を尋ねたらよいか分りません。唯私の夫と一緒にこの先き長年連れ添うて行かれるかどうか、それをお前さんから聞きたいと思ひます。』そして彼女が受けた答へは『お前は長く連れ添はれる。夫の元氣や節制の習慣は長命を思はせる。この長命を他の人等は不節制でよく縮めるのぢや。』

その次には、ドン・キホーテが進み出て言つた、『これ、答へをする者よ、モンテシノスの洞窟で私の身に起つたと私が話すことは事實であつたか夢であつたかどうぢや？私の家來サンチョーの答打ちは間違ひなく成し遂げられるであらうか？ドゥルシネアの魔術をとくことは成就されるであらうかどうぢや？』

『洞窟の質問に就いては、』と答へがあつた、『澤山言ふべき事がある。それには兩方のものがあるのぢや。サンチョーの答打ちはのろ〳〵と進行してゆかう。ドゥルシネアの魔術ときのことはそれ相當の成就が出來よう。』『私はもう別に聞きたいことはない。』とドン・キホーテが言つた、『唯魔



術をとかれたドゥルシネアを見せてさへ呉れゝば、私は自分の願ひ望んだ有らゆる幸運が一度に降つて來たと思ふであらう。』

最後の質問者はサンチョーであつた。彼の質問はかうであつた、『お首さん、私ア何かの拍子で、ま一度總督になりませうかいの？いつかに此のつらい家來渡世からのがれられませうかい？私は村へ歸つて女房子供を見られませうかいの？』これに對して答へが來た、『お前はお前の家を治めるのぢや。そして若しお前が家へ歸れば女房子供に逢はれよう。そして奉公を止めればお前は家來でもなくなるのぢや。』

『ほんとにあア！とサンチョー・パンザは言つた。『私ア自分でもそれを知つてをつたわい。預言者ペログルロさんもこれッ切りしか知らなんだ。』『ペログルロは僧である。』

『この奴め、どんな答へが欲しかつたのぢや？』とドン・キホーテは言つた、『この首は訊ねられたことにぴッたり合ふ返答をしたのぢやから、それで十分ではないか？』

『へい、それで澤山ですがの、』とサンチョーは言つた。『それでも、私はその返事がもつと明瞭して、もつと詳しかつたらと思ひますわい。』

質問と返答とはこれでお終ひになつた。けれども不思議の思ひは終りにならなかつた。この祕

密に與かつて居たドン・アントニオの二人の友だちを除いて、殘りの人々はすべてその不思議の思ひに滿たされてゐた。シード・ハメット・ベネンゼリは、此の首が或る不思議な魔力的神祕を持つて居たのか知らといふ疑惑のうちに世間の人々をとゞめて置かないで、これを直ちに曝露する方が適當であると考へたのである。それ故に、彼は言つて居る：ドン・アントニオは自分が曾つてマドリッドで見たことのある或る肖像作者の手になつた一つの首を模型にして、一つには自分の娯樂の爲め、また二つには無智の人々を驚かす爲めに、家でこれを作つたのである。そしてその仕掛は次のやうであつた。そのテーブルは碧玉にまがへる爲めに彩色して假漆を塗つた木製のものであつた。そしてその下になつて居る臺も同じ材料で出來て居り、その上の重量を一層しツかりと支へる爲めに四本の鷲の爪型の足を突き出して居た。ローマ皇帝の胸像卽ち半身像に似せて、そして靑銅のやうに彩どつたその首は、テーブルと同じやうに全く空であつた。そしてその首はテーブルに非常にしッくりと合つてゐたので、繼目の痕は全く見えなかつた。テーブルの臺もやはり空で、其の首の咽喉や頸と相通じて居た。そして此の全體が此の首のある部屋の下にある他の部屋と相通じて居た。その臺やテーブルや半身像の咽喉や頸などの全體の穴を通して、見えないやうに注意ふかく安排し隱された一筋の錫管が通じてゐた。この上の部屋と相對する下の部屋



には、その管に口を當てゝ返答すべき人を置いてあつた。すると聲は、恰も聽取器を通過するやうに、上から下へ、また下から上へと通じて、言葉は明かにはツきりと來るのであつた。かういふ風だから、この詭計を看破することは不可能であつた。ドン・アントニオの甥の、怜悧な氣轉の利いた學生がその返答をする人であつた。そして彼は前以てその叔父から、首のある部屋へ其の日叔父と共にはいつて行くのはこれ〳〵の人々であるといふことを話されてゐたので、第一の質問に直ちに正確に答へることは彼に取つては容易い事であつた。他の人々の問には自分の推測で、しかも怜巧なので、怜巧に答へた。シード・ハメットは附加へてかう言つてゐる、此の驚くべき裝置は十二三日の間据ゑ置かれたゞしかし、ドン・アントニオは自分の家に魔力を持つた首を所持してゐる、それは問ひ掛けた人々に殘らず答へをしたさうな、といふ評判が市中に取沙汰されて來たので、ドン・アントニオはキリスト敎の方の用心ぶかい見張り番たちの耳にはいりはしないかと恐れて、宗敎裁判所の役人に事の次第を打ち明けた。役人たちは、もしや無智な愚民等を怒らせるかも知れないから、それを打ち壞してもう使ふなと、彼に命令した。然るに、ドン・キホーテとサンチョーは、此の首は魔力ある首で、そして質問に答へる力のあるものといまだに思うて居た。それはサンチョーによりもドン・キホーテに一層滿足に思はれた。

此の市の紳士たちは、ドン・アントニオに酬ひ且つはドン・キホーテに敬意を表する爲め、それにまた彼にその悪しさを現はすやうな機會を與へる爲めに、それから六日目に競技場で馬上槍試合を催す準備をした。しかし、それはこれから述べるやうな理由によつて中止になつた。

ドン・キホーテは靜かに徒歩で市中をぶらつき廻らうと思ひついた。それは若し馬に乘つて出かけたなら子供等が後から從いて來るだらう、と氣遣はれたからであつた。そこで彼とサンチョと、ドン・アントニオに附けて貰つた二人の下男とで散歩に出かけた。かうしてやつて行くうちに、とある街路でドン・キホーテが眼をあげると、非常に大きな文字で戸の上に「書籍印刷所」と書いてあるのが見えた。これを見て彼は大に喜んだ。といふのは、其の時まで彼は印刷所を見たことがなかつたからである。で彼は何んなものであるか見たい氣がしたので從者を殘らず從へて入つて行つた。すると、一方で紙面を引き出してをり、また一方では校正をしてゐるし、此處では活字を組み立てゝ居る、彼處では再校正をして居るのを見た。つまり、大印刷所で見られるやうな仕事を見たのである。彼はとある一劃へ立ち寄つた。そしてそこで何をして居るかと職工に尋ねた。職工等はそのわけを話した。彼は驚いて彼等を見守り、そして通り過ぎた。又彼は或る男に近寄つて、何をして居るかと尋ねた。その職工は答へた、『貴方樣、此處に居なさる此の旦



那は、（と人ずきのする態度や容貌の重々しい樣子の人を指さしつゝ）イタリーの本をスペイン語に飜譯なされたんで、私は印刷せうとて、これを活字に組んで居りますのです。』

『その本の表題は何ですかい？』とドン・キホーテは尋ねた。その問ひに著者は答へた、『貴方、これはイタリー語ではレ・バガテルと申してをります。』

『してレ・バガテルを我がスペイン語で言へば何うなりますかの？』とドン・キホーテは尋ねた。

『レ・バガテルは、』とその著者は言つた、『丁度我々がスペイン語でロス・ジュゲエテス、といふやうなものです。しかし、此の本は名前は賤しいけれども、中容は善良な健固な事柄ですよ。』

『私は』とドン・キホーテは言つた、『イタリー語を多少かぢつてをりましてな、アリオストーの詩句を少しばかり歌へるのを自慢にしてをりますわい。しかし、なア、貴方——貴方の能力を試すために何うか申すのではなく、たゞほんの物好きに言ふのですが——貴方この本のうちでピニャッタといふ言葉に出逢はれたことがありますかい？』

『ございます、度々、』と著者は言つた。

『で、貴方はそれを何うスペイン語に譯しますか？』とドン・キホーテは問うた。

『オラとする外に何う譯しませう？』と著者は答へた。

『まア〳〵』とドン・キホーテは叫んだ、『貴方は本當にイタリー語に熟達してござる！　屹度貴方はイタリー語でピアチェといふのをスペイン語でプラセといひ、またピウといふのをマスと言ひ、スウをアリバ、ギユをアバジョーと譯しませうな、』

『私は勿論さう譯します、』とその著者は言つた、『さういふ言葉は適當な譯語ですからな。』

『私は憚りなく申しますが、』とドン・キホーテは言つた『貴方は世間には知られてをられぬ。この世間は稀有な頓智家や殊勝な勤勞家には、それ相當の報酬を惜しみますのぢや。世には如何ばかりの才能が空しく朽ちることぞ！　如何ばかりの天才が隅の方へ追ひやられることぞ！　如何ばかり價値ある人が顧みられずにあることぞ！　それでも一つの國語から他の國語に飜譯することは……言葉の女王たるギリシヤ語やラテン語からでないならば……フランダースの掛毛氈の裏を見てるやうなものぢやと私は思ひますよ。その姿形は見られるけれども、それを不明瞭にする糸に充ち滿ちてをるので、表の方の滑らかさや輝かしさを出して居りません。そして容易い國語から飜譯するには、創意の力も言葉を自由に使用することも問題になりません。なるとしても、一つの文書を別の文書に書き寫したり書き變へたりする位のものです。しかし私はかう言へばとて飜譯といふ仕事には何の價値も許されないものぢやといふ結論に導く積りではない。何故といふに、人は自



分に取つてこれよりもつと劃の惡い、もつと利益の少ない仕事をしないとも限らぬからぢや。あの二人の有名な飜譯家「バストル・ド・フィドー」を譯したクリストバル・ド・フィギュエラ博士と、「アミンタ」を譯したドン・ファン・ド・ジョーレギュイとは今のやうな評價の中には入れません。あの人等のその二つの本は、甚だ巧妙なのでどれが飜譯で何れが原本だか見別けがつかん位です。しかし貴方は自費で此の本を印刷なさるのですか、それとも本屋へ版權をお賣りになりましたか？』

『私は自費で印刷するのです、』と著者は言つた、『そして私は此の第一版で少くとも一千ヂュカット捗へようと豫期してゐます。第一版は二千部別る筈ですが、一冊六リールづゝで瞬く間に捌けませう。』

『貴方は見事な計算をなさる！』とドン・キホーテは言つた、『貴方は活版屋どもの裏表も御存じなければ、また仲間同志の利益を計ることも御存知ないと見えますな。貴方が二千部も背負ひこみなさつたら、屹度貴方は驚くほど痛い目を見なさるでせう。殊にその本が餘り立派でなくて大して興味のない物であつたら尚のことです。』

『何ですと！』と著者は言つた、『それでは、貴方は、版權料として三マラヴェヂ（時のスペイン國の小貨）私に拂うて、しかもそれで私に御慈悲をして居ると考へるやうな本屋にこれを渡させようと思うてござるの

か？私は世間に名譽を得ようとてこの本を出版するのぢやない。もう自分の作品で既に世に知られて居りますからな、私は金を拵へたいのです、金がなければ名譽も鐚錢一文の價打もないのですから。』

『まア都合よくおやんなさい、』とドン・キホーテは言つた。そして彼は他の箱へと移つていつた。そこで彼は人々が「靈魂の光」といふ標題の本の紙面を校正してゐるのを見た。それを見ながら彼は言つた、『此のやうな本は、種類は澤山あるけれども、印刷するにふさはしい本ぢや。今の世には罪ある人が多い。それで暗黑のうちに居る總ての人には無數の光りが必要ぢや。』

彼はそこを通り過ぎた。そしてまた他の本を校正してゐる人々を見たので、その標題をきいて見ると、これは「ラ・マンチャの工夫に富める紳士ドン・キホーテの第二卷」で、トルデシラスといふ人の著したものだと話した。

『私は疾うからこの本のことを聞いてをつたわい。しかし殘らずの豚に來るやうに、この本の上にもマルチンマス（セイント・マルチン祭、十一月十一日、が來るであらう。一體。小說といふものは眞に迫れば迫るほど、つまり眞實らしく見ゆれば見ゆるほど、その價値も魅力も增すのぢや。そして眞實の物語は、それが眞實であればあるほどよいのぢや。』

アントニオは彼をつれて河岸に橫つて居る軍艦を見に行くことにした。それでサンチョーは今迄に軍艦を見たことがなかつたかのやうに、有頂天に喜んだ。ドン・アントニオは軍艦の司令官にかう言ひ送つた：貴方初め凡ての市民が既に聞き及んでをられる私方の客人、かの名高いラ・マンチャのドン・キホーテを伴なうて、今日の午後に軍艦を見物に參らうと思ひます、と。そしてその軍艦の甲板で起つたことは次の章に就いて話されるであらう。

## 第六十三章　軍艦見物の際サンチョー・パンザの上にふりかつた災難、並びにモリスコ美人の不思議な冒險に就いて。

ドン・キホーテは魔術のかゝつた首の返答をとやかうと深く思ひ廻らした。けれども彼の考へは一つも詭計の秘密に思ひ至ることなくして、却つて自ら確かなものと看做して居るドゥルシネアの魔術解きの約束に悉く集中せられたのである。この考へに彼は自ら大滿足を感じて、何遍も〳〵心の中に繰り返しつゝ近々にその成就を見るであらうと十分に信じてゐた。サンチョーに至つては、先にも言つた如く、總督になることを嫌つては居たけれども、それでも尙今一度命令を與へる身になつて人を從はせて見たいといふ憧れを持つてゐた。こんな憧れは、たとひ冗談にもせよ、權力を占める身になると、不仕合せを伴ふて來るものである。

要するに、その日の午後彼等の主人役ドン・アントニオ・モレノとその二人の友達は、ドン・キホーテとサンチョーを伴うて軍艦へ行つた。司令官は有名なドン・キホーテとサンチョーの二人に逢



光榮を既に承知して居たので、この一行が岸邊へ來るや否や、總ての軍艦からその日除を卸して小喇叭を鳴らした。贅澤な敷物や深紅の天鵞絨の蒲團の敷かれてある小船は、すぐさま水の上に卸された。そしてドン・キホーテがそれへ乘ると、旗艦では舷門の大砲を發放した。他の軍艦も同樣にした。ドン・キホーテが右舷の梯子へ上つた時、三度フ、フ、フと叫んで水夫は皆彼に敬禮した（これは有名な人が船に乘つた時の習慣である）。提督――と呼ぶのであるが――これは身分の高いヴァレンシアの紳士で、ドン・キホーテに手を差し出して抱擁しつゝ、かう言つた、『ラ・マンチのドン・キホーテ殿にお目にかゝりましたので、今日のこの日をわが一生涯中に得られる一番幸福な日として記念碑を建てませう。貴方は武者修業の道の粹を集めて凝らした武士の手本です、龜鑑です。』

ドン・キホーテはこんな王侯のやうな歡迎を受けたので非常に喜んだ。そしてそれに劣らぬ叮嚀な言葉で提督に答へた。それから凡ての者は船尾の上甲板へ進んで行つた。そこは大變立派に飾られてあつた。皆は舷緣のベンチに掛けた。水夫長は甲板を歩き廻つて水夫等に衣服を脫ぐやうに合圖の口笛を鳴らした。水夫等は瞬く間にさうした。サンチョーはこんな大勢の人々が素裸かになつたのを見て吃驚した。そして彼等が惡魔でも働くやうに速かに日除を張るのを見た時に

はいよ〳〵益々吃驚した。けれども是れは皆私が語らうとするものに比べれば菓子や菓子パンに過ぎないのである。サンチョーは艦長席に坐つて居た。それは右舷の最後の漕手に近かつた。豫めかう〳〵するやうにと教へ込まれて居たその漕手は、サンチョーを摑んで、兩手に持ち上げた。すると用意して立つて居つた總ての水夫等は、右の方から順々に手から手へ、ベンチからベンチへと、哀れなサンチョーの眼をくらますやうな早さで廻しはじめた。そこで彼は惡魔が自分を連れて飛び去るのに違ひないと確信した。水夫等は左舷に沿うてサンチョーを送り返し、船尾の上甲板へ据ゑるまではやめなかつた。そこでこの哀れな男は傷つき、呼吸が迫り、全身汗びツしよりになつて、自分の身に起つたのは何事であつたかも判じかねた。

ドン。キホーテはサンチョーが翼なくして飛ぶのを見て、これは初めて軍艦に乘り込む人に對する仕來りの儀式であるかと提督に尋ねた。何となれば、若しさうであるならば、海軍を職業とするやうなどゝ思つたことのないドン。キホーテは、かやうな輕快な早業をしようといふ氣はなかつたからである。そして若し誰かゞ自分を廻さうとして摑まうとするならば、その者の魂を蹴り出してやらうと神かけて誓つた。そして斯う言ふと、彼は立ち上つて佩劍に手を置いた。丁度この時、水夫等は日除を卸した。そして甲板の眞中に躍り上つて、鞭を以て



れて自分の頭の上に落うて來るのかと思つた。彼は恐れて頭を屈めて膝の間に埋めた。ドン。キホーテも少し震へて膝が自由にならなかつた。そして肩をすくめ色を失つた。その時水夫等は卸した時と同じやうに忙しくやかましく帆桁をあげた。その間中彼等は聲も呼吸も有たないかのやうに沈默してゐた。水夫長は錨を引揚げる合圖をした。そして甲板の眞中に躍り上つて、鞭を以て水夫等の背を打ち始めた、そして段々に海へ船を押し出させた。

サンチョーはかうも澤山の赤い足——彼は橈をさう思つたのだ——が一どに動くのを見て、獨りごちた、『ほんとうに魔術のかゝつた物はこんな物ぢや。旦那樣の言はッしやるやうな物ぢやない。この哀れな奴等はどんなことをしたればとて、あんなに鞭打たれたりするのぢやろ。またあすこに口笛をふきながらあちこち歩いて居る男は、こんな大勢の人等をようも鞭打つものぢや。こゝは屹度地獄ぢや。いや、さうでないまでも煉獄ちうもんぢや！』

ドン。キホーテは、サンチョーがこの場の樣を注意ぶかく見てゐるのを見て、彼に言つた、『あゝ、サンチョーよ、もしお前が腰まで裸になつて、こんな人々の中に入らるゝものなら、ドゥルシネアの魔術解きはどんなに手早くやす〳〵と仕おほせられたことであらう！こんな大勢の人のうける苦しみ惱みのうちにをつたら、お前もさうひどくは感じはすまいぞ。それにまた、賢人マアー

リンは、こゝでの鞭打は強い手で打たれるから、お前が何れはその身に加へる筈の鞭打に比ぶれば、一鞭を十鞭に數へて下さらうぞよ。』

提督は、その笞打ちとは何であるか、又ドゥルシネアの魔法落しとは何であるかと尋ねようとした。が、その時一人の水夫が叫んだ、『モンジュイ（モンジュイとはバルセロナの城砦）から、西海岸の沖に橈を備へた船が居ると合圖して居る。』

これを聞いて提督は上甲板へ跳び上つて、叫んだ、『おい、それぢや、その船を逃がすな！物見櫓から合圖をしてゐるのは屹度アルゼリアの二本檣の海賊船に相違ない。』三艘の軍艦は旗艦の命令を受ける爲めに直ぐ樣側に來た。提督は二艘の船に海の方へ進み出るやうにと命じた。そして自分はもう一艘の船と共に海岸を警備することにした。さうすれば、その賊船は逃れることが出來ないのであつた。水夫共はせつせと橈を動かして、船を飛ぶやうにはげしく押し進ませた。海へ出た方の船は二哩ばかり出てから一艘の船を見出した。その船には十四五臺ばかり漕手の腰掛けがある見當であつた。そしてそれは本當だつた。その船はこちらの軍艦を發見するや否や、速力に依つて脫れようとて、またその望みがあると思つて逃げ出した。しかしその企ては失敗した。何となれば旗艦は例しないほど早く走る船であつたからで、そこで非常に早くその二本マストの



船に追ひ付いた。賊船に居る者等はもう逃げることの出來なくなつたことを明かに悟つた。それ故に、その船長は軍艦を指揮して居る艦長を怒らせないやうに水夫等に橈を捨てゝ身を引渡せといふ命令を下さうと思つた。しかし運命は違つた風に差圖してゐたので、こんなことになつてしまつた。つまり、丁度司令艦が充分近く寄つて來て降伏せよと叫ぶ呼び聲が聞える程になつた時、二人のトラキス卽ち醉拂うた二人のトルコ人が、その船にゐた十二三人の者と一緒に小銃を發射して我々の軍艦の船首に居た二人の兵士を殺した。これを見て提督はその船の甲板に居るものは一人も殘さず殺して了ふと憤つた。しかし、軍艦が電光のやうな勢ひで突進すると、向ふの船は軍艦の橈の下を滑り去つてしまつた。軍艦は可なり向ふへ行き過ぎた。賊船の乘組員等は今ぞ生死の境と見て取つたので、軍艦が廻轉して來る隙に、帆をあげて帆走りつゝ漕ぎつして、もう一度のがれようと試みた。けれども、彼等がその敏捷さで得た益は、その輕卒さで失つた害に及ばなかつた。何となれば軍艦は半哩以內で彼等に追ひ付いて、その船の上に澤山の橈を投げかけ、一人も洩れなく生捕りにしたからである。他の二艘の軍艦もやがて來り加つた。そして總て四艘の軍艦が獲物を携へて濱邊へ歸つた。濱邊には、どんな物を持つて歸るかと、それを見たがつて山なす群衆が彼等を待つて居た。提督は陸地に近く錨を卸した。そして此の市の總督が海岸に居

るのを認めた。彼は總督を軍艦へ迎へる爲めに小船を出せと命じた。それから賊船の船長を初め總ての者共三十六人ばかりを早速絞罪に處する爲めに帆桁を卸せと命じた。賊等は皆快活な男で、その大半はトルコの歩兵であつた。提督はどの人がこの船の船長であるかと訊いた。すると捕虜の一人（それはスペインの脫走兵であると後に分つた）がスペイン語で答へた、『閣下、こゝに居りまするこの若い人が船長でございます、』かう言つて彼は一人の立派な凛々しい容貌の青年を指した。その青年は二十歳になつてゐるとは見えなかつた。

『こら、愚か者、』と提督は言つた、『お前はのがれることの出來ないのを知りをりながら、何うして捕者の兵士を殺したのぢや？それが旗艦に對して振舞ふべき仕打ちか？輕卒は勇氣でないと、お前は知んのか？かすかながらも成功の望みがあれば、人は大膽にされるものぢやが、しかし輕卒にはされぬのぢや。』

船長は將に答へようとした。が提督は丁度その時はそれに耳を貸せなかつた。それは。今乘艦しつゝある總督を急いで迎へねばならなかつたからである。總督には隨行員や數人の市民がついてゐた。

『提督には立派な獲物を得られましたな、』と總督が言つた。



『閣下は今に此の帆桁に懸けまする立派な獲物を御覽になるでせうと』提督が答へた。

『何うして？』と總督が尋ねた。

『何故と申しまして、』と提督は言つた、『戰爭のあらゆる掟、道理、習慣に反きまして。この者等はこの軍艦に乘つて居りました私の部下の一番よい兵士を二人殺しました。で私は捕虜としました總ての者、わけても船長だといふ此の若者を綾罪に處すると誓ひましたからです。』そして彼は既に手を縛られ、頸には綱を卷きつけられ、死刑の用意をして立つて居る青年を指した。

總督はその青年を視た。そして眉目秀でたる優美な溫順な彼を見て、彼の命を救ひたいと感じた。それは、この青年の美しさが直ちに彼に推擧狀を與へたからである。そこで總督は青年に問うた、『船長、お前はトルコ人であるか、ムーア人であるか、又は脫宗者であるか？』

それに對して青年も矢張りスペイン語で答へた、『私はトルコ人でもムーア人でも脫宗者でもございません。』

『そんなら、お前は何ぢや？』と總督は言つた。

『キリスト敎を奉ずる女でございます、』とその青年は答へた。

『そんな着物を着そんな境遇に居ながら、女でしかもキリスト敎徒だといふのか！それは信ずる

よりも寧ろ驚くべきことぢや。』と總督は言つた。

『皆さん、死刑の執行を暫くお待ち下さい、』とその若者は言つた、『私が貴方がたに私の身の上をお話し致します間、復讐を猶豫して下されても大した御損にはなりますまい。』

如何なる心も此の言葉を聞いて柔げられない程に堅くあり得ようか、少くもこの不幸な若者が話さうとすることを聞かうとしないほどにかたくなであられようか？提督は若者に思ふことを言へ、だが重い罪科に對する赦免を預期してはならんと命じた。この許可を得て若者は話しはじめた。

『私はムーア人の兩親の間に生れました。賢いよりも不仕合せで、近頃不幸の海に蔽はれて居りますムーアの國の者でござります。私達の上に不仕合せの引きつゞきました間に、私は二人の小父に連れられまして蠻地へ參りました。事實私はキリスト信徒で、ほんの見榮を飾るとか風をするやうな信者でなく、眞實の天主敎徒でございますから、その旨を申しましたけれども、其の甲斐がありませんでした。どう主張りましても私達の悲しい追放を命じた人々は何とも思ひませんでした。また私の小父たちもそれを信じようとしませんでした。却つて人々はそれを僞りだと取り、私が生れた國にとゞまりたい爲めに拵へた言ひ拔けだと取り違へました。そして私は自分の本心からでなく無理無體に引きつれて行かれました。私の母はキリスト敎徒でした。父も分別のある

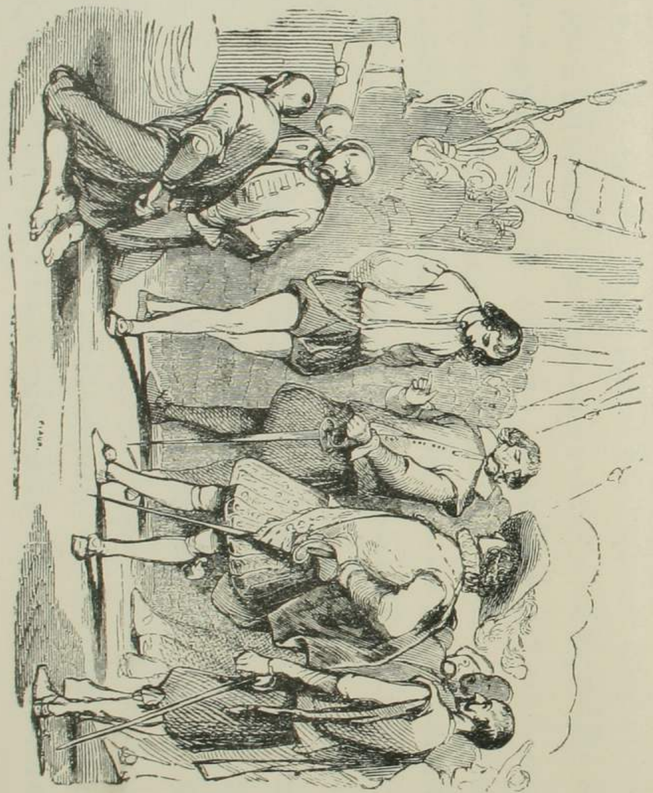


人で、矢張りキリスト敎徒でした。私は母の乳と一緒に天主敎の信仰を吸ひ込みました。私は嬢よく育てられ、言葉にも振舞にもムーア人らしいところを一寸でも見せなんだと思ひます。それ等の美德……と私は存じてゐますから……それに倶なうて、私の美しさ（若し私がいくらかでも持つて居るとしますれば）は私が成長するに從つて加はりました。私は大層引き籠りがちに暮して居りましたけれども、それでもドン・ガスパル・グレゴリオといふ若い紳士が、とう〳〵私を見る機會を見付けてしまひました。その紳士は私の隣村の地主でありまする或る紳士の長男でございます。その紳士が私を見ました次第や、その紳士の心が私の爲あに夢中になりました事や、私たちが逢ひました次第や、その紳士から離れなかつた事などを、お話し申しますと餘り長くなります。取り分け此のむごい網が私の舌と咽喉の間を締め切らうと脅かしてゐる恐ろしい今の場合には尚のこと出來ません。それで私はたゞこのドン・グレゴリオが追放される私に好んで同伴しましたとだけ申しませう。あの人は外の村々から出て來ましたムーア人と道づれになりました。あの人は非常によくムーアの言葉を知つて居りましたのです。そして航海中に、私を引きつれて居りました私の二人の小父とも親しくなりました。私の父は、賢い先見のある人らしく、ムーア人追放の最初の命令を聞きますと直ぐに、外國に私たちの隱れ家を求める爲めに村を棄てゝ出

發しました。父は、高價な眞珠や寶石類を澤山とクルザド――、ドウブルーンなどの金貨を澤山或る場所に――それは私だけ存じてゐますが――埋め匿して置きました。父が歸ります前に私たちが追放されましても、決して其の財寶に手を觸れてはならぬと父に言ひつけられました。私はその言葉に從ひました。そして今申しました通り、二人の小父と親類知人などゝ蠻地の方へ引き移りました。私たちが住處と定めました所はアルジールスで、こゝは地獄と申してもよいやうな所でございます。アルジールスの王樣は、私の美しいことや金持ちなこと――これは幾らか私に取つて仕合せでしたが――それを聞きつけました。王樣は私を呼び寄せて、私がスペインの何の邊から來たのか、また財產寶玉はどの位持つて居るかと尋ねました。私はその場所を申しあげ、そして寶玉や財產はそこに埋めてあります、けれども若し私がそれを取りに歸れば譯なく掘り出されると申しました。さう打ち明ましたわけは、王樣はその強い慾心よりも、却つて私の美貌に氣を奪られはなさらんかと恐ろしくなつたからでございます。王樣が私とかう話してござるところへ、家來の者が參りまして、私と一緒に來た連のうちには實にこの上もなく立派な優美な若者が一人居りますと申し上げました。私はすぐさま家來共の言ふのはドン・ガスパル・グレゴリオの事であると分りました。あの人の美しいことは何んなに大袈裟に言うても言ひ足らぬ程でございます。



私はあの人の陷つて居る難儀を思ふと胸が苦しくなりました。と申しますわけは、此の野蠻なトルコ人の中では、何んなに綺麗な女でも、女よりは美少年が却つて大事がられてをりますからで。王樣は直ちにあの人を目通りへ呼び出せと命じました。そして私に對つては、家來共の言つたことは眞實かと尋ねました。其の時私は、丁度天から救へ込まれでもしたやうに、「それは本當でございます、が、あの人は男ではなくて、私のやうに女であると御承知おきを願ひます、」と申しました。そして私は、これからあの女のところへ行つてあの女に女らしい裝をさせ、そしてあの女の美しさを充分に見られますやうに、またあの女もぎごちない氣持をなくしてお目通りするやうにしたうございますと、さう王樣へ願ひました。王樣は私に是非行くやうにとお命じなさいました。そして匿してある財寶を取りにスペインへ歸ることに就いて、その適當な方法を明日に相談しようと申されました。私はドン・ガスパルに逢うて、貴方が男だと見られたら危險うございますと申しました。私はあの人にムーア人を女のやうに裝らせて、その日の午後に王樣の前につれ出しました。王樣はあの人を見て恍惚りしました。そしてこの娘を留めて置いて、大王へ贈らうと決心されました。そしてこの娘が後宮の女等の中で逢ふかも知れない危險を避ける爲めに、また王樣自身も大丈夫だと思へなかつたので、身分のあるムーアの貴婦人等のゐる家に置いて貰つて、そこ





で保護し世話をしてくれるやうにと王樣は賴みました。で、あの人は直ちにそこへ引き取られました。私たち二人はどんなに苦しみましたか（私はあの人を愛して居ることを打ち消すことが出來ませんので）、それは互に深く相愛して居りながら、強ひて引き離されて居る人々の想像にお任せ致しませう。王樣はそれから私がこの帆前船でスペインへ歸るやうに、又貴方の兵士を殺しましたあの二人のトルコ人を私に伴なはせるやうに、差圖をされました。又このスペイン人の脫宗者も私と一緒に來ました。』——こゝで、彼女は最初に口を利いた男を指さした——『私は窃に此の人がキリスト敎徒であることを知り、また蠻地に歸るよりも却つてスペインに留まりたがつてゐることも知りました。この船に居る餘の水夫どもは、ムーア人やトルコ人で、只漕手を勤めるだけでございます。私たちがスペインの土地に着き次第どこでもよいから、私と此の脫宗者とにキリスト敎徒の着物（それは用意して持つてゐます）を着せて、上陸させねばならんといふ命令ですのに、慾深い圖々しい二人のトルコ人は、その命令には從はないで、こゝらの岸邊に近い海をうろ付き廻つて、出來るなら分捕物を手に入れようと致しました。それは、私たちを最初に上陸させて、もし何か事の起つた場合には、沖に帆前船の居ることを白狀するかも知れず、またこんな風にたよ〳〵こゝらの岸邊に軍艦でも居たら自分たちが捕へられるだらうと心配しながらでご

ざいます。私たちは昨夜この海岸を見とめました。そして私たちが見つけられましたこんな軍艦の
ことは少しも知りませんでした。その結果は貴方がたが御覧なされた通りでございます。手短に申
せば、向ふには女たちの中に、女の裝をしたドン・グレゴリオが命の瀬戸際に立つて居ります。そ
して私は手を縛られて、この物うい命の無くなるのを待ち受けて、といふよりはそれを恐れて、か
うして居ります。皆さま、これで私の悲しい物語は終りました。この話は不幸でもあり眞實でも
ございます。皆さまにお願ひ致したいことは、唯私にキリスト敎徒らしい死に方をお許し下さるこ
とでございます。それは先に申しました通り私の國の人々が犯しました罪科には私は何の責もな
いからでございます。』彼女は口を噤んで立つた。彼女の眼はやるせない涙で一杯になつた。側に
立つて居た人々も涙を誘はれた。總督は、同情の念に動かされつゝ、何も言はずに彼女のところ
へ行つて、自ら手を下して其のムーアの娘の美しい手を縛つてゐる綱を解いた。

このムーア人なるキリスト敎徒がその身の不思議な物語を話して居る間、總督と同時に此の軍
艦へ乘つた一人の年寄つた巡禮が、始終彼女の上に眼を据ゑて居た。そしてその物語が終るや否
や彼女の足下へ身を投げ出して、その足を抱きながら啜り泣きと溜息とに遮ぎられたおろ〳〵聲
で言つた、『おゝ、アナ。フエリックス、私の不仕合せな娘よ、私はお前の父のリコーテぢや。お前

が居ないでは生きて居れぬので、私はお前を探さうとて歸つて來たのぢや。お前は本當に私の精神ぢや！』

サンチョーは今度の不幸な出遊の事を考へて、思ひ沈みつゝ頭をうな垂れて居たが、此の言葉を聞いて、眼を開き頭をあげた。そして其の巡禮を一と目見ると、彼は總督の職を投げ捨てゝ歸つた日に出逢つたのと同じリコーテだと氣がついた。そしてこれが彼の娘であつたことを滿足に思つた。彼女は今は繩目を解かれたので父に抱きつき、自分の涙が父の涙と一つになる程に泣いた。其の時リコーテは提督と總督に向つて言つた、『これは私の娘でござります。名前は仕合せなやうでも、その成り行きは不仕合せでございます。娘はアナ・フェリックスといふ名前で、苗字はリコーテと申します。世間では私の財產やこの娘の美貌やで、なか〳〵評判になつて居りまする。私は生れ故郷を捨てゝして、私たちの隱れ家を探しに出かけました。そしてドイツで一つ見つけ出しました。それで私は娘を探し、埋めかくして置きました澤山の財寶を取出します爲め、此の巡禮の着物を着まして、外の五六人のドイツの巡禮者たちと一緒になつて歸つて參りました。私の娘は見付かりませなんだが、財寶は見つけ出して所持して居ります。そして只今、皆樣方も御覽の通り不思議なめぐり合せで、私は何の寶にもまさるこの寶を——可愛い娘を見出しました。



私たちの潔白なとや娘と私の涙で、もしそのお嚴しい御判決に御慈悲の門を開くことが出來ませうものなら、どうぞ私どもの上にも及ぼして下さいませ。私どもは皆樣方に惡いことするといふ心も有ちませねば、また、正しい譯合から追放されました同國人等のもくろみには、決して同意を存つてをりません。』

これを聞いてサンチョーは言つた、『私はこのリコーテをよく知つとる。また、リコーテが言うてをる娘のアナ・フェリックスのことも本當ぢやと知つてゐますわい。けれど行くとか歸るとか良い志を持つとるとか惡い志を持つとるとかいふことにア、私は何にも言はん。』

この場に居た總ての者が此の不思議な出來事に驚いて居る時提督は言つた、『とにかくお前等のその涙を見ては、私の誓ひを仕遂げられさうもない。美しいアナ・フェリックスよ、天に授かつた壽命を全ふするがよい。しかしこの輕卒な無禮な奴等には自ら行つた罪業の罰金を拂はせねばならん。』さう言つてから、彼は、二人の兵卒を殺した二人のトルコ人を卽座に帆桁へ吊るせよといふ命令を下した。然るに總督は、この二人のトルコ人の振舞は橫着といふようりも寧う氣違ひの傾きがあるから、彼等を絞刑に處さないやうにと熱心に提督に願つた。提督は總督の要求に應じた、つまり、冷靜に復讐することは容易ではないからである。それから彼等は危險のうちに殘されて居るド

ン・ガスパル・グレゴリオを救ふ策略を工夫しやうと試みた。リコーテは眞珠や寶石などで持つて居た二千ヂュカット以上の金をその目的の爲めに提供した。人々は幾つもの策略を提出したが、何れも餘り好くなかつた。唯一つ例の脫宗者のほのめかしたものが好かつた。彼の申し出はかうであつた——つまり六臺ばかりの漕手臺を備へた小船にキリスト教徒の漕手を乘せてアルジ——ルスへ歸航するといふにあつた。さうすると、この脫宗者は、何處で何うして何時上陸が出來また上陸すべきであるかも知つてゐるし、またドン・ガスパルの居る家をも知らんことはないからであつた。提督と總督は脫宗者に信用を置くことに就いて、又漕手であるキリスト教徒を彼に委任することに就いては、少し躊躇した。けれどもアナ・フェリックスは自らこの人々には保證が出來ますと言つた。そして彼女の父は若し其のキリスト教徒等が何かの間違ひで向うに囚はれるやうなことになつたら、自分で行つて彼等の身受金を拂ひませうと申し出た。やがて、この相談がまとまつたので、總督は上陸した。そしてドン・アントニオ・モレノーは美しいムーアの娘と其の父とを家へ連れて行つた。總督はアントニオの力の及ぶ限りの待遇歡待をこの二人に與へるやうにとアントニオに賴み、そして自分は家にある總てのものを彼等のもてなしの爲めに提供しようと言つた。アナ・フェリックスの美しさが總督の心に起さしめた好意や親切はこれほど大きかつたのである。



## 第六十四章　ドン・キホーテの身の上に未曾有の不幸をふりかゝらしめた冒險のこと。

ドン・アントニオ・モレノーの妻は我が家にアナ・フェリックスの來たことを非常に悅んだと、この物語には記してゐる。彼女は大層親切にアナ・フェリックスを歡迎した。そして彼女の美しいのと利發なのに惚々した。何となれば此の美しいムーア人の娘は、以上の二つの點では豐かに賦與されて居たからである。それで此の市のあらゆる人々は恰も鐘の音で呼び集められたかのやうに彼女を見ようとて群集まつた。

ドン・キホーテは、ドン・グレゴリオを救ひ出す爲めに採用された方案は、有利な點よりも危險な點がまさつてゐるから餘り良い方法ではない、とドン・アントニオに話した。そして自分が武器を取り馬に跨りバアバリイへ乘り込んだ方が餘程よいだらう。さうすればドン・ガイフェロスが妻メリセンドラを連れ出したやうに、全ムーア人の軍勢をなみして見事に彼を連れ出して來ようか

ら、といふのであつた。ドン・キホーテがさう言ひ出したのを聞いてサンチョーは言つた、『旦那様、ドン・ガイフェロス様は陸續きの土地から女房を連れ出して、陸路をフランスへ行きなさつたちうことを忘れなさんな。今度のア、うまくいつてドン・グレゴリオを連れ出したところで、間に海がありますから、スペインへ連れ戻る手段がござりませんぞい。』

『死の外には何にでも養生法はあるものぢや、』とドン・キホーテは言つた。『もし海岸に近く船を廻したら、たとひ全世界が妨げようとも、それへ乘り込むことが出來るのぢや。』

『旦那樣ア大層うまく大層造作なく言うてのけまするが、』とサンチョーは言つた、『言ふこと、爲ることにや大分隔たりがござりますわい。そして私はあの脫宗者にひいきしますわい。あの男は正直な心のよい男のやうに思はれますからの。』

ドン・アントニオは、若しあの脫宗者が成功しないやうであつたら、その時は大ドン・キホーテのバアバリイ遠征の方法を採用しませうと言つた。二日たつてからその脫宗者は片側六本橈の輕舟に屈强な水夫等を乘せて出帆した。それから又二日のちに軍艦が二三艘東方に向つて急航した。提督はドン・グレゴリオ救ひ戻しに就いて又アナ・フェリックスの事に就いて總て知らせてくれよと總督に願つたので、總督はその賴み通りにすることを約した。



ある朝ドン・キホーテが甲冑に身を堅めて（つまり彼が屢々言つたやうに、甲冑は彼の唯一の裝飾であり、彼の唯一の休息は爭鬪であつたから、彼は片時も武裝せずに居ることはなかつた）、濱邊を散步しようとて出かけると、向うから一人の騎士が、やはり十分に武裝して、輝く月を描いた楯を持つて、自分の方へやつて來るのを見た。その騎士は十分に近寄つて聲の聞きとれる程になつた時、大音聲をあげてドン・キホーテに呼びかけて言つた、『名高い騎士、如何に賞讚しても餘りあるラ・マンチャのドン・キホーテ、拙者は「銀月の騎士」ぢや。拙者の前代未聞の功業で恐らく貴殿も拙者を憶えてゐなさらう。拙者は貴殿と鬪つて貴殿の腕前を試さん爲め又拙者のかしづく婦人は、その名はあげずとも、貴殿のドゥルシネア・デル・トボソ姬などよりは懸け離れて美しいといふことを貴殿に認めさせ白狀させようと爲めに來ましたのぢや。若し貴殿がこれを手綺麗に明白に認められるならば、貴殿の命は助かり、拙者も貴殿を倒す面倒を省く譯ぢや。若し貴殿が鬪うてそして拙者が貴殿に打ち勝つならば、貴殿は武器をなげすて、冒險廻國を愼み、一年間故郷に退き、そして劍に手をかけることなく、平和に靜穩な有益な休息のうちに暮らすといふ、それだけで拙者は滿足し、その外には何も求めないのぢや。さうすることが貴殿の資產を富まし靈魂の救ひにも必要なことぢや。して又もし貴殿が拙者を打ち負かしたら、拙者の首は貴殿の處分に任せ、拙

者の武器と馬とは貴殿の分捕品となり、拙者の功業の名譽は貴殿の上に移り加はることにします のちや。貴殿の一番よい道は何れであるか熟慮なさるがよい。そして速に拙者に御返事を下さい。拙者が此の仕事を仕遂げる時間といふものは今日だけなのぢやから。』

ドン・キホーテは銀月の騎士の横柄なこと、並びに挑戰を申込むその理由に大に驚いた。そして落ちつき拂つて威嚴を示しつゝ彼は答へた、『銀月の騎士よ、貴殿の功業に就いては拙者今まで一度も聞いたことがない。拙者は誓つて貴殿が名高いドゥルシネアを未だ一度も見たことがないふことを憚りなく申すのぢや。何故ならば、もし貴殿が彼女を見たものなら、貴殿は此の問題をよう出さぬやう氣を附けたであらうと思ふからぢや。彼女の姿を一度見れば、前にも後にも彼女の美しさに比べられる程の美人が世にあるなどゝいふ疑ひは貴殿の心から取り去られてある筈ぢや。それ故、貴殿が嘘をつくとは言はないが、しかし貴殿の述べたことが正しくないといふのぢや。拙者は貴殿が申し出た條件で以て、貴殿の挑戰に應じませう。そして貴殿に限られてある時間を過ごさぬやう直ちに始めませう。ぢやが拙者は貴殿の條件から、貴殿の功業の名譽が拙者に移し渡されるといふことだけは取り除きます。拙者は貴殿の功業とは何んなものか又何れほどの量があるか知らんからぢや。拙者自身のありのまゝの名譽に滿足して居る。然らば勝敗何れとも貴



殿が好みのまゝにお選みなさい。拙者も同樣に致さう。神樣が勝を與へ給ふ方に聖ペテロも祝福を加へ給ふやう。』

銀月の騎士はもう既に市の人々に見られてゐた。そして彼がドン・キホーテと談話をして居るといふことが總督の耳に入つた。總督は、これは屹度ドン・アントニオ・モレノーかそれとも誰れかこの市の紳士が仕組んだ新しい冒險に相違ないと思ひ、直ちにドン・アントニオ其の他二三人の紳士等と連れ立つて濱邊へ急いだ。その時丁度ドン・キホーテは規定の距離を取る爲めにロシナンテを乘り廻して居た。總督は二人の者が明らかに決闘の用意をしてゐるのを見て、二人の間に身を躍らせ、何故あつて斯やうに突然決闘などをするやうな事になつたのかと問うた。銀月の騎士は、それは美の優劣の問題であつたと答へて、そして自分がドン・キホーテに言つたことや、挑戰の條件が双方でかく〳〵に同意されたといふことを手短かに話した。總督はドン・アントニオの許へ行つて、低い聲で君は銀月の騎士といふのは誰であるか知つて居るか、又彼等は冗談半分にドン・キホーテを慰み物にして居るのであるか、と訊ねた。ドン・アントニオは、この騎士は誰人であるか、また決闘は冗談なのか眞面目なのか一向存じませんと答へた。この返答は總督を煙に巻いてしまつた。彼は決闘を進行させてよいか中止させた方がよいか分らなかつた。しかしながら彼はこれ

を決して冗談でないとは何うしても信じられなかつたので、彼はそこから少し引き退いて言つた、『勇敢な騎士たちよ、屈するか死ぬか此の二つの外には、いづれ此の決闘を見合せる道がないとあれば、それにドン・キホーテも一歩も枉げず、銀月の騎士は尚更さうであるとすれば、神様の御手にお委ねするより外はない。決闘をするがよい。』

銀月の騎士は總督が彼等に與へた許可に對して、禮儀正しく思慮ある言葉で感謝した。ドン・キホーテも同じやうにして、それから、決闘の前にするいつもの習慣通り、我が身の保護を神とドゥルシネアとに祈りつゝ、も少し距離を取る爲めに進んだ。それは敵手も同じやうにして居るのを見たからであつた。それから、決闘をはじめる合圖の喇叭も吹かず、また戰ひの樂器は何も鳴らさずに、二人は同時に馬の頸を廻した。そして銀月の騎士の馬はドン・キホーテのよりは速力が早かつたので、その全程の三分の二ばかり駈け進んだところでドン・キホーテに出あつた。そして其處で彼は槍で以てドン・キホーテを突くことなく(彼はわざと槍を高くさし上げて居るらしかつた)非常に激しい勢で打突かつた。それでドン・キホーテとロシナンテとは地べたへ打ち倒された。それは命にもかゝはる倒れ樣であつた。銀月の騎士は、すかさずその上に乘りかゝかつて、ドン・キホーテの兜の眉庇に槍の切ッ先を差し向けて言つた、『騎士どの、貴殿は負かされた。



それのみかこの決闘の條件を承認しなければ御一命は頂戴いたさう。』

ドン・キホーテは傷ついて氣が遠くなり、眉庇もあげずに、まるで墓場の中から言ふやうな弱々しい聲で言つた、『ドゥルシネア・デル・ドボソは世界一の美人ぢや。そして拙者は世界で一番不仕合せな騎士ぢや。拙者の力弱い爲めに此の眞理を枉げるとはよくないことぢや。騎士よ、貴殿は拙者の名譽を奪ひ去つたからには、その槍をづぶりと深く突き入れて下さい。』

『決して拙者はさうはしますまい。』と銀月の騎士が言つた。『ドゥルシネア姫の美しい名譽は、今まで通りに曇らさずに生かしてやらう。拙者の欲することは唯我々が此の決闘をする前に約束した通り大ドン・キホーテが一年間或は拙者から沙汰する迄、故郷に隱退することぢや。』

總督もドン・アントニオもそれからそこに居た五六人の人々も殘らずこの言葉を聞いた。そして又ドン・キホーテが、ドゥルシネアを貶すことさへ自分に要求しない限りは、其の外の事は皆本當の義理堅い騎士らしく遵守しませう、と答へるのをも聞いた。此の約束の言葉を聞くと、銀月の騎士は馬の首を返して總督に頭を下げて會釋し、半跑を打たせて市の方へと走せ去つた。總督はドン・アントニオに急いで彼の跡をつけて行つて是非とも彼の何人であるかを確かめて來いと命じた。人々はドン・キホーテを助け起し、眉庇を取りのけると、彼の顏は眞靑になつて、汗みどろに

なつて居た。ロシナンテはひどい目にあはされて暫らくは動くことも出來ずに横になつて居た。サンチョーは全くしよげて悲哀に沈み、言ふべきことも爲すべきことも知らなかつた。彼は總ての事は夢であり、總ての事業は一片の魔術であると想つた。こゝで彼の主人は負かされた、そして一年の間は武器を執ることができなかつた。サンチョーは主人の功業の光榮ある光りが曇るのを見た。つひこの間して貰つた約束の望みは風前の煙のやうに拂ひ去られた。ロシナンテは一生涯の跛になり、主人の骨々ははづれたのではないかと彼は心配した、若し主人が唯その狂氣を振り落されたのみならば、それは少からぬ僥倖であるが。遂に人々は總督が取り寄せた椅子に乘せてドン・キホーテを市へ運んだ。そして總督もドン・キホーテを斯やうな悲しいはめに陷れたあの銀月の騎士は誰であらうか、それを確かめたさに急いで市へ歸つた。



## 第六十五章

銀月の騎士の誰であるか〳〵解る。なほまたドン・グレゴリオの解放、其の他の事柄が記されてある。

ドン・アントニオ・モレノーは銀月の騎士の跡をつけて行つた。すると一群の子供等がまた彼の跡からついて行つた、いや、追ッかけた。そして遂に彼等は市の眞中のとある宿屋に彼がはいり込むまで見屆けた。ドン・アントニオは、彼の近附になりたい一心から、同じく入つて行つた。一人の家來が銀月の騎士を出迎へて、そして彼の甲冑を脫がせた。それでも尙ドン・アントニオは從いて行つた。そして彼は下の部屋へ閉ぢ籠つた。この騎士が誰であるか〳〵明かになるまでは、彼の麵麭は燒ききれないのだ。銀月の騎士は、この紳士は自分からとても離れがたないのを見て取つて、やがてかう言つた、『貴方、私は貴方が何の爲めに來られたか宜く知つて居ります。私が何者であるかを知らう爲めでせう。貴方にそれをかくし立てする理由もありませんから、こゝでこの下男が私の甲冑を脫がせます間何事も包まず此の事件の眞相をお話し致しませう。私は得業士サ

ムソン・カラスコーと申す者だと御承知下さい。私はラ・マンチヤのドン・キホーテと同じ村の者で、あのドン・キホーテの狂氣や愚かしさは、あの人を知つて居りまする私共に憐憫の情を起させました。わけて私は最も深くそれを感じました一人です。であの人を全快させさうなことは、その故郷の自宅に静かに留めて置くにあると固く信じましてな、私はあの人を家に留め置く方法にふと氣がつきました。そこで、私は武者修業者としてあの人に逢ふ積りで三月前に家を出かけました。そして鏡の騎士といふ假名の下に、負けた者は勝利者の處分のまゝになるといふことを戰ひの條件と致しましてあの人と勝負をして、傷をつけないやうに負かしてやらうと思ひました。私があの人に要求しようと思ひましたとは（つまり私は既にあの人を負かしたものと看做してゐましたから）あの人が故郷に歸り、まる一年の間そこを離れてならないといふことでありました。さうすれば其の間には病氣も直るであらうと思つたのです。けれども運命はさう命じませなんだ。といふのは、ドン・キホーテは私を負かして馬からつき落しました。それで私の計劃は失敗に歸しました。ドン・キホーテは旅をつゞけて行き、私は負けて面目を失つて歸りました。私は落馬してひどく傷つき、それも特に危險なものでありました。しかしそれに拘らず私は再びあの人に出會ひ、貴方が今日御覽になつたやうに、彼に打ち勝たうといふ願ひは消されませなんだ。ドン・



キホーテは武者修業の掟を遵守することには大層几帳面ですから、疑ひもなく、自分の言葉を守る爲めに、私が强請しましたあの命令に從ひませう。これがこの事柄の大體でございます。外には何も申しあげるやうな事はございません。貴方にお願ひしますことは、私に裏切りなさらんことと、つまりドン・キホーテに私の事を打ち明けて下さらぬことです。それはこの私の誠意ある骨折を成功させ、そして才智の優れた人一人に——ドン・キホーテが唯騎士道のたはけた事から免がれたなら——再び元の才智を取り返させたい爲めでございます。』

『あゝ貴方と、』ドン・アントニオは言つた、『あのこの上もなく面白い狂人を元の正氣に回へさうとなさるなどゝは、それは貴方が全世界に加へなさつた罪科で、決して赦しがたいものですよ。貴方、ドン・キホーテが正氣な爲めに得る獲物は、その狂氣の爲めに世間に與へる慰樂に決して匹敵するものでないのぢや。それが貴方にはお分りになりませんかな？しかしこれ程まで望みなく龜裂の入つた人を再び正氣に返さうといふ貴方のお骨折は殘らず無駄になるだらうと私は信じます。そして若し無慈悲でなかつたら、私はドン・キホーテがどうしても本復しませんやうにと申したい位ですよ。その わけは、あの人が回復しますれば、私等はたゞドン・キホーテ自身の滑稽を失ふのみか合せて、その家來サンチョーの滑稽まで失ふことになります。これは疑ひも。

憂鬱の權化でも陽氣にならせる力が十分ございます。けれども私は沈默を守りまして、ドン・キホーテには何にも申しません。さうして置いて、私たちはカラスコー樣のお骨折が水の泡になるだらうといふ私の感じが正しいか正しくないか試すことにしませう。』

得業士は確かにこの事件は有望である、そして自分はその仕合せな結果を當てにして居ると答へた。そこでドン・アントニオは十分に役目を果したので、カラスコーに別れを告げた。カラスコーは直ぐさま自分の甲冑を騾馬の背に載せ、決鬪場へ乘り込んだ馬に乘つて、その日の中に市を立ち出でた。そして此の眞實な物語に記すやうな冒險には出くはさずに故郷へと歸つた。

ドン・アントニオはカラスコーが自分に話したことを總督に報告した、總督はそれを聞いて餘り喜ばなかつた。何となればドン・キホーテが引退すれば、それと共に彼の氣違ひじみた振舞ひを知つて居つた人々の慰みも無くなるからである。

六日の間ドン・キホーテは床に就いて居た。その間彼はあの不仕合せな失敗の事どもをくよ〳〵と思ひ惱んで、氣落ちし、憂鬱になり、氣むづかしく、氣分がわるかつた。サンチョーは彼を慰めようと努めた。そして色々と言つたうちにも取り分けかう言つた、『旦那樣、頭をもちあげなされ。そして精一杯に出來ることなら氣を引き立てなされ。貴方樣は地上へでんぐり返りはしても、肋骨



一本折らなんだから、神樣へお禮を申しあげなされ。御承知の通り「與へる者は受ける」し、「木釘のある所にいつも鹽豚はない」でござりますからの、こんな病氣を治すのに醫者なんぞいりませんから、醫者にアおさらばで、もう國へ歸りましよわい。見知らぬ土地や所をうろつき廻つて冒險を探すことア止めにしませうかい。よう考へて見れば、餘計ひどひ目に逢うたのは旦那樣ぢやが、餘計に損したのは私でござりますぞい。總督の役にもありつきましたが、もう二度と總督になる氣はござりません。けれど伯爵になりたい心はまだ捨てやしません。それも旦那樣が武者修業をやめて、その爲め王樣になることも自然やめなされば、その伯爵にやアありつけませんわい。さうすりや私の望みは皆煙になりよりますのぢや。』

『靜かにせい、サンチョー、』とドン・キホーテは言つた。『お前は私の中止と引退とは一年を越えないことを知つとるぢやらう。私は直きに元の譽れある職務に立ち返るから、國ひとつ手に入れたり郡一つお前に呉れたりすることにや事は缺かんわい。』

『神樣はお聞きなされ、惡魔は聾になれ、』とサンチョーは言つた。『私はいつも希望は惡い所有物よりや優しぢやちうことを聞いとりました。』

二人が話して居るところへドン・アントニオが非常に喜ばしいやうな樣子で入つて來て叫ん

だ、『ドン・キホーテどの、よい知らせを持つて來たから、おごんなさい。ドン・グレゴリオも、彼を請け戻しに行つた脫宗者も上陸しましたんぢや——上陸したどころか、今頃はもう總督の家に居るでせう。そして間もなく此處へ來ませう。』

ドン・キホーテは少し氣を引き立てゝ言つた、『實は、それが全くあべこべになつたら嬉しかつたのにと、私は申したいところですよ。といふのは、もしさうであつたら、私は是非ともバアバリイへ押渡らねばならなんだのです。あツちへ行つたら、ドン・グレゴリオのみならず、あツちで捕虜になツとるキリスト敎徒は殘らず私の武力によつて自由の身に返してやりましたらうわい。が、私はみじめな人間ぢやのに何を言うてをるのぢや？私は打ち負かされた者ではないか？倒された者は私ぢやないか？私は一年間武器を取つてはならぬ人間ぢやないか？私は何の爲めにかう宣言をしてをるのぢや、何故私はから威張りしてをるのぢや？、私には劍よりも紡錘でも扱ふ方が似合うてをるのに。』

『旦那樣、もうそんな事はおツしやるな。』とサンチョーは言つた、『病氣になつても牝鷄は生かして置くがよい。』『今日はお前の爲め、明日は私の爲め』ですぞい。こんな出來事を氣にかけてはなりません、『今日倒れるものは明日起きあがり』ますわい、寢床に臥込まうとさへ思はなんだ



らの。と申しますのは、弱りこんで、新らたな戰に出る新らたな元氣をふり起さんならばちうことでござりますぞい。旦那樣、さア起きあがつてドン・グレゴリオさんを迎へさつしやれ。家の中が物騷がしうなつたやうぢやから、今頃は屹度着きましたらうでな。』

彼の言ふことは當つた。ドン・グレゴリオと脫宗者とは船出してから歸るまでの報告を總督に申し述べるや否や、ドン・グレゴリオはアナ・フエリックスに逢ひたい一心から、脫宗者と共にドン・アントニオの家へやつて來た。ドン・グレコリオがアルジールスから連れ出された時は女の裝をしてゐたが、船に乘つてから、彼は自分と一緒に逃げ出した一人の捕虜の着物と取り換た。しかしどんな着物を着ても彼は愛せられ仕へられ尊嚴せらるべき人らしく見えた。蓋し彼はすぐれて人品よく、その樣子から十七八のやうに見えた。リコーテとその娘とは彼を出迎へた。父は涙を流し、娘ははにかんだ。彼等は互に抱き合はなかつた。それは、深い戀のあるところには決して過度の大膽はないからだ。相並んで見られたドン・グ・レゴリオの秀麗とアナ。フェリックスの優美とは、居合せた殘らずの人々の嘆賞となつた。この瞬間、戀人同士の代りに話したものは沈默であつた。そして彼等の眼はその淸くて嬉しい感情を言ひ表はす舌であつた。脫宗者はドン・グレゴリオを救ひ出す爲めに選んだ手段方法を說明した。またドン・グレゴリオも、廻りくどくなく

極く簡單に彼が女たちの中に逗留して居た時の危さ極り惡さなどを話した。その話しぶりで彼の智慧が年の割に進んで居ることが讀めた。手短に言へば、リコーテは脫宗者並びに船を漕いだ者共に手厚く贈物をして、その勞に酬い謝した。そして脫宗者は敎會の會員に復歸して和解した。そして罪滅しの苦行と悔改によつて腐つた枝から淸淨潔白な人になつた。

それから二日のうちに總督はドン・アントニオと相談してアナ・フェリックスとその父とをスペインに留め置く爲めに取るべき手段を講じた。それは善良なキリスト敎徒たる娘にも、どう見ても此處に留まつて居たい方であるらしい父にも、何の反對もあらうとは思はれなかつたからである。ドン・アントニオは外の用件で首府へ行かねばならぬ處だつたので、此の事件を取極めようと申し出た。首府では好意や賄賂の助けで面倒な事件も澤山落着がつくといふことを彼はほのめかした。

『いゝえ、』と此の相談に出席して居たリコーテが言た、『好意や賄賂を賴みにしちや駄目でせう。陛下が我々の追放を委任なされたドン・ベルナルヂノー・ド・ヴェラスコーやコンデ・ド・サラザールには嘆願も約束も、賄賂も同情に訴へますことも、何の役にも立たないでせう。なる程あの人が正義に慈悲を混ぜてゐなさるのは事實ですが、それでもなほ、私等の國民全體が汚れ腐つて行くのを



て、あの人は鎭め治す膏藥をあてがふよりも寧ろ燒き焦す燒鏝を當てつけますからな。それでこそ、あの人は深い思慮や聰明や用心や懸念で、あのがツしりした肩に此の重大な政策を擔ひそれを施行して立派な成績を擧げてゐます。で私たちの計劃や目論見や策略や强請などは、あの人のアルグス、ギリシヤ神話、百眼の巨人のやうな眼を眩ます力がありません。あの人の眼はいつも私どものやうな者が一人でも隱れ家に隱れて居やせんかと見張つて居りますわい。丁度地の中に隱れて見えなかつた根が時の經つに從つて、現はれて遂にはスペイン中に毒のある果物を持つやうになるのを恐れるといふ風です。今は皆拂ひ淸められまして、今まで私等が大勢でこの國をおどかしてゐましたその恐怖の思ひをのがれました。大フィリップ三世の英斷とドン・ベルナルヂノー・ド・ヴェラスコにそれを委せたこの上もない賢さはえらいものですよ！』

『とにかく、』とドン・アントニオは言つた、『私が向ふへ參りましたら出來るだけ盡力いたしませう。そして後は天命に待つとします。ドン・グレゴリオは長らく國に歸らなんだから御兩親の御心配を慰めかた〳〵私と一緒に參りませう。アナ・フェリックスは私の宅に家內と一緒においでになるか、または僧院へでもお預けしませう。それから私たちがどういふ都合になるか分る迄はリコーテさんは總督と一緒にお留まりなさることを總督も甚度喜ばれるに相違ないと思ひます。』

總督はその提案に悉く同意した。けれどもその經過を耳傾けて聞いて居たドン・グレゴリオはどうしてもアナ・フェリックスとは離れられないし、また離れたくもないと言ひ出した。しかし彼の兩親に逢ふ爲めに行くのが彼の目的であつたから、彼女の爲めに歸るてだては追つて考へるとして、彼は申し出された手筈に從つた。アナ・フェリックスはドン・アントニオの細君と一緒に後に殘り、リコーテは總督の邸に留まつた。

ドン・アントニオの出發すべき日が來た。それから二日のちにドン・キホーテとサンチョーが立つべき日が來た、ドン・キホーテは倒れた際の怪我が直りきらなかつたので今まで、出かねて居たのであつた。ドン・アントニオがアナ・フェリックスに別れを告げた時は、二人とも涙を流し溜息をつき、氣が遠くなつたり啜り泣きをしたりした。リコーテは御入用なら千クラウンあげませうとグレゴリオに申し出た。けれども彼はアントニオが貸してくれた五クラウンの外はどうしても取らなかつた、その五クラウンはマドリットへ行つてから返濟すると約束した。それから今も言つた通り、ドン・キホーテとサンチョーがその後から出發した。ドンキホーテは甲冑は着けずに旅着を着て、それからサンチョーは徒歩で、甲冑を背に乘せたダップルを引きつれて出かけた。



## 第六十六章　これを閲讀する人は見、これの朗讀を聞く人は聞くべき事柄を傳へる。

ドン・キホーテはバルセロナを出はづれると、頭を轉じて彼が失敗した場所を眺めた。『此れは私のトロイであつた、』と彼は言つた、『此處で、私の臆病からでなく私の不運から、手に入れてゐた一切の光榮を剝ぎ取られた所ぢや。此處で私の功榮の光りが曇つたのぢや。一口に言へば、此處で私の幸福が二度と起きあがらないやうになつたのぢや。』

サンチョーはこれを聞いて言つた、『旦那樣、丁度繁昌の時悦ぶと同じやうに不仕合せな時に辛抱するのが勇氣ある人の心掛けでござりますぞい。私は自分の身で判斷しますがの——私は總督になりました時にや悦びましたが、今家來になつて徒歩で歩くからと言うて何の悲しいこともござりませんぞい。それに聞けば、世間で「運命の女神」といふのは飮んだくれで氣まぐれな性惡

る女で、おまけに盲ぢやとさ。あの女は自分のしたことを見もしなければ、誰を倒し誰を起したかも知らなんだ、といふことですわい。』

『お前は大哲學者ぢや、サンチョー、』とドン・キホーテは言つた。『誰が敎へたのか知らんが、お前は大分譯の分つたことを言ふわい。ぢやが私はかう思ふのぢや、世の中には「運命の女神」などゝいふものはない。また善かれ惡しかれ、何事も偶然に起つて來るものではない。これは皆神樣が前以て定め置かれたことなのぢや。「人は各その運を造る」といふ諺はこゝから來るのぢや。私は私の運を造つたのぢやが思慮分別の量が適度になかつた。それ故私の自信は私を大變な目に逢はせたのぢや。私はロシナンテの弱い力が到底銀月の騎士の馬の大きな圖體に匹敵ふものぢやないちうことを考へて見んけりやならなかつたのぢや。一言に言へば、私は運試しをやつた。私は精一杯のところをやつた。私は打ち負かされた。がしかし私は名譽は失つたが束約を守る美德は失はなかつた。また失へるものでもない。私が大膽で勇敢な武修業者であつた時分、私は手と行ひとで私の功業を維持した。で、卑しい者となつた今は私が結んだ約束を守つて私の言葉を維持しようと思ふのぢや。では進まう。サンチョーよ、我々は故郷へ歸つて一年間坊主のやうな生活をしよう、そしてその蟄居の間に新しい元を養つてこの夢寐の間も忘られぬ武の職務に還るとしよう。』



『旦那樣、』とサンチョーは答へた、『徒歩の旅といふものは餘り面白いもんぢやございませんの。私アもう長い旅をする氣はありませんぞい。此の鎧は誰れかゞ縛り首になつた代りに、どツかその邊の樹の枝へぶらさげて置きませうかい。そして私はダップルの上に乘つて、足が地から離れさいすりやあ、旦那樣の思ふ通りに進むことができますわい。私が徒歩でしかも長旅をするんぢやと思ひますと、馬鹿げて來ますわい。』

『サンチョー、お前はよう言うた、』とドン・キホーテが言つた、『私の甲冑を紀念物として樹の枝に吊して行かう。そしてローランドの甲冑の紀念物の上に鐫りつけてあつた言葉をその樹の上に彫りつけようと思ふ。それはかうぢや——

敢てローランドと力を試す者にあらざれば、此の甲冑を動かすべからず。』

『それ、そこでございますわい、』とサンチョーは言つた、『それからもし道中でロシナンテを入用と感ぜんやうなら、やッつぱり此處へ吊して置く方がよござりませうぞい。』

『それでも矢張り、私はあの馬も此の甲冑も吊して行きたうはないのぢや。』とドン・キホーテは言つた、『「よく仕へたものに惡るい返報」などゝ蔭口は言はれたくないからの。』

『御尤でござります、』とサンチョーは言つた、『悧巧な人の言ふやうに「驢馬の落度を荷鞍に負はせ

せてはならぬ」ですからの。そして今度の落度は旦那様にござりますから、御自分をお責なされ。もう缺け損じて血だらけになつた甲冑や、弱いロシナンテや、私の弱い足に無理な旅をさせうとして、貴方様の疳癪玉を破裂さしてはなりません。』

このやうな會話に其の日は暮れた。つゞいて四日の間は別段彼等の旅行を妨げる事が起らなかつた。が五日目に二人が或る村へ入つて行くと、とある宿屋の戸口に多勢の人が居て祭日のやうに樂しんで居た。ドン・キホーテが近づいて行くと一人の農夫が呼びかけた、『そッから來なさる二人のうちの一人の旦那、貴方は兩方とも御存じなしぢやから、どちらの賭事が本當か敎へて下さりませう。』

『それは敎へて上げようとも、』とドン・キホーテは言つた、『その事件をよう私に知らせて呉れさへすればの。』

『まアそれはかうなんで、貴方樣、』とその農夫が言つた、『この村の者で、大層肥つて二十ストゥンポンドの富豪もの目方のある男が、九ストゥンから上はない近所の男に徒歩競爭しようと挑みかゝりました。で同じ重さの物を持つて百歩の距離をかけッこしようッてことに相談が纏りました。ところで何うして其の重さを同じやうにするのかと挑んだものが訊かれた時に、かう申しました。相手の男は九ストゥンの目方があるから、背中へ十一ストゥンの目方のある鐵を乘ッけるがよい。さうすりや痩せた者の二十ストゥンが肥えた者の二十ストゥンと丁度になる、と。』

『何を言ふのぢやい、』と、ドン・キホーテの答へないうちにサンチョーは直ぐ樣言つた、『世間の人は皆知つとるやうに、私アつひ近頃總督兼裁判官の職を投げ出して來たのぢやが、こんなあやふやな問題を片づけたり、色々な口いさかひに口をきくのは、そりや私のものぢや。』

『立派に答へるがよい、サンチョー、』とドン・キホーテが言つた、『私の頭は餘りに亂れて、ごたゝ〳〵してをるから、猫に麵包きれを與るには適して居らん。』

この許しを得てサンチョーは自分のまはりに群れ集つて、口をあけて、自分の口から出る判決を待ちかねて立つて居た農民どもに言つた、『皆の衆、その肥えた男の持ち出したこたア理屈に合はんし、また其の中に正義の影もない。世間で言ふやうに、挑まれた者が武器を選ぶちうのが本當なら、挑んだ方は相手に勝ち目を持たせんやうなものを自分で選ぶ資格はないのぢや。そこで私の判斷はかうぢや、肥つた挑んだ方の男は自分の身體を切り取つて、皮を剝いで痩せさせて、苅りこんで直して、そして自分の好きなやうに都合のよいやうに身體の何處からか十一ストゥン程の肉を取つてしまふのぢや。かうやつて九ストゥンに目方が減れば、はじめて相手の九ストゥン

の者と同じになつて掛け合ふのぢや。さうすりや二人は同じ條件で走れるやうにならうわい。』

サンチョーの判決を聞いた時に一人の農夫は言つた、『まことに、この旦那は聖者様のやうな口をきゝなされ、本山の上人様のやうな判決をなされたぞい！けんどあの肥つた男は自分の肉を十一ストゥンどころか一オンスでも捨てたがらんちうことア請合ひぢや。』

『二人に爭競をさせんのが一番え、考へぢや、』ともう一人の者が言つた、『さうすりや痩せた男も重荷の下にへたばることもねえし、肥つた方も肉を剝ぎ取らんでもすむからなア。さア賭の半分で酒を飲まう。そして一番え、酒のある酒屋へ此の旦那たちを連れて行きませうわい。』雨がふつたら上衣を掛けてくれ」ぢや。』

『皆の衆御親切は有難いがの、』とドン・キホーテは言つた、『ぢやが私は一寸も留まつては居られんのぢや。私の悲しい思ひや不仕合せな事情やで、仕方なしにかう素氣ない風で、道を急ぎますのぢや。』かう言つて彼はロシナンテに拍車をあて、突き進み、皆の者を驚かした。彼等は見たり聞いたりした事に、またドン・キホーテの不思議な姿に、それから其の家來の如才なさに（彼等はサンチョーをさう思つたのだ）驚き呆れた。そして一人の者が言つた、『家來がかう悧巧なりア、旦那はどんなだらう？あの人等がサラマンカへ勉強に行つたら、直に裁判所のお役人にならッしやるちやろな。そりやほんの他愛もないことぢや——唯本をうんと讀んで、儲けと仕合せを手に入れゝばよいのぢや。自分でも何處に居るやら知らん間に、手に權標を持つてるか、頭に法冠をかぶつとるぢやろ。』



その夜主從の者は靑天井の下に野宿して過した。次の日彼等が旅をつゞけて行くと、合財袋を肩に振り分けにかけて手には短い投槍か長釘の打つてある棒かを持ち、飛脚のやうな身支度した一人の男が徒歩で自分等の方へ來るのを見た。その男はドン・キホーテへ近寄ると、足を速め半ば走つて彼の所へ來た。そして右の股に抱きつき（何となれば上の方には屆かなかつたから）、大喜びの樣子で叫んだ、『あゝ旦那さま、ラ・マンチヤのドン・キホーテさま、貴方さまが公爵閣下のお城へお歸りなさることを殿樣公爵閣下がお聞きなさいましたなら、何んなにお喜びでございませう、殿樣は奥方公爵夫人と御一緒にまだあしこに居られます！』

『はてな、どうも見覺えん顔ぢやがな。』とドン・キホーテは言つた、『またお前が言はなければ、お前の名前も知らんのぢや。』

『私は殿樣公爵閣下の從僕トシロスでございます、』とその飛脚が答へた。『ドーニヤ・ロドリグエスの娘と結婚しようとしまして貴方樣と決鬪しますことを拒みました者でございます。』

『さては〳〵！』とドン・キホーテは叫んだ、『それでは私の敵の魔法使ひが私から決闘の光榮を盜み去る爲めに、相手をお前の話してをるやうに從僕に變へたが、それがお前であつたのか？。』

『馬鹿なこと、貴方樣！』と飛脚が言つた、『魔法にかゝつたの、姿を變へたのと、そんな事はまるつきりございません。私は決鬪場へはいります時も從僕トシロスで、出て參ります時もいつも從僕トシロスでございます。私はあの娘が氣に入りましたので、決鬪せずに結婚しようと考へました。しかし私の目論見は大層違つた結果になりました。貴方樣がお城を立ち退きなさると直ぐに殿樣の公爵閣下は私に百笞下さいました。それは私が、決鬪する前に言ひ付けられた事と反對に振舞つた爲めです。そしてとゞのつまりはあの娘は尼僧になり、ドーニヤ・ロドリグェズはカスティルへ歸りました。私は只今殿樣が總督閣下へお送りなさる手紙の小包を持ちましてバルセロナへ參る途中でございます。若し貴方樣のお氣に召すなら、私は此處に上等の奴を瓢箪一杯持つて居ります。少し溫まつてはゐるが性は變つてゐませんから、咽喉が渴きましたら一口おやんなさいませ。それにトロンチョンの乾酪も少々ございます。貴方樣の渴きが眠つてゐましたら、こいつがそれを搖り起して醒まさせませう。』

『一つよばれようかな、』とサンチョは言つた、『もうその酒の效能書アそれでえゝ。一杯ついで



おくれんか、トシロスさん。インドの魔法使が皆ついて居ようが構ふものかい。』

『本當にお前はこの上もない食ひしん坊ぢや、』とドン・キホーテは言つた、『そして此の飛脚が魔に收りつかれでをり、このトシロスが贋者であるのを知ることが出來ないやうな、天下第一の大鈍物ぢや。この男と一緒に止まつて腹一杯食ふがよい。私はゆる〳〵先へ行つてお前の追ひつくのを待ち合はさう。』

從僕は笑つた。そして瓢箪を鞘から拔き出し、乾酪の小切れを袋から取り出し、麵麭の小さな塊を取り出して、二人は綠の草の上に坐り、仲よく睦しく、袋の中の物を平げて底をはたいた。遂には手紙の包みまで舐めた、それは唯チーズの匂ひがしてゐたので。

トシロスはサシチョーに言つた、『全く、お前の旦那はキじるしに違ひねえな。』

『違ひねえ！』とサンチョーは言つた、『旦那は誰にも何にも借りはないわい。旦那は何にでも代を拂うてゐなさるんぢや。取り分け氣狂ひの通用する處ぢや尚のことよ。私はそれをはツきりと十分に知つとるわい。そして旦那にもはツきりと十分にそれを言ふんぢや。しかしそれに何の用があるのぢや？取り分け今はもう皆すんでしまうたのぢや、旦那は銀月の騎士に打ち負かされたからの。』

トシロスはドン・キホーテにふりかゝつた事を聞かしてくれとサンチョーに頼んだ。がサンチョーは旦那をあまり待たせては宜しくないから、又いつか逢つたら其の時はゆつくりとお話しようと答へた。それから彼は立ち上つて、胴衣を振ひ、髭から麵麭屑を掃ひ落とし、ダップルを先に驅り立てゝ、トシロスに別れを告げ、そこを立ち去り、樹蔭の下に自分を待つて居た主人に追ひついた。



## 第六十七章　ドン・キホーテが羊飼ひとなつて、彼が約束した年の過ぎ去る間野原で暮さうといふ決心の事。その他眞に愉快にして幸福な事ども。

ドン・キホーテは打ち負かされる前にもいろ〳〵な思ひに惱まされたのであるが、彼が失敗してからは尚更多〳〵の思ひが彼を惱ました。既に言つたやうに、彼は樹蔭に居た。すると蠅が蜜に集まるやうに、いろ〳〵な考へが群がり集つて來て彼を刺した。ある考へはドゥルシネアの魔を落とすことに向いた。他の考へは彼が強ひられた引退の間に送るべき生活の上に向いた。そこへサンチョーが來て、從僕のトシロスの寬大な氣質を大變ほめて話した。

『サンチョー、』とドン・キホーテは言つた、『お前はまだあしこに居るあの男を本當の從僕ぢやと思ふとるのか？お前はドゥルシネアが變つて田舍娘に變形したのを、また鏡の騎士が得業士カラスコーに變形したのを見たあの記憶はもう無くなつてしまうたと見えるの。あれはみんな私を迫

害する魔法使ひの業なのぢや。ぢやが、お前がさう呼んでをるそのトシロスに、アルティシドラはどうなつたか彼女は私が居らんやうになつたので泣いたか、または私があしこに居つた時彼女が苦しんだ戀の思ひをもう忘却に委せてしまうたか、さういふことを聞いて見たかどうぢや。』

『私が抱いとりました考へは、』とサンチョーは言つた、『馬鹿な事を問ふ爲めに時間をつぶすやうなものぢやございません。全體、旦那樣！貴方樣は今他人の思わく、取りわけ戀の思ひなどをお尋ねなさるやうな身分でございますかい？』

『考へて見い、サンチョー、』とドン・キホーテは言つた、『戀からした事と感謝の情からした事との間には非常な相違がある。騎士は戀に對して屈せぬことはあらうが、嚴密に言へば、恩を忘れることは不可能なことぢや。アルティシドラは、どう見ても、本當に私を戀して居つたのぢや。彼女はお前も知つとる通りハンケチを三枚私にくれた。彼女は私が出發するときに泣いた、彼女は私を呪うた。彼女は恥も外聞も構はずに人前で歎いた。これは凡て私を愛慕してをつた證據ぢや。戀するものゝ怒りは常に呪ひとなるものぢや。私は彼女に與へる望みは何にもない。彼女に捧げる寶は何にもない。といふのは私のものは皆ドゥルシネアに與へてあるから、そして武者修業の寶は人目を眩ました正體のない妖精どもの寶のやうなものぢやからの。私

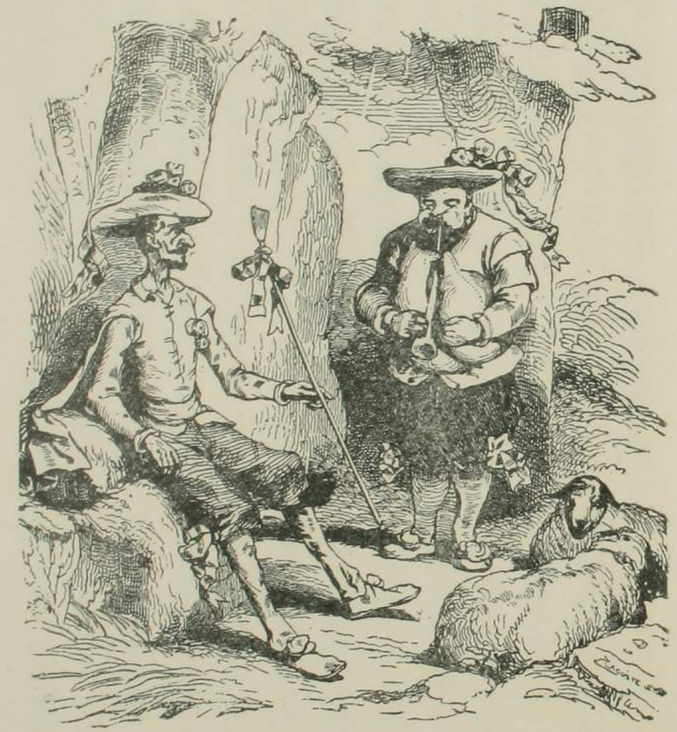


が彼女に與へることの出來るものと言うては、彼女の爲めに私が持つてをる私の記憶の場所だけぢや。それも私がドゥルシネアに捧げたものを損ずることのないやうにしての上でぢや。お前は自分を笞打ちその肉を鞭撻することを怠つて、ドゥルシネアに濟まぬことをして居る——私は狼にお前のその肉を食はして見たいわい——その肉はあの可哀さうな姫を助ける爲めよりも、寧ろ蛆蟲の爲めに保存されてあるやうなものぢや。』

『旦那樣、』とサンチョーは答へた、『もし本當の事を話さにやならぬと言ふんなら、私の脊なかを鞭打つことは、魔法を掛けられて居る人の魔を落とすこと、何の關係もないとしか思へませんわい。それは「お前の頭が痛むなら膝へ香ひ油を擦りつけろ」といふ諺と同じやうでございます。兎にも角にも旦那樣がお讀みになさた武者修業のいろ〳〵な物語の中で、貴方樣は決して鞭打ちで魔を落としたといふ人にはお出逢ひなさらなんだに違ひございません。ぢやが何方にしても、私の氣の向いた時か、樂に鞭打たれるやうな好機會が來たら鞭打ちましよわい。』

『まあそれでもよい、』とドン・キホーテは言つた、『お前は私の婦人を助ける義務があるといふことを覺えて置かねばならぬ。お前は私のものぢやから、私の婦人はまたお前の婦人なのぢや。』

こんな風に話しながら旅をつゞけて行くと、過ぎし頃牡牛に踏みつけられた場所へと來た。





ドン・キホーテはそれを見覺えて居てサンチョーに言つた、『こゝは牧歌風のアルカデイアを復活し模倣しようと努めて居つた彼の華やかな女羊飼ひと華美やかな羊飼ひとに出逢うた牧場ぢや。あれは樂しさうでもあれば新らしい思ひつきでもあつた。サンチョーよ、若しお前が贊成するなら、あれと競爭して、兎に角私が螯居して居る間私等も羊飼ひにならかと思ふわい。私は牧場仕事に入り用な牝羊や其の他いろ〳〵な物を買はう。そして、私は名を羊飼ひキホーティスと改め、お前は羊飼ひバンジノと改めて、森や林や牧場をさまよひ、此處では唄を唄ひ、かしこでは哀詩に嘆き、泉や澄みきつた小川や流れ川の水晶のやうな水を飲みなどしよう。櫛の樹は私等に そのうまい果實を澤山與へるであらう。堅い栓の樹の幹は椅子を與へ、柳は木蔭を、薔薇は匂ひを、遠く廣がつてをる牧場はいろ〳〵さま〴〵な染め色で彩られた敷物を與へるであらう。澄んだ清い空氣は私等に呼吸をさせるであらう。月と星とは私等の爲めに夜の闇を輝かすであらう。歌は私等が悦びとなるであらう。アポロは私等に詩を與へ、戀は私等に空想を與へ、それによつて唯今の世ばかりでなく未來までも永く高名になるであらう。』

『あゝ、』とサンチョーは言つた、『そのやうな生活は私の考へに寸分違はず合ひまする。殊に得業士のサムソン・カラスコーや床屋の親方のニコラスなどは、それを見るか見ぬに私たちと一緒に

羊飼ひにならつしやるぢやろ。それから牧師補も羊小屋で一緒にならうちう考へを起さんとも限りませんの。あの人は陽氣で樂しみの好きな人ぢやから。』

『よう言うた。サンチョー、』とドン。キホーテは言つた、『得業士のサムソン・カラスコーが若し羊飼ひの仲間に入るなら、いや疑ひもなく彼は入るぢやらうが、羊飼ひサムソニノー若しくは大方カラスコンと呼ぶであらう。床屋のニコラスはニコルーソーと呼ぶであらう。昔ボスカンがネモローソーと呼ばれたやうに。牧師補に至つては何かあの人の稱號からでも取つてキュリアンブロとでも呼ぶほかには何んな名前が適るか分らんわい。私等の情人たるべき女羊飼ひどもには、私等が梨でも摘み採るやうにその名を摘みとることが出來る。私の意中の人の名は女羊飼ひの名としても姫君の名としてもふさはしいから、この上あの女に適るやうな名前を選ぶ面倒を見る必要はない。サンチョーよ、お前の思ふ人にはお前の好きな名前をつけるがよい。』

『私あテレソナちう名前の外にやどんな名前もつけようとは思ひません、』とサンチョーは言つた、『その名前はあの女の丈夫なのに能う似合ひませうわい。あの女の名前はテレサぢやから、本名にも適うて居りまする。それから私が歌のうちにあの女を褒めて歌ひますと、私の心がどれほど操正しいか〻分ります。私ア麥から造られた麵麭よりえゝものを他人の家で探さうとは思ひません

からのう。善い手本となられます爲めに、牧師補さんは女羊飼ひを持たれん方が善さそうですわい。得業士さんが持ちたいちうなら、それは勝手に探しなされぢや。』

『ありがたいことぢや、サンチョーよ！』とドン・キホーテは言つた、『私等は何んな生活をすることぢやろ！私等は何んなホーボイ笛のやザマラの風笛を聞かう！どんな手鼓や小鼓や胡弓を聞かう！若しかういふいろ〳〵な種類の音樂の中にアルボーグを加へたら、牧歌風の樂器は殆んど凡て揃ふことになる。』

『アルボーグとは何でござりますかい！』とサンチョーは問うた、『私は今までつひぞ聞いたこともなければ見たこともござりません。』

『アルボーグといふのはの、』とドン・キホーテは言つた、『燭臺のやうに拵へられた眞鍮の板ぢや。互ひ違ひに空の方を叩くと音が出る。それは大して愉快でもなく調子もよいといふ程ぢやないが、併し全く不愉快でもない、そして風笛や手鼓などの田舍風の調子には大層よう合ふものぢや。アルボーグといふ言葉はムーア人の言葉ぢや。頭にアルのついとるスペイン語は大抵ムーアの言葉から來たのぢや。例へば、アルモハザ、アルモルザル、アルホンブラ、アルグァシル、アルフゥセマ、アルマーセン、アルカンシア、など其の外同じ種類のものがそれで、數はさう澤山はない。スペ



イン語のうちには二で終るムーア語は唯三つしかない。それはボルセギュイ、ザクイザミ、マラヴェディぢや。アルヘリとアルファクイはアラビア語から來たことが分る、二に始まつて二に終つて居るからのう。アルボーグといふ言葉をいふ拍子にふと思ひ出したから序ながら述べて置くのぢや。そしてそれは此の天職を完成するに非常な助けとなるであらう。その天職といふのは、お前も承知の通り、私は幾らか詩人らしいところがあるといふことぢや。それに得業士のサムソン・カラスコーも一と廉の詩人ぢや。牧師補に就いては私は何にも言はぬ。があの人が少し詩人くさいところのあるのは確かぢや。また親方のニコラスも疑ひなくそれぢや、といふのは、床屋は、皆とまでは行かずとも大抵は六絃琴を彈き、詩を誦むからの。私は別れを嘆くことにしよう。お前は心變らぬ戀人として自分を讃美することにせい。羊飼ひのカラスコンは棄てられた戀人となつて出ることにし、牧師補のキュリアンブロは何なり自分の氣に入つたものとなつて現はれることにしよう。さうすれば總ての事が心ゆく限り樂しく行くであらう。』

この言葉にサンチョーは答へた、『旦那樣、私は不仕合せでござりますぞい。私は左樣な仕事にありつく時が來ないと氣づかひますわい。あゝ、私が羊飼ひになりましたら綺麗な匙を拵へませう！食卓やクリームや花飾りや牧場風のいろ〳〵の品を拵へませう！そしてさういふものを拵へ

たとて、私を智慧者ぢやといはれることアないまでも、發明の才があると言はれるにや間違ひござりませんぢやろ。私の娘のサンチカは牧場に居る私等の所へ辨當を持つて來ませう。ぢやがお待ちなされ——あの子は面が好いし、羊飼ひは朴實といふよりも惡戲好きぢや。私はあの子に「羊の毛を取りに行つてそして剪まれて來る」やうなことア爲せますまいて。戀をすることゝ無法な慾とは、田舍も都市も同じことですからの。また羊飼ひの木小屋も王樣のお宮も一つことでござりますからの。「原因がなうなりや罪もなうなる、」で「目さへ見ぬなら心は破れぬ、」とか「善い人の祈禱よりも、さツさと逃げる方がまし」とありますからの。』

『サンチョー、もう諺は止めにせい、』とドン・キホーテは呟鳴つた、『お前が言うた諺の一つで、お前の言はうとしてをることを言ひ表はすには十分ぢや。度々私は諺をさう無暗に使はぬやうに、使ふにしてもよい加減にするやうにと、お前に忠告して置いた。然るにそれは無人の境での說敎のやうに見えるわい。」私の阿母が私を打つ、それでも私はわるさを續ける、」と言ふ風ぢや。』

『旦那樣は、』とサンチョーは言つた、『世間でよう言ひますが、あの「フライ鍋が釜に言うた、あちらへ行け、黑尻め、」のやうぢやと私にや思はれますわい。貴方樣ア諺を言ふなと私をお叱り



なされますが、旦那樣こそ諺を澤山紐でからげて持つてござるのぢや。』

『よいかの、サンチョー、』とドン・キホーテは言つた、『私は諺を適切に持つて來る。ぢやから私が諺を引用する時は指環が指にきツちり嵌まるやうに適合するのぢや。お前は諺を亂暴に取り入れる、まるで諺を引き入れるよりも竈ろ引きずり込むやうなものぢや。若し私が思ひ違ひしてをらぬなら、私は既に、諺は昔の賢人の經驗と觀察とから引き出された短い格言であるといふことを話した筈ぢや。適當に引用されぬ諺は無意味な言葉で格言ではない。ぢやがもうこの事は澤山ぢや。日が暮て來たから、私等は夜を過ごす爲めに街道から少し離れたところへ退かねばならぬ。明日は何んな事が起るやら、それは神樣が御存知ぢや。』

二人は路の側へそれた。そして晩くなつてから乏しい晩飯を認めた。これは大層サンチョーの氣に入らなかつた。彼は森や林の中で武者修業者のお伴をすることの難澁なことを心の中に繰り返して考へた。折々はドンディエゴー・ド・ミランダのところで、または金滿家カマチョーの結婚の場合やドン・アントニオ・モレノーの場合のやうに、お城や邸宅で豐かな食に有りついたこともあつたけれども。しかし、彼はいつも晝ばかりでもなければ、また何時も夜ばかりでもないと考へた。そこでその夜も彼は眠つて過ごし、彼の主人はまどろみもせずに過ごした。

## 第六十八章　ドン・キホーテにふりかゝつた剛毛のある冒險。

その夜は可なり暗かつた。それは、たとひ大空には月があるにはあつたけれども、それが眼に見える區域になかつたからである。このディアナ姫月のは時々地球の向ふ側へ逍遙を試みられて、そしてこちらの山々を漆黒にして、谷々を眞暗になさるのである。ドン・キホーテはその最初の睡眠だけは自然の法に從つたが、しかし二度目の睡眠にはさう行かなかつた。これは、決して二度目の眠りを有つことのなかつたサンチョーとは非常に異なつてゐた。何故といふにサンチョーはりと來ては、宵から朝まで續いたからである。これに依つても彼はいかに健全な體質を有ち、いかに心勞の少いかを示した。ドン・キホーテは自分の氣苦勞でぢッとしてをられなかつた。その果ては遂にサンチョーを起して言つた、『サンチョー、お前の無頓着な天性には驚いてしまふわい。お前は屹度、何の情も感じも受けぬ大理石か堅い眞鍮で出來とるのぢやの。お前が眠つてをる間に、私は臥ながらも醒めてをる。お前が歌うてゐる間に、私は泣く。全くの滿腹からお前は鈍つ



て痩れとるのに、私は斷食で氣が遠くなる。主人の惱みを分ち、その悲しみを共に感ずることは、良い僕たる者の義務ぢや、それはたゞ外見を繕ふ爲めばかりにでも。これ、この夜の靜かさ、この場所の淋しさ、これは私等に眠りを破つて何か逢夜の祈りでもせよと勸めよるやうぢや、これ、本當に起きるがよい。そして少し向ふの方へ退いて、心持よく氣輕く元氣を出して、あのドゥルシネアの魔術除けの爲めに三四百鞭お前の身體へ加へて呉れい。またこれは、賴みとして、折り入つてお前に賴むのぢや。といふのは、お前の强い腕を有つとることは私も知つてをるから、もう二度とお前に摑みかゝるやうな考へはないのぢや。お前がその鞭打ちを濟まし次第、私等は故郷の村でする筈の田園生活を直ぐ樣始めることにして、私は別れの悲しみを歌ひお前は身の貞操を歌ひながら、この殘る夜の間を歌ひ明かさうわい。』

『旦那樣、』とサンチョーは答へた。『私ア眠つてをる最中に起き上つて身體を笞打つやうな修道坊主ぢやござりませんぞい。それにまた、痛い鞭打と歌を歌ふことゝ、さう極端から極端へ行くことア人間業とは思はれません。まア〳〵旦那樣、私をこのまゝ眠らせて鞭打ちなどで窘めんで置いて下さりませんかい。さうして下さらんと、私の肉身にやおろかなこと、この胴着の毛にでも金輪際觸はらしやしませんぞよ。』

『この、無情者奴が、』とドン・キホーテは言つた、『この、無慈悲な家來奴が！あゝ、私はこれまでも、またこれから後も、貴樣に食ひ料を與へ恩惠を施すのに、それが皆有り難がられぬ與り損のものぢやとは！私のお蔭でこそお前は總督にもなつたし、また近いうちに伯爵か、或ひはそれに掛け合ふ程の爵位を手に入れる見込があるのぢや。それは私も――ボスト・テネブラス・スペロ・リュセム（暗黒の後に、我は光明を待ち望む）』

『そりや何のことやら私にや分りません。』とサンチョーは言つた、『私の知つとりますのはたゞ、眠つてをる間は恐れも望みも、心痛も譽もないちうことだけでござります。ほんとに、この眠りを作り出した人にえゝ仕合せがありますやうに。この眠りは、殘らずの人の思考を包む外衣で飢るい思ひを治す食物で、渇きを追ひやる飲物で、寒さを暖める火で、暑さを減らす寒で、さうして詰るところ、何でも買はれる世界通用の錢で、羊飼も王樣も阿呆も賢い人も同なじにする秤や分銅でござりますわい。眠りは、たゞ一つ瑕を有つてをると聞いてをります。そりや、死ぬことによう似とることぢや。ほんとに、眠入つた人と死んだ人とは餘りたんとは違ひませんからの。』

『サンチョー、お前が今のやうに上品に口をきくのは今まで一度も聞いたことがなかつたぞよ。』とドン・キホーテは言つた、『こゝに至つて初めて私は、お前の時々引き出して來るあの諺の本當ぢやといふことが分り出した……それ、「生んだ人には似ずに、養うた人に」といふあの諺を。』



『ハテ、まア、私の旦那樣、』とサンチョーは言つた、『唯今諺をつゞけて出すのは、私ぢやござりませんぞい。私のよりやア、貴方樣のお口からこそ重なり合うて諺が流れ出よりますわい。貴方樣のと私のとの違ひは、貴方樣のは丁度よく場所に合ふが私のは合はんちうだけでござります。けれど、どッちにせよ、そりや皆諺でござりますわい。』

丁度この時、一種の不快な不明瞭な物音のしてゐるのに二人は氣づいた。それはこゝら一體の谷々に鳴り渡つてゐるやうに思はれた。ドン・キホーテは立ち上つて、佩劍に手をかけた。サンチョーはダップルの下に身を隱して、自分の片側には鎧の束をもう一方の側には荷鞍を置いて、恐ろしくて顫へてゐた。ドン・キホーテの不安もそれに劣らなかつた。その物音は刻々に大きくなつて、そしてこの度胸を拔かれた二人の者へ――いや、そのうちの一人はその勇氣を以て萬人に知られてをるから――少くともその一人の者へ、だん〳〵近づいて來た。この事件の眞相はかうであつた。つまり數人の人々が緣日市で賣らうとて六百頭以上の豚をつれて、こんな時刻に通りかゝつたのであつた。そしてその豚どもの立てる物音や唸りや鳴き聲が非常に大きくて、ドン・キホーテとサンチョーとの耳を聾して、何が何やら見分けをつけさせない程であつたのだ。この廣き

に渡つた喰りの獣群は大波のやうな集團をなして進んで來た。そしてドン・キホーテの威厳にもサンチョーのそれにも何の敬意も表はさずに、彼等の上を眞直に通過し、サンチョーの防禦物を粉碎した。そしてドン・キホーテを顚倒させたのみか、お負けにロシナンテの足までかッさらへた。そしてこの清潔ならぬ獣等が無二無三に踏みにじつて、唸つて、急速に通過した後には、荷鞍も鎧もダップルもロシナンテも地べたへちらばらに撒き散らされ、サンチョーもドン・キホーテも呆然としてしまつた。

サンチョーは精一杯に辛くも立ち上つて、旦那樣その劍を私に貸して下さい、あの穢らしい無禮な豚どもを五六疋殺してやりたいから、と言つた。つまり、もうこの時は、その何であつたかを彼等は看あらはしてゐたのである。

『これ〳〵捨てゝ置け、』とドン・キホーテは言つた、『この辱めは私の罪業の刑罰ぢや。打ち負けた騎士が犬狗の類に喙はれ、胡蜂に刺され豚の足に踏まれるのは、これ正しい天の懲しめぢや。』『それからまた、』とサンチョーは言つた、『負けた侍の家來に蠅がたかッたり、蝨が食うたり、飢が迫つたりするのも、やッぱり天の懲しめぢやと思ひますわい。もしや家來をしてをる私等が、その御奉公をしてをるお侍衆の息子か、それとも近い親類でござりましたら、お侍衆の落度



の罰が私等の上にふりかゝつても……いえ、私の曾孫の上までふりかゝつても、何の不思議もござりますまい。けれどもバンザの家柄とキホーテの家柄に何の緣つゝきがござりますぞい！まア、ま一度横になつて、も些と殘つてをる夜の間を眠明しませうかい。そして神樣が夜を明けさせて下さつたら、私等の心持も直りましよ。』

『サンチョーよ、お前は眠るがよい、』とドン・キホーテは答へた、『私が眠ずの番をする爲めに生れたやうに、お前は眠る爲めに生れたんぢやからの。私はこれから夜の明けるまで、樣々な胸の思ひを自由にかけらして、一つ小さい牧歌にその思ひをやりませうわい。その牧歌は、お前に知らせずに、昨夜私が頭の中で作つたのぢや。』

『歌に作られるやうな胸の思ひはどうせ大したもんぢやないと思ひますがの。まア、貴方樣はお好きなだけ歌をつゞくりなされ。私アまた精一杯眠ますからの。』とサンチョーは言つた。そして直ぐ樣、自分の要り樣なだけ地面の幅を取つて、身體を丸めてぐう〳〵眠り込んだ——義理や、負債や、または如何なる心勞にも煩はされることなしに。ドン・キホーテさへ、とある椋の樹か栓の樹かの——といふのは、シード・ハメットは何の樹であつたか明記してゐないので——幹にもたれて、自分自身の溜息を伴奏にして次のやうに歌つた——

あゝ、戀神よ、汝のむごさを
心の奥に思ひめぐらすとき、
われは一切の終りを求めばやと
『死』にこそのがれ行くなれ。

さはれ、わが悲しみの大海の
樂しき港に近づきては
また甦へるよろこびして、
なほもこの世にたゆたふなり。

生と死は、かくなんわれを
殺しては復た蘇へらする。
生と死をなぐさみものゝごと
弄ぶ奇しき宿命よ！



ドン・キホーテは一節ごとに夥しき溜息と少からぬ涙とを伴なはせた。それは如何にも、自分の敗戰やドゥルシネアに逢はれないことの悲しさで、胸を刺し貫かれた者にふさはしかつた。

やがて日の光は來た。太陽はその光でサンチョーの眼を打つた。彼は眼醒めて起き上つた。そして身體を振つて、だるい手足を伸ばした。それからかの豚の群が自分の持ち場に加へた大損害を見て、その群やそれに附いてゐた者等を呪つた。それから二人はその旅をつゞけた。夕暮の迫る頃、彼等は向ふから騎馬の人が十人と徒歩の人が四五人、こちらへやつて來るのを認めた。ドン・キホーテの心臟は烈しく鼓動し、サンチョーは恐れおぢけた。何故といふに、彼等の方へと近づいて來るそれ等の人々は、槍や楯を携へて、全く戰をする裝束をしてゐたからである。ドン・キホーテはサンチョーを顧みて言つた、『私にもし自分の武器が使へて、あの誓約でこの手が縛られてをらなんだら、私等に向うて來よるあの軍勢などは、私には菓子か菓子麵麭に過ぎんのぢや。しかしこれは大抵私等の思うて居るやうなものでないかも知れん。』その騎馬の人々はやがてやつて來た。そして何とも言はずにおの〳〵槍を揚げてドン・キホーテを取り圍み、そして彼を殺しさうな見幕で槍の穗先を彼の胸や脊中へ差し向けた。徒歩で居る一人が、默つて居れといふ合圖に自分の唇へ指を差し當てながら、ロシナンテの手綱を掴んで道路の外へ引き入れた。すると他の人

々はサンチョーとダップルとを自分等の前に驅りつゝ、すべて異樣な沈默を守つて、ドン・キホーテを引ッ張つて行く者の足跡につゞいた。ドン・キホーテは、自分を何處へ伴れて行つて何うする積りかと、二三度訊ねようとした。しかしいつも彼が唇を開けるや否や、それを閉ぢよとて彼等は槍の穗先で脅かした。サンチョーも同樣の取り扱ひを受けた。彼が、徒歩の連中の一人に話しかけようとすると、卽座に刺棍で打たれた。そしてダップルまでが、これもやはり話しかけようとしたかのやうに、そば杖を喰つた。日は暮れた。彼等は足並を早めた。そこで二人の囚は益〻人の恐怖はいよ〳〵增して來た。取り分け彼等が自らかう罵られるのを聞いた時には尙更さうであつた——『おのれトログロディテス急げッ』。『おのれ野蠻人奴默つてゐろ』。『おのれ人食奴行きやがれッ』。『おのれスキティア人奴ッ、ぶつ〳〵いふな』。『おのれ人殺しのポリフェメス奴、おのれ血に渴いた獅子奴、おのれ等の眼を開けるな。』と、こんな風な名前を並べて、この捕拿者等は、哀れな主從の耳を惱ました。サンチョーは心のうちでかう言ひながら進んだ『私等を、トルトリテスぢやの、野蠻人ぢやの、獸ぢやの、穀物を吹分けよるのは、惡い風ぢや」な。「犬一疋に棒たくさんといふ風に、私等にや一どきに澤山の災難がふりかゝる」わい。この不仕合せな冒險で、この上惡い奴が私等を待つてをつてくれんやうに願ひたいもんぢや。』

ドン・キホーテは全く昏惑して乘り行いた。彼は、自分等に浴びせかけられたこんな無禮な名目の眞意は何であるか、如何に考へてもそれを判別することが出來なかつた。そして彼の達し得た唯一の結論は、つまり、決して善いことはありさうになく、たゞ惡いことばかり澤山出て來さうである、といふことであつた。やがて、眞夜中過ぎ半時ばかりで、彼等はとある城に到着した。これを見るとドン・キホーテは自分等がつひ此の間まで泊つた公爵の城だ、と直ぐ樣見て取つた。この館をそれと見とめた時に、彼は言つた、『はてな！これは何のこツちや？この家ちにあるものは全く慇懃と恭々しさばかりぢや。しかし打ち負けた騎士には、善も惡に變り、惡はいよ〳〵惡にならうわい。』

彼等はこの城第一の大廣庭に入つた。そこには彼等の驚きを增し恐れを加へるやうな風に用意され準備されてあつた。それは次の章で見られる通りである。

## 第六十九章　この偉大なる物語の全過程中に於いてドン・キホーテにふりかゝつた最も不思議な最も非凡な冒險。

騎馬の人々は馬から下りた。そして徒歩の人々と共に、一刹那の躊躇もなくサンチョーとドン・キホーテとを引ツ捕へて、その大庭へと伴れこんだ。庭のぐるりには百にも近い松火が承口に立てられて燃えつゝあつた。その上に、まはりの廻廊には五百以上ものランプが灯されてゐたので、可なりに暗い夜ではあつたが、日の光の必要は感じらるべくもなかつた。庭の眞中には莊麗な棺架が一つ置いてあつた。それは地面から二ヤード以上も高く立つてゐて、そして非常に廣い黒鴉絨の天蓋ですツかつり蔽はれてゐた。そしてその棺架の周圍の階段には、百個以上もの銀の燭臺に白蠟がともされてあつた。棺架の上には一人の處女の亡き骸が見られたが、それはその身の美しさで死そのものをも美しく見せるほど愛らしかつた。彼女は錦襴の枕の上に頭をやすめて横たはり、その頭には香ひの美い樣々の花で拵へた花環が載せてあつた。彼女の兩手はその胸の



上に組み合され、その手の間には黄ろな勝利の棕梠の一と枝（敵いた絵画で、これは復活が禁に用おたのを促存した物）があつた。庭の片方には舞臺が立つてゐて、その上の二脚の椅子には二人の人物が坐つてゐた。その人等はおの〳〵頭上には冠を、手には笏を持つてゐるので、本物にせよ贋物にせよ、兎に角或る種の王樣たちだと見えた。この舞臺は階段づたひに昇るのであるが、こゝのすぐ傍にも二脚の椅子があつた。捕虜を運び込んで來た人々は、ドン・キホーテとサンチョーとを、全くの沈默のうちに、それにまたこの二人にも默つてゐなければならぬぞと手眞似で悟らせて、その椅子の上に坐らせた。けれど、彼等の手眞似がなかつたにしても、この沈默は守られたであらう。何故といふに、この二人は見ることゝ〳〵に驚いて物も言へなかつたからである。やがて立派な二人の人物が、大勢の附き人等に附き從はれつゝ舞臺の上へ登つた。これはこゝの主人の公爵と公爵夫人だと、直ぐ樣ドン・キホーテには見分けられた。彼等は、例の二人の王樣とも見られる者のすぐ近くにあつた華やかな椅子に身をおろした。これを見て驚かない者があらうか？いや、そればかりではなかつた。ドン・キホーテは、棺架の上の亡き骸は美しいアルティシドラの死骸であると感づいたのであつた。公爵と公爵夫人とが舞臺に上つたので、ドン・キホーテとサンチョーとは立ち上つて慇懃に敬禮した。その返禮に彼等は輕く頭をさげた。ちやうどこの時、一人の役人がつか〳〵とやつて來てサ

ンチョーに近づき、一面に火焔をゑがいた黒い膠硬布の長上衣を彼の體に投げかけた。それから彼の帽子を取り去つて、その代りに一種の僧帽をかぶせた。それは宗教法院の宣告を受ける人々が被るやうな帽子であつた。それから役人はサンチョーに耳うちして、決して口を開いてはならない、もし開いたら猿轡をはめるか、それとも殺してしまふぞと言つた。サンチョーはわが身を見上げ見下した。すると自分の身はすツかり焔で燃え立つてゐた。けれど、それ等の焔は自分の身體を焼きはしないので、彼はそんな物は些とも氣にしなかつた。彼は僧帽を脫ぎ取つた。そして見ると、その上には澤山惡魔が畫いてあつたので、『よし、あんな火焔も私を焦しもせず、こんな惡魔どもゝ私を誘うて行きさへせにや。』と、さう心のうちに言ひながら、再びそれを被つた。ドン・キホーテも矢張りサンチョーを見上げ見下した。そして彼は、たとひ恐怖の爲めによい判斷力を失つてゐたとはいへ、サンチョーの示してゐる姿を見ては微笑せずには居られなかつた。やがて、棺架の下から——さうらしく思はれた——低いやさしい笛の音が起つた。これは（あたりは死のやうな沈默が支配してゐたので）人聲に壞されずに出て來たので、柔かい切なげな思ひを起させた。それから、その亡き骸と見えるもの、枕の下から、突然ローマ人の服裝をした美しい若者が現はれた。その若者は自ら掻きならす竪琴の音に合せて、やさしい澄み切つた聲で次ぎの二節を歌つた——



つれなきドン・キホーテの薄き情に
弄ばれたる美はしのアルティシドラは
今ぞ世に甦へりつゝ不思議のこの庭に、
そを迎へんと喪服すがたの貴女等も今こゝに。
その數々の貴女等は似合しく着飾れど、
わが姫は粗き毛布をまとひをはす。
姫の美貌と悲しみを歌ひまつるには
オルフューズの絃にもまさる筆用ゐてん。

さはれ、わが歌は、たゞうたかたの
この世のみには限られじ。姫よ、わが舌の
死して冷たき折からも、わが聲は
かまへて君に獻げの歌をうたひまつらん。

所狭き囚はれのこの家を放れ行く我が靈は
冥府の湖こえ行く時も、道すがら
君のほまれを歌ひつゞけて、
忘却の川のさゞなみをとゞめてん。

こゝで、かの王樣らしい者の一人が聲高く言つた、『神聖な歌手よ、もうそれでよい、それでよい！この準へもないアルティシドラの死やその愛らしさを、今こゝに並べ上げたら限りもない事であらう。この姫は世の衆愚が想像するやうな死に方はしてをられぬ。却つて名聲のうちに生きてをられる。また罪償なひの苦行のうちに生きてをられる生命を取り回す爲めに、行ふ筈である。そこで、さア、私ー・バンザが、この姫に長く失はれをる生命を取り回す爲めに、行ふ筈である。そこで、さア、私と一緒にこの暗黒なディスの洞穴の裁判席に同席してをられるラーダマンツス（ギリシア神話に出る名判官）殿、君はこの處女の復活に關してあの不思議な運命の神々が判決を下した一部始終のことを承知してをられるに依り、卽座にそれを宣告し發表して、われ〳〵が喜び待つて居るこの婦人の復活の目出たさを最早や寸時も延ばさんやうにして下されい。』

ラーダマンツスは、自分の同席判事ミノス（これもギリシア神話に出る名判官）がかういふや否や、起立して言つた、『ホー



この館の役人ともは、高下大小の別なく〳〵悉く取り急いでこゝに參れ。そしてサンチョーの面部へ二十四個の平手打ちを加へ、またその身體や腕に十二の抓りと、七つの針突を加へい。つまり、アルティシドラの回復はこの儀式に據つてかゝるのぢや。』

これを聞くや、サンチョーは沈默を破つて叫び出した、『飛んでもない、私や邪宗者にアなればとて、この顏を打たせたり抓らせたりやせんわい。はれ、まア！私の顏をひッぱたくのと、この處女の生き返るのと、何の由緣があるんぢや？「婆アは菠薐を好く。」（自分の賤手から人に經儀をかける譬）面々がドゥルシネアの魔術をかけときながら、その魔術解きの爲めに私を鞭打つんぢやもの。アルティシドラは神樣の下さつた痛みで死んだのに、その命を取り戻すからとて、私を二十四もひッぱたいて、私の身體に針で穴をあけて、お負けに私の腕へ抓り痕を拵へようといふんぢやもの！そんな串戲は義理の兄弟にしなさるがえゝわ。「私や年取つた犬ぢやから、そんなチョッ〳〵ぢやだまされません」よ。』

『貴樣、息の根を止めてやるぞ。』とラーダマンツスは大聲で言つた、『この兇漢奴心を優しくせい。傲慢なニムロド奴、我を折るがよい。默つて從へ。出來ぬことを貴樣に言ひ付けるのではないのぢや。貴樣はことの難否を詮議立てするには及ばん。有無を言はさずひッぱたいてやるわい。針

で突いてやるわい。泣き出すまで抓つてやるわい。ホー、これ〳〵、こゝの役人ども、私の言ひ付け通りにせい。これをきかずば、誓言、お前等にも目に物見せてやるぞ。』

これを聞いて六人ばかりの侍女等は、一列縦隊をなして現はれつゝ庭を横切つて進んで來た。そのうちの四人は眼鏡をかけてゐた。そして殘らずの者が、めい〳〵右の手を高く振り上げて、當世流行のやうに、その手を長く見せる爲めに手頸から下を四五寸ばかり剝き出してゐた。この光景を見とめるや否や、サンチョーは牡牛のやうに唸りつゝ咆鳴つた、『私ア誰にでもじッとこの身をいぢらせまうが、それでも侍女衆に身體を觸らせるちうことア——これんばかりでもいやぢや！私や、こゝの此のお城で私の旦那樣がさういふ目に逢うたやうに、この顏を引ッ掻かれてもえゝ。この圖體に研ぎ立ての短刀を突き通されてもえゝ。この腕を眞赤に燒けた釘拔きで抓まれてもえゝ。私ア我慢してこゝの旦那がたのなさることア受けませう。けれど、たとへ惡魔どもに掻さらはれて行かれうと、侍女たちにいぢらせるのア嫌ぢや。』

そとでドン・キホーテもまた沈默を破つてサンョチーに言つた、『お前、我慢をせい。こんな高貴の方々の言ひなさることを聞いて上げい。そしてな、お前の身體にこれほどまでの德を授け給うた神樣へお禮を申し上げるがよい。それは、お前がその身體を痛めれば、魔術にかゝつた者の



魔術が解け、死んだ者の命を取り戻せるといふのぢやからぞや。』

侍女等は今やサンチョーに接近した。そしてサンチョーも一際氣を沈めておとなしくなつて、自分の椅子によく坐り直して、そしてその顏や髯を眞つ先の侍女に差し出した。その侍女はうんとしッかり彼の顏に平手打ちを一つ喰はした。さうしてから慇懃にお辭儀をした。

『お侍女樣、禮式もお白粉ももッと少う。』とサンチョーは言つた、『ほんとに、貴女の手は酢ばい香がしますわい。』

つまり殘らずの侍女等は彼を平手打ちにし、そしてその他この家の五六人の者は彼を抓つた。しかし彼は我慢をしきれなかつたのは、針で刺されることであつた。そこで彼は全くあり〳〵と忍耐力を失つて、自分の椅子から跳びおりた。そして手近にあつた灯のともつた松火を一つ引摑みさま、その侍女どもやその他殘らずの拷問者どもに躍りかゝつて咆鳴つた、『失せをれ、地獄の手先ども。私の身體は眞鍮づくりぢやないからそんな目茶苦茶な苦しめを感ぜずにや居れんわい。』

ちやうど此の時アルティシドラは、もう隨分長い間仰向きに臥てゐたので疲れたらしく、少し寢返りを打つた。これを見て、傍に居た人々は殆んど同音に叫び出した、『アルティシドラは生き返つた！』

ラーダマンツスは、もうわれ〳〵の求めてゐた目的は達せられたから、お前も怒りを捨てよとサンチョーに言つた。ドン・キホーテはアルティシドラの動き出すのを見るや、サンチョーに跪づいて言つた、『やれ〳〵お前よ、もうお前を私の家來と呼ぶべき時ではないのぢや。それはあのドカルシネアの魔術解除の爲めにお前がする苦になつてをる鞭打ちを、多少でもやつて貰ひたいからぢや。さア、ほんとうに今といふ今こそ、お前の身うちに在る德が熟した時ぢや。お前を當てにして待つてをるあの善いことを、仕遂げて貰ふ效能のある時ぢや。』

これに對してサンチョーは答へた、『こりや手管の上の手管ぢやと思ひますわい。なか〳〵以て揚煎餅の上の蜜ではござりません。抓りや平手打ちや針突きの上に、も一つ鞭打ちと來たら、それこそ結構なこッてござりましよ！それよりか、でッかい石を私のこの首根こに括り付けて、井戸の中へ拋り込みなされた方がよからう。もしや私が始終、他人の痛みを直す爲めに祝言日の牝牛（結婚の御難走の爲に殺される牝牛）の役をさせられるものなら、あんまり氣にも留めますまいがの。私にや構うて下さるな。さうでないと、ほんとに、一か八かをやりますぞよ。』

もう此の時は、アルティシドラは棺架の上に坐つてゐた。彼女がさうすると小喇叭が鳴りだした。それに伴なうて笛が鳴り、また並居る殘らずの人々の聲が『アルティシドラお目出たう！ア



ルティシドラお目出たう！』と叫んだ。公爵も公爵夫人も、ミノスとラーダマンツスの二王も立ち上つた。そしてドン・キホーテやサンチョーを始め、殘らずの人々はアルティシドラを迎へて、その棺架から抱きおろさうとて進み出た。すると彼女は、氣絶から正氣づいたものゝやうな樣子で、公爵や夫人や王たちに頭を下げた。そしてドン・キホーテを流目に見ながら、かう言つた、『えゝいま〳〵しい、情知らずのお侍。お前さんのつれないばツかりで、私はほんとに千年以上とも思はれる位、あの世にをりましたぞ。そして、お前さん——この世に二人とない慈悲ぶかい御家來さん、お前さんのお蔭で私は今かうして生き返つたから、とくとお禮を言ひますぞえ。サンチョーさん、もう今日から私の肌着のうちから六枚だけはお前のものと思うておいて下さい。それをそのまゝお前の肌着にするがよい。それは皆滿足ではなうても、せめて垢はついとをるまいから。』

サンチョーは跪づいて、自分の僧帽を脫ぎ持つて、ありがたく彼女の手に接吻した。公爵はサンチョーからその僧帽を取つて彼の帽子や胴着を返し、そして火焰の長上衣を脫がせよと命じた。サンチョーは、そのまゝその長上衣や僧帽を着ることを差し許して下さるやうにと公爵に願つた。それは、この前代未聞の冒險の手形なり記念として、それ等の物を家へ持ち歸りたかつたからである。公爵夫人は、それ等をサンチョーに遣はすやうにと言つた。蓋しサンチョーは、彼女が如

何に自分の大親友であるかを知つてゐたのである、公爵は、やがて、この庭を片づけて、總てめい〳〵の部屋に退くやうに、またドン・キホーテとサンチョーとをその馴染の部屋へ案内するやうにと命じた。



## 第七十章

は第六十九章につゞき、而してこの物語を明瞭に了解する上に缺くべからざる事件を取り扱ふ。

サンチョーはその夜、ドン・キホーテと同じ部屋の帆布の搖床に眠つた。この同室をするといふことをサンチョーは、もし出來ることなら喜んで辭退したかつた。何故といふに、自分の主人は屹度問ひや答へを持ちかけて自分を眠らせないに違ひないと、彼はよく〳〵知り抜いてゐたからであつた。それにまた、先きの殉難で受けた痛みがまだ感じられるので、舌の自由が邪魔されてゐるので、餘り喋舌る氣持がしなかつたからである。そこで、その贅澤を盡した部屋で人と一緒に寢るよりは、寧ろ一人きりで小屋の中にでも寢る方がサンチョーの嗜好であつた。そして、彼のこの取り越し苦勞は非常にうまくその通りになり、そして彼の先見は非常に的確であつた。彼の主人は床に就くや否や、かう言つたのだ、『サンチョー、お前は今夜の冒險を何う思ふのぢや？薄情な邪慳の力は實にえらい強いものぢやな。お前もその眼でよう見た通り、あのアルティシド

ラを殺したものは、弓矢でもなければ剣でもなく、また何かの武器でもなければ、命を奪るやうな毒藥でもない――それはたゞ、この私が何時もあの女を遇してをつたむごい邪慳さの爲めであつたのぢや。』

『あの女は、自分勝手の時に、またその好きなやうに、死んだり生きたりしても結構でございます。』とサンチョーは言つた、『そしてあの女は、私にも構はずに置いてくれたら結構でございましたわい。私はつひぞあの女に惚れさせもせねば、あの女を撥ねつけもしませなんだからの。アルティシドラは、賢いちうよりか氣まゝな娘なんで、前にも申しましたやうに、あの女の生き返ることゝサンチョー・パンザの苦痛とに何かの由緣があらうとは、私にや分りません。推量もつきません。かうなると、私ア世の中にや魔術使ひや魔術にかゝつた人が居るもんぢやと、はッきり手に取るやうに分りますわい。何うぞ神樣そんな者の中から私を救ひ出して下さるやうに。私の力ぢやこの身を救はれませんからの。さて、もう旦那樣、私を眠かして下さりませ。もう何にも問ひかけて下さりますな。さうせんと私ア窓から飛び出しますぞい。』

『眠るがよい、サンチョーよ、』とドン・キホーテは言つた、『もしお前の受けたあの針突きや抓りやまたお前に加へられたあの平手打ちの跡が痛まずに眠れるならば。』



『どんな痛みでも、顏を打たれるちう侮辱にや追付きませんわい。』とサンチョーは言つた、『何故と申しまして、あの忌々しい侍女等は、何でもないわけ合ひから、あれほど私を打ちましたからの。それはさうと、も一度お願ひ致しますから、何うぞ眠かせて下さりませ。目が醒めてをつて悲しい者は、眠ればその悲しみを治されますからの。』

『よし〳〵、おやすみ。』とドン・キホーテは言つた。

彼等はいづれも眠りこんだ。そしてこの偉大なる物語の作者シード・ハメットは、この折に乘じて抑も公爵や公爵夫人をして上述の如き丹精こらした計畫を取らしめるに至つたものは何であるかを傳へ記すのである。シードに據れば、かの得業士サムソン・カラスコーは、「鏡の騎士」としてドン・キホーテの爲めに打ち負かされ投げ倒され、その敗戰沒落の結果自分の一切のもくろみを覆へされた次第を忘れることが出來なかつた。そこで今度こそは先きよりもうまく行くであらうと思つて、再度の試みをしようと決心した。さうして居るうちに、サンチョーの女房テレサ・パンザの許へ手紙や贈り物を屆けに來た小姓からドン・キホーテの居處をきいたので、彼は新に鎧や馬を手に入れて、自分の楯には白い月の形を入れた。そして武器を運ぶ爲めには、一疋の騾馬と、それを引く一人の百姓とを手に入れた。これは前の時の家來トム・セシアルではなかつた。その男は

ンチョーかドン・キホーテかに見顯はされる恐れがあつたからである。サムソンは公爵の館にやつて來た。すると公爵は、ドン・キホーテがサラゴッサの馬上試合に參加するつもりで進んで行つた道筋を敎へてくれた。それにまた公爵は、自らドン・キホーテに仕かけた惡戲のことや、またサンチョーの身體でドゥルシネアの魔術を解かせるといふ工夫のことをも話した。そして最後にこれも話した、卽ちサンチョーはその主人を瞞着して、ドゥルシネアが魔術にかゝつて田舍娘に變へられたのだと思ひ込ませたといふこと。そこで自分の妻なる公爵夫人はサンチョーを捕へて、そのドゥルシネアが魔術にかゝつてゐることは全く眞實なのだから、瞞かされてゐるのはお前自身だと說き伏せたといふ事などをも。これを聞いて得業士は少からず笑つた。そして彼は、サンチョーの拔け目なさや馬鹿正直にも、またドン・キホーテの狂氣の甚だしさにも同樣に驚いた。公爵は得業士に向つて、もしドン・キホーテに出遇ひなさつたら（あの人を負かされまいと）歸りにはこゝの道を通つてその結果を知らせて下さいと賴んだ。得業士はそれを引き受けた。そしてドン・キホーテを搜索に出發したが、サラゴッサでは出逢はなかつたので、尙も進んで行つた。そして何んな目に逢つたかは旣に述べたところである。得業士は公爵の館に歸つて來て殘らずを話した。その一騎打ちの條件はどんなであつたか、またドン・キホーテは義理堅い武者修業者らしく、



一年間自分の村に引退するといふ約束を守つて歸途についたといふことなどを。『この一年のうちには、』と得業士は言つた、『あの人も大方あの狂氣が治りませう。その爲めにこそ、私はかうしてわざ〳〵身を窶すやうなことをしたのですからな。それも全く、あのドン・キホーテのやうに立派な紳士を氣違ひにして置くのが氣の毒なばかりからですよ。』かうして彼は公爵の許を辭して、故郷の村に歸つて、そして自分に遲れて歸つて來るドン・キホーテを待つたのである。そこで公爵はドン・キホーテを今度のやうに煙に卷く好機會を捕へた。それほどまでに彼はサンチョーとドン・キホーテに關することでは何くれとなく喜んだのである。公爵は騎馬や徒步の家來を大勢出してやつて、自分の館のあたりにある道々を——つまりドン・キホーテが歸りがけに通過しさうに思はれる殘らずの道を、擁せしめた。その家來どもはドン・キホーテに出遇ひ次第どんな手段に訴へても、彼を館へ伴ない來るやうに命ぜられてゐた。彼等はドン・キホーテに出遇つたので、これを前以て公爵に報告した。公爵は旣になすべきことは決めてゐたので、ドン・キホーテの來るといふ報告を聞くや否や、庭內の松火や蠟燭に火を燈させた。そして前述の如く威儀堂々としてアルティシドラを例の棺架の上に臥かせたのである。一切のことは、本物と少しも違はぬ位にうまく用意され且つ實行された。而して尙シード・ハメットは言つて曰く、私としては、この惡戲の作り者等

も、それにかゝつた者どもと同様の氣違ひだと思ふ。そしてまた、公爵と公爵夫人とは、この一對の馬鹿者等を弄ぶ爲めにこれ程までに骨を折つたからには、彼等自身も馬鹿者らしい者から指二長も離れてはゐなかつたものと思ふのである、と。

一對の馬鹿者等の方では、その一人は前後不覺に眠り込んでゐたが、もう一人の方は取り留めもない物思ひに耽つて臥ながらも醒めてゐた。で、夜が明けると共に起きたくなつた。蓋し、ドン・キホーテは勝利者としても敗北者としても、決して生暖かい寢床を喜ばなかつたからである。死から生へ立ち戻つたとドン・キホーテの思ひ做してゐるアルティシドラは、その主人夫婦の氣紛に從つて、この部屋へと入つて來た。彼女は棺架の上で戴いてゐた例の花環を頭に戴き、金の花で飾られた白い琥珀織の長衣を纏ひ、その髪は双の肩の上に寬く垂れかからせ、綺麗な黒檀の杖に倚りすがつてゐた。ドン・キホーテは彼女の姿を見るや、面喰つてどぎまぎして、舌は硬ばり何と挨拶することも出來ないで、身を竦め、あはや敷布や夜着に身體を包み込まうとした。アルティシドラはその寢臺の枕邊に在つた椅子に腰をおろして、深い太息を一つしてから、低いかすかな聲でドン・キホーテに言つた、『身分のある婦人やたしなみ深い處女が、名譽を踏みつけて、どんな障碍でも突き破るやうな口を利きますのは、そして胸の一番奥底の秘密を人の前に打ち明けま

すのは、よ〳〵思ひ詰めた揚句でござります。私もやッぱりそんな者でござります。ラ・マンチャのドン・キホーテ様、私は打ち砕かれ、攻め落され、戀にさいなまれてをります。けれどまだ苦しさを堪へ操を守つてをります。がそれはもう、その苦しみでこの胸は張り裂け命を失うた程でございます。實は、この二日といふものは私は死んでをりました。そりや、貴方のなされ方が餘りおひどいので、それを思うて死にましたのです。あゝ強情な騎士様——

「ほんに、あなたは私の歎きには、大理石よりまだ固い。」

死ないまでも、私を見る人々からは死んだものと思はれてをりましたよ。そして若しあの戀の神様が私を不憫と思はれて、これこの良い家來を身代りに苦しめて私を蘇へらせて下さらなかつたら、私はそのまゝ彼の世に止つてをつたでござりませう。』

『戀の神様は、私の驢馬の痛みで我慢して下さつても、よかつたろにな。さうすりや、私もお蔭で有り難かつたろにな。』とサンチョ！は言つた、『そりやさうとして、貴女様——どうぞ貴女さんにや私の旦那さまよか優しいお方をお授け下さりますやうに——あの世で何を見なされたかい？地獄はどんな風ですかい？自暴で死ぬ者の行くところア地獄に決つてをりますからの。』

『實は、』とアルティシドラは言つた、『私が地獄へ行かなんだのを見ると、すッかり死んだわけで

はなかつたのでせう。もし地獄へ行つてをつたら、私がどうもがいても二度と出て來られなんだに違ひないのですから。本當は、私はその門口まで行きました。その中には十二三人かそこらの惡魔どもがテニスをしてをりました。皆ズボンや胴着を着て、フランダースの打紐の飾りのある垂れ襟を附けて、同じ打紐の襞縁のついた袖口をはめて、そして手頸は長く見えるやうに四五寸出してをりました。その手には火のラケットを持つてをりました。けれどそれよりも私を驚かしたのは、見たところ風や塵芥の塡まつた書物をテニス・ボールに使うてをつたことで、これはまことに異つた不思議なことでした。が、もつと膽を潰しましたのは、こんなことを見たからです——まア普通勝負をする人等の間では、勝つた方が喜んで負けた方が悔みますけれど、あちらのその遊びでは、何方も皆お互にぶつ〳〵言うて唾み合うて罵り合うのでございます。』

『それには吃驚することはない、』とサンチョーは言つた、『けれどまだ外に吃驚することが——いえ、あの時吃驚もは勝つても負けても滿足はしませんからの。』

『いかにも、』とアルティシドラは言つた、『遊びよつても遊びよらいでも、惡魔どもは初めの一と投げで殘りません——つまり二度目には使へません。そして驚くことには古いのや新しいのや樣々の本が、仕切りなく續いて出ました。



そんな本の中には、眞新しい上製の本が一冊ございましたが、惡魔どもがそれを一打ちすると、その內臟が叩き出されて、その紙が散らばりました。「おい、その本は何ぢや」と一人の惡魔がもれど原の作者シード・ハメットのではない。あのトルデシラスの者と自稱してをるアラゴン人の書いた物ぢや」と。「え、糞ッ、忌々しい、己の眼に入らんやうに地獄のどん底へぶち込んで了へ」と初めの者が申しました。「惡いの何のて、もし私がこれより惡い本を書かうと骨折つても、とても出來ん位ぢや」と初めの者が申しました。それから惡魔どもはテニスを續けて、外の書物を叩き初めました。私は自分で是程愛し慕うてをるドン・キホーテ樣の名を聞きましたので、この幻をよく心に留めて置くやうに致しました。』

『全く、それは幻であつた筈ぢや、』とドン・キホーテは言つた、『何故と言うて世の中には私は一人しかをらんからの。この世でも、もうしばらくその物語本が人々の手に渡り廻つてをるが、誰の手にも長くは止まらん。誰れもその本を足で蹴とばすからの。私はその物語に書いてある者ではないから、地獄の暗がりやこの世の明るみをそんな異樣な形でほツつき歩いてをると聞いても別に騷ぎはせぬのぢや。もしその本が善良な忠實な眞實なものであれば、末長く命を保つであ

らう。しかし悪い本であつたら、その誕生から埋葬までは餘り長い旅ではなからう。』

アルティシドラはつゞけてドン・キホーテに愬へようとしたが、その時彼は彼女に言つた、『貴女、もう幾度も申した通り、私にお情をかけて下さると、私は心苦しいのです、私からはたとへ感謝の念は受けられても、返しは決して受けられませんからの。私はドゥルシネア・デル・トボソのものとして生れました。運命の神々は、もしそんなものがあるとすれば、私をあの婦人へ獻げたのです。それで、あの婦人が占めて居る私の胸に、他の佳人が代つて入れるやうに考へるのは、出來ぬことを考へるといふものです。かう打ちまけて申し上げたら、貴女も十分納得して、御自分の婦徳の繩張りの内へ退かれるでせう。何人も、出來ぬことには身を入れられませんからの。』

これを聞くや、アルティシドラは憤懣激怒の情を現はして叫んだ、『まア！この乾鱈様、臼のやうな心の方、波斯亞の核さん。貴方は、一旦心を決めた上に情を乞はれる百姓よりも頑固で強情です。もし私が貴方に飛びかゝらうものなら、その眼の玉を摑み出してやらうものを！それではお負けさん、お打たれさん、お前さんは、お前さんの爲めに私が死んだものと思うてござるのですか？お前さんが昨夜見たのは眞赤な嘘の皮ですよ。私はそんな駱駝の爲めに死ぬなゞとは愚か爪の垢ほどでも胸を痛める女ぢやありませんよ。』



『そりや、私もほんとぢやと思ひます、』とサンチョーは言つた、『戀する者が死ぬなんて阿呆らしいこッちや。なる程口ではさう言ひませうが、本當に死ぬなんてことアそりやユダに信じさせるがよい！』

彼等がかう話して居る處へ、前に掲げてあつたあの二節の歌を歌つた音樂者で、歌ひ手で、詩人である人が入つて來た。そしてドン・キホーテに恭しく敬禮をして言つた、『お侍樣、何うか貴方樣、この私を貴方の一番忠實な下僕のうちに數へて下さいませんか？私はもう長い間、貴方樣の御名聲御功績の爲めに、敬ひ慕うて居りまする。』

『貴方は何方ですか敎へて下さい、』とドン・キホーテは言つた、『貴方のお身分に應じて禮儀を致さねばなりませんからな。』

この若者は、私は昨夜の音樂者兼歌ひ手でございますと答へた。

『なる程、』とドン・キホーテは言つた、『貴方はすぐれた聲を有つてござる。しかし貴方が歌ひなさつたものは、餘りあの場には適らなかつたやうに思ひますわい。一體、ガルシラソーの詩とこの御婦人の死とは何の由緣がありますかい？』

『それにやお驚きなされますな、』とその音樂者は答へた、『當世の駈け出しの詩人等と來たら、誰

も彼も銘々の好きなやうに書いて、そしてその題には合はうが合ふまいが、よい加減に盜んで來るといふのが一般の風でございます。今日では、歌うたり書いたりしさへすれば、どんな馬鹿げた物でも、ちやんと詩作權を得るのですよ。』

ドン・キホーテはこれに答へようとした。しかし公爵と公爵夫人とが逢ひに來たので、それを遮られた。そしてこれ等の人々の間には長い面白い會話がつゞいた。その會話の進み行くうちに、サンチョーは滑稽な味ひ深いことを非常に澤山言つた。そこで公爵夫婦は彼の馬鹿正直さばかりでなく彼の抜け目なさにも感歎した。ドン・キホーテは、自分のやうな敗北騎士はこんな神々しい宮殿によりも寧ろ豚小舍に住む方がふさはしいから、今日出發させて下さいと願つた。公爵夫婦は立ち處にそれを聞き届けた。そして夫人はドン・キホーテに向つて、アルティシドラは貴方のお覺え目出度くなりましたかと訊ねた。

ドン・キホーテは答へた、『奥樣、貴女樣へ申し上げますが、この處女御の病は全く怠惰から來て居りますわい。その養生法は、正直に不斷に仕事をすることです。この處女御自身から聞きましたのぢやが、地獄でも打紐をつけてをりますさうな。それで、この女もその紐の編み方を習うてそれを絶えず手にしてをるがよい。つまり、編み針をあちらこちらへ働かしてをれば、この女が



思ひこんでをる像は、一つあつても幾つあつても、その心の中にうろ〳〵附き纏ひますえいよ。これは本當です。これは拙者の考へで、また拙者のお勸めです。』

『私のお勸めもさうですわい。』とサンチョーが附け加へた、『私は、打ち紐編む人の戀死にするのは見た例がござりませんからの。娘御たちは仕事をしてをると、そいつを終ふことに一心になつて、戀のこと二の次にしますよ。私ア實際自分がさうぢやからさう申します。私ア主を掘つとる間は私の婆アのことは思ひません。さういふのは、私のテレサ・パンザのことですぜい。私アあいつを自分の眶よりも可愛がツとりますからの。』

『サンチョー、よう言ひました。』と公爵夫人は言つた、『私もよう氣を附けて、これから後はこのアルティシドラに何か針仕事でもさせませう。あれは中々針仕事が上手なのですから。』

『奥樣、そんな養生法に賴るがものはございませんよ。』とアルティシドラは言つた、『この天竺浪人のことを忘れ去るには、この人が私に仕向けた情なさを思うたばかりで澤山でございます。その他には何の工夫もいりません。私はもうこの眼の前にこの——憂ひ顏などゝ申したくもございませんが——このむツとするやうな醜い顏を見たうもございませんから、御兩所樣のお許しを受けまして、退りたうございます。』

『と、言へば、あの「毒づく者は赦すのも早い」といふ諺が思ひ出されるわい。』と公爵は言つた。するとアルティシドラは、半巾で涙を拭く眞似をしつゝ、主人夫婦に一禮してこの室を去つた。

『可哀さうにな、そりやお前の罰ぢや！』とサンチョーは言つた、『そりやお前の罰ぢや！お前がこんな燈心草のやうに堅い心を持つた人に惚れたからぢや。それが、もし私ぢやッたら、ほんとに「も一度牡鷄を鳴かせてやッたろ」にな。』

かうして會話は終りになつた。ドン・キホーテは身支度をして、公爵や公爵夫人と共に食事をして、そしてその夕方發足したのである。



## 第七十一章

### 歸村の途すがらドン・キホーテと家來サンチョー・パンザとの間に起りし事ども。

敗戰して心惱めるドン・キホーテは、一方では非常にしよげ、また一方では非常に幸福を感じつゝ旅をつゞけた。彼の悲しみはその戰敗から起り、彼の喜びはサンチョーのうちにある功德を思ふところから起つて來た。その功德はアルティシドラの復活に依つて證據立てられたからである。尤もその戀に惱んだ處女が本當に死んでゐたのだと自ら信ずることはむづかしかつた。サンチョーは少しも浮き立たずに道を辿つた。彼を悲しませたのは、アルティシドラが肌着を贈るといふ約束を果さなかつた爲めであつた。そこで彼は、このことを心の中で繰り返して考へつゝ主人にかう言つた、『旦那樣、たしかに、私はこの世の中で一番運の惡いお醫者でござりますぞい。世間には、癒す筈の病人を殺してからに、その骨折賃を催促するお醫者が澤山ござりますわい。その骨折といふても、たゞ藥の調合書を一枚書くだけで、それを調合するのは自分でなく藥屋がや

りますのぢや。そしてお醫者の骨折はそれでおしまひぢや。それぢやのに私と來たら、他人を癒してやる爲めに血を流したり平手打ちや抓りや針突きなど受けながら、誰も鐚一文私に吳れません。よし、そんなら私も、もうこれからまたと病人を私に頼みに來たら、屹度、癒す前に賄をよこさせるやうにしますわい。」坊主も歌へば御馳走に有り付く」。そんなら私も、この身についてをる功德をたゝで他人へ振舞ふ爲めに天から授かつたのぢやとは思ひたうございませんわい。』

『そりや尤もぢや、のうサンチョー、』とドン・キホーテは言つた、『アルティシドラがお前に約束した肌着を吳れなんだのは、甚だ宜しうない仕打ちや。お前のその效力はグラティス・デー タ（哀本のか、らぬ隨筆）ではあるがの——といふのは、その功德を得る爲めにお前は何の丹精をしたわけでもない。たゞしお前が身體の苦痛を忍ぶといふ位な丹精は入り用ぢやが——私としてはな、もしお前がドゥルシネア・デル・トボソの魔術解きの鞭打に拂ひをして欲しかつたのなら、もう疾うに手綺麗に拂つたらうと思ふのぢや。しかし、その拂ひと本復とが兩立するかせんかは不安心ぢや。して又、その謝禮の爲めに骨折のその藥の效能を臺なしにさせたくない。さうはいふものゝ、そいつを試して見ても別に損はないと思ふぞよ。サンチョー、幾らほど欲しいかよう考へて見い。そして卽座に鞭打をやつて、そして、お前が私の財布を預つてをることぢやから、その中から勝手に取るがよい。』



この申し出を聞いてサンチョーは眼や耳を手幅ほどに廣く開いた。そして心の中には唯々諾々と自ら鞭打つことに甘んじつゝ、主人に言つた、『旦那樣、ぢや宜しうございます。一つ奮發して直ぐ貴方樣のお望みを適はせませう。もしそれで儲かりますことなら。まア女房子供の可愛さに仕方なくかう慾張りに見えますのぢや。この身體をぶつ一鞭づゝに幾ら下さるか、旦那樣言うて見て下され。』

『サンチョーよ、』とドン・キホーテは言つた、『もしこの本復の重大さ貴重さに相應するだけの酬ひをお前にするとしたら、エニスの財寶もポトシの銀坑も、その拂ひには不足であらうぞよ。私の金がお前のところに幾らあるか調べて見い。そしてその一鞭の値段を決めい。』

『鞭數は三千三百若干ございますな、』とサンチョーは言つた、『そのうちから私が五つ濟したからその後は殘つてをります。で、その五つをその端數に當てゝ、三千三百と致しましよ。それを一鞭四半リールとすると（それより安くでなら、たとへ世界中で私にせいと言うても嫌でございますから）、三千三百「四半リール」になりますな。その三千「四半リール」は千五百「半リール」になり、それは七百五十リールになります。それから三百四「半リール」は百五十「半リール」になり、そり

や七十五リールになるから、これをあの七百五十リールに足せば、皆で八百二十五リールになります。この錢を、貴方樣から預かつてをる中から差し引いて、さうして金持ちになつてほく〳〵して家へ歸りましよ。尤も「鱒を取つて、据着の濡れんことはない」ちう諺の通り、うんと鞭を喰うた上のことぢやござりますがの——けれどもう何にも申しません。』

『ウム、有難いサンチョーぢや！ウム、愛いサンチョーぢや！』とドン・キホーテは言つた、『ドゥルシネアも私も、二人とも天壽を全うするまでは、常に〳〵お前の爲めに盡してやりませう。もしあの婦人が元の形に歸るなら（そりや全く歸らん筈はないから）あれの不運も幸運となるであらうし、私の敗戰もこの上ない目出たい勝利になるであらう。しかしな、これサンチョーよ、お前は何時その鞭打を始める積りぢや？もし仕事を手早くやつて呉れたら、その上に足して百五十リールお前に與らうわい。』

『何時ぢやと仰有りますか？』とサンチョーは言つた、『間違ひなく今夜ですよ。どうぞ旦那樣、今夜は戸外に野宿するやうになされませ。さうすれば私はこの身體を叩き刻きませう。』

ドン・キホーテに最大絶頂の焦慮を以て待ち望まれた夜は遂に來た。尤も、ドン・キホーテに取つては、アポロ神の乘車の車輪が壞れてゐるかとも、またその日に限つて平日より日が長延いてゐるやうにも思はれた。それは、胸の思ひにのみ走せて時の考へを無する戀人たちの場合と丁度同じであつた。主從は遂に、道路から少し離れた所に在つた氣持のよい木立の間へと入つて行つた。そして其處でロシナンテの鞍やダップルの荷鞍からおの〳〵降りて、綠の草の上に身を伸ばし、そしてサンチョーの貯への中から夕飯を食つた。サンチョーはダップルの面勒や手綱で丈夫な撓やかな鞭を作つて、主人から二十歩ばかり離れて栂の木立へと退いた。このやうな決心と元氣とを以て進み行くサンチョーを見て、ドン・キホーテは言つた、『のう、よう氣を附けて、お前の身體をずた〳〵に叩き斬らんやうにするんぢやぞ。一鞭々々の間には間をおくようにせい。餘り急いでやつて、中途で息を切らんやうにせい。といふのは、その望みだけの鞭數に屆かん前に命を沒すやうに激しく打つなといふことぢや。そしてまた、お前が一枚の骨牌で餘り澤山失うたり、餘り少く失うたりせんやうに、私は少し離れたところに陣取つて、そしてお前の打つ鞭數を私の珠子で數へるとしよう。お前の善根に愛でゝどうか上よりのお助けがあるように。』



『よい拂ひ人は質草にや困りません、』とサンチョーは言つた、『そりや、この身體を痛めても殺さんやうな風に打つちうコツでござりますす。そこにこそ、全くこのお呪禁の土臺がござりましよからの。』

それから彼は腰から上の方を曝け出して、その索を摑み取りさま、毆りはじめた。そしてドン・キホーテは鞭數を數へ始めた。サンチョーは六つか八つほども打つたかと思ふと、この串戲の決して容易ならぬことや、その値段の餘り安すぎることを感じて來た。そこでしばらくその手を止めて、主人にかう言つた：こんな鞭打は一つに就て四半リールでなく半リールの割合で拂つて貰ふ償打がありますから、初めの向ふ見ずの約束は破談にしますと。

『續けるがよい、のうサンチョー、氣落ちをせんでもよいぞよ。代價の方は二層倍にしてやるから。』とドン・キホーテは言つた。

『そんなら、こんな心配は神樣へお預けして、鞭を降らせるとしませうわい。』とサンチョーは言つた。しかしこの惡者はもうその鞭を自分の肩には打ち付けないで、たゞ立ち木に打ちつけ、しかもその一打ちごとに宛ら自分の魂が根こそぎにもぎ取られでもして居るかと思はせるやうな呻き聲を、仕切りなしに立てたのである。ドン・キホーテは心を痛めた。そして、サンチョーが身を傷けはしまいか、また彼の無分別の爲めに自分自らの目的物を取り失ふことになりはしまいかと心配しつゝ彼に言つた、『おい、もうほんとに、そこで打ち方は止めたらよからう。この養生法はなか〳〵手荒い養生法のやうぢやから、まア ゆッくりやるとしたが宜らうぞ。「ザモラは一刻に



や手に入らなんだ」のぢや。私の勘定が誤りでなかつたら、お前はもう一千鞭から上打つたのぢや。今のところはそれで澤山ぢや。俗な言葉で言へば、驢馬は重荷に堪へるが、しかし重も過ぎる荷には堪へんのぢや。』

『いえ、いえ、旦那樣、』とサンチョーは答へた、『賃金は拂うたのに仕事する腕は折れた」とは私には言はせませんわい。貴方樣、も些と向ふへ引込んでゐて、せめても千鞭だけ打たせて下さりませ。こんな試合を二た試合やりや、この仕事は片がついて、お負けに着物まで助かりませうからの。』

『お前がそれほどやりたい氣で居るなら、殊勝なことぢや。打つてくれい、私は引込まうわい。』とドン・キホーテは言つた。

サンチョーは非常な決心で再びその仕事にかゝつて、忽ちの間に五六本の立木の皮を叩き剝いてしまつた。彼の鞭打はそれほど烈しかつた。そして或る時は聲を張り揚げて、悽じい一鞭を掬の樹に加へながら呶鳴つた、『こうれ、サムソンもその仲間も皆くたばれッ！』

彼の痛ましい叫び聲や、その殘酷な鞭打ちの音を聞くと、ドン・キホーテは立處に彼の側へ走つて行つた。そしてサンチョーの爲めに筈の役をしてゐた撚り手綱を摑んで、かう言つた、『おいサ

ンチョーよ、私を喜ばせる爲めにお前が命を果すやうなことは、決して〳〵相成らんぞ。お前の命はお前の女房子供を養ふ爲めに入り用ぢやからの。ドゥルシネアには復たの機會を待つて貰ふとしよう。私もう直ぐ樣望みが適ふと思へば滿足ぢや。それで、新たな力を得るまでは辛抱して、その上で萬人が滿足するやうにこの仕事を仕遂げて吳れい。』

『旦那樣、貴方樣がさうなされたければ、さう致しましよ。』とサンチョーは言つた、『けれど私は汗をかいてをりますので、風を引きさうでございますから、貴方樣の上着をこの背中へ掛けて下さりませ。風引くなぞとは、新發意の行者がやりさうなへまでございますからの。』

ドン・キホーテはそれに從ひ、自分の物を脫いでサンチョーに着せた。サンチョーは太陽に起されるまで眠つた。それから彼等は再び旅をつゞけた。が、三リーグばかり行くと、一つの村があつたので、一と先づこの旅を止めた。主從はとある旅籠屋で獸から降りた。ドン・キホーテはこの旅籠屋をば、濠や櫓や壘し格子や吊橋などを備へた城廓とは認めずに、ありのまゝに認めた。つまり彼は打ち負かされてからは何時も、萬事にかけて一層條理正しく口を利くやうになつた。その事は間もなく分るであらう。ドン・キホーテは、とある土間へ案內された。そこには鞍の懸物はなくて、田舍で普通用ゐられるやうなセルの繪懸物があつた。そのうちの一枚には、非常に拙



い手で「ヘレナ劫奪」を書いてあつた。それはかの太膽な客人がメネラウスからヘレナを奪ひ去るところであつた。もう一枚のは、ディドーとエーニアスの物語の繪で、ディドーは高い塔の上に居り、今しフリゲート船か二本檣船かで逃げようと船出してゐる逃亡の客に向つて、合圖をするものゝ如く半切の敷布を持つてゐた。ドン・キホーテはこの二つの物語繪を見てかう氣がついた、つまり、ヘレナは窃に狡さうに笑つてゐるので、除り嫌で伴れ行かれたのではないと。しかし美しいディドーはその眼から胡桃のやうに太い涙をこぼして居るところを書いてあつた。ドン・キホーテは此等の物を見て言つた、『その二人の婦人は今の世に生れなんだ爲め非常に不仕合せであつた。そして私は、この人等の時代に生れなんだ爲めに何人よりも不仕合せぢや。もし私がこの人たちと一緒になつたら、トロイも燒かれなかつたらうし、カルタゴも滅ぼされはせなんだらう。といふのは、私としては唯バリス（トロイの女子）を殺しさへしたら、こんな殘らずの不幸は避けられたであらうから。』

『ほんとに、いかにも、』とサンチョーは言つた、『もう直と、居酒屋でも、安宿でも、旅籠屋でも床屋でも、私等の仕草をかいた物語繪のない所はないやうになりさせうわい。けれど私は、こんな繪を書いたのよりもッと上手な畫工に書いて貰ひたいものぢや。』

『そりや尤もぢや、サンチョー、』とドン。キホーテは言つた、『この畫工は、ウベダに居つた畫工のオルバネジアに似てをるわい。オルバネジアは何を書いてをりますかと人に訊ねられると、何時でも「出來上り次第の物を」と言うたものぢや。そしてもし牡雞を畫くやうな場合には、いつもその繪の下に「これは牡雞なり」と書いた。それは人に狐ぢやと思はれはせんかと氣遣はれたからぢや。畫工でも作者でも全く同じことぢやよ、サンチョー。あの近頃世に出た新ドン。キホーテ物語を書いた作者も、屹度この手合の一人ごあつたらうと思ふわい。つまり、あの作者は「出來上り次第の物を」書いたのぢや。あの作者はまた大方、數年前に朝廷あたりにをつたマウレオンといふ詩人のやうな者であらう。この詩人は何か人に問はれると、何時もよい加減な返答をしたものぢや。そして或る人がテウム。デ。デオとは何のことですかと訊ねると、それはデ。ドンデ。ディエレ「何とでも取られるやうなもの」位の意味と答へたのぢや。しかし、これはさて置いて、なあサンチョー、お前は今夜今一度やる氣があるか。またそれは部屋の中がよいか、野天がよいか？』

『はて、旦那樣、』とサンチョーは言つた、『私がこの身にする事ア、家の中でも野原でも私にや同じでござりますぞい。それでも、立木の中がようござりますな。立木どもと一緒にをりますと不思議にあいつ等が私の痛みを分けて呉れるやうな氣がしますからの。』



『それにしても、今日はいけぬ。』とドン。キホーテは言つた、『先づ、お前の元氣が囘復するやうに、これは私等の村に歸つた後のことにしようわい。もう何う後れても明後日は村へ着くからの。』

サンチョーは言つた、『貴方樣の好きなやうになされませ。けれど私の方ぢや、まだこの身體の血が冷えずに食慾のあるうちに手早くこの仕事を片付けたうござりますわい。何故と申しまして「遲るれば災に陷りがち」とはよくあることで、「神樣にも祈り、金槌も振り」、「二つ（上げよう）を言はれるよりか、一つ（手に入れる）方がまし」、そして「枝の上の兀鷹よりか手にある雀がまし」でござりますからの。』

『おいサンチョー、後生だからもう諺は止めてくれい。』とドン。キホーテは叫んだ、『お前はまた以前のやうに成りよるやうぢやの。私が幾度も言うた通り、話すには平たく飾りなく手取り早いやうにせい。さうすればそれだけの德があらうぞよ。』

『私ア何ういふ因果か分りませんがの、』とサンチョーは言つた、『私は一口でも諺を入れずにや喋舌られません、またその諺というても尤もと思はれぬやうなものは言へませんのぢや。けれど私に出來ることなら、この癖を治しませう。』かうして此の會話は差當りお仕舞ひになつた。

## 第七十二章　ドン・キホーテとサンチョー・パンザとがその故郷の村へ到着する途すがらの事ども

その日、ドン・キホーテとサンチョーとは日の暮れるのを待ちながら終日その村の旅籠屋に留つてゐた。サンチョーは今夜こそ人里離れた場所で自分の鞭打の仕事をやり終せよう爲めであり、またドン・キホーテは自分の心願成就の據つて以てかゝつてゐるその鞭打の完成を見よう爲めであつた、兎角するうちに、馬に乘つた一人の旅人が三四人の從者を伴れてこの旅籠屋へ到着した。その從者の一人は、その主人と見ゆる者にかう言つた、『ドン・アルヴロー・タルフエ樣、こゝで今日はお午睡をなさいませ、部屋も綺麗で涼しさうに見えますから。』

ドン・キホーテはこれを聞くや、サンチョーに言つた、『おい〳〵、サンチョー。私はあの私の事を書いた物語の「第二卷」の頁をめくつてをつた際に、不意とこのドン・アルヴロー・タルフエといふ名前にぶつかつたやうに思ふのぢやが。』



『なるほど、』とサンチョーは言つた、『この人に馬から下りて貰ふが宜しうございますの。さうすれば、やがてその事も訊ねられますわい。』

その紳士は馬から下りた。そして宿の亭主はドン・キホーテの部屋の眞向ひにある土間の一室に彼を案內した。その部屋もやはり同じ樣なセルの繪懸物で飾られてあつた。その新來の紳士は夏外套を着てゐた。そして廣い涼しい旅籠屋の門口を入つて來しなに、丁度そこに散步してゐたドン・キホーテに言葉をかけてかう訊ねた、『これから程近い村へです——私の故鄕の村へです。』とドン・キホーテは答へた、『そして貴方樣は何方へ?』

『私はな、貴方樣、グラナダへ參るところです……つまり私の土地へ。』とその紳士は言つた。

『そりや良いお鄕土ぢや。』とドン・キホーテは言つた、『が、何うか貴方樣の御姓名を聞かせて頂きたう存じます。それを承りますことは申すに申し兼ねる程私に取つて重大なことでございますから。』

『私の名前はドン・アルヴロー・タルフエです。』とその旅人は答へた。

これに對してドン・キホーテは答へた、『貴方樣こそ、あの近頃新しい作者の手で印行せられ出

版せられた「ラ・マンチャのドン・キホーテ第二巻」の中に出てござるあのドン・アルヴロー・タルフエどのぢやと、全くさう思はれてなりませんが。』

『私がその本人です。』とその紳士は答へた、『そしてそのお話しの物語本の立役者であるあのドン・キホーテは私の大の親友でした。それに、あの人を自宅から伴れ出したのは……いや、少くともサラゴッサで開かれることになつてゐたあの馬上試合に出るやうにとそゝのかした者は、この私でした。私もあの町へ行くところでしたからな。本當に私は色々とあの人に親切を盡しました。そしてあの人がむやみに亂暴な爲めにあの刑吏に引捕へられるところを危く救うてやりましたのぢや。』

『何うでせうな、ドン・アルヴロー樣、』とドン・キホーテは言つた、『この私は、貴方のお話しになつてをるそのドン・キホーテと些とでも似てをりませうかな?』

『いゝえ、もう、少しも。』と旅人は答へた。

『してそのドン・キホーテは――』とわがドン・キホーテは言つた、『サンチョー・パンザといふ家來を伴なうてをりましたかな?』

『をりました。』とドン・アルヴローは言つた、『しかし、その男は非常におどけた名前こそは持つてをりましたが、おどけを含んだことを言ふのは少しも聞かれませなんだ。』

これを聞いてサンチョーは言つた、『そりやほんとぢやと思はれますわい。いろ〳〵おどけを言ふことア、誰れものお株といふわけにや行きませんからの。そして貴方樣、貴方樣の話しなさるそのサンチョーは、屹度太い惡黨で、鈍間で、泥棒で――さういふものを殘らず一つにしたやうな奴に違ひござりませんわい。何故というて、この私こそ本當のサンチョー・パンザ、そしておどけと來たら雨降すよりやア餘計に出しますからの。そりや貴方樣まア試して御覽じろ。まア一年かそこいら私と一緒に來て見なされ。さうすりや、おどけ事はいつでもかつでも私の口から飛び出して、そのたッぷりと潤澤なこと、來たら――私ア自分で何を言うてをるか大方知らずにゐても――聞く人々を殘らず笑はせるちう位ぢや、と分りませうわい。そしてな、あの名高い勇ましい賢い本當のラ・マンチャのドン・キホーテは――あの戀男で、惡事を正す人で、弱い者や孤兒の守護者で、後家さんたちの後立で、處女たち殺人者で、あの準へもないドゥルシネア・デル・トボソを唯一人の情婦にしてゐなさる人はな、これこゝに貴方の前にござる私の旦那のこの方でござりますのぢや。この外のドン・キホーテ等や、この外のサンチョー・パンザ等は皆夢か僞者でござりますわい。』

『それはもう神かけて信じます、』とドン・アルヴローは言つた、『と言ふのはな、お前さん。お前さんは今言うたその僅かな言葉の中でも、あのもう一人のサンチョー・パンザから私が聞いた幾らずよりも――それも少いことはなかつたのぢやが――それよりも餘計なおどけを言うたのぢや。あのサンチョーは好う喋舌るといふよりも食ひしん坊の方であつた。おどけとよりも鈍間の方であつた。で、私は、この「善いドン・キホーテ」を窘めようとしてをつたのに違ひないと思ひますわい。しかし私には何と言うてよいか分りません。私は今が今でもあのドン・キホーテをトレドーのカサ・デル・ヌンシオ（一四八四年に創設された施設）に鎖め込んで置いたと誓言して斷言せうと思ふ矢先に、こゝでまた一人のドン・キホーテが現はれたのぢやからの。尤もこのドン・キホーテは私のとは大變違うては居りますがの。』

『私が善いかどうかは知りませんが、』とドン・キホーテは言つた、『しかし私は、その「惡い」のではないといふことは容易く申すことが出來ます。そしてその證據には、ドン・アルヴロー・タルフェ樣、私は生れてから一度もサラゴッサへ行つたことがないのですよ。あの土地へ行くどころか、私はその揩へ物のドン・キホーテがあの町の馬上試合に列なつたと聞くや否や、その嘘妄を世界の前に引きずり出す爲めに、あの町へ入り込むことを斷念しましたのぢや。そこで直ぐ樣バルセロナへ行きました、彼地は禮儀の寶藏で、旅人の憩ひ場で、勇ましい者の居り處、辱められた者の味方、搖ぎない友情の心地よい交換所で、その位置といひ美しさといひ並びもない市ですからの。そして彼の地で私の身に降りかゝつた冒險は、決して喜ばしいものではなく、喜う殘念なものではありましたが、しかし私は唯あの市を見物したといふのに免じて、それを殘念には思ひません。ドン・アルヴロー・タルフェ樣、つまり拙者こそは名にし負ふラ・マンチヤのドン・キホーテです。そして拙者の名前を横領して、拙者の考へで身を裝り飾らうと企てたあの不運なドン・キホーテではありません。拙者は貴方の紳士たる御本分にかけてお願ひ致します……どうぞこの村の役人の前に出て、貴方は生涯に今日唯今に至るまでは一度もこの拙者を御覽にならなんだといふ事、及びあの「第二卷」に印刷してあるドン・キホーテはこの私でなく、またこの私の家來のサンチョー・パンザは貴方の御存じの者でないといふ事など誓言して下さらば、有難うございますわい。』



『それは、もうこの上なく喜んで致しませう。』とドン・アルヴローは答へた、『しかし、その名前が似てをりますだけそれだけ、その立居振舞が違うてをる二人のドン・キホーテと二人のサンチョー・パンザとを一どきに見るとは、全く驚きます。それで、重ねて、しかと誓言致しますが……

私が見たものは實際は見た筈がございませんし、また私の身に降りかゝつたものは實際は降りかかつた筈がございません。』

『間違ひッこなしに貴方樣は、あのドゥルシネア・デル・トボソのお姫樣同樣魔術にかゝつてござりますわい。』とサンチョーは言つた、『それでもし貴方樣の魔術解きも、私がドゥルシネア樣の爲めにこの身へ加へてをるやうにやッぱり三千幾らの鞭打で出來ればえゝと思ひます。何にも當てをせずに　唯で私の身體にそれだけの鞭打をして上げうと思ひますからの。』

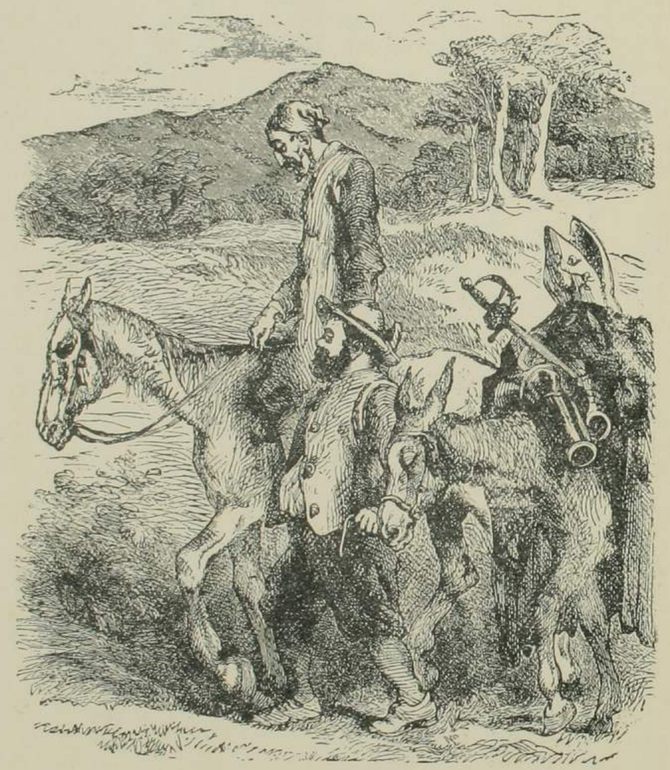
『その鞭打といふことは私にや解せませんよ。』とドン・アルヴローは言つた。サンチョーはそれに答へて、それは話せば長い物語であるが、若し同じ道を行くやうであつたら話さうと言つた。

丁度こゝで晝飯時になつたので、ドン・キホーテとドン・アルヴローとは一緒に食事をした。この村の役人が一人の公證人を伴れて偶然にもこの宿屋へ入つて來た。そこでドン・キホーテは一通の嘆願書を彼に差し出した、それにはかう書いてあつた……こゝに居合せる紳士ドン・アルヴロー・タルフエに、これも矢張りこゝに居合せるラ・マンチャのドン・キホーテを知らなかつたといふ事、及びドルデシラスのアエッラネダといふ者の作になる「ラ・マンチャのドン・キホーテ第二卷」中に出てゐるのはこのドン・キホーテでない事などを貴方（村の役人）の前で誓言させること



を、私の權利の爲めに請求しますと。役人は遂にそれを法規の形式によつて認めた。そしてこんな場合に必要な一切の形式を具備した一通の誓言書を拵へた。これを見てドン・キホーテもサンチョーも、宛らこんな誓言書が自分等に取つて何か非常に重要なものでゝもあるかのやうに、又宛ら自分等の言葉も行ひもその二人のドン・キホーテや二人のサンチョーの區別を明かに示さないかのやうに、頻りにうれしがつた。ドン・アルヴローとドン・キホーテの間には色々樣々と禮儀や挨拶が交換された。その間中、わが大いなるマンチャ人は非常に善良な身だしなみを示して、遂にドン・アルヴローがこれまで陷つてゐた誤謬の妄を啓いてやつた。そしてドン・アルヴローの方でも、これほど懸け離れた二人のドン・キホーテを接觸させて見たのだから、自分はこれまで魔術にかゝつてゐたに相違ないと固く信じたのである。

夕暮が來たので、彼等はこの村を立ち出でた。そして半リーグばかりの後に道は二つに岐れて、一つはドン・アルヴローの辿るべき路となつた。この短い期間にドン・キホーテは自分の不仕合せな敗戰のことや、ドゥルシネアの魔術に懸つたことや、またその療法のことなどを話した。これは凡てドン・アルヴローを新な驚愕に陷らしめた。そして彼はドン・キホーテやサンチョーを抱擁してから自分の道を進んだ。ドン・キホーテも自分の道を進





んだ。彼はサンチョーに苦行をやり終らせる機會を與へよう爲めに、またもや木立の中でその夜を送つた。サンチョーはその苦行をする爲めに前夜と同じやうに自分の身體よりも樹々の皮に多くの損害をかけた。自分の身體に至つては、たとひ其處に蠅が一疋止つてゐたとしても、それをさへ鞭で叩き落さない程によく氣を附けた。瞞かされたドン・キホーテは唯一擊も數へ落さなかつた。そして前夜のものと合せると三千二十九鞭になつた。日はこの犧牲を見ようとて早目に昇つたらしかつた。日の光を見て主從はその旅を再びつゞけた。そして途すがら、ドン・アルヴローの上に仕掛けられた欺計のことを兎や角と論じたり、或ひはあんなに恥とした形式であんな役人の面前であの男から誓言書を取つたことは、實にうまいやり方であつたと話し合つたりした。その日もその夜も、彼等は旅をつゞけた。そして別に記すほどのことも起らなかつたが、たゞ一つ、その夜のうちにサンチョーが自分の仕事を仕終へたといふことがあつた。これでドン・キホーテは非常に喜んだ。彼は今日こそ既に魔術を解かれたドゥルシネア姫に道で行き逢ひはせぬかと、日の光を待ちこがれた。そして彼は旅をつゞけたけれども、一人の婦人にも行き逢はなかつたので、もしやドゥルシネア。デル・トボソではないかと近寄つて見ることもしなかつた。但し彼はマアリンの約束は嘘をいふ筈がないと絶對に信じ切つてゐたのである。こんな樣々の思ひ

や心づかひに充たされつゝ彼等はとある小高い丘に昇つた。そこからは彼等の村は一と目に見渡された。自分の村を見るとサンチョーは跪いて叫び出した、『懐しい生れ故郷よ、お前の眼を開けて、このサンチョー・パンザがどういふ風でこゝへ歸つて來たか見てくれよ。私ア餘り金持ちにやなつてをらんが、うんとしたゝか鞭打たれて來たわい。お前の手を擴げて、やッぱりこのお前の息子のドン・キホーテ樣をも迎へて呉れよ。このお方は他處の人に負かされてはござつたが、自分といふものに勝つて來なさつたのぢや。それこそ、このお方の仰有るやうに、皆の欲しがつてる一番の勝ち戰ぢや、私ア錢を持つて歸りよるぞよ。馬に乘つて歩いたのぢやよ。』

『そんな馬鹿げたことはもう止めにせい。』とドン・キホーテは言つた、『さア直ぐと道を進めて自分の家へ歸らうわい。それから私等の思ひを馳けるがまゝにかけらせて、今後の羊飼ひの暮しについて目論見を立てるとせう。』

かう言つて彼等はその坂を下つた。そしてその歩みを自分等の村の方へと向けた。

## 第七十三章　ドン・キホーテが故郷の村へ入込む際に出逢うた凶兆のこと、その他この偉大なる物語に潤飾光彩を添へる出來事ども

故郷の村に入りこむ際、とシード・ハメットは言つてゐる、ドン・キホーテは村の打穀場で二人の男兒が喧嘩をしてゐるのを見た。そのうちの一人が相手にかう言つた、『ペリィロー、心配するなよ。手前はもう生きてるうちにや二度とそいつを見付はすまいから。』

ドン・キホーテはこれを聞いた、そしてサンチョーに言つた、『おい、お前はあの男兒の言うたことに氣がついたか。「手前はもう生きてるうちにや二度とそいつを見付はすまい」と。』

『へー、』とサンチョーは言つた『あの男兒がさういひましたとて、それが何になりますかい？』

『何に！』とドン・キホーテは言つた、『私の心願の目的物に當てはめると、その言葉はつまり、私はもう何うしてもドゥルシネアを見ぬといふ意味になるんぢやが、それがお前には分らんかい？』

サンチョーがこれに答へようとしてゐる時、一疋の兎が野原を跳んで來たので、彼の注意はそ



の方へとられた。この兎は數匹の獵犬や獵夫等に追跡されてゐた。それを恐れて兎は隱れ場を求めつゝダップルの下へ走つて來て身をかくした。サンチョーはこれを生捕つて、ドン・キホーテに差出した。彼はかう獨り言を言つてゐた、『凶惡の前兆、凶惡の前兆！一疋の兎が逃げ、獵犬どもがそれを追ひ掛ける。ドゥルシネアは姿を現はさぬ。』

『旦那樣は變な人ぢや。』とサンチョーは言つた、『まアたとへばこの兎をドゥルシネア姫として、そしてこれを追ひ掛けよる獵犬どもを、あのお姫樣を田舍女に變へてしまうた魔術使どもとして御覽なされ。お姫樣が逃げよる、するとこの方樣はお姫樣を腕に抱いてお可愛がりなさります。何でこれが惡い兆でござりましよ？』

喧嘩をしてゐたのかとその一人に訊ねた。それに答へて、さツき『手前は生きてるうちにや二度とそいつを見まいぞ』と言つた方の男兒がかう言つた。つまりその男兒は相手の男兒から蟋蟀の一杯入つてゐる籠を取つてしまつて、自分の生きてるうちには決して返さない積りであつたと。サンチョーはポケットからクラルト一版畫のものを四枚取り出して、それを籠の代としてその男兒に

與へた。そしてその籠をドン・キホーテの手へ渡しながら言つた、『それ、旦那樣！もうあの惡い兆は破れて臺無しになつてしまひましたぞい。もうあんなものア、去年の雲ほどにも私等のことにや關係がないのぢやと、この通りの馬鹿な私でも思ひますわい。そして私の覺え違ひでなければ、キリスト信者や分別のある人等がこんな馬鹿らしい兆などを氣にかけるのは不似合なことぢやと、あの村の牧師さんが言はツしやりましたぞい。貴方樣も此間私に、兆などに氣をかけるキリスト信者は皆阿呆ぢやと言うて、同じやうなことを仰有りましたぞよ。けれどもうこんなことを言ふこともござりません。さア歩み出して私等の村の中へ入りませう。』

獵夫等がやつて來て、例の兎を乞うたので、ドン・キホーテは與へた。二人は道を辿つた。そして村の入口の草地で、鬮らずもかの牧師補と得業士サムソン・カラスコーとに出遇つた。この二人は忙しく日課經を讀んでゐたのである。前に記して置く筈であつたが、サンチョはダップルにも鎧の束にも例の火焰の模樣のついた膠硬布の長上衣（これは公爵の城中でアルティシドラ復活の夜、彼が着せられた物）を馱馬飾として打ち掛けてゐた。そしてまた例の僧帽をもダップルの頭に被せてゐたので、これは未だ曾て世の驢馬が受けた例しのない程に奇妙な變貌であり裝飾であつた。彼等は直ぐ樣牧師補と得業士とに、それと認められた。そしてこの二人は兩手をあげ



て彼等の方へやつて來た。ドン・キホーテは馬から降りて彼等を迎へ、ひしと抱きしめた。何物をも見脫さない程に眼ざとい男兒等は、驢馬の帽子を見付けて、何だらうと走つて來た。そして互ひにかう呼び合つた。『おいお前たち、こツちへ來て見ろよ。サンチョ・パンザの驢馬は、ミンゴー（俗諺に惑はれてゐる愚かな男）よりか綺麗にしやれてるぜ。そしてドン・キホーテさんの身體は先よりか痩せてるよ。』

つまり、主從は身のぐるりには子供等を跳ね廻らせながら、牧師補や得業士に伴なはれつゝ村の中へと入つた。そして進んでドン・キホーテの家に着くと、その戸口には家婢や姪が待つてゐた。彼女等は主人到着の知らせを既に受けてゐたのである。サンチョ・パンザの女房テレサ・パンザにも同樣にこの知らせが早くも届いてゐた。そこで彼女は髮は振り亂し、半身肌脫ぎのまゝ娘サンチカの手を引きそびきつゝ良人を出迎へようとて走つて來た。しかし彼女は、必ずサンチョーは總督らしい風をして來るものと思つてゐたのに、それと打つて變つた風をしてやつて來るのを見て、かう言つた、『お前さん、こんな風をして來るとは、まアどうしたことぢや？お前さんはとぼ〳〵と足を引張ツて來なさるやうぢや。そして總督樣どころかだらしのない無宿者見たやうぢや。』

『テレサよ、默つてをれやい。』とサンチョーは言つた、『掛釘のあるところに鹽豚のないちうことはもようあることぢや。まア家ん中へ入らうかい。それから異つたことを話して聞かさうよ。私アが錢を持つて來たよ。これが肝腎のこツちや。それも、他人樣に難題かけずに私の骨の汁で儲けたのぢや。』

『まア お前さん、錢を持つて來なされたと、』とテレサは言つた、『そりや何をして儲けたらうと同じことぢやよ。それに、お前さんが錢を何れほど儲けて來なさつたらうと、そりや世間にないやうな事をしたんぢやあるまいし。』

サンチカは父親に抱きついて、そして何かお土産を持つて來ましたか、私は五月の雨を待つやうにお父さを待つてをりましたよと言つた。そしてサンチョーの一方の側の帶に、女房はその手に、おの〳〵取りつきながら、娘がダップルの手綱を取つて、自分等の家へと進んだ。ドン・キホーテは自分の家に、姪や家婢の手に、そして牧師補や得業士の仲にとゞまつた。

ドン・キホーテは時刻にも季節にもお構ひなしに、牧師補と得業士とを伴なうて直ぐ樣奥座敷へと引き退いた。そして手短かに自分の敗戰のことや一年間自分の村を離れぬといふ約束の下にあるといふ事などを話した。そして、自分は几帳面な信義と武者修業の掟とに縛られた一個の武



者修業者となつてをるからには、その約束を嚴密に守つてこの村から毛幅ほども外へは出ない積りだとも話した。それから言葉をつゞけて、私はこの一年の間羊飼ひになつて、野原の靜寂の中に鬱を遣ることにする。さうすれば、德操ある羊飼ひの職業に從ひながら、自分の戀の思ひを全く自由に驅けらすことが出來ると言つた。そして彼は二人の者にかう求めた、もし貴方がたが餘り忙しくなく、そしてもツと大切なことに妨げられないなら、どうか喜んで私の仲間になつて下さい、私は貴方がたまで羊飼ひになれますからと。そしてこの仕事のうちで一番肝心な點はもう確定してゐる、とドン・キホーテは二人の者に言ふことが出來た。つまり彼はすでにこの人等にしツくりと合ふ名前を附けてゐたからであつた。牧師補はその名前はどんなのであるかと訊ねた。ドン・キホーテは答へた、自分自らは羊飼ひキホーティス、得業士は羊飼ひカラスコン、牧師補は羊飼ひキユリアムブロー、そしてサンチョー・バンザは羊飼ひバンシノーと、さう呼ぶ筈であると。

このドン・キホーテの新しい狂想に二人は面喰つた。しかし彼がまたもや彼の騎士道に從つてこの村から出て行きはしないかと危ぶまれたので、この一年の間には彼の狂氣も癒るかも知れないといふ事を賴りにして、二人はその新しい申出に贊成し、その狂つた考へを宛ら秀でた考へで

もあるかのやうに讃めそやしつゝ、その仲間になつて暮さうと言つた。『そしてその上にですな、』とサムソン・カラスコーは言つた、『誰れも知つてゐます通り、私はなか〳〵名高い詩人ですから、牧歌でも戀歌でも何でも頭に浮び次第の歌を絶えず作つて、そして私等がさまよひ廻るその人里離れた場所で日を送ることにしませう。しかし貴方がた、一番必要なことは、つまり私等は、めい〳〵自分が歌の中で讃めそやさうと思ふその女羊飼ひの名前を擇ばねばならんといふことですよ。それにまた、あの戀にさいなまれた羊飼ひたちの慣例常習でありますやうに、私等はたとへどんな堅い立樹にでも自分の思ふその女羊飼の名前を書き記し彫り付けずに置いてはならんといふことですよ。』

『それがその肝心なことですとも、』とドン・キホーテは言つた。『尤も私は空想上の女羊飼ひの名前を捜す面倒は除かれて居ります。といふわけは、あの準へもないドゥルシネア・デル・トボソが雅の粋ですよ、つまり一口に言へば、たとへ如何に大袈裟な讃辭であつても、一切の讃辭を身に受けて恥しからぬ婦人です。』

『全く御尤もで、』と牧師補は言つた、『しかし私等他の人間はやはり如何にか自分の志に應へるやうな親切な女羊飼を捜さなけりやなりませんよ。』



『そしてまた、』とサムソン・カラスコーは附け加へた、『もし私等にその名前が見付かりませんなら、そこらに一杯ある活版ずりの女羊飼ひの名前を借用してもよいですよ。たとへばフィリダとかアマリリスとか、ディアナ、フレリダ、ガラテア、ベリサルダなどゝ。つまり、そんな物は市場で賣つてをりますから、そいつを立派に買ひ取つて自分の物にしてよいですな。もし私の婦人、いや、私の女羊飼ひといふのでしたな……それがアナといふ名前であつたら、アナルダといふ雅名でその女を讃め歌ひます。そしてもしそれがフランシスカであつたらフランセニナと呼び、ルシアだつたらルシンダと呼びませう。それはつまり皆同じことですからな。そしてもしサンチョー・パンザがこの仲間に入りましたら、彼の女房テレサ・パンザを讃めたゝへる場合にはテレサイナで行けますな。』

ドン・キホーテはこの名前の改作を聞いて笑ひ出した。そして牧師補はドン・キホーテのしたえらい貴い決心を無暗に賞揚して、自分の已むを得ない義務から許されるだけの時間は悉くドン・キホーテと共に暮らす方に割かうと重ねて申し出た。そこで彼等はドン・キホーテに向つて、よく健康に氣を附け滋養物を取るやうにと勸めつつ望みつして別れを告げた。

たま〳〵ドン・キホーテの姪と家婢とはこの三人の話を洩れ聞いた。そこで、かの二人の客が行つてしまふや否や、彼女等は二人ともドン・キホーテのところに來て、そして姪は言つた、『叔父さん、これは何のことでござりますぞ？貴方は家に居られて、靜かな上品な暮しをなさる爲めにお歸りになつたものと私等は思うてをりましたのに、また新な縺れの中へ入りこんで、「お前ア來たかよ、若羊飼ひ、そこにや若いのが行ぬところ」と唄にあるやうな者にならうとお思ひなさいますか。いけません！ほんとの「麥稈になつてからは笛を作るにや堅すぎます」ぞよ。』

『それにまた、』と家婢は附け加へた、『旦那樣は、野原に曝されて、夏の暑さや冬の寒さや、狼の鳴き聲に辛抱なされませうか？いえ、なか〳〵貴方樣、そんな暮しやお仕事は、もうほんとに襁褓の中からそんな仕事の爲めに育て慣らされてをる嚴丈な人のすることでございます。どうせ同じ惡いものを選り取りますなら、羊飼ひよか武者修業の方がましでござりますぞいノ！まア〳〵旦那樣、私の勘めを聞き入れて下されませよ——かうお勸め致します私は、麵麭やお酒をたらふく頂いてはをりません。斷食してこの五十の年を頭にかゝへて居るのでござりますよ——お家にお止まり遊ばして、お家の事を取り締つて、しげ〳〵懺悔にお出でなされて、貧乏人へ親切をおつくしなされませ。さうしてござつて、もし貴方樣に惡いことが降りかゝりましたら、それは私



の靈の上へ引き取りませうぞい。』

『お前たち、靜かにしなさい。』とドン・キホーテは言つた、『私は自分の義務はよう知つてをるわい。私は氣分が餘り勝れんから臥かせて呉れい。そして安心するがよい。私は武者修業者でをらうと、彷徨ひ廻る羊飼ひにならうと、お前等のことは決して念頭から棄て去るまいからの。』

そこで善良な女たち（疑ひなくさうであつたから）、卽ちその家婢と姪とは彼を助けて寢床につかせ、其處で食べ物を與へて、そして出來るだけ氣持のよいやうにしてやつた。

# 第七十四章　ドン・キホーテの發病、彼の遺言製作及び彼の病歿のこと

人間の器は一つとして永久には持續せず、凡てその初めから終りに至るまで常に下り向きである。そして取り分け人の命はさうである。ドン・キホーテの命も天から特別の配與を受けなかつたので、その進みを止めなかつた。彼が少しも待ち設けなかつた時に、その終りは來たのである。といふのは——彼が自分の戰敗を思うてその落膽から生じたのかそれとも天意がさう命じたゐめか——彼の身には熱が起つて來て六日の間寢床についた。その間中、彼はしば〳〵その友人である牧師補や得業士や理髮師に見舞はれた。それに彼の善良なる家來サンチョー・パンザはその病床の側からついぞ離れなかつた。これ等の人々は、ドン・キホーテがそんな容體をつゞけてゐるのを見て、これは屹度彼が自ら打ち負かされた事や、またその心願の的であるドゥルシネア開放の魔術解除が達せられない事などを苦にしてゐると固く信じたので、あらゆる手段を盡して出來得る限り彼を陽氣にさせようと努めた。得業士はドン・キホーテに向ひ、貴方の羊飼ひ生活



を始める爲めに元氣を出してお起きなさいと言つた。そしてかう續けた、『その爲めに私の方ではもう牧歌一つ作りました。それはあのサンナザローネーブルの詩人の書いた殘らずの詩から光を取り去る位の物ですよ、それにまた羊群を護らせる名高い犬を二疋私の金で買ひ入れました。その一疋はバルシノー、もう一疋はプトロンといひまして、何れもクィンタナールの或る牧畜業者が賣つてくれました。』

しかしそれにも拘らずドン・キホーテは身の悲しみを振り捨てることが出來なかつた。彼の友だちは醫者を招いた。醫者は脈を取つて見て餘り滿足に思はなかつた。そして、いづれにせよこの方は靈の冥福を祈られた方が身のお爲めでありませう、肉體は惡い容體ですからと言つた。ドン・キホーテは自若としてこれを聞いた。しかし彼の家婢や姪や家來やはさうでなかつた。彼等は宛らもう彼が死んで自分等の前に橫たはつてゐるかのやうに痛ましく泣き出した。醫者の意見は、憂鬱氣落の爲めに彼の命が縮まりつゝあるといふにあつた、ドン・キホーテは、少し眠りたいから一人きりにして呉れよと皆の者に言つた。皆はそれに從つた。すると彼は、諺にあるやうに、立てつゞけに六時間以上も眠つた。それで家婢や姪は、もう永の眠りに入つてゐるかと思つた。しかしそれだけの時刻が經つと、彼は目覺めて、そして大聲で叫んだ、『あゝ全知全能の神樣！

貴方は私にこんな善いことをお示し下さいまして有難うございます。本當に神の御慈悲は無限ぢや。然るに人間の罪業は際限がなく止まるところを知らんのぢや！』

姪はこの叔父の言葉に熱心に耳を濟ましてゐた。そしてこれ等の言葉は平常…少くとも彼の病中に彼の口から出るものよりも一層正しいものゝやうに響いた。そこで彼女は訊ねた、『叔父さん、何を言うて居られます？何か不思議なことでも起りましたか？御慈悲とか人間の罪業とか言うて居られますのは何のことでございます？』

『姪よ』とドン・キホーテは言つた、『その御慈悲とはな、丁度今神樣が私へお示し下されたのぢや。そして、今私が言うた通り、神樣は私の數々の罪業をよそにしてその御慈悲を賜うたのぢや。今は私の理性は自由で透明ぢや。不仕合せにもあんな忌はしい騎士道の書物を年中讀み耽つて打ちかけられた愚妄の暗影も取り去られた今になると、あんな書物の不條理や瞞着がようく分る。それで唯一つ私を悲しませるものは、この妄念消散の時が餘りに晩く來た爲めに、何か私の靈の光になるやうな他の書物を讀んで少しでも償ひをする隙が無いといふことぢや。姪よ、私はもう今はの際にあることを我れながら感じて居る。しかし私は喜んでそれを迎へたい。さうしてこの私の一生は、死後に狂人といふ汚名を遺さぬやうにしたいのぢや、たとひ私は狂人であつたにしても、今はの際にまでさうぢやと言はれたうはないのぢや。それでのう、私の親友の牧師補と得業士サムソン。カラスコーとそれから理髮師のニコラス親方とをこゝへ招いておくれ。私は罪の懺悔をして、そして遺言をしたいわい。』しかし姪は、偶この三人が入つて來たので、その面倒が助かつた。ドン・キホーテは、彼等を見るや否や叫び出した、『貴方がた、よろこんで下され、私はもはやラ・マンチャのドン・キホーテではなうて、たゞアロンゾ！・キハノーですよ。そしてその人はその身の德に依つて善き人と云ふ異名を獲ました。もはや私はあのゴールのアマディスやその子孫の數限りない群の仇敵になりました。あの不敬虔な騎士道の物語は殘らず今の私には忌はしいものになりました。もはや私は身の愚かさも、またあんな物を讀んで陷れられた危險もよう悟りました。神樣の御慈悲によつて正氣に立ち歸つたので、今はもうあんな物を蔑めますわい。』



彼がかういふ風に言ふのを聞いて、三人は屹度何か新しい狂氣が彼を捕へたに違ひないと思つた。そこでサムソンは言つた、『何ですと？ドン・キホーテ樣！私等はドゥルシネア姫が魔術を解かれたといふ消息きへ受けてゐますのに、今更そんなことを言はれますかい？私等は羊飼になつて王侯のやうに歌ひ暮らさうとしてゐる矢先に、貴方は隱者に成らうと思つて居られるのですわい。』

か？後生ですからお止めなさい。道理を辨へるやうになつて下さい。そしてもうこの上馬鹿げたことは言うて下さるな。』

『その馬鹿げたことは、』とドン・キホーテは言つた、『只今までは全く私に取つて眞實の傷でありましたが、神のお助けによつて、死に際には私の爲めに善いものとなりませうわい。皆さん、私はずん〳〵死に近づいて居りますのぢや。冗談はやめて、どうか私に懺悔をさせる懺悔司僧と、それから遺言狀を拵へる公證人を呼んで下さい。こんな大事の場合に際しては、人はその靈を煩はしてはなりません。そしてこの牧師補さんが私に懺悔をさせて下さる間に、どなたか一人公證人を迎へに行つて下さるやうに願ひます。』

皆はドン・キホーテの言葉をいぶかつて互ひに顔を見合せた。しかし不確かながらも、彼等は彼を信ずる方に傾いた。そして彼等が彼の死にかゝつてゐる事を信ずるに至つた樣々の徴のうちの一つは、彼が今までの氣違ひから非常に急激に且つ完全に正氣に返つたといふことであつた。何故といふに、ドン・キホーテは前述の言葉に附加へて、尙も非常に明確な非常に敬虔な、また非常に道理に適つた言葉を澤山用ゐたので、一切の疑惑を追ひやつて自分の正氣であることを人々に確信せしめたのである。牧師補は殘らずの人々を部屋から出して、自分と彼と二人きりになつて



懺悔をさせた。得業士は公證人を呼びに行つた。そして間もなく公證人やサンチョーを伴なつて歸つた。サンチョーは既に得業士から主人の容體を聞いてゐたので、そして家婢や姪が泣いてゐるのを見たので、自分も泣き崩れてさめ〴〵と涙をこぼした。

懺悔は終つた。牧師補は部屋から出て來てかう言つた、『好きアロンゾー・キハノーは本當に死ぬところです。そして本當に正氣です。私たちはもうあの人の側へ行つても宜しい。今あの人は遺言狀を作りますから。』

この知らせは、家婢や姪や善良な家來サンチョー・パンザなどの涙に溢れた眼に悽まじい激動を與へて、彼等の眼から涙をはふり落させ、彼等の胸から夥しい太息を出さしめた。蓋し眞實のところ、前にも一度ならず述べた通りドン・キホーテは、平の善きアロンゾー・キハノーとしても、ラ・マンチャのドン・キホーテとしても、常に優しい性質でことに〳〵に親切であつた。それで自分の家の者からばかりでなく、知る限りの人々から愛せられてゐたのである。

公證人は他の人々と共に入つて來た。そして遺言狀の前提文が始められ、專念神に祈願をかけて聖の如く宗教上の儀式を終へて、遺產のことに來るや否やドン・キホーテは言つた、『一、サンチョー・パンザ（これは私が狂氣中に私の家來として使うたものでゐの手中にある私の金子に就て

は私と彼との間に一定の勘定があつたし、また貸借があつたから、彼に對して請求をしてはならぬ。同樣に彼の方でもこの點では決して催促をしてはならん。しかしその金子のうちから私が彼に拂はねばならん分を拂うた後で幾らか殘るなら、その剩錢は（それはほんの少額であらうが）サンチョーの物とする。それでそれを有用に使ふやうに。また私が狂氣の時には島の總督權をサンチョーに與へる約束をして居つたやうに、現在正氣に返つて居る私が、若し一國の總督權を與へることが出來たとすれば、必ず與へたであらう。と云ふのは、サンチョーの正直一圖の性質と忠誠な行ひとは、全くそれの値打があるからぢや。』それからサンチョーに向き直つて言つた、『のう、お前、私を許して呉れい。私はこの世に武者修業者どもが昔もあつたし今も尙あるものと思うて、自分でその同じ誤りにお前までも引き入れて、わが身と同樣にお前までも狂人の風をさせたのぢや。』

『あゝ！』とサンチョーは泣きながら言つた、『旦那樣、死んで下さるな。私の勸めをきいて永年生きて居つて下さりませ。何故と申して、何の謂れもなけりや、他人に殺されもせねば何もせず、たゞ氣の病から命をはたすといふ位、この世の中に馬鹿げたことはござりませんからの。さア、そんなにぐツたりなさらずに、その寢床からお起き上りなされ。そして私等が相談をまとめた通



り、羊飼ひの着物を着て野らへ一緒にお出でなされ。もしや貴方樣が、戰に敗けたのを苦に病んで死になされるのなら、その咎は私にきせなされ。そして私がロシナンテの腹帶をよう締めて居らなんだ爲めに投げ落されたのぢやと言うて下され。それにまた、お侍たちにや倒したり倒されたりは普通のことで、今日の負け手は明日の勝ち手ぢやとは、貴方樣の武勇傳の本の中にも屹度ござりましたらうがの。』

『そこぢや、』とサムソンは言つた、『サンチョー・パンザさん今の考へは全く尤もぢや。』

『皆さん、おしづかに、』とドン・キホーテは言つた、『去年の巢には今年は鳥がをりません。』私も元は氣違ひであつたが、今は正氣です。元はラ・マンチャのドン・キホーテでしたが、今は、先きにも申した通り、善きアロンゾー・キハノーです。そこでどうかこの悔悟と眞實とのおかげで、貴方がたがもと〳〵私を見てござつた評價を取り戻すことの出來ますやうに。さてもう公證人どのにあの先きを願ひませうか。』「一つ、私はこゝに居る姪のアントニア・キハナに私の財產全部を悉く讓ります。つまりその基本財產のうちから、私の今遺言する物を十分に支拂うた後のものを。そして私のしたいと思ふ第一の支拂ひは、私に今日まで奉公してくれたあの家婢に拂はねばならぬ給金を拂ふことです。それは二十デュカットで、それに添へて女物の上着を一着。こゝに

居られる牧師補さんと得業士サムソン・カラスコーさんとを私の遺言執行人に御指名いたしま す。

『一つ、もし私の姪のアントニア・キハナが結婚をしたいと思ふ場合には、かういふ男子と結婚す ることを望みます。つまり、先づ第一に騎士道の書物の何たるかを一向に知らん男子であると十分嚴密に保證される男子とです。もし、その男子が騎士道の書物を知つてをると分れば、そして もしそれに拘らず私の姪がその男と結婚すると言ひ張つて、そして結婚しましたら、その節は私 の遺した財産全部は姪から取り上げねばなりません。そしてその財産は、この二人の遺言執行人 の好きなやうに慈善事業に寄附して下さること。

『一つ、私は前述の二人の遺言執行人たちにお願ひします。何かの良い廻り合せで、もしやあの 「ラ・マンチャのドン・キホーテの功績第二卷」といふ標題で只今世間に出てをる物語を書いたと謂 はれてをる作者に出逢はれるやうなことでもあつたら、私の名代として精一杯の熱誠でかう頼ん で下され：貴方がお書きになつたあれ程の數多い忌はしい痴けごとを貴方に書かせる種に本意 ならずも成りました私は、平にお赦しを願ひます。つまり、私は貴方をおだて、あんな物を書か せたことを衷心から悔恨してこの世を去りますから、と。』



かう言つて彼はその遺言を終へた。そして氣が遠くなつて來たので、彼は寢床の上にのび〳〵 と身體を伸ばした。人々は驚き騒ぎつゝ彼を救ひ助けようとした。そしてこの遺言をした日から 三日の間は、非常に度々失神しつゝも生きてゐた。家は上を下へと混雜した。それでも矢張り、 姪は食ひ、女中は飲み、サンチョー・パンザも自ら味ひ樂しんだ。それは、遺産を受くればその受 けた人は故人が當然後に殘して行く悲しみの感じを全く拭き取られるか、さうでなくとも和げら れるからである。

遂にドン・キホーテの終りは來た。それは彼が一切の聖奠を受けて、そして騎士道の書物を憎む ことを十分な有力な言葉で言ひ表はしてからのことであつた。公證人は丁度その時其の場に居合 せた。そして彼は言つた：私がこれまで讀んだ騎士道の書物には、このドン・キホーテのやうに 心靜かにキリスト信徒らしくして自分の寢床の中で身罷つた武者修業者は一人もゐませんなんだ。 この方は並み居る殘らずの人々の涙や泣き聲のうちにその魂を渡されました、息を引き取りな されましたと。その臨終を見て取つて牧師補は公證人にかう頼んだ、この善きアロンゾー・キハノ ー、通稱ラ・マンチャのドン・キホーテがこの世から過ぎ去り天壽盡きて落命したといふ證據人に なつて下さいと。そして彼はつゞけた、『この證言を望みますわけは、つまりシード・ハメット・

ベネンゼリ以外の作者が僞りにこの人を蘇生させて、この人の功業で數限りなく物語を作ることが出來ないようにする爲めです。』

ラ・マンチャの工夫に富める紳士の臨終はかくの如くであつた。シード・ハメット・ベネンゼリはこの人の村を精細に名指すことを好まなかつた。それはラ・マンチャのあらゆる町々あらゆる村々が、恰かもギリシアの七つの市々がホーマーを爭つたやうに、このドン・キホーテを自分の方のものとし自分の土地の人と主張する權利をば、銘々爭うがまゝに任せる爲めであつた。サンチョーや姪や家婢やの嘆きも、またドン・キホーテの墓石の上の新しい碑名も此處には略されてある。しかしサムソン・カラスコーは次のやうな碑銘を作つた——

こゝに勇壯なる紳士眠る——
生前かつて恐れを知らざりし人
死に際しても、最後の時にだに
死もまた威壓し得ざりし人。
彼は世をものともせざりしが
彼の所業は世を震駭せしめたり、



狂人として世を送りしも
さはれ遂に正氣にて身まかれり。

そして最も賢明なるシード・ハメットは自分のペンに向つてかう言つた、『あゝペンよ、お前はこの棚の上のこの眞鍮の針金に懸つて憩ふがよい。巧妙な作りなのか、それとも無細工な仕立てなのか私は知らない。爾後永い年代の間お前はこゝに止つて居るのぢや……但し僭越な或ひは腹黒い物語作者がお前を瀆さうとて取り卸さぬ限りはぢや。しかしそんな者どもがお前に手を觸れぬ前に警告するがよい。そしてお前の精一杯を盡してかう言ふがよい……

さがれッ！弱蟲ども、その手を控へい！
これは何人にも試させぬのぢや。
わが主なる國王は、私の外何者にも
この壯圖をゆるし給はんのぢや。

つまり私だけの爲めにドン・キホーテは生れ、そして私も彼の爲めに生れた。行ふことは彼のもの、書くことは私のものであつた。私等二人を合せて一人になるのぢや。たとへあの假面を被つたトラデシラスの作者がその太い粗雜な無細工な駝鳥の羽ペンで、わが勇敢な騎士の功業を無遠

慮に書き、またこの後も書くにしたところで、それが何にならう。——それはあの作者の肩に堪べる荷物でもなければ、彼の凍りついた才智の及ぶ題目でもない。もしやお前が何かの機會であの作者の何者であるかを知ることにでもなつたら、お前はかう戒めてやらねばならぬ：ドン・キホーテの朽ちに朽ちかゝつた死骸は、その葬られてあるまゝに憩はせて置くがよい。死の特權たるものを犯して彼を舊カスティールまで運び去るやうな企てはせぬがよい。彼はもはや第二次の遠征とか新しい出遊とかをするやうな力は無く、全く眞實墓場の中にのび〳〵と身を伸ばして臥てゐるから、それを起こすやうなことをしてはならぬ。といふのは、ドン・キホーテがこれ迄にした二度の出遊は、このスペイン國でも外國でも、これに馴染んだ人には誰れにでも喜ばれ滿足されたのであるから、武者修業者等の殘らずの族が演出した一切の所業を茶化してしまふといふ目的には、最早や全く十分である。そして、そんな企てをしようものなら、お前に對して惡意を有つてゐる人にさへ善良な勸告をしなければならんキリスト教の職を免ぜられるであらう（これはその作者が憎惡の人である）そして私は、自分の書いた物の果實を自分の望み得る限り十分に味ひ得た最初の者となつたことを、自らの誇りとしよう。元來私の願望は、あの騎士道の群書の中になる愚妄な馬鹿々々しい物語を、全人類に蛇蝎視せしめたいといふより外にはなかつた。



然るにそんな物語は、この私の眞實なドン・キホーテの物語のお蔭で、もう今でさへも足許が怪しくなり出してをる。卽ち疑ひもなく永久に沒落する運命にあるのぢや。さらば。』

——完——

19244

大正四年十一月七日印刷
大正四年十一月十日發行

（下卷）

定價金參圓貳拾錢

不許複製

著者　島村抱月　片上伸

東京市麹町區三番町八十四番地

發行者　植竹喜四郎

東京市芝區受宕町三丁目二番地

印刷者　細萱武四郎

東京市芝區愛宕町三丁目二番地

印刷所　東洋印刷株式會社

發行所　東京麹町區三番町八四
振替東京一二九五三　植竹書院

## 世界名著選

第一編 ポンペイ最後の日 リットン卿作
第二編 アイヴァンホー スコット作
第三編 クオ、ヴヂス シエンキヱッチ作

定價 毎冊八拾錢
郵稅 八錢

## 薔薇叢書

第一編 椿姫 デユーマ作 稲永挽歌譯 全譯 八十六錢 稅
第二編 青い鳥 メーテルリンク作 若月紫瀾作 全譯 六十六錢 稅
第三編 水の上 モウパッサン作 吉江孤雁譯 全譯 六十六錢 稅
第四編 ウヰルヘルムテル シルレル作 船木葉之助譯 六十六錢 稅
第五編 クリスマス、カロル ディツケンス作 矢口達譯 六十六錢 稅
第六編 湖上の美人 スコット作 馬場睦夫譯 七十六錢 稅
第七編 權謀術數學 マキヤベリー著 橋田東聲譯 五十六錢 稅

## 文明叢書

サロメ ワイルド作 各編 廿四錢 郵稅
キッス チ・エホフ作 各編 廿四錢 郵稅
戀愛と道徳 エ・レンケイ作 各編 廿四錢 郵稅
血笑記 アンドレーフ作 各編 廿四錢 郵稅
父 ストリンドベルヒ作 十二錢 郵稅
初戀 ツルゲネフ作 十二錢 郵稅
ロダンの藝術 デイルクス作 十二錢 郵稅
決鬪 チエホフ作 各編 廿四錢 郵稅
マダヅズーデルマン作 各編 廿四錢 郵稅
馭者ヘンセル ハウプトマン作 各編 廿四錢 郵稅
露西亞印象記 ブランデス作 各編 廿四錢 郵稅
タイス アナトールフランス作 谷崎精二譯 全譯 價四十錢 郵稅六錢
人形の家 イプセン作 長田幹雄譯 全譯 價四十錢 郵稅六錢
闇の力 トルストイ作 馬場吉信譯 全譯 價三十錢 郵稅六錢

フロオベル作 水上齊譯
ボヴァリー夫人 一圓二十錢 郵稅八錢
モウパッサン作 廣津和郎譯 縮刷
女の一生 五十錢 郵稅六錢
ダヌンチオ作 加藤朝鳥譯
犧牲 一圓七十錢 稅十二錢
モウパッサン作 水上齊譯
兄と弟 一圓二十錢 稅十二錢